THE CENTRAL REVIEW

中央公論

大正三年四月一日發行（毎月一回一日發行）

春期大附録號

第廿九年第四號

第三百三號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

「幸福」とは何ぞや
健全なる頭腦を指す

島村醫學博士證明

健腦丸

『不幸』とは何ぞや
健腦丸を服用せざる
腦神經病患者諸君を指す

神經をしづめ、
逆上を引下げ、
腦病を快治し、
腦充血を豫防す。

主効

■腦充血■頭痛
■腦膜炎■耳鳴
■神經痛■眩暈
■腦貧血■健忘
■卒中■便秘

健腦丸を少量宛ゞ常用せば逆上便通をよくし、腦充血、中風、卒中を未發に防ぎ記憶力を増進す。

拂五週分貳圓□三週分一圓廿五錢□二週分
價八十五錢□一週分四十五錢□三日分廿錢

本舖 大阪 東京 丹平商會藥房

全國海外到る處の信川藥店に取次す

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

慶應大學講師 戸川秋骨先生譯

エマーソン論文集

上巻（六版）目次

◉歷史論 ◉戀愛論 ◉大靈論
◉自恃論 ◉友情論 ◉圓環論
◉報償論 ◉細慮論 ◉智力論
◉靈法論 ◉勇壯論 ◉藝術論

下巻（三版）目次

◉詩人論 ◉作法論 ◉政治論
◉經驗論 ◉進物論 ◉名目論及實在論
◉人格論 ◉自然論 ◉改革論

◉中外英字新聞評『簡潔にして光彩ある邦文を以て巧に飜譯せり寸鐵殺人の警句は殆んど毎行に盈つ』

總クロース金文字入

◎上巻 正價一圓四十錢 郵税十錢

◎下巻 正價一圓二十錢 郵税十錢

中村不折 小鹿青雲共著 ▼不折畫伯裝釘意匠

支那繪畫史

菊判上製美本 全一册 價壹圓五拾錢 郵税二十錢

◉時事新報評は「吾人は本書を目して本邦唯一の支那繪畫史として深く推賞する者也」

▶高橋五郎先生譯◀

エマーソン處世論

總クロース 全一册 特價壹圓 郵税十二錢

アウレリアス皇帝著 瞑想錄

總クロース 全一册 價壹圓拾錢 郵税十錢

エピクテタス遺訓

總クロース 全一册 正價壹圓 郵税十錢

版元 東京神田區雉子町 玄黃社 電話本局二〇九番 振替東京七九九五 ◉全國書店賣捌

▲近代名著文庫第六編　——紙數約壹千頁の大巻

ドストエーフスキイ作　昇曙夢氏譯

虐げられし人々

■全二册■

紙洋布特製美本
定價貳圓貳拾錢
小包料金貳拾錢

是れ露國文豪ドストエーフスキイ氏が、畢生の心血を濺げる雄篇にして、その代表作と見るべきもの也。彼れ國事犯に坐して斷頭臺上に死せんとし、僅に特赦を得て西比利亞の曠野に苦役する事千三百餘日、具さに辛酸を嘗めて鬢髪爲に白きに至る、しかも一意神を念ふの敬虔は、博大なる同情となりて、大慈大悲の心、滿眼の熱涙を世の虐げられ踏みつけられし人々に注ぐ。此の一篇は實に彼が涙と血とを以て描けるもの、露人が聖書と共に同情の福音として必らず讀まざる可からずとなせる所のもの也。作者は自ら本篇の中に於て、此の作の内容を表明して曰く「それは〳〵暗い陰氣な物語であつた。ペテルブルグの重苦しい空の下で屢々人知れず祕密に行はるゝ暗い悲痛な物語の一つであつた。大都會の薄

や、苦々しい淫蕩や秘密や犯罪や、凡て是等の無意義な病的な生活の焦熱地獄の中て行はれる不思議な隱慘な物語の一つであつた」と。そこに熱烈なる青春の戀を描き、老夫婦の悲嘆を描き獸の如き老侯爵の淫縱と、捨てられたる母子の悲慘とを描き、發狂せる老人と其孫娘との奇緣を描き、最後に一封の遺書一切の紛糾を解くに至るまで**人間數奇の運命**を描いて、**重疊の波瀾**は單調子なる近代小說の類に似ず。殊に稚なくして世の無情に哭き、可憐の心を冷たき片意地に執しつゝ亡き母を慕うて止まず、其泣血の遺書を胸に懸けその懷しき名を呼んで死せる孤子ネルリの哀話に至りては、何人かよく之を讀んで泣かざるを得ん。而して、是書の一面は**深刻なる經驗**をさながらに**描ける作者の自叙傳**にして、篇中の一青年文士は實にドストエーフスキイ其人也。此點より此書は二重の興味ありて存す可し。譯者は露西亞文學の第一者、此作が殊に我邦人の胸に共鳴するの多きを思ひ、拮据一歲有餘、渾身の努力を傾け盡して、千有餘枚の完譯漸くこゝに成れり。吾人は**一切の人々に共鳴**す可きの書なるを思ふが故に、敢へて此書を世のすべての階級の人々に捧ぐ。

發行所 東京市牛込區矢來町中の丸 ▲電話(番町)二、二二三番 ▲振替(東京)一、七四二番 **新潮社**

我國飜譯界の記錄を破れる空前の大計畫

泰西名著文庫

東西文明融合の趨勢は、明治聖代に於ける外的文明の輸入から、大正の御代に於ては漸く内的文明の移植に及んで、二三年來澎湃たる飜譯文學流行の大勢と成つて現はれた。此潮流には國民の世界的自覺に基く深い根柢が有つて、決して片々たる一時の流行を以て目すべきでない。吾が國民文學樹立の上にも、汎く世界思想の根源を爲せる泰西諸名著の精神は、先づ吾等の血と成り肉と成らなければ成らぬ。此意味に於て、ボッカシオの『十日物語』は決して外國の作品ではない。吾等のもので有る。吾邦の文學である。トルストイの『戰爭と平和』に就いても同樣な事が言はれやう。其他の諸作も同じ事で有る。國民文庫刊行會に於ては此主旨に從ひ、敢て新奇を追はず、泰西に在つても、所謂文壇にのみ知られ、文士の間にのみ持囃さるゝ作物の如きは勉めてこれを避け、既に一般國民の所有と成れる雄篇大作を撰み、加ふるに小篇の名著若干を以てし、これを我邦の文壇に於ける學識閲歷共に信頼に値ひする諸文士に囑して至難なる飜譯の業を進め來つたが、三年前よりの計畫漸く熟して、今や逐次刊行し得るの運びに至つた。作の良否は必ずしも量と一致しないが、泰西の名作は大抵量に於ても亦大作で有る。以下列擧するが如き大作を我邦の文壇に移植して、讀書子の机邊に供給し得るもの、我刊行會の如くにして始めて能くする所と、潛に辜負して天下の淸鑑を俟つ次第で有る。

豫約募集

略規—◉來る六月より毎月一冊宛配本し十八ヶ月を以て完結す◉會費は一ヶ月金貳圓、外に送料◉入會金貳圓、但最終の會費に充つ

◉申込期限 四月卅日

書目

◉戰爭と平和 全四冊 トルストイ著 馬場孤蝶譯
◉哀史 全三冊 ユーゴー著 戸川秋骨譯
◉諸國物語 全一冊 森鷗外譯
◉イリアート オデッセイ 全一冊 ホーマー作 馬場孤蝶譯
◉近代英國傑作集 下卷 戸川秋骨譯
◉虛榮の市 全二冊 サッカレー著 平田禿木譯
◉デカメロン十日物語 全一冊 ボッカシオ著 森田草平譯
◉プルターク英雄傳 全三冊 プルターク著 高橋五郎譯
◉近代英國傑作集 上卷 平田禿木譯
◉永久の良人 全一冊 ドストイエフスキ著 森田草平譯

以上計十八册

◉津田青楓氏裝釘意匠◉菊判總クロース天金

◉紙數は一册約八百頁

▼詳細見本及規定は御申越次第送呈す

東京市神田區小川町一番地
電話本局七三三二 振替東京一八五七二

國民文庫刊行會

（前付の四）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



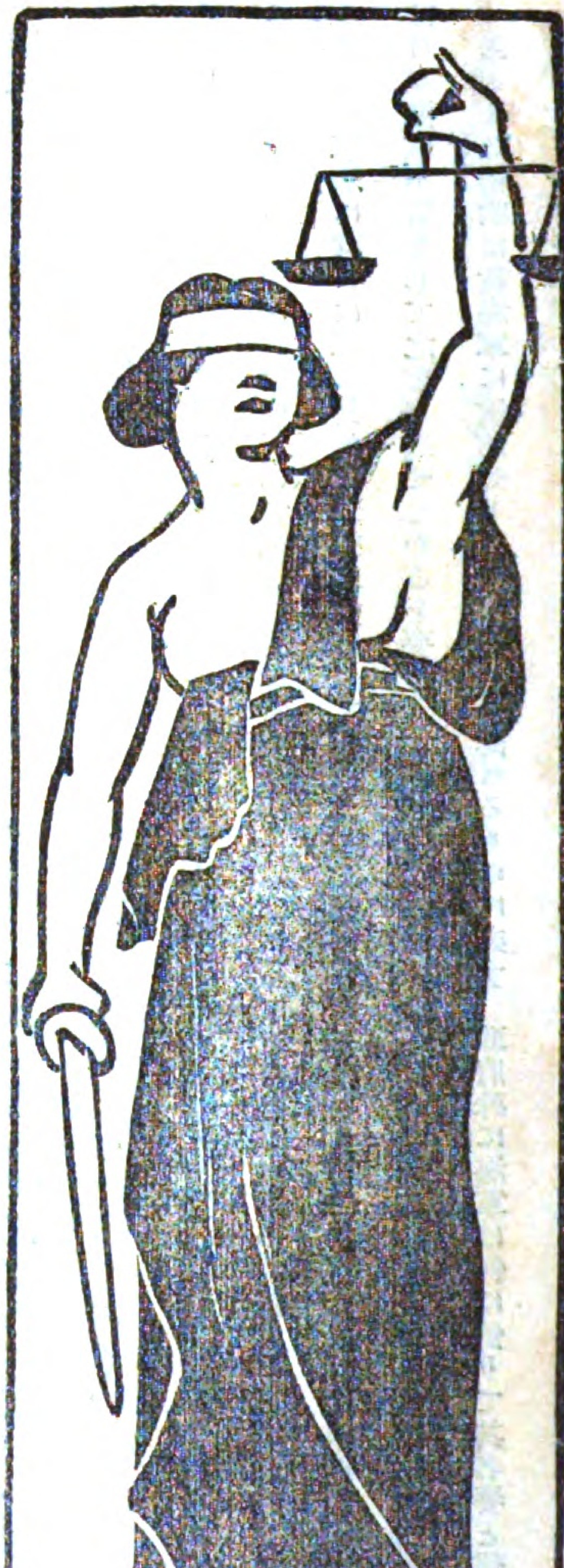
信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

JOHN LAVERY



Springtime

中央公論



春期大附錄號

第廿九年第四號

第三百三號

第三十一帝國議會を論ず

（一）

我帝國議會の開設せられてより既に二十五年、會期を重ぬること三十一回に及ぶも、未だ曾て今期議會の如く不幸、不愉快なるはあらず、若しも堂々たる國家の大問題に關して議會と政府と相爭ふことありとせば假令一時如何に議場の混雜を見るも亦た能く之を忍ぶを得べし、議院內の整理に關しては、本期議會は多少の混雜なきに非ざりしも前年に於ける幾多大騷擾の場合と比較すべくもあらず、寧ろ本期の如きは紛擾の間にも大政黨の結束鞏固なるが爲め議會の實體に寸毫の動搖を見ざるは頗る珍とするに足れり、然らば則ち何を以て不幸と爲し不愉快と爲すやと云ふに、海軍の不祥事件ありしが爲めに外な

らず、吾人は我が名譽ある海軍の爲めに悲しみ、之を問題とせざるを得ざるに至りし帝國議會の爲めに之を哀しむ。

元來本期議會は最も芽出度からざるべからざる議會なりき、來るべき　御即位の大禮に關する豫算を議すべき議會なると同時に、兎に角山本内閣は前議會に於ける公約を履行し行政財政の整理を行ひ、一億有餘圓の剰餘金を提げて議會に臨まんとす、其施設に關し反對派の非難攻撃を免れずとするも、其豫算案は容易に貴衆兩院を通過し上下熈々として　御大禮の準備に專心なるべきの時に際し、リヒテル事件は一月廿三日を以て突如として上下の耳朶を驚破し、海軍將校收賄の有無及び之に對する首相海相の責任如何は乍ち天下の大問題となり、内治外交幾多の重要事件ありと雖も悉く此の一大問題に蔽はれて世人の注意を惹かずなりしは勢自ら然らざるを得ざるものあるに相違なきも、亦た政府反對の一部が之を以て山本内閣顛覆の利器と爲さんとして死力を盡したるに因らずんばあらず、一月二十三日開會の第二回豫算總會に於て同志會の島田三郎氏は昂然として質問の矢を放つて曰く、

本日の新聞所載倫敦電報にシーメンス・シユツケルト會社のタイピストたるリヒテルなるものが伯林の裁判所に於て刑事の宣告を受けたることを掲げたる其證據書類中(一)會社と岩崎提督との間に成立せるコンミツシヨンの契約は今日尚ほ現存す、而して右コンミツシヨンの割合は軍艦に就ては五分其他は二割五分にして合計三割を提供するものなり、(二)在倫敦の日本監督將校井出氏は嚴格なる人物なれば日本海軍本省をして之を交迭せしむるを要す云々但し會社側は假令へ日本官憲に贈賄せりとするも其は會社の意思に非ずと辯明しつゝあるも此辯明は我海軍に贈賄せりとの事實を否認せるものに非ず、政府殊に海軍は何に依りて其名譽と信用を内外に維持せんとするか。

齋藤海相は之に答へて曰く、

余も今朝新聞を閲讀して一驚を喫せり、二個月前なりしかと覺ゆ、シーメンス・シュッケルト會社の支配人ヘルマン、ヒュースと稱する獨逸人を伴ひ余に面會を求め來れり、其言に依れば同會社は重要なる秘密書類を盗まれたるが、此書類は某新聞通信員の手に渡れり、而して事は日本海軍の某高官に係れりと云ふ、余は之に對して其は何人なりやと反問せるに在倫敦の日本監督將校なりと答へたり、余は玆に於て我海軍には何等の曲事なければ新聞に發表せらるゝも敢て妨げなしと明言せるに彼は更に海軍省は兎に角事有力なる將校に係れることなれば成るべくは事件を公表することを好まず、從つて若し刑事問題を惹起するが如き場合には相當の援助を與へられたしと乞ひたるも余は斷然之を拒絶せり、其は海軍と外國會社との取引關係に關し種々の風說を耳にし豫て苦々しく感じ機會もあらば之を取調べたしと思惟しつゝありたる矢先なりしかば右獨逸人と會見後直に關係ある我官憲に通知し尙ほ詳細取調中なれば今後に嚴重に調査の上適當の方法に依り之を公表すべく、今日に於ては只余と獨逸人と會見せる顛末に徴して余の心事を諒とせられんことを希望す。

右は最初の問答にして、是より當分は『取調中』の一語を以て事件を封鎖し得べしとも思はれたれど、奇貨措くべしと爲せる反對派は容易に沈默せず、廿六日の豫算會議に於て島田氏は重ねてリヒテル事件を持ち出だして、質問頗る皮肉を極めたり、曰く警察は何故にリヒテルを日本にて逮捕せざりしや世論は呑舟の魚を逸せしめんが爲めに特に犯人を逃奔せしめたりと云へりと、曰く余は山本首相に對し滿腹の疑惑を有すと、曰く會社が故なく二十五万圓を贈與する筈なし、其の重大事件たる推測するに難からず其關係人は現に東京に在り當局は之にても放任するやと、而して路透通信員プーレー氏の名を指して公言せり。

斯くて事件は益々開展せり、一月三十日の衆議院本會議は多數決の結果、乍ら一大質問場と化し花井卓藏、島田三郎、高木益太郎、尾崎行雄諸氏主として質問を試み、政府側に於ては齋藤海相答辯頗る努

めたり、其要に曰く、

自分は初めヘルマンの訪問を受くるや直に之を警視廳に内報し自分の下僚の者を以て司法省にも通知せり、其後警視廳に於ても事實を調査せり、其時は記憶せざるも暫くの後警視廳よりの報告に此間の事は何か間違あると見て、何事もなく納りたりと探偵より申出でありと通知し來れり、自分は之を以て足れりとせず、外國に於て現はるゝ事柄に付ても亦注意し居りたるが此頃端なく獨逸電報により發表され豫算委員會に於て質問ありしなり、依て調査委員會を設け目下取調に着手し居れり。

此質問會議は何等新事實を發見せざりしも、而かも此問題に對し一般の注意を大に深からしむるの効ありしは否むべからず、右質問會の夜司法官憲は遂に路透通信員プーレーを告發して未決に拘禁し、二月四日にはヘルマン亦た收檻せられ、其取調の結果、同月十六日海軍少將藤井光五郎は免官と爲り同大佐澤崎寛猛は待命と爲り共に海軍省軍法會議に附せられ、同日豫備海軍大佐太田三次郎氏は免職と爲り數日の後片桐主計大監亦其職を免せらる、蓋し太田片桐兩氏は其身豫備役に在るに關はらず或は新聞紙に或は公開演説に忌彈なく海軍腐敗の狀情を暴露し頻りに廓清を叫び以て官紀に觸れたるなり、遂に同月十八日には吳鎭守府長官松本中將、同工兵廠長村上中將は司法官憲の手により家宅搜索を受けたり。

（二）

海軍收賄の事實稍々明白となるや反對黨間に於ては早くも彈劾の議あり、而して之が準備行爲とも云ふべきは二月二日に於ける憲政擁護會の決議なりとす、即ち此日尾崎、八田、古島、守屋、石田、青地、岡部、田川、平出其他諸代議士及び本多、松村、弓削田諸氏、凡て五十餘人は憲政擁護會事務所に會合し左の決議を爲し且實行委員十名を擧げたり、其決議文に曰く、

帝國海軍をして國民疑惑の標的たるに至らしめたるは閥族政治の然らしむる所なり、本會は國家の威信と帝國軍人の名譽とを中外に完保する爲め、憲政本義に照らし、長閥打破と同一の精神に據り薩閥の根絶を期し海軍を廓清するを以て方今の急務なりと認む。

次に二月五日憲政擁護會は築地精養軒に其大會を催ほせり、當日會するもの犬養、尾崎諸氏を初め代議士五十餘名其の他有志等總て四百餘名、席上海軍廓清の決議を爲し、尾崎、犬養兩氏の演說ありて熱心場の内外に溢る、而かも彼等は之を以て足れりとせず、倚ほ輿論を動かして二月十日を以て院内に於て提出さるべき彈劾案に援勢すべく、其前日なる九日を以て兩國國技館に於て海軍廓清の大演說會を開けり、此日前日來の氷雨は滿天の六花を誘ひ雪積ること七、八寸、朝來天晴るゝも滿目白皚々たり、定刻一時に先だち雪泥を蹴つて集るも無慮一萬と注せられ、左の慷慨淋漓たる決議文は滿場拍手の中に朗讀せらる、曰く、

三千年來金甌無缺の國體を有するは我帝國の宇内に冠絶する所以なり、而して今や外、國威を傷け内は國政を破り列國の輕侮と同胞の不安を招きたる海軍收賄問題を惹起したり、現内閣が我國體を毀損するの罪惡は眞に滔天滿地寸毫も假借すべきに非ず、依て本會は當務各大臣は骸骨を闕下に請ひ罪を天下に謝して内外の疑惑を拂ひ國家の體面を保持するを以て當然と認む。

是より演說に移り大隈伯は意見書を送り曰く、

閥族の政權を握る既に五十年、長閥は昨年翕然として起れる憲政擁護の聲により死命を制せられ復た起つ能はざるに至れり、十數年間半死の境に界りて僅かに海軍一局に其根幹を張るに過ぎざりし薩閥は妥協苟合に狎れたる政友會の後援によりて再び政權を執り憲政の進步に一大汚點を印せり、然るに幸か不幸か海軍汚辱事件の勃發するに會す、是れ實に閥族の命數の既に盡きたるの證左にあらざるなからんや、今日若し妥協を喜び苟合を恥ぢざる一部の徒は政界より驅逐するに非ずんば機運既に熟するにも關はらず憲政の確立を遼かならしむる能はざるに至らん、

文學博士三宅雄次郎氏は曰く、

我海軍は名譽あるものなれども、之を美人に譬ふれは鼻の缺けかゝりし美人なり、軍艦はコンミッションなるものが喰込んで居る誠に不完全と云はざるを得ず、是皆な海軍の主腦者が斯の如く爲さしむ、而して維新以來我海軍の爲めに奮鬪せし勝海舟の如きは當然銅像鑄造を見るべきなるに、省内三基の銅像は皆是れ薩摩の出身のみなり、之に加ふるに軍艦泥棒と云はるゝ樺山山本兩伯の銅像を見れば甚だ興味あるものならん。

最後に佐々木蒙古王は起ちて明日を以て日比谷に國民大會を開き、院内の彈劾に援勢すべく、又彈劾に贊成する議員に白薔薇の花を贈りて同志たるの目印とするを告げ、煽動教唆頗る努めたり、而して一二の小新聞を除くの外市内の各新聞悉く大會の味方たるを以て彈劾案提出の當日に至れば全市の光景何となく殺氣紛々たり。

二月十日帝國議會衆議院の日程に上されたる三派連合の決議案は左の如し、

帝國海軍をして疑惑の府たらしめ帝國の威信を中外に失墜せしめたる其責任政府にあり、政府は宜しく自ら處決すべし。

當日の演説者は贊成側に於ては、犬養、島田、花井諸氏、反對側に於ては鵜澤、奥、松田三氏なりしか、試みに贊否演説者の要旨を擧ぐれば左の如し、

犬養毅氏は曰く、

今回の海軍問題は光輝ある帝國海軍に拭ふべからざる汚名を蒙らしめ滿天下の人心は動搖し海軍に對する疑點は一變して内閣に對し責任を問はんとす、本問題は海軍大臣の説明に依るも昨年十一月に知れ亘りたること明白なり、而して大臣よりは司法省警視廳に通告したりと云ふも、其後に於ける行動は更に聞くべきものなし、然るに一旦本件の新聞に揭げられ議場に現はるゝや、突如として夫々の活動を初めしが、是れまでの處置たるや頗る手緩く、故意が偶然かは深く尤めざるも、要するに怠慢の責は免るべからず、故に當局は

其怠慢に對し其責を引かざるべからず、査問會及び司法機關活動の結果如何は茲に問ふ處に非ず、斯く迄に天下を騒がせ海軍に汚辱を與へたる以上責任者は須らく其責に任せざるべからず。

島田三郎氏は曰く、

今や汚損せる國辱を雪ぎ海軍の汚名を掃はんとするに當り內閣諸公の品格にまでも說き及ぼさゞるべからざるを遺憾とす、海軍大臣は最初知らぬ眞似して咎を左右にし手強き質問に遭ひて餘儀なく其事件を語り、而して裁判權の活動も亦質問に促がされて後に働き始めしものにして瀆職の責免るべからず、彼のリヒテルを去らしめたるは日本官憲之を逸したるやの疑なきに非ず、リヒテルが最初會社を恐喝するや僅かに五萬馬克に過ぎざりしも一度通信員の手に亘るや會社は事件の眞相暴露が海軍に及ぼす影響の大なるを思ひ二十五萬圓の支出を肯諾したるに見ても、該秘密書類中の事實の正確なるを保證して餘あるに非ずや、其中には藤井少將の名義も記されあり、斯くても尙ほ海軍の汚名に非ずと云ふや、余は第一コンミッションなどを取りて作り上げたる軍艦の國防に及ぼす影響如何を恐れ、第二には陛下の軍人が危險極る軍艦に乘じて戰に臨むを恐れ、第三には無形の損害の大なるを恐るゝものなり、我輩が此彈劾案を提出し大臣の責任を問はんと欲するもの犬養君より一歩を進めたるものなり。

花井卓藏氏曰く、

海軍將校收賄の一事は分量より云へば極めて少なるものゝ如くなれども、今や國民の疑惑は海軍の一局部に止まらずして全局に瀰れり、茲に於て余は威信を中外に失墜せる責任に對し公平の見地より政府當局自ら立憲的に其責を引くべきなりと斷ず、(更に彼れは明治十五年　先帝の軍人に下し給へる勅諭を引き)、忠節の前には賄賂なく禮儀の前には苞苴なく信義の前には黃金なく淸廉の前にはコンミスシヨンなし、余は島田君の如く事實ありと斷ぜざるも國民の疑惑を招ける以上政府は道德上憲法上責任を以て自ら處決すべきなり。

是より彈劾反對者の說を聞かんに鵜澤聰明氏曰く、

犬養君は怠慢の責を云ふ是亦一理ありと雖も、假りに嫌疑を受けたる內閣ありとせば彼をして自ら其眞情を明かにせしむべきものなるか、將又た先づ疑の雲を霽すを待たず其位を去れと云ふと孰れか果して妥當なるべきか、本事件の原因はシーメンス事件なるを以て須らく之か調査の完了を俟たざるべからず、斯る問題に就き直に辭職すべき程大臣の責任は輕きものに非ず。

奥繁三郎氏曰く、

衆議院に彈劾案を提出したること其例乏しからずと雖も總て確的の事實に因れり、然るに疑ある想像を基礎として斯る彈劾案を提出されしは今回が始てなり、本事件は一二將官の收賄嫌疑に過ぎず、而かも其事件の眞相明かならざるに內閣大臣に責任を負はしめんとするは思はざるも甚だし、現に尾崎君の市長たりし時技師等の收賄事件あり、之に對し同君は責任を負はざりしに非ずや。

松田源治氏は曰く、

事件の眞相を明かにせずして彈劾案を提出するは早計なり、議會の會期は尙ほ五十日もあり、故に獨逸法廷の眞相も分明となり、又我裁判の進行をも見て後に彈劾を爲すこと穩當なり、諸君は國論と云ふも夫れが國論か衆議院の多數が國論を代表するものに非ずや、議會開會以來二十五年群衆に支配せられて衆議院を左右せられしが如きことなし。

斯くて討論終結となり、彈劾案は之を否とするもの二百〇六に對し贊成者百六十四即ち四十二票の差を以て否決し去られたり。

此日午前に日比谷公園松本樓に於ては國民大會を開催して遙かに院內に應援し午後衆議院開會の時に至れば已に數萬の群衆は議院を繞圍し衆議院正門を突破し將に內に闖入せんとす、白薔薇花を佩へる代議士の出入を歡迎し、此の記章なきものを迫害せんとす、夕刻に及んで不穩甚だしく、秩序取締り上警察力を補足せん爲め軍隊の出動あり、夜に入るや幾多の暴行は市內各所に行はれ、警察の取締頗る嚴密なりし爲め遂に公然の燒打等を見ずして止まりしも、一二刀傷問題を生じ又多人數の人權蹂躪の非難を招くに至りしは返へす〴〵も遺憾なりと云はざるべからず。

中央公論子曰く野黨の三派が海軍收賄事件を以て政府彈劾の題目と爲せしは最も當然を得たり、然れ

ども査問の結了を待たず未だ何等具體の事實なきに噪急にも二月十日を以て提案せしは一大失策と云はざるべからず、之を以て犬養氏は單に當初に於ける取調著手の遲寬怠慢を理由とする耳、花井氏は内閣が天下疑惑の府と爲りたれば辭職すべしと云ひ、島田氏は必ず事實あるべしと云ふの心證に基きて辭職を迫らんとせしのみ、斯くて彼等の議論は少しも徹底せず、朝黨の辯士が國務大臣の位置は斯る風說又は一時の怠慢の爲めに辭職するほど輕微のものならずと反駁せしは誠に理の當然なり、剩へ彈劾提出者は直接又は間接に院外群衆の勢力を利用し累を内閣に及ぼさんとしたるの形蹟を免れずして、寧ろ彈劾案の趣旨徹底を妨害せり、加ふるに三派の提契は頗る薄弱にして、當夜白薔薇懇親會を開くにも國民黨は他二派と共にせず、翌日に至り犬養氏に對する尾崎氏の怨言が新聞紙上に現はれしが如き、自ら野黨三派の内紛あるを示す、即ち烏合の小軍を以て結束堅き多數軍に當る、決議の數に於て敗れし耳ならず、世間識者の同情を得る能はざりしは大に惜むべし。

《三》

反對各派の當初の策戰計畫は廢稅案を提げて大に政府及び政友會に肉迫せんとするものゝ如く、營業稅、通行稅、鹽專賣、織物消費稅、石油消費稅、各廢稅案は既に一月二十四日の衆議院會議に提出せられたり、而して海軍不祥事の突發せし爲め廢稅問題は一時忘却せられしの觀ありしも、是れ偶々一の好題目の世間に現はれしか爲めの臨時の現象に外ならずして、廢稅運動は毫も停止せられず、不信任案に次ぐに、豫算問題を以てし而して更に之に次ぐ廢稅問題を以てせんとするは反對派策士が二月上旬に改

定せし計畫なりとす、此の間に際し政友會亦た徒らに多數を賴み悠々閑々たること能はず、內に其多數を結束し外其信用を維持せんとせは公然世間に對し申譯の立つべき經綸を定めざるべからず、即ち黨內の熱議及び黨と政府との協議の結果として大正三年度の豫算に對しては歲入に於て軍艦水雷艇補充基金四千六百萬圓を削除し、之を改めて實業奬勵資金と爲すことに決定し、歲出に於て海軍の補充費三千萬圓を削減せり、如何なる標準に依り此の三千萬圓の削減案を立てたりやは知るべからざるも、今次海軍が一億六千萬圓の繼續費を要求せしに對しては政友會內に於ても夙とに反對者少なからず、彼等は國民黨案と同じく七千萬減を主張して下らざりしが、遂に原內相に一任することとなり、海軍當局と妥協の結果、三千萬圓に折合ひしものゝ如し、同時に政友會は又た政府と協議の結果、千八百六十萬圓の減稅案を發表したり、斯くて政友會幹部は內外に對する策戰全く成り、頭數二百五人を結束して議會に雄視し、先づ海軍不信任問題に關しては十日の議會に於て反對派を擊退し更に十二日の豫算討議に向ひ新たに方陣を敷けり。

二月十二日の豫算案討議は改野豫算委員會長の報告に引續き、中正會の田川大吉郎氏に依り開始せられたり、氏は政府の歲入の計算少なきに過ぎる耳ならず、基金補充を見合はし、第二豫備金等を認めざるを理由として政府に編成替を要求すると云ひ、豫算の返附を主張せしが、其の提議の少數にて破るゝや、同志會を代表して武富時敏氏は起てり、曰く、

政府は財源を殊更に隱蔽したるの跡あり、乃ち剩餘金の處分の如き是なり、政府は之を以て減稅の餘裕なきを粧はんとせり、余等同志

命は即ち森林、教育、貨幣三基金の補塡及び田租の第三期、酒稅の第四期繰下げの財源に剩餘金を充當せんと欲す、歳入に餘裕を生ずること千六百萬圓、歳出に於て減ずること一千八百萬圓、即ち合計三千四百萬圓の財源を生ずべく、之を以て營業稅通行稅の廢止財源に充てんとす、斯くの如くして國民の負擔は輕減せられ又公債借入に待たずして財政を運用し得べし、更に海軍費一億五千四百萬圓は海軍省が國民疑惑の府と爲り帝國の威嚴を內外に失せしめしに對し不信任の意味に於て之を削減すべし。

次に國民黨の鈴木梅四郎氏は國民黨の修正意見を提出せり曰く、

政府の豫算案に對し歳入に於て一億千一七萬餘圓を削減し、歳出に於て二億三千萬餘圓を削減し、又海軍補充費は昨年その初年度經費に協贊を與へたる九千三百萬圓には協贊を與へ新規要求七千萬圓を削除せんとす。

玆に於て尾崎行雄氏起つて其修正意見を提出する場合に臨み端なく一大紛議は突發せり、此時政友會の小川平吉氏は尾崎氏に向ひ其修正意見は海軍費豫算のみを否決する武富案の一部なりや、又は海軍費以外は贊成の意なりやを質し、尾崎氏は其他は權利を保留するの意味なりと答へたりしが、小川氏は尾崎氏の修正案は武富案の一部なれは別に議題に供するの必要なしと發議し、議長亦た小川說に同意するとて議場の意見を徵せり、此に於て花井氏は偶々修正の內容を同うしたる修正案提出せられたりとて一の發案者に發言を許さずとは議長の權限中にありや否を質問し、又た尾崎氏に說明せしむべしと叫ふものあり、議長は議會の起立に問ふて後ちに尾崎氏に發言せしめずと宣告するや、民黨側の異議一時に爆發し議場大混亂を極む、因て一時休憩して各派の意向を纒めんとせしも纒まらず、終に記名投票により尾崎氏の修正案を獨立のものと認めざることに改めて決定す、此際議長も頗る狼狽の態度にて、反覆の宣告を爲し議場の紛擾毫も止まず、修正案反對意見を陳べんとせし政友會の井上角五郎氏は騷擾の間に立

ち語ること聞かれずして壇を下り、議長は次に賛成演說者として尾崎氏を麾けり、茲に尾崎氏は議長が果して議場を整理する能力あるや否を確め、一種の侮辱を議長に與へ後悠然登壇せり、曰く、

元來國防の計畫は對手國に因て決定せざるべからず、英獨の國防關係に見るも即ち明瞭なり、我海軍の對手とせらるゝものは貿易の大得意國とは爲り得るも斷じて對手國となり得べからざる上、其所謂對手國は其海軍を半減せり、又我海軍當局の智慧の不足するは我造艦は常に他國の後塵を拜し竣工の際には常に世界の第二流艦となるが如きは遺憾なり、(終に國民案を批評して)海軍費は不信任案の手前當然否決すべきものにして殊に九千三百萬圓丈け協賛すと云ふは最も理論の不透明なるものなり。

尾崎氏は海軍擴張不必要を說くかと思へば海軍當局不信任の手前擴張案に反對すべしと說く其論旨頗る不徹底なるも兎に角一時間餘の長廣舌を振へり、之に次ぎて吉植庄一郎氏の反對、片岡直溫氏の賛成、長島鷲太郎氏の反對、增田義一氏の賛成演說ありて、討論終結と爲り、國民黨案先づ否決せられ、同志會案亦少數にて敗れ、終に全部豫算委員長報告通り決定せり。

《四》

海軍問責に敗れ、豫算案討議に敗れたる少數各派は更に廢税問題を提げて復た多數黨の壘に肉迫し來れり、而して廢税案の議事は十四日、十六日の兩日に亘れり。

是れより先き營業税、織物税、通行税の廢止案は汎く關係當事者の歡迎する處となり、一月二十六日には明治座に廢税大演說會あり、之と前後して大阪にも廢税演說會あり、而して政友會に於て減税案を建て廢税案に對抗せんとするや各地の廢税運動者は東京に集り各市選出の代議士に向ひ個人運動を開始し、彼等もし税廢に同意せざれば次回の選擧に投票せずと云ふを以て强迫せしかば政友會代議士中市選

出のものは多く非常の窮狀に陷らんとす、玆に於て政友會幹部は急に廢稅案を議事に上ぼし速決して災を未然に除くの策を定め、豫算案の議事に後るゝ二日卽ち十四日の會議に於て日程を變更して議了するの策を立てたり、此時に當り廢稅委員會は未だ決議に至らず、少數黨は一日も多く廢稅案の否決を引延ばすを以て利益となすか故に委員會の進行甚だ捗ばかしからず、故に十四日開議と共に奧廢稅委員長が委員會開會の許可を議長に乞ふや政友會の策略は乍ち反對派の看破する所となり、本會議に於ても將た委員會に於ても少數黨は議事の進行を阻害せんとして百方策を弄し、政友會は强ゐて進行せしめんと欲して壓迫を加へしかば遂に未曾有の混雜を生じ、委員會に於ては某代議士の壯士に歐打さるゝあり本會議に於ては投票箱破壞の事あり、委員會は終結して營業稅廢止案は終に本議に上るは上ぼりしも、流石の多數黨も少數黨の抵抗に堪へず、慢に橫暴の惡名を買ふ耳にして未決のまゝ夜の十二時を以て散會せり、次の會日なる十六日には警官の援助を借りて少數黨の抵抗を壓迫すべしとまで傳へられしも、中間一日の休みは双方の逆上を大に冷却したるものゝ如く、十六日には無事に議事の進行を見たり、卽ち營業稅廢止案は否決せられたり、而して廢稅討議は十八日にも及び此間廢稅各案の悉く否決せられし耳ならず、政府と政友會の妥協により立案せられし各種の減稅計畫亦た成立の運命に接せり、卽ち左の如し、

(一)、營業稅(三割餘減)　八、一〇〇、〇〇〇圓
(二)、地租(二厘減)　二、五〇〇、〇〇〇
(三)、相續稅(家督相續の稅率約五割減 遺產相續の稅率約二割五分減)　一、八九〇、〇〇〇

(四)、通行税　一四〇、〇〇〇
(五)、國税徴收市町村交附金　二、三六〇、〇〇〇
(六)、營業税調査委員會費　一〇〇、〇〇〇
(七)、通行税徴收交附金　四〇、〇〇〇
(八)、蠶種檢査費補助　七〇〇、〇〇〇
合　計　一六、一〇〇、〇〇〇

此外織物消費税の課税價格低減に依て約二百三十萬圓の減額を見るべく、又織物業者組合に對して取扱織物の税額百分の一に相當する手數料を交附せることゝし其額十九萬圓を算す、故に減税並手數料等を合して彼是通算する時は總計千八百六十萬圓に及ぶべしと云ふ。

（五）

少數各派が政府及び政友會に肉迫すべき尚ほ一題目を有す、所謂人權擁護問題を提げて、原内相を彈劾せんとするものにして、其三派より提出せし決議案は左の如し、

警官人を刄傷し又一舉數多の良民を押留して其自由を奪ふ、是れ人權を蹂躙するの甚だしきものにして、警保の職責を盡さず帝都の秩序を紊したるの責斷じて内務大臣にあり、内務大臣は須らく引責處決すべし。

右決議案提出の理由を説明せんとて第一に國民黨の濱田國松氏は演壇に立てり曰く、

山下橋畔に於て警官が拔劍して新聞記者橋本某に負傷せしめたると日本橋に於て無辜の良民を拘引したりとの二事實が即ち此決議案提出の理由なり、原内相は貴族院の質問に對し確的なる診斷のある（濱田氏は此時右診斷書を朗讀せり）に關らず刄傷の事を否認せり此れ

立憲治下の國務大臣に有るまじきことなり、又た天下の公道を通行する良民が理由なくして逮捕せらるゝ如き人權蹂躙の甚だしきものにして、非立憲行動も亦甚だし。

石橋爲之助氏は曰へり、

去る十日の夜警官が拔劒して新聞記者を刄傷したる事實如何は貴族院に於ては現場を目擊したる柳澤伯の證言に依り事實的明白なるにも關はらず、原内相は拔劒の事實を否認し鞘の儘なりと云へり、鞘の儘にて彼れが如く負傷したる以上拔劍よりも危險なり。

原内相は石橋氏に答へて曰く、

石橋君は巡査の拔劍に付き柳澤伯が貴族院に於て現狀を實見し證言したりと云はれしが柳澤伯の言は自分が其附近を通懸りたる節巡査が拔劍し居るを以て危險なれば行かざる方宜しと注意されたるなりと言ひたることは速記錄の示す處なり。

政友會の粕谷義三氏は曰く、

一方警視廳が拔劍の事實なしと言明するに於て愈新聞事實の無實なるを斷言するものなり、假りに拔劍したりとせんか二三の負傷に止まらさるべし。又刄傷なりと云ふ診斷書もあるよしなれども一方には裂傷といふ診斷書あることを忘るべからず、何れにしても檢事局にて調査中なりと聞けば其結果を待たざれば事實の如何を判斷すること能はざるべし、斯の如き薄弱なる事實の上に立ちて彈劾案を提出するは早計も極まれり、又本案の提出者は良民なりと云ふも、新聞社を襲ひ自働電話を破壞するが如き果して良民の行爲なる乎、諸君は八名の負傷者を出したりと云ふも警官側には百有餘名の負傷者を出したるに見ても取締上止むを得ざりし場合なりしを知るに足らん。

此外小河源一氏翠川鐵三氏菊池武德氏各賛否の議論をなせし後原内相は最後左の如く斷言せり曰く、

若し相當の注意を以て彼れが如き群衆を鎭壓するに非ずんば暴民政治の端を啓き立憲政治を破壞するに至らん、我等は本職に懇々たるものに非ずと雖も無根の事實に依り引責を强ゐんとする諸君の言語道斷なるを責めずんばあらず、斯の如き無根の事實に依り引責するが如きは立憲政治の發達を妨くるものなり、斷じて此決議案には反對なり。

討論終結し記名投票の結果は例の如く内相問責案は大多數を以て否決せられたり。

（六）

大正三年度豫算案の貴族院に廻附せらるゝや、海軍收賄問題は乍ち質問の焦點と爲り、村田保氏、田健次郎男、江木千之氏等主たる質問者たり、而も其質問も又之に對する答辯も衆議院に於けると大同小異にして別に新たらしき事態を生せず、但し豫算審査期限の終に近くに從ひ海軍擴張費七千萬圓削減の事漸く各派多くの贊同を得るに至れり、三月四日には各派代表者の協議會あり、僅かに政友系に屬する交友倶樂部を除くの外各派の同意を得たりと傳へられしが、九日の豫算總會に於て、海軍擴張費中より七千萬圓を削減するの決議を爲し、其理由としては政府の豫算は海軍に偏重なりと云ふことゝ海軍廓清を希望すと云ふに在り。

三月十三日に衆議院送附の豫算案は貴族院本會議に上れり、曾我豫算委員長報告して曰く、

本年の豫算會に於て大體に於て原案を可決せしかど唯だ海軍の部に於て一大修正を爲し軍艦製造費より七千萬圓だけ削減することとせり即ち衆議院の削減より更に四千萬圓だけ多額の削減をなせるなり、勿論海軍の勢力増加は賀す可きことなるも海軍當局の態度は議院を瞞着せんとするの嫌あるを免るる能はず海軍噸數は今日既に六十六萬噸となり居れり加之更に多額の擴張費を要求せるに陸軍には何等の擴張なし委員會に於て海軍は政府の秘藏兒、陸軍は政府の繼兒と云ふものありしが蓋し適評と云ふ可し尙ほ目下の海軍の狀態は根本的の革新をなすの必要に迫り居れり委員會にては海軍偏重の嫌ありとの理由と海軍刷新の意味とを以て之が削減を斷行せり。

石渡敏一氏は修正反對を表的して曰く、

委員會が海軍豫算を削減せし理由は二つあり其理由の一は陸海軍の間に權衡を缺くと云ふにあり然れども何故に偏重偏輕なるかと云ふ

點に就ては何等的確の事實を示すなし委員會及本會に於て爲せる樋口子、曾我子、田男等の主張は陸海軍の擴張は同時に之を行はざる可からずとの意味に外ならざるが如し斯の如きは殆ど理由とはならず眞に陸海軍の間に偏重偏輕ありとせば之に反對するも可なれども同時に擴張せざる可からずとの見地よりして海軍費を削除せんとするは不法なり彼を先にし是を後にするは當時の財政事情に依り變化せざるを得ざること勿論也又第二の理由は海軍廓淸の爲に豫算を削除すと云ふにあるが之は甚だ理義の一貫を缺くものたり廓淸の實を擧げざるが故に之を削減すと云ふならば一部を減ずと云ふが如きケチな遣り方を採ること無く海軍擴張費全部を削除するを當然なりとするに非らずや貴族院は第卅議會に於て陸軍充實の希望をなせりと稱するものあれど予は之を信ずる能はず今年度豫算より七千萬圓を削減せる結果は如何四面海にて圍まれある我國としては眞に寒心に堪へざるなり兄弟喧嘩をなして國防を疎にする如きは寔に憂ふ可きことにあらずや。

古市公威氏は修正案を賛成して曰く、

今日に於て海軍は至急擴張の必要あれど陸軍は至急擴張の必要なしと云ふ確たる理由あるに非らざる限り海軍のみ擴張に次ぐに擴張を以てせんとするは到底偏重偏輕の譏を免るゝ能はざるなり要するに海軍は海軍陸軍は陸軍と云ふが如き國防計畫には本員は反對なり次に我海軍には實に悲しむ可きの不祥事あり彼の瀆職事件なり西洋人は日本にも武士道は既に亡びたりと稱しつゝあり日本の古英雄豪傑にして今日神に祭りある人々は天に在りて必ず日本武士道の敗頽を嘆じつゝあるならんと揭けたる外國新聞もありたり是等の侮辱の根元は謂ふまでも無く今回の海軍瀆職問題なり我海軍は實に斯の如き侮辱を受けつゝあるなり故に既に着手せる軍艦二隻の費用は兎も角なるも、新規要求額は政府にて差控へられて然るべしと信ず。

此外徳川頼倫侯の反對、久保田氏の賛成、鎌田榮吉氏の反對、村田保氏の賛成演說ありて後ち山本首相は左の如く政府の態度を宣明せり曰く、

大勢既に定まれるも敢て一言を辯じて諸君に訴へんとす本年豫算が衆議院の削減以上更に削減を見んとするは本大臣の頗る遺憾とする所也勿論陸海軍同時に擴張を行ひたることもあり然れども大戰後多大の經費を要する我國に於て國力に應ずる能はざる軍備擴張をなし能はざるは已むを得ざる所政府は我國今日の狀態を外交其他諸般の方面より觀察し今回の豫算を以て國防上より最も適當なるものと決

定したる也偶々海軍の罪惡ありて海外より傳り來りたるは遺憾の極なるも是が爲に光輝ある　陛下の海軍を埋沒せんとするが如きは到底賛成し能はざる所なり議院制度の設けある今日諸君の意見を尊重せざる可からざるは勿論なるも軍器の進歩急速なる今日大正八年に至らば我驅逐艦は全部廢艦となるのみならず今日に於ても既に舊型となり居れり賢明なる諸君が廣く大局に目を投じ衆議院修正通り賛成あらんことを望む。

茲に於て討論終結の後ち豫算委員會修正案に對し採決の結果、四四票の反對に對し二百四十四票の贊成を以て可決せり。

茲に謹んで特記すべきは、御大禮の豫算通過の事なり、政府は本年秋期御擧行の大禮費豫算を大正三年度追加豫算として十日衆議院に提出せり、其總額は五百三十三萬圓にして、左の三案より成る曰く、

大正三年度歳入歳出總豫算追加案
大正三年度歳入歳出總豫算追加案
大正三年度各特別會計歳入歳出豫算追加案

右は十二日衆議院本會議に提出せられ滿場起立の中に即決せられ、十三日の貴族院本會議に於ても同樣滿場敬禮の中に肅然可決せり。

（七）

中央公論子曰く貴族院が衆議院廻附の豫算案に大修正を加へたるは我邦議會あつて以來の異例に屬し、之に由て兩院制度の圓滿を阻害し且惡例を將來に遺すものなり、上院にして若しも海軍充實の事必要ならずとせば削減の議あるも諒とすべきも、已に前年西園寺內閣に迫つて海軍擴張の言質を徵しつゝ今却

つて反覆して海軍費を削減せんとす、即ち非立憲の行動たると共に黨情の爲めに國務を翻弄するの誹は免るべからず、論者は云ふ陸軍を省みずして獨り海軍をのみ擴張するは不可なりと、殊に尾崎行雄氏の如き軍備に關しては平素消極論を唱ふるに關はらず兩輪兩翼論を持ち出し陸軍を煽動教唆せんとするが如きの行爲あるは黨情に驅られて國務を蔑にするの責を免るべからず、貴族院に現はれたる一部の議論亦た同一の責を免るべからずと思ふ、而して貴族院にして果して現内閣不信任の意を表示せんと欲せば、彈劾決議可なり上奏案可なり宜しく公明の手段を取るべし。豫算修正の名の下に海軍廓清を仄かすが如きは頗る陰險の嫌なき能はず、然れども前途を顧みず兩院運用の阻害を思はず單に山本内閣を苦境に陷れて之を崩壞せしむるを主一の目的とせば貴族院の策戰は極めて功妙なりと謂はざるべからず、以て貴族院内及び其背後に策士の潜めるを察すべし。

貴族院の豫算修正に對して衆議院の執るべきは三箇の方針に出てし、(一)全然上院の修正を認諾す、(二)兩院協議會に於て妥協の途を發見す、(三)院議を尊重して貴族院の反省を促がす、即ち是れなり、今吾人が本論を草するに當り(三月十六日)衆議院は已に其協議員を撰定せるも貴族院は未だ撰定せず、從つて何日に兩院協議會に開かるゝやを知らず、又其協議會が果して如何の結果を齎らすべきやを知らず、然れども從來の行懸より察し、殊に衆議院が其先議權の精神を尊重すべき點より察すれば貴族院の修正を全然認諾すること到底不可能なるべく、又た貴族院が主として山本内閣の打破を以て目的とする以上之と妥協交讓點を發見することも亦た至難の事たるべし、然らば則ち協議調はず豫算不成立に歸すべく、

山本内閣亦た遂に崩壞を免る能はざるべきなり。

豫算不成立に歸するも前年度の豫算を實行すれば可なり、內閣は何處までも齧り付き主義を執るべしと云ふものあり、然れども是れ言ふべくして行ふ可らず、今や司法官憲の公平なる取調への下に海軍收賄の事實は毫も疑ふべからざるに至り、多年其局に當れる齋藤海相は素より又た其後見役たりし山本首相は十目を視る所、十手の指す處、戰底責を免るべからず、假令へ無理無態に此議會を切拔け得べしとするも、其れが爲めには　御大典までの間に如何なる不祥事の出來せんも知るべからず、吾人は切に山本伯の聰明忠誠に訴へ自ら引責して事局を治定するの擧に出でんことを勸告す。

政界の中心人物たらんとする

原敬氏と加藤男

匿名氏

（一）

大正三年の上半期に當り最も奇異とすべき一の現象は天下の巨頭が揃ひも揃ふて悉く凋落し、政界復た權威者なきの光景を呈せるは是れなり、桂公は昨年の政變に敗れ、續きて其身亦た病歿し、西園寺侯も政界を隱退して容易に出廬の望なく、山縣井上松方諸元勳ありと雖も老衰して重きを成さず、寺内伯亦た長閥の凋落と共に殆んど落伍者たるを免れず、山本伯の如き昨年來宛かも順風に帆掛けて春海を渡るの觀ありしも、端なくりとテル事件の暴露より乍ち其聲望を失墜せり、假令其身は尚ほ臺閣の首座を占むるも、政務を奉行する一有司たるのみ最早や政界の眞の權威者には非ず、而して眼を政黨界に轉ずれば、松田正久男の如き近年頻りに重望を加へ隱然政黨出身者中にありては首相候補の第一人たるの觀ありたれども惜いかな病革まりて遂に起たず、其他多年民黨の驍將として多大の希望を囑されし人物中に就て觀るも、河野廣中氏は老ひ、大石正巳氏亦た頗る振はず、尾崎行雄氏の如き依然として口舌の雄たるを失はざるも、往々似て非なるデマゴーグの觀ある耳ならず、其政機を見るの明なき到底政界の權威者となるべき望なしと云はんも不當ならじ、獨り犬養氏に至りては彼が精悍の氣は毫も衰へず演壇に立

たしむれば重厚にして事理明晰、確かに第一流たり、惜むべし彼れが近來の行動頗る識者の怪疑を惹くに足るもの無きに非ず、想ふに犬養、尾崎の如き既に其全盛時を過ぎんとする者にあるに非ざるなきか、序でに後藤新平男の如きも一時は頻りに虚名を馳せ、世間の一部よりは天晴れ將來の首相たりと謳歌せられしことあるも、桂公歿後の進退を誤りし以來名聲甚だ揚がらず、蓋し男や近時の一奇才たるに相違なきも、經綸餘ありて之を整理實施するの明と斷とを缺けり、加ふるに誇大妄想の僻あり。兒玉伯又は桂公の裨將として功を樹つべくも獨立して天下に號令する大政治家の器に非ず、其外大浦兼武子ありと雖も素と警察出身の古風の政治家にして野に在ては舊中央派の首領たるに過ぎずして假令前途重ねて臺閣の人たるべき望なきに非ずとするも、政界の偉材を以て見るべきに非ず、但し最近一年間の政變の間に處して多く其身を誤らざりしが如き亦以て大浦子の能く世故に通ずるの人たるを知るに足らん。

要するに桂公が内府を出て政權を掌握してより喚起したる政界の爭亂は眞に古今未曾有の混戰狀態を呈し今や一周年餘にして其跡を回顧すれば其光景や應仁亂後の京師に髣髴たりと云ふべく、大將裨將或は戰場に斃れ又は負傷して後送せられ、殆んど一人の無難なるもののなきに當り、獨り原敬氏と加藤高明男とは好運にも災厄を免れ將に我政界の中心人物たらんとするに似たり、素より爭亂未だ全く熄まざるの今日、二氏亦た何時如何の禍に罹り失脚するなきを保せずと雖も、見渡す限り我政界の勢力を二分し各一方を統率すべきものは二氏を除き外に人物なきに似たり、是れ吾人が原敬氏加藤男を以て人物月旦の題目となせる所以なり。

（二）

原敬氏は舊南部藩士、世祿四百石を食み、公家衆と稱する名家なり、夙に東京に出て佛蘭語を學び、後ち司法省法律學校に入り法學を修む、當時の同窓者の語る處に據れば彼れは眉目秀美、腰に角帶を卷き兵兒帶を用ひず、外柔弱の態を爲せしも頭腦明晰、頗る議論

を好み且つ膽氣あり、曾て一部の學生賄征伐を爲し端なく學校の幹事と衝突せし際の如きは、彼れ固と賄征伐の事に與らずと雖も學生總代に選はれ大に幹事と論判し、進んで大木司法卿を訪ひ寃を訴へたりしと云ふ、此後主として賄征代に與れる數名の學生は他の口實の下に退校せしめられしを以て、原も亦之に殉じ共に學校を去れり。

原氏が法律學校を去りしは明治十二年の頃なるべく、是より彼れは中江兆民の佛學塾に出入し、竟に郵便報知新聞の記者と爲れり、然るに十四年の秋に至り、大隈伯が臺閣を逐はれたるにより、共に官を辭し在野の政客となりし矢野文雄、犬養毅、尾崎行雄等が藤田茂吉と共に報知社に入り來りしが爲め、佛文飜譯又は雜報を記せし原氏は下局に押込められ、新來の前記諸氏は上局に坐して社員を睥睨しければ、其對照自ら官府の高等官が判任官に對するが如き觀あり、勝氣の原は如何で犬養尾崎の下風に永く雌伏するを肯ぜんや、十五年の春渡邊洪基の官を辭して伊藤井上の命を銜み東北關西各方面に廻遊して民情を視察せんとするや彼れは報知社を辭し渡邊に隨行せり。

是より先き西南の亂平ぐや、國會開設の論は天下を風靡し、盛に政府の中央集權に反抗したり、明治十三年の如きは國會請願の爲めに政界頗る騷然たり、全國二府二十二縣の有志總代九十七人は片岡健吉河野廣中を委員として太政官に請願書を奉呈せしも、政治上人民の請願を受理する職權なきを以て受理せられず、更に元老院に到りしも同院は建白書の外受理する職權なきを理由として之を却下したれば、國民の希望は之を上に向つて伸ふるに由なく、爲めに民間有志の團結愈鞏固ならんとし、新聞紙の論說は概ね國會速設を主張し、政談演說は都鄙各地到る所に開かれ、天下囂々として物情最も不穩なり、因て政府は同年四月五日を以て集會條例を發布し嚴に政談演說の爲めにする集會を檢束し三日以前に所轄警察署の認可あるに非ざれば之を許さず又た屋外の集會を禁し、又た政治的結社は必ず政府の認可を受くるの必要あらしめ、海陸軍人、警

察官、官公私立學校の生徒は皆な政治演說を聞くことを禁じ、更に一結社と他の結社と連合し又は通信往復するを禁じたり、斯くの如く一方表面の取締を爲しつゝ、他の一方には十四年十月十二日の勅詔を以て明治二十三年を以て國會を開設すべきを公約せられしも、世人は八年後の開設を以て待遠しとなし、民情は遂に鎭撫するに至らず、殊に大隈伯の放逐は宛もミルトン失樂園の詩に云へる惡魔が天國より逐はれて地獄に入りて謀反人の首領と爲りしが如く、彼れは乍ち政府反抗の首腦と爲り、是より民論の勢は益々猛烈と爲れり、此に於て在朝の伊藤井上等は實際の民情を知るの必要ありとなし、集會條例の起草者たる渡邊洪基氏をして全國行脚を爲さしめたり、渡邊と原は旅費は勿論使ひ放題なれば隨分贅澤なる旅行を爲せしものゝ如し、其仙臺に至るや陸奧宗光を獄裡に訪ひしと云へば茲に他年原が陸奧に知己を得るの端を開けりと云ふべきか、今その行脚の結果が當路者に取りて果して幾許の參考となりしかに就きて吾人の知らざる處なるも、年少氣銳の原敬氏に取りては彼が得意の世間觀に達するの初なりしと云ふも不可なからんか、彼等の行脚は約半年にして切上げ、十五年の末には渡邊氏は元老院議官となりて官界に舞戻り原氏は大阪に於ける大東日報とか云ふ新聞の主筆となれり、此の新聞は如何にして起り何年間持續せしやは吾人の知らざる處なるが、其主義とする處は蓋し當時の所謂漸進主義にして、東京日々新聞の福池源一郞と東西相應じて自由改進の急進を敵として論爭せしなるべし、當時政界の問題としては憲法論にて持切りの有樣にして、例せは明治廿三年の國會に對し制定せらるべき憲法は欽定法たるべきか將た國約法なるべきか、又は國家の主權は皇帝に在るべきか將た國會に於ける皇帝に在るべきか或は又人民に在るべきかと云ふが如き是なり、一は獨逸主義に依らんとし一は英國に傚はんとするもの、第三は佛國革命の主義に外ならずして、斯の如き乾燥無味の抽象論が各新聞又は政客により熱心に論爭せられしは稍々不思議の感あれども、憲法制定を目前控へながら有司は民論

の過激を恐れ、政客は當局者が憲政の名により一種の專制を行はんとするに非ざるやを狐疑せし當時に在りて、此種の抽象論に向ひ血湧き肉躍るの感ありし亦た想像するに足れり、元來が議論好きにして且つ民論の驍將たる矢野犬養尾崎に對し强き反感ある原氏が大東日報紙上に於て論戰頗る努むる所ありしは辯を待たず、此頃彼が當時滋賀縣令として磊落不羈の聞へある故中井弘氏に知られ遂に其女婿と爲るに至りしも、亦彼れが新聞記者として特色を發揮せるに由れりと斷ぜざるべからず、彼は渡邊中井の紹介により井上侯に知られ遂に官界の人と爲れり。

（三）

原敬氏が帝國領事として天津に赴任せしは明治十七年の事なるべく、此年朝鮮京城に於て帝國公使館の燒擊事件あり、十八年には伊藤公淸國に使し天津に於て李鴻章と有名なる天津條約を締結せし當時領事たりし原敬氏は能く伊藤公に知らるゝ機會を得しものゝ如く、幾許もなく彼れは佛國公使館書記官に榮轉したり、彼れが歐洲に在ること幾年なりしやを知らずと雖も明治廿二年には彼が井上伯の秘書官として農商務省に在りしを以て察すれば蓋し滿三年より久からざりしものゝ如し、彼れが平素和服を着くるを好むも、時に洋服を着すれば乍ち一の灰殼紳士と化する所以のもの其巴黎仕込みに負ふ所あるべし、廿二年山縣内閣の下に陸奥宗光氏入りて農商務大臣と爲るや原秘書官は居座りて新大臣に仕へ、廿五年八月伊藤内閣の下に陸奥氏外務大臣と爲るや原氏は拔擢せられて通商局長と爲れり、蓋し素と陸奥には井上より推撰せられしものゝ如きも、陸奥は直に原の才幹を認め大に重用するに至りしものゝ如し、陸奥は原の吏才を愛せし耳ならず、其議論好きなるを愛せしものゝ如く、同じく議論好きなる陸奥として寧ろ衝突の恐なかりしを怪むべきも、兩者の着眼方向多くは同じからず、爲めに相衝突せずして却て配合の妙を得たるが如し、即ち陸奥は何時も大局に着眼して大策を立て而して後ち實行の方法を講ずるの風ありしも、原の最も興味を有するは實行の方法又

は之に要する制度法律に在りしものゝ如く、陸奥の大方針に從ひ其短所を補ふべく尤も適任なりしに似たり日清戰爭終りて外務次官林董男が公使として淸國に赴くや、原氏は其後を襲ひ外務次官と爲れり。

原氏の外務省に在るは前後五、六年此際如何の方面に其印象を遺せしやと云ふに、蓋し樽爼折衝の上に在らずして寧ろ外交官領事官制度の基礎を立てたるが如き其著しきものなり、固より彼は通商局長として陸奥氏の有名なる條約改正の事業に參畫せり、然れども當時の改正は國權回復を主とし治外法權の撤回に全力を注ぎて、稅權回復の問題は之を他日に讓りたりしを以て通商局長として參畫せしこと餘りに多からざりしものゝ如し、但だし帝國外交刷新の基礎を立つるの目的より明治廿六年に發布されし外交官領事官制度は原氏の起草に係れることは彼れが著はしたる『外交官領事官制度』なる小冊子の序言に由り明なり、此小冊子及び他の『新條約實施準備』及び『新條約實施準備補遺』二冊子は原氏が往年、大阪每日新聞主筆たりし時に同紙上に連日に亘り揭載せしものを後に至り集めて出版せしものにして、之を一讀せば彼れが如何に制度又た行政事務に興味を有するかを知るに足らん、彼れが官吏としては外交官出身なるにも關はらず、近年其方面を轉じて內務行政に長たるを好む所以のもの、他に種種の事情あるべくも、其主たる理由は其才の適する處其興味の存する處を撰みしもと云はざるべからず、先きに云ふ『外交官領事官制度』の緒言に曰く

現行外交官領事官制度は去明治二十六年の改革に因りて始めて其基礎を定めたるものなり、當時陸奥伯外務大臣たり、林男外務次官にして、余は通商局長たり、伊藤內閣と議會との公約に因りて、同年臨時行政事務取調委員會を內閣に開くに當り、余は其委員を命ぜられ、一切の改革案を起草し又一切の改革を擔任し、且爾後林男の後を襲ふて外務次官となり、常に其制度を擁護するを以て自任したれば、庸劣の才愧づべきもの多しと雖も、此制度を知るの一は局外者に比して少しく優る處あるべしと信ずるなり。

原氏は能く自らを知れり、彼れにして若し終まで外交家とし立ちしならば恐らくは今日の如き成功は得て期すべからざりしならんか、少くとも彼の辯論僻は寧

ろ樽俎折衝の邪魔を爲せしなるべし、彼れは伊藤內閣の末期に朝鮮公使に轉せしが、松隈內閣の成ると共に官を辭し、是より幾許もなくして大阪每日新聞の社長兼主筆となり再び新聞界の人と爲れり。

（四）

原敬氏が多年遊泳し來れる官海を去り、剩へ新聞界の人と爲れる動機に付ては未だ何人も彼自身の說明を聞きしものあらざるべし、彼が官吏としての技能は何人も能く之を認めし所なるべく、彼にして止まらんことを欲せば何れの方面に於ても相當の地位を得ることを難しとせじ、彼れ亦其性の一半には官僚的趣味を有す、決して役人が嫌やになりしが爲めとは思はれず、然らば何が爲めに辭したりや、何が故に全權公使の官を擲ち新聞記者と爲りしか、想ふに是れ彼が能く時勢の趨向を察し、新飛躍を試むべき大志を懷けるに由れりと斷ぜざるべからず、彼れの先輩として仰ける陸奧西園寺は夙に輿論を尊重し之を能く指導するの必要を感じたり、又政黨內閣の時機の決して遠からざるをも知れり、時勢を觀るに機敏なる原氏必ず官僚全盛の期已に過ぎんとして新たる大勢力の民間より起るべきを看取したるべきは察するに餘あり。

斯くて彼は大阪に往けり、此時の大阪每日新聞は紙數一二萬を出だすに過ぎずして、到底大阪朝日の偉大なる勢力に拮抗し得べしとは見へざりも、前外務次官從四位原敬君を社長兼主筆に迎へたる勢に乘じ一大發展を策して大に成功せり、今日てこそ前次官と云へば役人の古手扱にせらるゝなれ、明治三十一年前後尙ほ官尊民卑の盛なる頃に於て、殊に大阪贅六の間に於ては、前外務次官原敬氏の名聲乍ち嘖々たるものあり、從つて新聞の聲價亦た日に月に隆々たり、原敬氏は文章家と云ふに非ざるも能く達意の文を草す、且つ其文章は平易簡明、朝日の漢文體にして稍ともすれば難解の文字に富めると比較して頗る一般に歡迎せられしもの〻如し、且つ新聞記事の正確を督勵し數字年月若しくは時間を記すに當り彼自ら一々檢閱して正誤せしめしが如き大に新聞の聲價を揚くるに力ありしが如し、

而かも彼れの監督が餘り細目に亘り部下を督勵すること又餘り甚だしきに過ぎ、社内の評判は餘り宜しからざりしと聞けり、然れども新聞の紙數は次第に增加し、原氏が在阪三年の後ち政友會創立に際し新聞社を辭せし時には發行紙數は已に六七萬を算し、朝日と共に關西二大新聞の名聲を博し、優に朝日と拮抗するに足るの實力を有せり、彼の大阪に於ける第二次新聞經營は確かに一大成功に終れり。

伊藤公が立憲政友會創立趣意書を發表せしは明治三十三年八月二十五日に在りて、創立委員十二名を擧げたり、而して原氏は其一人たりしなり、彼れが他の西園寺、渡邊(國武)、星、松田、渡邊(洪基)、尾崎、末松、金子、都築、本多(政以)、大岡等の間に伍し、果して幾許の働きを爲せしかは知る可らざるも、第四次伊藤內閣に於て星亨氏辭職の後、大岡、尾崎、都築、渡邊(洪基)、本多等を排して遞信大臣と爲りしを見れば旣に頗る重きを爲せしことを知るに足る、彼れは政友會創立發表以前に在りて親しく伊藤公の左右に近きて相談に與れり、而して竊かに西園寺侯の意を體して劃策大に努めしもの丶如し、當時伊藤公の周圍には種々の野心家あり、殊に多年公の眷顧を受けし某の如きは其働ある手腕に任せて切りて廻はし或は新政黨創立の計畫を誤るの恐ありしが、原氏は其邊の注意にも怠なかりしに似たり。

短命なる第四次伊藤內閣の主たる厄難は貴族院の反抗と內部の軋轢にあり、若しも二厄並發せずして、一時に一厄づ丶來りしならんには、伊公の聲望を以てし着々之を切拔くること容易なりしならんも、內憂外患同時に臻り流石の伊公も內閣を投出すの外途なかりしものの如し、而して貴族院の反抗に對しては原氏は內閣の害にもならず又た利益にもならざりし如きも、內訌に付ては確かに一方の有力なる責任者たり、蓋し問題は豫算編成に繫かり。

伊藤內閣と貴族院との衝突は貴族院が星亨氏に對する反感に基き發して、陸海の充實に要する所の增稅計畫を破壞せんとせしに在りしが、遂に詔勅の下るあり、

歳入二千百四十三萬九千圓の増額を獲べき酒税、砂糖消費税、海關税及び葉煙草專賣價格の増率計畫は成立するを得たりと雖も、未だ之を以て全然財政の難關を通過せりと云ふべからず、否な更に一大難關は前途に在り、抑も當時日清戰役を距ること五年、政費は次第に膨脹し、既定公債支辨に屬するもの三十四年度に於て六千三十六萬餘圓、其他三十五年度以降に於て繼續事業に要する公債額を合計すれば此時伊藤内閣の前途には募集を要する公債の額は一億七百九十六萬圓の多きに及べり、而して此時我財界は不景氣の極度に達し公債發行の事到底不可能なるを以て、渡邊藏相は三十四年度に於て公債支辨事業の中止を主張したり、之より先き内閣組織當時に於て渡邊子は初めに藏相の椅子に擬せられざるを憤り脱會騷ぎを演じ大に他の閣僚の反感を招きたる上、今公債支辨事業の中止を主張したるを以て、鐵道電話等に關し最も多く影響を蒙るべき原遞相は率先して反對し他の末松、松田、金子諸相之を援け大に論爭せしが、山本兒玉加藤諸相の仲裁に依り中止を一時の繰延に改めて折合ひしか、三十五年度豫算問題に關し渡邊藏相は同年度に於て一切新事業を起さず又公債を募集せず、而して既定の繼續事業は三十七年度まで之を繰延ぶべしと云ふの提議を爲せり、此極端なる提議に對し原氏等は又々大に力爭し、反感の情大に激昂し、既に經綸の得失を討議するの範圍を脱し、相互に排斥して内閣改造を期するに至れもの丶如し、而して原氏は既に云ふ如く遞相として當然爭ふべき上に、性來の議論家なるか故に、渡邊の向ふを張るものは隱然彼一人なるか如きの觀を呈せり、當時の原氏は未だ多く世人に知られず星氏の後を襲ひしとさへ異數とせられし位なれば、此論爭により彼は寧ろ大に男を揚げたり、當時の時事新報が一日、帶刀せる壯士姿の原と渡邊が途上にて鞘當ての漫畫を載せしことあり、其痼癖の面相に肩を怒らしつ丶渡邊に突當らんとする原氏の相貌髣髴として今尙記者の印象に存せり。

（五）

遞相たること半歳に滿たずして野に下りし原氏は頗

る閑散に苦むの態なりしが、彼れは翌年九月の總選擧に郷里盛岡市より選擧されて衆議院に入れり、是れ彼れが政友會の領袖として今日の勢力を扶殖するに至れる始めなり、但し初一二年間は格別著るしき働きも出來ざりしもの丶如く、松田、尾崎、片岡、長谷場、大岡等の間に伍して一總務委員たりしに過ぎず、三十五、六年の頃地租繼續問題の勃興し、桂内閣と伊藤公と大衝突を來し、伊隈提契の成りし際の如き其重なる立役は彼に非ずして加藤高明氏なりしなり、然れども伊藤桂の妥協成り(三十六年五月)尾崎片岡等憤慨して政友會を去り、更に幾許もなくして伊公樞府に入り西園寺侯代りて政友會の總裁と爲りて以來は黨の樞機は松田氏と共に彼の掌る處となり、大小の事彼の與らざる處なきに至れり、日露戰爭中擧國一度の名の下に政友會が進歩黨と相携へて桂内閣を援くるや犬養大石が進歩黨を代表せし如く政友會は松田原に依り代表せられたりき、而して三十八年ポートマス平和條約に對し國論鼎沸し歸着する處を知らざるに際し西園寺侯が條約贊成の意見を發表せんとするに當り黨内何人にも豫め之を謀らざりしも只た松田、原兩氏にのみ協議せりと聞けり、西園寺、松田、原の組合せは最も其妙を得たるものにして、原氏が毎に働き役を勤め、屢々惡形と爲るに對し松田氏は脇役として主とし黨内の不平を鎮撫せり、西園寺侯曾て或人に語りて曰く原と云ふは不思議な男である世間より惡く云はる丶ことを屁とも思ひ居らぬと、素より原氏とて人に惡く云はるれば好き心持には非ざるべきも、比較的に無頓着なるは彼の特色なり、此點に於て彼れは故星亨氏に酷似せりと謂ふべき乎、斯くて彼れは一躍して最高幹部を占めたれとも最近の獨特の位地を占む迄には少なからぬ苦心を要したるは事實なり、松田氏が閲歴聲望自ら輩擠を抜くものあるは何人も拒まざりし處なるが、原氏に至りては然らず、議員生活に於ては松田、長谷場大岡、元田は原の先輩にして、殊に政友會の前身たる自由黨との關係に於ては長谷場は原よりも遙かに古き歴史を有す、故に新參の原か稍々勢力を占むるに對して三四

者は或は萬更ら好き心持ち計りは爲ざりしならん、時に種々の衝突ありしか如きも亦止むべからざるか、然れとも最近二三年以來は大岡と雖も我を折り快よく原に屈するに至り、假令へ原の人物、或は其所作に對して悉く感心せざるものと雖も、一般に政友會の黨首としては斯人を措て外に人なきを觀念するに至れるは疑ふべからず。

原氏か廟堂に立つこと前後合計すれば六七年の久しきに及ぶ、此間特に彼の功績として擧ぐべきもの多からず、又た假令未だ實施するに至らざるも彼か首唱提案として稱すべきもの多からず、强ゐて之を求めんか、郡制廢止案及び小撰擧區制の如き彼れか一時頗る熱心に其通過の爲めに努力したるものなり、孰れも不幸にして貴族院の反對により成法にならざりしが、兩案とも反對者の說に採るべきこと少ならずとするも決して惡しき案にはあらず、此各案の委員會又は本會議に上るや、彼れは感心に能く其辯明に努めたり、先方質問者が眇たる一陣笠たると否とは其の問ふ處に非ず、何人に向つて熱心に辯明の勞を執れり、蓋し亦た是れ彼の議論僻の一端を示すものと云ふべきか、然れども該法案の一たび否決となるや彼は乍ち之を忘れたるもゝ如く一場の惡夢に附し去るの風あり、是れ彼の美質なり、曾て郡制案の上院に移さるゝや貴族院は政略上之を否決せんと欲し内閣反抗の氣勢日に盛んなり、因て或人が首相西園寺侯を訪ひその撤回を勸告せしに、侯は一笑し之に答へて今や原は四十度以上の熱に犯され居るを以て如何ともすべからず、暫く放任するを可とすと云ひしと聞く、原氏は議論を好み屢々爭ふて大に熱す、然れども一たび冷却すれは復た當時の怨を思はず、彼れか論爭を好むは相撲取か勝負を好むと一般後に至り心氣の爽然たる處に愛すべき點あり、乍然近來其位地の高まり其責任の加はるに隨ひ、漸く前日の圭角は薄らぎ人物の圓滿ならんとする傾向ありと云ふものあり、果して然る乎。

原敬と云ふ人は臨機應變の才に富めり、彼れは豫め經綸政策を高く標置して變化極まりなき活きたる政界

に臨むを愚とするもの丶如し、故に自家の言質に縛せられ四苦八苦するの場合少きと同時に其出處進退の甚た華美たらざる憾なき能はず、故陸奥伯の如く毎に遠謀大策を懷き其言論の堂々たるものあるは原氏に於て之を求むべからず、然れども事に臨みて策し機を見て案を定むるの才能に至りては陸奥伯も亦及ぶべからざるものあらん、但し原氏か政界の人と爲りし以來の痕に付て察す彼れにも一貫の主張、一定の大目的なきに非ず、其れを何ぞやと云はゞ、一大政黨を打立て以て政界の樞軸を握らんと欲することと是れなり、故に彼は前年官を辭して新聞記者と爲り今日尙ほ無爵の平民に甘んじつゝあり、彼れの理想が果して西園寺侯又は故陸奥伯の如く高遠なりやは別として其志の小ならざるは否むべからず、又た夙に藩閥の賴むべからざるを看破し一大政黨を起し以て政界の中心團たらしめんとするは確かに一大見識なりと云はざるを得ず、此點に於て彼れは伊藤陸奥西園寺の志を繼承せんとするものなり、彼れか政黨の爲めに費やす所の努力たるや實に測量す可らざるものあり、彼れは終日黨人に接し毫も倦むを知らず、彼れは黨界巨細の事情に精通し多く觀察を誤らず、彼れの人に接するや往々無愛嬌なることあり、又た時に議論僻に流れて圭角を現はすことあり、然れとも彼れは少しも權威振らず、四角振らず、道德振らず、學者ぶらず、日々衆愚に接して敢て其の短所を冷評するか如きことなきは彼の一大長所ならずとせず。

（六）

世人往々政友會が屢々桂公と妥協したるを以て一に原氏の責に歸するものあり、妥協が憲政の理想たらざるは何人も異存なき處、好し如何なる場合にも之を許すべからずとの論點よりするも、原一人を罪するは頗る酷なり、吾人は政友會なるもの丶存立上妥協は止むべからずして、若し之を非なりとせば伊藤、西園寺、松田、原其他の領袖皆な共に其責に任せざるべからずと思ふ、抑も之を如何にと云ふに、伊藤公が始め政黨の改善を企てしは、當時の各政黨が徒らに破壞的行動

に流れ國政の運用竟に圓滿なること能はざるを憂へたるの餘に出づるものにして、其理想とする處は政黨内閣の基礎を定めんとするに在るは勿論なるも、國務亦一日も曠廢すべからず、若し夫れ自ら朝に立ち國政を料理すること能はずして、他人廟堂に立つに際しても、國務の進行を阻害せざる丈けの援助は之に與へざるべからずと云ふは公が屢々其黨與に告げたる處の訓戒なりとす、是れ獨り國家の元勳たる伊藤公として然るべき耳ならず、亦た天下の公黨として然らざるべからざるなり、何となれば自ら起ちて廟堂に立つこと能はず、他人にも國政を料理せしめずと云ふは全然破壞者の所作なればなり、試みに思へ、昨年の政變以後に於てこそ閥族の勢力も大に衰微したるなれ、第一次桂内閣より昨年政變までの十年間に於ては到底元老、樞密院、貴族院を敵としては國政を料理し得べからざるは事實の示す處にして、何人も否むべからず、世人或は民黨合同一擧にして政府を乘取るべしと云ふも、三十一年隈板内閣の失敗は以て殷鑑となすべからずや、然らば則ちこの變遷過渡の時代に於て閥族と政黨と兩々相對するに際し、此兩者間に一種の妥協を行ひ交代して國政の衝に當るは、頗る變則の行爲なるも、亦た勢止むを得ざるに出づると云ふべきに非ずや、蓋し一方國家的見地より姑息なる妥協政治を行ひつゝ、閥族の衰頽と共に政黨の權力を進め徐に憲政の理想に達するを期すべき耳、擧國一致は戰時に必要なる耳ならず、戰後に於ても亦必要なり、又情意投合は桂内閣時代に於けるのみならず後繼内閣に入りても存續すと西園寺侯が唱導せしもの實に前述ぶるが如き大體の見地より出でたりと云はざるべからず、即ち原氏が時に妥協の媒介者たりしことあるを以て彼一人を責むるは酷に失せずや、若し責むべくは西園寺、松田をも共に責めざるべからず、但し妥協は永久に持續すべからず、桂公が一たび政黨組織を發表するや、是れ藩閥の滅亡を自白するもの、事茲に至りては最早政友會と桂公との間に妥協の道あるべからず、昨年の政變を生ずる實に止むを得ざるなり。

妥協を以て原氏一人の責に歸するの酷にして其當を得ざるは前段云ふ如くなるも、世人が妥協を以て原氏獨特の所作なりとまで信ずするに至れるは多少理由なきに非ずと思ふ、其理由とは單に彼れが西園寺侯の股肱として第一の働役者たるのみに非ず、彼れが政治家として臨機應變主義の人たるが故に世人の爲めに誤解せらるゝに由れり、而して是れ實に彼れが一大短所なり、伊藤、陸奥、桂、小村の如き孰れも皆な時に大政策を提けて天下に臨むの概あり、陸奥が地租改正の建議をなし、十年の亂に際し明治政府の顚覆を謀り、條約改正の方針を立て、又は政黨政治の理想を遺こしたる眞に大政治家の要素を具備せりと云はざるべからず、原氏は未だ國家の長計大策を提けて一世を睥睨したるを聞かず、是れ則ち彼れ已に黨首として十分の成功を示すに關はらず、未だ大政治家として天下に謳歌されざる所以にあらざるなきか、蓋し原氏は素と聰明にして機略に富めり、今や大政黨の責任を一身に負はんとするに當り必ずや深く自ら省る處あるべきを疑はず。

（七）

加藤高明氏は名古屋藩の秀才なり、幼にして老成の風あり、其開成學校に入るや恐らくは今の都築馨六男と共に同級中の最年少者たりしなるべし、明治十四年大學法科を優等を以て卒業し直に三菱會社に入りしは彼れが齡二十二の時なりき、當時三菱に於ては岩崎彌太郎氏大に人才を吸集するに努め、彼れが如き亦た最も有望の青年として迎へられしなるべし、彼れは初め本社に在り、暫くにして横濱支店に轉じ更に神戸支店に轉じ、其稍〻事務に通ずるや北海道小樽支店長として赴任せり、是れ入社後より一年後なりしものゝ如し當時加藤は專心一意社務に鞅掌し、其服裝の如き更に意とせず古洋服を着し平然たり、一日岩崎彌太郎北海道巡廻の途次小樽支店に來りて大に加藤の執務振りに感心し、自ら佩用せる金時計を取外して與へんとしけるに、加藤は辭して之を受けず今の身分ては不釣合である他日出世の時まで御預り置被下と申したれば、岩崎は沁み〴〵加藤の人物に惚れ込み、是れより豊川良

平の仲介にて岩崎家の婿となるべき約束は成立せしものゝ如く、幾許もなく加藤は抜擢せられて英國留學を命ぜられたり、彼れの倫敦に在るや常にピーオー汽船會社に出入して執務の狀況を見學して益〻事務家たるの素養を深ふし、傍ら英語に習熟し、又英國紳士の典型に私淑し其謹厚の風を養ひたれば、歸來益〻岩彌家の覺え芽出度、直に今の加奈子夫人の婿となり且つ三菱の重役と爲れり、岩崎彌太郎氏は十八年二月に病歿したれば加藤の英國より歸朝せるは十七年の末頃なるべく、其在英期は一年乃至一年半の間に在るものゝ如し。

斯くて加藤氏は齡より云へば二十六七の書生上りなるに過ぎざるも、三菱の花婿として社會に於ける立派なる位地を占め、其頭腦明晰にして機才縱橫の概あり、彼れは是より岩崎彌之助氏を助けて三菱會社の經營に從事せり。而して此間に於て三菱汽船會社は明治十四年大隈伯を放逐したる後の政府の一部の計畫に依り成立せる同共輸運會社の競爭に遭ひ非常の難局に陥りしも遂に活路を得て却て益〻岩崎一家の基礎を鞏固にするを得たり、吾人は加藤が其第一の檜舞臺に立ち經驗せし苦辛を想像せん爲め聊か三菱汽船會社の由來を說かざるべからず。

明治の初年に於て我沿岸海運業の全然外國各汽船會社の獨占に歸したるは言を俟たざる處にして、此間にあり徒手を以て起ち三菱汽船會社の基礎を据へ以て我航海權を回復したるは明治實業界の奇傑岩崎彌太郎及其弟彌之助なり、明治政府は初め民間に勸誘して一二の汽船會社を起さしめ之に保護を與へたりしが容易に發達の見込あらず、偶〻岩崎兄弟の獨立して三菱汽船會社を起すあり、素より眇たる小會社なりしも岩崎彌太郎の人物は夙に内務卿大久保利通の知る處となり、茲に一大發展の端を發けり、會たま明治七年征臺の役あり、政府は兵隊、輜重、糧食を臺灣に運搬せしむる爲め遠洋航海に堪ゆべき船舶を借上げんと試みしも、内國の汽船中其用に應ずべきもの太だ少なく、米國太平洋汽船會社に談判して若干隻を借上ぐるの約を成せ

しも米國政府は日支兩國に對し局外中立を標榜して該會社に命じ一旦貸したる船をも取戻さしめしを以て、政府は止むを得ず百四十七萬餘圓を支出して汽船十三隻を買入たり、而して此等の汽船は之を三菱會社に委托して運用を掌らしめしに、能く其任務を盡せしかば、役終る後と雖も依然之を三菱會社の手に委せり、而して此時に當り明治八年米國太平洋郵船會社は其線路を上海に迄延長し、我沿岸航海權を獨占し居りたれば之を驅逐するの必要より盛んに三菱會社を補助したり(毎年二十五萬圓の補助を爲せり)、更に一箇年の後ち政府は事業擴張費として八十一萬弗を貸與せり、斯の如き厚き保護を受けながら三菱會社は、其一たび競爭者に勝ち自ら我沿岸運輸を獨占するに至れるや、新船の購入を爲さず、航路の延長を爲さず、其利得を以て別に鑛山を求め銀行を起し竊に別途の利源を開き、船舶の乘客に對しては賃金を高ふし取扱を不親切にし、剩へ賃銀は洋銀を以て支拂を要求(紙幣一圓六十錢を以て一弗と交換す)せしかば、民間の不平囂々として三菱の横暴を非難せり、然れども大隈伯朝に立つ間は能く三菱を庇護したりしが、其一たび逐はれて野に下るや、一は三菱の横暴を罰懲し一は以て大隈の財源枯渇せしめんと欲し協同運輸會社なる一大汽船會社は組織せられたり、此新會社の後見役は時の農商務卿品川彌次郎(後の子爵)にして、政府は單に金錢上の補助を新會社に與ふる耳ならず有らん限の力を盡して三菱を苦めたり、競爭の最も劇甚なるは明治十八年の春夏の頃にありて、從來横濱神戸間の下等運賃五圓五十錢なりしを五十五錢に迄引下ぐるに至り、流石の岩崎彌之助も終に競爭に堪へざるを觀念して政府への社債二百萬圓を返還し三菱所有の船舶を品川沖に集中して一夜の中に之を燒棄てんと覺悟せりと噂されしは實に此時に在り、然るに三菱の運未だ盡きず、共同輸運の困難は三菱よりも甚だしきものあり、兩會社は終に合同して日本郵船會社となり、三菱は有利の條件を容られし爲め大利を贏ち得て、是れより大に鑛山業、造船業、銀行業に手を延ばし今日の暴富を作すに至れり、而して此

間に加藤は岩崎一門の俩手として大に用ひられ、又た終始最高顧問として協議に與かれる大隈にも知られ、轉た金權の偉大なるを感歎し自己が前途の多望多幸なるを祝福せしなるべし、彼れが今後に於ける成功も、失敗も、凡て彼れが自己と三菱とを混同せる多大の自信力より生じ來れり、而して其自信力は十八年前後の經驗に基く處多かるべきは言を俟たず。

(八)

多幸なる加藤氏は茲に復た新らしき方面に向つて其功名心を滿足せしむべき機會に接したり、彼れは已に金權を握るの愉快を嘗めたり、是より更に官界に入り大に其盛名を馳せんとするの場合に臨めり、明治二十一年春第一次伊藤内閣斃れて黑田伯新内閣を組織するや、大隈伯入りて外務大臣と爲り、曩きに井上伯が外相として企て破れたる條約改正の事業を繼承せんとす、茲に於て大隈外相は加藤氏を納れて秘書官と爲せり、當時の秘書官は今の勅任參事官を兼ねたるが如きものにして、其勢力自ら局長輩を凌ぐの概ある耳ならず、加藤氏は名義上に參事官を兼ね、更に調査局長を兼ね、鳩山政務局長御雇デニソン氏等と謀り改正條約の立案に從事せり、而して大隈伯は井上伯の失敗に鑑み趣向を改め國別談判の方法を採り、又た大に條約規定の勵行を試みたり、蓋し井上伯は歐化主義を標榜して外人の歡心を買ふに熱中したるが、今は條約文を勵行して毫も假借せず當時現行條約の不便利なることを實地に知らしめて外人をして自ら改正を求めしめんと欲したるなり、是又一の方便たるを失はず、茲に於て加藤は外相の旨を受け在留外人が在來の寛典に慣れ苟も條約の規定に觸るるあれば片端から之を摘發して毫も情實を汲むを許さず、或る意味よりせば彼れは小意味よく振舞ひたるが如し、彼れは則ち外務省内第一の切物と爲り名聲嘖々たり、宛も伊東巳代治氏が伊藤内閣に於けるが如きの觀あり、斯くて改正の業は大に捗取り功を收むるの日も將さに近かんとするに際し、端なく二十二年四月十九日倫敦タイムス紙上に改正案の一部を發表せり、右き草案なる物に依れば治外法權撤

去と共に當時世論の喧囂たりし內地雜居を許さんとすると、更に井上案の斃れたる場合世人が見て以て大罪惡としたる混合裁判を設くべきと明白となりたり、即ち內地雜居を許すに付ては外國判事數名を日本大審院評定官に任じ一百圓以上の民刑事に關する上告事件に參せしめ、更に原被の一人が外國人たる時は掛り判事の過半數は外人判官たるべく、此方法は十年繼續し其以後は一切司法權の自主に一任ずべしと云ふに在り、茲に國論沸騰し、其當時新たに發布せられし帝國憲法に違反すとの攻擊頗る盛んなり、朝に在りては伊藤井上の反對あり野に在りて後藤伯の率ゆる大同團結最も激烈に反對し、竟に來島恒喜出てゝ大隈伯に爆裂彈を投じ、伯が一脚を失ふに至り條約改正の事復た中止と爲れり。

大隈伯に去られし加藤氏は樹より落ちし猿猴の如くなりしも、三菱の後援と彼の才器とは彼をして難なく松方藏相の保護下に立つに至らしめ、彼は是より大藏省に入り參事官、銀行局長、監査局長、主稅局に歷任せり、此間約四年の久しきに及び、機敏なる彼れは財政の運用に通曉するを得たり、是れ彼れが今日に於ても財政上數字に明にして、若し賢明なる外相たらずば練達なる藏相たるべしと世人に評さるゝ所以なり。

更に新らしき運星は加藤氏の頭上高く輝きつゝあり、明治二十七年日清戰爭の初期に當り彼れは伊藤首相陸奧外相に拔擢せられて特命全權公使として英京に赴任せり、時に彼れ齡三十五、多く外交上の經驗あるに非ず、然るに一躍して第一等國の公使と爲る、如何に其老練と才幹の重んぜられたるかを察すべし、蓋し日清戰爭の以前に在りては、英國の輿論は全然支那に向ひ同情し、初期の勝利我軍に歸するや一轉して中立的となり、是より將さに再轉して大に我に同情すべきの機會に際せり、此時我駐英公使として有爲の人材を要するより彼れその選に當れるなり、彼れの得意想ふべきなり、彼れの英國に在ること約七年、三國干涉に際し已に英國は我に好意を表し、北清事件に於ける我軍隊の行動と我政府の態度は英國の同情をして擧げて

我に傾倒せしめしもの、主として形勢の變遷に由ると雖も亦以て加藤駐英公使の斡旋の功にに歸すべきものなくんばあらず。

明治三十三年伊藤公が政友會を組織する少し以前に加藤氏は賜暇を得て歸朝せり、此時の彼れは實に天下一の人氣男たりき、彼れは政友會に加盟せざるも深く公の信賴を得、公をして某昵近者に向ひ斯人と政を共にせずんば將た誰と共にせんと歎美せしめしは實に此時にあり、彼れは第四次伊藤內閣の外相と爲れり、在職八ヶ月遂に赫々の功なしと雖も彼れか遂に其特色の圭角を現はさずして止みしは後年の彼れを知るものの奇異となる處なるが、蓋し此時には渡邊藏相と原遞相との大衝突あり、流石の議論好きの加藤外相も少々呆氣に取られし氣味あるもの丶如く寧ろ却て大に內閣調和の爲めに努力せしもの丶如し。

（九）

明治十四年法科大學を出てしより三十四年伊藤內閣の瓦解と共に野に下る迄二十年間の加藤氏の生涯は眞に好運の生涯なり、曰く日本第一の富豪の愛婿と爲る、曰く三菱協同運輸の大競爭に參加し三菱をして凱歌を擧げて引分けを取らしむ、曰く大隈外相を助け條約改正の業に當る、曰く大藏省に入り銀行主税各局に長となる、曰く政府部內の屬僚より一躍して駐英公使となる、曰く齡四十一にして外務大臣となる、誠に是れ功名富貴を一身に並有するもの世間誰か之を羨まざらんや、然るに三十四年以後今日に至るまでの生涯は加藤氏に取り頗る失意の時期たるが如きは太だ奇なり、彼は三十五年の總選擧に當り高知縣より選ばれ衆議院に入りしが、偶々桂首相地租繼續案を提出して伊藤公の反對を招き從つて衆議院大多數の反對に遭ひ、三十六年一月には議會を解散せり、解散と前後して一日加藤氏は其駿河臺の邸に伊藤公と大隈伯を招待して會見の仲介を爲せしことありて、當時彼は公伯提契の楔子たる耳ならず政進兩派聯合の鏈鎖たり、彼れは恐らくは此時伊隈聯合內閣成り自己が其外相たるを夢みしこと一再に止まらざるべきか、然れども好事魔多し、彼れ

が此愉快なる希望も伊桂妥協により水泡に歸せり、此總撰擧に彼れは奥田義人と轡を並て出馬せしがその態度の餘りに傲慢なりし爲め大に横濱人士の反感を買ひ桂、大浦の後援ありと噂せられし島田三郎の爲め散々に打負されたり、幸に奥田氏は鳥取市より當選せしを以て横濱市の席を辭したりしかば加藤氏も衆議院に席を占むるを得たるも、政進提契の破れたるが爲め民間政客として彼れの唯一の天職は廢れたり、彼れ亦た議會に望を絶ち三十七年二月の總撰擧には候補に立つことをなさゞりき。

是れより彼れは一の新聞に割據して勢力を扶殖するの計畫を建て三十七年秋には東京日々新聞を買受け專ら之が經營に任したり、彼れは日々出社して社員を督勵したり、其對政府方針として軍事計畫に對しては批評を差扣へたれども、外交に對しては随分猛烈の攻撃を試み殊にポーツマス條約の結果に對しては輿論の急先鋒たりき、而して彼れは此際復た政進聯合内閣を夢みしもの丶如し、蓋し桂内閣の不人望と戰時に於ける政進兩黨の提契の狀態は人をして自ら民黨内閣樹立の可能を思はしむるものなきにしもあらざりしなり、然れども三十八年末には桂は妥協的に西園寺を後繼者に推選して辭職し、加藤は西園寺の交渉に應じて外相たるを承諾せしも、其希望せし政進聯合は遂に實現するを得ざりき、彼れの强味は進歩黨を背後に控ゆるに在りき、今進歩黨を振棄て丶獨り入閣するは西園寺に對する交誼據なしとするも、彼れは到底閣中孤立者たらざるを得じ、彼れの入閣するや其腹心に語りて、我は只外交技師として入閣する耳、外交以外の事に一切容喙せざるべしと告げしと云ふに關らず、鐵道國有に關し閣僚と大議論を打始め、坂谷藏相に向ひ君は大臣なるか次官なるか返答あれと云ひ、山縣遞相に向つて屬僚の助なくして數字を記憶し能はざる程ならば大臣たるの資格なしと諭し、寺内陸相とは滿洲撤兵に關して大衝突を爲し、而して最後に西園寺首相に向ひ辭表を突付けての斷判をなせしかば、首相も餘程勘氣に觸はりしと見へ、然らば御希望を叶へ申さんとて加藤外相

の免職を奏請せり、是より加藤氏は西園寺侯と舊情を温むるに至らず、再び日報社に立籠り大に社員を督勵せしも、社運日に非にして遂に加藤氏の新聞經營は失敗に終れり、明治四十一年彼れは桂首相小村外相の勸誘に應じ英國駐在大使として任に倫敦に赴けり、而して出發に先だち日々新聞は大阪毎日新聞に賣渡せり、傲岸不屈の加藤が節を屈し桂小村の勸誘に應じ駐英大使を贏ち得たるは定めて一大苦痛なりしならんも、亦た智慮あるの業たるを失はず、彼れは之に因て初めて其八方塞りの境遇より活路を得たり、在英四年、條約改正の功に依り男爵を授けられ、而して小村侯逝きて後ちは次の桂内閣に於て彼れが外相たるべきことは殆んど保險付きと爲れり、彼れが第三次桂内閣に於ける在職期間は僅に數日の短きに過ぎざるも、彼れは竟に桂公の後を承けて立憲同志會の總理と爲れり、玆に於て加藤男は帝國の政界に復活し、政友會の原敬氏に向ひ立合ふべき唯一の人物として世人に認識せらるゝに至れり。

（八）

原敬氏と加藤男とは各其政界に入る發足點を異にせり、一は伊藤、井上、陸奥西園寺の配下より身を起し、他は之と正反對なる大隈門下より出でたり、後ち加藤氏は伊藤公に結び、西園寺侯に掎り、更に桂公に奔り、各方面在らん限りの勢力を漁り廻りしも、其生れ故郷の記念は忘れられずと見ゆ、彼れが早稻田伯に對する今尙ほ師父に對するの趣あるは稱すべし、原氏は世間よりは無主義無節操の誹を受くることあるも其政治系統に關して終始一貫、自ら一種の定見一種の節操あるを示せり、彼は伊藤陸奥の門より出で、其志を繼かんとし今日まで奮闘せり、彼れが西園寺の下に立ち政友會の爲めに謀るや、世論時に彼れが自己の權勢を求めて西園寺に忠ならざらんとするを疑ふなきに非ざりしも、是亦誤解なり、彼れは極めて義理堅き人物にて、其先輩若しくは首領を賣りて自己を利せんとする如き輕薄にして横着なる所作は到底彼れに於て見るべからず、斯く發足點を異にするも、加藤男と原氏とは中間

途を同くし、共に第四伊藤内閣に列し、又た第一次西園寺内閣にも列せり、而して彼等の關係は極めて圓滿にして親密なりしが如し、孰れも有名なる論客たるに關はらず互に大に論爭せしことなく、孰れも一代の業物なるに關はらず遂に相衝突せしことなきは一奇なり、而かも運命は遂に兩者をして互に政敵として公然相見ゆるに至らしめたり、彼等今後の一勝一敗果して如何。

原氏と加藤男とは其人物性行に於て能く類似の點あり、其腦髓の緻密にして物分りの早き、其實務を主として空論に耳を借さゝる、其文學美術の趣味なく書畫骨董を解せざる、其勝氣にして議論好きなる、兩者頗る相似たり、然れども亦た著るしき相違の點あり、加藤男は英國紳士の典型に私淑して、自ら日本第一のゼントルマンを以て任するものゝ如く、義理を說き節操を論じ、世俗より見れば寧ろ偏屈とも思はる點なしとせず、例せば彼が日々新聞を經營するや頗る高尙なる標準を示して其記事を取締らしむ、而して紙面の振はざるや大に躍起となりて頻りに面白き記事を督促す、蓋し面白きと云ふことも或る一部の高尙なる少數者に面白きものは一般讀者に面白しとせられず、今日我邦の狀態にて新聞を廣く賣らんとせば先以て識者の見て顰蹙するが如きものか、左もなくは頗る馬鹿らしとして一顧も與へざる如きの記事ゝ時に默過せざるべからず、然れども加藤氏は自ら經營する新聞に其等の記事ありては面目に關すとなし毫ゝ禁制ゝ寬にせず、此の融通の利かぬ處に彼れの長所も短所もあり、之に反し原氏は一切道德家を以て居らず宛も俗的に大悟徹底せるものゝ如く、世俗と共に笑ひ共に哭き一定の標準を設けて人を律せんとするの風なし、其大阪每日を經營するや富籤に類する或る方法を設けて大に讀者を釣らんとするの計畫を行ひ、大阪朝日の此方法を攻擊するや彼自ら筆を執り盛に其違法に非ざるを辨じたりと聞けり、彼れは新聞經營等に於て世俗に過ぎて下劣の方法を執るを戒むると同時に、世の標準以上に道德ぶりて甘んじて不成功に終るを迂愚となすものゝ如

し、然れども若し彼れを以て輕薄にして義理知らずと云ふものあらば吾人は一言辨じ置かざるべからず、彼れ郷里盛岡にある八十五歳の老母を初め其兄の一家に對して極めて孝友に、又東京に在りて古河會社にある弟及其一家に對しても常に給養を怠たらず、又た先夫人にして過度のヒステリー症に罹れる、故中井櫻州の遺女に對しても或る間接の方法を以て給養を爲し居れりと聞く、彼れが其友人故舊に溫情を缺かざるは幾多の實例あるも、渡邊洪基氏の死に際し遞信大臣の身を以て其家に詰切り葬儀一切の世話を爲せしが如き其義理堅きを示すべき一例と云ふべし、若しも加藤男が時に其標榜する紳士の理想に達せざるの點ありとせば、原氏は表面少しも道徳振らずして却て頗る義理人情を解せるもの丶如し、彼れの如きは僞善者に非ずして僞惡者なりと云ふべき乎。

　原敬氏も加藤男も各自らを以て天下の豪傑と思惟するなるべし、實に彼等は手も八丁、口も八丁、而して政界に於ける現在の優勢なる位地を占む、豪傑の士と云ふに何ぞ妨げん、蓋し豪傑の士に缺くべからざるは一種の度胸なり、彼等は果して此度胸を有するか、原氏が世の毀譽を度外し、其信ずる處に行き其立つ處に止まるは、一種の度胸なり、彼れ亦た頗る執着力に富み其進退を苟もせず、時に或は剛腹の嫌なきに非ず、世間の人氣に煽てられて進退するが如きは彼れの最も陋とする所なるべし、加藤男は原氏の眉目秀美なるに似ず色黑く眼窪み相貌頗る偉なり、彼れの剛情は通りものなり、然れば彼れ亦た度胸なしと云ふべからざるも、彼れは世間の毀譽褒貶に最も小心なり、彼れは流石に早稻田一流を汲める故にや最も新聞操縦に重きを置き、從つて新聞の批評に神經を惱ますや夥だし、彼れは表面頗る豪放なるが如きも其內心は割合に細心なり、此れ則ち彼れが今日迄幾多の好機會に接しつ丶遂に大功を建つる能はざる所以に非ざるなきか、大凡國家の大事を決するには往々にして輿論に逆行して斷せざるべからざることあり、伊公か軍備擴張を爲せる、陸奥伯の條約改正に於ける、小村侯のポートマス條約

に於ける皆な然らざるなし、吾人は加藤男に望を屬すること少ならず、彼れが黨首として又或は他日帝國の首相として大事に臨み時に輿論を無視する底の度胸を示すあらんことを希望するものなり。

加藤男は常に大勢の達觀に努め堂々たる長計大策を抱懷するが如きの觀あり、是れ原氏が多く臨機應變の態度に出づるが如きと對照して世間の人氣は寧ろ加藤男の利する所たらずんばあらず、然れども加藤男とても未だ曾て長計大策を發表して世間を指導したることあらず、蓋し其抱懷や必ず傾聽に價するものあらん、只だ彼れ世評を恐れて未だ發表せざるに由るか、加藤男が臨機應變的ならざるは往々小節に拘泥するの謂に外ならずして、爲めに一面彼れの世人に敬重せらるる所以なるも、餘りに其行動を合理ならしめんとするの結果竟に因循姑息に陷ることなきを得ず、原氏の臨機應變は時に甚だ見榮のなき感あれども時宜を制するの自由あり、但し彼れが今日の位地に鑑み國家の長計大策に思ひ沈むるに至らんことは吾人の期待する所なり。

斯くの如く原氏と加藤男と相對照し來れば、兩者能く相似て又た相反す、一長一短、眞に好個の取組に非ずとせず、但し原氏は已に百戰を經て、精練せる多數黨の首領たるも、加藤男は九十内外の小黨の總理にして、結黨後日淺く且つ黨中黨ありて、頗る統一節制を缺く、世人之を評して烏合の衆と云ふ必ずしも酷評に非ざるが如し、此所謂烏合を打て一團と爲し、更に他の小黨を吸收し又は多數黨の一角を破壞して之を收め、以て絶對多數を制し得るまでには最も多大の忍耐と勞力を要するは言を俟たず、加藤男にせよ將た他人にせよ今後政友會と對抗して天下を取らんと欲するものは必ずやこの忍耐と勞力を惜まざるの度胸なかるべからず、輕る〳〵しく烏合を以て精兵に接し萬一の奇勝を僥倖せんとするが如きは一時の欝散たるのみ、目前の小策隱謀に全力を奪はれ前途の大計を忘るるが如きは吾人その可なる所以を知らざるなり。

西洋文明の將來

五來素川

何か洋行土産をとの御談して、此樣な題を選んだ譯てありますが、「西洋文明の將來」と云ふと少し大き過ぎて、較や愚嚇しの嫌がある、然し自分は平生から、『人類の進歩發達を以て宇宙の終局目的なり』と確信して居るので、個人も國家も女も男も、其應分の道德的知識的努力に依つてたとへ無意識的なりとも此最大目的に向て貢献しつゝあるものと思つて居る、從て自分は洋行中文學を樂み、美術を愛し、亦專門である政治思想の歴史を研究しながらも、『文明の將來は如何なるものであるか』と樣の問題は之を目から離したとがなかつた、つまり之は平生から眞面目に考へて居る問題なので、別に愚を嚇す積りもなく、況や智者を驚かさうとの野心はさら〳〵ないので、然かもそれが亦洋行土産とする程の新しい議論であるかも甚だ疑問である。

一、西洋文明の危機

曾て伯林で或る日本人が懇意にして居る家族を訪ふと、家の妻君が種々の寫眞を出して見せた、其中に姉妹らしき二人の少女の肖像があつて、殊に其妹の方が大層美しい娘であつた、其日本人は其誰なるやを妻君に尋ねると、自分の姪であるといふ、年は何歳かときくと、姉は十七歳で妹は十四歳であるといふ、彼は戯れに妹の方に結婚したいから、一寸日本人に嫁く心持があるか如何か聞いて見て呉れと戯言をいふと、妻君は笑つて、では直ぐ話をして見ましやうと電話を掛けて呉れた、日本人は其對話を聞いて居る、『お前日本の方の所へお嫁に行く氣はないかい、なに、いやな事た

つて、困るねー、なにお金持かつて、そりや、東洋のロスチャイルドと云はれる方なんだよ、容貌が善いかつて、勿論てす、アポロ神にも劣らない美男子てす、ぢや考へて見やうつて、まあ現金な子ね！』と笑聲と共に電話は切れたといふことてある、此談は罪のない一場の戯れてはあるが、是れて西洋の娘達の結婚の理想なるものが分る、然かも是が十四歳の小娘の詞なので尚ほ飾らない所に味がある、彼等の第一の望は金持の夫を持たうと云ふことてある、若い娘の心には先づ容貌の方から尋ねて善い譯てある、然し彼は先づ金の有無を聞いて、それから容貌の美醜に及んだ、是が普通の西洋人氣質て、自分の以て西洋文明の危機となすのは此點てある、今日我國の娘達に一人の金持の息子と、手腕のある青年の何れに嫁入るやを選ましめたならば十中の八九は後者を取るてあらう、是が西洋人と日本人との氣質の大きに違ふ所てある、西洋今日の普通の人情は、唯金さへあれば善いと云ふことになつて居る、此事實は社會の各方面に顯はれる、佛國あたりては、普通に理性的結婚といふて、愛情もないのに唯金丈けの點を考へて、親達が其子の配偶を求めるのが普通てある、そして、親が死ねば子供に遺産を平分するのてあるから、娘も亦相當の財産があるので、つまり結婚と云ふのは、此財産の釣合つた二人の男女の寄り合ひだといふことになつて居る、中には戀愛結婚もあるが、それは金のある男が貧しい美人を愛し、女は其金丈けを當てにして嫁入るといふ位が關の山て、中には金持ちな七十の老人が、十七八歳の孫の様な女と婚する奇談もある、從て結婚後に起る所の弊風の如きものも多い譯てある。

此に於て西洋人は何の爲めに此の如く金を欲しがるかと云ふ問題に逢着せざるを得ない、誰でも金があつて惡いことはない、いくら日本人だとて矢張り金は欲しいに極つて居る、然し西洋人の欲がり方が、日本人よりは更に甚しいのてある、其原因は種々あらう、其家族組織が個人主義て、親子兄弟の間にも、容易に金錢の補助とか貸借とかが行はれ難い、つまり金錢問題

は死活問題で、日本の樣に、困つたら親族の厄介になれると云ふ譯に行かない所も一つの原因であらう、然しそれよりも尚ほ大なる原因は、つまり西洋人と日本人との人生に對する考の相違にある、何を以て尤も人生の最大幸福となすやの差違にあると思ふ。

佛國の南部にニースと云ふ町がある、凡て此地方一體は冬中快晴續きの温い所で、其濃き藍の海の色から此海岸一面マルセーユより以太利境迄をコート、ダヂユール(瑠璃の浦邊)と稱して、風景の美事なことで有名である、自分の此處に行つたのは春先きのことであつた、雪を戴けるアルプスの連峯後に迫つて白く、橄欖樹、橙子の綠滴る許りなる間に、ミモザの花の山吹き色に亂れ咲き、空も海も藍色に澄み渡つて、ニースの町の燦然たる白堊粉壁と相映ずる有樣は實に地上の天國を叫ばしめたのである、自分は未だ生れてから此くの如き美景に接したことがなかつた、であるから、此地方一體は世界の樂園と稱せられて、毎年冬の季節(十月より四月迄)に集る人間の數は百萬を以て數ふ可く、歐洲大陸は勿論南北アメリカからもやつて來る、歡樂に飽きて居る巴里子でも、氣の利いたものは冬の二三ヶ月を必ず此地で暮す、即ち本當の金持の集合地で、其贅澤さと云つたら遙に巴里以上である、彼の有名な世界の賭博場たるモナコも亦此の地方にある、が其中心地は即ち此ニースである、ニースの町に二つのカヂノと云つて人の集會場がある、入場料を取つて二三萬人の人が一日遊び暮らす珈琲店の如きものである、其中には演劇やら、舞踏やら、種々の娛樂場があるが、尤も驚くべきは、其四方數町に亘る大建物の中央が、一つの大きなホールになつて居て、其處に丸い食卓と椅子が並べてあつて、其處に二三萬人の男女が毎日來て、腰を掛けて、珈琲を飲んだり、煙草を喫つたり、よもやまの世間話しをしたり、つまり安ケラ閑として、暮す樣に仕組んである、彼等に何が面白いかと尋ねたならば、唯此樣して何もせずに遊んで暮すのが、人間無上の快樂であると答へるであらう、是が人生最極の理想であると答辯するてあらう、つまり無爲

遊食が彼等の天國であるのである。

　無爲遊食といふときには、つまり自分を害する丈けて、他人には迷惑を及ぼさぬ譯であるが、孔子の所謂る『小人閑居すれば不善を爲す』て、心理學上から云つても、人間は一定の精力を消耗させる必要があるのて、此精力の消耗は富裕な閑散な人に取つては所謂る感動といふ形に依て行はるゝ、彼の芝居を見て泣き、賭博をして勝つか負けるかといふ感動に依て快樂を取り、骨董に耽り、美術を愛し、遂に色を漁するに到る必竟是れ皆感動に依て其精力を消耗させる必要から來たものである、てあるから忙しい生活をして居るものは割合に健全なので、其精力消耗の必要のある閑散な富裕の人物が、つまり尤も罪惡に陷り易き次第て、『小人閑居すれば不善を爲す』とは此眞理を云ひ現したものである、てあるから、是等無爲遊食の徒の集合して居る所には必ず罪惡が行はれ、此に風俗頽廢と云ふ結果を來す。

　今日歐洲の金持と云ふものは大抵其財產て株や公債を買ひ、其配當や利息て食つて居る、從て佛語の金持と云ふ詞と、公債所持人と云ふ詞は同一の意味となる、從て金持は必ず無爲遊食の人であり、さまでの金持てなくても、少し金が出來れば、直に働くことを止めて細くも利息て食ふことを考へるのが、歐洲人の習慣て、つまり飲食を節して質屋金貸しを理想とする京都人に類似して居る、此風は佛國人に尤も甚だしい、それは唯佛國が歐洲の先進國、文明の中心たるが爲めて、他の國民は之を夢想して未だ之に達し得ないのである、てあるから今日の歐米人はつまり無爲遊食、即ち閑居して不善を爲し得ることを、理想として居るのて、無爲遊食主義は即ち一轉すれば物質的享樂主義と同一義となる。

　此くの如き無爲遊食主義は、幸に日本にはない風習て、我國ては大抵の金持は矢張一定の勞働をすることが習慣になつて居る、彼の大地主ても其所有地を賃貸する外に、必ず別に自ら一定の土地を耕すことが習慣て大實業家の息子ても一寸銀行位に勤めなければ恥の樣

に思つて居る、此くの如く勞働を尊んで、無爲遊食を賤む日本の風は、寔に善いことて是非保存せねばならぬ所てある。

此くの如き西洋文明の物質的享樂主義は非常なる勢を以て擴張して居るので、その弊害は社會各方面に顯はれて居る、其最も著しきものは人口の減少てある、つまり自分等が安樂な生活をするには、成る可く子供を生まぬ樣にしやうと勉めることになるのてある、是は佛國許りてなく、獨逸ても大都會には皆此傾向を示して居る、若し此儘で物質的享樂主義が發達したならは世界の人口は絶滅に歸するであらうと思はれる、自分が歐洲文明の危機を叫ぶのは此點にある。

二、大陸文明と英米文明

人は動もすれば西洋文明を羅甸人種の文明と、日耳曼人種の文明とに分類するものがある、亦舊教文明、新教文明と分つものがある、成る程英米文明は日耳曼人種の文明て、且つ新教文明たるに相違ないけれども、大陸文明は悉く舊教文明、羅甸人種の文明てはない、彼の獨逸の如き露西亞の如きものは、舊教國てもなく、羅甸人種てもないが、矢張り大陸文明に屬するのてある。

大陸文明の特色とする所は其知識的藝術的たる所にあつて、英米文明の特長は其道德的宗敎的たる所にある、前者は理論的、抽象的て、後者は實際的、具體的てある、前者は智的て、後者は意的てある、前者は重に希臘文明の衣鉢を傳へたもので、後者は重に基督敎的文明の感化を受けたものてある。若し前者が文明の進步、發達といふ方面に貢献する所があれば、後者は即ち文明の保存といふ方に盡して居る、前者は急激な變化をするに反して、後者は漸進的てある、そしていふ迄もなく大陸文明の先進國は佛蘭西て、英米文明の指導者は英國てある。

此英佛の兩國は啻に二百年來政治上の仇敵たりしのみならず、亦互に其特色の文明を有して措抗相下らなかつた、哲學上に於て、英のベーコンから始まつた實

驗的傾向が、ロック、ヒユーム に發達し、ミル、スペンサーに完成したのは、實に英國人の實際的頭腦を證明して居る、之に反して佛のデカルトから出た合理派の哲學は、獨逸にライプニッツを起し、カント、ヘーゲル等を誘ふて大陸文明の理論的系統的の傾向を表示して居る、政治上に於ては、習慣的に發生成長した議會政治は、英國人の實際的頭腦の產物であるが、是がヴオルテールや、モンテスキユーに由て佛國に輸入せられ、忽ち理論的、抽象的形狀を取て三權分立論となり、遂に佛國革命の純理政治に實現せられて、全歐洲否世界に傳播せらるゝに到つた、然し英國は此くの加き急進的、抽象的な形を僻けて、成る可く漸進的、實際的な方法に由て、代議政體を行つて居る、美術上に於ては世界を風靡せる佛國の藝術が『藝術は藝術の爲めに存在す』と稱して、文藝の獨立を唱ふるに反し、英國はホガースの昔しから、ホーマン、ハントや、ワッツや、ラスキンや、皆藝術を以て說敎せんとし、乃ち文藝を道德の用に供する傾向がある、是れ佛國人の理論的知識的なると英國人の實際的道德的なる傾向を證明する、文學に於ても同樣で、英國の作品には、ヂョーヂ、エリヨットでも、ヂッケンスでも、悉く宗敎的道德的暗流が、其華かな文字の下に流れて居るに反し、佛國のはゾラでもモーパッサンでも大家と名るものは、常に道德的宗敎的傾向に反動しやうとして居る、乃ち英人は如何にしても意的で佛人は到底智的である。

日本に居て考へると、大陸で最も學問の發達して居る文明の先進國は獨逸で、佛國は唯遊覽に適して居る歡樂國で、學術等には何等の貢献をして居ない樣に思はるゝ、是は大なる謬見で、大陸で最も廣く學藝の上に師匠の役を勉めて居るのは佛國である、一體獨逸と云ふ國は新しい國で十八世紀の初め迄は、獨逸語で哲學を講じ、又は書くことが出來ないことになつて居て、大學の講義も著書も羅甸語か佛語でやつた位であつた、それが漸く獨逸語が學術的に用ゐらるゝに到つたのは、十八世紀中葉からで、それが完全の詞として

文學上の著述も出來る樣になつたのは、クロプストック、レッシング、ゲーテ以來である、從て、其學問の有樣の幼稚であつたことは十八世紀中葉フリドリッヒ大王の伯林學士院（アカデミー、ドベルリン）を建てた時も、其院長は無論のこと其會員も大部分は佛人で、會議は何時も佛語でやつた位であつた、それが漸く學問の發達して來たのは十九世紀になつてからで、從て其根柢に於て獨逸人は如何にしても佛人の弟子である、此事實は亦獨逸語を研究すれば直ぐに分る、獨逸語の殆んど三分一位は佛語が混じて居ることと宛も我が國語に漢語の混ぜるが如くてある、然かも構成的獨逸語の中には佛語の思想を以て組み立てたものが甚だ多い、要するに獨逸人の思想の半ばは佛人の感化に依つて成立つて居る、即ち獨逸人は到底佛人の弟子である。

是は歷史的に於て然るのみならず其佛獨の學風を比較すると其益然るを發見するのである。元來佛人は凡て獨創の見に富み、奇想常に天外より落るものがある從て今日學問上の新發見は多く、佛人の手に依て成さるゝのである、唯此佛人の新發見に系統を立てたり、應用したり、乃ち之を完成するのは獨逸人である、是は佛人が飽き易くて、獨逸人が執着力があるからには相違ないが佛人が指圖して、獨逸人が下働きをすると云ふ傾きは到底免れない、つまり佛人が師匠で、獨逸人が弟子であると云ふ關係になる、是は決して學問上許りでなく、美術の上やら、文學の上やら、流行の上やら、社交の禮式の上やら、凡ての點に付いて、獨逸人は出來るならば佛人の如き粹（レファイン）になりたいと考へて居るが、未だ之に追ひ付くことは到底出來ない、巴里と伯林の差は宛も町と田舍の如きものがあるので、凡て獨逸人は佛人の跡を追ふといふ有樣である、何でも巴里にあつたことは直ぐに伯林に反響がある、流行が一つ巴里に出れば、翌日は最早や伯林に來る、巴里に一劇曲が出れば伯林で直ぐに之を譯して演ずると云ふ有樣である、獨逸人は政治上では佛人を輕んじて居るが知識的には其學問に關しても藝術に關しても佛人を尊敬して止まない。

素より日本の留學生等が佛人を輕んじて、獨逸人を重ずるには一つの理由がある、それは獨逸の大學等の講義は毎年同じ教科書的講義をして居るから、丁度日本人が行つて聞くのに適した程度である、然るに佛國大學の講義は法科大學の外は、大抵毎年教授が異つた研究を公にするて其講義の程度が餘程高い、是は佛國の中等教育の程度の甚だ獨逸に比して高いのを證明するので、日本の留學生等には佛國の大學の講義は少し程度が高か過ぎて換言すれば、餘りに講義が特別過ぎて、解り兼ねると云ふ傾きがある、是が日本の留學生の獨の學問を稱して、佛のそれを賛(ほ)めない一の原因てある。

此くの如く獨逸文明は佛國文明の一分派たるに過ぎないが、露國も亦然りて、其事實は露國の上流社會ては、其子供が四五歳から佛語を學び始めるとて分る、てあるから、露國人の教育あるものは、佛語を佛人の如く語るのが普通てある、其結果として露都聖彼得(セントピーター)堡(スボルグ)には、帝室所管の佛國劇丈けの劇場がある、之をテーアトル、ミシエルと云ふ、即ち露民の大部が佛語を解する證據である、由來露國が佛國文明を輸入し始めたのは、十八世紀の始めピーター大帝が學士院を立てた以來の事實て、カテリン二世の如き亦盛に佛國の文學者、哲學者を優遇した、要するに露國は亦大陸文明の覇者たる佛國文明の子分たるに過ぎない、亦彼の以、西、葡、南米諸國の如き羅甸種の國民が佛國文明の崇拜者たるは云ふを俟たぬ。

此くの如くにして大陸文明なるものは必竟佛國文明てある、此文明の特長は重に希臘文明の傾向の勝つて居る所にある、讀者の既に知る如く、歐洲文明は其淵源希臘、羅馬、基督教の三文明にありとは、佛のギゾーの論ずる所て、其の中希臘文明は歐洲人今日の智力的、藝術的方面に多大の貢献をなして居る、抑も希臘文明の精神は人類本位主義にあるので、此點は基督教殊に中世基督教の神靈本位主義と相反して居る、此人類本位主義は曾て希臘、羅馬に文明の華を咲せたが、羅馬の末期に於て淫逸放肆の風を煽り、遂に同帝國の

瓦解をすら招かしむるに至つた、人類本位主義の人生を喜び、人體美を愛する等の精神は、甚だ美しく男らしい者に相違ないが、是丈けては一種の淫逸放肆に陷らしむる危險性を俱へて居る、其缺點を補つて、人生の森嚴なる意義を敎へ人をして反省自警せしむるものは、基督敎文明である、此兩者の特色を尤も巧みに描寫したるものはシンキウイッチの小說コーヴアヂス（何處へ行く）て、（讀賣新聞社員松本雲舟氏譯）篇中羅馬の文人的政治家ペトローンに依て顯はされたる快樂主義(エピキユリヤ)的生活は則ち希臘文明を代表したもので、高潔なる美人リヂアに依て顯はされたる信仰的生活は則ち基督敎文明を代表したものである、此兩者の調和は則ち歐洲文明の理想であるが、常に其兩者の一に傾き過ぎるのは歷史上屢見たる事實であつた、例へば羅馬帝國の瓦解を承けた中世文明は、其亡した肉欲的快樂主義に反動して、極端なる基督敎的制欲主義に陷り、一方に僧侶が思想の自由を壓迫して所謂る中世の暗黑時代なるものを形成した、此神靈本位主義に反動して希臘、羅馬の人類本位主義を復活せしめたるものは則ち文藝復興(ルネサンス)期の事業で、彼等の理想は嚴格なる基督敎と快活淸朗なる希臘趣味とを尤も完全に調和せしめんことにあつた、其尤も成功したるものは、美術界てはラッフアエルて、文學界てはシエクスピーアである、彼の新敎の如きも、必竟宗敎界に於ける人類本位主義の發現に外ならぬ。

所が時代を經るに從ひ、佛國の如き國では、舊敎の思想抑壓に對する反動益々強く、希臘文明餘りに基督敎文明を蹂躪し過ぎて、肉欲的快樂主義的傾向のみ發達し、森嚴なる基督敎的精神が日一日に消滅しつゝある有樣となつた、是れ羅馬滅亡當時の有樣に立ち還るもので、世は將に到る所、ペトローンを以て滿されんとしつゝあるのである、**要するに佛國を中心とせる大陸文明は即ち知識的なる點に於て、其快樂主義的なる點に於て明に希臘文明の衣鉢を傳ふるもの、吾人の西洋文明の危機を叫べるは必竟此傾向の弊害を指摘したものである。**

尙少し具體的に此基督敎的文明と希臘文明との特質を說明しやうと思へば、西洋婦人の服裝に於てするに如くはないのである、一體身體の全部を被ふと云ふことは、西洋服の特色で、其由て來る所は即ち『女を見て惡しき心を起したるものは既に姦淫したるなり』といふ基督敎の嚴格なる敎訓に本くものに相違ない、然るに若し夜會とか舞踏會とかになると西洋婦人位其肌を見せるものはなく、大抵胸から脊中に掛けて兩腕迄之を露はすといふことが習慣になつて居る、此矛盾は何處から來て居るかと云ふに、乃ち裸體を惡む基督敎文明と裸體美を愛する希臘文明との爭ひを表示して居る、平生の理性的な生活に於ては前者が勝ちを制するけれども、御祭騷ぎになると後者が勝利を占める、婦人の身體の上には一つの文明の戰爭が行はれ、互に其領分を爭ふて居るものと解することが出來る。

此爭ひは婦人の身體上のみならず、國の上にも行はれ、佛國の如きは裸體美を愛することに何の制限もないけれど、新敎國では一般に此風が少なく、殊に英國に於て然りである。是は該國に基督敎文明の尤も勝利を占めて居る爲めである。

英國人が如何に宗敎的であるかは今更此に縷述する必要はないが、其實際を見ると更に驚かるゝものがある、自分は曾て佛國から海を越えて英國に行つたことがある、英國に着いて汽車で倫敦迄行かうと思つて、或る客車に腰を下すと、一人の佛國の女が自分の側に腰を掛けた、それは一見して醜業婦が、自分を善き獲物と心得て附狙つて居ると云ふことが分る、然るに自分の正面に一人の英國紳士が腰を掛けて居た、年頃五十前後の質素な仕度をした人で、先づ田舍の紳士とでも云ふべきものであつた、今醜業婦がわざと自分の傍に座を占めたのを見て、自分に向て『貴君此處へお掛けない』と云ひ乍ら彼れの側の空席を示して自分を招いた、自分は云ふが儘に紳士の側に座した、すると醜業婦は顏を赤くして立ち去つた、此一談は如何に英人が人間の靈性と云ふことに注意して居るかを示す、彼れの眼には一人の東洋人が、惡魔に見込まれて追ひ掛

けられて居る、彼の靈(たましひ)は如何になるであらうか、其行方は覺束なきことであると思ふ一種の高尙なる同情て、苟も靈性の奮鬪に經驗のある者の皆淚を揮ふべき問題である、是が佛人であつたなら、『はゝあ、あの東洋人醜業婦に追廻はされて居るな、今に引き掛らずには居るまい』位のことで、面白半分に見物して居るであらう、此樣な所に英佛人の差違はある、男女の關係の失敗に無頓着なのは佛國人で、此點に極て神經の鋭いのは英人である、如何にして此の如き差違のある國民が、一葦帶水の間に相並んで存在し得たかと餘程不可思議なことである。

佛國人の如き無頓着は是れ羅甸民族一般の通有性で男女關係の嚴格なことは英米人に通じた性質である、此事實は明に南北亞米利加で證明することが出來る、南亞米利加及びメキシコ國等の羅甸系の殖民地では、白人種は土人又は黑人と雜婚して今日の如き半白人種を形成したが、合衆國及び加奈多では、此事なくして白人は白人、黑人は黑人として今日に傳はつた、合衆國民今日の元氣と隆盛とは即ち此嚴格な道德思想に本いて居るとは英のフイツシヤーが『英國膨脹論』で論じて居る所である、此の如き米人の美風がピユーリタニズムの結果たるは云ふ迄もなく、其來る所全く基督敎的文明の所產である、幸にして東洋は英米文明の勢力範圍で、この點に於ては英米の感化の我國に及ばんことを切に希望に堪えぬ次第である。

要するに大陸文明と、英米文明の間には、一の深き溝渠のあることを忘れてはならない、此故にたとへ吾人は大陸文明に對して危機を叫ぶも、英米文明の特色の存する限り較や意を强うするに足る次第である。

三、西洋文明と東洋文明

此所で吾々は、西洋文明の危機が思想上何處から起るかと云ふ問題を研究して見たい、云ふ迄もなく西洋文明に危機があるならば、東洋文明にも亦危機がある若し西洋文明が滅亡することがあるならば、東洋文明も亦滅亡し得る危險がある、滅亡といふことは同一で

も、其危機の性質は同一でない、其兩洋文明の危機の比較が即ち此章の内容である。

自分の考では、一體西洋人の倫理思想は幸福といふことが基礎となつて居る、『アリストートル』以來の道徳の目的は眞正の幸福を求むるにあるといふ議論は、實に西洋人全體の精神を云ひ顯はしたものではあるまいか、彼のエピキユリアンは無論のこと、我が武士道に似て居ると稱せらるゝ「ストイック」さへも、其難行苦行の目的は内心の幸福にある、彼の十八世紀を風靡した合理派の幸福說及び英の經驗派の倫理說の如き遂にベンザムの所謂最大多數の最大幸福位が落ちである、彼の基督教すらもヽ神を喜び樂むといふ方より見れば、アリストートルのコンテンプレーションと同一義に歸するけれども、基督教の根本倫理は、我れ神を愛するが故に、我神の欲することをなさんといふ義に本くので幸福主義ではない、兎に角にも幸福追求といふことは西洋倫理說に殆んど共通の性質で、白人全般を通じての根本資質ではあるまいか若し然りとすれば幸福と云ふことは快樂と云ふ思想と近接して居るから動もすれば物質的意義に陷り易い、或る哲學者の如きは、『幸福とは恒久の快樂なり』とさへ定義して居る位である。

亦西洋人の思想で幸福と云ふ考と密接して居るものは自由といふ考である、即ち彼等は自由を以て最上の幸福として居る、そして自由といふことは、したいことをすることが出來るといふ考で、是を以て人生無上の幸福とするのである、此爲たいことをするのを人生最大の幸福とすると云ふ點から云へば、金といふものが直に幸福の要素となるのは云ふ迄もない、是が大方彼等の墮落の根本的心理ではあるまいか、ヘーゲルの如き哲學者すら『眞正なる自由は乃ち所有權の伴つたものである』といふて居て、是が近世國家社會主義の出發點と認められて居るのである

素より此爲たいことを爲るのが自由であるといふ考には異論がある。或る哲學者は『爲たいことをするのが眞正の自由ではなく、なさゞる可らざることを爲す

力を有するのが自由である』と云ふて居る、此考方は宗教家の所謂る精神的自由の義で、此論法を敷衍して彼は『賢明なる主君の下に壓制せらるゝのは、好きなことを爲し得る自由よりは自分に取つては遙に幸福である』といふて居る、此所迄來ると最早や、東洋的の考方である。

東洋人は理性乃ち社會的秩序の命ずる所に從ふことを以て、最高の義務と心得、亦幸福として居る、否幸福でなくとも是非此義務を果さねばならぬことゝして居る、支那人の女が足を小さくされて、常に墻壁の間に閉ぢ込められて、滿足して居るのも、つまり貞節といふ社會の秩序に對する義務かゝてある、東洋人に大切なのは此社會的秩序に殉するの精神て、此秩序といふ結果を收むる爲めには、壓制も甘ずるに至るのである、畢竟修身も齊家も天下を平かにするといふ手段となるのである、若し西洋人に日本の婦人は家庭の秩序の爲めに三從の敎を守つて居ると談るならば、彼等は甚しい不人道の極て、殘忍な制度であると評するてあらう此評言は即ち人類を以て幸福を享受すべき權利あるものとの確信から出發して居るので、從て社會の秩序といふ東洋道德の根本義からは此殘酷事は少しも怪むに足りぬ次第となる。

であるから西洋は人類を幸福ならしめやうと云ふ目的で、社會が組織されてあり、東洋は社會の秩序を保たさせやうと云ふ目的から社會が組織されてある、從て西洋文明の危機は幸福主義の弊たる物質的快樂主義より來り、東洋文明の危機は極端に社會の秩序を保たせやうとする點から來る、後者の最も甚しきは神政治て社會の人心迄も國敎て統一しやうといふ考が、遂に各人の思想の自由を束縛し、遂に文明の進歩を阻害するに到ることと印度、支那の如きものてある、從て西洋の滅亡は極端なる自由より來り、東洋の滅亡は極端なる不自由より來るといふことが出來ると思ふ、眞理は乃ち其中間になければならぬ。

四、結論

此くの如く若し幸福主義の道德觀念から出發した唯物的享樂主義が歐洲の天地に旺溢して居るとすれば、西洋文明は最早や望なしやといふ疑問に逢着する、是に對しては、自分は必ずしも然らずと答ふるものである、其理由は此澎湃たる物質的濁浪の下に、尖張り一條の清泉が滾々として流れて居る、此千里の野を燎かんとする惡魔の火の手に對して、絕えず之を食ひ止めやうとして爭ふて居る消防夫がある、それは基督敎である、基督敎の他愛主義は、歐洲人の私欲心に抵抗して居る、其純潔なる貞操心は、家族の瓦解を防ぎ止めて居る、其崇高なる神靈主義(スピリチュアリズム)は唯物的精神を攻擊して居る、然かも徒に義務一點張りにあらずして、一種の慰安を群集に與へて居る、此の如き傾向の尤も著しきは英米兩國で、是は既に第二節に於て吾人の詳論したる通りである。

人或は余を難じて云はん、今や基督敎々勢の衰頽は歐洲一般の大勢ではないか、然かも尙ほ斯敎を以て此猛烈なる唯物的洪水に對抗し得るものとするは、宛も一木を以て大厦の倒れんとするを支へんとするものに似て居る、是れ事實を誣ゆるの甚しきものであると。

余は之に對して答へて云はん、今日基督敎は較や衰頽の外觀があるのは事實である、されど是等は現時の基督敎會の成せる過より來る自然の懲罰で、基督敎の本質其物は何等の手傷を負ふて居ない、佛國の敎會、國家分離問題は唯從來の十三世紀を黃金時代として、保守一點張りに傾ける舊敎徒に對する適當の懲罰である、獨逸の宗敎衰頽は牧師を官吏として之に俸給を支給しつゝあるより、神聖なる敎職を衣食の道と心得えて就職する腐敗牧師の罪である、西、以、各國の現狀は概ね右の二原因の中を出でない、獨り英國の自由敎會は熱心なる信者の活動依然として衰ふる所なく、益々傳道者を支那や亞弗利加に送つて居る、其慈善事業の如き倫敦に於て三千の上に達し、英國全體としては一の障害を成すの有樣で、自分の實見した所では、救ふ者多きに過ぎて救はるゝもの足らざるの感がある、若し歐洲全體が英國の如き精神情態にあつたならば、西

洋文明の前途決して憂るに足らんのである。

然らば大陸は最早や救ふ可らずであるか、吾人は之を信じない、何となれば基督教といふ宗教其物の性質は一時衰頽しても急に一瀉千里の勢を以て恢復する特性を有して居るからである、曾て十八世紀の歐洲各國の腐敗は甚しいものであつた、英國の如きは佛國より尙ほ甚しい有様であつた、然るに英に一ウエスレー起り、獨に一スペネル立つたが爲めに、遂にリヴアイヴアル的宗教の復興來り、啻に英獨の精神界が恢復された許りでなく、佛國の十九世紀初頭の那翁沒落以後の如き宗教熱の勃興を見て、十八世紀の唯物的革命的傾向は忘れられた様になつた、要するに基督教は感情的性質に富むが故に、其勃興の機一たび來れば乃ち天地を掩ふの勢となる、而して此勃興は唯一大宗教的人物の顯出といふこと丈けで充分である。

如何なる文明に立てる國民でも、自己の社會保存の心は皆之を有して居るもので、其公共心が全く滅絶せざる限り、若し文明の腐敗が甚しくて、社會の敗滅が爭はれないと云ふときになれば、必ずや一大人物が顯出して之を救はんとするもので、社會も亦喜んで之を迎ふるものである、今日の歐洲人の道德情態はたとへ物質的享樂の風は盛んでも、一方には公德即ち公共心の觀念や、信用を重んずる觀念が遙に我國民以上に發達して居る、我國でも若し其社會組織が西洋の様であつたなら、其物質的享樂の風は更に大なるものがあるかも知れない、要するに自分は歐洲人が大宗教家を産する能はず、亦之が産出しても之を歡迎し能はざる程に腐敗せりとは思ふことが出來ない。

此くの如くにして、歐洲文明は將來永く繼續するであらう其文明の進步發達と云ふ方面からは重に希臘の智的文明が活動し、其發達して行く文明の瓦解を救ひ之を保存して行く方面には基督教の意的文明が活動し此くの如くにして世界人類は其發展向上の最終目的を達することが出來るであらうと思はれる。(完)

政界未來記

古稀政客

政界の推移と云ふものは餘程奇體なものである。私は舊幕の遺臣であつて、當年取つて七十歲の老翁であるから、丁度物心を覺えてから六十年間の時勢の變遷——卽ち所謂將軍政治から憲法政治になつた實に面白き活歷史の中に生活することが出來たので、私は密かに自分の一生程幸福なものはないと思つて居る。此頃の世の中には、最早幕末の形勢、將軍政治の亡びんとする時分の形勢を面のあたりに見た人は極めて少ないだらうと思ふが、丁度其頃の權勢の推移して行く有樣と、此頃の勢力の消長して行く有樣とは、餘程よく似た所があるやうに見える。いふまでもなく幕府の勢力と云ふものは如何にも宏大なるものであつて、所謂將軍政治の御威光と云ふものには何人も敵することの出來ぬものと思はれて居つたのであるが、それが唯伏見の一擧で忽ち脆くも其威力を失墜して仕舞つて、幕府はとう〳〵倒されたのである。此幕府の倒れる前年に阪本龍馬と云ふ先生が書いた政治の意見書と云ふものがある。其意見書には未だ翌年の一月に幕府の倒れると云ふ事は固より夢にも思れなんだ事で、まだ〳〵將軍の威力を可なり大きなものに認めて居つたのである。それ故に此人の書いた政體の改革書には太政大臣に宮樣を戴き、さうして左右大臣には三條と慶喜公とを用ゐ、さうして岩倉大納言、大久保、木戶、西鄉等を參與にして、さうして國を治めて行かうと云ふ事を書いた位である。是が其當時の最も政界の事情に通じて居つた所の豪傑の一人の阪本龍馬の意見書である。而かも此意見書を書いて僅かに半年になるやならざるに伏見の一戰で最早將軍が亡びて仕舞つたのである。斯

うして見ると勢力の失墜と云ふものは誠に急轉直下に來るやうてあるが、然し靜に考へて見ると實は急轉直下てなくして必ず其由來する所があるのてある。若し幕府の此勢力失墜の次第を考へて見るならば、遠い所は暫く措き、中山大納言の東下り、それから其次は將軍上洛、更に長州征伐て幕府の兵と云ふものは實に力がないと云ふことを天下に思はしめた譯てある。こう云うやうに浪人の勢力と朝廷の勢力が一歩々々進んて來て居つた事は明かてあるが、然し尙ほ豪傑の坂本と雖も幕府が伏見の一擧に倒れる其半年前まてはそれ程勢力のないものと認める事は出來なかつた。それて王政維新になつて、尙ほ幕府の殘黨が上野に立籠り、若くは會津に立籠つたりしたが、遂に五稜廓の落城て以て此幕末の一段落が着いたやうな次第てある。

幕府を倒した主力といふものは、いふまでもなく薩長てあるからして、維新後此薩長の勢力と云ふものが極めて宏大なるものになり、其薩長の首領株のものは元老と云ふものになつて、明治の長い間を薩長の勢力て以て押し通した。現に一昨年の政變までも所謂元老なるものは當時の政府を妨げるやうな口出をしたりして騷いて居つた。而して又此元老を利用して頻りに自分の政權爭奪の用に供しやうと思つた者も多かつたのてある。併しながら一昨年から昨年の春に掛けて、彼の一大政變の結果、元老の金箔と云ふものは全く剝落して仕舞つて、先づ謂ふ所の長州の一部の勢力は失墜したやうに見える。是れ即ち藩閥の勢力の失墜といふべきてある。此藩閥の勢力の失墜と云ふものも、豪い急轉直下に來たやうてあるけれども、是れ又靜に考へると其由つて來る所が餘程久しいのてある。若し遠い話を言へば薩長の勢力に抵抗して板垣伯等の民選議員の建白から漸次に進んて來て、國會開設の請願となり其結果は憲法發布の詔となり、此間に著々として問題のある每に所謂デモクラシーと云ふやつが勝を得て來て、遂に昨年の政變に依つて殆んど藩閥の勢力を絶滅したのてある。其有樣は恰度幕府の權力の段々失墜したのと同じやうに思はれる。

一體深く考へて見るに國の興ると云ふ時は餘程不思議なもので、上には明君があり、下には名臣賢臣が集つて來るのであるが、丁度御維新の時に所謂將軍政治を亡ぼして新政を築き上げた時がそれである。申す迄もなく明天子が上に在まして、さうして名臣が蜘蛛の巣の如く集つて來て居るが、斯う云ふ時代には苟もした事でも想ひの外に成功して居るのである。彼の有名な御誓文と云ふ五大政綱と云ふものは、一體誰が書いたかと云ふと、由利公正と云ふ人が書たのであるが其の由利公正と云ふ人はどう云ふ人物で、どういふ學問があつて、さうしてどう云ふ理論からあゝ云ふものを考へ出して書いたかと云ふと、別に深き學問、深き理想があつて書いたのでなく、唯公議は輿論に決しなければならぬ、又政は公明正大にしなければならぬと云ふやうな、世界的歐米の政治の一端を横井小楠から講釋を聞いたことがあつたと云ふ位の人である。それを筆を執つて書く時にふと思ふて書いたのが御誓文であるのである。あの中にある公議輿論に決すると云ふことでも、恐らく今日のやうな輿論でなく、唯先づ諸侯に相談するといふ位の輿論で、國民全體を眼中に置いた輿論ではなかつたのであらう。さういふ心持で苟且に書いたのであるけれども、あの五ヶ條は日本の歷史關係に於て、千載拔くべからざる基礎をなして居るのである。それから更に明治七八年頃には元老院を置かれ、大審院を置き、立法、行政、司法の三大權を分立して政治をすると云ふことの詔勅も、詰りあれが原因となつて出て來て、其後十何年か經つてからの府縣會の組織なども矢張りあの御誓文から流れ出て、更に憲法發布の詔勅となつて來たのである。一つの例を擧げても其樣なもので、氣運が勃興に向つて居る時には、苟且に考へて着手した仕事でも始終思ふたよりも、多くの結果を納めて居る、御維新の時の仕事が、丁度其の標本と思ふが、人の家の興る時もそれと同樣てある。例へば一萬圓儲けやうと思つて企てた商賣が、一萬圓儲かつた丈けならば、迚も大きな商賣人にはなれぬ。それと同じことで豫て企てた事がより以上の結果

を始終納めて行く時には國も興るのである、家も興るのである。だから御維新の時には苟も政治に關係した者は一人でも成功せぬものはなかつた。

それに反して大正の元年八月一日と云ふ日から政治に關係した人が一人として、より以上の成功をした者はないのである。政治に關した大小の人は悉く先づ失敗に終つたやうだ。唯其中で山本總理大臣のみが、横合から何時の間にか飛出して來て、內閣を組織されて、さうして先づ着々と色々な仕事をして居られると云ふ事は、實に幸運な人で誠に例外の人で、誠に目出度い人であると私は思つて居つたのであつたが、測らざりき、又海軍の收賄問題と云ふものに出逢つて、先生は今頻りに苦しみつゝある。同時に是れと組合つて行く所の政友會なる大勢力の政黨も、何だか此瀨戸を如何に乘越して宜いかと云ふことで甚だ苦心の體。例へば海上で風波に遭ひつゝ漂ふて居る船の如く、今吾々の眼に映ずるのである。それで今日の形勢は山本內閣が如何に此風波を乘切るか、此政友丸と云ふ船は山本總理を乘せて如何に航海しつゝ行くかと云ふとが、現在に於ける一つの興味ある問題になつて居るので、此七十になる老人さへも多大の趣味を以つて見て居るのである。乃で是がどうなるかと云ふことは甚だ面白い問題である故、試に私は古き經驗に依つて、此前途を一つ觀察して、さうして未來記のやうな夢物語をして見たいと思ふ、是は老後の樂みに閑にあかして言うて見やうと思ふ。

吾々は無論時勢も違ひ、時代も違ひ、是等の當世の政治家達に交はる機會もなき故、其人々の性格も一向知らぬのである、從つて其技倆も知らぬのであるが、去りながら新聞などに現はれ、又よく屢々人に聞く所によつて先づ人々の性格手腕を假定して考へて見れば、此山本首相と云ふ人は一に政友會と云ふ大なる勢力に依つて政界に立つて居る人である。又政友會と云ふものを率ゐて居る原と云ふ人は、此大なる勢力に依つて彼を擁護し、さうして自分の力とし、且つ將來來るべき素地を之に依て作らうと企てつゝあるやうに見える。

豫て輿論てありし所の、行政の整理なども相當に出來て、財政の都合、豫算組織の上にも近來稀なる便利な狀態てある故に、今年の議會こそは極めて無事平穩に行くのてあらうと思つて居つたのてある。所が圖らずも海軍の收賄問題と云ふものが起つて、此爲に其政友會の航路には一大風波を見るに至つたのてある。先づ内閣の模樣を見ると兎も角も山本、原と云ふものが互に力とし、力と成合つて行つて居るのてあつて、他の内閣の諸公は多くは最高政略には餘り加はらぬやうに見える。折から山本首相には海軍問題、原内務大臣には人權蹂躪の攻擊が强くなつて來た故、尙更同舟艱難を共にする趣があつて、原と山本の提携が益々固くなり行き居る景色に見える。左なきだに政友會を率ゐる原としては首相の山本に賴りとさせ、又自分も賴りとして、互に計畫してやつて行く故に、此最中に海軍の收賄問題が出來たからと云つて俄に之と手を分つと云ふことも事實出來惡い譯てあるから、是は此儘て强いて提携して行かうと云ふ譯になるてあらう。殊に又兩人の性質も極めてさう云ふ行掛りには强い人のやうてあるし、此提携を固くして艱難なる政海を共に乘通さうと今企てゝ居るやうに見える。彼等の利害の上から行けば必ず左もあるべきことてあらうと思ふ。乃て上院ては今や下院の修正以上に更に修正をして、更に又兩院の協議會を開かるゝに至るてあらうと思ふが、此協議會の結果は何れに歸着するかは能く分らぬ譯てあるが、去りながら推察する所によれば政友會出身の有力なる大臣等は如何にしても此豫算の不成立を希はない結果は、自黨をして强いて上院の修正に同意せしめやうと努めるてあらうと思ふ。其間に多少の波瀾もあり、又下院として主張もあるてあらうけれども、結局は利害得失論より政友會は擧げて上院の修正に同意を表する事になつて、同時に豫算は成立するてあらうと思はれる。て假りに豫算成立するものとして、議會は無事に閉會するものとして、而して其後の天下の形勢は如何てあるてあらうかと云ふことは又甚だ興味ある問題てあらうと思ふ。

先づ今日より推察すれば議會の閉會後は例に依つて反對派の非政友の議員團體は、各方面の地方に遊說して、さうして一つは以つて黨勢を擴張し、一つは以て反對黨の地盤を侵さんとする計畫に出るのである。而して其說く所は議會に於ける演說を繰返すのであつて、即ち海軍收賄問題を提げ、之に更に又辵(しんによ)を掛けて繰返し、さうして同時に之を助ける所の政友會の人物攻擊などが始つて、甚だしく地方を惑はすてあらうと思ふ。地方では近來非常に政治演說を聞くことを好む風習になつて來て居る。其上に中央て鳴り響いた辯論家が地方に行つてさうして力を入れてさう云ふ問題を說き、心を惑はすと云ふに至つては、其影響する所が何れ程のものになるてあらうか、そこが甚だ心配なのてある。若し一方から樂天的に其前途を考へて見ると、地方の遊說と云ふものは久しく續かぬものてある、所謂人の噂も七十五日の譬の如く、一時は激しく演說するてあらうが、立所に又消え失せるてあらう、同時に又一方其の裁判事件も存外に少さい範圍に於て結末を結んで仕舞ふてあらう、それ故に此問題も甚だ火の手が大きくならぬて消し止まるてあらう、彼是する中に秋になり、大典の期節に入つて御大典の事も首尾よく行はるゝてあらう、之て世の中の多少人氣景氣も恢復するてあらう、さうして御大典後當年の冬若くは來年の春は之に關係した所のもの、即ち其問題の中心人物たる山本首相も功に依つて或は侯爵に叙せられることもあるてあらう、又之を助けた政友會の諸大臣も功に依て授爵の恩典に浴するやうなこともあるてあらう、さういふ曉には世人も大に昔日の議論を評して、成程新聞の如き、論客の如き、惡樣に說き廻したが遂に事實は事實として自ら消滅したものと見て、彼の中心人物として疑はれた所の山本首相も罪のないのみならず、却つて功が有つて、其人は榮進して侯爵に昇進した、誠に世の新聞紙若くは論客の云ふ所の說の如きは極めて無責任てあつたと云ふ目出度い結果を得るかも知れぬ。若しさうなれば誠に目出度き限りてあつて何等杞憂する所はないのてある。然しながら若し是が

反對派の地位の遊說は前の如く、頻に人心を惑はし、彼是する間に季節は秋となつて大典を無事に濟ませ、其結果として前に述べたる如く、各々授爵の恩典に浴すると云ふやうなことがあつた時に、人心は果して前の如く目出度く之を許し納めるならば格別だが、若し反對に解釋して、それを一般人心に印象せしめたならばどう云ふ事になるであらうか。即ち彼が如き批評された其中堅の人物、日本の名譽ある海軍を汚して迄も私腹を肥した所の卑むべき其人が、如何に圖々しく耻をも知らずして今日に至り、更に此大典に關係を致して、さうして尙ほ功を負つて授爵の恩典に浴した。これでは世の中は殆ど闇である、如何に惡事を働いても世はしぶとく行き通したならば、斯の如く行ける譯のものである。何事も押の强さに限る世の中であると云ふやうに、反對の印象を若し社會に與へたならば、此影響の點がどれ程の害を蒙るものであらう。私は斯樣に論ずる者もあるかも知れぬ、前の樂觀說ばかりでなく、後の悲觀說も起るかも知れぬと思ふ。此兩說は必竟見樣で、悲觀論者と樂觀論者と二つあるのであるが、其多くは果してどちらの議論に歸着するのであらうか。茲は未來の事であるが、餘程講究しなければならぬ所である。さうして是は社會に及ぼす後の樣子でありますが、併し人心と云ふものは不幸にして兎角に物を疑ひ、物を惡樣に言ふ傾が多いものである、故に恐らくは此社會に與へる印象は前者の善い方でなくして、後者の惡い方ぢやないかと自分は思ふのである。

乃て議會は不信任の決議案も不信任の上奏案も悉く政友會の多數に依つて否決せられて、兎に角形の上に於ては、輿論では不信任でないと云ふことを表はして山本伯としては決して不名譽の譯ではないやうな一段落を告げたのであるから、唯此社會に與へる風敎上に深く顧みられて、若し伯自身謙讓の德を守られて相當の時機に於て內閣を辭職されたならば社會に與へる惡影響も少なくして、且は先生自ら德を高うする所以、而して又同時にそれが却つて先生の潔白を現はす所以になりはしないかと思ふが、果して識者は何と思ふて

あらう。

若し私の希望する如く、山本伯が内閣を退くものとすれば、相當の後繼内閣を作つて退くが宜からう。其後繼内閣と云ふものは山本としては頗る適當なる手段がありはしないか。それは若し一歩進んで言へば、原を取立てゝ總理大臣にしてやらすも一つてあらう。又曩の貴縁に依て、更に西園寺侯を呼出して、西園寺侯に内閣を讓つて、さうして神聖なる即位の大典を彼の侯爵に依つて取行はしむると云ふ事も最も一般人心に適する手段てはあるまいか。且つ山本が自ら退くと云ふ以上は山本の一つの力を現はして行く途もある次第と思ふ。何故なれば近來の時勢は極めて改良を要するものがあるのてある。殊に昨年御代代りの政變以來今まて伏在して居つた人心の歸向が著しく發揮されたのてある。而して其發揮されて來た所の人心の氣風は餘り喜ぶべき氣風てはないのてある。動もすれば現狀打破と云ふ傾向てあつて頗る秩序を攪亂し、さうして着實穩健なる風が廢つて行かんとする形に見へるのてある。

殊に又此老人の眼から觀ると如何にも危險に堪へぬ所のものがある。と云ふものは政府は政黨に媚び、議員は選擧區に媚び、社會は新聞に媚び、甚しきに至つては裁判官、檢事も新聞に左右せらる迄に新聞の勢力が增大になつたのてある。何れの國ても新聞と云ふものは勢力あるものてある、去りながら其新聞の社會の勢力と云ふものゝ中には極めて公平なる、極めて忠誠なる極めて信用ある新聞が、必ず相當の種類はあるのてある。さうして後は皆な政黨の機關とか、某の機關とか云つて、色付いたる新聞は、是は歐米にもあるのてある。けれども日本の今日の如く色付かざる新聞が一も無しといふ國は何處にもない。斯樣に新聞の勢力は增大になりつゝあるに、其新聞なるものが不謹愼で、殆んど悉く皆な色のある新聞てあるといふ事は頗る危險てあると自分は思ふ。山本伯か自分て政治をして居つて、自身の身に掛る海軍問題や何かの起つて居る時は新聞の取締などは迚　出來やうがないが、自分の身が退くと同時に此の新聞取締の計畫をして退くと云ふ事

も最も社會に對して一つの急務ではあるまいか。若しそれ程の强硬なる內閣を後に作つて行くとして、少しく內閣に意味のある政治の出來べき方針と、又人材を集むる工風とを盡力して、去るべき譯ではあるまいかと思ふ。(三月四日)

超人の福音

中澤臨川

一

フリードリツヒ、ニーチエは長い間、拗執な病氣と戰ひ、苦慘な人生に打克つためにあらゆる努力を致し肉體的にも精神的にも漸く回復しえたことは本誌一月號の「ニーチエ論」の終りに述べた。『私は再び新しく人生を見出した。私は私に再會した。……私は私の哲學を回復し、生活すべく意志した』と彼は言つてゐる。それは一八八二年で彼が三十八歲の時であつた。眞のニーチエが此時から生れたのである。『歡びの智慧』は實にその勝利の產物であつた。

その克復と再生の歡びは、譬ふるに熱病者のそれのやうな情態に在つた。いろ〱の希望や理想が或は誘惑的に或は鼓舞的に彼の心をそゝつた。それは一時的のゲームであつた。彼のやうな意志の人が斯樣に不安定な幻影の中に、長く惑溺することの能きよう筈がない。彼はとりとめのない夢のなかから、或る一つの眞實を擇ばねばならない。自分に一番適應した理想を把持して强く之を現はす手段を採らねばならない。斯うして夢想者の狐疑から逃れねばならない。『平和の日に於て、好戰的本能の人は彼自身に其矛を向ける』と、

彼は言つた。信仰に對する戰、職業に對する戰、ショーペンハウエルに對する戰、ワグナーに對する戰、病魔に對する戰――その最後の最も長い苦しい戰の濟むか濟まないうちから、勝利の後の平和の歡びを味ふ暇もないうちから、彼は既う新しい戰の相手を求めてゐた。

一八八一年、ニーチエはアルプス山麓の高原シルス、マリアのエンガイデンに百姓家を借りて住つてゐた。其處で彼は全き孤獨を樂しんだ。その頃から何物とも知れない魔が何時か小平和の彼の心を犯し始めた。日の經つにつれてそれが次第に劇しくなつて行つた。彼は最早猶豫なく其問題に解決を告げずば、一日も安息の能きないやうな不安を感じた。

「私の地平線に種々の思想が上がる。しかも何たる思想ぞ！　私は夢にも斯樣な物を期待してゐなかつた。私はこの上一言も之に就て他言せぬつもりだ。私は絕對の沈默を守らうと思ふ。嗚呼友よ、時としてわが心をば默示の影が橫ぎる。私は非常に危險な生活に導かれてゐるのではあるまいか。なぜなら、わが機械は紛碎器の一つであるから。私の感情の强度は私をして震へしめまた笑はしめる――私は既に二度まで可笑しな理由から室內に閉ぢ籠つたことがある。私の眼は血走つてゐる。なぜなら、私は散步に出るたびに餘り泣き過ぎたから。然かし、私の淚は感傷的の淚ではない、寧ろ歡びの淚だ。そんな時私は獨りて歌つたり、馬鹿げた事を口走つたりする。私の心の中には人類に提供すべき新しい理想が充ち〳〵てゐる。……」と、その頃彼は友人のピーター、ガストに書いた。

終にその不可思議な期待と不安との中から欝結した思想の意識に上る時が來た。一日、ニーチエはシルス、マリアの森を橫ぎつて、遠くシルバプラナまで杖を曳く途中、巨大な圓錐形の岩の上に腰を下してゐると、ふと『永遠輪廻』の思想が彼の心に浮んだ。その發見はどれだけ强く彼の感情を刺戟したか。彼はたゞわけもなく泣いた。暫くは淚をあびて岩の上に踞つた。長い

間の彼の努力も期待も無駄ではなかつた。顧みれば彼はその半生を通じて烈しい痛ましい凡らゆる苦痛にもめげず、現實の前に腰を屆めず、能く悲哀と勞苦に打克つて、遂々ここまで漕ぎ附けて來た。永遠輪廻と云ふ力强い福音に到達することが能きた。彼の泣くのも無理はない。然かしその涙は、彼自身の言ふ如く、女々しい涙ではない。それは聖者の歡びの涙であつた。で、彼は即座にその福音的思想を數行の短文で現はした。そして其下に斯う書き足した。「一八八一年八月初旬、海拔六千五百尺、人界を遠かると更に遙かなるシルスマリアに於て」と。

彼はその數週間を殆んど高歡と絶望との渦巻の中に暮した。古來の豫言者や神秘家が必ず閲みしたことのあるエクスタシーの幾日かゞ續いた。聖なる恐怖に交れるプライド！　神のみ前に使命をさづかるイスラエルの豫言者のそれのやうにも。其福音はあまりに嚴びしく、その現實はあまりに苦慘であつた。然かし彼はこの苦慘を受け入れ、この福音を自己の物にするほかに採るべき途を知らなんだ――神の聲、否な眞自我の聲であるからには。Lux mea crux, crux mea lux !（私の十字架を照らせ、私の光を十字架にかけよ）斯う彼は書いた。

然らば彼の發見した永遠輪廻とは如何なる思想であるか。それが彼に於てなぜ狂熱的の光を帶びて體現したか。幾千年來說き古されたこの思想がどう新しい福音と化したか。

その假說の要約は次のやうである。宇宙を構成する力の總計は一個の定數で確固不變なものである。我等はその總計が或る有機體の發育のやうに不定に成育するものと考へることは能きぬ。なぜなら成育には營養を要する。營養とは他から力を採ることである。然るに宇宙力の總計が生長するとすれば、之に要する力を何處から借りて來るのであらう。であるから不變一定の總計力の假說が成立する。換言すれば宇宙の力は有限である。その力のいろいろの分子が互に衝突し結合することに由て、萬般の顯象が起る。既に有限な力が

互に衝突し結合するものとすれば、限りなき時間の經過のうちには、同じ顯象が幾度か繰返し／＼反覆せられねばならぬ。即ち宇宙の諸顯象は永遠に輪廻し再起すると云ふのである。

　然らばあらゆる個人の生活はこの大輪廻の無限小の一部分である。その生活は既に嘗て限りなく幾度か住まれ、更に未來永劫の間には繰返し／＼反覆せらるることであらゝ。『この世界は既に一度ならず二度ならず、數限りなく達しうる凡ゆる情態を閲みした。このことはまた眼前の一瞬間に就ても言ふことが能きる。それは嘗て一たび、幾たび存在した。同じやうに復た來るであらう。……人間よ。汝の一生は砂時計の砂のやうに、もどりもどつて、斷間なくその行路を繰返すてあらう。然るときに汝は再び汝のさま／＼な悲み喜び、汝の友と敵、あらゆる望みと誤り、あらゆる草の一と葉、あらゆる日の光、あらゆる事物の同じ排列を見出すてあらう。汝がたゞその一粒をなすに過ぎないこの輪廻は再び現はれるてあらう。』

　この假說は古來から行はれて誰にも珍らしくない思想である。よしまた常人に斯樣な思想が宿つたにしても、彼等は一種の好奇心からそれを科學的に證明して見るぐらゐが落ちて、其思想は至て平穩無難に彼等の意識の上面に漾ふに過ぎないであらう。彼等の想像力はこの假說の眞の意味を體得するだけ充分强大でないからである。然るにニーチエに於ては此恐ろしい思想が活きて、肉をもち血を持つて其感情のどん底まで泌み渡つた。彼はその假說を生き、全身を提して思索した。今、ニーチエはあらゆる苦難な戰のあとで、更により强くより大きな戰の對者を求めてゐた。其對手の强ければ强いほど彼の生活と思想は引締つた。『平和の日に於て、好戰的本能の人は彼自身に其矛を向ける』と言つてゐる通り、彼は一日として敵なくして住むことの能きない人間であつた。その敵は彼の生活の刺戟劑であり、同時に彼の思想の土台石となつた。斯樣な戰の人にとつて永遠輪廻說ほど頑强な、また誘惑的な假說があらうか。『あらゆる思想中の最强思想——萬

物の永遠輪廻說」の起る時が即ち人間の正午であると彼自身言つてゐる。

要するにこの思想は、彼の强烈にして誠實な人生に對する好戰的本能が無意識の間に誘致した熱情である。即ち永遠輪廻の假說はニーチエの性癖が受胎した產物である。前にも述べた如く、彼が如何に聖なる怖れと熱心な驕りを以て其出產の苦みを味はつたかは窺はれる。實際永遠輪廻說はニーチエの積極的思想の基石であり、或る意味に於ては彼の超人說も此處から胚胎したと言へる。であるから彼の人格から離して其永遠輪廻說を論議したり、永遠輪廻說から離して其超人說だけを說かうとするのは全く無益な事である。

前にも述べた通り、この宇宙宿命論がニーチエの心の中に朧氣に芽ざしたそもそもから、非常な狂熱と恐怖を伴つた。その思想の重荷は暫く彼をして沈默を餘儀なくさせた。誰が斯樣な恐ろしい思想を輕卒に口にし得よう。誰がその思想の非常な威壓から免れ得よう。初め彼はそれを不安なパラドツクスとして受取つた。

平靜な瞬間に一つの鬼がそつと思想家の耳元に口を寄せて斯の謎を囁く。そして最後に言ふ。

「またお前は平伏しないか。お前は齒を喰ひしばつて、この事をお前に告げた鬼を呪はぬか。それともお前は次のやうに自答しうる法悦の瞬間の來るまで忍耐することが能きるか、「鬼よ、あなたは神である、自分は之よりももつと神聖な詞を聞いたことがない」と。若しこの思想が現在のお前のやうに、お前の心を占領するが最後、お前はその思想のために再生するか、さもなければ永久に消滅されられるかの何れかだ。「永久に再び汝にこの事が起るぞ」と云ふ問題がお前の各瞬間に問ひ反されるとすれば、お前の全活動はその爲めに多大な重荷を負はされる。が、またお前は斯の優越にして永遠なる聖斷と確證のほか、何物をも望まないまでにお前自身と人生とを愛することは更に必要だ。

「優越にして永遠なる聖斷と確證」——運命——がい

かに苦慘てあらうとも、泣かず笑はず唯だその儘に受れ入れると云ふのがニーチエの處世訓だ。彼の人格の根柢だ。彼は露西亜風の宿命論者だ。戰好きのスピノザだ。『人間の偉大さを測る私の法式はamor fati（運命を愛すること）である。過古に於ても未來に於ても、永遠に一の事實をも變へようと望まぬこと。たゞに必然の下に耐えるばかりでなく——またこれを愛すること。』と云ふのが彼の悟道である。永遠輪廻説と云ふやうな大宿命觀でも、彼は之を受け入れなければならない。さうでなければ自滅のほかはない。否たゞ消極的に受け入れるばかりでなく、それを降服させなければならない。彼は其の好戰的態度から運命を甘受するにとゞまらず、それを敵に廻して立派な戰を戰はねばならない。『汝の敵には決して輕蔑すべき敵を擇ぶな。汝は汝の敵に就て驕りを感じねばならない。然らば汝の敵の成功も亦汝の成功である。』

斯うしてニーチエは永遠輪廻の思想に對した。實際この運命論が齎す結論のいかに怖るべきものであるかを考へる時に、その思想を全人格を以て味讀しようとしたニーチエの煩悶と忍苦の如何に多大であつたかが窺はれる。何處にもつと絶望的な運命觀があるか。この説から觀れば、世界は無意味である。一切が盲目な運命の仕業である。有限な力を唯だ數學的に亂雜に結合させては壞ち、壞ちてはまた前通りに結び附けて見る。何の新しい物もない。何の創造も自由もない。世界の進化は同じ輪の上を廻る運動に過ぎない。今日我等の送る生活は些の改新の希望もなく、永遠に繰返されなければならない。悲み、苦み、憎みのあらゆることが、また幾度でも幾度でも廻る小車の轍の痕のやうに現はれねばならない。鬼が日毎夜毎我等の耳に斯う囁く『汝が今迄送り、今も送りつゝある人生を、汝は再び、無限に繰返して送るであらう。そこには何も新しい物は起らぬであらう。たゞありとある苦み喜び、ありとある思ひ、ありとある嘆息、ありとある大小一切の汝の生活が同じ順序と結果を以て汝に歸る。——同じやうにこの蜘蛛も、この林間の月の光も。同じや

うにこの現在の瞬間も自分(鬼)も。永遠なる生存の砂時計は再び復た再び廻る。——て、汝人間は塵の塵である。——それでも汝は降服しないか。汝は歯を喰ひしばつてこの事を告げる鬼を呪はぬか……。』實際誰が斯樣な思想を受入れるに堪え得よう。彼はその爲めには人力以上の意志を要せねばならない。然るにニーチェはそれを正面に受けた。如何に苦慘であるからとて之が運命であるからには致方がない。一毫も之を變へよう、それから逃れようとは露思はない。よし、我はその運命を愛しよう。amor fati!。運命を尊敬して善き敵と思はう。本然の人生が無意義ならば、我はそれに一つの意義を與へよう。自ら生きがひある人生を造らう——斯うニーチェは考へた。

斯う云ふ悟の道に入るまでの彼の苦惱は並一通りではなかつた。彼は斯樣な思想が、丁度メヂュサの頭のやうに見る人を惱殺し、之を受け入れるに堪えない弱い人間を絶望に終らしめるであらうと云ふことを惧れた。彼はまた一方からは、能く人類が絶望と恐怖の淵に落ちずにこんな思想を消化し、お茶を濁して行くことが能きるのかと危ぶんだ。この思想は實に人間に起る最も恐るべき夢魔である。世の弱き者よ、不幸者よ『彼等をして早く死なしめよ、自殺せしめよ——彼等が自ら落ちた悲みの淵のどん底を凝視しない前に、復活の望みなき奇怪な運命を彼等が知らない前に。』と彼の言つてゐるのは、殘酷な心からではない。實は彼が自ら嘗めた宿命觀の遣瀬ない恐怖を世の人に頒つに忍びないからであつた。

さもあれ、强者は必ず斯樣な思想に逢著する。その時彼は能くその苦慘に堪えて、初めて人生に"yea"と言ひうるであらう。いかなる失敗も勞苦も不幸も彼を人生のより高い、勝利と喜びとに導く必然の階段である。敵の强大なるだけそれだけ勝利と勝利の後の平和とは樂しい。彼自身を超越して、能ふだけ高級な結合を現實するのが眞の生活である。かくして彼は一生の悲喜哀樂を打算するとき、彼の喜の彼の悲よりより多かつたことを知るであらう。斯樣な生活ならば再び、

幾度、永久に繰返されても望ましいと知るであらう。

『わが友よ、皆の者よ』斯う最も醜い男が言つた。

『何う諸君は考へられるか。この日になつて——私は初めて私の全生を生活したことに滿足した。

『然かし私の經驗した事はまだ充分に私に滿足を與へない。この地上に住むと云ふことは價値あることである。ツアラツストラとの一日、一つの祭が私にこの世界を愛することを敎えた。

『これが人生であつたか』斯う私は死に對つて言はうと思ふ。『よし、願はくば今一度。』

『わが友よ、諸君は何う考へられるか。君等もまた私と同じやうに死に對つて、『これが人生であつたか、ツアラツストラの爲めに、よし、願はくば今一度』と言はるるか。』

よし、願はくば今一度この生活を繰返したい——斯う言へるやうな生きがひのある生活を送れ。『私の敎義は斯うだ。汝が再び住むことを望むやうな生活を送れと。……我等をして遠い不可思議な憧憬や幸福や優雅を求めしめるな。然かし我等が再び住み、その儘永久に住むことを望むやうな生活を營め、我等は繰返し〴〵立派な藝術を味ひたいと思ふ。我等は丁度その通り我等の生活をも望みたいやうに住まへ。これが思想中の思想だ。』とニーチエは言つてゐる。

二

ニーチエの永遠輪廻說は立派な一個の學說としてよりも、彼の人格に對する訓練的、懲治的の意味に於て寧ろ必要であつた。この假說は彼の所謂『高き人(ホイアー・マン)』が、『厭世家の如く人生を忌避せず、幾度かその杯を滿たす饗宴の耽樂者の如く、人生に對して「希くば再び」と言ふ』爲めに、その人の勇氣を鼓舞し、その人の意志を洗錬するに缺くべからざる刺戟劑であつた。

ニーチエが從前苦痛な病氣に打克つべく非常に心の高慢を必要とした如く、彼は永遠輪廻の恐ろしい宿命論と戰ふ爲めには、矢張强い標的を必要とした。彼はそこで超人の說を樹てた。彼の『超人』がいろ〳〵の意味から發想されたにしても、以上の一意味が最も有力

な原因であることは、超人と永遠輪廻說の密接な關係から見てわかる。

ツアラツストラは常に彼の左右に鷲と蛇を携へてゐた。鷲は向上的創造的な超人の象徴であり、蛇は宿命的重量的な永遠輪廻の象徴であつた。兩者の間には一種不可思議な矛盾が横はつてゐる。しかしその矛盾を學理的に詮索したりするのは至て無意義なことである。たゞそれはニーチエの人格の蒸氣の中で溶かされて味はれなければならない。

ニーチエの超人說はダーウヰンの歸納的進化論と演繹的想像との深秘な產物である。植物、動物、而して人類。その次は――好奇的な直觀から――超人。時の進轉はいつの未來かに於て必ず人類を超越した一種屬を作り出すであらう。なぜなら、人生は經驗そのものの連續であり、戰と向上を目的として進むものであるから。易言すれば人は自己向上(Selbstaufhebung)に由て超人を產み出す本然の約束と義務を有してゐる。實にや人は動物と超人との間に横はる繩である。彼等は

目的でなくて橋梁であり通路である。かるが故に彼等をして勞苦せしめよ、そして死なしめよ――超人の現はれる爲めに。

余は汝等に超人を說く。人間は超越せらるべき或物(サムシング)だ。何を汝等は人間を超越すべく爲したか。總ての生物は從來彼等自身を超越する爲めに何事をか爲した。然るに汝等はこの大流の干潮たらうとするか。そして人間を超越するよりも獸に歸らうとするか。

人類に對して尾無猿は何うだ。笑ふべき非情物よ、恥の品物よ。丁度同じやうに超人に對する人間がそれだ。笑ふべき非情物、恥の品物。

見よ、余は今汝等に超人を說く。

超人は地上の眞義だ。汝等の意志をして斯う言はしめよ、超人は地上の眞義であらねばならぬと。

余は知るために住む者を、そして超人が今後生きうる爲めに知を求める者を愛する。余は超人の家を建てる爲めに勞苦し、利植する者を愛する。余

は電光の使者であり、雲から落ちる重き雨滴である。然かし電光は超人である。

斯うヅアラッストラは說いた。ニーチエの說では勞苦が一番に救生の福音である。人間は先づ勞苦して個人から超脫しようとする。彼は深くその醜い自己を憎む。それが彼を驅つて厭世に傾かしめる。それがニーチエの所謂『高き人』である。ヅアラッアストラは斯樣な人々を其洞穴に集めて道を說いた。『汝等はまだ余を喜ばせるだけ充分に苦しまなんだ。汝等はたゞ汝等自身から苦しんだ。しかし汝等はまだ人間から苦しまなんだ』と彼は言つてゐる。で、その苦み惱みの最頂點に達したとき、人間は彼の充ち〳〵た、苦痛の中から最後の一步を踏み出すべき意力を得てくる。かくて彼は自己を滅却すると同時に超人を產む。厭世はやがて勝利の樂天と代る。

ニーチエの超人說は强者にのみ說かれた福音である。貴き『數人』のみが其對手である。弱き者よ、悲しむ者よ、『汝の爲めには信仰と奴隷がよし』とはヅアラッストラの慈愛である。

超人の道德は先づ第一に非理想的である。在來の信念に由れば、有德の人とはある一定の理想に準じて其生活を規矩し、彼の自我的性癖を矯めて『眞』、『善』の道に入ると云ふのであるが、ニーチエに從へば彼の賢き人とは自己の價値の創造者である。これのみが彼の任務である。自然は一切無價値であるから、之に價値を與へるのが偉人の事業である。言ひ換へれば、眞の哲學者とは『人類を引附ける世界』を造るに足りる强い人格を持つた人である。彼はその時代の世界が信ずるやうな價値表を作る天才的詩人である。彼は思索者である。しかし彼の思索はその時代の行爲となつて表現する。彼はあらゆる自由と獨立を以て、善惡眞僞を超えて創造する。彼はたゞ自己の眞理と自己の道德をのみ造る。彼は大膽な『經驗者』である。で、常に新しい生活の形式のみを索ねて進む。在來の何物の價値も彼を捉へない。彼は飽くまでも現實に據り、そして現實を愛する。

超人の道徳の第二の特徴は非憐憫である。昔からの道徳が憐憫(ピティー)を第一の物としたのに反して、ツァラッストラは意志を何よりも重しとした。『オヽ我兄弟よ、余が汝に宣傳するこの新しき法則を見よ――冷酷(ハード)になれ』と。殊に價値の創造者は人一倍冷酷でなければならぬ。金剛石(ダイヤモンド)のやうに、彫刻家の鑿とやうに堅くなければならない。それでなければ彼は自分の意思の儘に運命の岩を砕いて自畫像を造るわけには行かない。彼が新價値表の製作者たらうとするならば、運命の歴史に其趾跡を殘し未來の人道に或る型を壓し附ける熱望を有するならば、彼の意志を黒鐵(くろがね)よりも堅く鍛なければならない。

超人の第一の敵は憐憫である。見よ憐憫はあらゆる物を滅ぼす。基督教はそれ自ら宣傳した愛の爲めに斃れた。愛の神は憐憫の爲めに窒息した。世の中には最早生かすに堪えぬ不幸者や、其死を喜ぶべき理由をもつた墮落者が數限りなくある。『あらゆる方面から死を說く聲が聞える、世界は死を勸めらるべき人間を以て充ちてゐる』と、ツァラッストラは言つてゐる。

世上の厭世者、失神者、不幸者から、『この世は唯だ苦痛の世界だ』と云ふ嘆きが聞かれる時に、賢き人は斯う答へる。『さらば、その苦痛ばかりの汝の世界に止めを刺せ。そして汝の道德律をして「汝は汝自身を殺さねばならぬ、汝は自然的に生命から逃れねばならぬ」と云ふことたらしめよ』。

賢き人は他人に冷酷であるばかりでなく、更に自己にも冷酷でなければならない。彼はあらゆる安生、平和を希はない『勞苦は偉大の源である』とは繰返しく說かれた超人の福音の基調である。彼は人道が決して一個の定まつた目的の方へ進むものでないことを知つてゐる。總ての事物は永久變成(ビカミング)の情態にある。人生は常に『それ自らを超越する或物(サムシング)』である。であるから、彼は決して自己の終局の目的や幸福を以て自ら欺き慰めようとはしない。何んな平和も彼の爲めには『新しい戰の手段』に過ぎない。その戰は進めば進むほど危險で困難であることを覺悟してゐる。勇敢なる『ブ

ランド』の前には最後の悲劇も何かあらう。彼には偉大な失敗は矢張偉大な勝利の如く望ましいゲームてある。ツアラツストラはその生命の榮光の頂點に於て死んだ。それは勝利と終滅の正午の死てあつた。

かるが故に超人の福音の他の一面は戰の道徳てある。偉大な經驗者は斷えず生活の新形式を求めて進む。彼は些の恐怖心もなく、その恐るべき經驗の行程に於て、自己、親近、他人のあらゆる寶、あらゆる幸福――生命をさへ犧牲に供して進む。即ち彼は崇高にして大膽なる運命の遊戯者(プレーアー)である。從て彼は平和を說かない。彼は戰を謳歌する。彼は勝利の榮光を以て人の前に立つ。ツアラツストラは言ふ。

汝は汝の敵を求めねばならない。汝は汝の戰を戰はねばならない。汝は汝の思想に向つて戰はねばならない。

汝が平和を求めるならば、それは新しい戰の準備としての平和てあれ。長い平和よりも短かい平和を求めよ。

余は汝に仕事を勸めない。寧ろ戰を勸める。余は平和をすゝめない。たゞ勝利をすゝめる。汝の事業をして戰ならしめよ。汝の平和をして勝利ならしめよ。

汝は曰ふ、善行の爲めには戰をも犧牲にすると。余は曰ふ、善戰の爲めには事物をも犧牲にすると。

汝の敵には嫌ふべき敵を擇べ。決して輕蔑すべき敵を擇ぶな。汝は汝の敵に就てほこりを感じねばならぬ。然らば汝の敵の成功もまた汝の成功である。

然り、戰は進歩の第一の武器である。戰が獨り强弱と健康不健康とを別ける。戰に由て我等は一の理想、思想の適否を知る。生命の開進は一切戰の賚である。かるが故に『戰は善である』。

最後に善戰には沈著と輕い心を要する。偉大な經驗者の忍耐强いあきらめはおのづから樂天を意志せしめる。amor fatiの德の到達する境地は祈禱者の靜かな心

と小兒の無邪氣と舞蹈者の『微笑める優雅』である。ツアラッストラは先づ樂天を說いてゐる。人間の靈魂は第一に重い荷を其背に負ふ駱駝のやうでなければならない。言ひ易へれば、人は常に烈しい苛責に堪え且つ經驗の重い荷物に馴らされねばならない。第二に彼は"I will"と叫びうる獅子でなければならない。彼はその自由を犯す何物をも蹈み碎いて進み、人間に"you shall"と命令する『法則』の龍を征し、凡ての理想、善、眞など云ふ、在來の桎梏を烈しく振り棄てる覺悟が要る。第三に彼は斯樣な障害に打克つた後て、生產的になり創造的に成るには、小兒のやうにならねばならない。『小兒は無邪氣であり、忘却性である。一つの新しい始である。或る遊戲である。自ら轉がる輪である。第一運動である。神聖な「然り」てある』。て、賢い人は常に氣輕るく、心配なく、心を壓しつけるやうな惡魔を平伏させねばならない。また厭世や憂欝を已めねばならない。ツアラッストラの詞に從へば『賢人は諸神の笑を修得せねばならない』。偉人はその目的の方へ、踊りつゝ、飛びつつ進まねばならない。かく笑の術を學ぶことに由て彼は、人生の苦難を慰めることが能き、また彼は踊る事飛ぶ事を學ぶことに依て憂を忘れることが能きる。今一步進んて、彼は『彼自身を超えて踊り』、『彼自身を超えて飛ぶ』ことを努めねばならぬ。即ち舞踊と笑の羽を以て、彼自身を超越せねばならない。是がツアラサストラの敎える最善の智慧である。

この笑の王冠、この薔薇の王冠。余は余自身之を冠つた。余は笑を聖化した。この笑の王冠、この薔薇の王冠。余にこの王冠が棄てられようか。余は笑を聖化した。汝、高き人々よ――余汝に告ぐ――笑を學べと。

要するに超人の敎は在來の道德のやうな法則と制扼てなくて、一個のはげましてあり、興奮劑であり、酒精てある。それは動的道德である。經驗と勞苦の價値を說き、努力向上を力說した所に新時代の要求する切實な眞理を含んてゐる。それは一面から見れば如何に

も冷酷無殘な致のやうに見える。弱者、不幸者を顧みず、權威と强力を謳歌して餘す所のない教理が世の非難を牽くのも無理はない。然かしその他面には、殺された惻隱の情の悲哀、大意志の蹈みくだかうとする愛の喚叫を見逃すことが能きない。超人の內的悲劇を味はずして、外部に現はれたその教理のみに拘泥する者にはニイチエの哲學の眞髓が解らう筈がない。

ニイチエの著作には、初めから自分の感情を能ふだけ壓し附けて、斷えず自己を征服しようとする苦しい努力——愛と意志との鬪爭——が明白と悲劇的の色を帶びて現はれてゐる。それが晩年になればなるほどいよ〱沈痛な色調をとつた。貴き人、高き人が超人を產む爲めに超えなければならない最後の障壁も、こに ある。『善惡の彼岸』の中にある次の一節が實によくこの間の意味を洩してゐる。『心理家——天賦の心理家、人格の闡明者——が最も高尙な事件及人間の研究に一身を委ぬれば委ぬるほど、彼は憐憫に打勝たれる危險が增す。彼は普通の者よりも、より無感覺てより快豁てある必要を感ずる』と。然るに實際は彼は天才者の特質として、常人よりもより銳感的て、より誠實に、より沈痛てある。また一方から言へば、『偉きな問題を解くためには偉きな愛の必要がある。たゞ强く健やかに、堅實て安固な精神のみが斯樣な愛に堪へうる』のみてある。斯うした地上の矛盾が何時も天才の一生に附纏ふ。であるから、『高き人々の、常人と違つた心を持つ人々の墮落、敗滅は一種の常則てある。我等の眼の前に斯樣な常則を見なければならないと云ふことは實に恐ろしい事てある。或る心理家が斯うした材料の損失を發見し、歷史の中に高き人の全き「不治」、文字通りの永遠の「最早及ばず」を覺つたとき、彼も亦自分自身の未來に對して絕望的反逆的になり、遂には彼自身を滅ぼし、自らも消耗した材料となるてあらう』。

實際斯樣な偉人の悲劇はニーチエが闡明した眞理のうちても最も深く最も獨創的な發見てある。『ツアラツストラ』の中に現てくる多くの高き人々は皆な斯樣な犧牲者の集ひてある。この書の未定稿の中に次のやう

な一節がある。ツァラツストラは高き人々を集めて初めて永遠輪廻の說を說き明かし、彼等をして町に出て之を市民の間に弘めさせようとした。

「行け」斯う彼は彼等に說いた。「行いて「永遠輪廻」を宣傳せよ」。

弟子達は驚いた。そして頭を垂れた。

「我等は貴下(あなた)の教理を忍ぶことが能きる。然かし群衆にはそれが能きるだらうか」。

「我等は先づ眞理を以て實驗してみなければならない」、斯うツァラツストラが答へた。「たとへ眞理が人類を亡ぼせばとて已むを得ない」。

そこで弟子達は再びためらうた。彼は更に命令した。

「余は汝等の手に人類を打つべき槌を授けた、打て。」

併かし弟子達は群衆を憐み惧れた。そしてその師を棄てて逃げた。

ツァラツストラは退いて嘆息した。「余は愛をとほして却て大きな悲を引起した。今余は自分の引き起したその悲に降る」と。

生存と鬪爭との法則その物から、高き人秀でた人がより強い目標となり、外部からの刺戟を並一倍に受けると云ふことは爭へない事實である。彼の周圍には誘惑と危險が附き纏つてゐる。財と女と名譽と幸福と安逸とが、そして更に強いものとしては家庭の拘束が。昔から偉人の受ける非難の一つは、彼がその友や古舊に對する劇しい自我主義、親愛なるべき妻子眷族に對する冷酷と云ふことであつた。然かしその抗擊は正しくない。偉人の自我主義は丁度母親のそれである。母親が自分の赤子の爲めに、なるべく美食をし衞生を重んずるやうに、前者は自分の主義事業の爲めに己を守る。自ら一定の目的を立て、家庭の幸福をも自己をも棄てて推し進んだイプセンの「ブランド」の自我主義がそれである。更に、彼の戰ふべきものには傳習的の頑強な理想や道德がある。今一段困難な敵としては彼の當然の運命なるべき孤獨がある。

よし彼は自分自身の利益に關はる事ならば、いかにそれが辛くとも忍び得たてあらう。彼は一身をも捨てえたてあらう。併かし彼の一番に困難な事業は他人をも苦しめなければならないことてある。賢者は他人の勞苦に眼をそむけ得なければならない。路傍の弱者は憐憫と哀訴を以て彼を殺さうとする。然るに彼は冷酷な眞理を以て却て彼等を殺さねばならない。『たとへ眞理が人類を亡ぼせばとて已むを得ない』。彼は冷靜にメスを以て、患者の苦痛に對する外科醫てあらねばならない。『もしも人か大きな悲慘を負はすだけの力と意志を彼の內心に確かめえないやうては、何て偉大の頂點に達しえよう。自ら苦しむと云ふことは甚だ容易てある。唯弱い女や奴隷てさへ時にはこの術を解まへてゐる。唯だ夫れ、大きな悲慘を負はせ、その苦痛の叫を聞きながらも、不安と絕望の岩に乘り上げて破船しないと云ふこと――之が偉大てある。これがあらゆる偉大の眞髓てある』とニーチエは言つてゐる。かるが故にツアラツストラの所謂『最後の罪』は憐憫である。彼はその谷の暗い底から叫ぶ高い人々の哀訴の聲を聞いてゐた。若し彼が彼等の不幸に耳傾けたなら、彼等を憐む心を起したなら、彼の萬事は休む。彼は反對に征服せられ殺されたてあらう。彼の絕大の苦心は實に懸つて、この隱忍克己の意志にあつたのてある。彼が『蛇の死』の谷て『最も醜き者』に呼びとめられた時ほど危いことはなかつた。

非常な憐憫の情に襲はれて、ツアラツストラは倒れようとした、丁度頑强に樵夫の斧に抵抗してゐた樫の樹が、その切手をさへ驚かして急にどつしり倒れかゝるやうに。然かし彼は直きに彼自身に歸つた。そして冷酷な表情をもどした。

『余は汝を認める』斯う彼はつつけんどんに言つた

『……余をしてこの儘去らしめよ』。

汝自身を潔く保つためには、汝の事業を確立するためには憐憫が唯一の敵てある。汝の愛が汝を毒する。汝はその愛に抵抗する爲めに、親近を避けよ、女を輕蔑せよ。自ら苦しむばかりてなく、人をも苦しめよ。

より無感覺になれ……。何と云ふ苦しい努力であらう、無限の意志であらう。この絶大な――恐らくこの世界に其比を見ない超人の悲劇を解しなければ、その福音の意味は成立しない。

高き人賢き人、『深く苦しんだ人の智的高慢と孤嘯……忍苦者の斯の無言な智的高慢は、世間の好奇的同情的の手から逃れるために、あらゆる形の假面を要する。深い勞苦にその人を崇高かくし、世間から離す。……彼等は誤解されようと望む。……彼等は間違つた斷定に導かれようと望む。……であるから、斯樣な『假面』を尊重し、惡しき所に心理學と好奇心を適用せないようにするのは高貴な人道の一端である。

旅人よ。貴下は、侮りなく、愛なく、濡れて鉛のやうに悲しい深い眼をもち、曾て嘆かない胸をもち、その輕蔑をかくした唇をもち、徐かに握つた手をもつて、貴下の途を歩んでゐる。貴下は誰人か。何を貴下は爲したか。先づここに休み給へ。此處は何人をも歡待する――御身を休め給へ。で、貴下がどなたであらうと、現に貴下を喜ばせる物は何がよからう。貴下の心を休めるには何があらう。どうぞそれだけ告げて下さい。私の持つたものなら何でも差上げたい。――『私の心を休める物と仰しやるか。さても物好きな方よ。では何にしよう……』。何と仰しやる、早く告げ給へ。――『さらば、他の假面！　第二の假面！』。

何と云ふ微妙な崇高心理の解剖であらう。ニーチエの冠つた假面、ツアラツストラの冠つた假面は實にこれであつた。我等が超人の福音を解するには先づ斯樣な高慢と冷酷の假面を透視して、その下に隱れた偉大な經驗者の悲哀、愛と意志との深甚な鬪爭を窺はなければならない。

三

前にも述べたやうに、ツアラツストラが其左右になづけた鷲と蛇、超人と永遠輪廻の間には不可思議な予盾がある。鷲は高く翔り、蛇は深く卷く。自由と創造の超人は『ニヒリズムの最惡』なる永遠輪廻と調和の能

きよう筈がない。その爲めにニーチエの企てたあらゆる努力は失敗に終つてゐる。

ニーチエは永遠輪廻を以て、超人の福音の基石とした。併かし秘密の秘密は斯うである（誰がそれを明白に立證し得よう）。彼の心の中には先づ第一に永遠輪廻の假說が浮んだ。『嗚呼人間は永久に歸復する。……小さい人間は永久に歸復する。最も大きなものでも餘りに小さい』。此の思想の重荷はとても人間の耐えうる所でない。然るに一方ニーチエの心の中には幼少の頃から『人間を高めるとは可能なりや』といふ斷えざる問題が蟠つてゐた。努力、向上、新價値の創造――が彼の夢寐にも忘れない功名心であつた。そのため彼は冷酷な宿命觀に壓倒せられないためには、超人間的の或る表象を造り出す必要を感じた。『超人』の思想は茲にその根源を有してゐる。その奥底にはニーチエの意志の敗北の分子もある。『あらゆる事にも干らず、私は是等の數月間を再び住まふとは何うしても思へない』と或時彼は友達への手紙に書いた。流石の彼も時には餘り恐ろしい宿命の表象を忍ぶに耐えかねて絕望の淵に頻した。『私は輪廻を望まない。どうして私は斯んな思想に堪えよう。私は人生に「然り」と言ふ超人を作り、私の思索をその上に集中して、私自身も「然り」と言はうと試みた――吁』と。

之が其頃のニーチエの僞らざる心の秘密であらう。斯うして彼は超人を逃れて殊更に永遠輪廻を忘れようとした。それが證據には『ヅアラツストラ』の第一卷では彼は少しも永遠輪廻に說き及んでゐない。そして其調子は至て快豁である。然かし、かくまでに彼を苦しめ彼の思想感情のどん底までも喰入つた其假說が全く忘られる筈がない。時日のたつにつれて、それがまた漸く頭を擡げて來た。ヅアラツストラの敎說は次第に沈痛に次第に悲調を帶びて來た。要するに超人と永遠輪廻の矛盾はニーチエの性格の矛盾である。

然かしまた一方から、永遠輪廻を以てただ人間の經驗の試金石、超人に踏み越す橋梁と見るときにはそこに深い意味がある。輪廻の宿命觀を超越することは即

ち人間を超越することである。輪廻說は『超人の蓄養』に要する第一の食物である。その信仰が生活の各瞬間に永遠の內容と價値と希望を與へたとき初めて超人界の曙が開ける。

ツアラツストラが、神を殺した最も『醜い男』に輪廻の福音を吹き込み、『これが人生であつたか、よし願はくば今一度』と死に對して言はせた時の光景ほど崇嚴な光景はない。

遂ひに超人の曙は近いた。あらゆる人生に對して、"Yea"を宣言しうる者は產れた。ツアラツストラは其弟子達に取卷かれ乍ら、第一の勝利の光榮に醉つてゐると、古い大時計が沈痛な音を立てて眞夜中を知らせた。それは死にゆく日が新しく生れる日と逢ふ時である。偉大な沈默の中に瞑想に向いて明いた魂が深い啓示を享ける時である。行く／＼消える時計の響の十二音にツアラツストラは其人々をして神秘の謎を讀ましめた。

一つ！

人々！ 心を澄ませ！

二つ！

げに深き眞夜中の聲は何を告ぐるや

三つ！

『我はわが眠を眠りぬ！

四つ！

『いと深き夢より我は醒めぬ、いざ說かん——

五つ！

『この世界は深し、

六つ！

『晝の讀み與ふよりも深し。

七つ！

『そが悲も深し——

八つ！

『喜び——はその悲より猶深し。

九つ！

『悲は曰ふ、彼方に去れと、

十！

『されど喜はみな久遠を欲す——

十一！

『深き深き久遠を欲す——

十二！

『…………

（完）

民衆の勢力によつて時局問題を解決せんとする風潮を論ず

民衆的示威運動を論ず

吉野作造

（一）民衆的示威運動の來歴

本年二月例の通り日比谷に於て民衆の示威運動があつた。問題としては、減税問題などもあつたけれども主なるものは海軍收賄問題であつた。同じやうな事は昨年の二月にもあつた。昨年二月の方は今年よりは運動が激烈で、其結果到頭桂公を内閣から追ひ出して了つた。今年は政府の方の準備が行屆いて居つた爲めであらう、昨年程の大騒動もなく、又結果としては是ぞといふ程の事もなかつたけれども、兎も角も政界に一轉機を起さんといふ意氣込であつたといふ事は今年も昨年も同一であつた。昨年もあり今年もあつたから、又來年もあるといふ事は、必ずしも斷定は出來ぬけれど、斯の如きことは今後一種の流行となり、容易に其跡を絶たざるのみならず、恐らく益々盛んになるかも知れぬと思はれる。

一體かういふ事は、何時頃から始まつたかと考へると、明治三十八年九月、ポーツマウス條約に對して國民が不滿だといふので、日比谷で大集會を催したのが初まりと見てよからうと思ふ。尤もずつと古い事をいへば、一部の勞働者が上野に集つたとか、芝公園に集つたとかいふ事はあつたやうだけれども、其れは其い時丈けで終つて、後に何等の影響を殘さなかつた。民衆が政治上に於て一つの勢力として動くといふ傾向の流行するに至つた初めは矢張り三十八年九月からと見

なければならぬと思ふ。尤も三十八年九月の時のは、國民の不平が抑せずしてあらはれ、それに偶々點火するものがあつて爆發したので、昨年や今年のやうに、全然民衆が受働的になり、多少二三の人から煽動されたやうな氣味のゝとは些か事情を異にするやうだけれども、然し何れにしても、民衆的示威運動としての政治上の意味は同一のものと見てよい。

扨、然らば、かういふ運動は一體政治上から見て、或は立憲政治の發達と云ふやうな事から見て、喜ぶべきものであるか、或は呪ふべきものであるかと云ふ事は、我々に取つて大いに研究を要すべき問題であると思ふ。

(二) 一面に於て喜ぶべき現象

民衆が多數集つて騷ぐと云ふ事は、大體に於て實は憂ふべき現象である。然し又他の一面に於ては、日本今日の憲政の發達と云ふ上から見て、此民衆的示威運動と云ふ現象は、一つの喜ぶべき現象であるとすべき方面もある。それは政治問題の解釋乃至政權の授受に關する終局の決定を、民衆の判斷の左右する所たらしむると云ふ意味に於て、又は民衆の判斷を政治上重要なる意義あるものたらしむると云ふ點に於て、私は之を喜ぶべき現象であると云ふのである。

勿論從來とても、民衆の判斷と云ふものが、全く政治上に於て無視せられて居つた譯ではない。然しながら問題解決の終局の歸着點と云ふものは、多くの場合に於て決して民衆にはなかつた。極く手近い例を申すならば今度の議會に於て貴族院が、海軍擴張費に七千萬圓の削減を加ふる事になつたと云ふので、扨山本內閣は其結果どうなるだらうかといふ問題について、三月三日の『朝日新聞』には『山本伯と政友會』と題する一つの記事があつた。其書いて居る所によると、政友會では如何なる手段を以てしても政權を離れまいとする希望を持つて居る。然るに若し山本伯が辭職すると云ふ事になつたならば、其代りを西園寺侯の所へ持つて行くと云ふのも一說だけれども、西園寺侯では、侯自身に再起の念がないのみならず、昨年二月の事件の爲めに宮

中や貴族院邊に於て、多少面白くないと云ふ關係もある、そんなら原敬氏が内閣を組織したらと云ふ說もあるが、それでは宮中は勿論、貴族院や樞密院の邊が收まりが着くまい。或は伊東、清浦若くは寺內と云ふ方面へ交涉したらどう云ふものかと云ふやうな意味合である。此記事によつて見ても詰り、政權の歸着の問題になると、人民とか民衆とか云ふ事は一向に念頭に措いてなく、只貴族院や樞密院邊の通りがよければ夫でよいと云ふ事になる。若しも民衆を問題決定の歸着點として、即ち民衆を後援として立つと云ふ事ならば、政友會は何を苦しんで、總理大臣になる人を外に求むる必要があらう。政友會は兎も角も衆議院に於て絕對多數黨であるに拘らず、自分が單獨に內閣を組織することが出來ず、貴族院や樞密院邊に、通りのよき人を總理大臣に借りて來なければならぬと云ふ事は、民衆の判斷と云ふものを、政治上結局に於て認めないと云ふ事に外ならぬ。今日も已にかういふ考があるんだからして、昔は無論民意と云ふものは政治上に於て顧慮されなかつたのである。それで昔は政權の授受と云ふ事は極く隱密の間に行はれて、表面には一向にあらはれなかつた。例へていへば、少し古い事になるが、明治十四年の政變の如きは、何故大隈伯が野に下つたかなど云ふ事は一寸外界に分らないと云ふ形になつて居る。然し之はまだ憲法施行前の事であるから、暫く措いて問はずとするも、憲法施行後に於ても政權の推移と云ふやうな事は、決して萬人環視の中に公明正大に行はれては居なかつた。久しい間所謂超然內閣など云ふ事が唱へられて、內閣は兎も角も議會內部の勢力の變動とは沒交涉て居らんとする態度を示した。無論議會の勢力の外に全然超然として居ると云ふ事は出來なかつたけれども、然しながら多くの場合に於て、憲法施行當時の內閣の變動と云ふものは、大抵其當時の所謂藩閥の內部で極まつて了つた。だからして、外からは何故に黑田內閣が倒れて伊藤內閣が出來たかと云ふやうな事は一寸分らなかつた。少くとも其內閣の變動と云ふものに、民意乃至民意の代表者たる議會の勢力關

係とは直接の交渉はなかつたやうである。其後所謂藩閥も、薩派と長派と分れて權力を爭ひ、後には長派の中でも、山縣公の派と伊藤公の派と分れて暗闘をするとか云ふやうな風で、政權の授受と云ふ事は一部の人の内部――即ち表面にあらはれない事情で以て決定されて居つた。其後政黨と云ふものが段々發達して、政友會の如き、兎も角も有力なる政黨が出て來ると云ふと、政府も全く之を無視することが出來ぬといふ事になり、玆に初めて民衆的勢力と云ふものが、政權の推移に關する問題についても、大いなる影響を與ふるに至るかと樂しんで見て居つたのに、何時の間にやら政黨の幹部が政府と、之も外部からは分らない内密の妥協をして、頗る公明を缺く政權の授受をやつて居つた。所謂數年前の桂公と政友會との情意投合なんと云ふ事は、政治上から見ると云ふと、一つの迷宮であつて、外からは何が何やら薩張り分らぬものである。それて政治と云ふものは一向に公明正大を缺いて了つた。從つてから云ふ内密の事情に通じたものてなければ、政治と云ふ事が出來なくなり、政治と云ふものは著しく專門になつて了つた。斯の如きは決して立憲政治の健全なる發達てはない。どうしても斯くの如き暗室政治と云ふものは打毀なさくてはならぬものである。而して之を打毀はすにはどうしても民衆の力を藉るより外はない。所謂民衆の示威運動と云ふものは、政界の弊風其甚しきを致して、尋常の手段ては之を破ることが難いので、止むを得ず起らねばならぬ譯になつたのである。之が段々に盛んになれば、一方に於ては政界の暗流に浮沈して居るものを警醒し、他の一方に於ては民衆をして益々政治と云ふ事に趣味を深からしむるからして、此點に憲政の發達の上には何等か貢献すべき部分を持つて居ると思はるゝ。所謂之は民衆の自覺の結果であつて、又之を促がす原因てある。故に假令受働的であつたとしても、之が民衆の自覺を促す機會たる事を得ば、此意味に於ては確かに喜ぶべき現象と云つてもよいと思ふ。

(三) 何故に民衆の自覺を喜ぶべしと云ふ乎

世の中には隨分頑固な人があつて、民衆の勢力の張る事を非常に忌む人がある。民衆の勢力が張ると云ふ事は何か社會主義的な危險思想でも蔓衍するやうに考へたり、或は佛蘭西革命當時のモッブの騷擾などを聯想したりして、非常に之を懼るべき且つ忌むべきものと考へて居る人が頗る多い。之は老人や、それから又所謂官僚などの間に隨分根柢が深い。然しながらよく此等の頑固な考を持つて居る人を觀察して見ると云ふと、中には民衆の勢力が張れば自分等が據つて以て立つて居る所の地盤が崩れる、自分等の現在の境遇と云ふものを防衛する爲めには民衆の勢力を抑ふる必要がある。さう云ふ境遇にある所からして、意識的に或は無意識的に民衆の自覺と云ふ事を喜ばなくなる人がある。然し何れにしても之は利己心であつて、固より耳を傾くるには足らぬ。然し又他の一部に於ては、かう云ふ利己心を離れて眞に憂國の至情からして民衆の自覺と云ふ事に一種の疑を持つて居るものもあるやうである。

然かし此等の人は、思ふに只物の一面を見て居る人である。物には固より利害の兩面があるのであつて、民衆政治にも固より弊害はある。然し弊害を擧ぐるならば寡人政治にだつて矢張り弊害がある。若し其の弊害を比較するならば實は寡人政治の方が弊害が多いのである。只寡人政治は所謂帷室政治であるからして曲事が外にあらはれない。民衆政治は明けつ放しの政治であるから、少しの曲事も忽ち眼に着く。故に世人は動もすれば民衆政治の弊害を擧げて、寡人政治の弊害を忘るゝの傾がある。況んや寡人政治に於ける勢力階級(閥)の中に居る人には餘程聰明な人でも、其寡人政治の弊害と云ふものは見えるものぢやない。

一體國家の政治と云ふものは公明正大を第一義とする。事の善惡を問はず、原則として一點の秘密ある事を許さない。然るに民衆を基礎としない少數の專門政治家が、内々に相談をして政治をすると云ふ事になると、其の人がどんなエライ人でも、又或はどんな立派な人でも、必ずいろ〳〵の情實と云ふものが出來るも

のだ。例へば役所で物を買ふ時にしても、何時でも公然多くの人の眼の前で買入をやるならば安心だけれども、さうでない或特別の人から物を買ふ事になれば、何時の間にやら其處に弊害を生ずる。之は現に今日矢釜しい海軍收賄問題でも明白である。誰か帝國海軍々人の忠君愛國の念を疑ふものがあらうか。而かも此中に非常な一大弊害の蟠屈して居ると云ふ所以のものは、畢竟之は其一切の買入や何かを黑幕の中でやつて居つたからである。若しも彼等が海軍と云ふ所は玻璃張りの箱のやうなものであつて、何をやつてもみんな外から見えると云ふ考があつたならば、こんな弊害は決して起らなかつた。其他こんな例はいくらでもある。例へば三月十七日の貴族院の豫算總會に於て、田健次郎、石黒忠悳男等が海軍省が室蘭製鋼所を助けたと云ふ不法行爲を指摘したるが如き、之も其一例であつて、政府は之に對して理義明白なる答辯が出來なかつた。由來陸海軍などは隨分事柄を秘密にして居る所だから、かう云ふ事のあるのは止むを得ぬとしても、現に人の眼の前で政治をして居るべき筈の政友會と桂公でさへコソ／＼と妥協したと云ふやうな事があつてはたいか。其間にいろ／＼な弊害があつたと云ふ事は誰も皆感じて居るけれども、何分内密でやる事であつて、明白な證據がないから默つて居るのである。

かう考へて見れば、少數專門家の政治といふものはどんなによいものでも民衆政治よりよいものでない。そして一旦政權を取つたものは兎角之を自分の專門にしたがる。之を取る際には民衆の後援によつて取つたものですら、之を行く／＼は自分の專門にして、外のものゝ窺ひ知ることの出來ないものにしたがるの傾がある。それで之を打毀はす爲めにはどうしても民衆の勢力と云ふものを立てゝ行かなければならぬ。どこまでも民衆の勢力を立てゝ之をして政治上に重きをなさしむるに非れば、到底政界の潔白を維持することが出來ない。此點に於て私の斷じて民衆政治論者である。そして此點からして又私は今回の現象は一面に於て賀すべきものであると云ふのである。

然るに此議論に對して世の中にはいろ〳〵の反對論がある。その

（第一）は日本の國體に合はぬとか、或は日本の憲法に背くとか云ふやうな議論である。然し之は飛んでもない謬りであつて、民衆の意思を法律上絶對最高のものとするなら、そりや無論日本の國體の上から許す事の出來ない說であるけれども、然しながら主權者が其政治を行はせらるゝに方つて、民間の考を御參考になさると云ふ事は何にも國體とは相涉ることはない。どうせ主權者は事實上御一人のお考で政治をなさらぬ。誰かに必らず御相談になる。只之を少數のものに御相談なさるか、多數のものに御相談なさるかといふ差である。若し民衆政治を國體に合はぬといふならば、寡人政治も亦國體に合はぬ譯である。何となれば其間に只御相談なさるものが少數か多數かといふ差しかないからである。日本の國體はそんなものぢやない。又陛下の御精神も決してこゝに在さぬ。現に　明治天皇陛下は維新の際、五箇條の御誓文を發せられて、其中に「廣く會議を興し、萬機公論に決すべし」と云ふ事を仰せられてある。民衆政治を日本の國體に合はぬなどゝ云ふ說をなすのは、それは君主と人民とを敵味方にして、そして貴族とか云ふやうなものを其中間に置いて、君主の民衆に對する防禦線とした所の昔の謬つた考の遺物である。かう云ふ謬つた考は不幸にして現今も仍ほ存する事は疑ないやうだ。所謂貴族を皇室の藩屏と云ふが、その藩屏の文字が明かに之をあらはして居る。藩屏とは外敵を防がんとする防禦線の意味である。秦の始皇帝が匈奴を防ぐに萬里の長城を築いたやうなものである。そして所謂藩屏を以て自ら居るものは、人民を皇室の敵と見て、自分獨りが皇室のお味方であると考へて居るのである。然るに民衆政治と云ふものは皇室に忠義を盡すと云ふ役目を、所謂藩屏者流丈けの特權とせないで、弘く一般人民に與へんとするものであるんだからして、藩屏の連中から見れば、如何にも自分の特權が殺がるゝやうな譯になつて、そこて民衆政治が國體に背くなどゝいふ、恰度近頃大學

の特權を廢すると云ふので、之ほど明白な問題に、社會の最も賢明なる階級を代表すべき大學が反對するのとよく似たものである。（私は大學に關係あるけれども、私一己の考としては最も熱心なる特權廢止論者である。）若し夫れ民衆政治が帝國憲法に背くと云ふ議論に至つては、之は法律論と政治論とを混同するの誤解から來るものである。法律の研究に政治論を混同することは學問の發達の上に固り忌むべき事である。然しながら法律論から政治論を驅逐するの極、法律論を以て政治を律せんとするの弊も亦之を避けねばならぬと信ずる。法律と云ふものは只一定の方向を示すに止るものであつて、其運用は自由である。故に法の範圍內で政治上の慣例の生ずるのは當然である。例へて云ふならば大臣の任免權が君主にありと云ふ事は之は憲法上の一原則である。然しながら此原則の範圍內で政黨內閣と云ふ政治上の慣例の生ずる事は何も差支はない。成程大臣任命の終局の權は君主にあるんだけれども、事の實際に於て君主が全然獨斷で大臣を任命なさると云ふ事は、少くとも我國に於てはない。必ず君主が何人かの奏請を待つて其れに基いてお決しになる。どうせ何人にか御相談になるといふ事であれば、其相談に與るものを何處に取るかと云ふ事は之は所謂憲法の運用上の問題で、即ち政治的慣例の發生する餘地の存する所である。然らば政黨內閣制が一つの慣例として發生しても何等憲法と相牴觸することはない。若しも政黨內閣の制度が大臣任命の大權と相容れずと云ふならば、山本伯が大岡育造氏を奏請して文部大臣の任命を見たるも、亦君主の大權の侵犯といはなければならぬ。政黨內閣を法律上に認めると云ふなら無論違憲と云ふ問題が起るだらうが、然しながら一の慣例として之に據ると云ふ事ならば、何も憲法と牴觸すると云ふ事は出來ない。又或人は慣例でも兎も角も實際に於ては君主の大權を制限する事になるではないかと難ずる。然し實際上の話を云ふならば、政黨內閣で無くたつて、現に我國に於て行はれて居る所の、前內閣が後繼內閣を其辭職の際に奏薦すると云ふ慣例や、又時と

して數名の所謂元老が集つて後繼內閣の人選を相談するると云ふ慣例の如きも亦君主大權の制限と言はなければならぬ。且つ又政黨內閣と云ふ制度が固まつても、それでも若しも君主が其慣例を破つて、詰り大權本來の行使をなされやうと思へば、なす事が出來るのである。現に政黨內閣の制度の最もよく固まつて居る所の英國に於て、政治には最も遠ざかつて居給ふべきヴィクトリア女皇ですら、時々大臣の選任に干涉して、其時の總理大臣を苦しめたと云ふ例は、最近に至つて女皇の日記の公刊によつて明かになつた。英明の君主が一度立て自分の考を行ふと云ふ事であれば、慣例なんて云ふものは何時でも無難に破る事も出來るものである。故に政黨內閣と云ふ制度が出來上つても永久に君主の大權を制限して了ふものであると云ふ事は出來ない。又反對の

（第二）は無智の人民に政權に參與せしめると云ふのは小供に刄物を預けるやうなもので、非常に危險なものだと云ふ說である。之れも屢々聞く所の反對論である。政權に參與するには、先づ其政權參與の何たるかを知らなければならぬ。政治と云ふ事について相當の知識が發達して居なければいかぬと云ふ人がある。然しながら私の考では此の說も民衆政治と云ふもの丶本體を誤解して居るものだと思ふ。民衆政治は人民の相當の發達を前提とすることは一點の疑を容れない。併し其政治的方面の發達を絕對的の必要條件とするものぢやない。政治上の事なんて云ふものは、之は普通一般の人民は無論の事、餘程敎育を受けた者でもさうよく分るものぢやない。さう云ふ高等なる程度の發達を民衆政治は常に必しも、絕對的に人民に要求して居ない。例へば此頃問題になつて居る所の營業稅廢止の可否如何とか、或は地租輕減の可否如何とか云ふやうな問題を、國家的立場からして正當に判斷しろと云つたつて、之は大學の學生を摑へたつて、分るものぢやない。代議士の中にだつて分らぬ人が隨分あるだらうと思ふ。さう云ふ問題の利害得失の判斷をし得るものでなければ、政權に參與せしめないと云ふなら、之はブ

ラトーの所謂哲學者丈けが政治をすると云ふ理想論になつて了ふ。民衆政治では、人民が自分の之はと認むる人を議會に送つて、其人をして議會で以て大いに活動させるんだが、此場合には人民から選ばれんとするものは、自分の政見を述べて之を人民に訴へる。其際に人民はいろ〳〵な具體的の問題についてどつちの政見がよいと云ふやうな事を、十分に判斷し得るなら、固より之に越した事はないけれども、併し實際は多くの場合に於て人民はこゝまで判斷する丈けの力を有つて居るものではない。それから又假りにどつちかとよいとしても、此政見と云ふものは時によつて變り得るものである。自分の選んだ人は何時までも同じ政見てあると云ふ事は必しも期し難い。そこで民衆政治は人民に、其政見によつて其判斷をしろと云ふやうな六つかしい事を常に要求するものでない。無論之も出來ればいゝ。出來ぬとすれば民衆政治はそんなら何を最少限度の要求として人民に臨むかと云ふに、之は人格の判斷である。詰り候補者になつて爭つて居る人が、どつちが立派な人であるか、どつちが信頼するに足る人であるか、どつちが國事を托するに足る人であるかと云ふ事を判斷することを要求する。だからして人民が細目の政治上の事の判斷などは、どうでもよいが、只心術の眞僞を理解して、僞を惡んで正に與し、總ての正しきものを理解して之に同情し得る丈のものがあれば夫で民衆政治を行ふに澤山である。之だけの事を民衆政治は先づ以て人民に要求するのであつて、而して此れ丈けのものは、政治とか法律とか經濟とか云ふ專門の知識が無くても、總て人間として何人も持ち得る能力であるからして、これは決して過當の要求ではない。而して此點から見ると云ふと、多少の遺憾は無論あるけれども、日本人民は決して民衆政治を行ふの資格ないものと云ふ事は出來ぬ。加之一般民衆はいろいろな直接の、且つ具體的の利害關係に囚へられない、從つて個々の政治問題を考ふる場合に於ても案外に公平なる意見を立てる事が出來るものである。政權の參與を少數の人に限つて置くと云ふと、之がいろ〳〵な

利害團體と交渉かついて、國家問題に對して適當公平なる判斷をなし得ない事があるものである。例へば今度の織物消費税廢止運動についても、一時は所謂當業者の意見と云ふものは廢止に一致して居つたやうであつたけれども、中頃其足並が餘程崩れた。從つて議會に於ける運動の反映も亦歩調の一致を缺いた。之は何故かと云ふと、機元と販賣業者との間に利害の反對を來して、織物税廢止を不利益とする所の販賣者の連中が盛んに運動を初めた結果だと云ふ事である。若し夫れ航路補助法案が、各種の會社の運動によつて、理論上から見て解する事の出來ないやうな變挺なものになつて了つたと云ふのも、如何に國家問題が各種利害關係の運動から左右されて居るかと云ふ事を示して餘りある。其事に當つて居るもの、又之と近い關係に立つて居るものは、兎角其境遇を超越して公平な判斷をなし得ないものである。從つて時には其事に丸て關係のない局外者の無責任な言論を聞くと云ふ事も必要てある。之を戰爭に譬へても、戰略は直接に軍隊を指揮して居るものを差し置いて、比較的疎遠の地位にある參謀官連中の、いはゞ無責任の言論によつて決すると云ふのも、此點に於てなか／＼意味があると思ふ。故に人民をして政權に參與せしめると云ふ事は此方面から云つても大いに主張すべき理由があると思ふ。序に云ふが此事は又同時に選擧權を擴張すべしといふ議論の根柢にもなると思ふ。反對論の

（第三）は、又或る他の一部の人は民衆政治の盛んな所には、常にいろんな弊害を伴ふと云ふ事をいふ。然し之はどこを指して云ふのか。近頃日本では米國をモッブ政治などゝ罵つて民衆政治の弊害に苦しんで居る國の標本と唱へて居るものがある。然し之は例の排日問題などで憤慨して居る所の感情論でなければ、全く米國近來の政治史を知らざる所の暴論である。米國は無論民衆政治の弊と云ふものを極論に暴露して居る國である。然しながら他の一面に於て民衆政治の長所と云ふものをも極端に發揮して居る。今、場所によつては弊害と長所と代る／＼爭つて居る所もあるが、然

しながら概して云へば、其弊は頗る少くして大體に於て民衆政治の利益を享受して居る。殊に中央政府の有様などを見ると云ふと、實に羨望に堪へざるものがあるんで、決して政府の大臣などの間に收賄などと云ふやうな忌まはしい嫌疑だに受くるものはない。今の大統領のウヰルソンは無論の事、先代のタフトにしても或は其前のルーズヴエルトやマッキンレーにしても、皆世界の歴史を飾るに足るべき偉人である。否な米國は建國以來、多少でも道徳上批難すべき人間は大統領に選れた事はない。其大多數は品格に於て、技倆の上に於て、優に一代の偉人であつたのみならず、世界歴史の華と云ふべき人物に富んで居る。常に斯う云ふ人物を擧げて政權を托する所の米國を、如何にして我々は民衆政治に苦しんで居る國と罵倒する事が出來るか。又或人は英吉利では選擧權擴張以來、議員の種が惡るくなつたと云ふ人がある。成程之も或意味に於て正しい。何となれば英吉利の議員と云ふものは古來貴族や金持などがなつたので、所謂精神に於ても外形に於てもゼントルマンの集まりてあつた。それだから議員は皆フロックコートを著て、行儀正しくやつて來るし、お互を呼ぶにも我名譽ある紳士（オンラブル、ゼントルマン）と呼びかける。實に行儀は立派なものである。然るに選擧權が擴張された結果として、約二十年來段々勞働者の代表者と云ふものも議員に出て來た。そこでフロックコートを着ないて議場に入るものもあるやうになつた。傳ふる所によれば、千八百九十三年ケーア・ハルデーが勞働者を代表する最初の議員として議會に出席した時は、汚ない勞働服を着て鳥打帽を被つて議場に現れて、六百の議員を吃驚させたと云ふ事である。因に云ふが、ケーア・ハルデーは八つの歳から鑛山の鑛夫で、學校の教育なんてものは全て受けた事のない純然たる勞働者出身である。其後此種の議員が段々殖えて、千九百〇七年の勞働黨成立の最初の總選擧には五十人の此種の議員を送るに至つた。此點から云へばフロックコートが汚ない背廣になつたり、シルクハットが鳥打帽になつたりしたつんだから、種が惡るくなつたともいへる。

然しながら此等の人は外形はゼントルマンでないけれども、精神までゼントルマンでないかといふに決してさうでない。現にケーア・ハルデーの如きは道德の點から見てもまた其の人の見識の點から見ても實に見上げた立派な人物で、先に風采の餘りに從來の議員と違つて居るので、寧ろ輕蔑の眼を以て彼を迎へた議員は、日ならずして彼は我々の何人よりも、より以上の尊敬に値すべき人物なりと嘆稱せざるを得なかつたとの事である。其他同じく勞働黨の領袖たるラムシー・マクドナルドの如きも、其着物こそ汚なけれ、其人物に至つては總理大臣のアスキスと相對して決して遜色はない。今より兩三年前、ヴイクトツア女皇の像の除幕式に獨逸皇帝がお出になつた時に、皇帝は一夕マクドナルドを御旅館にお招きになつて數時間の長きに亘る會見を賜はつたと云ふ事である。現內閣の大立物たるロイド・ジョーヂの如きも亦選擧權擴張のお蔭で代議士となつた一人である。若しもロイド・ジョーヂが、後年英吉利の歷史を說く場合に方つて、グラッドストーンや、ビーコンスフキールド等に劣らざる大人物と認められるゝであらうと云ふ私の觀察をして誤なからしめば、詰り英國に於ける選擧權の擴張は、英國の議會の種を惡るくした所か、却つて反對に斯くの如き大人物を供給したのだといひたい。

之を要するに民衆的勢力の盛んな所には、いろ〳〵な弊害が多いと云ふのは全く事實に反する。更に瑞西とか濠洲とかの政治が理想的の政治として嘆稱されて居るといふ事實を見たならば、思半ばに過ぐるであらう。佛蘭西は些かいけないんであるけれども、それでも我國に見るやうな弊害はない。若し政治上いろんな弊害があると云ふ國を數ふるならば、寧ろ民衆的勢力の最も少い露西亞を擧ぐべきである。

要するに民衆政治と云ふものは、一部の人の憂ふるが如き厭ふべきものでなく、却つて大に歡迎すべきものである。一步讓つて是非得失の論は別問題としても兎も角も民衆政治と云ふものは是れ一の勢である、世界の大勢である。憲法學者が何と云はうとも、藩屛者

流が何と論じようと、民衆の勢力は日一日に張りつゝあるんだから、何とも仕様がない。私は之を助長した方がよいといふ議論であるが、よしんば之を惡るい物としても民衆政治を全く抑ふると云ふ事は出來ないと云ふ事丈けは、明白に認めて、そして國家の大計を案ずべきであると思ふ。

（四）然し他面に於て我國今日の民衆運動は大いに憂ふべきものあり

民衆の運動と云ふものは、先づ自發的であつて、且つ積極的である場合に大いに政治上に於て重んぜらるべき値打を有するものである。人から煽動されて起るのではどうも面白くない。何等一定の要求が無くつて只破壞的に騷ぐと云ふ事であつては、甚だ憂ふべきものであると思ふ。三十八年九月の騷動はアレは全然自發的と云ふ事は出來ぬけれども、兎も角も或一定の要求と云ふものが人民の間に在つて、それが鬱結して今にも爆發しさうになつて居つた所へ、之に點火するものがあつて起つたのであるからして、隨分非難すべき亂暴も行はれたけれども、之に一種の意味はあつたやうに思はれる。然るに此頃のはどう考へても積極的且つ自發的とは思はれない。どうも之は民衆の勢力と云ふものは之を結束して見ると云ふと、案外に強いものであると人ふ事を三十八年九月に經驗した所の一部の人が、再び之を利用して、事をなさうといふ頭があつて、此等の者が煽動して、或は煽動せんとする計畫に乘ぜられて起つたやうな風に感ぜられる。殊に今年の騷動の如きは全然消極的で、即ち政府反對と云ふ事が唯一の主眼で、外に何等積極的の主張と云ふものがない。民衆的示威運動と云ふ事は外國にも隨分ある。然し外國のは大抵積極的の主義主張がある。例へば千九百〇七年以前の墺太利の民衆運動の如き、昨年四月大爆發を見んとし、今日尙時々行はれて居る所の白耳義の民衆運動の如きは、選擧權の擴張、若くは選擧法の改正と云ふ事を眼目として居る。今日獨逸、墺太利等て屢々行はるゝ所の示威運動は、食料品の値段の下落を目的をする關稅改革を要求して起つて居る。佛蘭

西て勞働者が時々示威運動をやるのも、例へば非戰論とか、軍備擴張反對とか、又は三年兵役反對とか云ふやうな標目を揭げて居る。單に現政府に反對すると云ふ漠然たる目的に騷いで居るやうな處はない。斯ういふ消極的の考て騷いで居ると云ふと、何時ても其手段が破壞的になつて、革命的になつて、やれ燒打だとか警察官との衝突だとか云ふ事になる。之ては全然佛蘭西革命當時の亂民の騷動と何も違ふ所はない。もう一つは近頃の民衆運動は何時てもどうも受働的てある。自發的てない。現に日比谷公園に集つて居る連中を見ると、何も積極的に主張のある人間が來て居るんぢやない、又積極的の主張のあるものは、そんな所へ來ない。來るものは時勢に慨するとか何とかいふ、感情は昂ぶつて居つても、先づ大體腦中無一物てある所の下層級の人か、若くは無責任の學生。而して此等のものは一番煽動に乘り易い。從つて一番危險な分子てある。茲に序を以て申上るが、學生が斯ういふ運動に參加すると云ふ事は、之は今日の文明國ては露西亞を除いては外になからう。英・米・佛・獨のやうな放膽な敎育をして居る所は、學生は平常盛んに政治を論じて居るけれども、かう云ふ運動には一向加はらない。劃一主義の敎育を施して、個性の尋常なる發達を妨げて居り、且つ政治の事に携はる事を嚴重に取締つて居る國程、學生が斯う云ふ運動に參加したがるやうだ。現に露西亞に騷動が起つたと云へば、其中心は必ず學生だ。一體私は學生の政治を談ずる事は一向差支ないと思ふ。然し民衆の運動の中心となつたり、少くとも之に參加すると云ふ事は、學生にとつて好ましい事ぢやない。此點は露西亞の例などを鑑みて識者の一考を煩はしたいと思ふ。

要するに我國今日の民衆と云ふものは、今申したやうな譯てあるから、容易に野心家の利用する所となると云ふ傾向があると思ふ。之ては益々佛蘭西革命當時のモッブと違はないものとなるので、到底民衆の健全なる發達と云ふ事を期する事は出來ない。民衆運動と云ふものは自發的に起つて、そして積極的の主張に基

いて起るんてなければ、政治の發達の上には面白くないものである。西洋の多くの示威運動などの例を見ると、大抵皆一定の主張の下に自發的に起るんだからして、集る者は多くは現實の問題に現實の利害關係を持つて居る者ばかりだ。現に私の見聞した所によると、示威運動に參加するものは通例中年の勞働者階級の人て、大抵女房子供を連れて來て居る。それだから其運動には明白に、一つの國民的運動と云ふ色合と意味とがあらはれて居つて、それと同時に非常に靜穩なものて、決して破壞的のやうな事はない。斯うなければ駄目だと思ふ。

此點から見ると云ふと、最近の政治運動の如きは、新聞て何といつたつてアレは實は國民大會ぢやない。然しながら無論私はあの運動を以て、國民の考と全く沒交渉のものとは見ない。只あれて以て國民の意思の其儘のあらはれとする譯にはいかぬと思ふ。何れにしても我國今日の民衆運動と云ふものは、或意味に於て一つの政治上の進歩とは見るけれども、他の一面に於て非常に不健全な方向に向つて居ると思ふ。

(五) 畢竟するに憲政の失敗

民衆運動に、よしんば前項に申したやうな、弊害が附き纒つて居ないとしても、實は民衆運動の盛んに起ると云ふ事は畢竟するに憲政の失敗を意味すると信ずる。何故かといふに、立憲政治と云ふものは他の言葉を以ていへば議會政治である。即ち議會は民意によつて動き、政府は議會によつて動くとする制度である。成程憲法論に於ては議會は民意と交渉なしなどと云ふ議論もあるけれども、之は乾燥な法律論て、政治の議論の上に於て顧る必要はない。政治上の立前から云へば、民衆は議會を監督し、議會は政府を監督するものである。

此議會政治にも近頃はいろんな反對の議論が起つて來た。其反對の議論の主もなるものゝ一つは近頃流行のサンヂカリズムて、一つはレフエレンダムてある。サンヂカリズムの議論ては民意をして議會を通して發動せしむると云ふ間接の方法は、民意を如實に發動せ

しむる所以ではないと云ふ立場からして所謂直接行動と云ふ事を唱へる。議會政治を否認して、ストライキやら其他の革命的手段を推奬して居る。レフエレンダムに於ては議會は國民の意思を常に其儘に發表することが出來ないものであると云ふ事實を認めて、只國民全體の意見を、問題の度毎に徴すると云ふ事は不可能であるからして、通常の場合に於ては議會政治を認めてゐるけれども、重大な問題に限つて、不完全な事のあり得る所の議會によらずして、國民の意志を直接に聞かうと云ふ考に基いて居る。此二つの考は共に議會政治若くは代議政治と云ふものに反對の考を以て居るものである。

然しながら右の如き反對があるに拘らず、議會政治と云ふものは大體に於て今日最良の制度であると云ふ事は疑ない。濠洲の千九百年の憲法、瑞西の千八百七十四年の憲法、最近に於ける亞米利加合衆國の中の十ばかりの州の憲法では、此レフエレンダムと云ふものを或一定の條件の下に認めて居るけれども、其他の國に於ては之すらも認めない。皆等しく代議政治と云ふ主義を採つて居る。是れ畢竟此制度は今日の所考へ得べき最良の制度であるからである。私は此點は同じ考である。

私の考では最良の政治と云ふものは、民衆政治を基礎とする貴族政治であると思ふ。所謂貴族政治丈けで民衆政治なければ駄目である。今日我國の政治は正に此弊に苦しんで居る。又所謂民衆政治丈けで貴族政治と云ふ方面なければ、之も亦駄目である。佛蘭西革命當時の歷史が之を證明して居る。そこで國民が一つの偉大なる精神に指導せられて動き、又其精神を最も多く體得して居るものが、又國民の監督を受けつゝ政治をすると云ふ事であれば非常に結構だと思ふ。而して斯の如きが實は本當の民衆政治だと思ふ。而して今日の英國は正に是である。英國に於て政治をする所のものは社會上、道德上、知識上の皆貴族階級の人である。彼等は其品格と智識とを以て國民を指導し、而して又國民の感情を全然無視せずして其要求の那邊にあるか

と云ふ事を見て政治をして居る。であるからして何處までも基礎を民衆主義に置いて居る。亞米利加は時々脱線するけれども、大體に於いて矢張り英國と似て居る。佛蘭西は小黨分立の爲めに往々民衆主義と貴族主義との調和が旨くとれない事がある。獨逸では二つのものゝ間に直接の交渉がないやうになつて居るけれども、貴族主義の方がなか〳〵悧巧で容易にボロを出さぬ。で程度の差はあるけれども、兎も角も大體に於て民衆主義を基礎として政治が立派に行はれて居る。之れが即ちレフエレンダムなどよりも代議政治と云ふものを私が採る所以である。何となれば予の所謂貴族的民衆政治はこの代議政治に於て始めて可能なるものであるからである。

扨、此代議制度が、其運用が其本來の理想の如く圓滑に行はるれば何も事がない。之れが圓滑に行はれない時に初めて民衆的示威運動と云ふものが起るものである。今日西洋の文明國で民衆運動の行はるゝ場合には二種ある。一つは國民の小部分たる一階級が其要求を貫徹せんが爲めになすもので、例へば英國の婦人參政權運動の如き、又は諸國に於ける一部分の勞働者のストライキの如き之れである。此等は國民全體の要求とは違ふ。であるからして大體に於て國民の承認を得ること難い。故に彼等は非常手段に訴へて社會を威嚇して、そして其目的を達せんとするものである。第二のものは國民の大多數が其要求をば立憲政治の尋常の方法では貫徹する事が出來ないと云ふ時に行はれるものである。之は制度其物に瑕疵のある場合によく起るものである。其最も著しい場合は選擧法が不都合な爲めに人民の多數の希望が議會にあらはれて來ない、從つて議會で以て多數の要求を達する事が出來ないと云ふ場合に行はれる。例へば墺太利に於ける選擧權擴張運動の如き即ち是れである。墺太利では千九百〇七年に全然普通選擧になつた。此墺太利の新選擧法は此點に於て世界の模範的の法といつてよい。然し此法律の出來る前は千八百七十三年の法律が行はれて居つた。此法律によれば、國民を四級に分けて、第一級の大地

主と云ふものは之は法人も婦人も皆含んで居るが、少數の團體でありながら、議員總數三百五十三人の中で八十五の議員を出し、第二級は都會に於ける商工業者であつて、十圓以上の税金を收むる二十四歳以上の男子は一團となつて廿一人の議員を出して居る。第三級は商業會議所及び工業會議所であつて、之は百十六人出して居る。更に第四級は第二級と同じ條件を充たして居る田舍の農業家の團體であつて、之は百三十一人出して居る。それで農業者は一萬人以上で一人の代表者を出して居るし、商工業の會議所は廿七人で以て一人の代表者を出して居る。大地主は六十三人で以て一人の代表者を出して居る譯になつて居る。此制度の甚だ不都合なるのは言はずして明かである。そこで國民の大多數を占めて居る勞働者階級は盛んに選擧權擴張を主張した。政府並びに議會は無論自分の勢力の失墜するのを恐れて承知しない。さう云ふ事であれば民衆は示威運動をするより外に途はない。後に至つて拾圓と云ふ制限は五圓に下り、又千八百九十六年には民間の要求が激しいものだから、政府は更に第五級の選擧權者と云ふものを作つて、財產上の制限に拘はらない一般の人民に選擧權を與へた、然しながら彼等の代表者を出し得る數は僅かに七十二人に過ぎない。そこで紙の上では普通選擧は布かれた。然しながら四百二十五人の議員中たつた七十二人では勞働者の要求と云ふものは丸で物にならぬ。是に於て民衆は更に完全なる普通選擧を要求すると云ふ趣意で盛んに示威運動をやつて、此間にいろ〳〵の曲折はあるが、千九百〇七年に初めて其目的を達した。

又同じやうな趣意で、白耳義に於ても近頃民衆の示威運動と云ふものがある。昨年の四月、同國の社會黨の首領で、今日世界的偉人の一人と見てもよい所のヴァンダーヴイルドは、頗る大規模のストライキをやると云ふ計畫を立てた。之は獨り白耳義のみならず歐羅巴全體の利害に關する大問題であると云ふので中に熱心仲裁する人があつて、實行はされなかつたけれども一時は世界を騷がした。之も何かと云へば選擧法

改正の要求だ。白耳義でも成程普通選擧の制は採用して居る。又所謂比例代表制度の模範として稱せられて居る國であるが、然し他の一面に於て同國の選擧法と云ふものは甚だ不公平である。何となれば財産と年齢と教育の程度と、それから職業の種類、又未婚者であるか既婚者であるか。又子供の有無等によつて、或者は一票の投票權を有し、他の者は二票三票の投票權を有して居る。そこで保守的のものは人數が少くとも選擧場裡では何時でも勝つと云ふ結果になる。かう云ふ選擧法の結果として白耳義では保守派が今日已に三十年間政權を握つて居る。尤も從來久しく自由黨と社會黨とは調和しなかつた。而して此二つの黨派は單獨には保守黨に當ることは出來なかつたから、保守黨の政權を握つて居つた事は止むを得ぬけれども、千九百十一年初めて自由黨と社會黨とは提携した。そこで事によつたらば自由黨と社會黨といふものは保守黨を覆へすことが出來るかも知れんと云ふ事を豫想する者あるに至つた。且つ又同國に於ては人口の増すと共に議員の數を増加すると云ふ憲法上の規則がある。そこで千九百十年末の人口調査の結果として議員の數は新たに廿名を増加して、百八十八人にすると云ふ事になつた。而して議員數の増加と云ふ事に均霑する地方は概ね自由黨及び社會黨の盛んなる工業市地方であるからして、此點から見ても自由黨と社會黨と云ふものは餘程都合のよい狀態にあつた。そこで先づ千九百十一年八月示威運動をやつた。流石はストライキの本場と稱せられて居る白耳義だけあつて、秩序整然としたものがあつたと云ふ事である。此年の十月に各地方議會の議員の改選があつた。此選擧では自由黨と社會黨との提携は見事に成功して保守黨を壓倒した所が少くなかつた。そこで千九百十二年五月の國會の總選擧ではいよ〳〵保守黨は沒落して、天下は自由黨と社會黨のものとなるだらうと敵も味方も、國内でも又外國でも疑ふものはなかつた。處が總選擧の結果は案外にも、保守黨は崩れざるのみならず、却つて前よりも黨員を増した。そこで世人は吃驚したが、又他の一面に於て是れ

畢竟選擧法が、不都合であるからだと云ふ感を深くした。人數から云へば自由黨社會黨の連合は遙かに保守黨を淩駕して居る事は、統計上一點の疑ない。然るにも拘らず、議會に於て多數を占めること出來ぬと云ふのだから、自由黨社會黨が現選擧法に大不平を抱いて其改正を迫るは先づ當然と云はなければならぬ。而して保守黨並びに之を基礎とする所の政府は現選擧法其物が自分等の權力の根據なんだからして、此要求には斷乎として應じない。そこで以て社會黨の側は「天下を騷がして誠にお申譯はないが、外に致方が無いから止むを得ないんだ」というて涙を揮つて此大々的示威運動をなすと云ふ事になつた。

要するに西洋では、右申したやうな場合に民衆的の示威運動が行はれて居る。何れにしても、立憲政治の尋常（ノルマル）な運動ぢやない。故に立憲政治の失敗と見てもよい。或は憲法政治の瑕疵の一つの結果と見てもよい。然し瑕疵であつても或は失敗であつても、かう云ふ風に堂々とやるならば未だ賴もしいと思ふ。日本のはどうかと云ふと、惡るく解釋をすると現在の政府を倒すことに利害關係を持つて居るものが其目的を達するの手段として民衆の勢力を利用するのではあるまいかと疑はるゝ點がある。精々よく解した所が、所謂多數黨と政府と結托をして曲事を行つて居る、而して議會に於ける尋常の手段では、之を糺彈することが出來ぬからして、そこで示威運動に訴へるのだと見るより外はない。かう云ふ次第で以て示威運動をやるのは、天下一品であつて、我國の外に餘り其例はあるまい。どうしても健全なる發達の徵候と見る事は出來ぬやうである。

（六）所謂專制的憲法論にも同情すべき點あり

我國に於て此民衆的運動と云ふものゝ眞相が右のやうであるとすると、之て果して民衆は十分に議會を監督する事が出來るや否や疑はしい。現在の事を申せば議會を監督すべき民衆が却つて煽動家に利用せられて居る氣味があるではないか。若し民衆に議會を監督す

る丈けの働が出來ぬとならば、民衆政治と云ふものは十分に其効用を發揮することが出來ぬ。從つて民衆の監督の外にある議會をして政府を監督せしむると云ふ事は一面に於て甚だ危險な事であると云はなければならぬ。かう考へて來ると云ふと、議會の權限を廣く解釋すると云ふ事は日本の現在の上に果してよいものだらうかどうかと云ふ疑問は當然起らざるを得ない。先頃新聞で傳ふる所によると、帝國大學の上杉博士は帝國議會が不信任案や上奏案を議するのは憲法違反である、日本の憲法は議會に對して斯くの如き問題を議すべき權能を與へて居ないと、學生に向て敎へたと云ふ事であるが、上杉博士は果して斯くの如き事を言つたかどうかは私は知らない、然し斯くの如く帝國議會の權能を非常に狹く解釋をすると云ふ憲法論は、一部の人の間に確かに行はれて居るといふ事は事實らしく思はるゝ。純粹の法律論として斯くの如き結論に到達するのは別論として、老人などの間には日本の現狀に鑑みて、眞に憂國の至情より此種の憲法論を是認せんと欲するものも少くないと思はれる。かう云ふ人の考には實は私も無限の同情を表する。民衆の狀態斯くの如く、議會の體たらく斯くの如しとすれば、議會に行政監督の廣い權限を認むると云ふ事は餘程危險な事である。然しながら他の一面からいへば、若し議會の權能と云ふものを斯くの如く狹く解すべきものであるならば、即ち法律と豫算を議定するといふ事丈けに止めて、外は何事についても其意思を表示することが出來ぬとするなら、議會を設けたと云ふ特別の意味は消滅するであらう。昔のやうに元老院と云ふやうなものに此任務を托してもよからうし、或は今日の法典調査會といふやうな者に此任務を托してもよい筈だ。態々議會の如きものを設けたといふ意味は決してそんなものぢやない。態々面倒な手續を盡して議會を設けたと云ふものは必竟之を政治の中樞として十分なる活動をなさしめて、一般の政治を完全に監督せしむると云ふ趣意に外ならないのである。而して此任務は議會が十分に民意を代表し且つ又十分に人民から監督されて居る

と云ふ事でなければ此目的は達せられない。而して我國の現狀は遺憾ながら此目的を達するに未だ滿足すべき程度に發達しては居ないのである。然し左ればと云つて一旦民衆政治と云ふものを理想的なる政治主義と認定する以上は、私は一部の短見なる論者と共に、議會の權能を極めて狭く解釋して、一時を彌縫すると云ふ事には到底左袒する事は出來ない。寧ろ憲法政治に通有なる解釋は其儘之を採つて、そして他の一面に於て民衆の開發に更に大に力を捧ぐるこそ識者の心掛くべき事と思ふ。

（七）民衆運動に對する今後の方針

民衆政治は我々の結局の理想であるとすれば、どうしても現今存在する所のもろ／＼の缺點は取り除いて之を善導して、そして所謂憲政有終の美を濟さしむるに盡力をする外に仕方がない。之にはいろ／＼の方面から其途を講ぜねばならぬと思ふが、大體に於て二つの方面があると思ふ。

第一の方面は憲政の運用を圓滑ならしむる方面の改革である。一體民衆の騷動と云ふ事は兎角憲政の運用が圓滑を缺く場合に限りて起るんだからして、之を圓滑にして置けば心配はない。圓滑ならしむる方法としてはいろ／＼な事があるだらうけれども、先づ第一着には選擧權の擴張と、選擧區の公平なる分配であると思ふ。選擧權が擴張されても獨逸帝國議會の選擧法の如く、選擧區の分配が不公平であつては憲政の運用が妙ではない。それから政黨内閣の樹立と云ふ事が、憲政の運用を圓滑ならしむるに必要な改革である。尤も政黨内閣が完全に行はるゝ事については二大政黨の對立と云ふ事が必要である。政黨が二つの大きい團體に纏まるかどうかと云ふ事は、之は勢の決する所であつて、選擧權の問題の如く一片の法律で極まる問題ぢやない。故に我々の努むべき所としては、少くとも政黨内閣の發達を妨ぐべきもろ／＼の事情があるならば、それを取り除くと云ふ事でなければならぬ。此事については外に又多少の意見があるけれども、之は他日改めて意見を述ぶる機會があるだらうと思ふ。

第二に民衆夫れ自身の開發の爲めにいろ〳〵なすべき事があると思ふ。それにも大體に於て更に二いろある。其第一はいふまでもなく經濟的開發である。どうも生活が樂でないと輕擧妄動し易い。且つ又野心家などからして利益を掲げて利用さるゝ恐がある。例へば墨西哥に於て、昔から今日まで騷動の絶えない、その一つの原因は貧民が多くして野心家が多少の給料を餌にして人を集めると、幾らでも其の人の爲めに兵隊になるものがあるのと、一遍其味を覺えたものは、正業に就くよりも兵隊になつて居つた方が飯が喰へるからして、罷めらるゝ事を非常に厭ふといふ事に在る。同じやうな事は支那にもある。苦力などを集合して革命の旗を擧げたけれども、一度革命騷動が收つてからは之を解除するに非常の困難があつた。今度政友會て以て三多摩の壯士を幾らかの金を吳れて雇つて來たと云ふのも多少似た所がある。詰り金で働くやうな人間が多くあると云ふ事は非常に危險な事である。恒產あれば恒心あると昔から云つてるんだから、民衆の勢力と云ふものを健全な所に落着かせるには、どうしても社會政策を大いに行つて、下層階級の生活の安固を計ると云ふ事が必要だと思ふ。此點はよく獨逸と佛蘭西とを比較すれば忽ち分る。獨逸は社會黨などの議論は佛蘭西よりも激烈であつて、社會黨の勢力も佛蘭西よりも非常に强いに拘らず、獨逸の社會黨は佛蘭西のそれに比して實際上大に穩健なのは、畢竟獨逸はビスマークの見識に基いて大いに社會政策を行つて勞働者の生活と云ふものが頗る安固であるからである。

然るに顧みて我國の狀態を見ると云ふと、社會政策など云ふものは一つも行はれて居ない。否下層階級の利害と云ふものは更に顧られて居ない。今年の二月廿一日の貴族院豫算會に於て、三宅秀、桑田熊藏等の諸氏は、工場法を速かに實施せよと云ふ事を政府に迫つた。處が山本農相は答へて曰く「財政整理其他の都合上、遺憾ながら實施することを得ずして止むを得ず延期す云々」。「其內容に於ても又一方に可なれば他方に不可なる等の事情もあり云々」。一方に可なれば他方に

不可だと云ふのは暗に政府は資本家の壓迫を受けて居つて工場法の實施を躊躇して居ることを示して居る。一體日本の工場法案は、工場法などゝ云つて世界に出して耻しい程の、勞働者保護の手薄い法律てあるのに、それですら資本家の壓迫を受けて出來ないといふのは、如何に下層階級の利益が無視されて居るかと云ふ事を明示して居る。而して財政上の都合で延期したといふけれども、工場法實施の準備金は僅かに五萬圓てある。一方に於ては産業奬勵特別免税法案と云ふ美名の下に特權の事業家に保護金を與ふると云ふやうな制度を考へて居る所の政府が、最も大切な勞働者の問題に、僅か五萬圓の金が出せないと云ふ理屈はない筈だと思ふ。

其他今度行はれた租税輕減の諸案の如きも、桑田博士が二月十九日の豫算會議に於て述べられた通り「其減税方針は或は富者に偏し、或は資本家に偏し、下級民に對し頗る不公平なる憾なきを得ず。昨年減税の所得税は最下級民の均霑する所に非ず。今年已に衆議院に提出の相續税の如きも亦然り」とて下層階級の生活問題など云ふ事は、殆んど全く、政界の省みる所となつて居ないやうてある。三月九日の衆議院の委員會が、國民黨提出の外國米輸入税廢止案を、農業奬勵といふ理由て、否決したるが如きも、米を買つて食ふ所の貧民よりも、米を賣つて贅澤をする地主の利害を先きにするものであつて、之も亦社會政策の趣意には全然背くものと思はれる。之を要するに、今日我國の政界に於ては社會政策と云ふ事は殆んど全く實際に於て顧みられないと云つてよい。之は我國の將來にとつて最も憂ふべき現象であると思ふ。

次に民衆夫れ自身の發達の爲めに考ふべき第二の點は、其精神的の開發の方面てある。此中て先づ第一着に考ふべき點は、民衆の政治教育を盛んにすると云ふ事である。之は今までは薩張り行はれて居ない。一體政治教育の最も大事な機關と云ふものは政黨である。西洋などでは、政黨は固より直接に民衆の教育と云ふ事を主眼にして居るのぢやないけれども、平素自分の

立場を民衆に訴へて、そして其民衆の間に自分の根據を据ゑようとして居るからして、常にあらゆる方法を以て民衆に接することを怠らない。先づ演說會をよくやる。新聞を出す、時々の問題について絶えず小冊子などを發行して居る。然るに我國の政黨は如何。有力な機關新聞を持つて居るか。又時々の問題について黨の立場を說明すべき小冊子などを出して居るかと云ふに、ちつとも出して居ない。西洋であれば、例へば二個師團增設問題と云ふが如きものがあるとか、或は海軍の擴張問題と云ふが如きものがあれば、各政黨は直ちに此問題を說明して、そして此問題に對する自黨の意見を最も分り易く書きあらはした小冊子を出して居る。我々外國人でも、時事問題について一定の意見を立てやうとすれば、政黨本部の附屬の本屋に行けばよい。其外各政黨は每年詳細な年報も發行するし。又時には立派な研究の立派な本を發行し、之を安い値段で賣り弘めて、事實上民衆を大いに政治的に教育して居る。然るに我國では之が行はれて居ない。之も畢竟選擧權がまだ制限されて居るんだからして、そこで賄賂其他の買收手段が行はれて、選擧は必ずしも言論に訴へなくてもよい事になつて居るからである。されば我國では平素民衆を教育して自分の黨派の立場を說明して居ると云ふ事は、黨勢擴張の上から必要なことでない。そこで此方面を怠つて居るのだらうと思ふ。政友會にしても、同志會にしても、國民黨にしても、又中正會にしても、一つも堂々たる繼續的の機關新聞と云ふものはない。其黨報の如きも或黨では發行はして居るけれども、內容は頗る貧弱なもので、又其頒布にも勉めて居ないからして、雜誌屋の店頭などに飾つてない。讀まれても讀まれなくても差支ないと云ふ顏付をして居る。况んや時事問題に對して適切な意見を小冊子の形に於て發行するなど云ふ事は殆んど一つもやつて居ない。演說はよくやる。けれども政府黨となると薩張りやらない。例へば昨年桂公を倒す時には、政友會の連中も他の黨派と一所に盛んに演說會をやつた。然し一旦政權を握つて政府に立つと云ふと、もう民衆

には用はないと云ふやうな顔をして、更に公開の演說などにも出て來ない。そこで民衆は反對黨の演說丈けを聞く。詰り片一方丈けを聞く。所謂片言以て訟を斷ずてあつて、政府の惡るい方丈けを聞くから、考が消極的破壞的になるのも無理はない。現に此頃新聞其他の論調によつて見ると、所謂營業稅全廢論が盛んなやうである。然しながら學說上から云ふと、營業稅の今日の賦課法は、或は適切を缺いて居るかも知れぬけれど、之を全廢すると云ふ事は又決して正當でないといふことに說が定まつて居ると云ふ事に聞いて居る。こんな事も民間の攻擊に對して政府も亦起つて其辯明を民衆に訴へるなら、民衆は茲に正當な判斷をなす機會を得るんであらうと思ふ。然るに政府側は何も言はぬからして、民衆は片一方の言ふことばかりを聞いて判斷することになる。獨り民衆に訴ふることを怠るのみてない、政府がまた議會に於てする答辯の如きでも其不親切を極むること驚くべきものである。殊に外務大臣の答辯の如きは、或は「是れ外交の機微に關するが故に茲に明言する能はず」とか、又或は「帝國政府は全力を盡して該案の解決に力を效しつゝあり」などゝ云つて、更に腑に落ちるやうな答辯をして吳れぬ。一體外交は秘密と云ふけれども、例へば三國同盟の如く獨逸が露西亞から戰を挑まれた時に、墺太利が援けるとか云つたやうな事は、無論秘密とすべきものだが、そんな事以外は何も、秘密にすべき必要ないのみならず、却つて平常事情を明かにして置く方は國の爲めによいと思ふ。彼の幕末に方つて、幕府は開國の止むべからざる事を萬々承知して居つたけれども、何分民間ては海外の事情に通じない爲めに尊王攘夷の說が激しかつたからして、幕府は開國の必要と云ふ事と、民間の攘夷論との間に板挾みとなつて、非常の窮境に陷つたのも、一つには時の政府が外交を人民に秘密にした天罰である。私、密かに思ふに、今日の對米外交に於ても或は政府は斯う云ふ窮境に陷つて居やしないかと思ふ。若しも對米外交の次第を早くから民間に明かにして置いて、所謂日米問題に對して民間の輿論をば正

當の解決を爲すやうに導いて居つたならば、今日政府は或は此問題について餘程其苦痛を減ずる事が出來たかとも思ふ。然し之は私の一片の推測に過ぎないんだからして事實に當らぬかも知れぬ。然しながら政府政黨共に、此大切なる民衆の政治教育を等閑に附して居ると云ふ尤めは免るゝ事出來まいと思ふ。

精神的開發の今一つの方面は、狹義の精神教育——之は主として道義的開發の方面を云ふのである。即ち民衆を開發して正義の聲を理解し之に同情し、又之に響應する丈けの素養を作ることに力めたいと思ふ。若し之がないと民衆政治と云ふものは、動もすれば腐敗墮落して、其墮落の底から浮び上る事が出來ぬ事になる。此の點に於て我々の最も感ずべきは亞米利加である。殊に紐育の市政に於て之を見る。紐育に於ては例のタマニーホールと云ふものが跋扈して居つて、同市の市政の上に頗る大いなる障礙を與へて居る。一時は其弊害は極端に達するも、而も何人か一度起つて獅子吼すれば、流石に亞米利加の民衆の精神の底には、其正義の聲と共鳴するものがあつて、民衆亦猛然として起つて腐敗の空氣を一掃しなければ止まないと云ふ意氣を示す。現に近頃三十ソコ〳〵の一靑年が、一度起つて市政の刷新を唱へて遂に擧げられて市長になり、突飛だが併し又頗る痛快な改革をなして、在來の弊習を一掃しつゝあると云ふ報導の如きは、我々の何ともいへぬ欽羨の感情を以て聞く所の話である。かう云ふ程度まで民衆の精神的發達を引上げると云ふ事は非常に必要な事であつて、且つ之は間接であるけれども、實は民衆政治の發達の上から云つて一番に根本的な點であると思ふ。此點に就いては私は世の教育家並びに宗教家諸氏に向つて多大の期待を以て其盡力を要請せんとするものゝある。（三月十四日）

群衆の勢力を利用して國政を左右せんとする風潮を論ず

法學博士　浮田和民

日露戰爭の終りに當り、ボルッマス條約に不平の餘り東京に於て群集の勢力を利用し交番燒討の大騷ぎがあつて以來東京大阪等の都會には危險なる遊民及び輕率なる多數の青年があつて之を煽動すれば頗る政治上に濫用することの出來るといふ事實が分つた。而して第三次桂内閣が輿論及び議會を無視して政權を維持せんとした時又もや東京に暴徒の騷動があつて大阪京都神戶等まで蔓延した。

是等の現象は或る場合に當つて政府の方針が一般人民の心を滿足せしめざる場合に社會的に一種の暴風を吹き起す樣なので兎に角社會に不平不滿の存在して居るといふ明證になるのである。

此點より見れば斯る騷擾の起るのは社會に不平のある證據にはなるが必しも其の不平が正當であるといふ結論にはならぬ。ボルッマス條約の如き固より國民一般に不平であつたけれども此時日本政府は此の條約より以上の平和條約を爲し得る實力がなかつた。彼の條約で滿足せざれば戰爭を繼續するの外はなかつた。此時世界の同情を失ふことをも顧みず戰爭を繼續する勇氣は政府になかつた。政府に其の勇氣の無つたのは畢竟國力がこれ以上戰爭を繼續することを許さなかつたからである。そこで政府は民間の不平不滿を顧みず彼の條約を締結した。これは政府として當然爲す可き事て暴動を行つた群衆の方が爲す可からざることを爲したといふ丈の事である。

昨年桂内閣破壞の當時群衆の行つた暴動は桂内閣が倒れたから正當なる運動で大に成功した樣に見ゆるけれども其實桂内閣の倒れたのは群衆の勢力によつたのではなく海軍閥の棟梁山本伯が出てゝ桂公に詰腹を切らせたからである。余は維新以後モッブの運動で成功

した例は未だ一つも見たことがないのである。昨年支那事件て大分部下の群衆が騒ぎ阿部局長まで殺したけれども到頭成功しなかつた。今同海軍收賄問題て内閣全體の責任問題となり相變らず群衆の運動があつたけれども是れ又た失敗に歸し終つた。

これによつて之を見るに群衆の勢力を利用して國政を左右せんとする或る人々の計畫は畢竟成功しないものと見て差支ないのである。而して其の成功せざるには正當の理由がある。

第一、群衆の精神は個人の心理狀態に比して甚だ劣等なるものである。個人としては理性及び常識ある人の爲し能はざることを群衆は平氣て爲すのである。彼等は個人としては大人に屬するけれども團體としては小兒以下若しくは不良少年と同樣の行動を爲すのである。政府が外國と締結した條約が不滿であるからと云つて人民を保護する交番や一般公衆の交通機關たる電車を燒討するといふは沙汰の限りである。全く狂人の所爲てある。畢竟群衆の精神は盲動的であつて物の道理を辨へないといふことが分る。

第二、群衆の精神は個人の心理狀態に比して劣等て矛盾が多く、極めて不合理的である上に極めて健忘性てある。第三桂内閣の成立に對しては非常に反對し乍ら同樣民意を無視し藩閥の餘威を恃む山本内閣の成立に對しては最早や根氣負けして反對することを爲さなかつた。二月十日の議院に於ける政友會の優勢は最初から分り切つて居たが群衆の運動は其の當日に始まつて其の以前には何等の運動を爲さず其後も漸々沈靜して了つた。恰かも驟雨の降り來つて過ぎ去る樣なものて政府は暫時ぢつとして堪へて居れば無事に濟むのである。甚だ恐る可き樣てあるが甚だ與みし易いのである。又た愈々謀叛又は戰亂となる場合には軍隊を繰り出すまでの事てある。

第三、群衆の勢力を利用して國政を左右せんとするは立憲政治の下に在つては時代違ひと言はねばならぬ。立憲時代に於ては正當なる輿論さへ成り立てば斯る盲動的勢力を利用せずして立憲的に國政の改革を爲

す道がある。例へば政府の方針が惡しければ全國の輿論を組織して正當に發表すれば其の效力は永久的で遙かに一二都會の群衆的運動にまさるのである。若し又た議會が民意を代表せざる場合には次期の總改選に於て斯る議員を叩き落し民意に適ふ代議士を選擧することが出來る。然るに我國では輿論薄弱にして且つ選擧區までが政治に冷淡で腐敗議員や腐敗政黨に一任するから不正なる内閣や腐敗政黨が議會に多數を制するのである。斯る政府及び議會に反對の政黨員たる者が益々自己の一致團結を計り且つ全國の人民を警醒せしむることを爲さず、群衆一時の激動を恃み之に依賴して國政を左右せんとするが如きは抑も政府反對黨として大なる心得違ひである。

但し群衆の運動は決して合理的でもなければ立憲的でもないけれども何か政府に對して一般國民の心裏に不平不滿のある際に起るものであるから群衆の騷擾そのものは不合理であつても一般國民の間に不平不滿のあることを證明する晴雨計の樣なものであるから政府は大に自から内に反省する所あらねばならぬ。今回海軍收賄事件によつて國民一般が陸海軍及び一般政府の行政に不安の思ひをなして居ることは事實である。政府は此際海軍行政のみならず陸軍も其他の各省も特に宮内省も一大改革を爲して人民の疑惑を解くべきである。若し自からそれが出來ぬとすれば國民に向つて責を引き自決する所がなければならぬ。

余は群衆の勢力と輿論の勃興とは別物であると思ふ。今日群衆の爆發を見るのは政府が權力を亂用し而して之を牽制するに足る輿論がないからである。國民中の不平不滿が他に救濟の道なく欝結するときは野心家の乘ずる所となり其の煽動によつてモッブの運動が起るのである。全く專制時代から立憲時代に移らんとして健全に移り得ざる過渡時代の產物と見る可きものである。眞の輿論が勃興すれば斯る群衆の騷ぎは其の跡を絶つことになる。之を利用せんとするは決して立憲的政治家の爲す可き事でない。又た政府としても每度輦轂の下に群衆の騷擾を惹き起すことは國家に對し

相濟まざる事であり、又た中外に對して威信を傷くること甚だしいことである。因て政府としても自全の道は平素眞正の輿論を奬勵し又た努めて此の輿論を指導し而してまさかの場合には全然輿論に依賴し天下と與に天下を治むるの決心を有することである。是れが立憲政治の骨子といふものである。

民衆運動を樂觀す

林毅陸

一

ポーツマス條約の時の國民大會以來、特に一昨年末より翌春に亘る閥族打破の大運動以來、群衆の示威運動に依つて、時局問題の解決を促すの風、一種の流行となれる樣である。是は見樣に依りて、種々の批評がなされ得るであらう。併し大體より言へば、是は勢の然らしむる所である、時運の致す所である、人力の阻止し得ざる新時代の大風潮である、而して其性質上歡迎して然るべきものである。

率直に言へば、詰まり日本國民は今漸く政治的無神經より覺めんとするのである。其の遲鈍なる政治的感覺が、今漸く多少の銳敏を呈せんとするのである。一般の公衆が、政治を官僚の手に放棄し、又は之を政黨の手に放棄し、自分等は毫も之に與かり得ざるが如くに考へ、若くば之に干與せんことを希ふだけの感覺も無く、唯茫然として見物して居るのは、決して立憲政治の本旨で無い。參政權を有する立憲治下の民は、被治者にして同時に治者である。彼等は一切の政治問題に就て、干與し容喙するの權利と義務とを有する。政治は專門政治家に一任し置くべしと云ふは、お役人樣にお任かせ申すと云ふと、同一の愚見である、同一の奴隷根性である。故に一般公衆が政治を我物の如くに感じ、政治問題に對して銳敏なる感覺を起し、不平あれば起つて之に干涉せんことを要求し、大會となり示威運動となるは、正に國民の政治的覺醒を示すものとして歡迎せねばならぬ。

二

或は群衆の示威運動の餘りに無規律なるを責むる人がある。是は我輩も至極同感である。併し民衆政治の初期に入りつゝある我國民に向ひ、俄に多きを求むるは間違である。不慣なるが故に訓練も無い。訓練なきが故に規律も無い。又團體的活動の修養淺きが故に、統一も無い。從つて滑稽もあり、失態もあり、亂暴もある、譬へば擊劍の稽古を始めた少年の如きものである。竹刀の使ひ方は、追々の上達を待つ外は無い。今の狀態のみを見て酷評を下し、又甚しく悲觀するは、是れ社會進化の理法を無視するものである。

憲政の祖國たる英吉利は、示威運動の方法に於ても他に模範を垂るるのであるが、然も勢激したる場合に於ては、隨分亂暴なる事實を殘して居る。現に昨今英國を苦めつつある夫の自治案に對するウルスター人の反對運動を見よ。彼等は義勇軍を組織し、參謀部を設置し、內亂を賭して迄も、反對せんとして居るのである。此の如きは所謂暴民政治の域を脫し、寧ろ叛民政治とも稱すべきであると思ふ。然らば是れ英國の立憲政治を辱むるものなりやと云ふに、我輩は寧ろ否と答へたい。何となれば、自己の利益及自由を防護するために、極力政府に抵抗する此意氣此勇氣こそは、即ち英國憲政の基礎であるからである。英國の一隅一地方に於て、苟も此意氣の存する限り、英國の憲政は萬々歲である。英國首相アスクイスが、政府の權力を振り舞はさんともせず、又議會多數黨の勢力を濫用せんともせず、三月九日ウルスター人に向つて、讓步案を提出したるは、流石に欽すべき態度であるが、それよりも、政府をして此讓步を爲すに至らしめしウルスター人の反抗の意氣こそは、更に大に偉なりと謂はざるを得ぬ。事情の大に相違する所はあるも、之と比較すれば、日比谷の示威運動の如き、兒戲中の兒戲に類するに非ずや。

三

近時元老次第に凋落して、國家の中心力消失せんとするに當り、一方に於て動搖測り難き無規律無責任の

民衆運動流行の兆を示し、國政をして次第に紛亂に傾かしめんとするは、洵に寒心に堪へずとて、深く慨嘆する人もあるやうである。一應如何にも道理がある樣に聞える。然しながら是れ實は一を知つて二を解せざるものである。我輩とても今日の狀態を以て、滿足すべきものとは認めないが、併し現在の動搖紛亂は、舊中心亡びて新中心未だ成らざるに因ることを知らねばならぬ。新中心は、此紛亂中より自ら生じ來らんとせることを知らねばならぬ。而して今後新中心となるべきものは、即ち民衆其者である。民衆、今日に於ては未だ中心力たるに足るべき規律と統一とを有せず。故に今や中心力たるべく努力中である。小膽短見なる論者の非常に憂慮する所のものは、實は此努力其者であるのである。

立憲政治は民衆政治である。民衆政治の中心力は、勿論民衆にあらねばならぬ。元老政治が元老を以て中心とする如く、藩閥政治が藩閥を以て中心とする如く、民衆政治は民衆を以て中心とする。今日我國に於て國家の中心缺如し、不安に堪へざるが如き外形を呈するは、是れ元老政治又は藩閥政治既に倒れて、然も民衆政治未だ確立せられざるに因る。民衆一たび其實力を自覺し、其權威を發揮し、規律あり統一あり從つて實効ある活動を爲すに至らば、國家の中心點直に玆に成立するのである。舊中心は舊時代と共に葬らるべし。同時に新中心は新時代と共に生れ出づべし。少しも無益の心配をなすに及ばぬ。

四

凡そ國家に於て最も憂ふべきは、元氣の消磨である活力の衰弱である。元氣活力にして存せんには、必ず生存の方法を、自ら工夫發見して行く。亂暴にもせよ、無規律にもせよ、不平ありて示威運動を爲すの勇氣も無く、政府當局に肉迫するの氣力も無く、唯默從するのみであつたならば、是れ國家滅亡の時である。風あれば、以て帆を揚げ船を行ることが出來るけれども、無風狀態となりては、帆の揚げ樣も無い。水あれば、其力を利用して機關を動かし電氣を起さしむることも

出來るが、水無くては手の附け様が無い。國家にも何等かの力の存在が必要である。其力たるや、時として常規を逸し、亂暴に流るることもあらん。危險を感ぜしむることもあらん。是れ風の時として滔天の浪を揚げて、梶を毀ち船を覆し、又水の時として堤防を破り家を流すと同じである。

近頃の無規律無統一なる民衆の運動が、小膽家を辟易せしむるは、宛も風伯水師が、無智無能の野蠻人をして唯だ〱恐怖心を起さしむる様なものである。人智進みて、利用善導の方法發見せらるれば、不羈放縱の天然力も怖るるに足らぬのみか、却つて人生に偉大なる福利を與へる。一見危險千萬なるが如き民衆的勢力も、利用善導宜しきを得れば、必ず國家全機關を動かすの貴重なる動力となり得るのである。若し此意味に於ての進歩發達が出來ぬとすれば、其れは我々日本人の政治的低能兒たることを意味する事になる。我輩は日本國民の政治的能力を、斯くも劣等なりとは信ずることが出來ぬ。

五

民衆的勢力の利用善導に於ては、識者先覺者の責任最も大である。國民鋭氣の爆發をして適法の形式を取らしめ、又群衆の運動をして規律あらしむべく、識者は種々注意せねばならぬ。民衆の自覺を助くると同時に、其の欝勃たる活氣と勢力とを善導するは、經世家の任である。覺醒せんとしつつある民衆の新勢力に乘つて、政界雄飛の一方策を樹つるは、政治家に於て不當とせざるも、然も徒らに愚民を煽動して、民衆的勢力を自家の野心の爲に惡用するが如きは、斷じて排斥せねばならぬ。

勿論我國にも追々デマゴーグは現れ來るであらう。是は民衆政治に伴ふ避け難き病氣である。我々は唯國民自身の政治的智能の發達に依り、其弊を成るべく小ならしむることを期するより外に、道は無いと思ふ。且デマゴーグなる者は、夫の藩閥政治家が國家の權力を壟斷して、怪暗陰險の中に私利を圖るに比し、罪も少なく、又害毒も少ない様である。必ずしも深く怖る

るには足るまい。

又政治家が餘りに民意を無視し、輿論を侮蔑し、其の反動として民衆の憤怒を激發し、遂に良民を化して暴民とならしむるが如きは、最も愼ねばならぬ。此前の桂内閣の場合と云ひ、今の山本内閣の場合と云ひ、當局者の措置宜しきを得ざるが爲めに、民心の激昂を助長し、不穩危險の形勢を激成したるの跡蔽ふ可らずである。彼等自ら反省することを爲さず、漫に他に向つて暴民呼はりを爲すは、厚顔の至りと謂はねばならぬ。

要するに我輩は民衆的勢力の崛起を、憲政の進歩のために喜ぶものである。我輩は一般公衆の政治的感覺が、益々鋭敏となり、時局問題に對する彼等の發言の要求益々切實となり、機會ある毎に堂々たる示威運動を行ふて、次第に訓練を積み、又次第に統一ある勢力を作り、斯くて實際政治の上に十分の權威を發揮し、以て政府及政黨をして、其の規律あり統一ある號令に服從せざるを得ざるに至らしめ、以て「人民に依つて行はるる人民の爲の政治」を、完全に實現し得んことを切に希望する。

又政黨の方より言へば、此民衆的新勢力を巧に善導統一して、其の勢に駕し、其力に乘ずること、宛も龍の雲に於けるが如くし、以て之を政黨の勢力の基礎と爲すに於て、始めて今後の政治舞臺に覇を唱へることが出來るのであるから、今後の政治家は主として此方面に注意を拂はねばならぬ。藩閥と提携し、官僚と結托し、其の積威餘勢を假りて政界に事を爲さんとするが如きは、既に時勢後れの方略である。

院内の議會と院外の議會

永井柳太郎

一

明治三年に發布せられたる五箇條の御誓文に「廣く會議を起し萬機公論に決すべし」と云ふ一條がある。此御言葉の如く萬機を國民の公論に依つて決し、以て

君民同治の實を擧ぐるは、獨り先帝の大御心であつたのみならず、また實に維新以來の國是であつた。而して我帝國議會も亦、此國是に基きて出現し、此國是を遂行するがために存在するのである。然るに昨今の議會は果して此目的に適ひ、眞に國民の公議輿論を代表しつゝあるであらうか。昨今の議會に於ける各種の議案に關する議決は、殆んど事毎に國民の要求に反してをる。例へば海軍問題に關しても、また廢税問題に關しても、全國の新聞紙若くは人民大會が要求する所と帝國議會の議決とは、常に相反してゐた。即ち議院外の國論は囂々として內閣の無責任を非難し、その辭職を要求するに拘らず、議院內の多數は、收賄事件を以て國家の品格を傷けたりと認めず、その責任を問ふの時機にあらずと決し、營業税全廢案に對しても亦、明かに議院外の輿論は贊成を表したるに拘らず、議院內の多數は此輿論に逆行し、反對の議決をしたのである。如斯く議院內に於ける議決と議院外に於ける議決とは常に矛盾し、遂に人をして議院內の議決が國民の輿論を代表せるか、將た議院外の議決が國民の輿論を代表せるかを迷はしむるに至つたのである。斯くて國家に二種の全く相反せる輿論が存在する如き奇觀を呈するに至つたが、これ今日に於ける我議會の組織其物が國民の公議を網羅し、その意志を代表するに不完全なることを曝露せるものでないか。惟ふに我國に於ても、また議院改革の機大に切迫せることを暗示して居るのである。此缺點が改革せられ、議會が眞に國民の輿論を代表し得るに至るまで、かの國民大會の勃發の如きは、これを抑壓すること不可能ならん。

二

十八世紀の末頃、佛國に於ては、その政權常に小數なる貴族と僧侶との專斷する處となつて居た。其頃の統計を見るに貴族の家族は二萬五千乃至三萬で、その人口は約十四五萬であつたらしい。僧侶の數も亦之と同數であつたやうであるが、此小數なる貴族及び僧侶が、當時の佛蘭西に於ける政權を左右し、その領地は佛蘭西の大半に及ぶといふ有樣であつた。そして或者

はベルサイユに、或者は巴里に、宏壯なる邸宅を構へ豪奢なる宴會を開き、榮華なる生活に醉ふて居た。或貴族の如きは、その邸宅の周圍に繞らしたる堀の蛙が鳴いて、安眠を防害するといふので、附近の農民に命じ、その貴族が安眠せる間、竿を以て終夜その水面を叩かしめたといふことであるが、これに依て見ても自餘の國民が如何に虐待せられたかゞ明白てある。從て一般の庶民に至ては政治を議するの自由なく、唯貴族や僧侶の命令に屈從するの外無き地位に置かれた。玆に於てか中流以下の人民は、自ら經濟界及び文學界に其志を伸べ、其力を用ふるに至り、その結果自ら個性の權威を自覺し、獨立の精神を發揮する至つた。それから貴族と庶民との間に於ては事毎に意見の衝突を惹き起し、遂にルイ十六世位に卽き、財政の困難に迫られ、相次て重税を課するや、人民は議會に代表者を選出せずして、その租税をのみ負擔するを肯んぜず、千七百八十九年遂に國民議會の召集を見るに至つた。

三

英國に於ても亦同じく十八世紀の初めまでは、その政權が尚未だ上院に獨占せられ、議會ありと雖ども、その實質は貴族及び大地主の利益を代表するに過ぎなかつた。從て議會の議決は事毎に國民の要求と相反し遂にカンニングの如きをして公然と議會に於て新聞記者席を指し、「彼處に國民を代表せる第二の團體あり。」と叫ばしむるに至つた。玆に於て議院の內容を改革し眞に國民の輿論を代表するの機關たらしめんとする運動は次第に勃興し、遂に千八百三十二年の議院改革案を出したのである。議院改革案は庶民の選擧權を擴張し、その代表者を激增せんとするものであつたから上院は此改革案に對して猛烈に反對し、大多數を以て其議案の通過を否決したのである。そこで當時の首相グレー卿は國王に請願して多數の貴族を急造し、以て反對者を抑壓せんとしたのであるが、國王之を許し給はず、遂にグレー卿は辭職した。玆に於て國王は彼の武名赫々たるウエリントン公を起たしめて、內閣を組織せしめ給へりと雖、然かも國民の決心牢として拔く

べからず、流石ナポレオンをウォーターローに征服したる勇將も、遂に國民の決心を征服し兼ねて、止むなく辭職し、再びグレー卿を起たしむるに至った。そこてグレー卿は再起の條件として國王より貴族を急造し得べき許可を得たので、上院も亦遂に屈服し、千八百三十二年六月四日、かの有名なる議院改革案の通過を見るに至つたのである。如斯にして英國の議會は今や遺憾なく全國民の意志を代表し、如何なる暴君も、また如何なる貴族も、これを壓迫するに由なく、國民の權利と利益とを保護すべき機關としてウエストミンスター橋畔に屹然とその光輝を放つて居る。

四

今日の我帝國議會は正しく、かの國民議會の召集以前に於ける佛蘭西の貴族會議若しくは議會改革案の通過以前に於ける英國議會の如きものである。鵜澤博士は衆議院に於ける多數の議決は即ち國民の輿論なりと斷言せられたが、如斯きは尚未だ我帝國議會の性質を知らざるものであつて、今日の議會が何人を代表せるかを知る者は、眞の國民の輿論は議院以外にある事を斷言するに躊躇しないであろう。鵜澤博士が大地主と大資本家とを代表するに過ぎざる今日の衆議院の決議を以て、國民の輿論なりと云はるゝは、尚ほルイ十六世の大藏大臣ネッケルが貴族會議の決議を齎らしてルイ十六世に「國民も亦余の意見を最上と認むるに一致したり」と奏上したるに相似たるものである。焉んぞ知らん國民の眞の要求は、議院の決議以外に存せんとは。世上議院の周圍に群集したる人民の暴動を論じて、その非立憲なるを唱ふるものあり。群集の暴動是なるか非なるか、之れは別問題として、兎に角今日の如く、議會が國民の意志を代表するに充分ならざる以上重大なる問題の起る毎に、その議決が國民の要求に反し、國家の發達に有害なりと認むる志士等或は過つて事を起すなきを保し難いと思ふ。議會の輿論に背反する事愈々甚だしくして、院外の運動愈々猛烈となるべきは歴史の繰り返す所である。而して是を救済するの途は唯一のみ、曰く選擧權擴張是れである。選擧權

を擴張し、國民をして遺憾なく其意志を議會に發表せしむるべき改革を斷行せずして、院外に於ける運動を抑壓せんとするが如きは、恰もその山巓に摺鉢を伏せて、櫻島の爆發を防がんとするが如きものである。日本に於ける憲法政治の目的は、かの明治二十一年の詔勅に明白なる如く、君民同治てある。故に我國の選擧權は、かの英國に於けるが如く、納稅額の多寡を標準として分配すべきてなく、同治力の有無を標準として賦與すべく、また要求すべきてある。少くとも中學以上の敎育を受け、君主の大命を奉じて國政の詮議に任じ得べき常識と赤心とを有する者は、總て之を要求し得なくてはならぬ。而して納稅額の多寡の如きは問ふ所にあらざるべし。惟ふに此度の改革運動の如きも、その中心たりし者多くは青年てあつたらしい。彼の尾崎行雄氏を除へ、民黨の首領にして其馬を陣頭に進め國民と共に内閣に肉迫し得たるもの果して幾人ありしぞ。彼等は新時代の革新的運動の中心たるには餘りに多くの情實を過去に有し、餘りに少き氣力を現在に殘す。日本は既にパッシング、ゼネレーションに屬する者に依賴すべき時機てはない。日本の經管はカーミング・ゼネレーションに屬する意氣旺盛の青年に待つ。吾等は青年の間に、選擧權獲得運動の起るべきを期待し、その成功を祈るとゝもに、議院内の議決と議院外の議決とが、一致する時代の速かに到達せんことを望む。

東宮殿下の御補導を置かせらるゝに當り

帝王學に就いて卑見を述ぶ

皇太子の御教育は三德を並び勸めざるべからず

(偏文教育を容さゞると共に偏武教育をも亦容れず)

福本日南

東宮殿下の春秋漸く長じさせられて、來る四月廿九日で滿十三歲にならせらるゝ。最早や御成年に達せらるゝのも僅々五ヶ年の事である。此秋に當つて東宮の御師傅を選ばせられ、未來大日本天皇の君德を御養成あらせられんとするは、世にも有り難き事と存じ奉る。

古來太子の師傅を選ぶの一事は、何れの立君國に於ても忽せにせられざる處であるが、就中東洋に於ては最も意を茲に用ひ、所謂太師太傅には學德一世に冠たる人を以て之に充てらるゝ事になつて居る。從つて師傅其人を得ると得ざるとによつて、未來の天皇の君德の上に影響した跡も亦至大であると云はねばならぬ。

今其最も著しい二三の例を擧げて之を立證すれば、上世に於て聖帝と稱され給へし仁德天皇は如何でおはしたか。夙に碩學なる王仁之が師となつた事は何人も知つて居る事である。當時皇弟たる稚郞子王も同じく此人の教育を受けさせられた。此王仁が御兄弟を御教養申上げた其結果は先づ御紹統の間にあらはれた。稚郞子は弟を以て兄に先んじて皇位を踐むべからずと主張され、大鷦鷯尊は父公の御志に違つては相成らぬ

と固執され、三年空位の後、終には大鷦鷯尊が御登極あらせらるゝやうになつた。已にして此君が御世を知らし召すに至らせらるれば、何と仰せられたかと云へば、「民富めば朕富む」の御意があつた。「民富めば朕富む」此御聖旨を以て一國に臨ませられた。國民の幸福は之より大なる事はない。天下後世、人主の模範として景仰したる所以のもの、抑々偶然ではない。而して聖徳の玆に至らせられたのは、其初めに於て王仁の御教養が與つて力あるを疑はぬ。

次に帝國の制度文物をして煥然として面目を改め、日の出る所の帝國の文明をして世界の東半球に光耀せしむるに到らしめ給へし天智天皇は如何と見奉れば、又夙に南淵先生の、天皇の德器を成就し奉られしあり、之に加ふるに中臣鎌足の又その講學を助くるあつて、然る後天智の天智たる所以ありと云ふ事に躊躇せぬ。

而して近くは明治天皇陛下にておはします。天皇の御師傅にして世に聞えたる人々は、陛下已に御位に即かせられた後にあれば、太師太傅を以て之に擬する事は形の上から申せば失當である。さりながら陛下は十七歳にして皇位に即かせられたから、御即位當時は所謂幼冲の天子である。故に左右に侍して其御學問を助け奉つた人々は事實の上からは御師傅も同樣である。而して其人々は後の元田永孚伯の如きあり、後の副島種臣伯の如きあり、後の山岡鐵太郎氏の如きものあつた。

扨此三氏について其人を見れば、副島伯の明達、元田伯の純誠、山岡氏の剛毅。此三つは內外人の見て何人も疑はざる所である。試に副島伯が如何に明達であつたかと云ふ一二の例を擧ぐれば、維新の當時何人もまだ國を憲政に入れるなど〻云ふ事は、殆んど夢にも思はざる際にあつて、早くも此帝國を憲政國にせざるべからざる事を主張して、憲政取調の事を建議せられたと云ふ事である。之は伯感服者の口から出た話ではない。今尙現存する老國學者の一人から自分は嘗て聞いた事があるが、其人は國政上については極めて頑固

な意見を持つて居る人てある。其談に、副島伯と云ふ人は言語道斷の人てある。御維新の當時に於て早く天皇の大權を局限すべき制度を立てねばならぬと云ふ事を京都の朝廷に於て主張された。誠に畏れ入つた事てあれ丈けは伯に不似合な主張てあつたと憤慨して申し聞けられたが、此老學者の伯に不似合と云ふ所が即ち伯の伯たる所以てある。又或時には、帝國上下の禮服を洋服に改めようと云ふ議が動いたのてあつた。其際には滿朝の保守黨は皆之に反對した。就中縉紳家の華族にあつては天皇に夷狄の服をお召し遊ばすやうにするなどとは怪しからぬといつて敦圉かれた。爲めに廟議は大沸騰。何れの日に決定すべきやも測られなかつたのてある。此際副島伯の如きは漢學の大家にして兼て國學家てある。定めて縉紳家の主張と一致せらるゝてあらうと何人も豫想した。然るに伯は其廟議に參して、古は「趙武靈王胡服して胡を征す」と云ふ事があります。胡服して胡を征すとの御意圖を以てお召しになれば結構ぢやないかと云ひ出された。其說實に意表に出てた。それて豪傑連の躊躇して居た人々も、成程胡服して胡を征せよ、それは妙てあるといつて、左しも沸騰して居つた大議論が一朝にして決したと云ふ事てある。明達の人に非ずんば、斯の如き議論は出ないのてある。

又更らに元田伯が侍講として常に規箴を先帝陛下に納れられた事は今に於て人々の記憶する所てあるが、現に今日まて殘つて居る伯の進講錄を把つて之を讀むに、其尙書を進講された際の如き滿腔の精神を以て君が堯舜にせざれば措かぬと云ふ概が一字一句の間に見える。之を誦讀する度に感涙の滂沱たるを禁ぜぬものがある。かゝる至誠を以て補導し奉られたのてあるから、陛下の御德器を成就させられたのも無理はないと思ふのてある。

更に山岡氏の上に見到れば、剛毅朴訥は仁に近しと云ふのはかゝる人を云ふのてあらうと思はるゝ位てある。世間ては氏が先帝に角力のお相手を申上げて何とやらと云ふ誤傳がある。此誤傳のよつて起つた當時の

事情を嘗て承つた事がある。先帝は御膂力も强盛なお方ておはしましたから、御壯年の頃には侍從などをお相手になされ、盛んに角力を遊ばした。侍從の多くは陛下に匹敵し得るものはない。それて稍々陛下も御膂力御自慢の念がおはしましたてあらう。確か伊太利の皇太子が御來遊あらせられた當時の事てあつたと思ふ。陛下は之を濱の延遼館に御訪問あらせられて盛んなる御饗應があつた。其際陛下は非常に御酒を過させられ、大御機嫌にて還御になつた。扨、還御の後例によつて左右の人々に角力を挑ませられ、何人も相手に出ては取つて投げらるゝ。が獨り山岡氏のみは椅子に凭つたまゝ動かうともせぬ。陛下は聽て山岡の肩に手をかけさせられて、イザ角力はうと頻りに其肩をゆすぶられたが、豪傑にして武人てあつた山岡の事てあるから恰かも泰山喬嶽の如く、如何に手をおかけになつても貧乏揺ぎもせぬ。陛下は稍々激せられて更に引立てようと遊ばす際に深く御酒を召上つた結果てあつたらう。誤つて足を滑らせられた。之が爲めに其際は餘程御不興てあらせらた。山岡氏は翌日から畏れ入りを申上げて出仕せぬ。英明の陛下てもおはしますから深く之を叡慮に掛けさせられ、山岡に是非出るやうにと度々侍從を遣はされる。が山岡は「斷然罷り出ませぬ」と申し切つてお斷りをする。更に何故に出ないかとの勅問がある。其時山岡は、臣等御補導の任に居ながら前夜の如き御振舞を陛下の上に見奉ると云ふのは如何にするも相濟まぬ。夫れ故に最早や參朝致しませぬと申し上げたのてある。陛下は深く之を遺憾に思召し、さらば如何にすれば參朝するかと又々勅問させらるゝ。山岡は之に對し、天皇の尊貴を以てしてあのやうに大醉遊ばすと云ふ事は畏れながら君德に拘はせらるゝ。今度は御酒量を適度に限らせらるゝと云ふ事を拜承したならば之まて通りお側に事へ奉りませうと申し上げた。山岡も山岡てあるが、こゝは先帝の有り難い所てある。山岡の申す所に從つて今後は深く謹む。夫れ故に相變らず出仕するやうにとの御意てあつた。玆に至つては山岡たるもの感泣せざるを得ぬのてある。君主

の御酒量を限り奉つて自身酒を飲んでは相濟まぬと云ふので、さしもの大酒家が、以來一切禁酒をした。やがて此事が又叡聞に達すると、陛下は左までは餘りの事と思召して、山岡に今後酒を飲む事を許すから、相變らず飲むやうにと云ふ御沙汰が下つた。それて後には山岡も再び杯を手にするやうになつたが、或時笑つて人に語つて、己れの飲む酒は勅許の酒だと云つた事がある。

三氏者の君王に奉戴した事斯の通りてある。明治天皇陛下の御英明と其御仁德並びに其御乾剛は永く國史の簡冊を燿する所であるが、其御英明については副島伯を回顧し、其御仁德については元田伯を懷想し、又其御乾剛については山岡氏を思ひ忍ぶものがあるてはないか。師傅の忽かにすべからざる斯くの通りてある。

側かに承れば、近頃我が宮闈の裏にはホーヘンゾルレン家諸公子御教養の、御家風が頗る影響する所あつて、左右補弼の重臣は概ね皆範を茲に取つて參襄し奉ると云ふ事てある。如何にもホーヘンゾルレン家の諸王子、就中王太子に對せらるゝ嚴厲なる御教育法は確かに御參酌の價あることは疑ない。さりながら玆に大いに參照せざるべからざるは、彼の國と我が國との間に立國上根本義の相違あることてある。ホーヘンゾルレン家は獨逸の一王國プルイスより起り、四方を拓伐して然る後獨逸の帝位を收められた御家てある。即ち申さば一小王國から起つて歐洲にあらはれたる王室てある。故にフリードリッヒ大王以來ミリタリズム即ち軍事教育を以て其他の諸教育の首位に置かれ、王子就中王太子を世々軍人に養成し來られた。之は勢然らざるを得なかつたのてあらう。從つて今日獨逸帝國に君臨せらるゝも其帝位たるや恰かも我舊時の德川氏が征夷大將軍として三百諸侯に臨んだのと一班てある。之は取りも直さず霸王の亞流なりと斷言するに憚らぬ。其證據は獨逸憲法上の「帝王の地位」にも見える。我國の如きにあつては、皇室費は何處までも皇室費て、皇室と離るゝことの出來ぬものてある。それが獨逸憲法

の皇室費の所に見到れば、決してホーヘンツルレン家に附いて居るものではない。獨逸皇室費は獨逸に君臨せらるゝ家の御費用と云ふ事に極つて居る。下世話の言葉を以て之を云へば役得ともいはうか。皇室費が役得たる御家と我皇室との間には、大なる相違があるではないか。尙遡つて歐洲の皇帝の地位を云はんか。Empreur 若くは Emperor と云ふ字を我國に譯して皇帝と云へば、國語の天皇と同一義なるかの如くなるも人々の知れる如く、此等の Empreur 乃至 Emperor はもと、羅甸語の Emperator より來り、將軍の義である即ち我が舊封建時代の征夷大將軍などと相當する言葉である。征夷大將軍と天皇とには、我國には混淆せんと欲するも混淆し得ざる意義の別がある。それでかゝる歐洲の王室にては尙武的教育、軍人的教育を主とせらるゝは王室相當の事であるべきも、萬古の天皇の親王皇子を御教育あらせらるゝのは、其間に自ら別なきを得ないのである。

之を我國の根本義に照せば、皇祖の詔に宣はく「豐葦原の瑞穗國は、吾皇孫の知らさん國なり。爾皇孫就きて知ろしめせ。天日嗣の隆えまさんことは天壤と窮り無かるべし」と仰せられたのである。之が我が大日本帝國憲法乃至皇室典範の土臺である。而して茲に「知らす」と云ふ言葉は御所有の義ではない。御統治の義である。

扨、此帝國を御統治あらせらるゝには如何なる君德を以てせらるべきか。皇祖は以上の大詔を降さるゝと同時に、更に皇孫に三種の神器を賦與せられた。上世に於ては無形の教義を多くは物に托せらるゝ。之は中外となく殆んど同一である。今此三種の神器は「天日嗣の璽符」として即ち延喜式などの後世振りの語を以てすれば「天皇の璽符」として賦與せられたのである。其神器は人々の知るが如く、劒・鏡・璽の三つである。此三つには如何なる意義が托せらるゝか。鏡は即ち智に象り、明に象り。劒は即ち勇に象り、武に象り。璽は即ち仁に象り、信に象つた。抑々智仁勇の三者は天下の達德なりと云ふてはないか。此三德を兼備へさせ

られて然る後寶祚の隆んなる天壤と窮り無かるべしと云ふのである。故に我天皇の尊位を踐ませらるゝ御方は、勇は勿論、併せて智仁の兩徳をも備へさせられねばならぬ。就中皇祖の最も重きを置かせられたのは其御鏡てある。故に皇祖は特に皇孫に勅して「我が皇孫此鏡を視給ふこと、我を視るが如くせよ」と仰せられたのてある。之を隣邦の古聖人が大臣學を講じた其三綱領に見るに、「大學の道は明徳を明かにするにあり」との語は、「此鏡を視給ふこと我を視るが如くせよ」と仰せられた皇祖の勅語の註解に充つべきてある。それて列世の天皇は眷々として此三德を服膺し來られた。就中智徳は第一てある。而して仁勇の兩徳をも兼ねさせらるゝ。御覧なさい。天皇の御諱に「仁」と云ふ字を必ず附けさせらるゝのは其一徴とも申し奉らうか。又皇族中御懿親の有栖川宮家が世々「戈」と云ふ字を其名に用ひらるゝ。例して云へば幟仁、熾仁、威仁、裁仁皆肩に戈を負うて居らるゝ。是れ又皇祖の勅語に基かれるのてある。斯るやんごとなき皇室にておはしませば天日嗣の日の御子たる皇太子の御教育は、偏文教育を容れざると共に偏武教育をも容れぬのである。畏けれども明治天皇陛下の上に見奉れば、天下の達徳たる智仁勇の三徳を遺憾なく御兼備あらせられたてはないか。而して陛下の玆に到らせらるゝ所以については、前に述べた通り、元田、副島、山岡等の諸君が左右に奉侍し、其御達徳を大成し奉るに與つて力あつたのてある。

幾年の前てあつたらうか。東宮殿下がまだ極めてお小さい時分、學習院に通はせられた時に、一日教官は東宮御同級の一體に對し、諸君は諸君の最も欽仰する人物を擧げよと命じた事がある。其際小さき學生の多くは概ね天皇陛下と答へたのてある。順は廻つて東宮殿下に及んだ時に、殿下は「源義經」と答へさせられた。已にして宮中に歸らせられ、お附きの人々に向はせられ、「今日は教師から斯く〳〵の間があつて、自分はお祖父さまと答へようと思つて居たが、學友が大概天皇陛下と申したので、同じ事を答へるのも如何てあ

つたから、源義經と答へて來た」と御意あつたやに承知する。之を承つた時に實に欣喜に堪へなかつた。此御幼少なる東宮の御考中に、明治天皇陛下を除けば、人臣列に於ては源義經が御理想の一人であると云ふ事を知つた。義經の英武たることはフリードリッヒ大王に譲らぬ。義經が鵯越を越す時には何と云つた。鹿の越える所は馬の越える所なりといつた。フリードリッヒ大王も亦何れの險山を超えらるゝ時てあつたか、山羊の越える所は馬の越える所なりと云つた。彼は中歐の義經である。之は日本の義經である。小さき東宮の御頭腦中に義經があると云ふ事丈けても未來の天子の御英武は察せらるゝ。それて此君は尙武教育を勸め奉らずとも、自然に英武の德を備へさせらるべきを疑はぬ。

今や東宮の事實的師傅を擧げて、未來の君德を御養成あらせらるゝに際し、東鄕、大迫の二將軍が其任に當つたと云ふ事は誠に喜ぶべき事てあり、從つて尙武の御敎育係りとしては、二將軍によつて遺憾なかるべし。只自分は云はんと欲す。我天皇の御位はEmperorのそれてはない。我皇室の御地位はホーヘンツルヘン家のそれとは同じからぬ。宮中府中の重臣たるものは宜しく三度鑑みて、此上尙然るべき師表の人物を奏薦し、未來天皇の御三德を養成し奉ることに力を用ひて貰ひたい。それには以上の二將軍丈けては物足らぬ所はならうか。

王道は民道に近し

農學博士 法學博士 新渡戶稻造

何れの國に於ても學問が益々國民全體に擴がる傾向のある事は否むべからざる事實て、且つ大いに慶すべき事である。學理にして一般民衆に解し難き事あれば所謂通俗敎育の形に於ても普及する事は、今日心ある爲政家のなしつゝある所である。又學者にして兎角俗に交れば自らも墮落する樣に氣遣ふ人があるが、俗に接して己れの學を忘るゝ樣な學者は大した學者てもな

い。由來最高の學者は、孔孟を初め、殊にソクラテスの如きは學理を天より引下げて地上に擴めたものと云はるゝ如くに、學理を僅かの人々の專有にせずに、之を俗化して萬人のものにすることに力を盡した。而して今日世の中がかゝる傾向に進みつゝあるは大いに喜ぶべき事と思ふ。

然るに之れに相伴うて、王者の學なるものが進まねば、治者と被治者の權衡(バランス)を失するの恐がある。今日の大勢とも云ふべきデモクラシエーション即ち學問の民化の傾向に、只伴ふのみならず、之を凌ぐ丈けの學問と修養が治者の間に、就中王者が備ふると云ふことにならなければ、其國の將來は所謂モボクラシー即ち暴民政治になるの恐れがある。

昔は王者の學問と云へば、支那は云ふまでもなく、歐羅巴に於ても民間に傳はるものとは少しく違つて說かれたものである。殊に支那の歷史を見ると、戰國時代などには種々なる學說が行はれ、或は王道、或は覇道、其望む所に從つて治者たるべきものが之を修めんとした。又歐羅巴に於てはアリストートルが亞歷山の教育に當り、セネカがネロ帝の教師となり、降つては英吉利にはベーコン、伊太利にはマキアベリー等何れも其效果が見るべきものあつたやうに思はれる。或はセネカの如きは甚だ失敗に終つたと云ふ議論もないではないが、若しセネカ微りせば、ネロの暴虐が、歷史の示す所より一層激しくあつたらうかとも、稍々辯護的に考へらるゝ。兎に角時の碩學を擧げて師匠としたのである。茲に吾輩の碩學と云ふのは、只知識に於て人に勝れるとの意ではない。人格を以て立つ人を擧げたのである。尤も之については歷史を讀むものの大いに注意を要する點は、兎角王侯に近くものは世の恨みを受くるものあるが故に、前のセネカであれ、或はベーコンであれ、非難が甚しかつた一條である。それは兎も角、要點は學識と人格とを備へたる人を以て王道の教師に充つべき事は言を俟たずして明かである。

然らば此學識とは如何なる學問を云ふか。帝王學と云ふものは古はあつたやうだ。今日も無論秩序的に最

高治者の心得べき要點を綴つて、之を王道學と稱することは出來る。然らば其梗概は如何なるものと訊ねたらば、いふまでもなく、法律、政治、經濟か必修すべき綱目であらう。之とても學者の論ずる如く、理論に走る必要がないとはいひながら、治國平天下の根柢の原理は、少しく實際の政治に緣遠いやうでも課目の大綱とせねばならぬ。

又此外に此等の原理を運用するの途が甚だ大切であると思ふ。學者なれば只理論其物を說いて足れりとするけれども、兵法は死物也、運用は只將軍の心に在りて、王者は必ず其運用の途を究めねばならぬ。扨然らば此運用の點は如何にして學ぶかと云へば、王者たりし人の傳記によるより外ないと思ふ。我輩書生達が傳記を讀む時に、身分が成るべく我輩と同じ程度にあつた人の傳が一番深く我々を動かすものであるが、王者とても同じ事である。故に世界の名君大王と稱せられた人々の一代記は王者の教育上缺くべからざる教科書と思はるゝ。我輩常に思うて居る。普魯西のフレデリック大王の民政の如きは、王道の何物たるを應用したる實例として謹讀すべきものと思ふ。那翁がプルタークの英雄傳を愛讀したと云ふのは即ち其理由は玆に存するのである。

尙王者の學科として交際の練習が必要と思ふ。近頃は交通の便利の爲めに、各國の帝王が相互に訪問を交換して談笑の間に事を決することは、百の外交官が及ばぬことをなすのである。五分間の會見の爲めに百萬の兵を動かす事の止まることなども必らずある。王者も亦人也、感情によつて動くものである。交際の目的は此感情の融和と同時に自己の意志を明かにするものである。而して此事は決して教科書で學び得べきものでない。又己れに劣るもの、即ち臣下にのみ接して得らるゝものでない。或は遠く海外に旅行し、然らざれば海外より訪問せらるゝ王者或は皇族に屢々接して初めて身に修むることが出來るのである。からして我輩は之を練習と稱したのである。

勿論王道の道は遠大にして、只以上の三種の綱目を以て終るべきでない。已に述べたもの丶外に或は軍事或は殖産の事も必要である。又更らに進んでは、理科博物の學の如きは、現在は普通敎育の一部に止るが、今後は益々理科博物の知識によつて國家社會の進歩を促さんとするの傾向があるを以て、王者も亦茲に從來より、より以上に意を注がなければならない。

何れにしても王道に關する知識の範圍は古代のそれに比して大いに擴張したのであつて、日進月歩の今日古をのみ夢みては民間の進歩に伴はずして、王道といへば時勢後れの感を來たすやうになつては、之ほど國の爲めに由々しきものはない。故に現今の諸國の王者の身の振り方を見ても、二世紀以前に、否一世紀以前に比しても實に驚かざるを得ぬことがある。獨逸のカイゼルの日常の御性行を窺つても、英國皇帝の所謂民主的なるに聞いても、或は一段降つて伊太利王の民の爲めに御一身をも顧みられざる底の擧動或は西班牙の國王の庶民に親せらる丶風情を拜しても、王道は民道に近き、威あつて猛けからざる、眞に民の爲めに帝者の心を勞する御樣子は、將に世界の大勢の如何なる方向に進みつ丶あるかを示すものと思はれる。

修身齊家治國平天下

伯爵　大隈重信

帝王學といふものが、果して具體的に從來からあつたものか何うかは知らないが、吾輩は「德を修むる」事を以て最も肝要なる事と思ふ。修身齊家治國平天下と言ふ。國を治めんとする者は先づ其家を治め、家を治めんとする者は先づ其身を修むべしして、是れが人として學ぶべき根本の敎である。平民が學べば則平民の學であり貴族が之を學べば貴族の學であり、之を王者が學べば王者の學と謂ふ事が出來る。人として學ぶべき事は要するに一である。貴賤尊卑の別あるべき謂れがない。であるから若し今日尚一國の帝王たる者が學問を修得せらる丶の要なしといふが如き見解を持する者あ

ざるならば、そは頑迷固陋断じて幽すべからざる者であると言はなければならぬ。一家を治むるにも一家の事情を知らなければならぬ。況して一國統治の大權を握り下萬民の主たる王者に於いては必ず國内の事情に精通し給はねばならぬ。社會の趨勢、民心の歸嚮を知り給はねばならぬ。玆に法律といふものがある。然しながら其法律は法律それ自ら存在してゐるのではない。人有り、人ありて社會あり、社會ありて法律あるので、決して法律あつて然る後社會あるのではない。故に社會に適合せざる法律、若しくは社會の進歩と發展に伴はざる法律は之を修正、若しくは廢止し得るわけである。故に一國の君主は先づ國家社會の狀態を知り、民の心を知るを以て先とし給はねばならぬ。民の心を知つて政治を施し給ふ。そは即ち仁政である。昔より仁者敵なしと言ひ、仁政の下國家泰平に蒼生其惠みに浴するのである。而して九重の雲深き上御一人が社會の趨勢を知り民心の歸嚮を察し給はんが爲めに、玆に御輔導の役を必要とするのである。であるから、苟も輔弼の任に在るものは其身先づ何よりも民の心を知らなければならぬ。然しながら古より王者の師たる者洵に其數少しとする。能く民の心を知つて御輔導の任を盡す者があるならば其功積の顯著なるものあるは素よりであるが、過つて民の心を知らざる者をして其職に在らしめたならば、國の憂ひ之より甚だしきはないのである。古よりの歷史を觀ずるに王位簒奪の惡逆を敢てせんとしたる者は、玉座に近く侍りし輔弼の臣に多く、然らざるまでも帝室と臣民の間を却つて疎隔し、一國の内亂を醸成したるものは、輔弼の臣の其職責を過り、君主の明を掩ひたるに原因するものが多い。即ち御輔導にして民の心を知らず、若くは民の心を解し誤りたらんには其弊のある所却つて其利の有る所に過ぐるものあるであらう。返す〳〵も注意すべきは其人選の宜しきを得るといふ事である。然らずんば寧ろその無きに優る萬々であらうと思ふ。

憲政有終の美を濟すといふ事

慶應義塾々長　鎌田榮吉

皇太子殿下の御輔導役御選定に就いて、下々の吾々が卑見を申上げるといふ事は甚だ畏れ多い事のやうではあるが必ずしも不敬な事ではないのみならず、後には　天皇陛下として我國家に君臨せらるべき殿下が日日如何なる御學問を御習得遊さるゝが最も適當であるかを吾々が研究して御參考に供するといふ事は寧ろ必要な事であらうと思ふ。

そこで、之を一言にして云ふと、帝王は憲政有終の美を濟す事に向つて力め給ふといふ事が、一國の元首として心懸け給ふべき最も肝要なる事であらうと思ふのである。であるから是れが御輔導役たる者は此目的の下に殿下を御指導申上げてゆかなければならぬ。

次ぎに社會に對しての御務めは風俗の改善を心懸けさせ給ふといふ事である。何分にも帝室は天下萬民の模範と仰ぐ處であつて、帝室が圓滿なれば下萬民の家庭も圓滿であるといふやうに、善美なる風俗を爲す上に其感化力が偉大であるからである。

今上天皇陛下は賢明に渡らせらるゝ故に、其御德に依つて政治も社會も進歩し開發せらるゝは洵に吾々の喜ぶ處であるが、同じく御聰明にあらせられる皇太子殿下の御研學遊されるに就いて、師表と仰ぐべき人物の力を藉り給ひ、我皇室と國民との間を益々圓滿に、尊王忠義の念を彌々厚からしめらるゝは吾々國民一般の幸福とする處である。

然らば現在の我國に於いて如何なる人物が最も御輔導役に適してゐるか。私は德川公爵、西園寺侯爵の如き人物を適任者と信ずる。宇内の事情は素より、今日世界の形勢を知悉し、過去の歷史のみに止まらず將來の狀勢を卜知するに足る人でなければならぬ。帝室の尊嚴を發揚し、帝室と國民との關係を益々完全にし、忠愛の念を發揮せしむることを旨として教育する處の人

てなければならぬ。要する皇德を萬代に傳へる點に於いて固陋なる學者を必要としない。返す〴〵も日本の國體、即萬世一系の皇統を扶翼するに努めなくてはならぬ。

新唯心論の立場より觀たる帝王

法學博士　江木衷

我々の考では、帝王と云ふものは、しつかりした國民の上に置かれなければならぬものと思ふ。只一時の功を目當てにすると云ふ丈けならば、それは國民の上に基礎を置かずとも出來るであらうが、然し之は覇業である。覇業となれば、覇業煙消、美人黄土は古今の歎である。即ち一時の快を貪る覇業を斥けて、眞に千古に亘る帝王の基を堅くせんとならば、どうしてもしつかりした國民の上に立たなければならぬと思ふ。

例へば獨逸皇帝の如きは皇帝一人がエライのであつて、今日の地位は實はあの人一人の腕で持つて居るのである。獨逸の憲法は紙上の憲法に過ぎぬと云ふ事は、今日の學者の定論である。成程地圖の上から云へば獨逸帝國といへば、誠に儼然たる立派なものであるが、然し之は形式上の事であつて、實體上から云ふと四分四裂の危險が潜在して居る。只之を形式的に今の帝王の力で持つて居る丈けだと思はれる。そこになると流石に英吉利である。英吉利の皇帝は全くしつかりした國民の上に置かれて居る。だから英吉利の皇室と獨逸皇室と比べて、どちらが永遠に安心であるか、餘程考へなければならぬ問題と思ふ。

一體今の日本の法律學者など云ふものには、如何にも古い考のものが多く、國家と云ふもの丶本質をよく理解して居るものが少い。日本の法學と云ふものも矢張り歐羅巴の系統を追うて來て居るのであるが、例の佛蘭西革命時代の天賦人權の説と云ふものは只個人權のみを主張して社會と云ふものを見ない。社會は一の

組織的有機體であると云ふ事を知らなかつた。其後に起つた所の學說は社會を單なる器械的組織體と見たものであつて、英國のオースチン一派の法律論の如きはそれである。即ち法律は主權者の命令なりと云ふ說である。此學說は恰度明治の初めから日本の大學で教へられたものであるからして、今日世に立て働いて居る人は大概此學派に屬して居る。斯う云ふ學說を奉ずる人は、其の當然の結論として、如何に惡るい法律が出ても、それは學者の問ふ所にあらずといふやうな事になり易い。それに次いて起つたのは所謂社會を生物的組織體と見る說で、各個人は一生物に於ける細胞(モレキユール)のやうなものだといふのである。之が即ちダーウヰン以來の唯物主義の法律論である。此說に從へば社會の進化も生物の進化と同じ事となつて、各個人の人權自由など云ふ事は認めなくなる。加藤弘之博士の天則論の如き其一例である。以上の如き舊き思想が今日の我法律界に浸潤して、容易に脱け切らない。

處が、最近に起つた世界の思潮、學說は社會を以て心靈的組織體と見るのである。即ち各人民は動物のモレキユールとは違ひ、銘々自我といふものを持つて居る。此自我を社會我に同じて初めて社會を組織すると云ふので、即ち私の所謂新唯心論である。即ち人間を以て意思の主體と觀じ、其意思を推し廣めて宇宙をも支配せんとする向上發展主義の思潮である。別言すれば人生には目的あり自我あり、其目的に進み、自我を發展するに當つては、自由あり人權ありと云ふ說である。

然るに日本の法學者又は政治家など云ふものには多くは此第三の新らしき世界の思潮が分つてゐない。それて帝王といふものについても、第一、第二の古い主義に屬する帝王を知つて居るが、第三の心靈的社會組織を統括する新らしき意味の帝王と云ふものを考へてゐない。即ち帝王の側から云ふと、其靈的自我が擴張されて社會我をなすと云ふのが眞の帝王であると云ふ思想が日本の法律家政治家には分つて居らぬやうである。今日の英吉利は政治、法律、其他の社會制度及び

文物制度を見ても、總てが第三の主義で行つて居る。固より英人は萬事を常識で以てやる國であるから、第三の主義などいふ六つかしい理屈は云はぬけれども、彼等の常識は即ち此進步したる第三主義とぴつたりと合つて居るのである。我國の政治家法律家の如きも此英吉利の現狀などを參酌して、最も進步したる新唯心論を基礎としたる帝王の何たるを理解し、今後の帝王をして、しつかりした國民の上に立つ盤石不動のものたらしめんことを希望する。



防水絨之大王!!

神田は勉强の中心―弊店は其勉强の中心

クレバネット新流行防水絨「ゴム引絨ニ優ル數等」



●オバコート

●インバ

一號 金十四圓	二號 金十五圓	一號 金十五圓	二號 金十六圓
三號 金十六圓	四號 金十七圓	三號 金十七圓	四號 金十八圓

スタイルト裁縫の善良なるは英米式既製洋服制の泰斗たる弊店の保證する所とす

●今回本品を英國織元會社と特約し實物廣告として右の破格の低價を以て提供此如機に際し御用命を希ふ

●本品は晴雨兼用高尙にして持久力に富み歐米紳士間に非常に流行しつゝある實用品なり

市内御一報次第持參
地方は御申越し次第見本送呈

東京神田南神保町角

東京デパートメントストアー洋服部

本局 三一四一
振替口座 二三七二七番

(中付一の一)

(中村一の三)

露國ドストエフスキー作

罪と罰

前編　正價金壹圓四拾錢　（郵稅金拾貳錢）

大判五五〇餘頁ポイント印刷

●内田魯庵氏譯●

最高の文學は所謂文學好きの小說讀者の爲めにのみ作られたるに非ず、ド氏の作、殊に此の『罪と罰』の如きは他の科學者、哲學者、心理學者、倫理學者、宗教家、教育家、法律家、司法官、警察監獄吏、社會改良家等の精讀を要望するもの、必ずや偉なる哲學、大いなる經典に接すると同じ感動及教訓を受くる事あらん。

杜翁の作は讀む度每に新らし味を增す、殊に『復活』に到つては其思想の集大成とも云ふべきもの、現代の諸問題に觸れて之を詳析し批判する恰も利刄を以て菜根を切るが如く明快淋漓たり、加ふるに赤裸々なる現代の生活を少しも潤色せずに其儘に活描し來るや帋上に人の呼吸を聞き人の脈搏を感ずるが如し、近く脚本として某新劇團に上演せらるゝ風說あるが、如何に脚色せらるるや先づ其原小說を讀んで之を比較するは亦一の興味ならん。

東京日本橋通
大阪東區博勞町
丸善株式會社
京都三條通麩屋町
福岡市博多上西町

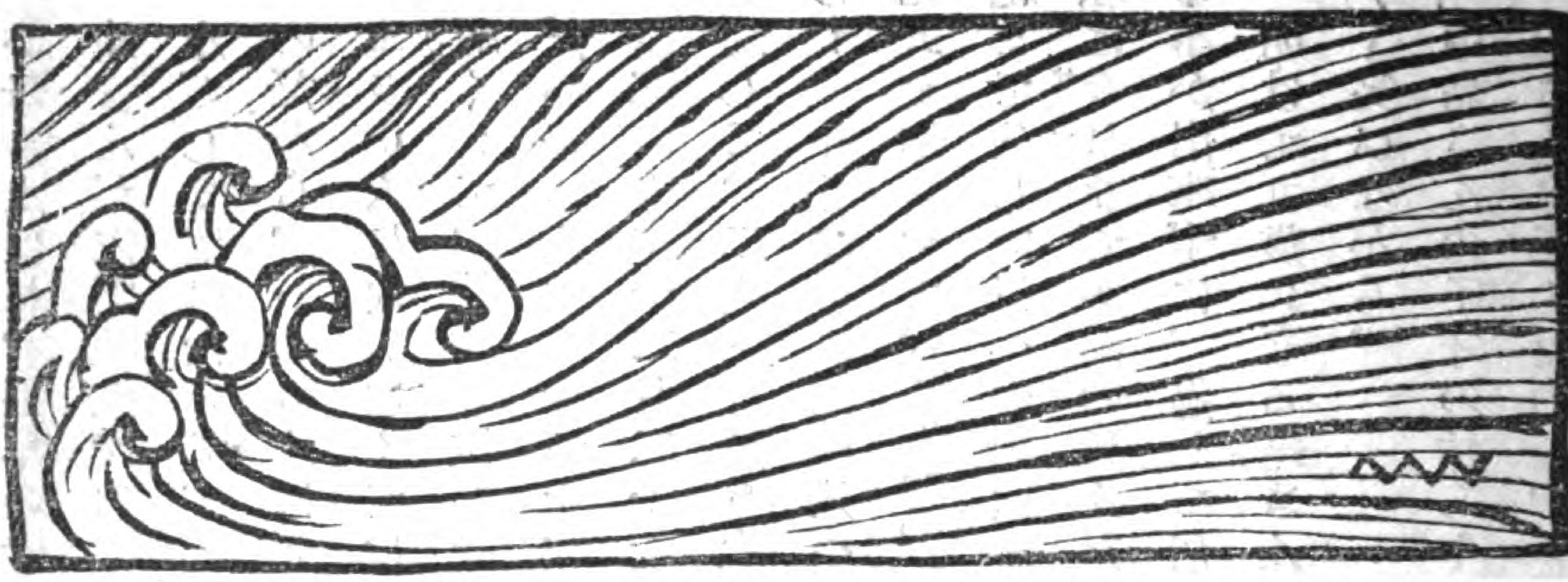
トルストイ翁の大傑作

復活

菊判洋裝前編　正價金壹圓五拾錢

全二册後編　正價金壹圓八拾錢

（郵稅各金拾八錢）



亡き妻の骨を抱いて

東京朝日新聞記者　天民　松崎市郎

災厄頻に到れる大惡年、大正二年を永遠に記すると共に、予をして今日あらしめたる糟糠の妻、亡さく子の名を長く忘れざらんが爲めに、「亡き妻の骨を抱いて」一篇を記す。愚人の愚擧たるに似たれど、愚人には愚人の感慨あり、追恨あり、告白あり。欺かず、飾らず、有の儘の事件を有の儘に寫し、有の儘の情懷を有の儘に描いて、江湖諸彦子の同感に訴へんとす。題して其の一を「五丁目九番地」と云ひ、其の二を「死を待つのみ」と云ひ、其の三を「三人の忘遺兒」と云ひ、其の四を「同棲十三年間」と云ひ、其の五を「故鄉の公孫樹」と云ふ。小說に非ず、雜報に非ず、悉くこれ予が實生活の反映なり。

三、三人の忘遺兒

一、お母さんは死んだ

大正三年二月十五日午前十時、お前の百ヶ日が三日の後に迫つた朝、私は二階の一室に哲郎と達郎とを呼て、漸との思ひでお前の死んだことを云ひ聞かせた。「お母さんは死んだのですよ。何時か一度は云ひ聞かせねばならぬと思うて居たが、二人とも未だ身體が惡かつたから、それで今日まで知らせずに居たのだ。

お母さんはね、去年の十一月十一日朝、哲ちやんや達さんが未だ病院に居て苦んて居た頃、とう〳〵死んてしまはれたのてす。明日から二人は學校へ行くのだから、お母さんは死なれても能く勉强をして、エライ人にならなくては不可い。喧嘩をせぬ様に温順くして、俊坊を泣かせぬ様に仲好く遊んて、死んだお母さんにも孝行をするのてすよ」

達郎は去年十二月二十七日、哲郎は今年一月十日に退院して、二人とも最う大丈夫、恢復期も事無く經過して、今ては全快期に入つて居る。一日も早くお前の死去を知らせて、骨を納めてある善福寺に連れて參り、絶えて久しい母への對面をさせ様と思つて居ながら、私は今日までお前の死んだ事を、子供等に云ひ聞かせる事が出來ずに、過して居たのてあつた。

明けて九歳になる達さんは、私が斯う云ふと、ニコ〳〵笑ひながら、

「中島さんの子守の姉ちやん、こないだ、達さんのお母さんは死んだのね、と云つて居たよ。兄ちやんにさう云ふたら、噓だい〳〵云つて居た。ほんとに死んだの、お母ちやん……」

と、別に泣きさうな様子もせず、直ぐ階下へ降りて、俊坊を相手に騷ぎ初めた。哲ちやんは私が斯う云ふと、顔を眞紅にして、今にも泣き出しさうな風てあつたが、

「泣いたつて仕方が無い。お母さんは、哲ちやんや達さんや俊坊の事を、非常に心配して死なれたのだから、これからは温和しくして、一生懸命に勉强するんてす。哲ちやんや達さんが退院してからと思つて、お葬式も未だ濟ましてないから、その內にお葬式をしたら、お母さんのお骨を持て、お父さんの國の墓地に埋めに行くのてす。哲ちやん、お母さんの事を、別に何とも思つて居なかつたかい……」

と、私が何の氣なしに元氣らしく云つたので、

「お母さん、未だ病院に居るのだとばかり思つて居ました。何時死んだの！　十一月十一日！　哲ちやん少しも知らなかつた……」

哲ちやんは、明けて十三歳の長兄ながら、氣も弱く

心も優しいだけに、今斯うして突如として、母の死を聞かされては、何とも名狀し難い一種の悲しさに、胸迫るを覺えたことゝであらう。

今日は日本晴の好天氣、遊ぶに宜い日曜日を幸ひ、お前の死んだ事を云ひ聞かせた後、堀君に賴んで、三人を淺草方面へ遊びに出した。私が十五て睦さんが九歲の秋十一月、母が斷末魔の枕頭に坐つて、聲を放つて泣いた時、近所の伯母さんからお饅頭を二つづゝ貰つて、二人ともヒタと泣き止んだ昔の事さへ思ひ出されて、私は二階の窓から、嬉しさうに遊びに出る三人の背後姿を眺めながら、人知れず落涙した。

哲ちやんと達さんとは、四ヶ月半の長い間、學校を休んで居たが、いよ／＼明日から登校する事になつた。昨日は新しい學校帽やら、新しい辨當箱やらを買つて來て、何かと用意をして居るらしかつた。二人が學校へ行くのを機會として、お前が死亡後の家は、やつと平生の常態に復る事になつたが、この上はお前の葬儀を營む事と、故郷の墳墓に埋骨する事の二つが、たゞ殘つた仕事てある。

それにしても、私は餘計な心配をして居たものだ。お前の死んだ事を知らせたら、哲ちやんも、達さんも聲を放つて、慟哭し嗚咽するてあらうと思つて居たに、二人の態度は餘にアッ氣なかつた。母の死を知つた刹那の悲嘆は、父たる私をも泣かせるてあらうと思つて居たに、二人は案外子供てあつた。こんな事ならば、百ヶ日近い今日まて秘密にせずとも、退院した二三日の後、云ひ聞かせたら宜かつたものを。子の心、親知らず、お前の死だ事を哲、達の二人に知らせるのを、何か怖しい罪ても犯す樣に、不安と憂苦の間に打過ぎて居たのは、父たる私の愚てあつた。

二人とも頭髮が脫落ちて、如何にも腸チブス後の容體らしいが、恢復期の養生を少しも過らなかつた爲め、日を追ふて壯健になつた。二人も亦私や堀の叔父さんや、堀の祖母さんの云ふ事を能く聞いて、菓子や饅頭のつまみ食をしなかつた爲め、今ては最うピンピンして、飛だりハネたりして居る。俊坊も亦風邪一つ引か

ず、二人の兄が退院後は、元氣一層加はつて、
「京の五條の橋の上、大の男の辨慶が……」
を、節面白く唄ひながら暮して居る。先日も、早蕨幼稚園の久留島武彦君が、お前の死だ事を知つて、わざ〳〵社に訪ねて來られ、
「少しも知らなかつたが、さぞ困るだらう、のん氣な先生も……。附添は不必要だから、幼いのを僕の幼稚園に寄來し給へ」
と、親切に云つて吳れられたから、櫻花の咲く時分にでもなつたら、俊坊は久留島君の幼稚園に通はせ樣と思つて居る。

放埒な無頓著な私だけれど、お前が死てからは、子供の上をも思ひ煩はねばならぬ樣になつた。

二、黄昏の雲の徂來

葬式と埋骨と、お前に就ての仕事は、唯この二つ殘つて居るだけでも、思ひ出の悲嘆は、心淋しい夕暮のみてはない。「お母さんの死」と云ふ新しい事實を刻み付けられながら、子供等が嬉々として遊びに出た留守中、私の思ひ出は悲しい十一月の朝な夕なに曇つた。

お前の死だ朝、睦さんの良人市川君は、昨日退院しましたと云つて、嬉し氣に笑ひながら訪ねて來た。磯部甲陽堂の主人は又、何時頃退院ですかと云つて、何も知らずに訪ねて來られた。其の人達に向つて、
「亡くなりました。今朝、六時過ぎに……」
と答へるのが、私は何んなに悲しかつたであらう。大阪の祖父さんは、お前の遺骸に着せるのだと云つて、お召の袷衣や不斷着の羽織、長襦袢、帶などを持て、赤十字社病院へ行かれた。堀君は俊坊を連れて、電報を發しに行つたり、買物に歩いたりして、多事多忙を極めた中にあつて、絕えては續く弔問者に應接せねばならぬ私は、何んなに周章狼狽したであらう。

永久の眠に還つたお前の遺骸に向つて、最後の別を告げたのは、其の日の黄昏頃であつた。お前は最う別棟の屍體室に移されて、長い寢棺の中に、安らかに横はつて居たが、其の枕許には香の烟縷々と上つて、

一對の黄菊白菊が何とは無しに涙を誘うた。俊坊を連れた堀君は、白い消毒服を着て、せめて此の子一人にても、母の死顔を見せ樣とて、いろいろとなだめすかしたけれど、俊坊は何うしても屍體室に入らうとしなかつた。

病院出入の屍體世話人の紹介で、麻布善福寺の若僧が一人來て、屍體室で讀經を上げてくれた。屍體室は七八坪の平家建て、半は疊敷で半は土間になつて居る、其の土間の臺の上に置かれたお前の棺側に立つて、お祖父さんと私と二人、悲しい白骨の御文章を聞いた時、私は今更の樣に「死」の森嚴に戰慄した。

如何に傳染病とは云ひながら、住馴れた我が家で死水を取つて遣ることも出來ず、死してもなほ我が家に迎へることも能はず、病院より火葬場へ、讀經一巻をせめてもの心遣りにして、送らねばならぬのかと思ふと、お祖父さんも私も絶え入るほど悲しかつた。讀經が濟んで、棺の蓋に釘打つ時、金槌持つ手の慄ひ戰いたのも、單り死別の悲哀のみてはなかつた。

火葬場へは、俊坊とお祖父さんと堀君と三人、お前を送つて行く事になり、私は病院の角で別れて歸つた。お前の柩が傳染病室の患者通用門を出る時、お前が厄介になつた十餘名の看護婦達は、門内の右側に整列して、涙の眼で默送された。折柄、黄昏の雲のゆき〳〵、看護婦達の白い服、病院の煉瓦塀……、門の外には、根本吐芳、兒玉花外の兩君を初め、安田、西岡、廣瀬の諸君が立つて居られた。

天民君――君と笑つて話すのは、殆ど毎日の事てあつたが、君と泣いて別れたのは、今日が初めてゞあつた。僕の神經はいたく亢奮して居る。今夜は一寸眠られさうにない。

今日の夕刻、淋しい赤十字社病院の門前で、兒玉花外さんや其の他の人々と共に、遺骸となられた君の令夫人を迎へ且つ送りした。その短い時間に、長く忘れることの能きぬいろ〳〵な悲しい事柄に接した。堀さんに抱かれて居る、いたいけな俊ちやんの姿は、又しても僕の涙を誘ふ――。若し今日が全治退院の

日てあつたならば――斯う云ふ考へが、俊ちやんや、又今日の始末を知らずに、同じ病院の内で、この夕暮を過す哲ちやん達さんの身の上に及ぶと、運命も實に殘酷な事をするものだと、悲み以上に怖しくもなつた。

赤い煉瓦の壁も、藍鼠に塗られた病院の建物も、總てが重苦しい色であつた。葉を染めた櫻の梢は、冷たい風に搖られて、夕の色は刻々に迫つて來る。小砂利を敷詰めた門内の一方に、同じ純白の姿をした看護婦が十二三人、二側になつて整列した。間もなく白張の提灯、一對の花、黑い法衣の僧侶、白木の柩、續いて君の悄然たる姿！。

淋しい葬列が其の前を通る時に、整列して居た看護婦の手が、悉く其の眼にあてられるのを見た。死ぬ病人が無理を云つて、腹立たせた事もあつたらう、厭はしい世話もさせられたらう。されど其の記憶の一切を淚に拭去る、其處に美しい人情が窺はれて、僕も淚を禁じ得なかつた。

亡き夫人の柩と、僕達の俥とは、病院の角で南と北へ別れねばならなかつた。夕榮の空は心と共に暗くなつて、十日餘の月も現はれ、もう灯を點ず家さへもあつた。

僕は曇る眼に、あまたゝび柩を見かへつたが、君は遂に頭さへも動かさずにしまつた。然し君は僕等よりも、僅に多くを見かへつたであらう!!!

十一月十一日夜　　根本吐芳

松崎天民兄

遺骸の傍近く香を燒き燈を點じて、お通夜をすべき十一日の夜、お前は代々幡の火葬場で、荼毘一片の煙と化つたのである。翌十二日の朝、お祖父さんと俊坊と堀君とが、骨拾いに行つた留守中、根本君から來たのが此の手紙である。私は今日これを讀んで、今更の様に、新なる愁の胸迫るを覺える。

三、お祖父様の歸阪

十五歳の秋、故郷でお母さんが死なれた時には、甚

督教に依つて埋葬したし、二十九歳の夏、大阪でお父さんが葬る時には、日蓮宗に依つて讀經したが、何と云つて極つた宗旨の無い今の私は、お前の死亡と共に、何よりも先づ思ひ惑うたのは此の事であつた。

お前も私も無宗教とは云ひながら、お前は實家が眞宗の南無阿彌陀佛であるだけに、矢張り佛教の方へ强い傾向(かたむき)を有つて居た。これが若し大阪ならば、お寺樣を頼む事も、葬式を營む事も、凡てお前の實家と相談して、その世話になる事も出來やうものを、病院の屍體室から火葬場へ送るまで、とつさの間に宗旨を定めねばならぬのには、一方ならず面食ひもしたし閉口もした。無宗教の報は覿面、平生から歸依渇仰する敎會や寺院を有つて居ないと、何時如何なる場合に、困る樣な事に出逢ふか知れないと、つく／＼考へた。

社の安藤鐵腸さんや、中央公論の麻田さんから、眞宗なら然るべき寺を賴んで遣ると云はれたが、病院出入の屍體世話人が檀家たる、麻布山善福寺を紹介してくれたから、萬事善福寺さんのお世話になる事に極めた。十二日の正午、お祖父さん等が、お前の骨を抱いて歸宅すると、間もなく善福寺から若僧が來て、階下(した)の床の間に安置した白木の新しい佛壇の上に、白木の箱に納められたお前の遺骨を置いて、白蠟燭に燈明、線香、お供への生花、果物、菓子、饅頭、白木の位牌は戒名を書きさへすれば宜い樣に立つて居た。

「法音院釋尼妙順」と云ふ戒名を記し終ると、若僧はやがて抑揚のある調子で、悲し氣に佛說阿彌陀經を讀み初めた。人生の泡沫夢幻を說いて、惡業深い生者を戒めた白骨の御文章は、世紀を異にした今の世の私等にも、しみじみと人間の運命の果敢さを味はしめた。チーンと鳴る鐘の音や、漲り渡る香の煙、新しい「死の家」らしい氣分は、一家の内に漾ひ渡つて居るのに、單りこれ等の光景を不可解らしい面持して眺めて居たのは、生死の外に超然たり得る幼い俊坊だけであつた。

大阪のお祖父さんは、始終南無阿彌陀佛を低唱して居られたが、其の一擧一動には、限り無い遣る瀨無さが窺はれた。同鄕の親友石原孟吾君夫妻や、今井儀太

郎、綱島小三郎の兩君を初め、社の根本、薄井、廣瀬の三君、親戚の堀友五郎翁夫妻、兒玉花外君などが居られるので、宵の間は何かに紛れて、忘れては居たものの、思へば十二日の通夜更けて、午前一二時となつた頃、骨と化つたお前の傍近く座して、在りし世の事どもを思ひ起せば、今更の樣に人の命の弱く脆く果敢さに涙ぐまれた。

「初七日まで居て、お寺へ納骨してから歸らうと思ひましたけれど、最う東京に居る元氣がおまへん。葬式の時にはなア、私か新公が來ますよつてに、一遍歸らせて貰ひますわ。死んだ者は何う思うたかてアきまへんさかい、此の上は哲郎や達郎を能うして遣つてお呉れやす。こんなにならうとは思も寄らん事だすけれど、人間業やどもならんことやよつてに、諦めるより仕樣がおまへんがな。あんたもえらい心配しやはつたし、えらいもの入りやつたけれど、何も彼も運と思ふより仕樣がおまへん。」

初七日までも二七日までも、お祖父さんには居て貰ひたかつたけれど、お前が死だ後、歸ると云はれるのを引止めるだけの勇氣は、何うしても出なかつた。

「妾が退院しましたら、東京見物の案内をしてあげますよ。奇麗な帝劇、賑かな淺草、大きな三越、一月や二月では見物し切れませんよ、お祖父さん」

と、四五日前まで云つて居た其のお前が、今は最う一塊の白骨と化つてしまうたのかと思ふと、父たるお祖父さんの悲嘆は、何んなに切なかつたてあらう。

「何時までもお止めしたいのですけれど、いろ〳〵と大阪の方の御都合もありませうから、此方の事は御心配なく……」

お祖父さんは十五日の午後、失望と悲嘆とを抱いて、新橋を出發された。三週間前の朝、同じ新橋にお祖父さんを迎へた時には、全治退院の喜悦を載せて歸つて貰はうとこそ思ひたれ、何うして今日の悲しい見送りに思ひ及ばうぞ。歸る者の眼にも、送る者の眼にも、別離の他の涙の雫が宿つて居た。

病院に居る哲郎や達郎は、自分等の留守宅に、こん

な悲しい出來事が起つたとは夢にも知らず、お祖父さんが病院へ行つて、大阪へ歸る由を知らせたら、

「お母さんの病氣が好いから、お祖父さんそれて歸るの。退院するまで居ると宜いのに、お祖父さん歸ると淋しいや」

と云つたさうな。お祖父さんが歸つて淋しいよりも、もつと強い永久の淋しさ悲しさが、自分等の上に落ちて居るものを、何事も知らずに過して居た哲ちやんや達ちやんは、ほんとに可愛相であつた。

お前が死んだ後、三四日の間は、病院へ行く暇がなかつた。行く暇はあつても、哲ちやんや達さんの顏を見るのが、何だか苦しい様な氣がして、私の足は何うしても病院の方へ向かなんだ。

四、漱石先生の贈物

お前の死亡に依つて、今更の樣に感じたのは、友人、知己、同僚、先輩の同情であつた。電報に、信書に、弔問に、思も設けぬ人々から、眞心こめられた慰藉の言葉を聞いた時、また新なる涙を誘はれながらも、人の情、世の情を何んなに心強く思つたであらう。

殊にニコ〳〵の松永敏太郎君や、奇貨を蒙つて獄中にある友人S君や、郷里の人達から來た手紙には、句々肺腑を突いて、大に泣かされた。封書に端書に二百餘通、悉く人生朝露の果敢さを記し、生者必滅の理を說いて、私を慰藉して呉れた中に、唯一通、病院に居る子供等のために、同情深い慰問の手紙を送られたのは、夏目漱石先生であつた。

拜啓、私は今日の新聞に出てゐる御不幸の廣告と雜報欄に氣がつかないで晩まで居りました。夕飯のとき妻から注意されて始めて御令閨が亡くなられた事を承知致しました。ことに御兩兒とも同じ御病症で目下御入院中と聞き甚だ御同情の念に堪へません。御弔詞を申上るため參上致さうかと思ひますが御繁多の折柄小生の如き平竦あまり御宅へ出入せぬものが參つてはかへつて御面倒な事と存じわざと差控へ失禮ながら手紙で御くやみ申述べます。病院に御出

の子供さんを慰めるため妻が何か差上たいと申しますが、子供さんの年が分らないのと、それから病症が病症なので一切のたべものを御送り致す譯にも參らないので思案してゐます。此際哲郎さんや達郎さんの年を伺ふのは甚だ失禮に存じますが、今てなくとも御落付になつた時に一寸敎へて下さいませんか。敬具

十一月十二日夜　夏目金之助

松崎天民様

わざ〳〵年齢を伺つて迄差上げる程の大したものを上げるのではありません。たゞ子供さんが可愛想だからつい御面倒をかけるやうな事を申出るので御座います。

お前の死んだ悲しさに心亂れて、病院に居る哲ちやんや達さんの上には、思ひ及びもせぬ十三日の朝、私は此の手紙を讀て、何んなに嬉しく思つたてあらう。漱石先生とは同じ東京朝日新聞に籍を置くの因緣があるばかり、お目にかゝつても、しみ〴〵高話を承ると云ふても無く、平生からお宅に出入すると云ふても無いに、たゞ子供等の上を不憫に思はれて、わざ〳〵此の樣な手紙を送られたのであつた。父たる私でさへ、子供の事を忘れ勝てあつた場合に、夏目先生の斯うした手紙は、何んなに力强い慰藉になつたてあらう。

先生の厚意に甘へ、私は直ぐ返書を認めて、哲郎が十二歳、達郎が八歳、他に宅に居る俊郎が四歳てある事も書き加へて送つた。日ならずして贈られたのは、回轉活動寫眞機と自動車運動と積木道具の三個、その内積木は宅の俊坊に與へ、自動車運動は病院へ持て行き、二人の病床の間に置いて、眺めさせる事にしたが、活動寫眞のみは宅に置いて、二人が退院後の樂みとする事に極めた。

「宅には未だ好い玩具があるよ。自動車に自働玉突に活動寫眞、病院へ持て來ても宜いけれど、未だ起きられないから駄目てせう。それに好い玩具に消毒されると、變な臭氣がして厭だから、病院には寢て見られる樣な物だけ持て來やう。銀座の吉川て買つたの

も有るし、夏目先生から頂いたのもある、二人とも早く快くなつて退院しなくては、玩具が淋しがつて仕様がないよ」

お前が死ぬる二三日前から、達さんは哲ちやんの隣に移されて、兄と弟とは一ヶ月目に、[illegible]變つた所で對面したのであつた。それまでは、二人とも、

「お父さん、兄ちやんは何處に居るの」

「達さんは何の邊に居るのです」

と尋ねて居たが、一室に枕を並べる樣になつてからは、二人とも顔を向け合つて、瘦せ衰へたお互の顔を、不思議らしく眺め合ひながら、日を過す樣になつた。

「お母さんは何處に居るのです？　こゝよりはズッと遠い室(へや)なんですか」

と、哲ちやんが尋ねる事とあれば、達さんが聞く事もあつた。未だ重態の發熱期には、二人とも玩具(おもちや)どころの騷ぎではなく、病床の傍に立つて居ても、もの一つ云はうともしなかつたが、恢復期に向ふと共に、いろ〳〵の玩具も欲しがる樣になるし、お母さんの上を尋ねることも、度重なる樣になつた。

それにしても、俊坊が病氣しなかつたのは、ほんとに何の位仕合せであつたか知れない。今では堀君に馴れて了つて、御飯を食べるのも、お風呂へ入るのも、寢るのも起きるのも、萬事叔父さんでなくては、夜も日も過されぬ樣になつた。

「俊坊、一人で淋しいでせう。病院〳〵行くと、兄ちやんが居るよ、哲ちやんに達さん……。叔父さんと一所に行かないの？　電車〳〵乘つて、チリン〳〵動きまアす。」兄ちやん、俊坊可愛いから、おいで〳〵して居たよ。行きませうよ、病院〳〵ね……」

お母さんが居ると云つても、兄ちやんが居ると云つても、俊坊は病院へ行くのを厭がつて、何うしても一所に行くと云はなんだ。幼な心にも、病院と云ふ所は、厭な所だと思つて居たのであらう。

五、初七日のお納骨

悲嘆(かなしみ)の間に一日二日と過ぎて、お祖父さんが大阪へ

歸られると直ぐ、雨に鬱陶しい初七日の夕が來た。子供等が退院するまで、葬儀の執行を見合せる事になつたので、初七日にはお前の遺骨を抱いて、麻布の善福寺に參り、式ばかりの淋しい納骨式を舉げた。

大阪の田井羊公君の夫人が、わざ〳〵上京されたのは、恰度その日の午後二時頃であつた。田井さんの奥樣は、在京中からお前とは親しい仲、お前の病氣や子供等の入院に就ては、お前の死ぬる前から、いろ〳〵と心配をかけた。お前がスープや牛乳を飮まなくて困ると申し送つたら、病院のは不味いから飮めますまい、別封の小包の品を差上げて下さいとて、味の素を澤山送られた。下女に逃げられて困つたと申し送つたら、俊ちやんも可愛想だし、あなたも御不自由でせうと云つて、東京に居らるゝ親戚の沼野恭二氏夫人を、何かのお手傳にとて差向けられたりした。

更に又お前の訃を聞くや、親子兄妹にも等しい悲嘆と思ひ遣りを以て、遠い大阪から態々上京されたのであつた。沼野恭二氏の夫人と二人、雨に淋しい夕の「死の家」を彩られた時、私はまた新なる悲哀の胸迫るを覺えた。田井さんの奥樣は、私を睨み付ける樣に、

「とう〳〵いけまへんなんださうて……」

と、先づホロリとなられた樣であつたが、さらでだに憂苦に堪えぬ其の日頃、友人から來る弔みの手紙を讀むでも、同情ある弔訪者に應接しても、忘れ樣と努めて居る心の傷を、針か錐かで抉られる樣で、それが一番苦しく悲しかつた。殊に田井君夫妻は親友として、最も多くお前や私を知つて居るだけに、それだけ田井さんの奥樣と相對して居るのが、私には忍び難い苦しみであり悲しみであつた。

「お葬式までは居られまへんよつて、何う仕樣かと思つて居ましたのに、恰度、好い時に來ましたわ。今日お納骨やつたら、沼野はんと一所に、お寺までお伴さして貰ひませう」

俊坊と私と堀君と、それに田井、沼野兩夫人と五名、車を連ねて、雨の黃昏を善福寺に參つた。車が寺の門前に停つた時、短い冬の日はトップリと暮れて、雨

の餘滴が外套やゴートの襟に寒かつた。有名な逆さ銀杏の雄々しい姿も、闇に聳へては見え分かず、四邊はたゞ陰森として、梟啼くかとも疑はれた。

廣い〳〵伽藍の中には、三四の法燈が明滅するばかりで冷たい風は何處からともなく吹いて、さながら冥府の國へでも迷ひ入つた樣な氣持がした。お前の骨を納めた箱は、白木綿に包まれて、佛壇に隣した壇上に安置してある。その前には美しい乾菓子や果物や、折柄の黄菊白菊が供へられて、香の煙のたゆたう樣は、最う人間の姿でなかつた。若僧の打鳴らす鐘の音は陰に響いて、住職の誦する佛說阿彌陀經は、抑揚悲し氣に聞えた。白骨の御文章に、老少不定の果敢なさを訓へられた時には、私も亦、殊勝な御佛の弟子であつた。

生れて初めて母の死に逢ひ、生れて初めてお寺に參り、生れて初めてこれ等の光景を見聞した俊坊は、幼な心にも何の樣に驚いたことであらう。海軍服を着て帽をかむり、玩具の小劍を佩びたまゝ、堀君に抱かれて、不思議さうに佛壇の方を凝視めて居たが、やがて堀君の膝を枕に、グー〳〵と寢入つて了つた。

「お母さんは、最う還らないの……」

と云ふことだけは、朧氣ながら承知して居ても、死の悲しさを知らぬ幼兒の心に、鐘の音や讀經の聲が、何の關る所あらうぞ。

寺の門を出た時、雨は未だ冷たく降つて居た。闇にも白い田井、沼野兩天人の姿を見るにつけても、思ふはお前が在りし世の姿であつた。十五年振の歸省を終へて、去年八月二十一日の朝九時過ぎ、新橋驛に出迎ふたお前と俊坊と三人、自動車を疾驅して皇城を拜し、青山の宅に歸つたのは、つい二月餘前であつたものを。僅八十日の月日を隔て、幽明、界を異にする今の身の上にならうとは、果敢いと云はうか、夢の樣なと云はうか、思ふさへ淚の種である。

「來年はお母さんの十三回忌だから、九年振に大阪へ歸ると云つて、其の事ばかり樂みにして居ましたが、電車が通る樣になつてからの大阪も知らずに、とう〳〵死てしまひました」

私が斯う云ふと、田井さんの奥樣は、

「苦勞性の世帶持の上手な、行屆いた人でしたのになア。暢氣な無頓着なあんたには勿體ない樣な、好い奥樣でしたのになア。何時死んでも宜い妾等が死なずに、奥樣のやうな方が死にやはるとは、ほんまに聞えませんわ、儘ならんものですなア」

と云つて、心から悲しみ嘆いて居られた。

その夜、俊坊を佛壇の前に連れて行き、半身に引延ばしたお前の寫眞を見せて、

「これ誰れ、俊坊知つてる？　知らない？」

と尋ねて見たら、俊坊はニコともせず、

「お母ちやん、病院もう居ないよ。のウのウさんなつたの、お母ちやん……」

と云ふや否、六疊の方へ逃げ込んで、佛壇の方へは、容易に近寄らうともしなかつた。

初七日の納骨で、お前の方は一段落を告げた。それから後は病院の哲郎、達郎が、一日も早く退院するのを、待ち設けるのみとなつた。

六、枕頭のお祭騒ぎ

達さんの經過は順當であつたが、哲ちやんの方は症狀思はしからず、一度降り初めた熱がまた昇つて、所謂ぶり返しの徴候を呈し初めたのは、お前の二七日時分からであつた。

「御三人とも、何うも餘程の惡性です」

と主治醫の心配らしい樣子を見た時には、お前一人を喪ふばかりで無く、哲郎も亦、母のあとを追ふて、還らぬ國へ旅立つのかと、私の心は波打つたけれども、運命の神樣は、それほど慘酷ではなかつた。

四七日過ぎ頃から、日一日と容體を見直して來て、「お粥は何時頃からだらう」と指折り數える樣になつた。腸チブスを病む者は、男と女とを問はず、賢さと愚なるとの別なく、たゞ最う「食ひたい、食べたい」の慾と望とで、生きて居るのだと聞いたが、子供等二人も亦、お粥を食べさせて貰ふ日が、一日も早く來るやうにと、たゞ其の事のみを樂みに、病院の月日を送つ

て居たのであつた。

お前が死なぬ前から、哲ちやん達さんの二人は、看護婦達の慈愛(なさけ)ある介抱を受けて居たが、お前が死んだ後は、一層行届いた親切な、思ひ遣りの深い看護を受ける様になつた。お前が死んだことを知らせたら、折角恢復しかけた容體に、何んな惡影響を及ぼすかも知れないとて、看護婦達の仲間は勿論、同室の患者達にも堅く秘密にするやうに申渡してあつたと見え、二人は隣室のお母さんが、死なれたとは夢にも知らず、安んじて治療と看護を受けて居たのであつた。母の死を知らずに、幼き兄弟たゞ二人、病の床に枕を並べて居ると云ふ事實は、父たる私の悲痛であつたのみならず、若い看護婦達の優しい心を動かしたと見えて、二人はお前が死てから、一層思ひ遣りの深い介抱を受ける様になつたのであつた。

看護婦達の同情が、二人の上に集つたことは、二人の枕頭に飾り付けられた、種々の玩具や折紙や細工物などで知られた。お前が危篤に陷つて呼吸を引取るまで、十日ほどの間と云ふものは、子供二人の上を思ふ暇などは少しもなく、たゞ其の様子を尋ねたり、體溫表を見たりするに過ぎなんだが、お前の死後、久し振に其の枕頭(まくらもと)に立つた時、先づ驚かされたのは、お祭禮ぎにも似た枕頭(まくらもと)の飾り付であつた。これと云つて、金目の物は無い様であつたが、いろ／＼の小い旗や、赤、青、紫とり／＼に美しい折紙や、飛行船の形したるもの、瓢箪の形したるものなどを、哲ちやんと達さんの枕頭に飾り付けてあるのが、如何にも華やかに、子供の眼を樂ませさうに見えた。退院した小兒患者の置土産にしたのも有らうし、看護婦の娯樂室から持て來たのも有らうが、斯うまでして、幼い患者を慰め様とする看護婦達の心は、容易に得難い氣高さ、優しさではあるまいか。

「やゝ、いろ／＼な物を飾つてあるねえ、哲ちやんにも達さんにも同じ様に、綺麗て賑かて好いねえ。こんなにして貰ふと、お宅(うち)なんか歸りたく無いてせう何時までも、何時までも、病院に居た方が宜いだら

う、二人とも、病院の子になつては何うだ」
わざと元氣らしい陽氣な調子で云ふと、
「綺麗てせう、看護婦さんが皆してくれたの。お花もねえ、お父さん、知らぬ間に誰か知らん持つて來てくれるんてすよ、黄菊だの、白菊だの……」
と哲ちやんは上機嫌、達さんは默つて嬉しさうに、ただニコ〳〵して居るのみてあつた。
何も知らぬ子供等二人が、日一日と快くなる樣子を見るにつけても、お前が生きて居てくれたならと、私の心は又しても愚に沈んだ。達さんの隣に居る四十餘の男の患者は、最うお粥が食べられる程に恢復したのて、朝な夕な哲ちやんや達さんの相手になり、
「二人とも怜悧だねえ、直き伯父さんの樣にお粥になるよ。最う大丈夫、長い間、能く辛抱したねえ、怜悧だ、怜悧だ」
と云つて元氣を付けてくれ、堀君や私に向つても、
「溫和しいてすなア、二人とも、何も知らないのだから、可愛想てすけれど、最う直きに快くなりますよ、御心配てしたなア」
と慰めてくれられたが、その内に一足お先に「左樣なら」と退院してしまつた。「お母さん、お母さん、云ふて泣くのが可愛想てす」とお前に憫まれた隣室の玉置武夫さんも、お風呂に入り散髮をして、可愛い坊ちやん姿になつて退院したに……。其の武夫さんを憫れんだお前は、最う此の世の人てはなく、子供等二人が快方に向つても、其の喜びを分かつ人も無いかと思ふと、私の心は寂しかく暗つた。
堀君は毎日午前か午後に、必ず病院へ行つて子供等を慰め、私は三日に一度位行つては、二人に元氣を付けて居た。病院へ行く毎に、必ず玩具か繪本を與へる事にしたが、父たる私には談話も少なく、何を云つても遠慮勝てあつたが、堀の叔父さんが行くと、
「叔父さん、今度は何を持て來てくれるの、少年世界が見たいけれど、未だ駄目だの、幼年畫報や幼年の友なら宜いてせう」
と云ふ事もあれば、時には突如として、

「お母さんは何處に居るの、未だお粥は食べられないのですか、快いの、惡いの……」

と、顔を凝視て尋ねる事もあつた。

二人の枕頭に飾られた種々の玩具は、お母さんの事を思ひ起させぬ禁呪であつたものを……。

七、基督降誕祭の夜

私の爲めには一代の大惡年、大正二年も憂愁の間に暮れて、歳暮贈答品大賣出しの旗提灯に、巷の往來心忙しい師走となつた。哲ちやんも達さんも年内には退院させて、心寂しい間にも、新年の喜悦を迎へ樣と思ひ設けて居たに、恐ろしい病魔の毒手は、逝く年の瀬の流と共には去らなんだ。

「哲ちやんは、達さんより遲れて入院したのだから、退院も達さんよりは五六日遲れるでせう。一所に退院が出來る筈だつたけれど、輕いぶり返しで惡くなつたから、達さんよりも遲く退院せねばならぬのです。宅に歸つてもお母さんは居ないのだもの、何時までも病院に居た方が宜いでせう」

七八十日も病院に居れば、大人でも小兒でも飽いて了つて、少し快方に向つて來ると、一日も早く退院したがるのは、少しも無理な事ではない。一時は二人とも一所に退院して、一所に青南小學校へ行くと云ふ事を、唯一の樂みにして居た樣子であつたが、中途から一所に退院することは、何うしても難かしくなつた。達さんの方は經過が良好で、二十七日には退院しても宜いと申渡されたに反して、哲ちやんは病院でお正月を迎へねばならぬと極つた時、達さんの嬉し相な顏に反して、哲ちやんは何んなに嘆き悲しんだであらう。

「達さんが先に歸ると、玩具を壞してしまうから厭だ。哲ちやんが出るまで、達さん待つて居てくれても宜いでせう」

と哲ちやんが弱く云へば、達さんは、又

「厭だい、厭だい、先に歸つて俊坊と一所に遊ぶんだ。兄ちやんの玩具は何も彼も、皆壞してやるから宜いや、病院は最う厭だ」

と強く云つて、哲ちやんの顔を見て笑つたりした。
國民新聞記者太田茂君が、チブスに罹つて入院し、哲ちやんや達さんの隣の病床に横つたのは、クリスマスの七八日前であつた。前に居た家の近所、座間さんの宅に一週に一度來て、素人相撲を取つて居た東の張出し横綱だと云へば、お前も知つて居るし子供等も能く知つて居る。その太田君が同じ病氣に罹つて、子供等と同じ病室に入つたのは、不思議な因緣とも云へるではないか。
「大變ですねえ、可愛想に……」
疑はしかつた太田君の症狀が、いよ〳〵腸チブスと極つて、他の重症室に移されるまで、其の十日餘の間、太田君と子供等は一所であつた。
「お父さん、座間さんの伯父さんとこて、能く相撲を取る伯父さん、太田さんてせう」
と哲ちやんが小聲で云ふと、
「知つてるよ、相撲の强い伯父さん……。座間さんの伯父さんも來たよ、昨日……」
と達さんも小聲で云つたが、知らぬ他の患者よりは、知つて居る相撲の太田君が同室に入つたことを、子供等は何んなに心强くも思ひ、何んなに喜びもしたことであらう。
クリスマスの夜には、銀座の吉川で買つて來た靴足袋入の玩具を與へて、二人の笑ひ興がる顔を見た。哲ちやんは未だ寢た儘て、お粥にも爲つて居ないが、達さんは一週間前からお粥になつて、二三日前からは床を離れて居た。初日は三間、二日目は室內、三日目には廊下へと云ふ風に、歩行の稽古もさせて貰ひ、クリスマスの午後には、風呂にも入れて貰つた程の元氣。堀君が行つても私が行つても、ニコ〳〵笑つて嬉しがりながら、心の中ては「お母さんの病室は……」と、人知れず慕はしく、逢ひたく、懐しさに堪えなんだことであらう。
「お母さんは大分快くなつたから、本院の方へ移つたのです。退院して快くなつたら、お見舞に行かうねえ。最少し早かつたら、この隣の室に居たのですか

ら、お母さんお久し振りですね、と吃驚させてあげたのにねえ。達さん怜悧だから、一等早く快くなつた。この次は誰でせう。お母さん、兄ちやん」

痩せては居るけれど、散髪して見違へる程になり、お前が洗張して縫つて置いた、久留米絣の綿衣に同じ綿入羽織を着た姿は、可愛い達さんである。三歳か四歳の幼児が初めてあんよする様な、極めて危い足どりで室内や廊下を歩いて居る姿を見た時、私の眼鏡は涙に曇つた。斯うして快くなり、斯うして退院する者は、達さん一人では無い筈であつたに、達さんよりも早く病で、早く入院したお母さんは、子供等の快くなる日をも待たず、盍然として去つて了つた。総ての悲哀も喜悦も、私一人の心の緒琴を、かき鳴らすに過ぎないのかと思ふた時、私の世間は寂しかつた。

十二月二十七日、達さんが退院する時、迎いに行つたのは堀君であつた。曾てはお前の遺骸を門外に送つて、涙の誠心を手向けた看護婦達も、其の日は喜悦の微笑を以て、幼い達さんを玄關に送り出した。

「お目出度う、達さん、お目出度う、ね」

お前の可愛い達さんは、斯うして退院したけれど、お前の可愛い哲ちやんは、病院でお正月を迎へねばならなんだ。――さらば分病室の我が哲ちやんよ、太田楢綱の伯父さんよ、哲ちやん達さんに親切なりし患者達よ、男よ、女よ。薄倖なれども好運にして、舊き年を送られよ、新しき年を迎へられよ――。

八、生の床と死の床

子供等を病院に見舞ふ時、最も憂かつたのは、お前の死んだ病室の前を通る事であつた。子供等の室とは僅に二つを隔た右側で、他の室と同じ白壁に薄鼠色の扉でありながら、其の前を通る時、私の心は慄ひ戦ひた。扉を開けば、中に女あり、それがお前ではあるまいか、お前であつて欲しいと念じたことも、一度や二度の夢心地ではなかつた。

お前の死んだ室、お前の死んだ病床の上に、小説家上司小劍氏の姿を見たのは、十二月の中旬であつた。

何時か銀座の臺灣喫茶店で、德田秋聲氏の紹介に依つて、初めて言葉を交した位で、それほど心易い間柄でも無いに、私はお前の死んだ病室の中に吸込まれて、お前の死んだ病床に寄つて、熱に惱む小劍氏に見舞の言葉を述べた。

「如何ですか、お苦しいですか。熱がお有りになると云ふ事は、本月の新潮で承知して居ましたが、やはり腸チブスでしたか。貴兄の小說「鱧の皮」は、大變な評判です、德田秋江君も、何かに非常に褒めて居ました……。熱は何うですか、苦しいでせう」

小劍氏は仰向けに寢たまゝ少しも動かず、

「有り難う、何うも苦しくてね……」

お前の死んだ同じ室、同じ病床に悶えて居る小劍氏に、お前と同じ最後の運命が落ちない樣にと、私は心の中で念じながら其の室を出た。科學の立脚地から云へば、迷信に等しい愚にも付かぬ御幣かも知れぬけれど、同じ病院の同じ病室や同じ病床にも、一種の神秘的系統や、因襲的歷史があるかも知れない。彼の病室に入つた患者は、十中の八九必らず死ぬるとか、彼の病床に惱んだ者は、恢復した例が無いとか云ふ樣な話は、決して稀有の事ではあるまい。診斷學や生理學や解剖學を超越して、人間の命運を支配する不思議な力、それが「生の病室」ともなり「死の病室」ともなり、或は又「生の病床」「死の病床」となるのかも知れない。

「死ぬる病床」に橫はつたが爲めに、お前が全快しなかつたとすれば、同じ「死の床」に惱む上司小劍氏の命運にも、戰慄すべき最後を見ねば宜いが、――小劍氏は最う全快して退院し、述作に從事して居るさうなが――と、私の心は愚にも波立つた。確とした宗敎を有たない私でも、人間の生死を科學的にのみ看過することは、何となく物足りなく、何となく空恐しい樣な氣持がして居るに違ひない。十月一日に發病して、十一月十一日に死んだと云ふ、其の短いお前の四十一日を思ふに付けても、「死」は科學の他に絶對であるとも解かれやう。

それにしても、惡い大正二年が暮れて、厭な三十六

歳を過したことは、私にとつての大きな安心である。年始狀を失敬した程の目出度からぬ新年でも、新なる年には新なる年に相應しい希望が生れやう。その希望と喜悦の第一歩に、一月十日哲ちやんの退院を數えるのも、僅に自ら慰め樣とする日記の虛僞のみではない。

「哲ちやん、御退院ですか、お目出度う」

父と子四人、久し振りに起臥を同じうした歡喜の座敷に、無くてはならぬお前を亡つて居るのが、たゞ一つの悲嘆であつても、子供の上には生きて居るお母さん、私の心には永久に、死なずに居るお母さんが、草葉の蔭から微笑んで、行末の幸福を祈つて居らう。

四ケ月目に世の光に觸れた喜しさに、哲ちやん達さんの顏はかゞやき渡つた。

「病院とお宅と何らが好い？　お母さんが居ないから、寂しいでせう。病院に居れば、親切な看護婦さんが、親切に世話してくれるのに……二人ともまた病院に入つては何うだ」

戲談に斯ういふと、哲ちやんも達さんも、

「病院は厭、お宅の方が何の位宜いか知れない。病院でお粥を食べた時には、ほんとに美味かつたけれど、お宅で食べると未だズット美味しい。お母さん居なくても、最う直ぐ全快つて歸るのでせう。お母さん歸つて、哲ちやんも達さんも入院して居たと云つたら、吃驚するでせう、面白いねえ」

と極めて平氣であつたが、五日と經ち十日と過ぎても、堀君や私が病院へ行く風も見えず、お前の話もしないので、子供心にも多少變に思つて居たかも知れない。變に不思議には思ひながら、それと明ら樣に尋ね樣ともせず、不安の間に今日まで過して居たとすれば、不憫でもあり、可愛想でもあつた。

斷長じて後、今日を想ひ起す時、幼い俊坊にはお前の記憶が無くても、達さんには朧ろ氣ながら、お母さんの姿が浮かばう。哲ちやんは顏も姿も、明瞭と覺えて居て、褒められた晨、叱られた夕の事々に、母の慈愛を偲ぶであらう。十五で母を亡つた私にも、五六歲からの思ひ出があるものを、幼うして母を失つた私の

不幸は、私の子等の上にも落ちて、私が母を懐しむやうに、齢長じて後の子等も、お前を懐しがることであらう。風につけ雨につけ、母の慈愛で人と爲り得なかつた不幸を、何んなに嘆き悲しむことであらう。

お前に遺された三人の子、それが此の世界の中で、私の愛さねばならぬ唯一つのものである、と思ふ時、私の心は限りなく寂しい。其の寂しさを慰めるのが、唯三人の子を愛することである、と思ふ時、私の心は遣る瀬なく侘しい。お前の死に依つて、最も力強く私を鞭つたものは、此の「父たる自覺」である。

九、幼き子の憂い顔

同じ可愛い三人の子の中でも、お前の心が殘つて居るのは、幼い五歳の俊坊であらう。兄二人入院の留守中、父にも代り兄にも代つて、母の回向に努めたのは、死の悲哀を知らぬ俊坊であつた。

お前が病氣せぬ去年の九月までは、風邪一つ引かず成人して、丸々と能く肥り、氣も心も活達であつたが、お前の入院後は、何となく浮かぬ顔色の子になつた。母の病氣入院に續いて、二人の兄を病院に送つてからは、幼な心にも淋しさ身に沁みたのであらう。お前が壯健で居た時には、私の傍へなど寄り付きもしなかつたのに、病氣してからは私と仲好しになつて、一所にも寢たし、一所に遊びにも出る様になつた。

堀喜知六君が來てくれてからは、兎もすれば叱り飛ばす私を厭がつて、堀の叔父さんに懐き親しむ様になつた。入院してからのお前の心配も、たゞ俊坊の身の上であつたが、堀さんが來てくれたと聞いた時、お前は何んなに喜んだであらう。堀君は二三年前に同居して、俊坊とも馴染があるので、來ると直ぐ「叔父ちやん〳〵」と慕つて、飯を食ふにも、便所へ行くにも、起るにも寢るにも、堀の叔父さんで無くては夜の目も明けぬ有様である。たゞ堀君が病院へ行く時だけは、温順しく待つて居たが、其の他の場合には、一寸青山の通りへ出るにも、離れずに從いて行つた。

お前が壯健で居た頃は、お前が一心不亂に裁縫をし

て居る傍に坐つて、幼年書報や種々の繪本、繪はがきなどを列べて、半日でも一日でも温順しく遊んで居た。おやつでも貰つて機嫌の好い時には、君ケ代や桃太郎、牛若丸などを、可愛い節を付けて唄ひ初め、「何時何處で覺えたのでせう」と、父や母を驚かすこともあつた。餘りの可愛さにお前が頰ずりすれば、私が抱き上げて高い〳〵をし、遂に泣かせる様な事もあつた。また机の抽斗から、鉛筆と原稿紙を取出して、譯の判らぬ人形を書いたり、英語の様な字を書いたり、時には簞笥や襖に山水の大傑作を描くこともあつた。この子壯健に成人すれば、或は三人兄弟の内、一等傑出するかも知れないとは、單り親馬鹿たるお前や私の語り草のみではなかつたに……。お前が病氣入院後は、堀の叔父さんに世話して貰ひながら、母と一所に暮した當時ほどの活達な態度は見られぬ様になつた。

お前が死んで後、七日〳〵に寺參りに連れて行つた頃が、最も悄氣た頂上であつた。クリスマス近い冬の夜、私と堀君と俊坊と三人連て、銀座通りの散歩に出かけた時にも、俊坊の顏には未だ寂しさが漾つて居た。その夜は喜仙で晩飯を食つて、吉川で玩具を澤山買つて、ライオンへ連れて入り、

「俊坊、自動車乘つて歸りませうか」

と、ツイ口を滑らすと、何うしても自動車に乘るとせがみ出した。玩具を買つて遣ると云ふことは、俊坊の生活に關り深いことであつても、自動車に乘るのは愉快な程の齡でもないに、遂に乘らねば承知をしなかつた。此方から誘ひ出しさへすれば、隨分唄つたり飛んだりハネたりして居たのに、哲ちやんや達さんが退院するまでは、心から嬉しい日は無いと云つた風に、引込勝の事が多かつた。何も彼も「叔父ちやん〳〵」で、一時は身體中に小い腫物が出て、それが痒いと云つては、夜一夜叔父さんを寢させない様な事もあつた。

俊坊の爲めにも、淋しい味氣ない大正二年が過ぎて、年の新なると共に、達さん哲ちやんの退院、全快となつて、一家は久し振りに笑ひさゞめく様になつた。久しく仕舞込んで置いた蓄音機を取出す、活動寫眞を觀

に行く、兄二人の遊び友達が出來てから、俊坊の元氣は次第に恢復した。この頃ては最う哲ちやんや達さんと喧嘩もするし、一人て唱歌を唄つたり、可笑しな身振りをして、飛だりハネたり、殆どお前が在世の頃と違はない様になつたが、たゞ朝な夕なが如何にも淋しさうに見えて、不憫に思ふことが度々ある。

「俊坊、お母さんは何うしたの?」

と尋ねると、一時は「病院〳〵行つたの」とも答へて居たし、また「お寺さん暗いとこ行つたの」とも云つて居たが、この頃はたゞ默つて厭な顔をするのみてある。死と云ふ事實は判らなくとも、お母さんが最う還らないと云ふ事だけは、幼な心にも承知して居るのか、未だ曾て一度も、お母さんの事を尋ねた事はない。子供の口から亡き母の事を云はせて、生きたる父に悲嘆を増させるのは、いやが上の慘酷てあると思し召した、神の不思議な攝理に因るのか。

堀の祖母さんは、近い内に國へ歸られる事になり、親身になつて一家の事を世話してくれる人は、今の所少しも目當が無いけれど、私さへ壯健で居れば、何とかして遣つて行かれぬ事もあるまい。それにしても感謝しなくてはならぬのは、今度の大災厄に就いて、犧牲的に助けてくれた堀喜知六君の熱い同情と深い親切とてある。傳染病患者相次いて起つた病魔の家に來て、厭な病院通ひから、面倒な一家の世話、厄介な子供の事まて、殆ど一手に引受けてくれたので、何の位、私の心頼みとなり、大助かりになつたか知れない。

「喜知六さんの世話になつた事は、一生忘れては不可ませんよ。お父さん、堀の叔父さんの爲めには、何んな事でもして上げて下さいよ」

と、お前も死ぬる前から云つて居た。私も堀君を何時までも煩はして、平氣て居る譯てはないが、今も尚堀君が居てくれなくては、何うにも斯うにも仕樣の無い有樣てある。此の又と得難い好青年の上に、好い運が向いて來る樣にと、心では念じて居りながら、相變らず堀君の世話にばかり爲つて居る。

十、我が三人の戀人

　葬式は四月上旬に營んで、先祖の墓地へ埋骨の爲め歸省するのは、下旬頃になるであらう。去年十五年振りに歸つた時には、お前も未だ壯健(たつしや)であつたものを、僅に一年を隔ずして、骨を抱いて歸らねばならぬとは、何と云ふ悲しい痛ましいことであらう。

　三人の子を連れて善福寺へも參詣したいし、早くお前の遺品(かたみ)分けもせねばならぬのに、此の日頃私の心は亂れ勝で、何をするにも手が付かぬので困つて居る。三人の子は堀君に馴れ親しんで居るとは云つても、お前が居た頃とは違つて、何かに付けて心細く淋しいであらうと知りながら、私は三日に一度夜を更かして歸る樣な事もある。カフエーや小料理屋などで、如何に酒の醉を求めても、家へ歸れば直ぐ覺めて了(しま)つて、二階の八疊へ横になると、止め度もなく涙がこぼれて、何とも云へぬ哀愁に胸迫ることも度々である。

　お前に死別れたのが、悲しいばかりでも無く、母を失つた子供等が、不憫なばかりでも無く、果敢く散つたお前が、可愛想なばかりでも無い。たゞ何とも名狀し難い一脈(みやく)の哀思、常に胸深く流れて居るのが、心の絃琴に觸れては鳴つて、涙の泉と湧くのであらう。社の仕事で衆議院の傍聽に行つて居ても、賑かな電車に乘つて居ても、友人と一所に會食して居ても、不圖した其の時の氣持に依つて、涙催す樣になつた。新聞記者になつた最初の二十三四歳、觀るもの聞くもの皆珍しい時代には、市井の一事故に對しても、直ぐ感傷的の氣分になつて、能く泣きもし能く憤りもしたが、此の頃の氣持が恰度それである。深夜眼覺めた俊坊が、何でも無いのに泣き聲を立(たて)ても、直ぐ涙がこぼれるし、達さんが風呂からあがつて、裸體で飛び廻る姿を見ても、兎もすれば涙を催すなど、私も大分弱く女々しい男になつた。

　何の涙であらう、それと明ら樣には自覺せずとも、死んだお前を不憫に思ふて泣くこともあらう、遺された三人の子を可愛想に思ふて泣くこともあらう。或は

また妻を失つた中年男の寂しさ遣る瀬無さに、我れ知らず落涙することもあらう。放埓な頓興な浮き〳〵した私に、靜思せよ、自重せよとの天の意が、此の一脈の哀思となつて流れたにしても、お前を亡つた償としては、餘りに高く餘に慘酷ではあるまいか。

「三人の子供を養育して、三人それ〳〵の材を適所に發揮させるのが、唯一つの私の仕事である。お前を世に遺し、私を世に傳へるの道は、たゞ三人の子を出世させるにある。私の仕事は文章でもない、傳道でも無い、たゞ子供を育てる事のみてある」

お前が死んだ後、私は斯う心に極めて居りながら、兎もすれば自分自らの寂寞と哀愁とに堪えず、燈火の巷に浮いた歡樂を追はうとすることもある。私の愛すべき當面の戀人は、たゞ三人の子のみてあるのに、稍もすれば此の戀人の羈絆から免れ様とするのが、今日此の頃の私の取亂れた心持てある。

けれども、私の愛すべきものは、三人の子の他には何人も無く、私を愛してくれる者も、此の三人を措いて何處にあらう。父としての自覺に依つて、お前の可愛い忘れ遺兒を、人として世に出すのが、お前に對する私の愛て、また十三年の間苦勞を掛けた、悲しい債務の償却てある。お前を失つた寂しさを、子等に依つて慰め得るなら、再び娶らず世を送らう。失つた者は永久に歸ること無し、遺された者こそ又と得難い、貴き我が寶なれ。哲郎は大富豪か、然らずんば父の志業を次いで、新聞記者として重きを爲せ。達郎は軍人か、然らずんば事業家として、物質界に雄飛せよ。俊郎は大學者か、然らずんば國士として、政治界の重鎭たれ。——海の者とも山の者とも、餘りに前途が遠くて判らぬけれど、お前は安んじて瞑して宜い、三人の忘れ遺兒には、上帝も祝福を垂れ給ふてあらう。

私の理性は斯う云つても、私の本能は依然として、淋しく味氣なく遣る瀬が無い。

「物慾の旺な若い男が、子供のみを愛して居られるものか。事毎に涙脆くなつたのは、寂しいからだ、妻を失つたからだ、獨身者であるからだ」

と心の一方には、强い囁語の聲が聞える。死んだお前も不憫なら、遺された三人の子も可愛想であるが、良人たり父たる私も限り無い不幸である。死んだお前への私の任務は、忘れ遺兒を壯健に育て、世に有爲の人とするにあつても、私は先づ私自身の不幸を轉じて、幸福多い月日を迎へねばならない。――

種々雜多な感情がこんがらがつても、果はたゞ胸迫る哀思となつて、涙を催すのみである。葬式を濟ませて國へ歸り、埋骨を終へたなら、少しは落着いた氣分になつて、行末の事も考へられやう。私一人の身の上を持扱ふにさへ、少からぬ疲勞を覺えて居るものを、今は最う何事を考へるのも厭てある。

それにしてもお前の死は、三人の子を私に投げ掛けた事に依つて、淺からぬ意味あるを覺える。遺された三人の子には、それ〴〵の定つた運命があるにしても、三人の子に依つて生きんとする私の行末は、何う云ふ風に變るてあらう。

私は今、一代の危機に立つて居るのだ……。

――大正三、二、十五、夜――

附記します。その後も未見の方々から、御親切な慰問狀を頂きましたが　未だ何れへも御挨拶を申しません。何れ一々御禮狀を差出す筈てすが、取敢ず餘白て御禮を申上げます。愚な事ばかり書いて、時に恥しいとも思ひますが、私の樣な場合に共通した事件と、感情とを有つて居られる方々は、定めて世間に多いことてあらうと存じます。次號には「同棲十三年間」を書いて、私等夫婦の半生を告白します。その目次は「滑稽なる媒介口」、「聲ばかりの見合」、「二階借の佗住居」、「月給十四圓時代」、「牛肉を食ぬ馬鹿」、「お大師樣に願掛」、「長男哲郎の出産」、「國の父を迎へて」、「初めての茶屋酒」、「最後の牛肉鍋に」、「東京へ、東京へ」、「眞情流露の手紙」などてす。愚な人間の愚な記録に過ぎませんが、私にとつては決して無意味な勞作てはありません。

――三月九日午前四時、天民生――

來るべき帝國海軍の首腦

島村速雄――加藤友三郎――八代六郎――加藤定吉――財部彪――村上格一――黑井悌次郎――野間口兼雄――佐藤鐵太郎――秋山眞之

某海軍提督

「積年の情弊を廓清するに足るべき山本閥以外の海軍の人物」と云ふ題目を掲げて、前號の中央公論は時局問題に關係ある海軍評論家の人物評を蒐め、以て將來の帝國海軍を指導すべき人物の何人なるかを探らんと試みた、之は時節柄殊に重大なる研究で、單にコムミッション問題から今の海軍の廓清を圖らんとするが爲のみでなく、帝國々防の第一線として將來我國の勢威を如何なる位地に置かんかと云ふ大問題を解決する上に於て、誠に切實緊急なる問題であるから、我輩は必ず海軍の内情に精通した有力なる說が現はれて、海軍部内は云ふも更なり、一般國民をして歸適する處を知らしむるであらうと樂んで讀で見たが、實は聊か失望した、あの四人の論客中其三人は海軍々人、一人は人物評論家として名ある人であるから、今少しく海軍部内の事情に通じ、重なる人物の色分、性能、人格、部内の評判等を知て居る事かと思ふたが、紙上に現はれた處を見ると、一向に左樣でないらしい、乃て我輩は不肖ながら我輩の眼に映じた處を、無遠慮に發表して、世の海軍評論家の參考に供したい、斷つて置くが我輩は山本閥の人間ではない、又今日の机上改革論者の仲間でもない、但し海軍の革新を希望する上に就ては、決して人後に落つる者でないと云ふ事を承知して置て貰ひ度い。

我海軍も西郷侯以來全く山本大將一派の勢力で押通

して來たものだが、今度と云ふ今度は此閥も破れるのらしい、齋藤大臣は溫良なる好紳士で決して惡い事をする人では無いが、今度は仕方がない、是非引て貰ひ度い、御當人も其積りだらう、海軍始まつて以來有數の好軍人を、詰らぬ事で引退させるのは誠に氣の毒だが、是非がない。

伊集院軍令部長も既ふ疾に順が來て居るのに、未だのめ／＼として居るのは、其後釜の心配から來て居るのだ、事情を知らぬ人は、山本は財部を以て齋藤の後に据へやうと思ふて居ると云ふが、左様でない、財部の持て行き處は實は伊集院の跡で、財部は軍政よりは寧ろ策戰の方が良いのだ、彼が今日までの經歷は、只後來軍令部長に据はるべき準備をして來たに過ぎぬ、其前例は即ち伊集院である、實際伊集院は大尉時代から軍令部に許り陣取つて、時々艦に乘つたり外へ出たりするのは只進級の規則に遵はんが爲のみで、年限さへ來れば直ぐ軍令部へ歸る、財部は即ち其例を追て來たのであるが、軍政も少しは行つて置かねばと云ふので、齋藤の下へ次官にしたのだ、處が未だ大分先輩が在て容易に軍令部長と云ふ處へも行けず、伊集院との間がチト長く離れ過ぎて居るから、山本も實は困つて居るのだらうが、何れ伊集院の次へ好い頃加減の人間を据へて、其間に財部に鎮守府司令長官を一年、艦隊司令長官を一年もさせてから、直ぐ軍令部長と上すのだらう、事實軍令部長は議會には關係なく、內閣とも責任を共にせず、遣り方次第では自由に軍政を掣肘す事が出來るのだから、將來長く海軍の樞軸を握つて行かうと云ふには至極の位地である、山本が財部を此に据へやうとするのも無理はない、斯んな事は世間の海軍論者は知らぬ。

然らば海軍大臣の後釜は誰かと云ふと、先づ島村と加藤(友)の外はない、此兩人は頗る人物が變つて居るので、共に我が海軍の首腦人物を出して居る明治十四年クラスの出で、島村は一番、加藤は二番で卒業した珍らしい俊才なのだ、島村は人物が其體格の如く偉大て、人格は高尚、頭腦は明晰、學問は十分ある、外國

語も達者だし、伊多利にも行て居て西洋の事情にも通じて居る、戰爭をさせても、外交をさせても、事務を執らしても、眞に申分がない、夫て口數は利かぬが却々の愛嬌者だ、加藤はと云ふと、之は眞の海軍々人て冷靜沈着、精勵透徹、如何なる大事件が起つても少しも驚かず、直ぐ判斷を着けてドシ／＼實行する、夫が他人が十年考へたより良いと云ふのだから誰ても一歩を讓る、何事にも空つ嘯いて平然として居る事は亦無類て、日露戰爭の後半東郷大將の參謀長として日本海々戰に彼れ丈の功を樹てた時ても、彼は尋常茶飯の事として何とも思はなかつたらしい、加藤は眼前に十二珊の彈丸が破裂しても、眉毛一本動かすまいとは當時彼の戰爭振を見た人の評てあつた、其の餘りに熱の無い、冷靜に過ぎるが爲却て部下などから親しみ難い人間の樣に思はれ、畏敬はされるが欽慕はされないと云ふ傾きがある事は、現に彼の拔擢のお蔭て今日の地位を得た栃内中將の如きも「何だか煙たい畏い人」と云て居るのでも分る、然し有繫に長く軍務局長や次官を行り、怪傑山内萬壽治が多年勢力を植込んだ吳鎭守府へ行て、グーとも云はせず存分な改革をした手際などを見れば、彼が今日海軍大臣として囑望されるのも決して無理てない、其口數を利かず要領を得て居る態度は、議會に對しても決して受の惡い事はあるまい、有名な正覺坊てあつた彼も、二三年前から餘り杯を手にしないと云て居るから、其抱負も決して小てないと思ふ。

然らば島村の持て行き處はと云ふと、之は申迄もなく軍令部長だ、今日の海軍士官中島村位軍令部長に適任の人はあるまい、八代も惡くは無いが、軍令部長としては島村の敵てはない、其島村が今日まで四年の久しき佐世保の片田舍へ抛り込まれて、軍令部長は愚か未だ一度も第一艦隊司令長官の旗さへ上げ得ぬのは、全く山本一派薩州派の猜疑で、若し一度び島村を伊集院の後へ据へたら、彼は必らず目覺ましい改革をして隆々たる名聲を荷ひ、終に財部をして其跡を繋ぐの機會なからしむるに至るだらうと思はれて居るからてあ

る、男振が惡い爲め良い役が附かず、前の見えて居る旅順へ追遣られて居る坂本一や、誤つて家宅捜索を受けた武田機關中將などは何れも島村と同じ土佐出身の好みて、頻りに島村軍令部長說を唱へて居るが、今までは到底物になりさうもなく、遠からず軍事參議官で御隱居樣かと思つたら、圖らずコンミッション事件で薩派が勢を失し、場合に依れば島村の軍令部長說が實現されさうになつたのは、帝國海軍の爲に賀すべき次第である。

軍令部長を島村と爭ふ點に就ては兎ても勝目はあるまいけれど、其他の事に於ては、八代六郎も決して人後に落るものではない、彼は矢張り我國に於ける海軍戰術家の一人で、露西亞語に通じて居る處から深くマカロフに傾倒して居た、日露戰爭の愈々避くべからざる事が解つた時、我が海軍は特に大佐たる彼れ八代を拔て海軍大學の選科學生に入れ、校長坂本俊篤等と共に深く對露國海軍策戰の研究に從事せしめた、當時彼の對露談の一節が某新聞に現はれたのを怒つて、其新しを書いた記者の首を貰ふと云つて新聞社へ怒鳴り込んだなどは聊か大人氣ない事だが、之も彼が軍艦のブリッヂで尺八を吹いて水兵を喜ばせたり、決死隊に加はつた廣瀨中佐に下手な詩を送つたりしたのと一班、彼が尙ほ若い元氣を失はなかつた證據で、寧ろ愛すべき性質、從つて部下の人氣を集め、戰爭などの際大に志氣を鼓舞するに適當なる人物と云て宜しからう、即ち八代は艦隊司令長官として尤も適當なる好提督で、將來若し海上に事ある場合には、彼は必ず名譽の司令長官旗を掲揚する一人となるであらう。片桐主計大監が『彼は純白なる軍人で非常に武勇もあるから大臣より軍令部長が適當』と云たのは、彼を知らず併せて軍令部長の職責を知らざる言である。

＊　＊　＊　＊　＊

人若し我輩に對つて、向後七八年間我が海軍の軍政を料理するに尤も適當なる人物は誰かと問へば、我輩は些の躊躇を須ゐず、現に第二艦隊司令長官たる加藤定吉中將なりと答へる、加藤中將の人物と、性質尉て

と、其閲歴と上下の關係を知て居る者は、必ず我輩の言の道理あるに服するであらう。四人の海軍論者が遂に一言も定吉中將の事に言及して居ないのは何故だらうか、多分は御承知ないのであらう。

定吉中將は江戸つ子で、明治十六年に兵學校を一番て卒業した人である、短軀肥胖、達摩の如き容貌て然も愛嬌がある、餘程善い腦を持て生れた者と見えて、此人は何をやらせても出來ぬと云ふ事がない、何ても立派に出來る、而して人格は優秀て品行は方正、他人には親切て自ら奉ずる事極めて薄い、誠に申分がない、左ればこそ先年故山階宮菊麿殿下と伏見宮博恭殿下が海軍御修業の爲に獨逸に留學せられた時、彼は選抜を受けて兩殿下のお附武官となり、學問の御相手をすると共に朝夕の御世話を申上げた、一方には兩宮殿下をして立派な海軍士官に御養成申上る職務があると共に、一方には獨逸國官民殊に其海軍に對し、日本皇族の威嚴徳望を輝かし、同時に日本海軍の名聲信用を示さなければならぬ、此の重大なる任務は當時僅かに大尉である定吉中將の双肩に負はされた、滯獨數年、彼が美事に其任務を盡し了せた事は、我輩の喞々する迄もない事である。

歸朝後は艦隊鎮守府の參謀、海軍大臣の秘書官等、常に重要なる位地にのみ就て居た、有栖川宮殿下の御信用を受る事尤も厚く、西郷侯の信頼を得た事極めて深い、彼の同級生ても、友人ても、一人として彼に惡言を放つ者がない、皆口を揃へて曰ふ、加藤は今に屹度海軍大臣になるよと。

我が海軍人材多しと雖とも、加藤中將の如く凡ての方面に圓滿に遺憾なく發達した人は無い、彼と同級生て今支那に行て居る才物名和中將の如きも、定吉中將には常に一歩を讓つて『加藤は別だよ、己が敵はぬと思ふのは彼ばかりだ』と言て居る、蓋し英雄英雄を知るの言であらう。

以上は現に近き將來に於て大に頭を擡げんとする人物に就て、所見の一端を洩らしたのであるが、次手ながら今少し後の方の人物に向つて、二三の短評を試み

やうか、然し大體に就ては世間の見る處は餘り違はない、今云つた名和の如きも少し酒を謹んで健康さへ衰へねば、軍令部長でも大臣でも何でも出來る、然し果して此の如き好運が彼を見舞うか否かは疑問だ、軍務局長の野間口兼雄、練習艦隊の黒井悌次郎、共に大に用ふべきの器、大事の場合に薩州の勢力失墜は野間口の爲には氣の毒である、財部は權兵衞の婿であるが爲に、利益もしたらうが亦損もした、將來は損の方が多いかも知れぬ。

　呉の村上格一、横須賀の栃内勇次郎は何方も役に立つ、然し偉大なものではない、村上が意外な事で大味噌を附けたのは惜しむべしだ、加藤(友)の參謀長佐藤鐵太郎には大なる將來がある、彼は庄内の一小士族の身を以て、夙に其人物を同級の子爵小笠原長生に認められ、終に其妹を妻に貰つた位の男、海軍戰術家として該博なる知識を有し、數々有益なる著述を試みて海軍思想の普及に資するは敬服に堪へぬ、之も定吉中將と同じく演説も上手、人好も善い、何れは有數の椅子を占むるに違ひない、佐藤の如きは英國の海軍學者としてゞも決して恥かしからぬ男である。

　秋山眞之は日露戰爭の海戰報告に於て、舷々相摩すとか、敵艦悲鳴を揚げて逃ぐとか書いたので、終に其名を知られた好參謀官であるが、實は彼には意外の眞骨頭があつて、如何にも武士らしい處がある、好んで野球を見に行つたり、六尺褌論を唱導したりする處は、前の悲鳴の文字の如く聊か彼の衒氣を疑はざるを得ぬが、八代式を行く人物としては、蓋し同じく重きを爲す器であらう、

　話しが多く枝葉に渉つて、四氏の説に對する批評的觀察としては或は聊か脱線の氣味かも知れぬ、然し以上の事實の中には、部外の者の知らぬこともあらうから、何等か參考の一端にもなる事と思ふ、若し然らば我輩の希望や足れりとするのである。(完)

彼は如何にして彼女を娶りしか

佐藤照魔鏡

出雲の神と云ふお節介な粹な神様が、頼まれもせぬのに好加減な男と女を結び附ける、すると媒介人と云ふ剽輕者が現はれて、物好にも彼方此方と駈け廻つて、肝腎の當人同志が一向納得もしない中に、無暗と四海波靜かと謡ひ納める、軈ては此間に起る紛擾を聞き嚙つて、黄金の茶釜でも掘り出した樣に大袈裟に吹聽する新聞記者も、其始めには『何の某が何某の令孃なる子と、誰々の媒酌に依て目出度く結婚の式を擧げられたり』などゝ見得にもならぬ肖像まで入れて好い氣な提灯を持つ。

是れ丈の事であれば、結婚などと云ふものは如何にも容易い事で、何時も無事泰平、芽出度し／＼と納つて行く樣であるが、偖實地と裏面とは大層な違ひ、一度び其裏面の眞消息を捜つて見れば、それこそ驚入る事實が澤山ある、呆れ返る程の珍談奇話が多い、寧ろ其眞事實が餘りに醜劣で、奇怪なるが爲に、其體面を飾る爲に却て彼の如き綺麗な莊重なものにしたのかも知れない、昔時の人は結婚を以て、生と死と共に人生の三大禮と云つたが、實を云へば生も死も其當人に取ては實は如何とも し難い事で、共に他人がして吳れるのだが、結婚許りは事實自分が第一番の當事者で、肉體に於ても精神に於ても尤も元氣旺盛な時の事であるし、尤も人間の本能を發揮する仕事であるので、極めて面白い奇拔な出來事が多くなる譯である、表面こそ何喰はぬ顏で濟して居るものゝ、一度び自分で夫を持ち妻を迎へた時の事を考へたら、內心忸怩たらざる者が何人あるか、聞て見たいものである。

乃で此に本文の記者が平生聞き知て居る當代名士の結婚談の二三を揭げる、事は素より一家の內事で、殊に何れも極く古い時代の事であるから、書かれゝ諸君の中には或は迷惑をされる人があるかも知れぬ、然し事實は事實で、自分が公然と世人の面前で行つた事を、假令夫れから年限が經ち、位地が違ひ考へが變つて來たとした處で、今更之を吹聽されては困ると云ふ理屈もあるまい、假に其內に何等か過失の點があるとしたら、讀む人の中で今後結婚をしやうと云ふ人に向つて多少參考となる利益が無いでもあるまい、亦其事實が誤つて居ると云ふ人があつたら何卒其誤らない眞實の話しが聞かして貰ひたい、記者は喜んで其誤れるを正し、本當の話しを傳へやう。

△品川の夜嵐

山本權兵衞伯と登喜子夫人

先づ第一に山本權兵衞伯と伯爵夫人登喜子との結婚顛末を御紹介しやう、之は必ずしも權兵衞伯が内閣首相と云ふ榮位に在るからと云ふ次第でない、其結婚の事實が極めて珍々無類で、僅かに本欄の第一位を占むべき價値がある爲である、然し權兵衞伯の此の譚は、伯が内閣組織以來、殊には最近海軍問題勃發以來、大分世間に喧傳せられて居る、然し近頃傳つて居る話は氣早な新聞記者が碌に調べもしないで、好加減な事を書いたもので、肝腎の面白い事は餘りに聞へて居らぬ、即ち此に改めて紹介する所以である。

伯爵夫人登喜子の方が、品川の貸座敷箸屋へ娼妓に賣られて來た新潟縣は西蒲原郡赤塚村の水呑百姓津澤麻助の娘で、いまだ公然と店へは出ない云はゞ見習の中に、時の海軍少尉補權兵衞伯に擔ぎ出されて今日の位地になつたのである。然し登喜子夫人の當時の身分に就ては種々な說がある、或は既に娼妓となつて居たので、之へ權兵衞伯が通ひ詰た揚句金を出して落籍も出來ないので夜中樓主の隙を窺つて盜み出したのだと云ふ人がある、然し之は嘘だ、登喜子夫人は當時未だ十七歲の少女で、しかも箸屋へ來てから極く間がない、素より娼妓になるべく賣られて來たのだから、何れは店へ並ぶ筈だつたのだが、其筋の手續きが濟んで居なかつたか、未だ女郎の勤めはして居なかつたのである、然らば絕對的に無垢の少女で、全くのバージンで在たかと云へば、之は亦保證は出來ぬ、素より女郎に賣られて來る位の女の、其以前だとて必ずしも處女とは受合れぬのみならず、今日でさへ左樣だが、其當時の女郎屋なるものが、未だ其筋の許可が下らぬからと云つて、見す〳〵金になるものを客に出さぬ樣な愚直な事をするものではない、世には馬鹿な錢を鴇母に握らして、そんな女ばかり覗つて歩く好事家も少くないので、突出し前の下地ッ妓と云ふものは、案外な稼ぎをしたものだと云ふ、然らば登喜子夫人の場合も大體推想するに難からぬ次第である。

偖も權兵衞少尉補、一度び此目圓らに肌白く、人の前へ出ては只おど〳〵して居る可憐なる田舍少女を見て、矢も楯も堪らない、可愛の登喜子は默視て居れば近き内にそれこそ半點の朱唇萬客嘗める境遇に陷つて了ふ、是非之は助け出して自分の物にしなければならぬ、然し落籍さするには金が無し、一任よ、非常手段と暗夜に乘じて登喜子を擔ぎ出す決心をしたが、此れは却々に重大事件で、兎ても一人の力には行かぬ、誰か腕の強い向ふ不見の勇者をと捜して、此光榮ある援助を賴まれたのは上村大將である、成程此は至極の御適任と首肯される。

乃で權兵衞、彦之丞の兩豪、今日になつて這樣事が中央公論に出やうとも想はなかつたから、一夜暴風雨に乘じ三人牒し合して登喜子を箸屋の裏木戶から連れ出し、同じく品川に在つた海軍御用の合宿所へ擔ぎ込んだ。

夜が明けてから、箸屋の騷動は非常である、駈落の對手は豫てからの

樣子て直ぐ權兵衞殿と解つた、追手の誰彼は直ぐ海軍の合宿所に掛る、素より覺悟の權兵衞少尉補、相棒の彦之丞どんと共に得意の辯舌を振つて是を非と言捲る、出方に依ては腕力は御手のもの、權兵衞伯今でも彼の體格で、暴漢の一人や二人は自分で叩き倒す意氣込で居られる由だが、其當年の腕力は素晴らしいもので、兵學校中喧嘩さしては彼の對手になるものは無つたと云ふ、後年獨逸の軍艦イルチス號に乘組を命ぜられて、暫らく同艦士官室の厄介になつたが、言葉は、滿足に通ぜず、例の豪頑不屈と來て居るので、同艦の青年士官と倏忽ち大衝突を來した、其時先生例の拳固を振舞はして、日本男兒の勇氣を見よやと、突嗟に二三人の獨逸士官を打倒して大に驍名を博し、それからは大變都合よく行つたと云ふ位の豪傑、女郎屋の妓夫や番頭の二人や三人屁でもない、況や當時は尙人民の權利も保證されず、海軍士官と女郎屋の喧嘩なら何所へ持て行ても士官の方が勝つに極まつて居るので、簀屋の主人も果は我を折り、登喜子夫人の身代金は月賦償却と云ふ事で談判落濟して、越後の水呑百姓の娘は、此に幾十年の後には日東大帝國の大宰相夫人たる位地に身を置くべく、其第一歩を轉じたのである。

現の海軍大臣齋藤實大將、第一艦隊司令長官加藤友三郎中將は、此活劇の當時恰かも海軍兵學校生徒として、權兵衞少尉補の隣室に居たので其時の摸樣は最も能く知て居る、權兵衞伯と齋藤大將又は加藤中將との關係は、此時から既に堅く結ばれて居たものと云て宜しい。

血氣に逸る若い時の元氣一つて、此の如き掠奪結婚を行つたものゝ、夫から身分は鰻上りに進んで、立派な上流社會の班に列し、夫妻共に宮中へも召されるやうになつた、然し其古へを顧みれば如何にも恐懼に堪へないので、登喜子夫人は斷然社會との交際を避けて、家庭外へには一步も出ぬと決心した、權兵衞伯また其心事を憐んで自分も海軍と政治の外には一切社會と接觸せぬ、而して只其家庭を唯一の慰樂所として其中に籠居つて居る、權兵衞伯が酒は一滴も飲まず、煙草は一本も吸はず、夜の宴會には一切出ず、職務以外の人には少しも交際せず、不思議に偏屈な生涯を送つて居るのも、其眞の原因は全く此登喜子夫人が穢れたる境遇から撥ぎ出して一種の家庭を造つた事に原因して居る事を想へば、一種同情に堪へぬ處がある、世の教育者、文人等は之に依て研究すべき好い材料を得る事であらうと信ずる。

△輕井澤からの小包

尾崎學堂とテオドラ夫人

民軍の首領——憲政の神樣——學堂尾崎行雄君は、單に政治社會に於ける有數の手腕家たるのみならず、粹な道に掛けても却々隅に置けず、天晴れ一方の旗頭と崇むべき資格を具へた英雄である、最近の某新聞紙上に、吉原の辨中米とか云ふチョン〳〵格子の一娼妓が、曾て某家に女中奉公中、學堂から何とか一言の挨拶を賜はつたのを一生の想ひ出にして寢ても覺めても今に忘れず、身は河岸見世の女郎とまで成下つた今日、學堂が老來意氣尙壯んに憲政の爲に活躍し廻る樣子を新聞で讀で愈々景

慕の念を深くし、是非今一度御目に懸りたいから此處まで御運びが願ひ度いと、身の程知らぬ大望を起して居ると云ふ消息が現はれて居たのを見ても、聊か其一端を知るに足るが、此に云はんと欲するのはそんな下等な相手でなく、實に現在のテオドラ夫人英子女史に關する事である。

溫良貞淑にして能く家を治め兒女を敎育し、困苦缺乏と闘ふ事二十年良人をして内顧の憂ひなからしめたる先夫人繁子を失つた時の學堂の愁傷悲歎と云ふものは、傍で見るのも氣の毒な程であつた、十何年間尾崎家に仕へて、夫人の苦心も知らずに年中諸方を騷ぎ歩く學堂の行動に少からず不平を抱いて居た老婢さへ、此時ばかりは心から學堂の誠實を喜んで、これでこそ奧樣も御盡し甲斐があつたと泣いた、斯する事數月、出雲の神樣は圖らず其勢力範圍を擴張されて、外つ國の花一輪此日本紳士の家庭に移し植んとした。

學東西に渉り、交遊天下に普き學堂の事であるから、メールの入る毎に外國郵便の尾崎家のポストへ抛り込まれるものが澤山ある、然るに其頭一向に覺えのない人の手紙が來たり、注文した事のない雜誌が交つたりする、始めは只配達人の間違ひかと其儘郵便局へ返して居たが、再々同じ事があるので、學堂不圖此事を或る友人に話した處が、友人膝を打て、夫は近頃日本へ來て居る男爵尾崎三良氏の英國への忘れ形身、同性テオドラ嬢の處へ來るのが間違ふのだと云つた、段々樣子を聞けば、テオドラ嬢却々の美人で、今は慶應義塾の英語の教師をして居ると云ふ、自分も慶應義塾の出身、加之も同じ姓の尾崎！郵便の間違つて來るのも何かの因縁と、此に學堂先生變な氣になつて、誤配郵便を直接に受信人に轉送するのは郵便規則違反とも知らずに、御苦勞にも一日自身テクテク其郵便をテオドラ嬢の許へ配達に出掛けた、西洋流の氣も輕く自ら出て好意を謝した瀟洒たるテオドラ嬢の碧りの眼は此時如何んな閃きを見せたか、皮並のフロックコートに藤蔓のステッキを振つた學堂の手が、其時どう顫へたか、生憎兩人の外には知るものが無かつた。

其後兩人の姿を新橋のステーションの婦人待合室で見掛けた人がある、帝國ホテルの食堂で眺めた人がある、然し一人は歷とした不惑の男鰥、一人は操行正しき英國育ちの老嬢、何等の噂さも兩人の上に起たなかつた。

すると其歳の夏、學堂例に依て輕井澤に遊んで一月許りの後歸京した後數日、輕井澤の旅館から不思議な小包郵便が品川なる尾崎家に屆いた。

先生何か御忘れもの——と、玄關の誰彼何の氣もなく其小包を明けて見ると、ハテネ、品は有觸れた物で何所の勸業場でも小間物屋でも賣て居るが、内の先生は平生之を用ゐない、日本では男が用ゐるが西洋では女の外用ゐない、宿屋の女中の粗忽にしては少し品物が變り過ぎて居る、外にお連れもあつたと聞かぬがと、玄關の甲乙少からず面喰つたが、終に其間違の眞相が分らずに了つた、然るに其後良緣整つて、テオドラ嬢愈々尾崎家に嫁入らるる事になつてから、曩の日の小包も始めてハヘーと合點が行つて、之では先生却々隅へは置けないと益々欽慕の情を深くしたとは、左もあるべき事である。

△結婚は不見轉に限る

松井柏軒とさだ子夫人

八百屋の店頭で果物を買ても、餘り選り好みをして迷つた果は、却つて尻の怪しい蜜柑を背負ひ込む事がある、他人が持て餘して困つて居る債券を引受けると、翌月大割増金に有付く事もある、それでこそ世間の事は双六の賽の樣なものと云ふ理屈を、美事に證據立てゝ居るのは、やまと新聞主筆柏軒松井廣吉先生の結婚談である。

柏軒先生が其昔し博文館に勤めて日本大家論集の編輯をやつて居た時、何でも細君は美にして賢でなければならぬとあつて、幾度も見合をし、數多の友人の手を煩はして、御注文通りの佳人を娶つた、面は好し才は働くし、是こそ佳人才子の好配偶と悦に入て居ると、此新夫人の樣子が何うも可怪しい、里へとか買物にとか云て出掛るのも怪しく、時々變な手紙も來る、左樣云へば婚禮の當夜から想ひ當る節々、純粹の生娘では斷じてない、是は意外だものを背負ひ込んだと氣が附いて、結局或る機會に於て其細君を放逐して了つた。

柏軒此に於て大に結婚難を感じて、以來は女房などは持たぬ事と定めて居た、處がそれから一年許り後の事、今鳥取の知事をして居る川島純幹君が未だ記者生活をして柏軒と懇意にして居たが、一日飄然柏軒を訪ねて來た、何時もの元氣に似合はず甚く悄然て居るので、如何かしたかと聞くと、イヤ困つた事が出來して途方に暮れて居ると云ふ、何だ、と聞くと、其話に曰く

『實は或る親友に頼まれて文部省の官吏の針生と云ふ人の娘を媒酌しやうとした、娘の家でも喜んで早速式を擧げると云ふ時になつて、お婿さんは何か事情が出來て當分結婚は出來ぬと言ふ、折角喜んで一切の嫁入支度をして了つた嫁の方に向つて、今更中止だとは如何しても云はれぬ、乃で大に閉口して居るのだが、誰か代りに其娘を貰つて呉れぬかなア』

川島の云ふ處は斯うである、聞て見れば最も千萬、膏ぎ込んで居る親友の樣子を見ると、柏軒一種の俠氣がむら〳〵と湧き起つた、『それは困るだらう、どうだ其娘を己が貰つて遣らうか、さうしたら萬事無事に解決するではないか』と云つた、餘り突飛な文句に川島も聊か驚いたが、柏軒の言葉も嘘では無いらしいし、人物と云ひ技倆と云ひ先の候補者に比べて優るとも劣る譯でないので、君が左樣して呉れゝば誠に難有い、然し見た事も無い女を突如り貰ふ約束も出來まいと云へば、『ナーニ君が善いと思へば夫で善い、一度や二度見たつて何が解る』、

御嫁の里方でも至極と云ふ、準備は十分出來て居るので、話しは忽ちに運んで芽出度く新夫婦が出來た、大騷ぎやつて貰つた前の細君に褒い目に合はされたに引代へ、何一つ調べもせず一意只友人の困厄を救はんと欲して義俠的に貰つた第二の夫人は、之は又今の世に珍らしい貞淑謙仰な善い婦人で、殆ど理想的と云つて宜しい、身を棄てゝこそ浮む瀬もあれとは、斯んな事を言つたのだらうと、夫れ以來柏軒誰に向つても、

結婚は不見轉主義に限ると主張して居る。

現の桜井夫人さだ子は、即ち斯くの如くにして柏軒の好伴侶となつたのである。

△紅葉山人の枕頭にて

柳川春葉といつ子夫人

『生さぬ中』以來再び盛名を我が文壇に馳するに至つた柳川春葉氏の結婚談は、流石に小說家だけあつて、大にお安くない筋のものである、話しは勿論春葉の先師紅葉山人の病中から始まる。

紅葉山人が牛込横寺町の家で、不治の病に罹つた時、春葉は同門の先輩小栗風葉等と共に、紅葉の家に假寓して居たのである、左なきだに口喧ましい紅葉、之が不愉快な胃病と來て居るのだから、其喧ましさは形容もならない、日頃から師弟の間を君臣の如くに訓練られて居るのだから、心から迷惑とも思はず、帶も解かすに能く看護に努めた、其熱心な有樣を見た或る紅葉の友人は『今の若い人には珍らしい、能く病人の傍を厭とも思はないで』と褒めた。

春葉が夜も晝も打通して、病床の恩師に侍するのは、素より其病氣の平癒を冀がうが爲であるが、實は今一つの理由があつた、夫は紅葉の病氣看護の爲に、番町の木澤病院から來て居た看護婦の中に一人妙齡の美人が居て、その明眸皓齒、鄙びてこそ居れ、楚々として人を動かす溫淑な態度は、未だ曾て親しく若い婦人と接觸した事の少ない春葉の爲には夢にも現にも忘れる事の出來ないものとなつたが爲である。

敢て此談の主人公の領分を犯して、小說的に兩人が戀の經過を敍說する要もあるまい、先生の病氣の進むに從つて、兩人の戀も進んだ、終にはお定まりの人目に立つ樣になつて、心ある紅葉の友人及び門人等を憤らしめた。風葉は怪しからぬ事と思つた、洒落者の小波や桂舟は、ワザと趣向を凝らして兩人が蜜の如き甘き戀の密語を妨害した、或人は先生に申上ると怒鳴つた、若い同志の事、まあ〳〵此騷ぎの中で野暮な醜體を露はすでもあるまいと慰藉する先輩があつて、兩人の戀は漸く半ば默認さるゝ事となり、結局紅葉逝て間もなく、風葉が媒酌の役に當つて公然式を擧げる事となつた。

以前は看護婦として人の藥餌の世話をした柳川夫人も、今は日の出の小說大家の令夫人として、小供こそ無けれ、他に何不足なき裕かな生活をして幸福な生涯を送つて居る、思へば之も紅葉先生のお蔭と、命日忌日には青山への墓參を忘れず、更に兩人をして相知るに至らしめた最初の恩人木澤ドクトルの恩を忘れぬ爲に、閑を見ては木澤病院を訪づれ、院長夫人等と半日の閑談を試みて居る、本を忘れぬ其心掛は感ずべきである。

△見合の席で泥醉

遲塚麗水とよし子夫人

紀行文の大家として、アラヽン踊りの名人として、黑眼鏡の老記者と

して、普く世に知られたる遲塚麗水は、別に偉大なる妻ノロヂストとして、同人間に知られて居る、宜なり、其夫人よし子は當世文士の細君中稀に見るの美人で、天禀の才女である上に學問の素養もあり音樂の嗜みもある結構な奥様である。此夫人を麗水が貰ふ時の話しが面白い。

今を距る事十七年前の春、麗水さる友人の斡旋に依て、ある家の令嬢との間に結婚の話しが持上つた、偖愈々見合の一段となつたが、麗水まだ金の無い時代ではあるし、何所の此のと云ふより構ふ事は無いお嫁さんの家へ乘込めと云ふ事になつて、麗水世話人と共に令嬢の家へ出掛けた。

麗水には非常に親切な母親がある、夙く夫に別れて後に小さい小供を養育したのであるから、其可愛がり方も人一倍である、其最愛の一人息子が今日は見合に行くと云ふので、實は自分も一所に附て行きたい位の處であるが左樣もならず、何卒首尾よく見合を濟して、善い女房が持てるやうと、一生懸命に祈つて歸りを待て居るのに、麗水却々歸つて來ない、外へ廻る筈はなし、見合にさう時間の掛る譯はなし、如何した事かと心も心ならず待て居ると、やがて夜の十時頃、門前に大きな聲が聞へて、麗水先生大へゞれけになつて歸つて來た『まあお前何所へ廻つてそんなに飮んだの』と聞くと、『何所へ行くもんか、今まで先の家に居た』と云ふ、まあーと呆れて『それでは肝腎な御話は』と云ふと、『お母さん、僕はすつかり向ふの娘が氣に入て了つた、僕の方は異議はなしと定めて居ると、酒が出たから、嬉しまぎれにドン〳〵飮んでやつた、後から返事なんと云ふのは面倒臭いから、直ぐ僕は結構だが貴方の方はと云ふと、向ふでも善いと云ふじやないか、それでは母に相談する迄もない、貰ひませう、遣りませうとなつたら、友人が芽出度いから大に飮めと云ふので、僕は其から今まで飮んでへゞれけに醉ぱらつた、そしたら僕の未來の細君が非常に親切に介抱して呉れたぜ、僕は斯んなに嬉しかつた事は無い、お母さんも嬉しからう、あゝ醉つた〳〵、水を一杯下さい、……オツト此水もあの令嬢ではない僕のあの細君に注いで貰つたらなあ、』なみ〳〵注いだコツプの水を一息にグイと呷ると、其の儘玄關へゴロり。

呆れた母親の顏には、言ひ知れぬ喜びの色が湛へられた、夫婦の將來は此一夕に定められたのである。

此の如くにして娶り得たよし子夫人は、麗水の爲には實に神とも佛とも見えやう、彼がサイノロヂストとして人に知らるゝのは、決して偶然でない。(完)

趣味の烟草記（序說）

黑頭巾

其一

◉吾輩は、今、烟草を手にして、此の篇を稿しつゝあり。昨夜風雨一過、今朝、頗る晴和、庭樹の間に鳥、飛び啼く。試みに窓を推せば、紫煙、水の如く流れて、春風に散ず。

◉書を讀み、文を草するの時、必ずしも烟草を手にせざるも可なり。然れども烟草を吹かすの時、更に、爽快なるを覺ゆ。筆を走らせて、暫らく息むの時、一吹して烟を紙上に擲てば、烟霧、渦巻きて、烟の中より吾が書ける文字を望む。

◉腹案を凝らすの時、倚子に凭れて、閑に烟草を吹けば、眼前の青山、甚だのどかなり。嘗きつゝ吹かせば、煩に似て忙ならず。而して氣力盛にして思索統一し、筆端、想泉を逐ふて流るゝの時、烟草の消ゆるを知らざることもあり。滿を持して發せず、一歩を退いて又た想を練るの時、深く烟を吸うて吐く。筆を把れる手に、マッチを探りて、輕く、身を反らして烟草に火を點ずるの刹那は、急流激湍の間、處々、靜潭を見出すの心地ならずんばあらず。

◉書を措き、筆を捨てゝ、指に挾める烟草の白燼して灰となりゆくを、閑に眺めつゝある時、吾に心無く、自失するといふにもあらで、茫然として時は過ぎ行く。

其二

◉吾輩、去年、信州路に旅行して、峠茶屋に、「天狗に美人」の烟草看版を見て、忽然として十年前の私營烟草を回憶せり。「天狗に美人」は岩谷天狗の天狗烟草なり。

◉吾輩は天狗烟草を回憶すれば、村井のヒーロー、千

薬の白牡丹などの名、なつかしく心頭に浮び出づ。高井のサンライスといへる人をして、村長と山高帽とを并せて聯想せしむべき臭き烟草もありしを。

◉烟草は、新聞の廣告を賑はせり。賣藥の、其れの甚だ陳腐なるに比して、烟草のは頗る奇抜を極めたり。烟草の經營は、賣藥と同じく、其の盛衰は廣告如何に存せり。而して私營の競爭の盛んなりしに當りて、烟草の廣告が新聞に貢献したること少しとなさず。

◉岩谷天狗が「勿驚烟草税金三十萬圓」の看版は、其の赤塗りの壁と共に、銀座街頭の一名物たり。税金三十萬圓は少しも驚くに足らず。然れども勿驚の一語は、古人未發の奇句たりしを失はず。

◉私營が官營となりて、趣味の烟草觀は、稍、其の價値を減じたり。烟草の美味は私營に若かず。或はいふ、官營の烟草は、飽くまで洗滌し盡くせるサンマの如し。上品を加へたれども、味感を挑發せず。官營の烟草は、官營の酒の如し。化學試驗には優秀なれども舌に乘らず。美味の妙、蓋し、試驗管の能く測度し得可きに非ず。

◉「岩谷天狗」が尚ほ其の老大なる殘壘を銀座に留めし頃の事なり。今の男加藤高明が、つねにパイレイトを吹かしつゝあるを見れば、彼も亦た私營烟草に憧憬せる愛烟家ならずんばあらず。頃刻に消えゆく烟の味は、瞥見せる美人の影の如く、印象は深くして長し。

◉烟草の官營となれるは、日露戰役の財政整理の爲なり。則ち知るべし、日露戰は、維新以後の烟草に、革命を與へ、烟草史に一大段落を付せる也。敵艦を轟沈せるは大砲の恐ろしき烟なり。戰役の整理に當れるは、烟草の愛らしき烟ならずんばあらず。

其三

◉烟草は公平なる交通機關なり。路上にて行き逢ふ人も、汽車に乘合はせる客も、烟草の火を交換するを厭はず。未知の人、脱帽して忽ち既知の人となる。

◉烟草の火には、貧富、上下、老少、男女、知、不知ある事無し。一切に公平也。古詩人は、世間に公道は惟だ白髮あるのみ、貴人頭上にも曾て饒さず、と歌へ

り。烟草も亦た世間の公道ならずんばあらず。

其　四

●烟草は文明なり、世相なり。若し、烟草に依りて、日本の文明と世相とを見る時は、烟の中に、「趣味の日本」を見出すなるべし。

●開國前の日本は、他の烟を容れず、唯だ刻み烟草あるのみ。烟草に於ても鎖國なり。開國後の日本は戸を開いて、世界の烟を容れ、歐米の烟草、帶紙燦然として烟草屋の店頭を飾る。薔薇よりもコスモスよりも西洋烟草の普及するは速かに、未だ洋服を着けたる事無きものも西洋烟草を吸はざる者はあらず。

●烟草の內地雜居は、頃刻にして行はれたり。西洋人の未だ旅行したる事無き地方にも、西洋烟草の烟は、先づ擴がれり。

●開國前の烟草は、唯だ刻みの一種あるのみなれば、趣味はすべて烟管に現はれたり。多種の烟管は、一種の烟草をして多樣の趣味あらしめたり。

●維新後は、烟管に代るにパイプを以てす。維新前は烟管の世にして、維新後は、パイプの世なり。然れども今の日本人が和洋兩樣の衣食住を爲すと同じく、烟管とパイプとを併用しつゝあり。

●日本を鳥瞰せば、和洋各種の雜多の建物の間に、雜多の服裝せる人が、烟管、パイプ、各種の烟を吹きつゝ、烟は濛々として島を立ち籠むるを見るなるべし。今の日本は、衣食住に於ける世界的博覽會たらずんばあらず。而して世界的の烟は、其の間を縫ひて、すべてをして畫趣を帶びしむ。

●賴山陽は詩人なり。彼は西游して阿蘇山の噴烟を見て歸り來り、一夜、灰吹の騰烟に對して、忽ち、阿蘇山を聯想せり。

●山陽をして、假りに今日に生れて、世界を周游し來らしめば、種々樣々の烟管パイプの烟に對して、ボンペイも淺間も櫻島をも聯想するが爲に忙殺されずんばあらざるべし。

其　五

●灰吹こそ趣味多きものなれ。世界の烟管とパイプと

の多種多様なる、必ずしも日本の烟管ばかりをして、其の美を誇るを得ざらしむるとも、灰吹を有するものあること無し。趣味の烟草記に於ける灰吹は、日本の世界的誇也。

◉日本に灰吹あるは、「竹の國」たる日本の特權なり。竹の國ならざる歐米人は、未だ竹の灰吹を想像したることあらず。

◉灰吹を叩く烟管の音は、舞臺の變化如何に依り、種種の意味ある音響を發す。灰吹は烟管の主人の喜怒哀樂を表情するなり。

◉灰吹の中よりは何者出づる乎。龍出てん、蛇出てん乎。灰吹の中よりは烟の外、騰るものある無し。

◉烟管の强き音して、烟の、未だ灰吹を出でざる時、人をして不穩の火山を想像せしむ。尋いて、烟は、濃厚に、驀直に、灰吹を衝いて迸り出づ。

◉灰吹の上なるものを、吐月峯といふ、吐月峯は、駿河、安倍川の畔にあり、竹樹茂密、山眉、月を吐く時、明月、前川に滿つ。灰吹は此の山の竹を伐りて作るなり。

◉灰吹の吐月峯は、其の質堅剛。其の響、高亮。而して簇々として湧き立つ雲烟、波瀾を捲きて昇り、恍として走雲の月を擁するかと疑はしむ。吐月峯の竹は、吐月峯の奇景を象徵するなり。

其六

◉人の巧みに烟草を吸ふを見れば、人の鼻口は溪谷の如く、雲烟を吞吐す。其の鼻孔を出る烟は、或は夕陽に遠嶺の孤雲を搖曳せしむるものあり、或は五月雨に連峯の雲烟を簇生するものあり。

◉喫煙には、吞むと吸ふとあり。古來、吾國にては煙草を吞むといひたれば、深く引きて、鼻口より雲煙を吐くを常法とすべく、勿論女性に於ても然りとす。

◉蔫錄に、煙を吞まず、唯だ吸ふのみなるを、「花煙草」、或は「伊達煙草」の語ある事を記す。蔫は煙草、蔫錄は維新前、東洋に於ける烟草記の尤も完備せるものなり。（次回完結）

吾輩、烟草を愛し、烟草記を作るの志あり。而して此の篇、單に

序說たるに留まる。進んで烟草の趣味の變遷、烟草と人物との關係に及ぼし以て本論に入らん事を期す。頃日、腦髓を病み、運筆稍困難に、未だ佳境に入らずして、匆卒、擱筆する所以。唯だ烟草を愛するには差支無き也。（黑頭巾記）

問題の人噂の人

鐵拳禪

▼法相松田正久男逝き、文相兪法相奥田義人君は專任法相となり、衆議院議長大岡育造君が文相に新任された。議長の後釜には前文相長谷場純孝君が据はり、表面は平靜な政友會も、内部には寒冷な暗流が渦を卷いてゐるさうだ。

▼大岡新文相は長州人で、長谷場前文相は薩州人だ。大岡君は元田遞相と共に國民協會出身の官僚派で、長谷場君は九州改進黨の領袖で、民黨的色彩を帶びて居るにも拘らず官僚と聲息を通じて居るやうに疑はれた。政友會内の信望は、孤立無援の大岡君や、元田君などの上にあること勿論だが、關東東北の人士からは常に白い眼で見られて居た。

▼薩摩は團結力の强い國、大分は運動の盛んな縣である。長谷場君の文相、元田君の遞相を贏ち得たのも、皆其の團結力の强求、運動の功果に外ならないのだ。此度の更迭でも、薩摩の團結力が政友會の上に働いて來れば、前文相長谷場君に文相の椅子を與へねばならなかつた。處が、原内相は從來薩摩の勢力に慊焉たらざる所があるので、卒然今期議會で忠勤を抽んでた大岡君を拔擢したのなさうだ。

▼代議士連は大抵數日前に承知して居たが、薩摩の有志家には寢耳に水であつたから、大岡新任の報を得ると同時に、原君の仕打に不滿を抱いた。死の手は九州から松田男を奪ひ去つたが、原君の拳は又長谷場君の勢力に一擊を加へた。九州虐待の聲は、政友會の一角に颶風のやうに不平の木の葉を捲きつゝある。調和役の松田男が無いので、ちよつと收まりさうでもないが、『長谷場君は健康が許されない爲めに固辭されたので、決して九州を疎外する譯でない』と、幹部連は有志家を和めて居るさうだ。

▼東北の原君は實行派で。關東の岡崎邦輔君は理想家だ。——岡崎君は和歌山縣選出だが、森久保作藏君と共に星亨の遺した關東の勢力に政治的立脚地を有してゐるから、須く關東勢と看做して置く——原君は少し

無理な事でも無理を通して行く、實行し難い事を捨てゝ實行し易い路を取つて行く、岡崎君は實行の如何を問はず、斯の人と斯の人とを取組ませ、若しくは組み合せれば面白いと云ふ事に、劇的興味を持つてゐる。此の二人の考へは、根本に於て不一致なのだが、强ひて一致させようと試み、而して腐れ緣々結んで居るのが奇體だ。

▼原君と岡崎君は、古河家と云ふ兆箱を挾んで相對してゐる。岡崎君は昨今政友會幹部に不平不平を抱いて 原君の專横を憤つて居るやうだ。彼れは早くも現内閣崩壞後の事を考へ、其の隼のやうな鋭然な眼を伊東已代治子、後藤新平男、犬養毅君に注いで居る。此の理想派の筋書を、實行派の原君が實行し得るや否やは疑問だが、時節柄興味のある一齣だ。

▼同志會の藏原惟郭君が動搖する、樺瀨東之佐等少壯の一派が躍起運動を試みる、中正會の竹越與三郎君が脫會する、唯夫れだけでゞ後藤男の暗中に飛躍を試みてゐる事がわかる。或は官僚系再興を企つるが如く、或は政友會に意あるが如く、多算多策の本性を發揮しかけたのは、しんぺえするよりも産むが易いと觀たものなさうだ。

▼原君が、山本首相や齋藤海相に詰腹を切らせるのは容易な事だが、唯恐れる事が一つある。夫れは今茲で山本伯の反感を買ふと、後繼内閣の組織者に奏薦して貰へない。元老會議で推薦する事なれば、無論原君は望がない。そこで、新聞雜誌の攻擊に耳を掩うて、山本首相の圓滿辭職と其の後繼に奏薦して貰ふのを待つて居るのなさうだ。

▼政友會の某代議士は、『原には矢張原の考へがあるよ、政友會は飽くまで海軍收賄者を庇護して同罪になるやうな事はしないさ』と嘯いて、『司法の活動を見給へ、だいぶ火の手が熾んになつたではないか。山本も内心大に弱つて居るさ、時々は手を合せて原を拜むさうだ。處が原は、司法の結果玆に至つたのだから何うも止むを得ぬと云つてるさうだ。君！司法の結果が面白いぢやないか』と怪氣焰を吐いて居た。奥田新法相は、果して天下に矜るだけの司法の結果を擧げ得るか何うか、本當の處を聞いて見たいものだ。

▼國民大會や何かで同志會は五萬圓を支出したさうだと云へば、政友會でも之に應戰する爲めには尠からぬ費額を要した。所屬代議士を自動車で運搬した費用、植木屋其他に宿泊させた諸費を合算したなら、七八萬圓に達するだらうと評判する。同志會側で『政府は貴族院の軟化に努めてるさうだ』と噂すれば、政友會側では『同志會が海軍擴張費全部削減させる爲めに、貴族院に振り蒔いた金が莫大なものださうだ』と吹聽する。蜚語紛々として、誰れか烏の雌雄を知んやとは、能く云つたものだ。

▼大岡文相の、大に世間に名を知られたのは、角田眞平君と花井お梅箱屋殺事件の辯護をやつてからだ。なんでも其の頃から、硯海の義太夫と、竹冷の俳句とは、法曹界の呼物になつたものだ。確か兩人共に無雙の名物男で、大岡君の赤銅色の顔、角田君の毛蟲のやうな眉、何人にも深い印象を與へる。赭顔と硯海と一身に集つた色彩を持つてる所が、彼れの銅臭と趣味とを語るのだ。

大岡君の原君に接近したのは、十萬圓か幾らで『中央新聞』を買收して

貰つてからである。夫れ以前は、原君は江原、長谷場の二派に傾き、大岡君は杉田、元田の一味徒黨を援けて居た。第二十二議會の議長選擧で、杉田と江原の鎬を削つた際、大岡君が遠藤良吉にやり込められた一場などは、痴遊にやらせれば乾度面白い語物になる。

▼今、其の前後の關係を云つて見れば、斯うだ。議長松田が法相になつたので、其の後任者を選擧する事となつた。長谷場が政友會幹事で勢力があるので、自ら議長たらんとし、西園寺總裁も亦彼れを指名しさうであつた。處が非長谷場派は杉田定一を推さんとして、四十幾名かの連署で、其の旨を總裁に告げた。然るに總裁指名說が高いので、遂に遠藤と小澤愛次郎とが總代となつて、西園寺侯を往訪した。時は夜半の十二時頃で、侯は既に寢て居ると云ふので、祕書官が出て挨拶した。が、總代兩人は却々承知せぬ。『黨の一大事だから、直接總裁に面談を要する、夫れが叶はぬ間は天明まで待つてゐる』とばかり、椅子に腰を下し、動かぬ。押問答の末、遂に侯の面談する事になつたは午前一時半であつた。

▼遠藤等は、西園寺侯に向つて『松田ならば異議がないが、長谷場を議長に推すとなれば、杉田なり、江原なり、元田なり、彼れよりも黨內に信望のある者があるから、總裁指名でなく決選投票を以てせられたい』と希望を述べた。すると、侯は『斷じて總裁指名にせず、諸君の希望の如くにしよう』と答へた。其の上、暖かな酒で款待したので、遠藤等はほく／＼もので引き下る。翌日は、長谷場辭退の旨發表された。が、長谷場もさる者、此の儘空しく手を引かぬ。轉じて關東利用策を講じ、名望家江原素六を押立てる事にした。

▼江原には關東、東北、靜岡及び長谷場の一味徒黨があるので、冲天の勢を呈するに至つた。そこで、非長谷場派は變じて反江原派と化し、元田、大岡、杉田の三角同盟を作つて、之に對抗するの止むなきに至つた。是れは長谷場派に激成された勢である。引くに引かれぬ窮地である。遠藤等は元田を訪ひて同盟を勸め、杉田を電話にて呼び、次で其の參謀たる上野安太郎を呼び、玆に兩派の提携談が纏つた。斯くなる上は、大岡も亦一勢力なれば、加盟せしむるの必要ありと云ふので、遠藤が短刀を飮んで、韋駄天走りで大岡邸へ推參する事となる。

▼遠藤が悠然と玄關先に現はれると、大岡邸の書生は『主人は不在です』と斷る。遠藤長臂を扱いて威丈高になり『先刻電話を掛けて、居ると云ふ事を確めたから訪問したのだ。然るに居らずとは何事だ』と叱り飛ばす。其の聲を聞いて大岡は出で來り『今新聞社の方に行つて居たので』と言譯しつゝ應接間に請じた。遠藤は何怒を收めず『黨の內訌は、君等の如き者が疎隔するより起るのだ』と鋭く突込む。大岡は夫れには關せず、椙間の額（品川彌二郎子筆行雲流水）を指して『是れです、私は隱居で駄目です』と白を切る。

▼遠藤は遂に腹に据ゑかね、筆硯紙を請ひて『私儀感ずる所有之脫會致候間此段及御屆候也、大岡育造』と書き『之に捺印して貰ひたい。これで、私の使命は終るのだ』と言ひ放つ。大岡に『それは御免を蒙る、脫會屆を出す理由はない』と頑張る。と遠藤は『私は三十年來黨の爲めに

盡力してゐる、君は禪宗坊主の心持で居られるが、夫れでは黨の爲めに困るではないか。脫會するなら夫れで可いが、若し然らずとすれば私にも覺悟がある。』『夫れは君の誤解だ、私とて黨の休戚を思はぬ事はない。』『いや然らは云はせぬ、君は奸曲だ、黨の破壞者だ。私には、最早熟考の餘地はない、君と共に長途の旅に赴くのみだ』と凄然たる顏色をしたので大岡は物に怯えたやうに起つ。遠藤は袂を握つて放さぬ。物音に驚いて書生が馭付けたが、大岡は態度を改め、『二階の書齋で御相談をしよう』と氣を換へ、處を換へた。而して茶を啜り乍ら話を續ける。

▼遠藤は、例の『あらずかども』『なつかども』など云ふ古雅な語辯を織り交ぜて、『斯く云ふのは、全く君を思ふからである。今回の長谷場の態度には、元田も不平、杉田も不平で、三角同盟を作るの決心になり、兩人共に君の參加するのを待つてゐる。私は此の使命を果さずして、何うして歸ることが出來る』と聲涙併せ下るの槪があつた。大岡は『善く解つた、夫れならば參上しよう。が、元田の邸よりは藤屋が可い、三時までに其處で會する事としよう。して、私は望月右内を連れて行く』と、意志始めて疏通した。

▼藤屋會合の光景は、又頗る奇なるものであつた。遠藤は先づ藝妓に命じて、盃洗に五本の酒を注がしめた。而して彼れは自ら此の會合の盟主たるべき旨を述べ、短刀を盃洗に添へて飲み、大岡、杉田、元田、望月上野と一循一口宛飲み終ると、之を受けて又飲んだ。『是れで固めの盃が終つた。若し盟に反く者あらば私を責めよ、私は誓つて盟に反く者に制裁を加へる』と、無禮を謝して正座に復した。此の會合で、一致して杉田を援助する事となり、晝夜兼行で奮戰力鬪した結果、遂に七票の差で勝を制することを得た。

▼航路補助問題は、問題が問題だけに、政友會でも力瘤の入れ方が違ふやうだ。岡崎邦輔君は日本郵船、奧繁三郎、伊藤大八の二君は東洋汽船の爲めに、夫れ〳〵有利な運動を試みたさうだ。大阪商船の中橋德五郎君は補助の無い方が結句氣樂だ抔と豪語して居たが、矢張人並に運動したさうだ。

▼寺内尖頭將軍は、若い時分指澤中將に對つて、『吾輩は經世家を成さぬ積りだ』と口癖のやうに云つて居たさうだ。處が、今日は家を成さぬどころか、地所家作も持つて居り、財力も亦裕かなさうだ。

▼此の程なくなつた黒澤少將は、長閥に斥けられて不平で居た。或時は政界に出ようとしたり、或時は京都市長にならんと運動を試みたが、負債を増すだけで、孰れも目的を達しなかつた。昨年は支那方面に活動する計畫で居たが、健康は夫れを許さなかつた。覇氣が無いではないが、正直な爲めに人に昇がれるやうな事があつた。其の甥の黒澤中佐は、將來有望の參謀官だが、新に地所家屋を買込んださうだ。

(中付二の三)

博覽會の觀方

山脇春樹

博覽會の觀方と云ふ事を研究する前に、博覽會の一般的性質について少しく話して見たいと思ふ。

元來博覽會は一國の產業の發展を促し、外國貿易に資すると云ふ趣意のものであるが、近來までは其計畫が餘り一般的で、範圍に制限がなく、只徒らに規模の宏大なると、宇宙の森羅萬象を悉く網羅することを以て誇りとする傾があつた。從つて經費が膨大になるのみならず、又之を觀る方の側から云つても、餘り茫漠たるものになつて了つて、足一歩博覽會場に入れば、見るもの丶餘りに多過ぎるが爲めに、只茫然として、後には却て何等の印象をも殘さぬと云ふやうな傾があつた。

そこで近來は其弊害を悟つて、その組織を簡約にするの風が出來た。之れによつて、

▲世界的博覽會の二大傾向

が段々起つて來た。其第一は從來の如く餘り萬般の事物を集むるのは、勞多くして功は比較的少きのみならず、觀覽者も亦其煩に堪へぬ傾の爲に、近來は或特定の事物のみの博覽會を開くと云ふ事になりつゝある。此傾向を代表するものは獨逸である。例へば衞生に關すること、旅行器具に關すること、或は農具に關すること、其他或特定の事物に關する博覽會を開く傾向になつて居る。今一つの傾向といふのは、從來は一般的博覽會といつても、萬國均一に待遇して、世界各國が互に親密に交際接近すると云ふ利益の外に、外交上別に意味がなかつたものであるが、今日に於ては之を外交上に利用すると云ふ傾向である。此傾向を代表するものは英吉利である。英吉利は元來佛蘭西と快くなか

つた國であつたが、近來は英佛互に接近して來て、彼の一九〇八年倫敦に於ける佛國商業會議所が發議して、英佛博覽會なるものが倫敦に開かれ、其際には、多數の佛人が英吉利に出掛けて行つて、英佛間に歴史的に蟠まつた惡感情を融和した如きは、此傾向の著しき例證である。又一九一〇年に日英博覽會が倫敦に開かれたと云ふ事も、要するに日英同盟の效果をして一層確實に有効にせんとするの趣意に外ならなかつた。此頃聞く所によると、パナマ運河の通行料問題即ちヘースポンスフォード條約に反すると云ふ問題で英米間の感情に疎隔を來たしたのを、緩和する意味でもあるか、英米博覽會が倫敦に計畫されつゝあると云ふ事である。又來年開かるゝ桑港大博覽會の如きも、太平洋と大西洋を結び附くる此世界的の大事業の成功を祝せんとする意味で開かるゝのであつて、若しあれが亞米利加の産業を世界に廣告すると云ふ側から云へば殆んど意味をなさぬことになるのである。

そこで追々斯う云ふ二大傾向が出て來たと云ふことを先づ念頭に置いて、扨、

▲内國博覽會と萬國博覽會の性質上の差異如何

と云ふことを次に考へて見たいと思ふ。内國博覽會となれば、前に述べたが如き、萬國博覽會とは其意味を異にし、外交上殆んど何等の意味もなく、單純に一國の産業の發展を促し、又産業の現狀を國人に知らしめて、知識の啓發に資し、兼て之を外國人にも示して以て一國の威信を高め、又生産品の廣告をなさんとするの趣意に外ならぬのである。

次に研究すべき事は、

▲博覽會と共進會若は競技會

との間に多少性質上の差異があると云ふ事である。此等は大體について云へば異名同體のものゝやうに思はるゝけれども、其成立から考へて見ると多少の差異があると思ふ。共進會若くは競技會と云へば同業者が相集つて其の製品の優劣を競ふと云ふことが趣意であつて、根本の目的は寧ろ競爭の方面にあるのである。博覽會にも矢張り同一の目的が其一部として存立するけ

れども、其れ以外に尙廣く其製品を內外に廣告し、又一般觀覽者の知識の開發と云ふ事を、其重大なる目的として持つて居るからして、主催者に於ても又觀覽者に於ても、矢張り其趣意目的のある所を十分に念頭に置かなくてはなるまいと思ふ。即ち之を分析して云へば、內國博覽會は出品者側から云へば、自己の製品の優劣競爭と、其廣告とを目的とする事となり、之を主催者側から云へば出品者の主眼とする目的を達せしむるのみならず、之を勉めて有益に利用して、一般觀覽人の知識の啓發と云ふことに注意をしなくてはならぬ。

從來博覽會といへば一種のお祭騷であつて金錢を費やす割合に其効果が少いと云ふ非難のあるのは、出品者は勿論、主催者側に於ても博覽會の趣旨の何處に存するやの主眼點を忘却したる結果に過ぎずして、觀覽者から見ても何等の印象を殘さぬと云ふ事になつたのである。で、只博覽會と云へば甚だ雜駁のやうてあるが、開催の趣意何處にありや、何の點に重きを置くかに、よく注意してある場合には、觀覽人も亦一見して必ず一種の印象を受くるものである。然るを只雜駁にお祭騷をやるやうな氣て、何等の主義要領も注意してない場合には、觀覽者も亦徒らに茫漠たる印象を受くるに止るのである。莫大な金錢を費やして而かも觀覽者に茫漠とした感じしか與へぬやうては甚だ詰らぬ事てあるから、其局に當るものは須らく豫め一定の主義方針を定めて、之が經營に從はねばなるまいと思ふ。

序に云ふが、今度の大正博覽會の如きも、只漠然と御即位禮の時を當て込んだ一種のお祭騷ぎと云ふ事でなく、主催者の意味の存する所は、明治の盛代より大正の新世に移りたる現在に於て、聖天子明治天皇の御治世四十五年間に振ひ興つた所の產業上の發展進步を內外に示すのみならず、更に進んで大正の大御代の初めに當つて、我國一般文明の縮寫圖を作り、更に將來の、より大なる基礎を示すと云ふ趣意であらうと云ふことを深く信じて疑はざる所である。

▲博覽會に出品の競技のみならず建物及び其配置

も亦一種の競技也

從來博覽會と云へば只出品のみの優劣を競ふと云ふことに過ぎなかつたやうてあるけれども、今日の博覽會は決してさう云ふ狹い意味のものてなくして、其建築物及び其配置、又其周圍の土地の狀況との調和に關する技術も亦一種の競爭となりつゝあるのてある。例へば英佛博覽會が、其建築物に各スタイルの競爭をなしたるが如き、又桑港博覽會が其周圍の狀況によく調和せしめて建物を配置したるが如き其一例に外ならない。

大正博覽會に於ても已に見る如く各種の建築物の進步した事は第五回內國勸業博覽會の大阪に開かれた時に出來た建物に比較すれば蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあらう。今度の大正博覽會の建築物は、從來のそれに比して著しく進んだことを認めることが出來るし、又其記置及び其周圍との調和――即ち其建物の背景又は前庭としての不忍池とか上野の森とかの調和――はまだ十分とは言へぬが、之が調和を計らんとした苦心の跡は歷々としてあらはれて居る。之は一般觀覽者にとつても研究すべき一つの題目であつて、かう云ふ點も十分に意を用ひて觀る必要があると思ふ。

以上論じた通り、博覽會の實際的の應用と云ふものは有形的よりも寧ろ無形的のものであつて、一部の論者の如く、博覽會の効用を數字の上にあらはすなど云ふ事は、到底不可能でもあり、又無用のものと考へる。要は主催者が一貫したる主義て以てやり、觀覽者は成るべく之を有益に利用するといふことにあるのてあつて、單にお祭騷ぎに終つて了ふならば、そは即ち開催者の無主義と觀覽者の無定見とを自白するものであると思ふ。

凡そ物事は觀樣によつて如何樣にもなるものであつて、之を善い方に利用すると云ふ事は一般に望ましい事である。博覽會も亦、開催者觀覽者共に大いに之を利用せんと云ふ考を以てすれば、産業の發展にも、常識の養成にも、最良無上の機關となるべきを疑はぬ。

博覽會にして一定の主義目的があるものとすれば、

其主義目的を達する爲めに、多少其手段の伴ふのは止むを得ぬことである。例へば、

◀餘興

等を設けて人を多く集むると云ふ方法を採るのも、成るべく多くの人に博覽會を善用せしめて、一般知識の啓發に資したいと云ふ目的から云へば少しも差支ない事である。一貫したる主義目的を以てやる以上は斯くの如き方法を採つても、何の疚しい事も、又尤むべき所もないのである。只玆に注意すべきは、餘興の方を主にして、肝心の趣意目的が忽諸になつて了ふのを避くべき事である。世には隨分餘興があるから博覽會はお祭騷ぎだと非難するもの丶あるのは、是れ其目的と手段とを混同したる議論であつて取るに足らぬと思ふ。

前にも述べた如く、如何なる事業でも之を善用すれば有益な事になるのである。況んや初めより一定の主義を以て貫いた時には、主催者の側に於ても勉めて其効果を大ならしむる爲めに、只開會して之を見せると云ふのみならず、出品の比較研究をなすとか、或は之を一般當業者に說述するとか云ふ事が望ましいし、又觀覽者の側から云つても、其要點に着目して比較研究をなし、殊に前に開かれた同種の展覽會、共進會又は博覽會など丶對照して、如何なる方向に我產業が發展しつ丶あるかと云ふやうな事に注意すべきである。

時、恰かも大正の御世の始めに當つて、大正博覽會なるものが開かるに際し、此博覽會をして無意味に終らしめたくないと云ふ老婆心から、自分は玆に些か其感想を述べし次第である。


（田中館博士）


（横田博士）


（井上少將）


（河野少佐）


（德川大尉）


（重松中尉）


（眞壁中尉）


（武田少尉）


（益田大尉）


（礒部少佐）


（河野大尉）


（金子少佐）

人物評論（四十七）

我が飛行界の人物

△飛行界の人物

萬朝報記者　本橋靖

（一）

春風駘蕩、花將に開かんとする時に當つて、我飛行界も活動を開始し近時漸く發達し來つた空中經營振を示して居る、最近に於ては德川大尉、坂元中尉の所澤高崎間、長澤、岡兩中尉の所澤水戸間、澤田中尉、武田少尉の所澤宇都宮間の野外橫斷飛行があつて、長澤が水戸よりの歸途、日暮れ進路の明を失つて赤羽に着陸した外は、天候不良なる間に何れも大成功を收め更らに長驅して仙臺間の飛行を爲さんとして居る、民間に在つては帝國飛行協會の礒部機關少佐は未だ他の爲し得なかつた帝都訪問飛行に成功して居る、一方海軍に在つても既に前年より東京灣一周は敢て難事とするに足らざる發達を遂げて尙更らに其技を磨きつゝある、此れ確かに本邦飛行界の進歩を示したもので聊か快

（長澤中尉）（澤田中尉）（岡　中尉）（坂元中尉）（坂本中尉）



事とするに足る。

然し歐米飛行界の進步を觀れば、我の幼稚なるを嘆ずる外はない、兎も角今日の發達を來し長距離の飛行に成功し得る伎倆は、今より四年前代々木原頭に於て初めて操縱術を修めて歸朝した德川大尉等が、僅かに高さ卅米突、距離二百米突内外を飛行したので世人は初めて實物を知り飛行を觀、其驚きと賞讃は非常であつて、新聞紙は號外を發行して騷いだ時代に比すれば、資金乏しく設備足らざる我が飛行界も實に長足の進步をしたものである、これ全く當局者の苦心と奮勵努力の結果に外ならぬ、

抑も今日の基礎を作り進步を促したものは、四十二年初めて飛行器の研究機關として設けられた臨時軍用氣球研究會なるものである、而して其局に當り苦心と奮鬪との全力を擧げて飛行界の爲め貢獻し來つたものは誰であらうか、先づ指を屈すれば學者として田中館博士、軍人として井上少將、德永少佐、德川大尉等は其重なるものであると共に功績甚大洵に我が飛行界の恩人である。

（二）

今飛行界の人物を月旦するに當つて、華々しき飛行は見せずとも、最も熱心なる研究家にして學者である飛行博士とさへ稱せらるゝ東京帝國大學理科大學敎授の外唯一の獨立部隊たる氣球隊の顧問を爲し、創立當時より軍用氣球研究會の委員である理學博士田中館愛橘を日本飛行界の元勳者として擧げねばならぬ、博士は溫厚篤實、淸廉潔白眞箇の學者である、老軀を起して常に寸暇なき劇務に當り研究を怠らず其精力の絕倫なる驚くべきものがある、名利を求めず邊幅を飾らず平素粗服を纏ひ破帽を冠り自轉車を走らして用務を辨ず、偶々途上に見るや童顏白髯の田舍親爺の如く、時に帽を忘れ洋服の胸に襟飾（ネクタイ）を見ざる事あるは敢て珍らしくない、眞摯なる名論卓說を吐露するの口は、良く諧謔戲語を弄して滑稽人を笑はしめ洒々落々光風霽月の如くである、毀譽褒貶を眼中に置かざるの博士は往々奇行珍談を演す、某時、例の如く自轉車に乘り市中に出でたるの歸途、炬燵櫓を購ひ携帶に由なく、忽ち一策を案じ直に頭上に冠り本鄉通りを一直線に自邸に還つた如きは決して珍らしき事でない、博士は二十餘年前夫人を失つたが愛孃の將來を思つて遂に後妻を娶らぬ、只その成長を樂み朝夕愛撫して慈母の如しである、愛孃美稻子芳紀將に廿一歲父を慕ひ孝行を盡す、前年所澤飛行場に於て博士の古色蒼然たる中折帽に穴あるを見たる三面子直ちに記事とした、それを讀んだ令孃は父の如何に勸むるも聞かざるを想ひ窃

に新帽を購ひ壁間の破帽と取換へ置き博士の發見するや古帽の紛失せる旨を告げて漸く新帽を冠らせた奇談もある、以て親子の情如何に濃かにして温かき事春風の如きものあるかを思はしめる、博士は大の和服嫌である夜間と雖も未だ曾つて和服を着た事がない、和服は怠け者の着るに適すといつて居る。博士はまた新聞等に自己の意見若くは談話等を書かれる事を恐れて居る、新聞記事は突差の間に書くが故に往々眞相を逸し學說を紊る事が多い結果は世人を謬らしむ事が大なりとの意見から、近來校閲の上にあらねば記載するを拒絶する事がある、學者としては當然の態度ではあるが萬事無頓着なる博士の社會の爲め斯く迄心を用ゆる如何に忠實なるかを窺はれる、又博士は最も嫌ひなものがある、則ち寫眞師にレンズを向けらるゝ事である、飛行場に在つて偶々寫眞班の影を見るや倉皇として逃げ去る事猫の前に出でし鼠の有様がある、これ新聞雜誌等に肖像を掲げて賞讃せらるゝを厭ふが爲なりと聞いては、其人格を崇拜せざるを得ない、博士の空中經營の任に當るや、空氣を基礎とするものなるが故に先づ氣流を研究せざる可からずと早くも着眼して苦心の結果飛行器に於ける氣流の干係を研究調査し世界の學者に先つて其結果を學說として獨逸の飛行界に公表して、非常なる賞讃を博し日本飛行界の爲めに萬丈の氣焔を揚げたのは實に五年前である、以後蘊蓄した處の經驗と新發見とは決して歐米に於ける有數なる飛行學者にも劣るものでない、從つて其智識と學說とは我が飛行界に貢獻したる處のものは實に多大であつて、着實なる今日の進歩を見たのも博士の力に依るといつてもよい、而して今尙飛行機の在る處博士の姿を見ざるなきの熱心を以て研究に怠りないのは、大に多とする處であると共に我が飛行界の爲め將た國家の爲め心强い譯である。

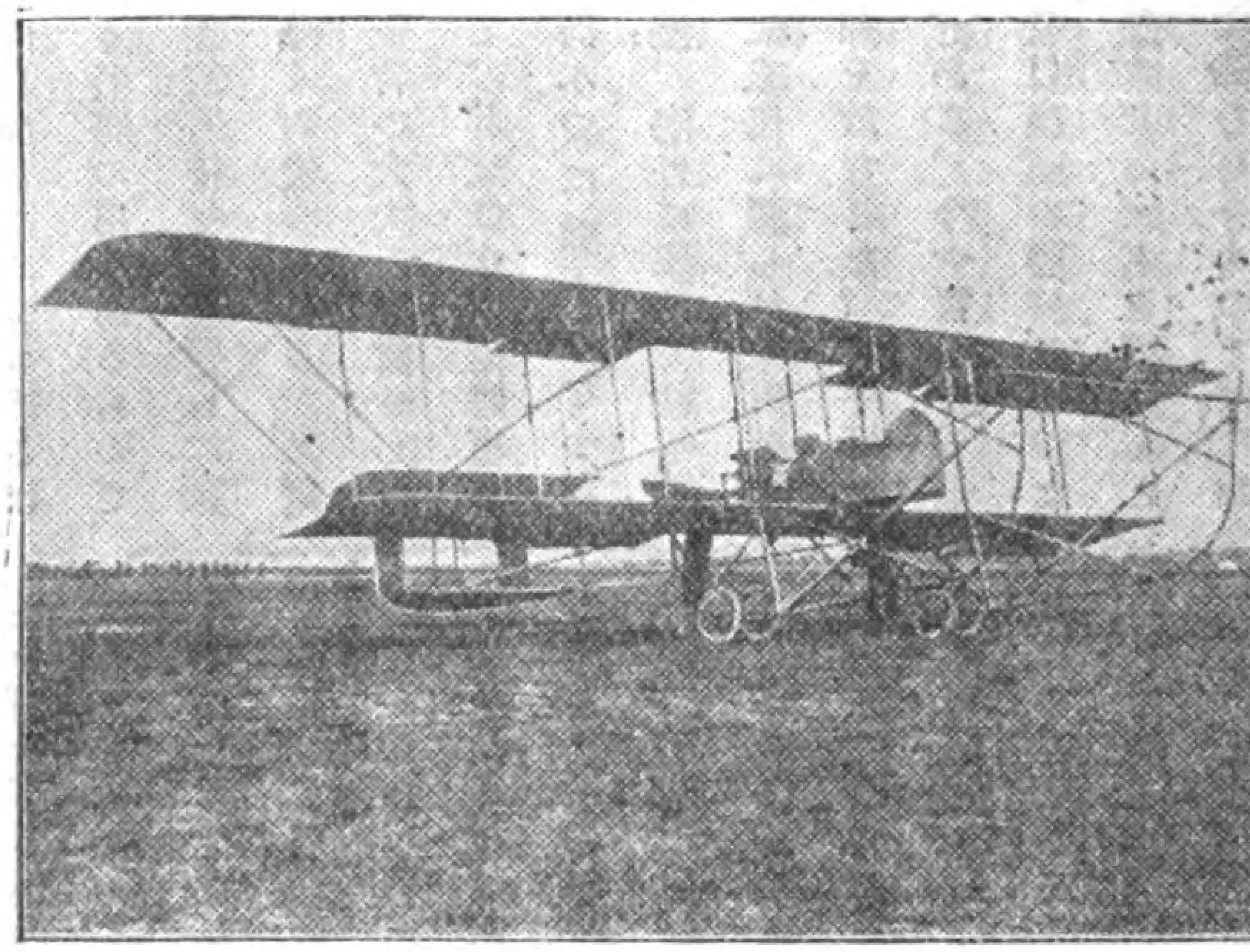
田中館博士と共に飛行界に貢獻深きは工作に就て研究しつゝある横田工學博士、高層氣象の觀測に當れる中村理學博士の如きも確かに其一人である、岩本陸軍技師は田中館博士の薫陶を受けたる秀才の工學士、實直で親切で謙讓溫順、勤儉精勵なるは博士に劣らぬ、幾多の經驗と研究とは我飛行界に益する事蓋し少しとせず、他の委員と相俟つて功勞あるは言ふ迄もない、今尙委員とし氣球隊技師として飛行機、飛行船並氣球に至る迄實地に當り、研究に餘念がない、飛行に於ける田中館博士の後繼者は確かに岩本其人を措いては他に有るまい。

（三）

井上少將は軍用氣球研究會設立當時未だ大佐にして工兵課長であつた、會の內規に依つて幹事として庶務の任に當つたのが、時の會長長岡外史中將が師團長に轉任の際其後を繼いで次官となつた故石本新六中將の新任會長となるに及んで以來研究會の事務經營否な飛行界の實權は少將の掌握し來つたもので其間の苦心勞力は他の想像し及ばざる處、他に本職あるも殆ど主力を飛行界に注ぎて一意專心其發達に努めた、勿論各委員の協力の結果ではあるが今日の進歩を來さしめたるは少將の手腕とせねばならぬ、少將は軍人中にも稀な雄偉なる軀幹を備へ精力絕倫、恐

るべき程のエネルギーを藏して居る事も亦稀である、日清戰役の際今の朝鮮總督寺内正毅伯は時の運輸部長であつたが、繁劇の爲め副官に勤まる者がなかつたのに巨漢井上仁郎は其の副官となるや不眠不休、奮勵鞅掌、勤勉努力克く敏速に遺漏無からしめたので流石の寺内をしし舌を捲かしめた、如斯き精勤と共に見掛けに依らず、上長に取り入るの術に長じ時に同僚をして顰蹙せしめた事は少なくない、爲めに兩者相俟つて寺内の信任を受け本省に入つて工兵課長の要職にも就き、其以前長い間外國にも留學して專ら軍事鐵道の研究をもした、日露戰爭の輸送は彼の能力に負ふ處甚大であつたのも事實である、今日交通兵旅團長の任に在るも決して偶然ではない。

少將、色黑く髭濃く長幹の脊を丸めて葉卷を燻らしつゝ赤銅色の面積廣き額越しに見る、の態度は其の仇名のヌーボーたる裡に一種物凄く意地惡る氣な處がある、少將に進級して以來佐官時代の小心翼々として頗る神經過敏、些の瑕瑾なきに勤むる結果は罪を他に課するが如き、或は只管上官に媚びるの反動として部下に對して兎角放縱暴慢なる態度があつたが翻然悟る處ありてか近頃言行を大に謹み、專ら雅量を示し德望を重んずるの結果は遽かに權威を備へ器局の大なるを示して來たが、だ未部下を見るの明に乏しく偏重の傾向あるは惜しいものである、少將時に胸襟を披いて語るかと思へば時に絕體の緘默を守るのみならず部下の口をさへ鉗する事がある、或は已れの自由なる者に向つては語るが、多少とも是を是なり非を非なりとする者に向つては毫も語を交へず暗に妨害の態度あるは未だ大器の度量に缺くの點がないでもない、兎に角にも今は準長州系とも云ふべき筋柄になつても居り、精勵事に當り加ふるに上官懷柔の策に妙ある以上、前途尙有望なるは疑ひない、又近來熱心なる結果は飛行の事にも精通し來たので其指揮、計畫等も大に宜しきを得つゝあれば、今後我が飛行界は少將の手腕に依つて更らに大なる發展を期する事が出來やう、吾々は少將を飛行界の元勳者とし且つ司權者として多大なる謝意と尊敬とを表するものである。



(モーリス、フアルマン)

(四)

工兵大尉德川好敏は數年前飛行機購入の傍ら操縱術研究の爲め一早く佛國に派遣せられ、フアルマン飛行學校に學びて卒業免狀を獲得し、歸

朝と共に本邦の飛行第一人たりし名譽ある者、以來專ら操縱の任に當り全く空中の人となつて技を磨きて後は、飛行家の養成に力を盡し來れる唯一の飛行將校、飛行界の花と云はんよりも寧ろ斯界の横綱である。

大尉は、瀟洒たる貴公子、色白く眼涼しく中肉中背、頭髮短く右に分けてもチックの異臭はないが、芳香馥郁たる香水に身邊を清めつゝあるは冒險なる飛行家の、往昔軍中兜に名香を薫じたる名將の用意あるものであらうか、彼れ軍服を脱いで兵兒帶姿の時、其陸軍將校たるを覺るに難い、詩吟は其の得意とする處劍を杖いて月明に嘯くの優姿を見る、又樂器を弄して堪能である、將さに古への風流公達無官の大夫を髣髴せしむ然り、大尉は無官の大夫の如くに名門の出である、其父は水戸副將軍家の次男であつて征夷大將軍德川家の分身、田安清水家に嗣子となつた故の伯爵德川篤守の嫡男である、父篤守才氣横溢、海外に學びて往年華胄界の麒麟兒と呼ばれ名聲大に高かつた、然るに家臣に謬られ家財蕩盡の厄を釀し、遂には汚名を受けて空しく華族の列を放なれた、其子好敏は卽ちその倫落不遇の間に育ち軍籍に入つたのである、今や冒險なる飛行の人となつて聲名を馳せ、一身を犧牲にして昔日皇室の藩屏であつた萬分の一を盡さんとして居る、又此れに依つて頽廢せる家名を興さんと期しつゝある、大尉の行や欽ずべく其の志や眞に憐む可きものではなからうか。

大尉は大尉中の少壯者である、少尉の時故も若き士官として日露役に出征し、凱旋後士官學校の敎官となつて清國留學生を薫陶した、次で砲兵學校高等科に學んで出藍の譽があり卒業の際技能優秀を以て恩賜品を享けたのである、子々多き華胄の子弟中異彩を放ち天稟の才は其後益々光輝を添へ來つた、彼れや溫雅沈毅頭腦明晰であつて細心周密、言行苟くもせない、所澤に轉する以前氣球隊にあるや常に部下と共に起臥し風流を解せざるかの如く、勤務の餘暇孜々として飛行の研究を怠らぬ、其の樸實謹直なる隊中の範として、上官を敬服せしめ下士卒皆欽仰する處となつた、部下は彼の爲めに手足の如く動き身命を擲つ敢て辭せざる程に心服して居たのは、彼の德望と謹嚴なる行の然からしむる所、以て其の爲人を知る事が出來る。

大尉の飛行振や、如何なる場合にあつても一糸亂れず圓熟して整然たる操縱は好く其性格を表はして居る、偶々飛行の講演を爲すや、精密なる統計を作り先輩の說を述べて、自己の經驗をのみ語つて一言一句議論に及ばず決して將來を說かず、推定を聽者に任せて言靜かに姿勢溫乎、宛然學者の風がある、部下を敎練するや親切丁寧、諄々細を說き理を碎きて練習者をして能く飛行の術を會得せしむる、又軍律を確守し長官の命令に遵ふ事實に嚴正、情深く涙脆く先輩同僚若くば部下に對する美談は少くない。

玆に追想するだに惜しきは、今にして在らしめば德川大尉と共に飛行家の横綱たるべき日野少佐である、一昨年或る事情の爲めに飛行界を去つて今福岡に大隊長として歩武を敎練しつゝある、髀肉の嘆ありと聞く。

(五)

日野去り徳川一人空中を擅にし後繼の飛行家のないのを嘆ずる時に當つて、獨佛に渡り飛行術を修得して歸朝した少壯の二將校こそ、則ち方今飛行界の花形とたゝへられて居る長澤、澤田兩中尉である、今花形と歌はれる飛行將校中には兩者の外岡、坂元、武田の如き新進氣鋭の士があつて、其妙技は決して劣るものではないが、前二者の飛行振りは益々熟練し來つて昨今先輩の徳川を凌駕するの趣があつて、花形中の兩大關とも云つてよからふ、長澤と澤田は共に工兵科出身、少尉となるの時日を同ふし、留學歸朝を共にし且つ其能に於ても飛行振りに於ても亦各々特長を持つて居る、將來日本に飛行家續出し來るの時、徳川の後を繼いで横綱を張らんものは恐らく彼等二人であらう、長澤は岩手縣の生れ、東北人特有の精悍強く一種妙な頑固な點がある、口締り眼丸く兩頰豐富にて青年士官に恰好の容姿を備へて居る、幼より其名の如く賢明であつて成績拔群、長ずるに及んで殊に數學を良くし發明の趣味深く、速くより飛行機に着眼して窃かに研究を積んだ、頭腦の明敏、天禀の才は同輩に知られて居た、彼は澤田の如く磊落ではなくとも周密、細心非常の謹直家である、所澤の旅館に在るや未だ曾つて外泊した事なく、暇あれば書籍を繙き機具を按じて飛行機の研究に餘念がない、時に交際の爲め稀れに旗亭に至るも酒色を愼み專ら品行を方正にすること徳川と共に飛行將校中の範たるに足るものであるが、彼れは寛懷雅量を缺き往々傲慢なる態度を示して人々を怒らしむる事が多い、其の上近來少しく高慢の氣味あつて傲慢と頑固とは遂に粗暴の言を發する事あるは、彼れの爲めに惜しむべきことである。

澤田は實に多才の軍人、好く學び好く遊ぶの人、豪氣の裡に溫雅を有し、頗る磊落であつて大膽細心である、彼れ江戸ッ子で武士の流を汲める者俠骨稜々として瀟洒恬淡、人に接するや溫容以て好く語り好く笑ふ、然も巧みに軍機の秘密を守るは其の圓滑なる特性の然らしむる處であらう、彼れ窃に花柳の巷にも出沒して、盛に滿を引き唄ひ且つ踊りて一片の邪氣がない、其容貌は老へたるが如く若きが如く徳川の貴公子長澤の青年士官の如く美ならざるも飄逸を傳へらるゝ飛行將校中第一である、中尉は才の利く人であると共に氣の人である、陣頭劍を拔いて叱咤號令、一舉敵壘を屠るの膽勇と奇智とを有して居る、されど稚氣の人となつて擴大の計を策するには餘り氣鋭ではあるまいか、然し先頃長澤は主として空中に活動を爲しつゝある時に當つて、格納庫内に在つて新機の設計に從ふの沈着性もある、

長澤は熟着性を有し戰ふに先つて地理を案じ兵數を打算し機を見て起つの人である、一は一氣呵成的一は石橋叩渡的、之を力士に譬へんか、澤田は常陸山の俤あり長澤は梅ケ谷の風を帶びて居る、沈着と豪膽各々得意の技がある、其の飛行を見るに長澤は規律を正し一定の型を以て飛び薄氷を渡るの趣きがあり、澤田は臨機應變の術を弄し虚心坦懷の風がある、前者は平凡なるも危險の虞なく、後者は快を呼ばしむるも危險の

伴ふを免れぬ、不思議なるは野外飛行に際して失敗の長澤に多き事である、今回の飛行の如く細心注意深き彼れが途中日暮れ明を失ひ赤羽に着陸して機を破壞したるが如き、水戸所澤間の飛行時間を計算し、時の日沒時間を考査すれば僅か一時間餘の飛行に於て斯の如き失敗を來す事は有り得べからざる處ではないか、澤田は宇都宮より所澤に還るの途中東京を迂回するの餘裕を示して大なる成功を收めて居る、長澤や用意周到であつても豪膽沈毅に乏しい、非常の時に當つて狼狽するの風があり又餘りに大事を取り過ぎる結果は反つて禍を招ぐ原因となる、澤田常に冒險の途行に練れ其の豪膽は虚心平氣なるの結果自ら注意を拂ふの餘裕を示して居る。

（六）

飛行界新進の花形である岡、坂元、武田の三將校は一昨年飛行操縱將校として全國多數の志願者より選拔された秀才であつて榮譽ある第一期卒業の好飛行家、他の多くは工兵なるに拘らず、岡は騎兵中尉、坂元は歩兵中尉、武田は輜重兵少尉であるのは各々如何に飛行に適するの材幹を有して居るかゞ判る。

岡中尉容貌雄偉、色黑く飛行將校中最も頑强なる體格を有して居る大丈夫である、歳若く一見温和柔順なるも俊邁氣鋭なるは其飛行振に良く表はれて居る、過般水戸より所澤に到るの際强風雨の爲め吹き流されて太平洋に出たが、巧に操縱して逆風渦流の間を突破して無事水戸に還行したるの手腕は將來目覺しき發達あるべきを示して居る、所澤に歸着したる際の如き高速の飛行力を以て豫定時間より早かりしが如きは、異變し易き當日の天候を見越して一瀉驀進、敵陣に在つて彈丸劇しき間を機を見て一鞭叱咤馬を走らして身を全うしたるの概がある、これ膽あり智ある者でなければ出來ぬ、

坂元中尉は風姿疲勁、短身倭軀飛行將校中の小者、髭極めて薄く常に口邊手を放たず切りに捻撫するの癖がある、好く斗酒を傾け陶然たるや身體の小なるに似ざる大聲を張り上げ唄ひ吟じ高笑戯語して笑はしめ、彼れ又一種愛嬌ある笑顔を作りて快限りなきか如く獨り悦に入るのが常である、彼れ精悍倜儻、豪放不羈、論難するに及んでは一歩も降らざるの風あるを、事に當るや實に熱心にて萬事負けず嫌である、故木村の存する頃其拔群の枝倆は他の同期生を壓して其存在は疑はしめたが、死後大に發憤したる結果は何れも急速の進歩を示した、彼も確かに其一人であつて、熱心と熟練は卒業後遽かに發達し來つて、沈着にして鮮かなる飛行振は先輩を凌ぐ妙味が出て來た、悠々迫らず滑らに軟かき飛行は彼の最も特長である、飛行術の外寫眞術に長じ銃獵の樂みがある。

武田少尉の未だ學校に在るや、飛行機模型の製作を爲を樂みとし其趣味深き結果は飛行通となつて、明晰なる頭腦は良く理解し應用して飛行將校たるの素地を作つた、されば年少の彼れは飛行に關し頗る該博の知識を有して居る、常に温和なるも其飛行振の豪膽であつて爽快なる處に個性を發揮して居る、聞く一佳人思を氏に寄せて切なるものがあると、

由來飛行將校は軍人中の花とし欽慕する婦女子多しといふが、少尉年若く威在つて强からざる風釆を備へたる上成績優良技能卓越、將來有望の將校であるからには世人の囑望多きは當然である。

（七）

翻つて海軍の飛行將校を觀るに陸軍に劣らぬ勇士揃ひである、豪膽無比と稱せられ磊落洒脫なる梅北少佐あつて海軍飛行界を掌り、曾つて所澤に在つて幾多の經驗を重ね研究を積み、歐米に學んで其知識技能更らに卓絕した金子少佐、山田、中島、山下等の大尉がある、何れも才智あり膽力あつて勇氣潑溂たる者がある、其他にも新進氣銳の飛行將校少くない、將に陸軍の壘を摩して海上の空中權を恣にせんとして居る、海軍の飛行將校を陸軍に比すれば彼は機械に通じて居る、其結果は發動機の如き調發の容易なるべきを賴みて取扱の粗雜なる、水上の安全なるを知りて亂暴なる態度があるのは健實なる發達を期する所以ではあるまい、機關少佐小濱方彥は陸軍の德永少佐と共に機關のオーソリチーである、飛行機の發動機關に就ては研究深く目下其製出に全力を盡して居る。

民間に在つては疑きに奈良原があり、先頃迄研究會の御用掛を勤めて居た滋野男は今大阪に在るも、不良の徒に誘られんとしつゝあるの報がある以外飛行の方面には聞く處が少ない、其他無數の自稱飛行家は在るも何も成功した者がない、此間に起ちて刻苦勵勉功を急かず遂に最後の勝利を得たものは豫備海軍機關少佐磯部鐵吉である、彼は飛行機の爲め職を擲ち家財を空ふして水陸兩用の機を考案し、屢々實驗したが遂に成功を見るに至らなかつた、後民間飛行界の發達を促がさんとして帝國飛行協會を起して其會より獨逸に渡つて飛行術を收めて先頃歸朝し、過日の帝都訪問飛行に成功した民間唯一の飛行家である、彼れに敏捷の才はなくとも着實沈毅の性質を有して居る、又勇往邁進の覇氣に乏しくとも不撓不屈の精神とがあつて溫厚にして廉直なるは確かに今日の成功を見た原因である。（終）

△飛行將校の特徴

時事新報記者　知覽一雨

我か陸海兩軍の軍用飛行機研究會の創設日尙ほ淺しと雖ども操縦者の技術は意外に進歩を爲して居る若し歐洲列强の如く航空隊を特設し數千萬圓の經費を投ずるとせば彼等に讓る所ない必ず對當の位置に達して居るや疑ふべからざるものである見よ年々我が兩軍に於ける經費は外國に對しても恥づべき小額なものであつて大正三年度の豫算も又陸軍に二十萬海軍に二十萬と云ふ小額である斯る小規模の設備を以て發達を望むのは少しく無理ではあるまいか又陸海當局者にも手ぬかりがある交通旅團長の井上少將が語つたとがあるが我果して軍器として實用に堪るや否やは半信半疑で居る内に佛國でも獨逸でも優秀な武器と認むるに至つた

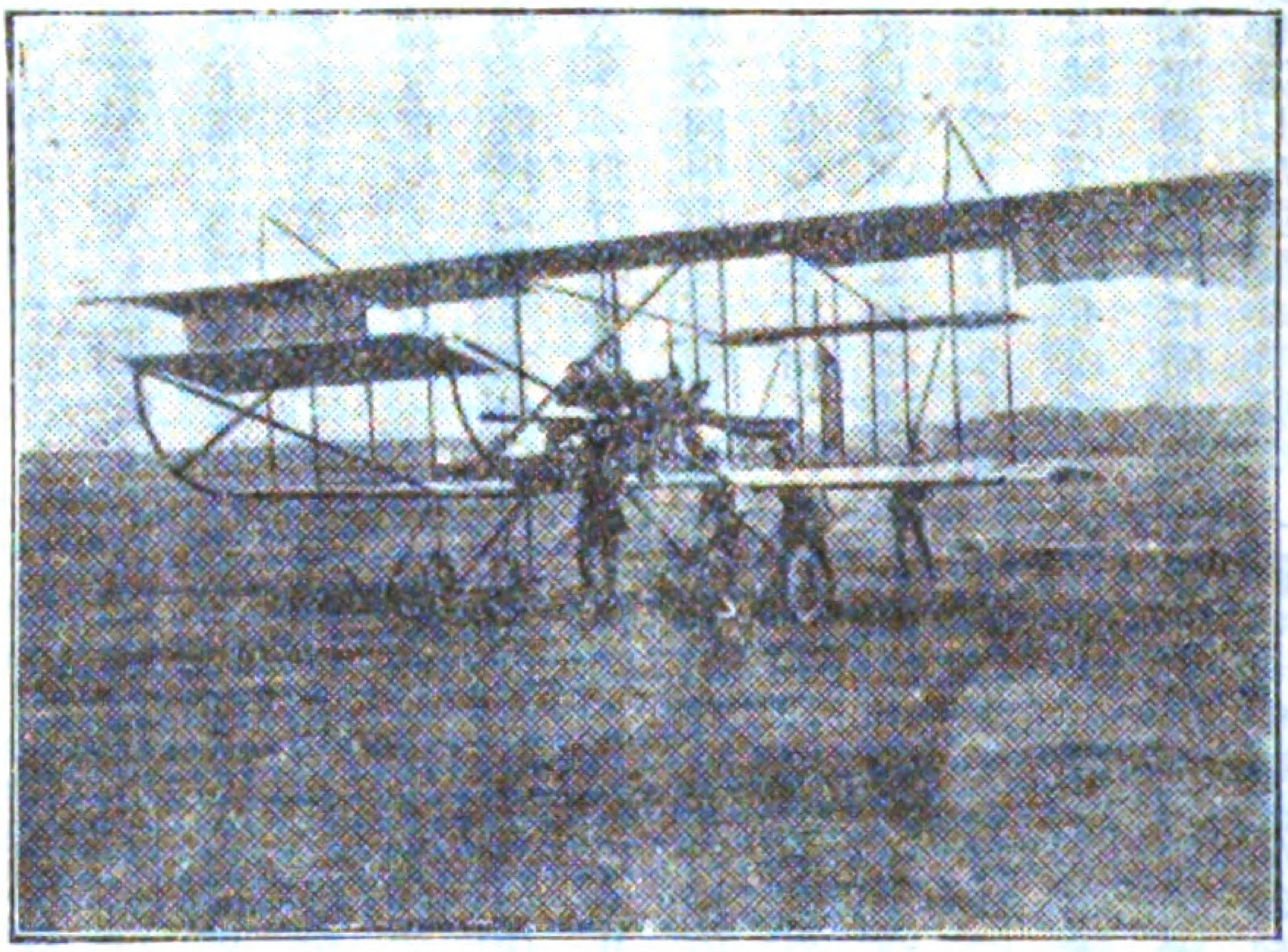
ので始て目の覺めた樣に最早々默過する時でないと手痛き刺戟を受け研究會を設けたが此の際早く外國では急激な進歩をして居たので遂に我が國は後に取り殘されたのである是に於てか日野少佐（當時大尉）と德川大尉を飛行機練習として佛國に派遣したのが明治四十三年であつた同時に理學博士田中館愛橘氏も歐洲飛行界視察の爲め派遣された即ち當局者が疑の眼を以て視て居たのが我が發達の遲々たる大原因であると今更ながら嘆して語つたことがある。

日野少佐德川大尉の兩氏は萬里の波濤を蹴つて佛國に赴き相携へてアンリーフアーマンの飛行學校に入り德川大尉は單葉のブレリオと複葉のフアーマン式日野少佐はライト式複葉とグラデー式單葉との操縱練習に就いたが間もなく日野少佐は獨逸に轉じて此處で練習をした此の兩氏か我飛行機操縱者の先達であるそこで明治四十四年の三月初旬から所澤飛行場に於て操習を始めたが海軍からは梅北少佐氣球隊からは伊藤大尉（當時中尉）山瀬中尉の二氏か練習生を撰拔して日本仕込みの飛行將校養成に着手したのである。

日野少佐と德川大尉は東白みの四時頃から日沒まで練習をして居る梅北伊藤山瀬の各將校も兩氏に就き孜々として練習を勵んで武藏野の廣い天空には發動機の響きが百雷の如く鳴りはためき物凄き程であつたので此處に巢作る雲雀も遂に住み換へをしたと云ふ賑を呈した此の先達飛行家の日野少佐は操縱者と云ふより寧ろ發明家と云つた方が適評であらうと思ふ佛國派遣の前日野式單葉飛行機を造つて戶山原で實驗したこともある又歸朝後も水雷艇形の單葉式を造り之に据付けた發動機も自家發明のものであつたが成績は不良に終つた其他軍用銃の發明自働車用の發動機も氏の考案に成つたものがある兎も角不成功に歸したとは云へ明快な頭腦を有して居る人である又飛行機の操縱振りは豪膽で觀る者をして膽を寒からしむるものがあるが元來機械的の頭腦を有して居るので巧妙な所がある其當時は出來星飛行界のことゝて少しでも風があると飛行を中止したものであつたが氏は七米突位の風は適當な飛行日和だと云つて居た然も其風力に逆らつて飛行したことはなかつた此の時より大膽にも空中滑走を試みて下降し觀衆をして手に汗を握らせたことは度々あつた或る日二百突位の高空を飛行して居ると俄然シリンダーが破裂して推進機の廻轉が止た危險は瞬間に迫つて居ながら悠揚迫らず下降したことが當時日野少佐死を決しての飛行と云つて場内の話頭に上つたことがある少佐自身も此時は萬事休すと觀念したと語て居たが斯る豪膽惡るく云へば冒險的の飛行家であるが今は福岡二十四聯隊付となり飛行界を去つたのは惜むべきことで璧を泥中に投じたも同然である。

德川大尉は日野少佐の去つた後を一人で我が飛行界を脊負つて立つことになつたが謹直にして寡言實に君子の風がある大尉に對し種々の風評を成すものがあるが全くの誤解で大尉の人となりを知らざるものゝ忘評である骨が刺す樣な冬の早朝霜柱を踏み夏は樹蔭一つなき場内に塵埃を浴びて倦まず厭かず練習者の手を取て懇切に敎て居る平素は人と語るも慵しと云はぬ許り口重な質だが午前中飛行練習を終はり學課に移れば可

嚀懇切に講述するが實に精通したもので又と得難き良教師だと練習生の各將校は敬服して居る又一度把手を握つて天空高く鵬翼を羽搏くや細微な點にまで注意を拂ふて決して冒險的の飛行はしない天候又は氣流などには殊更注意して居る練習生が野外飛行でもしようと云ふに於ては自分で確信した天候でなくては決して許さない斯く注意周到の人が三度危貨を買つたのは如何にも不幸に堪へない一は明治四十四年六月所澤川越間初めての野外飛行の際發動機故障の爲め川越在仙波村に下降した時轉覆した第二は同年十月飛行場の東方で氣流の渦中に卷き込まれて機關庫の側に墜落した第三は大正二年十一月中旬尾州の野に於て擧行された陸軍大演習の第一日突風の爲め松林に吹き付けられて墜落した此の三回とも飛行機は破損したが大尉は擦過傷を受けたのみであつたのは平素の鍛錬と注意と又危險に陷つても沈着にして狼狽せず適當の所置を取るからである而して大尉が我が飛行界に於ける功獻は飛行將校の養成でさへ偉大なものである其上に德川式飛行機の製作である一號より五號まで製作し第一期練習將校は皆之に依て練習したのみならず川越大演習の時は偵察用に充て飛行界の進歩を示した其功又大なるものである。



（德川式）

澤田長澤兩中尉は佛國仕込みの飛行家であるが派遣前德川大尉の教授を受け飛行機の何物たるを知つて佛國に赴きモーリスフアーマンの飛行學校に於て兩中尉とも複葉モーリスフアーマン式單葉のニユーポート式の操縱を練習した今や我が飛行界に於ける大立物である技能の點に付き敢て評すべきものでないが操縱に付ては各特徴がある長澤中尉は小心翼々愼重な飛行振りであるが三月五日所澤水戶間飛行に當て中尉は筑波山飛越の野心を起し監督官の許可まで得た元より中尉の伎倆から云へば易々たる事であるが本邦では高山を飛越して高層氣流の如何を驗したことがないので沈默寡言の中尉が率先して試み樣としたが天候不良と日暮に迫つたので中止したのは遺憾であつた殊に謹直律義な質で飛行家たる職責を重し飛行に就ての批評などは努めて避けて居るが昨年十月中旬偵察將校の福井參謀大尉を乘せて土浦往復を企てた途中航程を變じ水戶に向つた同地堀原練兵場出發の際機體を損し遂に解體するの止むなきに至つた時福井參謀大尉は責任我にあると稱して居たが長澤中尉が添乘者に責任のある筈なしと責を一身に負ふたのは職責を重する美談として殘つて居る。

澤田中尉は神田上水で產湯を使つた江戶子のチヤキ〳〵で飛行將校中

の快男子である中尉特得の飛行はバムキング即ち傾斜飛行で何人も企を及ばざる放れ業である四十五度位の角度を以て飛行しても當人平氣であるが觀る者は大膽と巧妙に驚かぬはない何んでも人のしない事をして見たいと云ふ膽略の据つた人で所澤で一千二百米突と云ふ高度の新記錄を作つたのも中尉である又武田少尉と同乘して監督官の許可なくて帝都を訪問し途中燃料が盡きかゝつたことがあるが流石が豪膽な二人も之れには大に窮したとは云へ外に方法がない儘よ盡きた所で下降し燃料を補足しようと悠々帝都を一週し所澤に歸つた時は既にカソリンが盡んとして居た此の如き大膽な飛行を試みるだけ操縱は實に神秘を極つて居る。

岡、坂元兩中尉武田少尉の三氏は德川大尉の懇切な教授に依て空中征服者たる名譽ある印綬を渡されたる純粹な日本仕込みの飛行家である操縱の技術に於ては優劣はあるまいが各特徵は備て居る岡中尉は豪膽なる内にも用意周到の飛行家であるが飛行上の事に就ては他の命令に由て我が所信を枉くるが如きことは決してない今日は飛行しないと思へば梃でも動かない飛行しようと思ひ立ちては誰れが止めても飛行すると云ふ強い自信のある人であるが殊に空中滑走の如きは誠に巧妙なものである三月六日水戸練兵場を發し所澤に歸還の途中低氣壓通過圈内に陷り約一時間も強力な突風と鬪ひ萬難を排して水戸に引き返した操縱の手際は實に敬服の外はない又中尉には禪趣味の處がある曾て語つて曰く宗教の信念とか又は觀念とかは何の必要もないと云ふ人がある然し飛行家たる者は此の信念は最も必要であると語つたのは空中に於て何物かを感じた結果であらう此の宗教信念の事は飛行界第一の犧牲となつた德田中尉も宗教信念と云ふことに就て必要を語つたことがある要する茫漠たる空中では他に信頼するものもない所からして所謂空中に於ける心理作用から其感じが生ずるのではあるまいか。

坂元中尉は高度を保ちて飛行するのが特徵で時々豫定の航路外に脫線して思ひ切つた飛行を試みる時がある此の高く飛ぶと云ふには理由がある即ち地勢の狀態と河川の縱橫して居る處又は溪谷の多い所では氣流が錯雜して突風が起り易いので低く飛ぶ時は之が襲來を受くる恐れがあるが高度を保つて飛ぶと假令へ高空に於ては風力強と雖ども氣流は不規則でないから危險の作ふことが少いと云ふ理由から高く飛行するのであらう一例としては三月二日高崎に向ひ飛行した時も一千米突の高空で飛行したが右の原則に依つたのであらう又本邦に於ける夜間飛行の紀元も昨年十一月中旬三尾の野に於ける陸軍大演習の際中尉に依つて作られた爾來之れが模範となつて所澤に於ては時々夜間飛行の練習を行ふて居るのは中尉が此の實驗に由る譯である。

武田少尉は氣球隊中第一の年少者で蓬勃たる鋭氣が溢れて居る磊落として小事に關せず未だ書生氣質を脫せない所があるが其豪放なる間にも驚くべき緻密な頭を持つて居るので飛行前には仔細に機體を精査してから始めて乘ると云ふ用意周到の人である昨年六月飛行卒業試驗に臨で鴻ノ臺から所澤に歸航の途中府下村橋在赤塚村の高空で忽然發動機に故障を生じ鳥の翼をもがれた如く全く機の能力を失し危險の運命は刻々に迫

つて來ると共に機は非常な速度で下降し始めたが俯俛すれば松の林もあれば凹地もある其儘下降せば人も機も生命のないことは明であるが少尉の此の瞬間に處する態度は泰然として無能の機を操縱しながら辛ふじて畑中に着陸し一命を全ふした此動作は如何にも沈着にして適當の處置であつたと井上少將は其技術の發達を賞して居た又名古屋に於ける大演習の第三日福井參謀大尉を乘せ偵察中旋風の襲來を二人とも機の動搖の爲め半身を投げ出されたが巧妙なる操縱で遂に危險區域を脫したことがあつた此の日本仕込みの三氏は讃辭ではないが天晴れ熟達した技能を有して居る。

海軍の飛行將校は佛米仕込みが多い梅北少佐は佛米金子少佐は佛國モーリスフアーマン水上飛行機練習學校河野大尉は米國カーチス水上飛行機學校中島大尉は英米井上大尉は佛國デペルリエツサン水上飛行機練習學校又日本仕込みとしては和田藤瀨の兩大尉である一昨年の十月から橫須賀追濱飛行場で白鷗の眠を驚かして練習をして居る元來海上生活に慣れて居るので水上飛行機を操縱するのは短艇を漕ぐと同樣に最と手輕く考へて居る元と梅北少佐が所澤で飛行練習をする時格納庫前に轉覆し輕傷を受けた時墜落したからとて死ぬものでないと云つたので鐵骨大尉の綽名を得た豪の者であつた陸海分れて練習することになつたので佛米に派遣されたが海軍の飛行將校は思ひ切つた飛行をするので急激な進歩をなした東京灣の一週三浦半島の一週などは每日の樣に飛行して居る又昨年十一月佛國に派遣した井上大尉はデペルリユツサン單葉水上飛行機を携て歸つたので海軍には今カーチス式モーリスフアーマン式デペルリユツサン式の三種を集めて練習をすると共に一方には參考品とし海軍式と稱する水上飛行機の製作に努めて居る最も海軍が飛行機の研究をする陸軍に比し便宜を有して居るのは軍艦を操縱して居る人々の頭が機械的頭力に養成されて居る爲に技術の進歩が著しく進んだ原因であらうと思ふが遺憾に堪ぬのは陸海兩軍とも發動機の製作者もなく又研究家もないと云ふのは哀いことではないか。

終に至つて陸海軍飛行家の遠距離飛行に就て一言述べよう技術の熟練に從つて遠距離飛行を企てゝ腕試めしをする陸軍では帝都訪問鴻ノ臺千葉縣六方ヶ原海軍でも又帝都訪問東京灣一週など試みて居るが今回陸軍では三月二日を以て高崎水戶宇都宮の三方面に分つて野外飛行を行つた所謂關東平野の橫斷であるが一は海岸線一は高山脈一は平野の中空と此三航路の氣流が如何なる變化を呈するかを試み一步々々飛び距離を延ばすのである歐洲でも初めは此如にして進んで來たので決て恥づべきことはない斯くして飛行家の膽を練り漸次距離を延長し時としては東北に向ひ又東海道に向ひ大飛行を試むる時が必ず來るであらう唯表面のみ見てこれ許りの飛行に餘り騷ぎ過ぎるなと冷評を加ふるのは今や芽を吹き出した我が飛行界を破壞するものである吾人は距離の遠近を問はず頻々と野外飛行を行ひ技術の熟練を求むものである。

△飛行將校を評す

二六新報記者 福田眞琴

夢想から現實に移つて、夫れがまた、驚く可き長足の進歩を示し、將來どの位に迄發展するか、今の處鳥渡斷定の出來ぬのは吾が飛行界である。而して過去五六年前までは、其名詞さへも餘り用ひられなかつた、飛行家なる者が、現在は、陸軍にも、海軍にも、民間にも陸續として其名を謳はるゝに至つた時、誰しも奇異の眼を以て此飛行家に接することの幼稚なるを知覺すると同時に、是れ等の飛行家が性格や主義や道樂を尤も趣味あるものとして、知らんと欲するに至つたのは、平凡に甘んずることの嫌な人間の慾望として當然の請求である。明治四十二年八月、世界の大勢に鑑みたる當局が、臨時軍用氣球研究會てふものを設置した頃は飛行機の如何なるものであるか、世人は毫しも知らなかつたのである。然るに翌年十二月、佛國より歸朝したる德川大尉が、代々木練兵場に於てフアルマン式を飛翔せしめたので、世人は稍飛行機を解し得るに至つたが、亞で、民間の奈良原三次君は、自己考案を標榜する奈良原式を各處に飛ばして、飛行機熱の普及に努力した。併し此時代の幼稚なりし飛行振りは、今より想起すれば、三歳の童子が、アンヨは上手……宜しくであつた。然るに今や吾が飛行界は、翺翔三十里、雨も、風も、雪も、霙も、霧も、或る程度迄は突破するに難からぬ迄に、其技倆は進みその熟練は積んだのである。中にも、陸軍の飛行界には多士濟々。第二期生として、井上、伊藤、内藤、佐藤、坂本、眞壁、重松、七中尉、小關、中澤、兩少尉等在り、所澤飛行場に於て研磨の功を積み、來る六月の卒業試驗を、腕を扼しつゝ待ち焦れてゐる。されど是れ等の各將校は未成品である以上、今茲に評價するの餘りに早計に失する虞れがあるから、飛行將校として、已に卒業試驗に合格し、立派に飛行家たる資格を具備してゐる、德川大尉、岡、長澤、澤田、阪元、四中尉、並に武田少尉等に向つて率直に批判の筆を下さんとするのである。

德川大尉　默々として多くを語らず、瀟洒たれども威風冒し難き大尉の風丰、一見して名門の出たる素質を備へてゐるのは、吾が陸軍飛行界のオーソリチーとして恥かしからぬ人である。併し飛行家たるに、名門の出たると否とは全く沒交渉で、此間に何等の利害關係はない。されど大尉が飛行家として吾が陸軍の先覺者となりし、動機、目的、期待には誇る可く、又一掬同情の涙を濺ぐべき絶大なる或るものゝ潜んでゐることを忘れてはならぬ。大尉の名を聽き、大尉と接する毎に、深刻なる同情が泉の如く胸底より迸り出づるのは、豈唯吾人のみではない。飛行將校全部に通ずる處の感念……否大尉の名を知る處の人々全體に湧く處の感念と信ずる。飛行家と名門と毫も關聯の無いとは大尉以外の人を指摘した者で、大尉が飛行界に身を投じたる最大原因は、名門の出たるに在りとも云ひ得よう。部下に對して謹厳愛撫。機上に在つて用意周到なる大尉は慥かに吾が陸軍飛行界を統御す可き人で、吾人は熱誠に夫れを新

るのである。

岡中尉　陸軍飛行將校中に、軍人らしき軍人を物色したならば、劈頭岡中尉が腦裡に浮び出づるのである。虚飾せざる言語、氣取らぬ態度、豪膽にして而して上官の命令に逆けざる、一として軍人らしからぬ處のない、所謂、齒切れのよき男である。徒らに軍人風を吹かせて能事足れりとなす輩は、中尉を龜鑑として改む可きで、吾人は中尉に對すると衷心から快感を覺ゆるのである。飛行上の技倆も性格の豪毅から胚胎して時に冒險に陷るのは尤も愼む可き處、昨年の六月卒業飛行の際、國府臺着陸の時螺旋降下をしたなぞは些か輕卒であつた。併し今回の關東平野横斷大飛行に長澤中尉の一時間五十五分を費して航空したる所澤、水戸間を一時間にして到着したるは、飛行上の最大要素なる時間の節約を明確に履行したるものとして中尉は飛行上の定則を守る人と評さるゝに至つたものである。吾人は中尉に其覺悟を永久に持續されんことを希ふのである。

長澤中尉　現在の飛行將校中技倆拔群なる者は？と問へば多く長澤中尉と應へる。成程、飛行に對し輕妙なる飛行振りを發揮して其技を示す處は堂々たる第一流の飛行家である。されど飛行家たる以上尤も安全に機を操縦し、人命の危險を防ぐと同時に、飛行機をして破損せしめざる様に心懸くるが飛行家たる者の必要條件である。然るに中尉は能く機を破壊する。今回の大飛行に際しても赤羽に着陸してモ式二號を滅茶々々にして了つた。是れは中尉の一大缺點で、無愛嬌なる其性質から他人に憎まるゝと、部下に冷酷なるが爲め德望の無いのと並び評して中尉の反省を促すのである。吾人は中尉と口論をした事もなければ喧嘩をした事もない。されど友人の二三は中尉に深き悪感情を有つてゐて頻りに罵倒するのを耳にする。之れ前途ある中尉の爲めに惜む處で、苦言を呈する所以は玆に在るのである。

澤田中尉　飛行機が帝都訪問する場合、牛込神樂坂の天空を翱翔すると、搭乘者は澤田サンだよと揣摩さるゝのは中尉が風流兒であるからで、所澤の春の宵、尺八を吹奏する中尉の和服姿は、是れが吾が陸軍飛行界の猛者たる澤田中尉かと一寸異様に感ぜしめる。長澤中尉と共に佛蘭西仕込みの飛行家であるが、性格は全く相反してゐる。無遠慮なる評言を下されても怒ること少なく、稚氣尚失せぬ處に軍人らしき俤を宿し細事に頓着せぬ處に男兒らしき氣分あり。快男兒として、風流兒として中尉は男にも女にも持てる人である。時々脱線的なる飛行はするけれ共自尊心を失ふ程でもないから飛行上大なる過失を演出した事はない。

坂元中尉　堅實なる飛行振りは德川大尉と双び稱され、或る二期生が同乘して一番安心なのは德川サンに坂元サンなりと明言したるに徴しても確かである。突飛なる飛行をして興行師的なる技術を演ずるのは軍事上に毛頭必要を認めない。されば冒險的なる宙返り（アプサイドフライト）飛行は勿論のこと、已むを得ざるの冒險ならいざ知らず、實際軍事上に必要なる飛行以外は練習するの不可なる許りでなく、全く不必要で、吾人は各飛行將校に堅實なる飛行を要望する者であるから、此點に就いて中尉の飛行振りには吾人は大贊成である。夫れに中尉は常に寫眞機を機上に携帶し到る處で撮

影をする。是れも飛行家として必要條件の一ッで、中尉の着實なる思想は斯かる微細なる點にも現はれてゐるのである。吾人は何處迄も中尉に賛成せねばならぬ義務を有する者と思ふ。

武田少尉　昨年の所澤、國府臺間の卒業試驗に、岡、坂元の兩中尉は無事往復飛行したに武田少尉は歸途發動機に故障を生じ、府下練馬村に下降するの已むなきに至り、徳川式三號を破壞したが幸にも少尉は無事であつた。處が今回の大飛行には悠々六百米突の高空を、雨雲と闘ひつつ所澤、宇都宮間を飛翔して尤も正確に歸着した。高崎へ赴いた坂元中尉は歸途佐野方面に進路を誤り、長澤中尉は赤羽に飛行機を破壞し、岡中尉は四日間水戸に滯留し、澤田中尉は東京を迂回した等各々豫定變更されたに、徳川大尉と武田少尉とは毫も事故變化なく、正確に、實直に大飛行を決行したことは、吾人の尤も諒とする處で、恁くてこそ満足なる大飛行は得らるゝので少尉も亦堅實なる飛行家の一人とはなつた。夫れに少尉の幸運なる、徳川大尉に讓らず、機上火災の際も僅かなる火傷を蒙つたのみで、元氣益々旺盛なるは祝福するに充分の價値があると思ふ。（終）

△余の觀たる飛行將校

讀賣新聞記者　大島寶水

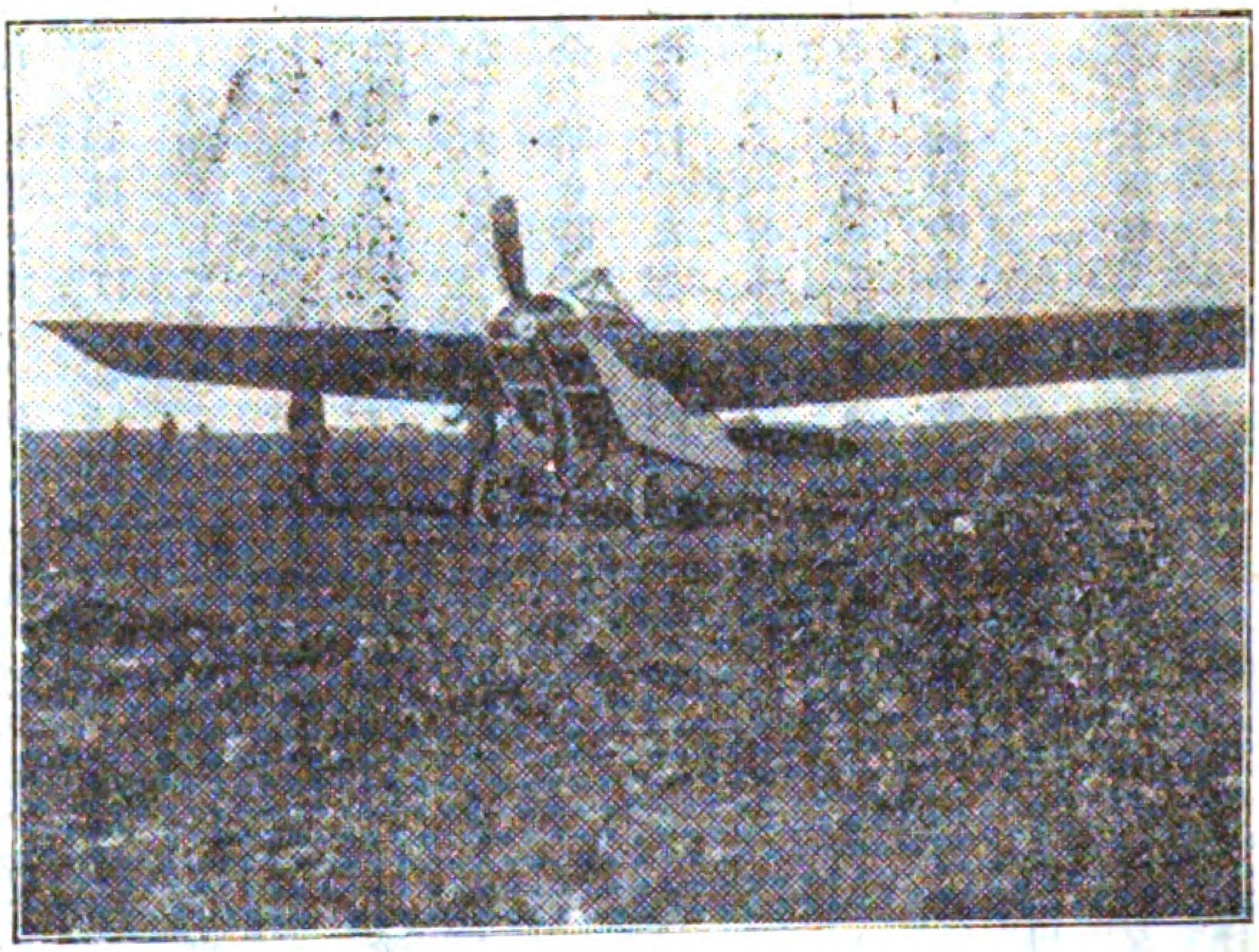
人を評するには、第一印象を以てするのが、最も適した事の樣に思はれる。私は今こゝに、飛行將校を月旦するに當つても、先づ最初の印象を辿つて、そして公平に論評して見たい思ふ。然し、人には、所謂奥の深い……例へば、一寸見た所と、永く交つた所とは、大變異つて來る人がままあるから、私が今此處に言つた此言葉も、或は、皮想のものとなつてしまふ事も無いとも限るまいが、然し、多くの人は、大抵一面識にして先づ其人となりの大半を覗ひ知る事が出來ると思ふ。

氣球隊長河野少佐は、誠に好老爺である。彼には武士的魂と共に、紳士的の美しい情熱がある。其風格は、そゞろに乃木將軍を偲ばしめ、其言論と態度とは、所謂英國流のゼントルマンを想像せしめる。彼れの部下を愛するや、誠に深い。長途の飛行から歸つた飛行將校に對しては、殆んど叮嚀過ぎると思はれる程、親切に之れを慰撫する。私は大佐が焚火を圍んで、飛行場の寒空に、愛する部下の成功を祈つてゐる而もちと『御苦勞樣でした〳〵』と云つて、若き飛行家を慰むる時の彼の熱い情愛を、如何にも美しく見る。私は、彼を以て、單に武のみの人でないと言つた。然り、彼れは又文の人である。少佐が私と初めて會談した時、『私は親の時代から讀賣の愛讀者です』と云つて、喜んでゐた事の一事を以てしても、彼れが文學の愛好者である事を、私は證據立てると思ふそして又、彼れは誠心誠意、航空界の、進歩發展に盡してゐる人である此意味に於て、彼は、他の人達が五月蝿がる、我々新聞記者に對しても努めて、惡感を與へざらん事を〳〵と欲して居るらしく、それかあらぬか、出來得るだけ、新聞記者との意志の疎通を計つてゐる。曾て少佐は

記者に語るらく、『飛行の事たるや、誠にそれ、廿世紀に於ける、最大なる事柄である。吾國に於ては、未だ歐米のそれの如く、飛行術が進歩してゐないが、それは甚た遺憾とする處で、之れが進歩發達を計らんとせば、勢ひ先づ、航空思想をば、國民一般に普及し、以て官民一致して、之れが大成を期せざる可からず、就ては、記者諸君に於ても、一時の感情等にて、獻身的の業務に在る、飛行將校等の私行——即ち人情の弱點などを、どうか云々せずに、善意を以て、之れに對して、飛行發達の事實を、叙事的に報導して、以て國民敎育の任にあたつて戴きたい』と依頼した事さへあつた。

庶務課長の郡山少佐は、神經質な、痩せた顔に何時も苦い笑ひを浮べてゐる人である。新聞記者は餘りに好きではないと見えて、吾々が質問した事に對しても、決して明答した事はない。丁度議會に於て、大臣が議員の質問に答辯する様に、巧みに要點を避けて云ふ人である。大學を出る時は、實に俊才だつたと云ふ事だが、今では大した人才とは見えない。

同じく氣球研究會本部に、石本大尉と云ふ人がゐる。此人は、石本前陸相の甥であるところから、ナカ／＼鼻息が荒いと云ふ事であるが、私は良くは知らない。けれども、彼の厚い髯が、如何にもキザで、時々根性の曲つた事を云ふのは、萬更知らぬでは無い、然し以上の人々は、眞の意味の飛行將校ではない。實地に飛行する人としては、先づ第一に、日野少佐と共に、我國飛行界の先覺者であつた、徳川大尉を擧げねばなるまい。


(ニューポールド)

徳川大尉は、得易からざる人格の人であると共に、飛行技術に於ても、亦老練の士である。身を持する事謹嚴、未だ其配遇を求めず、專心誠意吾が飛行家の爲めに努力しつゝある。彼れや、上官に對しては苟くも其命に背く無く、下僚に對しては、如何にも慈しみ深く、隊中評判の良き事第一である。彼れは未だ曾て、青樓に上りし事なきは勿論、如何はしき女の居る宴會などには、一度も出席した事がない。由來元日などには、飛行將校と雖も、醉歩蹣跚として、時に所澤の市街を、放歌高吟などして、其權幕却々當るべからざるものがあるのだが、獨り彼れ徳川大尉のみは、家を一歩も出でずして、毎年愛犬プチを相手に、端正なる生活を續けゐるとは、所澤での評判である。

私は徳川大尉と共に、今一人飛行將校中に於て、人格技術ともに賞するに足る人として、長澤中尉を數へる光榮を有する。

長澤中尉は、由來新聞記者中には、評判の惡い人である。何故かといふと、彼れは、短軀童顏の人であるから、定めて與みし易い人であると思ひの外、ナカ〳〵自ら持する事高く、爲めに應々記者の感情を害する事があるからである。私も、彼れを兵舍に訪れて、其談話を得んとして只何も語るべきものなしの一點張りで、極めて閉口した事がある。然し彼れは、大なる抱負を持てゐる、眞の軍人である。或時彼れは、某新聞記者に、涙を揮つて、我軍人の現狀を憤慨し『斯くの如くして過ぎんか我國の前途は、實に憂ふべきである』とて、眞心を現して語つたと云ふ。而して、彼れの技術の點に就ては、彼れが今回、佛國へ飛行機購入の用務を帶びて、出張を命ぜられたるに徴しても、明かであらう。のみならず、水戸飛行の歸途、日は既に西山に沒し、宇宙全く暗き時に於て、尙愼重の態度を以て、着陸地を探し、無事に着陸したのは、たとへ機體に多少の破損はありしにもせよ、決して彼れの失敗と云ふべきものでは無い。寧ろ彼の場合彼れ丈の結果を得たのは、賞するに足る事であると思ふ。恐らく操縱の技に長ぜる事に於て、現在の飛行將校中の第一であらう。

次に、技術に於て、長澤中尉に、優るとも劣らずと云はれてゐるのは澤田中尉である。

澤田中尉は、ナカ〳〵世才に長けた人と云はねばならぬ。彼れが、所澤に於ける、飛行記者の宿泊せる旅館にまで訪れ來て、長時間長口舌を振ふあたりなどは、彼れの最も得意とする所ではあらうけれども、又一面から云へば、彼の如才なさを知る事が出來る。但し、私は決して之れを惡いと云ふのではない。けれども、其話の內容が、時に軍人としては餘りに、放れ過ぎはせぬかといふ事を憂ふるのである。私は前途有望なる飛行家として、彼れに囑望する事の甚だ多いが故に、此苦言を呈するものである。殊に彼自身の口から、飛行軍人たるを喞ずる如き口吻を聞くのは、甚だ遺憾の事であると思ふ。

坂元中尉は、見事に高崎所澤間往復飛行に、成功した人である。しかも、歸途には、雲の爲めに、甚だしく苦しめられたにも拘らず、豫定以外の長距離飛行を遂行した彼れの操縱の熟練と、用意の周到は、誠に嘆賞に値すると思ふ。彼れや資性恬淡、快活にして、一種味ひのある人物である。

技に於ては、徳川、長澤、澤田の次に位するけれども、岡中尉は、其面の現はせるが如く、如何にも豪膽な軍人である。少し位風があつても平氣の平左でやると云ふ風であるから、水戸飛行の第一日、天候の爲め一時中止の止むなきに至つた時なども、彼れは『己りやア飛ばうかな』などと呟いてゐた。以て其氣性の一般を知るべしであらう。

武田少尉は、是又年少氣鋭の若武者である。日常喋べる時抔は、殆んど喧嘩でも吹ッかける様な調子でやつて來るが決して惡氣の無い、稚氣を帶びた人であつて、飛行の技は、長澤、澤田に劣ると雖も、坂元、岡等とは伯仲の間にあるであらう。

以上は主として第一期の將校ばかりであるが、第二期、第三期の練習

生は、未だ其技の優劣を験するに由ないから、先づ片端から其人となりの印象を語れば、重松中尉、坂本中尉、中澤少尉は、眞面目な人達で、佐藤中尉は大人しい紳士的の軍人。小關少尉は年少氣鋭。井上中尉は風采、態度とも商人の様に優しい人で、內藤中尉は誠に快活に喋べる人であると評して、此項を結ぶ事としやう。（をはり）

飛行界の人物

やまと新聞記者　藤木九三

（一）

◎本邦飛行界の大立物は何と云つても德川大尉である。飛行家とさへ云へば一時は必ず日野、德川と並べ稱したものであつたが、日野少佐（當時大尉）去つた後の飛行界は德川大尉の獨舞臺の觀があつた。現今の陸軍飛行界の進歩發達は一に德川大尉の賚と云つて好い、實際長澤、澤田兩中尉を除いた他の飛行家は悉く大尉が養成したものである。飛行界の天才と呼ばれた故木村中尉を初め德田、岡、坂本、武田の各飛行將校は純然たる大尉の弟子である、其他『德川式飛行機』を完成した事と云ひ大尉が飛行界に貢献した偉勳は既に人口に膾炙する處であるが、尙他に德川大尉の人格が愈々名聲を高くする所以で、現に親戚間に復爵問題を云々するに拘らず、未だ獨身生活を續け專心飛行機の研究に從ふなどは到底常人の爲し能はざる處である。

◎日野少佐は德川大尉と共に本邦飛行界の元勳である、少佐は先年研究會委員を被免されて、現に福岡聯隊に大隊長の職に在る傍ら、熱心に『日野式發動機』の完成を期して研究を重ねつゝあるが、少佐は實に純日本式發動機發明家の第一人者である。日野少佐は性傲膽にして冒險を好み、飛行家としては眞に理想的人物で、其の大膽勇壯なる飛行振は曾て世人の均しく稱讃せし處である。然るに少佐の宏放な性格は却て飛行機其物より遠ざかる原因となつて突如研究會委員を被免になつた當時、一部の世人は日野少佐の人格に兎角の評を爲す者があつたが、夫は單に私行上の貸借問題に過ぎず、而も其金たるや當時少佐が苦心慘憺して『日野式發動機』の發明製作に費されたもので、少佐被免の眞相を知る者の均しく少佐に同情する他の原因が存するのである。

◎次に、民間飛行家として海軍大技士奈良原三次氏を擧げねばならぬ。氏は彼の『鳳』號の發明者たると同時に、本邦に於て飛行機に發動機を裝置して飛揚を試みた最初の飛行家で、其飛行界の功績は實に德川、日野兩氏と共に本邦航空史の卷頭を飾る可きもので、奈良原氏は飛行家と呼ぶよりは或は飛行機製造家と稱した方が適當かも知れない。實際『鳳』號の操縱は近時專ら白戶氏其任に當り、先年九州、四國、中國、北海道遠くは朝鮮地方に迄巡業して兎角の評在りしに拘らす、一般世人の飛行機に關する知識の開發に貢獻した事は尠少で無い。而も『鳳』號が飛行機として本邦最初の發明なるに拘らず比較的完全なる飛行機であつた事は大に誇とす可き處である。然るに吾人は往々にして、奈良原氏の私行上

に關し其性格を云々するを聞くも、斯の如きは發明家たる氏の事業功績に對して何等の名譽を毀損するものでないと思ふ。

◎民間飛行界の大恩人として、帝國飛行協會の磯部機關少佐の偉勳を特筆せねばならぬ、去る十日磯部氏は『ルムプラー式』を驅つて突如帝都の空を飛翔して都人を驚かした快擧は故武石氏の都市聯絡飛行と共に民間飛行界の記錄を作つたものであるが、吾人は更に帝國飛行協會の主唱者としての磯部氏の功績を讃ずる者である。磯部氏は實に努力の人である。曩に氏が日本航空協會の設立を計つた當時は、主唱者中には伊賀男爵、奈良原男、其他諸氏が、故森田新造氏等の民間飛行家が協力して主旨の貫徹を期したに拘らず、最後迄奮鬪苦戰して遂に帝國飛行協會と合併して今日の盛大を致したのは一に磯部氏の双肩に懸る名譽にして、民間飛行界の發達は今や一新紀元を劃したものである。

◎故人として木村、徳田兩中尉及び武石氏の人物並に其の壯烈なる最後が與へた飛行界の功績は暫く措き、同じく故人山田猪三郎氏を忘れてはならない。實に山田氏の偉業は本邦航空史の最初の頁を彩る可きものて、今日の飛行機は未だ蒼空を飛翔せざる昔時に在つて、彼の獨逸の飛行王フエツペソン伯が現時に名聲を博さなかつた時代に在つて、我日本に既に山田猪三郎氏が飛行船發明に從事して着々成功を告げつゝ在つたと云ふ一事は、實に世界に誇る可きである。實に日本の航空機が初めて實戰に參加したのは、彼の日露戰後に際して旅順の包圍攻擊に應用したので、當時の三日月型なる揚留氣球こそは我が山田氏の發明になつたもので、旅順陷落の名譽の一半は此の氣球の空中偵察の効果に俟ちたるは明白な事實で、同時に山田氏の忘る可らざる偉勳である。

△進んで止まぬ飛行界

報知新聞記者　井　上　勝　好

(一) 飛行界の元勳

僕が飛行機に趣味を抱ひて、飛行機の後を追ひ廻つてから、最早玆に足掛け五個年を經過した、今にして其當時を追想すると、全く隔世の感がある、五個年前には飛行機が地を離れたか離れなかつたかが疑問となつて議論をした滑稽談さへあるのに、今では十米突前後の風速ある大空を、我物顏に飛翔し廻つて居る、先づ以て我國としては相當の進步發達を致したものである。

飛行界今日の進步發達に對しては、學者專門家の功績又沒す可からざるものがあるけれど、就中陸軍飛行界の先覺徳川大尉の眞面目な而も熱心な努力が非常の力を與へて居る、大尉は我國飛行術研究最初の渡歐を日野少佐と共にし、佛蘭西にフアルマン及ブレリオの飛行術を學び、歸來陸軍飛行家として、飛行敎官として、隨分飛行機を乘り廻し、新に德川式飛行機の考案をさへなすに至つた、第一期の飛行將校として現在頻りに活躍して居る、岡、阪元、武田の三將校(外に故木村德田の兩中尉)

は孰れも大尉の指導を受けて快手腕を現すに至つたのである、大尉は德川一門の出だけあつて、何處となく貴公子肌の風采が漂つて居る內に、一種嚴格な規則的な軍人氣質が現はれて居る、一體飛行家の飛行振には常に其性質を遺憾なく發露するものであるが、大尉の永き間の飛行振りには全く其性格の全部を現はして居る、今日迄格別思ひ切つた大飛行を遣つては居ないが、其沈着な落附いた飛行振は我國最初の飛行に始まつて、所澤附近の野外飛行から、帝都訪問飛行を始めて遣り、二度大演習に參加して空中偵察に從事し、最近又所澤高崎間の關東平野橫斷飛行をも無事に遣り終へた、斯くて大尉は過去五個年間に亘り、千回以上も遣行機上の人となり、搭乘回數の上に於ては將に一新記錄である、隨つて其間には川越近在、所澤飛行場及び昨秋名古屋附近の大演習に當り八事附近等で、强風又は機械の故障の爲め、着陸の已むなきに至り、危難に遭遇して居るけれども、其沈着な態度は遂に大過なくして今日の大成を爲して居る、實に大尉の操縱振は細心而かも規則的のもので、決して亂暴な飛行を遣つたり、大膽な飛行を遣つたりする事はない、尤も好晴の空數百米突の高所から、例の空中滑翔を遣る事はあるが、極めて靜かな雲雀の舞降りる樣に穩かなものである、是等の點よりして大尉の操縱振は全く飛行教官として尤も適當の手腕である事を信ずるのである。

（二） 陸軍五飛行家

豪膽飛行家、快活飛行家としては先づ岡中尉を筆頭に擧げねばならぬ、中尉は一昨年行飛將校となつて漸く單獨飛行を許される頃からして既に豪膽な飛行振を示して居た、所か其豪膽振は操縱術の熟練と共に飛行家に必要な周到なる注意を加味して、全く一分の隙もない飛行振となつて居る、直行場內の飛行に當り獨特の空中滑翔で着陸する妙技を有する外、飛行中間髮を容れない瞬間に於て、果斷を行つて未だ嘗つて小過をも貽さないのは中尉の性格を示して居るのである、最近所澤水戶間の野外飛行に當り、水戶よりの歸途烈風と戰つて快飛行を行ひ、將に顚墜墜落の難に遭遇せんとするも、尙ほ泰然として機首を廻はし强き逆風を受けつゝ水戶に引返して居るの態度は、飛行家として最も賞揚す可き點である、若し其際に當り狼狽して附近に着陸地點を求めて下降したなれば、機體の破壞は勿論人命にも關する大椿事を惹起したかも知れぬ、又昨秋名古屋附近の大演習には澤田中尉と共に西軍に屬して連日豪快な飛行を遣つて居た。

佛蘭西仕込の長澤中尉は、昨年澤田中尉と共に歸朝して以來、帝都の空や關東の平野に飛行を試み、又名古屋附近の大演習にも參加して、益々技倆を現はした、就中快速ニユポール單葉の操縱は中尉の尤も得意とする所である、只だ所澤水戶間の長距離飛行は再度敢行して居るけれど二度共故障の起つたのは頗る遺憾とする所である、何は兎もあれ無口な質朴な其性格は、遂に陸軍式否軍用式の飛行家として、將來大飛行を遣り遂け得る事と信じて疑はぬ。

江戶前の飛行家は澤田中尉である、其佛蘭西仕込の腕前は、却々痛快

洲濱の操縱振を見せる、即ち昨年歸朝早々最初の試乘に査行場を脱して直ちに帝都の空に飛來したり、東京灣を橫斷して大飛行を試みたりとする事が往々ある、元來飛行機を操縱するに掛けては自由自在を極めたもので、觀者をして手に汗を握らしめる事度々である、殊に彼の大傾斜飛行の如きに至つては、入神の妙技氏の最も得意とする所である、近く敢行した所澤宇都宮間の長距離飛行に當りても其快腕は更らに光彩を放ち、遠く帝都の大空に天翔つて居る、其常の飛行は斯樣に大膽自由を極めたものであるが、一面實に細心の注意を施して居る、飛行中に於ても風の方向不明となつたり、氣流の調子が變である時には、機の方向を種々に代へて試す事もあると言つて居るが、此一點を見ても、決して亂暴な飛行は遣らないのである、全く中尉は操縱術にも熟達して居るけれども、更らに天稟の技倆あることを認めたい、實に天晴なる大飛行家たることを得るであろう。

阪元中尉は沈着な飛行を遣る事德川大尉に彷彿たるの點がある、飛行場内の飛行でも野外飛行でも常に其沈着振を示して居る、昨秋の大演習には愈々壯技倆を發揮して、岡崎在の根據地を出發し敵狀偵察を遣るの際、名古屋を過ぎて木層川沿岸迄飛び廻り、又更らに岡崎に引返す約二時間の快飛行を行ひ、殊に名古屋を距る北東五哩の部田から薄暮に乘じて飛行を開始し、名古屋市の燈火を目標に夜間飛行の壯擧を敢てし、黑暗々たる名古屋北練兵場に無事着陸したのは、實に我國夜間飛行の新記錄である、近く所澤高崎間の野外飛行に當つても雲際る高空を突破して尙ほ悠々たる如きは、益々其沈着振を示したもので陸軍飛行界の爲めに大に氣焰を吐くに足る可きものと信じる。

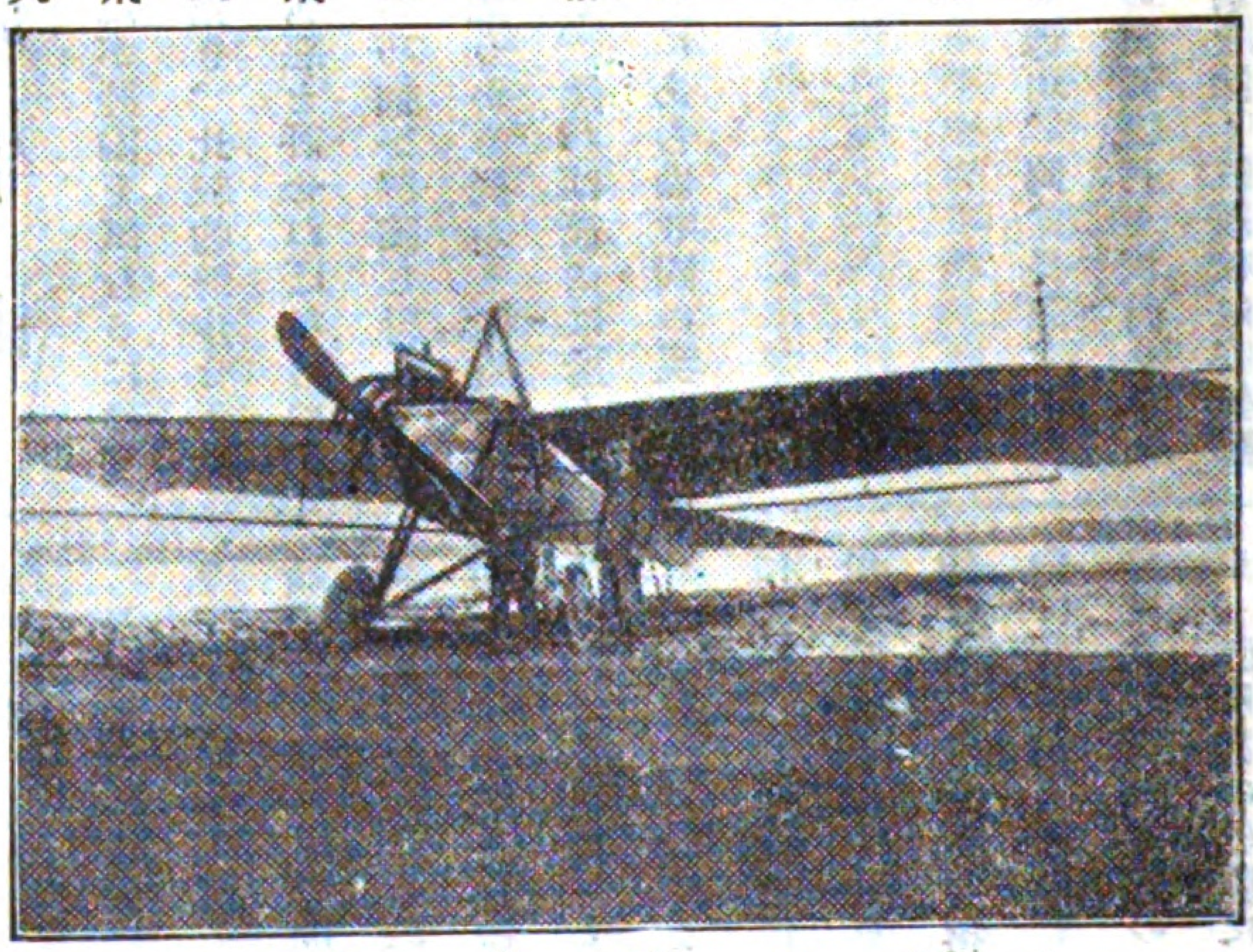
勇敢飛行家としては武田少尉を推すに躊躇せぬ、少尉は少壯氣鋭の人で、却々勇敢な飛行を遣る、宇都宮への野外飛行を始め帝都訪問飛行も度々行つて居る、昨秋の大演習に統監部附として頻りに偵察飛行を遣つたが、一日强風中名古屋近郊を飛行して居ると俄然突風に見舞はれ六百米突の高處で飛行機は逆立となり百米突餘も急轉直下の勢で墜落し、非常の危難に遭遇したが尙ほ平然として機の平衡を保たしむ可く死力を盡し漸くの事に機は常態に復したので、更らに勇を鼓して偵察飛行を行ひ無事根據地に引き上げ、呵々大笑した泰然たるが如きは勇敢なる少尉にして始めて見る所である。

（三）　不振の民間飛行界

陸軍の飛行家としては以上の六將校しかないのは心細い限りである、固より第二期の飛行將校として佐藤、重松、内藤、眞壁、山本、井上の六中尉、伊藤、小關、中澤の三少尉があつて、最早野外飛行を遣り得るの技倆を有して居るけれど、更らに飛行界の當局者は今後將校以外下士卒よりも飛行家を募り、多數飛行家の養成を試みねばならぬ、飛行隊の設置可なれども飛行家を多く養成することを念頭に置かぬ飛行隊であつたなれば、何等の效果もないのである。

以上陸軍を主として述べたが、海軍飛行界も却々勇士揃ひである。

梅北、金子兩少佐、河野、井上、中島、山田、和田の各大尉は孰れも歐米に飛行術を學び、決して陸軍に劣らぬ快腕を有して居る、其他足立、難波の二中尉あつて痛快な飛行を東京灣内に行つて居る、只だ常に最も不振を極めて居るのは民間飛行界で、僅かに帝國飛行協會の磯部少佐が最近獨逸に飛行術を習ひ、快速ルンプラーの操縱を會得し歸朝早々帝都の空に勇姿を現はし、默々たる少佐不言實行を以て大に民間飛行界の爲め氣焔を吐いて居るの一事があるのみで、其他佛蘭西仕込の滋野男、米國仕込の數氏があるけれども一向花々しい飛行振を見せぬ、一時雨後の筍の如に起つた自稱飛行家も最早其姿を消して都筑、奈良原の二三氏が捲土重來を期して居る位ゐて、全くお話にもならない、要するに我飛行界は少數優秀な飛行家はあるけれども、其幼稚なる事到底歐米列國とは比較にもならない、夫れと言ふのも我飛行界は歐米に學ぶに急にして、新發明、新工夫を行ふの餘裕がないのである、否陸軍でも海軍でも、少ない經費で操縱術から始め未だ機械の上に充分の力を注ぐ時期に達して居ないのである、けれども飛行機は決して現在の樣な不完全なもので終りを告げるものではない、將來必ず現在の型體を一新した飛行機が現はれ、軍事上實用上絶大の効果を致するものと確信する、現在の飛行機でも演習位に用ひ好晴の空一二時間の航空で軍行動の概要は偵察し得らるるが、實戰となつては左樣に容易のものでない、風雨、夜間には飛行不能なる上、些少の故障にても墜落するに至つては、實戰上の價値に疑が生じる、殊に海軍に至つては偵察の區域非常に大にして長時間の飛行に堪へなければならぬ、少くとも八九時間位は繼續飛行を遣らねばならぬ、併し現在の飛行機は不完全で、無價値であると斷言するのではない、幾何かの効果は在るが更らに將來非常に完備したものになることを斷言するのである、故に前途尚ほ遼遠な此飛行機に對しては、決して等閑に附する事なく官民共に極力研究の歩を進むると共に多數飛行家の現はるゝ樣力む可きである。



（ルンプラー）

△我が飛行技術と世界最近の飛行技術

國民新聞記者　船橋半山

我國現在の飛行家に就いて評論せよと云ふ。之が評論を試むるには、皆無の有樣にある民間飛行家に就いては暫く措き、比較的進歩せる陸海軍の各飛行家に就いて其の巧拙を論じ其の善惡を評せねばならぬ。私は人其の人の善惡を評する以外、果して其の巧拙を評論し得らるゝ迄に現在我國の飛行家技術が發達して居るか否らうかを疑ふと同時に今之を云爲するの甚だ酷なる事を思ふものである。然れば玆には驚く可き世界飛行界最近の進歩を擧げて、評論の限りにあらぬ我國の現狀を比較研究するに止めたい。

（一）

去月二日以降我が陸軍の所澤飛行場に於ては、德川、岡、長澤、澤田阪元、武田の六飛行將校をして、所謂關東平野の縱斷飛行を決行せしめ高崎、水戶、宇都宮の各都市を訪問し、長澤中尉を除く五將校は、無事此の壯擧を仕遂げて多大の名聲を馳せ、我國に於ける野外飛行に一新記錄を作つた。之を明治四十三年十二月佛蘭西歸りの德川大尉が霜白き代々木の練兵場にヘンリー、ファルマンを駆つて、七十米突の高度を以て約二千米突の飛行を爲し、邦人最初の空中飛行家として空前の大喝采を博した時代から見ると、頗ろ長足の進歩をしたやうであるが、歐米諸國最近斯界の發達に較べると、百哩や其所等の野外飛行などは物の數でも無く、是麽事で大騷ぎをせねばならぬ我が飛行界は未だ〻〻幼稚と謂はなければならぬ。

最近の海外電報によると瑞典の飛行家パルメリン氏は、雪峰モン、ブランを苦も無く越えて偉名を馳せ、インゴルト氏は一氣に十六時間の連續飛行を試みて時間のレコードを作り、又長距離飛行には記錄破りの大飛行家が續出する結果、其の賞金は皆無の有樣となつたと謂はれて居る顧みれば關東平野縱斷飛行中最も遠距離なりといふ所澤水戶間百三十基米突の野外飛行杯も、之等に較べては眞に兒戲に等しい事である。

又最近の統計によると、佛蘭西の軍用飛行機は無慮四百五十臺の多きに及び、露西亞之に亞ぎ二百五十臺、獨逸百五十二臺、英吉利百一臺、伊太利百臺の多數を示し、飛行機關の設備に至つては獨逸を以て最も完備せられて居ると稱せられて居る。玆に於てか佛蘭西は今回新に陸軍省内に航空局を創設し、航空兵を以て一兵種とするの議起り、飛行機の製作は其の發達と其の統一を計る爲めに、國家の事業とせねばならぬと論じ、既に其の計劃に着手したとの事である。

又倫敦電報の報ずる所によれば、英國の陸軍大臣は、其の議會に於て『飛行機關の完備せざる陸軍は其の運命や知るべき而已』と壯語し、本年度中に新に五十臺の飛行機を完成すべしと言明し、二百萬圓の追加豫算

を計上し、一方海軍大臣は自ら飛行家たらんと豪語し、議會に對しては新に八個の航空船を建造せんと言ひ、之が格納庫の建築費を合して五百萬圓の豫算を提出したとの事である。

列國航空界の現狀は斯くの如く旺盛であるが、翻つて我邦の現狀を見ると、陸軍の航空機研究費は本年度から二十萬圓の増額をした結果、漸く五十萬圓となつたが、併も此の資金の殆ど全部は研究奬勵の方面には用ゐられずして機械の購入に投せられ、之を以て本年中に本邦式飛行機十三臺を所澤に於て製作し、外國よりは三臺の新飛行機と本邦式飛行機に要する十三臺の發動機を購入する事になつて居る。そこで我が陸軍は此の十六臺の新飛行機に現在の十二臺を合して、本年末に及び始めて二十八臺の飛行機と一個の飛行船（二個あれど内一個は使用に堪へず）とを有する事となり、海軍の本年末迄に完成せんと言明せる三十臺の飛行機を合するも猶且六十臺の少數を超ゆる事が出來ないのである。

次ぎに民間飛行界の趨勢を見るに、我國では帝國飛行協會の磯邊氏が去月十日ルンプラーに搭じて帝都訪問飛行を決行し、我が民間飛行家にして野外飛行に斯くの如く成功したる者は氏一人のみと喧傳せられたが、列國のそれを見ると直に想像も及ばぬ進歩を示し、本年の夏迄にカーチスとアットウッド水上飛行機は、大西洋の横斷飛行を決行すると傳へられ、今や之が準備中なるアットウッド氏は大西洋一千六百哩の航程を踏破するには二十五時間を要すと云ひ、又來年五月桑港で開かるゝ大博覽會では、其の記念事業として世界一周の大飛行競爭を行ふ事を發表して居る位である。嗚呼何ぞ其の企圖の壯大なる、宛然夢のやうな話ではないか。以下少しく此の夢の如き世界の記錄を辿つて、聊か我國のそれに論及しやうと思ふ。

（二）

列國の記錄と我が國のそれとを比較する前に、吾人は一言我國の爲めに辯護する事柄がある。それは大陸の地勢と島國の地勢との相異である。氣候の飛行に及ぼす影響である。上層氣流觀測の不設備である。沃野千里などいふ文字は我國の辭典にこそあれ、果して斯る大平原が何處にある、到る所山脈起伏し、河川流れ、氣流の變化亦著しく、併も之が觀測の設備は皆無である。如何に我が飛行家が剛腕にして巧妙なればとて、諸外國のそれの如き大飛行は出來ぬのである。加之、列國では萬金を擲げて新記錄を作らん事を奬勵し、之を以て一種の誇りともし、飛行技能の發達をも計つて居るが、我が國では常に練習の爲めにのみ飛行し、敢て大記錄を作つて他に誇らんとするが如き事は寸毫も無いのである。從つて未だ完全なる記錄も無く、之を以て彼に比する事は出來ないのである。然るに吾人が猶且列國の記錄を辿らんとするのは、その餘りに彼我の相違の甚しきによるからである。

飛行機の記錄を語るには、速度と高度と時間と距離とを明かにし、其の複葉なると單葉なるとを區別し、翼の幅員、機體の重量、發動機の馬力及び風速風向氣温濕度並に搭乘人員等をも知悉する必要がある。併し

並には速度、高度、距離、時間等に就いて略述し、併せて我が國のそれと比較して見やうと思ふ。

速度の記錄は千九百十一年ゴールドン・ベネット賞盃飛行競爭の際ダラハム、ホワイト氏が一時間六十二哩のレコードを作つたが、同年秋米人ウエーマンはニユーポール式に搭じて一時間七十八哩のレコードを作つた。然るに翌十二年には佛人ヴエドリンは市俄古に於てノーム百四十馬力の發動機を有するデペルヂユッサンを驅つて一時間百五哩半を飛翔し、昨年九月ライムで行はれたベネット競爭ではプレヴオー氏はデ式飛行機で一時間百二十四哩半の新レコードを作つた。此の發動機はノームの百六十馬力のものであつた。之を我國に見ると海軍のモ式カ式は共に五十乃至六十哩の速度しか無く、過般帆船の檣に翼を衝突せしめたデ式も一時間八十哩を出てす、陸軍の徳川式等に至つては秒速二十二米突に過ぎないのである。而して今日までに吾人の記憶する所によると、百馬力のノームの發動機を有するニユーポールは昨夏東京を訪問し、秒速三十一乃至二米突の記錄を殘し、七十五馬力グノー發動機を有するモ式第五號は去月十日岡中尉によりて水戸所澤間を一時間五分にして飛翔し絶大の快速と賞せられた位に過ぎない。

現在ニユーポール、デペルヂユッサン等の單葉飛行機は其の快速なる事に於て世界に雄飛して居るが、長距離の飛行と時間の記錄に於ては複葉のそれには敵はない。即一昨年九月佛人フオルニーはフアルマンに搭じて十三時間十七分五十三秒二の長時間連續飛行を試み、六百二十七哩七七を飛翔して新記錄を作つたかと思ふと、昨年四月シヤムベル氏は此のレコードを破り、最近獨逸のインゴルト氏は十六時間の大飛行を敢行し、アツトウツド氏は廿五時間を以て大西洋を横斷すべしと豪語して居る。所が我國では昨年六月澤田中尉が所澤を發して東京灣に出で淀橋に引返して再び品川沖を見舞ひ、本所深川の空を掠めて鴻臺に着陸した前後二時間の連續飛行を以て、本邦最初の大飛行とし、翌七月海軍の金子大尉(其の當時)河野大尉が追濱より千葉、富津、本牧、鎌倉を經て飛行場に歸航した二時間五分の飛行を第二とし、本年に入りては去月二十日坂元中尉が高崎よりの歸途二時間の大飛行を試み、十三日澤田中尉が宇都宮よりの歸途東京に迂廻し一時間五十五分にして所澤に歸着したのを以て最大記錄とせねばならぬのである。

又高サの記錄に於ては千九百十二年六月獨人フオン・ブラスクは百廿馬力のローナー式複葉に全乗者二名を擁して一萬一千七百四十呎の高所に達し。ガロスはブレリオ式に搭じて一萬六千二百四十呎を昇り、續いて佛人ルガノーは一萬八千七百六十一呎の高空に昇騰したが、昨年三月ペリヨンは百六十馬力ノーム發動機を有するブレリオに乗じて、旋廻又旋廻遂に一萬九千二百八十六呎の高所に舞上り、一時に盛名を轟かした然るに此の驚く可きレコードは昨年十二月又もガルノーによつて破られ、氏はよく二萬二百九十五呎の高空に達して世界の記錄を作つたのである。之を我が國の昨年六月鴻臺に於ける澤田中尉の一千二百米突、本年一月四日宮城の天一千二百米突の高所に初飛行を試みた記錄に比べる

と實に霄壤も啻らぬ次第である。

論時節柄野州飛行の記錄を見ると、昨年佛人ブランデ・マリネーは巴里より露國のワルシャウ迄九百三十三哩の長距離を中途伯林に降下せしのみで飛行し、ヂルベールは巴里郊外ヴィラクブレー飛行場よりポメラニアのヴェルトニッツ迄六百五十哩を一氣に飛行して世人を驚愕せしめたが、我が關東平野横斷の飛行などは、彼の地にあつては實に小飛行家の茶飯事に過ぎないのである。

（三）

以上列國と我國との記錄を對比したが、吾人は之を以て直に本邦飛行家の技術をまで甚く劣れりとは斷ずる事は出來ぬ。

我國飛行家の先達日野少佐（當時大尉）の如きは其の當時さへ實に巧妙なるものであつた。日々時間に距離に高度に德川大尉と相競ひ相爭ふて居た頃の少佐の手腕は決して平凡では無かつたのである。少佐は飛行機の發達を計るには發動機の研究が大切であると稱し、遂に日野式發動機を發明した位である。又德川大尉も德川式飛行機を完成し、今や教官として益々其の技能を發揮し、盛んに後進を被導して居る。少佐は其の後或る事情の下に一昨年我が飛行界を去つたが、大尉の下には佛蘭西歸りの長澤、澤田の兩飛行家があり、長澤中尉は細心にして巧妙、澤田中尉は放膽にして圓熟、共に德川大尉の兩腕となり、此の外岡、坂元、武田の三飛行家は日本仕込でこそあれ、決して他に讓らぬ丈けの手腕と自信とを有つて居る。又海軍側では梅北、金子、河野、井上、和田、中島等多士濟々、其の追濱飛行場に於ける練習を開始したのは大正元年の十月であつたが、技術の進歩に至つては實に目覺しいものがあり、翌十一月の大觀艦式には既に横濱沖に飛來して、數哩に亙る艦列の間を自由自在に翱翔し、爾來益々圓熟を極めて、或は帝都を訪問し、或は六方野の原を見舞ひ、をさ〳〵陸軍にも負けぬ意氣を示して居る。之等巧妙なる各飛行家をして金力の制裁を受けず、又官邊の拘束に累らず、一つに列國と競爭的の態度を以て、各種の飛行を試み、各種のレコードを作らしむれば、氣候と地勢の許す限り、より偉大なる記錄を作り得らるゝ事を斷言し、本邦飛行界の不振は飛行家の技能に非ずして、政府並に國民の覺醒せざるに因ると斷定し、聊か陸海軍の飛行家に敬意を表し、最後に各國軍用飛行機の發達を記して此の稿を終らうと思ふ。

元來飛行機が今日の如き長足の進歩をした所以は、其の實用的眞價を認められた以來の事で、若し飛行機が軍用としての保護奬勵を受けなかつたならば、決して今日の盛況を見る事は出來なかつたであらう。之は列國本年度の新造飛行機の九割九分迄が軍用である事實に徴しても明白な事である。

軍用飛行機の効用は、第一に敵狀の偵察である。今や騎兵斥候は殆ど古武士が昔語りに止まり、平常の演習等には縱横無盡に飛行機を使用し佛蘭西の一將軍は演習後『自分は飛行機偵察の御蔭で味方の事情よりも寧ろ敵軍の動靜を明白に知り得たり』と嗟嘆した程で、我國に於ても昨

秋濃尾の陸軍特別大演習に際し、兩軍に二臺の飛行機を使用せしめ、十二分の効果を擧げて居るのである。斯く飛行機偵察の効果が偉大なる事を認めた丈け、列國は競つて之が豫防と攻擊の方法を研究し、今日では飛行機は少くも一千米突以上の高空を飛翔せされは、忽ち小銃又は機關銃の攻擊に逢ふ怖れありと斷定し、現に一昨年巴爾幹戰爭中一飛行機は一千米突の高所を飛行中敵彈を受けた實例がある。

玆に於てか軍用飛行機には如何にしても武裝するの必要が起り、米國の陸軍では其の機體を蔽ふに薄い鋼鈑を以てするに至つたが、我國では未だ〻此の設備は施されないのである。之は地から空への攻擊を防禦する裝置であるが、列國は數年前より空から土地を攻擊する事を考案し機體に特別裝置を施して爆彈投下の術を練磨して居るのである。其の名手として米國のスコット中尉等は百發百中の名を恣にして居るが、我が陸軍では昨年末モ式第四號に此の裝置をしたのみで、之が演習は未だ實施されない程である。此の外地から空、空から地への攻防方法は續々發明せられ飛行機射擊用の大砲機關銃なども各國共に完成に近いものがあると誇つて居るが、我國に於ても帝國大學の大河內博士は射距離二里に及ぶ飛行機射擊用の大砲を發明し、砲兵工廠に於ても櫻井大尉主任の下に營々として其の完成を期し、又海軍は之を呉工廠に於て製造し、去秋玄海沖の大演習に、試射して成績好良なりと稱して居るが、其の果して列國のそれより優越して居るか怎うかは疑問である。

然して地から空、空から地への攻防方法に次いで攻究せられたのは、空と空との攻擊法である。歐洲に於ては既に種々此の研究を積んだ結果飛行機上に機關銃を据え付けて居るが、本邦では未だ此の企ては無く、目下之が研究中である。

斯く數へ來らば內外飛行技術の比較研究は殆ど其の盡くる所を知らぬが、要するに飛行機の進步の急速なるは飛行機其れ自身の疾きよりも疾しと佛國の一飛行家が云つた一語に盡き、列國の此の大進步に常に遠く及ばざる我國の現狀を三嘆し、以て世を擧げて覺醒するの期を俟つ次第である。

△西洋仕込と日本仕込

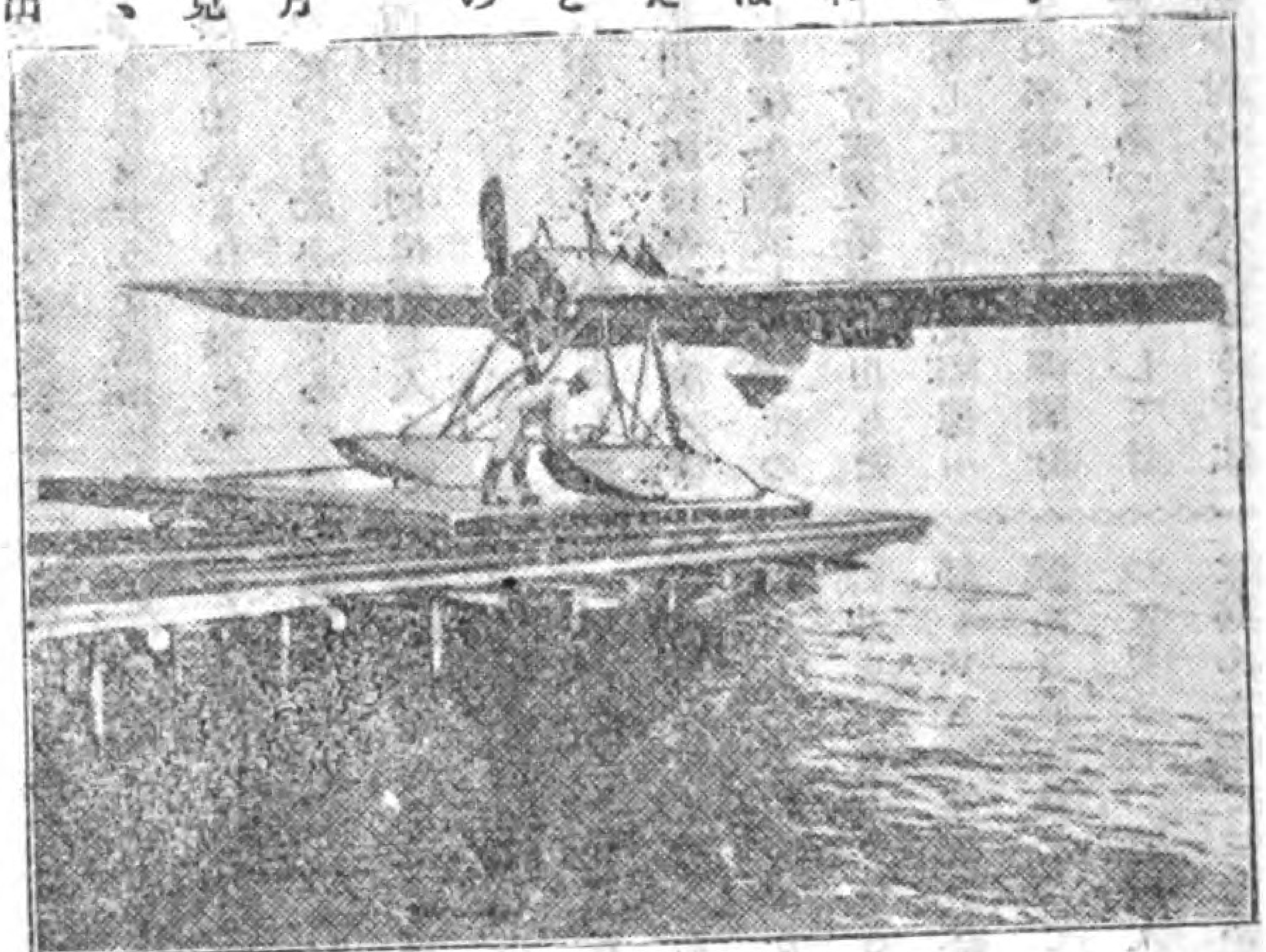
都新聞記者　倉富砂邱

○三月一日の晩だ、關東平野横斷飛行の特派員として、高崎から引續き水戶と宇都宮とに出張を命ぜられて、今やつと其の任務を終つた處である。此の飛行將校は高崎で德川大尉と坂元中尉、水戶では長澤中尉と岡中尉、最後は武田少尉と澤田中尉であつた。偶然ださうだが、この二人づゝが、一人は西洋仕込の飛行將校で、一人は日本仕込の飛行將校である。これが同じ日に、又は一日違ひで、同じ場處に來たのだから、考へやうによつては隨分と面白い問題も生じて來さうだ。

○好く「是は舶來品です」とか、上等舶來だとか云ふことを聞かされた

時代があつた。今でも巴里製だとか、獨逸製だとか云つて、自慢する人がある。和製だといふと、下等なお粗末なものと思はれて、何だか肩身が狹くなるやうな傾向がある。勿論文明の土俵に於て、些か立遲れをした日本のことだから、西洋とは相撲にならぬ點もあつた。現に相撲にならぬこともある。然し明治何年とか、十何年とか云ふ頃の相撲と、今日の相撲とは、その力量に於て大いに異つてゐる。相當の力が出來てからは、少し位ゐ立遲れたからと云つて、まんざら相撲にならぬことはない筈である。鷄ではあるまいし、一度負けたからとて、一生涯負けるものと決めておくことはない。相撲になるかならぬかは、今では力の問題である。即ち時の問題である。

◎私が初めて飛行機を見たのは、四十三年十月末で、奈良原式第一號であつた。何が何だか見ても分らず、聞いても分らず隨分と面喰つたが、新聞記者の有難いことには、自分にも理解の出來ないことを立派に書いて紙面を飾つた。間もなく日野、徳川兩大尉が佛國から歸朝して、同年十二月に代々木で飛行をやると云ふ段になつて私は慌てゝ何か本がありさうなものだと、中西屋から丸善へ行つて探し廻つた結果、やつとのことでハウ、ツウ何々と云ふ赤表紙の飛行機の製作法を書いた本を手に入れた。是は海軍の何とか大尉が注文したのを、本屋で二册取寄せた中の一册だと云つてゐた。私は鬼の首でも取つたやうに喜んで早速讀んで見た。好くは分らなかつたが、それでも大體の概念だけは捕へた。此道の人の話しも大抵は理解の出來るやうな氣がして來た。斯うして心私かに得意がつて、每朝五時頃から霜柱を踏崩して、今日は飛ぶか／＼と待構へてゐたが、一向に飛びさうでない。發動機が動かない。甚だ失敬なことを申すが、其頃は碌々發動機の取扱ひ方が分らぬ人が多かつたらしい。たま／＼滑走でもすると、立派な金星の附いた將軍達が「仲々大したもんですな、成程速いもんだ」と云つて、頗る感心してゐた。飛行機が地上を走つたからと云つて、少しも大したことではない。地上で驅けつくらなら、自動車の方が餘程早い。然し今度も滑稽なことを聞かされた。高崎で某將校が兵卒の煙草を喫つてゐるのを叱つて曰く「飛行機が來ると云ふ間際に煙草を喫むとは何事だ、飛行機に煙草は大の禁物ぢや、誰か燐寸を隱しに入れてるだらう、早く捨てゝ了へ、何時飛行機に火が附いて爆發するか分らない」とさ。


（デ式水上）

◎代々木では、爪の垢位ゐ飛行機のことを知つてゐるものは、滑走する

機體を透して見て、今のは浮いたとか、いやジャムプしたのだとか云つて議論をしてゐる人があつた。然し其れから丁度一週間目に、先づ徳川大尉のフアルマン式が三百米突位ゐの高さで場内を二周し、續いて日野大尉のグラーデー式が直線飛行をなした。立派な人達が此日初めて、飛行機は成程地上を走る許りでなく、旨く行くと空を翔るものだと云ふことを知つて、豫期してはゐたが、而も不思議な夢を見るやうな氣がしたらしい。此時多くの人の讃め方が、二人とも西洋で仕込まれて來たから偉いのだ、西洋人の發明した飛行機だから飛ぶのだ、と云ふ風であつた飛んだ人の技倆に感じ入つた分量の中に、大分西洋の文明に感じ入る部分が交つてゐたやうだ。

○日野大尉は自分の飛行機や發動機を拵へかけたが、これも半ばにして飛行界を去らねばならぬやうになつたが、一方徳川大尉は益技を磨き研究を積んで、專ら飛行術の教官として新進の飛行將校を養成した。その練習には西洋人の發明した飛行機でなく、主として會式複葉を使用した會式とは當局者の言葉であつて、私共は徳川式と稱してゐる。實際徳川大尉の考案になつたもので、昨年六月に第一期生の卒業飛行を所澤關府臺間に行つた時も、この徳川式を用ふるといふ條件であつた。そして目出度く卒業した人が、岡、坂元の兩中尉と、武田少尉の三人である。此の少し前に長澤中尉と澤田中尉とが佛國から歸つて來た。これに教官徳川大尉を加へて目下は六人の飛行將校がゐる譯で、此中の三人が西洋仕込で、三人が日本仕込である。尚ほ此外に貧弱なる我が民間飛行家の中に、西洋仕込の磯部鐵吉君と日本仕込の白戸榮之助君とがゐる。海軍の飛行將校は、殆ど全部を西洋仕込と見て好からう。

○代々木の原でジャムピングとフライングの議論があつた時代から、此の關東平野百何十基の横斷飛行の時期に入つたまでの間を想ふと、もどかしくもあつたし、現に未だもどかしくもあるが、矢張り私は嬉しくないことはない。勿論此間にも木村徳田武石三氏の犠牲もあつたが、先づ〳〵上層氣流の研究も出來ない島國の、山川湖沼によつて起る不規則な關東平野の氣流を乘切つて、難なく目的を達したことは、假令其れが西洋の記錄や企てに對しては問題にならぬまでも、喜ばしいことである。いくらかでも心強い氣がする。此の成功者の中の三人は、全く徳川大尉の手によつて、是れだけの飛行將校となつた人々である。是れで最早舶來品も和製も、そんなことは何らでも宜しいと云ふことになつた。立遲れはしたが相撲にならぬこともなからうと云ふ見込がついた。

○碁を打つのを見ると、其人の性格が分るが、飛行家の飛行振を見ると好く其人の性格が察しられる。徳川大尉は辛り切つてゐると思はれる程嚴格な眞面目な人である。近頃は井上交通兵旅團長もたまには戯談も云つて見るし、徳川大尉もニコ〳〵して話しをするやうになつたが、以前は其んな段ではなかつた。何は兎もあれ飛行界が今日の發展――其程度や速度には議論もあらうが――をした中に、徳川大尉の功績が餘程含まれてゐることは爭へない事實である。此の嚴格な眞面目な大尉の飛行振は、鋭敏な注意が八方に行屆くといふ點に於て、天下獨特である。徳川

大尉は乘る前に、自分で針金の一本々々から用意周到に檢べる。坐乘席に就てからも、それ〴〵の舵を一々引いて見て、調子の狂つてゐる處はないかと、細々と檢べてからでないと出發しない。一旦空中の人となるや、發動機の音響　是が最も大切である——風速風向に充分の注意を拂ひつゝ、極めて小さく上舵を引いて、徐々として確實に機首を上へ向ける遣り、何とも云へぬ好い氣持がする。此人となら、朝鮮までゞも滿洲までゞも同乘して、怖いことはないと云ふやうな氣が起る。

◎飛行中は常に萬一の場合の着陸地點を探しつゝ進むやうに教へられてゐる。然し飛行家自身にとつては、吾々が想ふ程怖いものと思つてゐない。天候でも良くて、發動機の工合が好ければ、無闇と空中旅行が面白くなつて、つひ〳〵豫定の航路を變更したり迂回したりして、遊び廻ることがある。是を私共では脫線飛行と稱する。而して脫線飛行の達人としては澤田中尉を第一に、坂元中尉を第二に推さねばならぬ。井上旅團長曰く「あいらに勝手に飛ばせてろと、何處まで迷ひ歩くか分らんからな」と。澤田中尉は好んで人をヒヤ〳〵させる飛行をやる。殆ど曲乘に近い離れ術を平氣で演ずる。際どい傾斜飛行や、危險極まる低空飛行や急角度の回轉飛行や、又は四五百米突の高空から地面摺れ〳〵になるまでの程度で、逆落しの藝當を演ずる。それも只ヒヤ〳〵させる許りでなく、水際立つて巧妙である。長澤中尉も何かの拍子に斯んなことをしたことがあつたが、澤田中尉程過激でない。長澤中尉は大膽なことや冒險的なことを避けて、何でも樂々と飛行をする處に此人の特徵が現はれてゐる。澤田中尉は何でも餘り氣にかけぬ、江戸兒式さつぱりした人である。長澤中尉は寫眞に撮られるのを嫌つて、新聞社の寫眞係は隨分と骨を折らされたものである。

◎其處に來ると、徳川大尉に仕込まれた飛行將校は多く着實である。武田少尉は一番の年少者で、快活な無邪氣な人であるが、日本仕込の中では、一番突飛な飛行をする人である。今の梅北海軍少佐が、未だ西洋へ行かない前、大尉として所澤に來てゐた頃は、亂暴飛行の大將と云はれてゐた。肩を張つて歩く姿を見ると喧嘩でもしさうだが、實は親切な交際家である。只飛行機に乘ると、親の仇でも討つかのやうに無茶をやる。四十四年の秋だつたが、ブレリオ式で滑走の練習をしてゐる中、ふと飛ばせたくなつて急にグイと上舵を引いたので、機は行きなり殆ど直立するかの角度で飛上つた。さては奴本當に上つたなあと思つてゐる中に、何時か五六十米突も進んでゐて、眼の前の格納庫の屋根に打突けて墜落した。したゝか腰や手を挫つて湯河原へ轉地したことがある。大尉自身も自分の亂暴飛行に呆れて「僕のは無茶ですからね」武田少尉は眞逆に斯んな無法なことはしない。私は是を信長流の飛行といひたい。即ち飛ばざれば飛ばして見せうと云ふ行き方である。

◎岡中尉は頗るヤンチヤ者である。駄々を捏ねる。意見が合はぬと誰彼の差別なく爭ふ。自らの氣が向かねば飛行もやらぬ。行きかけてゐても途中から引返して了ふ。「斯んな時に飛行が出來るもんか」と云つて、誰が何と云つても動かない。外の人が途中で工合が惡いと下降する代り

に岡中尉は目的地に行けぬと思ふと、斷然引返して了ふ、これを岡中尉の逆戻り飛行と云ふ。坂元中尉は面白い好い人である。非常に友情に厚い人で、彼の木村中尉とは唯一の親友であつたゞけ、昨年の三月に墜落して亡くなつた時などは、食事も出來ぬ程に落膽したと云ふことである。酒でも飲むと大いに氣焰も昂る。自分の思ふやうな飛行が出來ると、子供のやうに調子を下して喜ぶ人である。

◎徳川大尉に仕込まれた人に白戸君がゐる。今でこそ奈良原三次君に殉死した形であるが、技倆に於ては立派なものである。もと中野で徳川大尉の部下であつたゞけ、特に可愛がられて飛行術も熱心に教へられた。白戸君と奈良原君とは、小さなラタムとアントアネットとの關係であつて、白戸君は奈良原式によつて知られ、奈良原式は白戸君によつて飛行の能力を證明された。白戸君は正直な、謂はゞ生一本の地方人である。發理も想も好く辨へてゐる人である。奈良原君さへ確乎してゐれば、今までに立派な民間飛行家として名を成した人である。航空協會の磯部君は、政治家と云つた肌合の飛行家である。少佐として海軍にゐた頃から水上飛行機と特殊の發動機の發明とに、一時は少し變だと噂されたまで熱中した。今度西洋仕込の飛行家となつて、突然ルムプラー式で帝都訪問などをやつて、一寸其道の人を驚かした。今日では全く民間唯一の飛行家である。何卒自重して貰ひたい。

○空飛ぶことは何と云つても生命賭である。隨つて擔ぐやうなことが起る。西洋では金曜日を厄日としてゐる。日本では八の日が嫌はれる。馬鹿氣てゐるけれども妙な事實がある。八の日には好く事故が起る。三月廿八日に本邦第一回の犠牲者木村徳田の兩中尉を出してから、十八日とか八日とかには、大きいか小さいか、殆ど定つたことのやうに何かの事故がある。獨逸の何とか云ふ博士は、航空中に於ける心理狀態に就て研究中と云ふことだが、何か厄日が厄日を作るやうなことがあるらしい。

今の處發動機は飛行の生命である。海軍ではエンジニヤーを作るに好都合であるが、陸軍では專門の知識をもつてゐる人がないと云つて好い。今後の問題は專門の發動機技師を養成することである。本當に軍用とする氣なら、是は極めて重大な問題である。今の日本はノーム式など修繕すら出來ない始末である。これを思ふと誠に心細い。是は到底西洋とは相撲にならぬ。和製で間に合はねば仕方がないから一日も早く西洋仕込の發動機技師を養成したいものである（十三日宇都宮の旅舍に於て飛行通信を終りて）

△熱誠の人磯部少佐

中央新聞記者　山口長夫

■三月十日の午前十一時磯部少佐のルムプラー式鳩號單葉飛行機は突如として帝都の高空に現はれた。

■帝都百萬の市民並に沿道五十八哩間の農夫達は其形宛然燕の如く一種

の調和ある爆音を立てゝ快速隼の如く大空を翔り行く此ル式飛行機の雄姿を仰いで先づ夫がル式飛行機である事を覺り次に其操縦者の磯部少佐である事を知り而て今更の如く昨冬獨逸から歸朝した帝國飛行協會の磯部少佐其人の事も願ひ出したのであつた。

■磯部少佐は今年一月初旬ル式の到着と共に所澤の飛行場に於て其空いて居る時を利用して今日までに五六回の練習飛行を行つた、併し其結果は吾人の期待した程で無く陸軍飛行家の或者の如きは氏の技倆を未熟と批評し世人の或者は『あの人は萬國飛行免狀を持つては居ないのだ』と云ふものもあつた。中には記者の友人なる某新聞記者の如きは恰も此大飛行の前日格納庫前でル式飛行機を修理しつゝある少佐に向つて『磯部さん、何些し貴下が上手になられたら是非一度同乘させて貰ひたいものです云々』と云つた者さへあつた。何些し上手になられたら——云つた者は思つて居た儘を何の氣なしに云ひ出したに過ぎなかつたろう。併し聽く氏に取つては恐らく骨にも徹する痛い侮辱とも受取れたかも知れぬ。此際傍に居合せた記者は此瞬間氏の面上に異様の電の掠め去つたのを朧かに認めたのである。

■勿論如上の世評や無遠慮な言辭の結果ては無かつたろうが兎に角此翌日は彼の大飛行となつて天晴民間飛行家の爲めに萬丈の氣を吐いたのであつた。恰も其日の午後記者は所澤からの上り列車内で偶然磯部氏と一緒になつた、日常寡默な少佐は此時も例に依て例の如く極めて朴訥な調子でポツ〳〵と語る『今日無斷で東京行きを遣つたので叱られる事でせう今協會に喚ばれて行く所です。今日の東京行きは不意に思ひ立つて行つたのですが初めての野外飛行なので方向も觀察も殆ど解らず氷の如な突風も感じない程に顔も心も熱して居る有様で寔に恥しい話です。併し私は拙手でも何でも介意ひません飽迄民間飛行家の一人として出來るだけの事を遣れば滿足です夫で若し出來るなら自由な練習飛行場を欲しいと思ひますが何を云ふにも金が先です云々』

■記者は此時斯く語る氏の稍昂奮した眼の中に微に涙の光るのを認めた蓋し此涙……氏自身に取つては種々の意味があるのであろう。併し乍ら記者は此時心窃かに氏が今回の大飛行が必ず氏の謂ふが如く『思ひ立つて』試みられたものとは思ふ事が出來なかつた。氏自身も云ふが如く練習不足其他の理由の爲め陸軍飛行將校の或人々の如く巧妙で無いかも知れぬ大膽で無いかも知れぬ。併し氏が所謂東京行を『思ひ立つた』大飛行は帝國の爲め民間飛行界の爲め飛行協會の爲將た一身の名譽の爲め彼の扇の的の那須與一の如く一死を期して決行したものに相違なく其瞬間を回顧しての涙では無かろうかと感じて悚然たらざるを得なかつたのである。

■帝國民間飛行界の唯一人たる磯部少佐は事實技倆の人で無いかも知れぬ、併し氏が今回の大飛行を決行するに至つた十數年の昔から一日の如く斯界の爲めに努力し佐世保に在つた時の如きグラデー式試驗飛行の爲め斷崖の上から海中に飛込んだ事や横須賀に在つた時は發動機の爲めに大負傷を蒙りつゝも磯部式海軍飛行機其他數種の發明を遂げて海軍の爲

めに多大の貢獻し遂には一意斯界に盡さん爲め現職を一擲して飛行協會を創設し拮据經營今日に至つた歴史を考ふれば假令氏が完全なる技術家亦業家發明家と稱する事は出來ぬ迄も吾人は氏の其熱誠と努力と奮鬪的精神に至つては實に滿腔の尊敬と祝福とを捧げざるを得ないのである。

磯部少佐は年齒漸く不惑に達せんとし益々技術家として立つの困難を感ずるかも知れぬ吾人は猶幼弱なる帝國航空界の爲め唯一人の民間飛行家たる氏の自重と健康とを切望するものである。

△海陸飛行將校

東京日々記者　吉田虚白

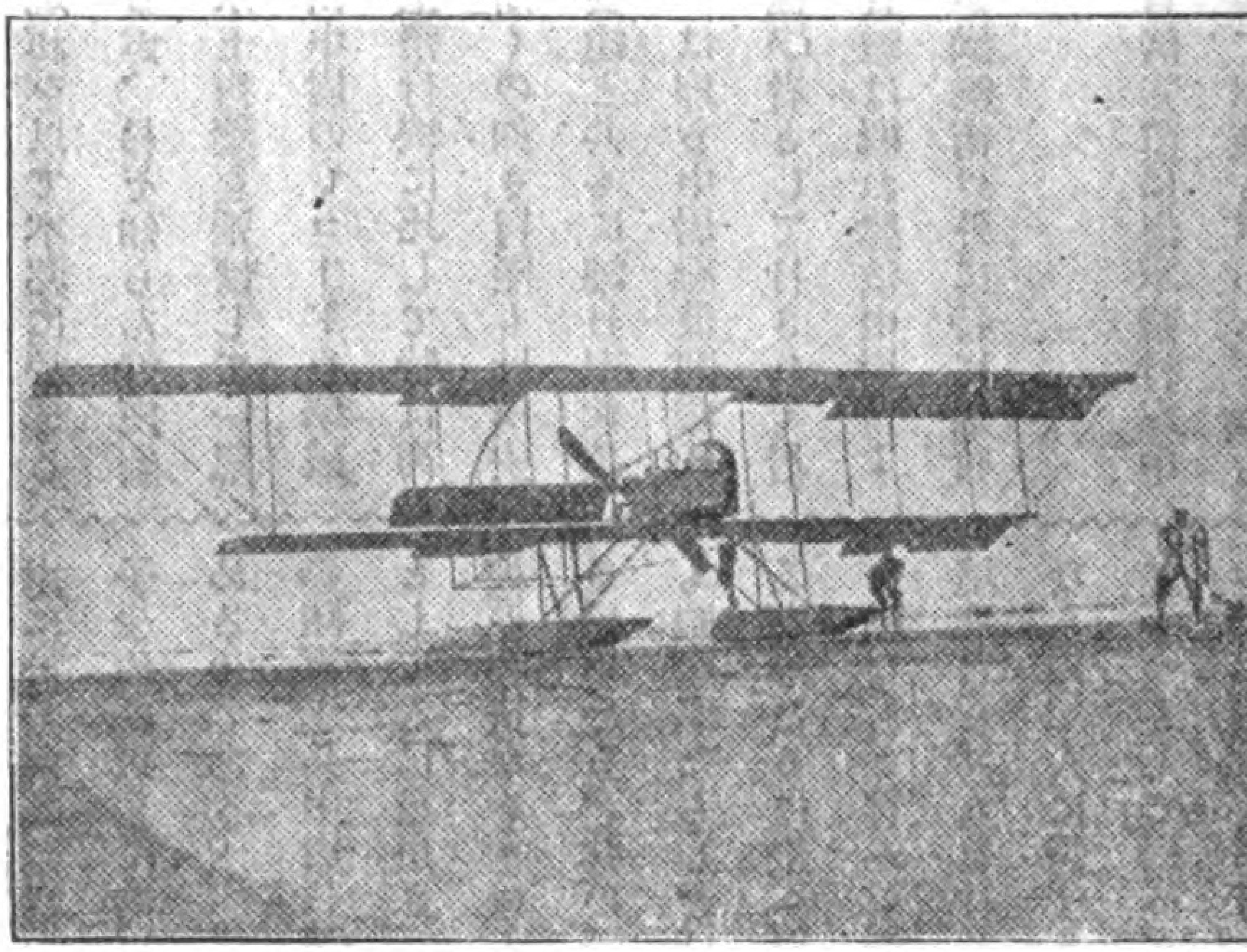
○陸に於ける徳川工兵大尉海に於ける金子少佐が本邦軍人飛行界に於ける双璧なるとは誰人と雖も之れを認むる所である、而して此の本邦飛行界に於ける兩元勳が其の生得的性格に於て著しき類似の點あるは眞に不思議なる現象である、徳川大尉が寡言力行よく帝國軍人の面目を保持して其の性行に一點の批難すべき點なきは誰人が之れに就て異議を挿むであらう、不圖したる不面目より遂に所澤を逐はれて今は福岡二十四聯隊に謫居し悽愴の陸軍飛行家として洽く世の同情を一身に集めたる歩兵少佐日野熊藏氏は實に本邦飛行界に於ける先覺者として始めて去る四十二年春に出張を命ぜられた際に徳川大尉は其副として渡歐を拜命したのであつた、當時に於ける日野少佐の使命は徳川大尉のそれよりは遙かに貴重であつたのであるが少佐が豪放不羈なる性格は遂に其の身を害して今日の如き失意の境に貶され其の副たりし徳川大尉は遂に隆々として旭日の東天に昇るが如く聲名を天下に博したのである。

◎海軍に於ける金子少佐が今や帝國海軍飛行界に於ける重鎭として又去る二月破格の拔擢を以て少佐に昇進したるが如きも亦其性行の謹嚴なるが爲めなるに外ならぬ、金子少佐も亦寡言力行を以て簡單に此の性格を評し得べき人である單に軍人としてのみならず飛行家として其温容、緻密、用意周到なる點に於て兩氏の性行著しく酷似したる點を發見する、又強て此の兩氏を飛行家としての缺點を擧ぐるならば輕快と言ふ點に於て共に缺けて居ると思ふ、追濱飛行場に於ける金子少佐は矢張り複葉の操縦者である、輕快にして敏捷なる單葉の操縦なる事が直覺される、所澤に於ける徳川大尉も亦必ず之れと同型なる事を斷言するに躊躇せぬ、而して此の兩者の性格に於て乖強なる比較し優劣を論ずる事は甚だしき潜越であるを免れぬが溫厚にして悠揚なる徳川大尉の胸底には亦必ずしも些少の小心翼々たる點がないでもない、名門に生れたる同大尉が嚴父の非行によつて遂に爵位を失ひたる一門の不名譽を如何にもして恢復せんとする大尉の努力の蔭には窺ひ知るべからざる苦衷が介在して居る、金子少佐が飽くまで襟度海の如く綽々として餘裕あるに比すれば徳川大尉が其の器に於て少しく金子少佐に及ばざる所あるを惟はねばならぬ。

◎世人よく予に向つて陸軍飛行家中傑出したる飛行家の誰人なるかを問

今と屢々である予は常に之れに對して徒らに評論するを避けて居るが唯だ予が心中竊かに惟ふ「歩兵中尉坂元守吉氏の如き名飛行家を有する本邦陸軍飛行界は眞に多幸である」と中尉が始めて第一期飛行術練習將校として所澤に來て以來既に二年に垂々として居るが操縦術の上に表はれたる坂元中尉の過失は勿論、少くとも飛行機を破壊し或は顛覆、墜落等の事變を未だ一回も起して居らぬ、昨年六月始めて所澤、市川間の野外横斷卒業飛行の擧行された際にも其往復の航路に於て一點批難すべきなく安全に遂行し得たのは獨り坂元中尉のみである、昨秋名古屋に於ける大演習に際し其第一日に於て東軍に配屬したる長澤、坂元兩中尉が歸航の途中强風に襲はれ中尉長澤は遂に機脚を折つたにも拘らず同一の着陸地と同一の風向風力、同一の機械等全く同一の條件の下に行はれたる坂元中尉の着陸は長澤中尉に勝る數等であり何等の故障をも發生しなかつた、而して斯くの如きは偶ま其人の幸運なるに過ぎざるが如く考へられるとは言へ、一方に於て必ずや坂元中尉が飛行家として最も優れたる資性の然らしむる結果でなければならぬ、尚ほ中尉が大演習第二日目に於ける部田、名古屋の夜間大飛行の如きば、本邦に於ける夜間飛行のレコードとして最も光輝あるものとしなければならぬ。

◎過去の飛行に於て表はれたる成績よりして所澤に於ける各飛行將校の月旦を試みるならば必ず先づ坂元中尉を白眉として推さねばならぬ、其の風丰の輕快なる、又謹厳にして軍人の特性を具備したる點に於て予は中尉の如き名飛行家は蓋し今後の陸軍に於ても決して多くを得難き人材である事を斷言するに躊躇しない、而して一方海軍飛行家中に於て强て此れと同型のものを求むるならば先づ中尉藤瀬勝氏を推すべきものであらうと思ふ、藤瀬中尉は海軍飛行家中に於ける唯一の腕白士官を以て許されて居る。全然日本仕込みなる事に於て陸軍の坂元と殆んど同一の位置に居る、其の操縦術に於て特別に傑出したる點もない代りに又それ程の缺點もない、素より坂元の手腕に比して數等下落するは爭へぬが、其輕快なる資性に於て特に酷似せる點がある、而して藤瀬坂元兩氏が共もに佐賀の出身なる事は眞に又偶然と言はねばならぬ、騎兵中尉岡楢之助氏が其出生京都にも似げなく豪傑肌を以て陸軍飛行家中に冠たるは萬人の認むる所であるが之れを海軍に求むれば即ち中尉安達東三郎氏である、酒の座敷に於ける岡中尉が、藝妓を蹴倒して之れに誇り、放屁一番罪なき惡戯をす



（モーリス水上）

る事は屢々であると同じく安達中尉が赤坂の柳巷に流連し旬日尚ほ酒に浸つて還るを忘るゝは極めて部内に膾炙された話題である。

◎昨年六月初旬陸軍の澤田中尉がモーリスフアルマン式複葉によつて四千呎の高空に昇つて本邦に於ける高度飛行のレコードを作つた事は誰人も知つて居るのみならず、今日尚ほ世人一般に之れを以て本邦に於ける高度レコードとして保持せるものと思惟して居るが、曷ぞ知らん好漢安達中尉は昨年十二月同じモーリスフアルマン式水上複葉を飛ばして一氣に千五百米突即ち約四千五百呎に上つて堂々澤田中尉のレコードを撃破して居る事を忘れてはならぬ、水上飛行機が陸上飛行機に比して特に高度飛行の困難を感ずるは今更ら言ふ迄もない、斯くの如き冒險も壯漢安達中尉にとつては眞に朝餐事のみである、廣瀬安達と共もに純日本仕込みの海軍飛行家中最も深く飛行機を研究したものは即ち中尉難波啤雄氏である、難波中尉は海軍操縦將校中唯一の飛行機學者として目されて居る、追濱の演習に於て無線電信、爆彈投下等の實驗は概ね難波中尉によつて試みられるのである、陸軍の中尉澤田秀氏が操縦術以外に特に飛行機の製作的技術を具備すると亦好一對である。

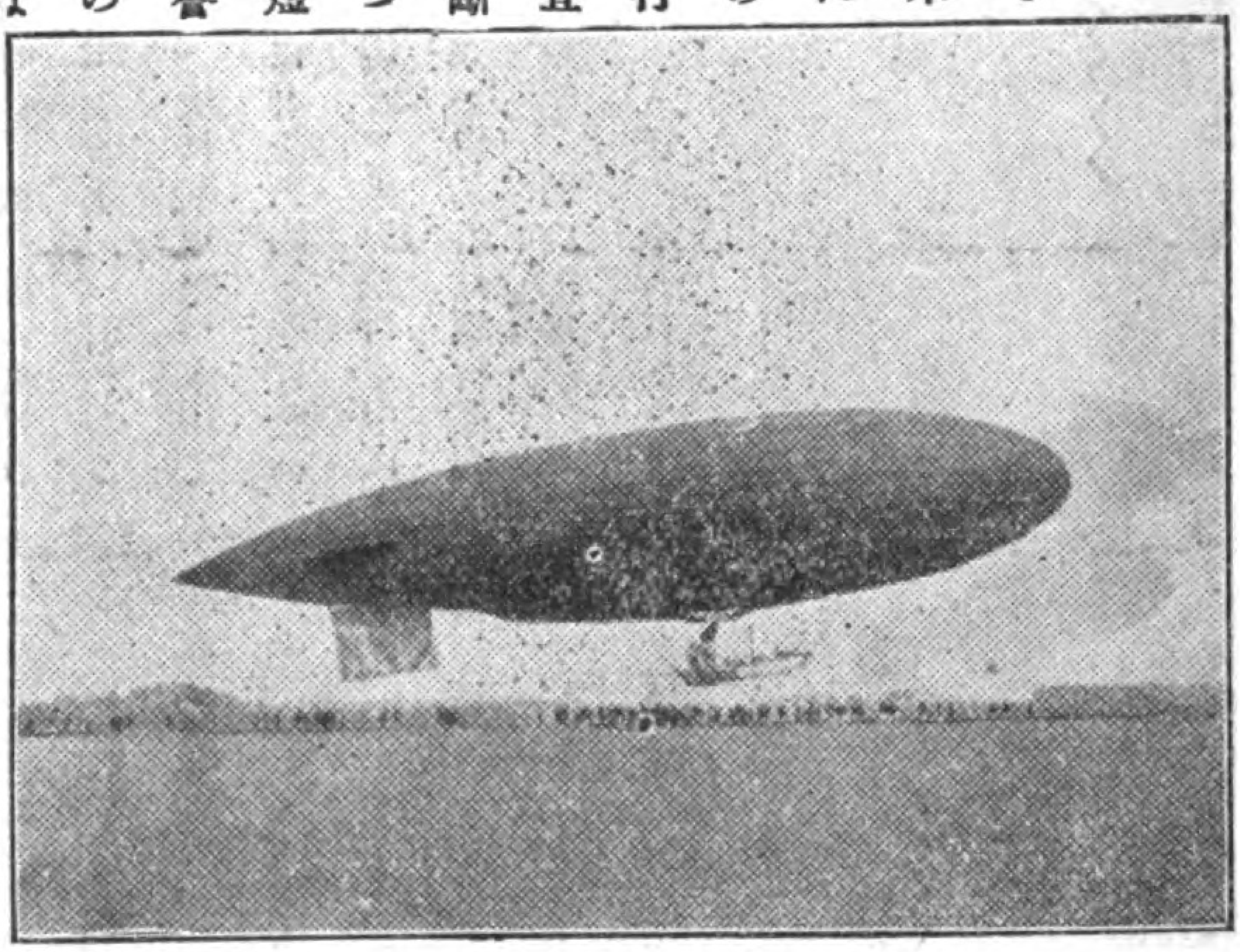
◎上州利根の山中に生れたる井上海軍大尉は眉目淸秀眞に海軍飛行家中に於ける美男子である、如才なき外交の手腕に於て亦蔑ろべからざるものがある、飛行家としての大尉の生命は其の輕快なる點あるのみ、若し夫れ敏捷と言ふ點に至つては蓋し山田大尉の右に出づるものは一人もない、縱令山田大尉が過去の飛行に於て最も失敗の經驗が多いとしてもそれは彼のカーチス式複葉の如き桅機の鋭敏なる飛行機の操縦としては誠に止むを得ないことである、山田大尉と共にカーチス式によつて操縦術を習得せる河野大尉は飛行家中稀れに見る豪傑肌の男である、唯だ餘りに細事に頓着しない爲めに大尉も亦可成り多くの失敗を重ねて居る、此處に於てか其飛行の堅實なる點に於て又其の資性の温大なる點に於て金子少佐は正さに海軍飛行界の重鎭であり又統卒者として十分の價値を認めるのである。

◎陸軍工兵中尉長澤賢次郎氏は所澤に於ける操縦將校中拔群の技倆ありとして大に重用され飛行將校中に何んとなく一種の權威を有して居る、彼の輕快なるニユーポール式單葉の如き恰かも長澤中尉一人の專用物たる感がある、其の體格の人並み勝れて短小なるが或は却つて氏をして最も飛行家たらしむに適當であつたかも知れぬが兎に角氏も亦本邦に於ける花形たるは爭へぬ併しながら其の性格に至つては殆んど一點の採るべき點なしと言ふを憚らぬ、氏は素と青森市の某陣屋に生れたのである、境遇自ら其人を作ると言ふが其の偏屈狭量なる點に於て殆んど御話しにならぬ、人に對するに辭を知らず、部下に對して統率の智謀なく常識など一つとして辨へざる男である氏が再度水戸所澤間の飛行に失敗したに就て操縦將校中何人と雖も此れに同情するものなきを見ても如何に氏の性格の偏狹なるかが解るのである。

△飛行界の人々

『東京朝日』記者 阿部康藏

本邦航空界中最も世人の注目を惹きつゝある物第一はに所澤中を心とせる陸軍飛行隊、第二に追濱を根據とせる海軍飛行隊で、民間に於ては帝國飛行協會の事業が近來稍々活氣を呈し來た位の物で其他は殆んど云ふに足りない。中にも所澤なる陸軍飛行場は東京に接近し、各種の新聞通信が完備して居るので、追濱の海軍飛行場に比し一層強く世人の視聽を聳動するの便宜を有して居る。故に此處では近く關東平野横斷の野外飛行を擧行して社會的興味の中心と成つた陸軍飛行將校を主として爾餘の飛行家にも短評を加へて見やう。我國飛行界の元勳たる名譽は何んと云つても。去る明治四十三年十二月の霜白き朝代々木原頭にアンリー フアマンを飛ばして本邦空中征服史に其第一頁を記した德川大尉の手に歸せねばならぬが、眞に飛行らしい飛行を見るに至つたのは昨年五月長澤澤田の兩中尉が佛蘭西から歸朝して後の事である。長澤中尉が新購入のモ式第一號に依つて四人乘りのレコードを作つたのも、三時間の繼續飛行を成したのも、又澤田中尉が同じくモ式に依つて二千米突の昇空レコードを作つたのも、總て昨年五月以後の事である。的確なる操縱と大膽なる細心とを以つて飽く迄地味に飛ぶ者は之長澤中尉である。氏の操縱振りには一點の山氣がない。飛行中に於ける氏の態度は唯飛行機と我とのみである。何人が見物して居やうと夫等の事は元より眼中に無いのだ。複葉でも單葉でも自由自在に使驅する點に於て現今氏の右に出る者はあるまいと思はれる。豪快奔放なる操縱に依つて飽く迄華やかな飛行振りを見せ、其冒險的な傾斜飛行等に於て思はず手に汗を握らしむる者は之澤田中尉である。金の腕輪を嵌め、音樂に堪能にして、新橋の某妓に結婚を迫られたる澤田中尉は徹頭徹尾佛蘭西流の飛行家である。我國に於て『宙返り飛行』の冒險を敢いて成し得る者は蓋し澤田中尉であらふ。そう云へば其面貌も何人となく彼のアドルフ、ペグーに類似したかの感がある。軍人飛行家としての典型は蓋し岡中尉であらふ。氏の飛行振り程歯切れのよい飛行振りはない。氏の飛翔するや常に地上滑走を極度に短縮し一氣に上げ梶を引いてグングン昇騰する。氏の飛行振りには出發地と着陸地との外彼の蒼々たる天空を無視したるやの感がある。今次の野外飛行に際しても所澤水戸間を



(バ式飛行船)

僅々一時間五分で飛行し、一種の快速レコードを殘したのは實に氏であつた。冷靜沈着にして一擧手と雖も苟もせざる飛行家には教官德川大尉の外に坂元中尉がある。如何に飛行機を危險がる人でも坂元中尉に同乘さへすれば大船に乘つたも同樣である。氏の飛行振りには今日迄失敗らしい失敗、事故らしい事故は一も見出す事が出來ない。岡中尉の齒切れのよさと、澤田中尉の爽快味とを並有する者は最年少の武田少尉である其操縱の確かさも敢へて前兩氏に讓らざる物がある。次に海軍飛行家中では其堅實なる操縱術に於て第一に金子少佐、第二に井上大尉を擧げ度い空中の快男子としては梅北鐵骨少佐、廣瀨鐵拳中尉など陸軍飛行家中に其類を見ざる底の快漢が多い。民間飛行家中眞に飛び得る者は磯部鐵吉氏滋野淸武男位の者で、彼の奈良原式飛行機の白戸榮　助氏生番威嚇の野嶋銀藏氏都築鐵三郎氏星野米藏氏其他の如き殆んど飛べる部にも入り得ざる底の未熟さである。

現在我國にある飛行船は、前頁にあるパ式飛行船只一つで、之が操縱者は益田大尉である

好評新刊小說書類

三版
長田幹彥
祇園
定價金壹圓
送料金八錢
小說十二篇

紙燭仄暗き祇園の夜、白河の流水を枕に聞きつゝ、優雅なる舊都の物語に、妖艶なる舞妓の身上に、つきぬ興會を覺ゆるは誰ぞ。

新刊
森田草平
踊（をどり）
定價金壹圓
送料金八錢
小說七篇

エロチック、ノベルと云はれ、問題小說と云はれ、常に何物か新境地を示さざれば歇まざる著者が最近の豐麗なる作品「踊」以下七篇。

好評
鈴木三重吉
桐の雨
定價金壹圓
送料金八錢
長篇四篇

美くしくも又悲しき女性の運命を描くに、血を以て綴りたるが如き「赤い鳥」「女」「紅皿」「桐の雨」の四長篇著者が作中殊に傑出せるもの

新刊
後藤末雄
素顏
定價金壹圓
送料金八錢
小說七篇

「素顏」以下七篇文壇新たに一彩華を加へたり。爛熟せる人生の下町におのづからなるロオマンスの如何に意味深く懷きよ。

戲曲
ストリンドベルヒ作
松本武雄譯
罪（ガスターブ アドロフ）
定價八十錢
送料金八錢
長篇三幕

これストリンドベルヒが浮華と眞實の間に生ずる罪惡に對し男女の悲劇に對する批判の高潮に達したる傑作。その深刻なる人生圖。

（中付三の一）

發行所　東京市日本橋區二丁目九番地　振替貯金口座東京二四六二三　濱口書店

近刊豫告

兼好法師原作
若目田武次先生譯

英譯徒然草

四六判總布製
美装本全一冊
定價金八拾錢
郵税金六錢

◆近代思想主筆 荒畑寒村氏譯◆新刊發賣◆

ショウ警句集

四六判洋裝
美本全一冊
定價金五拾五錢
郵税金四錢

見よ!!新時代人の渇仰して止まざるショウの精髓は集めて本書に在り!!!

「ショウが作物の辛辣鋭利なる皮肉諷刺は、收めて本書に在り。之を譬ふるにショウの作物は一個の食物にして、本書はその滋養分のみを壓搾したるエツキスなり。故に本書一巻は優にショウの著作全體に匹敵すると云ふも蓋し過言には非ざるべし。附錄として安成貞雄氏譯『G・B・Sの人物』、及びショウの演説『家婦所得税論』を添ふ。敢て近代人の座右に一本を薦む。

新刊好評

ウエデキント作
深澤白人氏譯

犠牲の女

新式歐風横組
美装本全一册
定價參拾五錢
郵税金四錢

近時性慾問題の作家として盛名あるウエデキント氏が傑作で、性慾の犠牲となれる可憐なる少女の告白を敍し、完全なる肉慾満足は人をして神性に近づかしむと云ふ意が寓されてある。半獣人の文士と云はれた作者の放肆な經歷は附して本書に在り。

發行所 東京市神田區南神保町 振替東京二四八五九番 泰平館書店

文科大學教授文學博士 上田敏先生序
第三高等學校教授 エドワード・クラーク先生序
慶應義塾文科大學教授 川合貞一先生序
慶應義塾文科大學教授 永井荷風先生序
波斯詩人、オオマア・ケエヤム原著

馬場孤蝶先生校定
與謝野寛先生跋
故片野文吉先生譯

波斯古詩 ルバイヤット

全一冊

○四六版五百有餘頁○三色版古書故譯者肖像挿入○裝幀頗優美典雅
○定價金壹圓參拾錢○送料内地金拾貳錢○朝臺樺滿金卅五錢

英國文人の間に有名なるオオマア・ケエヤム會あるは、言はずもがな、現代に到り各國に飜譯せられて幾多の熱烈なる崇拜者を生ぜる世界的大作、沈痛と放恣と華麗を極めたる古代東洋の雄篇、酒と薔薇と佳人を讃美せる波期古詩四百六十六編は初めて本書によりて日本に紹介せらる。而して故譯者は畢生の熱血を注いで此を譯述し遂に病を起して斃る。本書が如何に純潔なる至情と壯烈なる努力とによつて成りしかを敢て當今の同好者に告げんとする也

題序

伯爵 土方久元閣下
男爵 澁澤榮一先生
法學博士 浮田和民先生
法學博士 男爵 坂谷芳郎先生
法學博士 戸水寛人先生

最新刊

中川龍川
蒲生江舟 先生共著

時代思潮と現社會

全一冊

菊版三百餘頁
獨逸製印刷用紙印刷獨逸式
箱入洋本頗美裝クロース綴
定價金壹圓貳拾錢
郵税内地十二錢
朝臺、樺滿、卅五錢

思想問題よりも生活問題。而して此等の關係交渉を忌憚なく記述し以て現今問題中の問題たる生活難問題を捉へ來りて現代思想と實社會との關係を詳細に說ける近來の快著なりとす。敢て憂世慨國の志士に一讀を勸む

中付三の三

東京市神田區北神保町十三 **開文館** 振替貯金口座東京壹四〇七番

依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大正三年文壇の一大傑作



尾島菊子女史新著

紅あざみ

小寺畫伯裝幀
四六版約四百頁
高尚優美函入
正價一冊金壹圓
送料同　金八錢
郵券代用一割增

⊛**中年の女の戀は、**勵める紅芍薬の花片の如く、又月光の野に咲く白き蕺草(どくだみ)の花の如し。折にして濃艶、折にして冷愴。著者は現代女流作家中の一大權威、罕に見る芳烈なる官能慾と燃犀なる批評眼を以て常に生の秘奥を探求して倦まざる者。茲に數年來の創作力を傾注して糜爛せる年增女の悲しき愛の心理を描く。著者が洗練と彫琢とを以てせる秋の水の如き技巧及び其熱切なる藝術的良心の披瀝は本書に於て眞に其最高調(クライマックス)に達したる觀あり。

幾度か過去を顧みて涙すれども永久にかの若うして溫柔なる心に返り得ざる頽廢の女が胸奧の苦悶を聽け。一度心に受けし其若き日の痛傷の癒えがたきまゝに次第に寂しき自毀に遁れんとする**近代的年增女の怯しき戀の秘密を見よ。**赤き月は闇々として丘にのぼれり。**紅あざみの野に抛出されし一塊の腐肉ぞ**如何なりゆくべき。大正三年度劈頭の一大逸作として敢て斯書の一讀を普ねく大方の諸賢に薦む。

發賣元　ニコ〳〵倶樂部代理部
東京市京橋區南金六町十五番地
振替口座東京一四九四八番

大賣捌　東京堂、東海堂、北隆館、至誠堂、良明堂、上田屋、籾山書店

出版元　東京　日比谷書院

(中付三の四)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



イーリアス絶唱

——天上の爭——

土井晩翠

如何なる形を以て「イーリアス」を譯すべきか、余輩は從來種々の試みをやつた勿論散文譯をも試みたが悉く失敗に歸した。數年の不成功の後ち大體七五聯行を以て原詩の一行を譯するより外我が爲し得る處無しと決して遂に左の如きものが出來た。是れが今日わが成し得る最善であるのを悲むが萬止むを得ぬのである。

固有名詞は悉く原音そのまゝとした讀者にとりて聞き馴れぬふしも或はあるだらうが聊か思ふ所あつてかくした。隨つてヂユピター、ミネルバなどゝいふ語は一切譯中に現はれない。固有名詞もグリーキにては格に因りて變化する、例へばアガメムノーンの Vccative はアガメムノーンに更にまたホメーロスは調のため固有名詞を任意に多少變形した例へば Ἐρέτρια を變じて Ἐρέτρι: (II. 536)とした。更に彼は ictus metricus を用ゐて短音を長くすることもある、第一卷十四行の Ἀπόλλωνα が其一例だ。斯くの通り原詩に於て變化ある位だからわが譯中たまには調のため勝手ながら音の長短を多少加減した。猶之に關しては專門家の叱正と高論とを仰ぎたい。猶曰ふ迄もないが原詩と譯と全篇の行數全く同一である。

○左の一節はイーリアス首卷の末段である。グリース軍中第一の勇士アヒロイス大王アガメムノーンと爭ひ、彼より侮辱を受けたのを憤激して之の怨を報ひくるゝやう母なる神女テチスに祈るのが此節の初である。テチスは之がため天上に昇つてクロニーオーン(即クロノスの子、ツオイスの別名)に願ふ、英譯にはヂユピタアとある。

クロニーオーン之を聞き納れて其結果天妃ヘーレイの(英譯に付ヂユーノー)憤慨となる、最後が夫婦の神の和睦である。三千年のむかしのナイヴな點が頗る譯者の氣に入るのである。

○

こなたに獨りアヒロイス友を離れて銀浪の
岸拍つほとり潸然と涙流して渺々の
海に向ひつ手を延して母なる神に斯く祈る。
『嗚呼神母、早世の運に生れし我なれば
オリインポスのクロニーオーン雷霆の神
譽を我に賜ふべきを露ばかりだも賜はず、
見よ權勢のアトライデースアガメムノーン
我が恩賞を奪ひ去り我を斯くまで侮るを』
涕流して陳ずるを千仭深き波の底
老いたる父の海神の傍に神母聞きとりつ、
忽ち銀波かき分けて煙霧の如く浮び出で
潸然として涙なる愛子の前に向ひ坐し
玉手に彼をかい撫でゝ即ち彼に陳じ曰ふ。
『愛兒何故悲むや、何故心傷むるや、
胸につゝます打明けよ、われ願くは聞き知らむ。』
足疾く走るアヒロイス吐息を荒く答へ曰ふ。
『君一切を善く知んぬ、述ぶるも何のかひあらむ。
エーエチオンの聖なる市テーベーの城攻め鬪み
荒し掠めて一切を我軍こゝに搬び來つ
アカイヤの人其戰利宜きに叶ひて分ち取り
クリーセーイスの紅顏はアガメムノーンの手に落ちぬ。
今アポローンの祭司なるクリーセース鐵甲の
アカイヤ人の輕舟の水陣さして訪ひ來り
愛女の囚救ふべく贖さわに持ち來し
手に黄金の笏の上飛箭鋭きアポローンの
冠を載せて衆人に、特に二人の元戎の
アトライデース兄弟に言懇に訴へぬ。
其時すべてアカイヤの軍勢ひとしく聲擧げて
祭司を崇め珍寶の贖得んと諾ひぬ。
獨りアトライデースアガメムノーン憤ほり
不法に彼を斥けて更に罵辱の言添へぬ。
祭司怒りて退きて祈を捧ぐ。斯くて見よ
アポローン彼を愛すれば其訴を納受しつ、
無慘の毒矢射放ちてアカイヤの人紛々と
爲めに等しく斃れ伏す。――續いて神の怒の矢
更にダナイの全軍の四方に限なく降り注ぐ。

豫言者即ちアポローンの神託知りて宣り示す。
其時我ぞ先んじて神意を解けと諫めたる。
されど權威のアトライデース激しく之を憤り
忽ち立ちて恐嚇を述べぬ、其言今成りぬ。
斯くて少女を眼光るアカイヤの人輕舟に
神の供物ともろともにクリーセースに返しやり、
更に今また傳令の使陣よりアカイヤの
衆人我に與へたるブリーセーイス引き去りぬ。
嗚呼神母、能はゞ爾の子を救へ、
クロニーオーンを言に行爲に慰め救ひしことあらば
オリインポスの山上に今雷霆の神に請へ。
オリインポスの神仲間へーレイ及びポサイドーン
パーラスアテーネー一齊に彼縛せんとしたる時
天上不死の神靈の群の中にて君ひとり
クローニーオーン雷雲を集むるツオイス大神の
恥づべき禍難攘ひぬと誇るを父の宮の中
屢聞きぬ。——彼時ぞ天上の名はブリアレオース
勇力父に優るためアイガイオーンと世に呼べる
百の腕ある怪人をオリーンポスの頂に
忽ち呼びてクロニーオーンツオイスの縛を君解きぬ。
怪人ツオイスの傍に勝に誇りて坐したれば
列神畏怖の念滿ちて何等の仇をなさゞりき。
請ふ、今行きて雷霆の神に向ひて膝抱き
むかしを語り訴へよ、神恐らくはトロイアを
助け、アカイヤ軍勢を岸に舳艫に逐ひやらむ。
斯くして常に威に誇る王の力は測られむ、
斯くして遂にアガメムノーン自ら先にアカイヤの
至剛の我を侮どりし身の誤を悟り得む。』
神母のテチス斯くと聞き涕流して答へ曰ふ。
嗚呼わが愛子、薄命の爾を生みてはぐみしぞ
つらき、光輪身を照す時短しと定まれば
水師のほとり涙無く禍無くてあるべきを
など宿命のはかなくてしかも不遇のいみじきや。
嗚呼運命の非なるより爾を宮に斯く生みぬ。
こを雷霆の神の前聞え上ぐべく雪積る
オリインポスに赴かむ（神恐らくは納受せむ）。

其中彼激浪の洗ふ船のへ留りて
アカイヤ人に憤れ、その戰に加はりそ。
昨日ツオイスは清淨のアイチオペースの宴のため
オーケアノスに赴きて列神ひとしく伴ひぬ、
十二の日數過ぎ去らばオリインポスに歸り來ん。
クロニーオーンの鐵の門其時訪ひて彼の膝
抱き哀み訴へん。——神の納受は疑はじ。』
斯く彼陳じ別れ去る。＊＊＊＊＊
こなた足疾きアヒロイス、神女の子なるペーライデース
水陣の中憤悶の思をひとり忍び得ず、
多く勇士の集ゐ來る席に或は戰陣に
絶えて姿を現はさず、欝々心を蝕せしめ
思空しく戰場の叫喚苦鬪にあこがれぬ。
十二の日數過去りぬ、其曙に天上の
諸神ツオイスに從ひてオリインポスの頂に
皆一齊に歸り來る其時愛子のねぎ言を
テチス忘れず渺々の海波かき分け浮び出て
曙早く天上のオリインポスに昇り行き
見渡すかなた群神を離れて獨り連峯の
むらがり立てる絶頂に雷音轟くクロニーオーン。
テチス即ち走り行き玉座の前に身を屈して
右手には彼の膝抱き左手に彼の頤の下
撫して願をクロニーオーン威神の前に捧げ曰ふ。
『嗚呼天王クロニーオーン、列神諸靈の中にして
わが行為或はわが言葉御旨に添ひしことあらば
我の願を納れ給へ、他より早く命數の
竭きん我子に光榮を賜へ。大王アトライデース
彼を侮り彼の獲し少女非法に取り去りぬ。
オリインポスを統べ玉ふ神大能の御手を垂れ
トロイヤ軍に戰勝の喜しばし貸し給へ。
アカイヤの民我の子を崇め酬ふに到る迄。』
雷雲よするクロニーオン答へず只に默然と
永きに亘り口緘む。テチス屈せず其膝に
すがり再び訴ふる『わが此願うけ納れて
點頭き給へ、然らずば斥け給へ。(大神に
恐れはあらじ、)しかあらば諸神の中に位して

策の尤も乏しきを自ら悟り恐まむ』
雷雲寄するクローニーオン深き吐息に答へ曰ふ
『なんぢに迫られへーレイと爭起し彼をして
我を怒らす無禮の言吐かしめんこと善からんや。
諸神諸靈の集りにわけ無く屢我を責め
奮戰苦鬪の中に我トロイア助くと彼は曰ふ。
さはれ今去れ、へーレイに見咎められそ、今我に
求むるところ心して必ず之を成らしめむ。
いざ信頼を天王の點頭き垂るゝ頭に縣けよ。
見よ群神の中にしてわが證たる至高のしるし
わが此頭うなたれて諾ひし言欺かず
回るべからず徒に無效の聲と過ぎ去らじ』
クローニーオン斯く宣じ點頭き垂るゝ双の眉
見よ天王の頭より「アムブロシヤ」の髮打ちゆらぎ
オリインポスの大なる山一齊にどよめきぬ。

* * * * * * *

斯てく玉座に近よりぬ。さはあれ天妃へーレイは
事の本末窺ひつ海神の女銀色の
足よきテチス天王と計れるあとを探り知り
憤然立ちてクローニーオーンツオイスの神を責めて曰ふ。
『孰れの神ぞ、巧猾の君もろともにたくらむは、
我を遠ざけ外にして君は秘密の計らひを
常に斷じて喜びつ、溫情我に施して
思計りし一言を告げす、何等のうとしみぞ。』
人天すべての父の神即ち答へて彼に曰ふ
『へーレイ、爾一切の計ひ悉く知るを　じ。
爾天王の配なれど此事爾に許されず。
知るべきところ首先に天上及び人界の
あらゆる者を後にして聞くは光榮爾の身。
列神等しく外にして我胸ひとり知る處
爾も之を探り得じ。爾の問は許されじ。』
其時容姿端嚴のへーレイ答へて彼に曰ふ
『天威かしこきクローニーオーン、仰す何等の御言葉ぞ。
高き王意のある處われ究問の度を越さじ、
わづらひ無くて悠然と君一切を統べ給ふ。
今只恐る、海神のむすめのテチス銀色の

足の女神の甘言に神慮或は誤ると。
玉座のもとに朝早く御膝を彼の抱けるを
見たり、思ふにアヒロイス崇めて更にアカイヤの
衆を水師の傍に斃さん約の整か』
雷雲寄するクロニーオーン即ち答へて彼に曰ふ、
『嗚呼驕慢非禮の爾、疑念を抱きてわれ覘ふ。
贏ち得る處いたづらにわが憎しみを增すばかり、
はては禍難の激しきを己の上に引かんのみ。
よし又其事ありとせば我喜びて成らしめむ。
口を閉して席に着きわが王命を重んぜよ、
オリインポスの群神の數はた雲とむらがるも
我手の威力加はらば爾を救ふ者無けむ』
彼斯く宣す。端嚴のヘーレイ聞きて畏怖をなし
心抑へて默然と返りておのが坐につけば
ツオイスの宮に天上の諸神ひとしく悲みぬ。
すぐれし神工ヘーフアイストス其時母なる皓腕の
ヘーレイ女神慰めて衆に向ひて陳じ曰ふ
『下界の人間の故に因り爾二神の爭に
天上諸靈のたゞ中の騷起りて可ならんや。
其事誠に痛むべく遂に堪ふべきものならじ、
禍難の不和の起る時御遊の宴も跡無けむ。
神母自ら悟らんも我猶諫めてかく曰はむ
慈愛の父の大神に和らぎ切に求めよと。
さなくば再び彼怒り諸神の御宴妨げむ。
雷霆飛ばす大神の威力誰かは敵すべき、
怒らば天の群神の列坐ひとしく倒されむ。
今願くば温柔の言葉に彼を和げよ
直ちに衆山一の神慈光我等を照すべく』
斯く彼陳じて身を起し二重の盃とりあげて
腕白きヘーレイに捧げて再び彼に曰ふ。
『不滿はいかに激しとも神母忍びて堪へおはせ、
君懲しめを蒙むるを我目何處に忍び見む。
憤激わが血をあほるとも威力誰しも及びなき
雷霆の神敵として君を助けんこと難し。
むかし助を心せし我を大宮のしきみより
踵に因りて引摑み抛げ飛ばしゝも彼のわざ。

終日空を飛ばされて斜に沈む日と共に
息絶々に眞逆に落ち來し郷はレームノス、
シンテーイスの人々のとみの救に助かりぬ」
斯く彼陳ず、皓腕のヘーレイ聞きて微笑みつ、
ゑみて其子の捧げたる盃玉の手にとりぬ。
續きて天の靈液を列神各手にとりし
盃に注ぎて殿中をあまねく廻るヘーフアイストス
其あしらひに慶祥の諸神ひとしくほゝゑみつ、
のどけき不諧の笑聲は歡喜にみてる宮の中。
斯くて終日夕陽の西に沈むにいたる迄
御宴續きて群神の心に滿たぬものも無し。
神アポローンの手にとれる玉の緒琴も音にいでぬ、
ムーザイ歌ふ宛轉の微妙の曲もつぎ〳〵に。
斯くて落日紅の光の名殘消去れば
群神おの〳〵其宮に就きて休らひ睡るべく
跛足の神工ヘーフアイストス巧みの技に天上の
神おの〳〵に組立てし玉殿さして歸り行く、
甘き眠の來る時憩ひ馴れたる床さして

オリインポスの雷霆の神威かしこきクロニーオーン
彼亦行きて黄金の御座のヘーレイともに寢ぬ。

評論

文藝時評

怯懦！

中澤臨川

先頃から海軍收賄問題が起つて世間が大分喧しい。十年このかた丁度年中行事のやうになつた國民大會が復た催された。數百、數千の市民が公園に集つたり、議院の門前に推寄せたり、御用新聞社を威嚇したり、列を作つて夜中街を練り歩いたりした。

「また騷々しいじやないか。今年は物騷な年だ。」

其大會の行はれると云ふ前晩に會つた友達が私に斯う言つた。

「ナーニ、安心していいよ。自分の血の足りないことを知つてゐる連中だから。一滴だつて無駄にこぼすものじやない。犬や猫なら殺さうと云ふ連中だが。さうさ、そんな殘忍な奴等に限つて却て卑屈なものだ。さうでなければ、ほんのお祭騷に集まる連中さ。」

私は思はずこんな激語を放つてみた。

實際私は斯樣な群集の騷擾を見るたびに、人間の一番厭な缺點「怯懦」を露骨に見せつけられるやうな氣がしてたまらない。此度の騷擾に就ても、私はその是非曲直が何れにありやを玆に問ふのではない。たゞかくまで露骨に曝露された人間の缺點を見るに堪えないのである。

なぜ獨りて遣らない。なぜ責任を一身に感じて堂々と乘り出さない。主義の合つた群集が眞面目に行ふ運動ならなぜ今少し意義を明徵[illegible]ない。その中の誰が一

滴ても眞面目な血を流した。誰があの中でたつた一人(ひとり)でも自分の額に慘み出した誠實の汗を拭つた。誰があの中で責任のある大きな聲を出した。誰が國家の爲めに、主家を守る飼犬だけの忠實を其運動に參加しながら感じた。お互の蔭に隱れながら不特徵不明瞭な聲を合せて、責任を讓り合ふやうなあの態度に何うだ。

その中の一人でも恐怖を抱かない者はない。怯懦者の好奇心だけで、足どりの確かな者さへない。爲政者も怖れ、警官も怖れ、群集も怖れ、議員も怖れた。恐怖の血迷ひから、多少の血を流したり、良民の家に害を與へたりした。

Coward!

佛蘭西のドレフユー事件では、『死！　血！　殺戮！』と言ふ聲が隨分と叫ばれた、唾(つば)とインクの幾がロンかが消費された。併かし幾滴の血が流されたか。

私は流さるべくして流さるる幾斗の血を惜まうとは思はない。殘酷とも思はない。

私は貧血者を憐れむ。流すに足りる有り餘る血を有した志士を壯とする。

夫れ、勇敢者は自分の主義のために奮鬪する。然るに卑屈者は自分の疑を試みるためにのみ行動する。

Coward！　世界的怯懦！

それにつけても思ひ出すのは、人生一切の事が怯懦の結晶にほかならないと云ふ感である。理智が功利のために本能を蔽ひかくしたやうに、怯懦が安逸の爲めに我等の意志を制扼する。固陋な慣習も墮性も玆から生れる。

今私の現在に例をとつてみると、私がニーチエの教理を研究して、其人格的、熱想的な永遠輪廻說に驚嘆したとしても、私の怯懦な意志はその恐ろしい宿命觀を内の内まで受入れるだけの決心をもたない。それはたゞ私の理智の表皮にとゞまつて無害な一個の假說として殘る。私の想像力が感情にまでそれを取込むほど強くない。理解が足りないではない。誠實と勇氣とが足りないのだ。

また私のやうに中年に達した男の一種の心理情態を驗べて見よう。斯樣な時期に於て我等の內部には徐かに働く一種の細胞的變化が行はれる。我等の身體も靈も、その時外部からの刺撃を非常に感じ易い。意志は弱められ、理由もない悲が心に喰ひ入る。我等は一時、行爲の意志も自由も失はれたやうに茫乎する。斯樣な時こそ實に人生の危機である。トルストイやニーチエの一轉期も三十七八歲の時代に起つた。然るに家庭やその他の拘束が我等を縛つて、その悲み、倦怠を無理に壓し隱さうとする。斯うして我等はこの危險な併かし一番大切な時期を無意義に過ごして了ふ。後はたゞ慣習と束縛と敗殘の生活が二十年三十年續くばかりてある。私などはつく〴〵近頃この感じに惱まされてゐる。今一步！ 僅かに一步！。今少しの努力、意志！。汝が再び新たに自由に生れるために！。然らざれば汝には死あるのみだ。汝が生を愛するならば、「生きた屍」として餘生を送るに滿足しないならば、願はくば今一步……斯う云ふ聲が私の內心から切りに聞えないてはないか、併かし徹底しない。私達は夢魔に襲はれ乍ら、逃げようとあせつて逃げえない者のやうだ。Coward！ から私は自分に向て叫びたくなる。

怯懦が我等の一生を殺すのだ。これが萬事だ。

宗敎も道德も怯懦の武器である。『天』が何だ、『神』が何だ、『善』が何だ、『眞』が何だ。みな卑屈の造り出した隱家ではないか。

私等は時に斯う叫びたくなる。

戀愛にしても矢張怯懦が附き纏ふ。『義理の柵み』とは、實は『怯れ』のことである。それが昔から何れだけ不幸な人間を生んだか。何れだけ人道の華を咲かせずに落したか。

或る小說中の主人公が愛人に捨てられて慨いてゐる所へ、その友人が遣つて來て斯う言つて勵ます所がある。『殺せ、てなければ忘れよ』。怨むとか、努めて思ひ切るとか云ふことは、矢張中途半端だ。

Coward！

今日の倫理學者ほど奇怪な動物はない。彼等は人生を理解することを忘れて、たゞ人生を觀察しようとする。

『これが事實だ』

斯う彼等は言ふ。事實が人生に益があらうと害があらうと彼等は之を變えようと望まない。彼等は全然意志することを知らない。

『よし、人生に價値がなかつたら、私はこれに私の意義を與へよう』

斯う云つて自分の行爲に責任をもつことを彼等は知らない。昔は責任をもたないものは帝王ばかりであつた。今の世には誰も責任を負はない。弱い者は自分の弱い事を事實として——變えられない事實として——手を拱ねてゐる。墮落者さへ社會の保護をうける權利があると考へてゐる。

怯懦の罪惡！

經濟上の情態から中流社會が起つた爲めに民主主義が頭を擡げた。更に下流社會が增加した爲めに社會主義が起つた。

どちらも多數者の横暴である。勞働者が今の世のネロである。

そのネロに媚びるために幾多の學說が起り、その多數者を背盾（うしろだて）として野心家、煽動者の一團が生れた。

雲霞の如き世界の社會主義者のうちで幾人が眞にその主義のために身を棄てたか。古來、主義のために身を棄てた者は多くは孤立者であつて雷同者ではなかつた。雷同者の多くは卑屈者である。

Coward !

Coward ! Coward !!

私はこの世界的怯懦を憎み、更に自己の怯懦を憎む。

海外時事評論

愛蘭問題の危機

懷沙隱客

一

二月十日、英國議會開會するや、世人は之を呼ぶに千載一遇の議會を以てしたりき、何ぞや、四十年來英國政界の大問題たる愛蘭自治が愈決定するも、今議會に在る可きを以て也、而して皇帝が當日下し給ひたる勅語を見るに「朕は互讓の精神を以て解決を謀るにあらずんば將來容易ならざる禍根を遺さんことを憂ひ、茲に政派宗教の別を問はず一同協同の精神に依りて之が決定を圖らんことを冀望す」とあり、即ち英國自由黨政府が妥協的提案を齎らす可きは、略ぼ之を豫知するに難からざりき、

然るに果せるかな、首相アスキス氏は三月九日に至り妥協案を下院に提出したりき、其內容に曰く愛蘭自治法が法律となりたる後、六年間ウルスターの各郡村は自治法の範圍外に置かるとも、置かれざるとも、郡民の任意とし、其の選擇は彼等の投票を以て之を決定す、但し六年の期限滿了せば、假令其郡村が自治の範圍外に置かれたる場合と雖も、當然自動的に愛蘭新政府の管轄下に移るものとすと、是れ即ち一時的にウルスターを愛蘭自治區域に置き、以て目下武裝反抗の準備に汲々たる同州民をして當分折角の武備も用ゆる所なからしめ、他日其狂熱的態度の冷却を待ちて、同法を實施せんとするものにあらざる乎、

二

知らず英國內閣は何が故に斯くの如く妥協的態度に出でざるを得ざりし乎、

蓋し下院に於ける黨勢を見るに、政府黨は在野の統一黨に對し約百票の多數を占む、愛蘭自治法案の通過は掌を指すよりも易しと言はざる可からず、若しそれ上院に至ては一九一一年制定議院法の規定に基き、三會期引續き下院を通過せる法律に對しては、何等の

否認權を保有する無し、然らば則ち其議會操縱の策に出でざるや贅言を待たざる也。

吾人を以て之を觀る、政府の讓步は、寧ろ補缺選擧の形勢、漸く民論が自由黨の愛蘭政策に慊焉たらざらんとするを示せるが爲めなる可し、顧みるに一九一〇年十二月の總選擧に當りてや、自由黨二百七十二、愛蘭國民黨八十四、勞働黨四十二、即ち政府黨合計三百九十八に對し統一黨二百七十二を占め、下院に於ける政府黨の多數は實に一百二十六なりき、然るに其後チエルテンハム、オルダム、ミッドロシヤン、レッデング以下諸地に行はれたる補缺選擧は着々統一黨の勝利に歸し、昨年十一月の調査に依れば統一黨議員數は二百八十三に增加し、自由黨議員は二百六十四に減少し單獨的比較にては統一黨却て自由黨を壓し、政府は勞働、國民兩黨に依賴して僅かに百〇八の多數を維持するに過ぎざりき、況んや二月以後の補缺選擧も續々統一黨の勝利に歸し、甚しきは、內閣大臣たるヤスターマン氏さへ、統一黨の雜兵に破られたるに於てをや、夫れ民心の歸嚮を卜す可き補缺選擧の形勢斯くの如くなりとせば、誰か亦た政府が大に反省し、讓步策を講ずるに至りしを驚くものぞや。

三

是れ明かに統一黨に執りての一大勝利也、ウルスター州民に執りての一大勝利也。

何ぞや。六年間の自治法除外は表面上恰かもサー、カーゾン氏が評せる如く「六年間執行を猶豫せる死刑の宣告」たる觀無しとせず、然かも是れ唯だ法文の表面のみ、實際上より言はん乎、獨り六年間ウルスター問題を未決定の狀態に置くのみならず、期限滿了後に對しても、之が善後策を講ずるの機會を與へたるものと言はざる可からず、他無し、從來英國下院議員の任期は七年なりしと雖も、一九一一年議院法は之を改正し、五年に短縮せること世人の知る所なり、從つて現下院議員の任期は明年十二月を以て終了す、如何に總選擧嫌ひの現政府と雖も、此法文を如何ともする能はざる可し、若し此新選擧に際し、統一黨巧みに愛蘭問

題を利用し、善戰し、勝利を博するとせば、未だ自治制の實施無きウルスター州の運命は如何やうとも變動し得可きにあらずや。

但し統一黨は此勝利に甘んずるものにあらざる可く、猶多大の讓歩を政府に要求して止まざらん、而して政府に至ては愛蘭國民黨に對する關係上、之以上の讓歩をなさゞる可きは、三月十四日ブラットフォルドに於ける英國海相チャーチル氏の言明に徵して瞭々たり、然らば則ち今回の議會が、兩派の奮戰猛鬪を見る可きは、亦た疑ひ無しと言はざる可からず。

佛國の總選擧

佛蘭西に於ては本月二十六日、總選擧を行はんとす、勝敗の數、果して如何、

顧みるに同國政界は常に左進的傾向を示したりき、一九〇六年クレマンソー氏が內相として選擧干涉を行ひ急進社會黨議員數に多大の增加を見せしめたるが如きは、異常の例なりとするも、大體に於て過激派の優勢を示せるは論議の餘地無し、然るに一九一〇年の總選擧に至りて、少しく溫和派の勢力回復を見、昨年大統領選擧に際し、溫和派は過激派を打破し、首尾善くポアンカレー氏の當選を見たりき、知らず、今回選擧の結果は如何、

過激派の政綱を見るに、共和政維持を本とし、政敎分離を主張する處、有利なれども、選擧法改正、軍備擴張に關する態度煮え切らざる謗を免れず、溫和派の立場を見るに少數代表を主とする選擧法改正、三年兵役制維持等、有利なれども、政敎問題に對する遣り口太だ曖昧を極む、多數の佛國人民、恐らくは去就に迷はん、遮莫今や佛國政界は一變動の時期に際す、同國民たるもの宜しく此時に當つて、熟慮考究、其選擇を誤らざるを期す可き也。

唯だ此間吾人をして稍安意せしむるものは、佛國の對外政策が、之等の內爭に累せらるゝの憂無きこと是也、何ぞや、ブリアン、ピッション等の溫和派の親英的政策、換言すれば露佛英協商策は、ゾーメルグ、カ

イヨト等過激派の齊しく贊成せる所なり、カイヨー氏の如き、曾つて摩洛哥處分に關して公果を獨逸に割讓したるが爲め、親獨排英派なりと罵詈せられたりと雖も、其誤解たり謬見たるは、今日何人も疑ふものなかる可し、其れ然り、從つて總選擧の、勝敗も之に關聯する將來の內閣更迭如何も、毫も我が西歐の同盟國アルビオン島邦を禍ひするに足らざる也。

アルバニヤの新王

アルバニヤ新君主ウヰルヘルム、ウヰード公は三月上旬ツタエスト港出發、デユラツオに上陸し、愈大位を踐むに至れり、吾人はアルバニヤ人民の爲めに好君主を得たるを欣賀するを禁ずる能はず。

ウヰルヘルム公はウヰード家の第二子、背高く、品格ある顏、人目を惹く、羅馬尼王家を始め五箇の王家と血緣あり、久しく普魯西陸軍に在りて、獨帝の恩寵深しと傳へらる、宜なるかな其三國同盟の後援を得てアルバニヤの君主に擧げれたるや、然かもウ公は流石に賢明なりき、三國同盟以外にも同情を求むるにあらずんば、アルバニヤの國運艱難なる可きを見、倫敦を訪ひ、巴里に赴き、露國に走り、三國元首と會見し、其後援の誓約を得たるが如き、亦た切に巧妙なる外交振りなるを想はしむ、加ふるに皇后ソフヰエ、賢才の聞えあり、誰か新君主の前途に幸福多かる可きを想像せざらん。

然りと雖も建國匆々のアルバニヤは、必らずや難問題多かる可し、外にしては希臘及び塞爾比との境界紛議あり、內にしては、各種族間の爭闘あり、從つて新主の地位は當分平和逸樂を樂むるの望なかる可き也。

瑞典新內閣

瑞典の國防內閣二月を以て成立したり、國防內閣とは何ぞ、軍備擴張に反對せるスタアフ前自由黨內閣と異り、寧ろ國防充實を目的とし、瑞典國王の叡慮を奉じ、且つ民間の希望に應じ、對露的防備を完成せんとするハムマルスチョルド氏の內閣是れ也。

首相ハムマルスチョルド氏は狂熱的陸軍擴張派にあらず、本來國際法學者にして一九〇五年瑞典那威分立條約の協議に與り、第二海牙會議に際し瑞典代表者として參列し、佛獨カサブランカ事件紛議起るや、之が仲裁々判に裁判長たりしことありき、然るに此人奮然起ちて内閣を組織し然かも自ら陸軍大臣を兼任して、軍備問題を解決せんとす、以て瑞典の對露反感乃至恐露熱を推知す可きにあらずや。

遮莫、同内閣の政綱が實行を見るや否やは、總選擧後の議會形勢に徴するの外無し、唯疑ふ、瑞典の防備如何ばかり擴張せらるゝとも、果して露國の西進策を阻止するの功ある可きか否かを。

英領總督の移動

濠洲總督デンマン卿、表面上健康を害せるの故を以て本月中旬現職を去り、下院議員ファガソン氏之に代らんとす、南阿總督グラッドストオン卿も本年六月退任、商相バックストン氏之が後任たらんとす、獨り移動執れとも決定せざるは印度總督ハーデング卿の地位なりと雖も、之も埃及統監キチナー元帥轉補の呼聲高きは、世人の夙に知る所とす。

自由黨政府が頻りに總督を更迭せんとするは必らずしも不可ならず、然かも果して之に依りて其帝國策の繼續を累せざるの覺悟あるや否や。

獨逸飛行發達

一紙は說ひて曰く世人は佛國を以て飛行發達第一と稱すと雖も、獨逸の恐る可きは佛國以上なり、昨年に於ける佛國國民飛行資金は二百四十五萬圓なりしに、獨逸の飛行資金は三百六十一萬圓に上りたり又た佛國が昨年及本年に飛行家養成に費さんとする資金は十六萬二千圓なるに、獨逸の同費は八十七萬圓を越えんとす、數字が十分確實なるや否やは焉らく措き、以て大體に於て獨逸國民の飛行熱心程度高きを見る可き也。

新刊批評と紹介

△人間としてのトルストイ　メレジコウスキー著　桂井當之助譯　南北社發行

人間としてのトルストイほど恐ろしく懐しいものはない。彼は偉大なる人間である。その偉大なるトルストイの中に賤しい吾々の幾つもの姿が見出される。彼は要するに人間であつた。故に人間としてのトルストイを知る事はとりもなほさず吾々自身を知る事でなければならない。大膽に、辛辣に、トルストイの肉をも血をも骨をも剔出したメレジコウスキーの此書は人間としての此の小さな自分を省みる者にとつての此上ない慰みであり、恵である。そして此譯書が斯うまで原著書の精髓を傳へて殆ど些の遺漏なきに捷きは我讀書子の深く譯者に感謝せざるべからざる所である。(定價九十錢)

△第三帝國論　茅原華山著　南北社發行

自家一個の哲學、人生觀、社會觀を把持して、そを實際社會に具體化せしめんとする經世家の我國に於ける尤なる者は華山氏である。茲に於いて哲學は空虛の譏を脱して、其意義を新たにし、其所論は常に堂々一貫して動ずる事無きを得るのである。加ふるに氏の觀察の奇警なる、時に餘りに奇を衒ふかの觀あるも、眼光紙背に徹せざる我日本人に對しては時にとつての刺戟劑として、現在の日本に無くてはならぬ所論である。「先づ自己を充實して、後ち外部發展を圖らなければならぬ」といふあたり、尚所謂氏の自我充實なるものが何處までの徹底さを有つかを疑はしめるものあるも、到底他の片々たる批評家輩の及ぶべからざる根柢を有し、感銘の力強さを有する。青年も老人も共に聽くべき言議として推奬する。(一圓)

△ブランド　中村吉藏譯　東亞堂發行

イプセンの社會劇はこれまで隨分我國に飜譯せられたが、まだイプセンをして最大詩人の列に入らしめたこの劇詩を譯したものはない。是れ原文が韻文で難解なのと、其韻文特有の美點を移植し難い爲めとであらう。然しながら此劇詩は詩としても、又イプセンの哲學を知る上にも社會劇と共に必ず併せ讀まなければならぬ所のものであつて、この難事業をして斯くまで平易に我文體に移して一般讀者の要求を滿されたる著者の勞を多とせなければならぬ。(一圓二十錢)

△解放の信條　田中王堂著　榮文館發行

書中收むる所は哲學教育宗教文藝等に亘る氏の所論であるが、そを通めて「解放の信條」と言ふ所以のものは其所論の歸する所は吾が同胞の解放といふことであるからであると言つてゐる。解放といふ事が氏の言ふ如きものとすれば、個人の解放といふ事が我現在の日本に最も緊要なるものであるは言を俟たない。吾人は必ずしも氏自らの任ずる先覺者的態度を偉とするものでもないが、其蘊蓄ある知識と其眞面目なる態度とに對して常に尊敬を拂ふ所のものである。此書の如きも吾人は一層廣く我國民に讀まれん事を希望するものである。(一圓二十錢)

△瀧口時頼　池田大伍著　演劇無名會發行

本書は演劇無名會が有樂座に上演して、日本演劇の新らしい試みとしては殆ど曾て見ざる舞臺上の効果を收めた臺本である。從來の演劇の型を踏襲してそれに新しい生命を盛らんとしたる戯曲である。平家物語より近くは樗牛の「瀧口入道」に依りて詩化せられたる瀧口と横笛との關係を現代の新しい眼で見たまでゞあるが、人間らしい瀧口も良く、求めて飽かぬ人の情に横笛を捨てるのも良い。蓋し新作脚本の上乘なるものであらう。(四十錢)

△梵漢對照新譯法華經　南條文雄　泉芳璟　共譯　眞宗大學尋源會出版部發行

本書は大乘の經王として我國民の思想感情の上に多大の影響を及ぼせる法華經が梵語より直接邦語に譯せる最初の物也。此飜譯が雜誌無盡燈に掲げ初められてより今日まで十年の日子を要せりと云ふ。譯者の刻苦經營を察すべく、和外の漢譯と對照して、熱烈渇仰の日蓮主義者は勿論、

法華經研究者にとつて洵に得易からざる珍寶たり。譯者の勤勞に對しては何人も多大の感謝を拂はざるべからず。（二圓五十錢）

△現代哲學講話　安井辰衞譯　北文館發行

本書は現任伯林大學教授リール氏の哲學入門を譯したるものにして趣を異にせる一種の哲學概論也。同教授は學界の外我國一般の讀書子に其名を知らるゝ事少なけれども、カント哲學の繼承者として夙に一家の地歩を哲學史上に有せる現在獨逸哲學界の重鎭たり。要するにカント哲學の上に立つて哲學の本質、クリチシズム、認識論、人生觀等あらゆる緊要事を中心として哲學全般に亘つて說明せんとしたる講話體のものにして初學者の參考書たるべし。（一圓五十錢）

△夏より秋へ　與謝野晶子著　金尾文淵堂發行

「みだれ髮」時代の溌剌たる詩才の迸るやうな影の稍失せたかの感はあるが、流石に明治一代の女詩人と言はるゝだけに詩においては何第一人の地歩を失はない。此書またとり〲に愛誦すべきものが多い。（一圓八十錢）

△基督教講話　山室軍平著　警醒社發行

此書は日本救世軍のオーソリチー山室軍平氏の隨所に講演したる基督教の教義を輯めたるものであつて、實際的布教救濟の事業に當れる氏の言說として、空虛なる眞理の傳達よりも偉大なる靈感を讀者の胸に傳ふるであらう。（一圓三十錢）

△オイケン精神生活の哲學　得能文譯　弘道館發行

此書は一種の哲學入門なれども普通の哲學概論とは趣を異にし原著者は「哲學を既に與へられた物として取扱はず、新たに起つて來る生きた問題として取扱つてをる」といふ其態度に依つて、既にいかに現代の要求に副ふかを見るべく、恐らくは如何なる哲學概論にも增して、此書が今日の吾々の要求を滿すべきを信ず。（一圓五十錢）

△イフヰゲニエ　ゲーテ作　谷富平藏譯　玄黃社發行

「タウリスに於けるイフヰゲニエ」はゲーテの第二期を代表する、希臘風の圓滿無礙の道德的理想を骨子として、それに莊嚴典雅の古典的色彩を附加した名作である。此譯文極めて平易にして能く原文の意味を傳へてゐる。（八十錢）

△商業學通論　原田祐三著　實業之日本社發行

高等實業講座の第一編として發行せられたるものにして、商業に關する一般的知識を得るに便に、社會の或階級の需要に副ふべく、蓋し時代の要求に應じたる出版物といふべし。（一圓）

△夜の街にて　小川未明著　岡村盛花堂發行

文壇獨自の地歩を占むる未明氏の特長はいかなる斷簡零墨にも顯はれざるはなし。本書は其短篇五十餘種を收めたるものにして、何れも皆この感じ易き詩人が胸に響く人生の面影として愛誦すべきもの多し。（九十錢）

△近松の人々　高須梅溪著　岡村盛花堂發行

近松の詩才は何時誰が讀んでもその氣分と情調の渦卷く中に連れてゆく力はあるが、曾根崎よ天滿よと言つた地理的便宜を有する者ほど一層その情趣にひたることが出來るわけである。其意味において大阪の人梅溪氏を通じて見たる近松の人々は特殊の興味を添へるであらうと思ふ。（六十五錢）

△科學概論　ギユリツク著　警醒社發行

シドニー・ギユリツク氏は京都大學の講師である。氏は種々雜多な科學の統一を圖らんとして本書を著すに至つた。諸科學の性質及關係を研究して總括的知識を得る事の必要な事は今更までもないが、此書に因つて全部其目的を達し得るとは思はないが、知識の程度の低い我學界などには必ず其一部の目的は達せられるであらうと思ふ。（一圓六十錢）

△性的特徵　　小倉清三郎譯　丁未出版部發行

本書はHavelock Ellis の"Man and woman,"を譯したるもので、男女性の第二義的即直接生殖に關係せざる機關と作用とを研究して其特徵を明かにせるもの。近頃喧しい婦人問題の如きは當然こゝから出發せなければならぬ。其意味において、此研究及兩性の心理研究などは現在の我國に於いても最も肝要なるものである。(一圓五十錢)

△トルストイ宗教小説集　　小西増太郎著　警醒社發行

トルストイの小説中から杜翁の宗教觀を紹介する目的で特に宗教に關係ある作物「クレーツエロワ・ソナタ」「主人と僕」「罪と泉源」の三篇を譯したものが本書である。(八十錢)

△簡明倫理學史　　藤井健治郎　藤本慶祐共譯　早稻田大學出版部發行

倫理學の考究に倫理學史の知識を必要とする事は言ふまでもない。特に此ロージャースの倫理學史は批評的叙述を以てしたれば斯學研究には最も適當に、且つ譯文極めて用語の用意を周到にしあれば、現學界に貢獻する所少からざるべし。(一圓六十錢)

△現代宗教哲學の主要問題　　加藤直士譯　警醒社發行

本書はオイケンの宗教哲學に關する思想を知るに最も適當なる物にして、譯文は餘りに形式に拘泥し過ぐるにあらずやと思はるゝ節あるも、卷頭の「序に代へて」の一論文はオイケン思想のアウトラインを知るに都合良き物たり。(一圓)

△誘惑　　前田晁譯　南北社發行

モウパサンの"Yvette"を譯して「誘惑」と名付けたのである。原書はイエットといふ女主人公を描いたもので、譯者は原文を主として英譯より忠實に譯したそうである。(八十五錢)

△當面の人物フースヒー　　高橋爆洋著　フースヒー社發行

萬朝報紙上に連載されて喝采を博したもので、比較的最も公平に且つ人物を宏く江湖に覓めて、鋭利なる筆鋒を加へたる處人物評論中稀に見る處のものたり。人を措いて社會國家の無い以上、黑岩氏の言ふ如く洵に此書や我社會の現狀を知るにも都合よき書也。(六十五錢)

△日本美術年鑑(第三卷)　　畫報社發行

本卷は明治四十五年より大正元年に至る美術界の狀態を叙述し、美術界の現狀は一目瞭然たらしむる至極便利なる出版也。(上製一圓五十錢並製一圓三十錢)

△都會文明の畫圖伯林　　片山孤村著　博文館發行

本書は著者が滯歐二年間の觀察に成る大都會の生活を紹介したものである。開卷一頁から既に大都市の偉大なる文明に醉ふ心地がする。文明の程度に於いてはまだ〳〵何と言つても日本などの及びも付かぬ大都市たる伯林生活の斯くの如き各方面からの觀察は吾々にとつて興味有り利益のある事は勿論であらう。(九十錢)

△新伊蘇布クルイロフ物語　　山田枯柳譯　大盛堂發行

面白い讀物である。普通のお伽噺と違つて作意も寓意も遙かに高尚で奇拔である。そこに露西亞的な俤が顯はれてゐる。(九十錢)

△姓名と運命　　大乙道人著　東亞堂發行

近頃大道で見受ける姓名判斷とやらには何んな根據があるか知らないが、此書は矢張り姓名と運命との關係を尤もらしく說明したものである。(七十錢)

△婦人の心得べき法律　　鶴田壹著　大日本雄辯會發行

「今の婦人が法律を知らない爲めに悲境に遭遇してをるのに同情して」特に婦人に必要な法律の知識を摘出したものである。重寶な物に違ひないゝ(六十錢)

△和歌俳句其他の韻文解說　高津才治郎著　文教會發行

此書は小學校教師の國語教授參考の爲めに國定讀本中より韻文の類を摘出して其出處意義を明白に考究したるものなれば、小學教師の好參考たるべし。（六十五錢）

△ヤンキー（赤裸の米國）　森田小六郎著　至誠堂發行

合衆國は成上り者である。まだ未成品である。それだけに生氣の潑溂たるものがある。跳ね返りだけに最も面白い國民である。此書は著者六年間の滯米中の觀察に成る剝き出したヤンキー其者である。（一圓二十錢）

△一葉草紙　下山京子著　玄黃社發行

眞の意味に於ける「新しい女」がまさか斯らいふものであらうとも思はないが、兎に角實際的に因襲の砦から脫して自分の思ふまゝの生活に入つた著者の如きは、日本の女性として異色あるもので、其才氣の至る處可ならざるなきが如きも亦た稀に見る處である。（九十錢）



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

短期特價提供

史傳修養書拾有六種

特賣書目	著者	定價	特價	郵税
修道講話	加藤咄堂先生著	一、三〇〇	一、〇〇〇	、〇八〇
處生講話	樋口龍峽先生著	一、三〇〇	一、〇〇〇	、〇八〇
群衆論	前田慧雲博士著	一、四〇〇	一、一〇〇	、〇八〇
佛教思想講話	國民軍事協會編	一、三〇〇	一、〇〇〇	、〇八〇
日米開戰夢物語	笹川臨風先生著	、八五〇	、七〇〇	、〇八〇
山中鹿之助	黒頭巾横山健堂著	一、一〇〇	、九〇〇	、〇八〇
趣味と人物	加藤咄堂先生著	一、七〇〇	一、五〇〇	、一二〇
英雄と修養		一、三〇〇	一、一〇〇	、〇八〇
現代思潮論	樋口龍峽先生著	二、〇〇〇	一、七〇〇	、一六〇
薩摩と琉球	黒頭巾横山健堂著	二、三〇〇	一、八〇〇	、一六〇
實說日蓮一代記	青木日蔭先生著	一、〇〇〇	、八五〇	、一六〇
實說釋迦一代記	江部鴨村先生著	、九五〇	、八〇〇	、〇八〇
書趣と詩味	笹川臨風先生著	一、三〇〇	一、〇〇〇	、〇八〇
帝國漫遊案內	日本漫遊案內社編	一、三〇〇	、九〇〇	、〇八〇
婦人解放論	西川文子著	一、〇〇〇	、八五〇	、〇八〇
實驗健康法	東洋醫學會編	、六〇〇	、五〇〇	、〇八〇

特賣期限四月廿日限り

發兌 中央書院

發賣所 東京市日本橋區數寄屋町三番地 明文館 電話本局六八四番 振替東京四五五四

全部取揃即刻御注文に應ず五圓以上一時に御買上の方は五分割引す

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中付四の一

(中付四の二)

・痛快と悲壯の姉妹篇・

大阪每日新聞社長本山彥一氏序
雜誌(現代)主筆 横山健堂氏序
大坂每日新聞記者 平野秋來氏著

(忽再版)

薩摩氣質 兵兒の國

中版紙數三百餘頁
上製寫眞版數葉挿入
最美本箱入
定價金九拾五錢
郵送料八錢

今や薩摩出身者の一擧一動は我が國民注意の焦點となれり薩摩人の複雜なる性格は研究の値なくんばあらず、著者曩きに親しく薩南に入りて苦心慘憺、其地理、風俗、人情を調べ溯りて之を史籍に徵し彼等の過去を說き現在を描く材料極めて豐富筆致頗る瑰麗一讀海南の一奇國讀者の眼前に浮び再讀赤裸々の隼人讀者の脚下に橫はらん書中載する處首相山本權兵衛、元帥東鄉平八郎を始め當代知名の人物にして就中**滿洲義軍**の統領**花大人**として聞えたる花田中佐、**二尺七寸の豪傑井上新四郎**の兩長篇に至りては其**痛快なる事實小說よりも奇**にして文章の絕妙なる一字一句活躍し筆端聲あり讀者をして驚心駭目せしめずんば止まず何人と雖も一度本書を手にせば通讀厭くを知らざるべし。

▲全國著名の書店にて販賣す、品切の時は直接弊店へ御申越あらば着金即刻送本可致候

大阪每日新聞記者 平野秋來氏著

三版

長州の天下

定價壹圓參拾錢

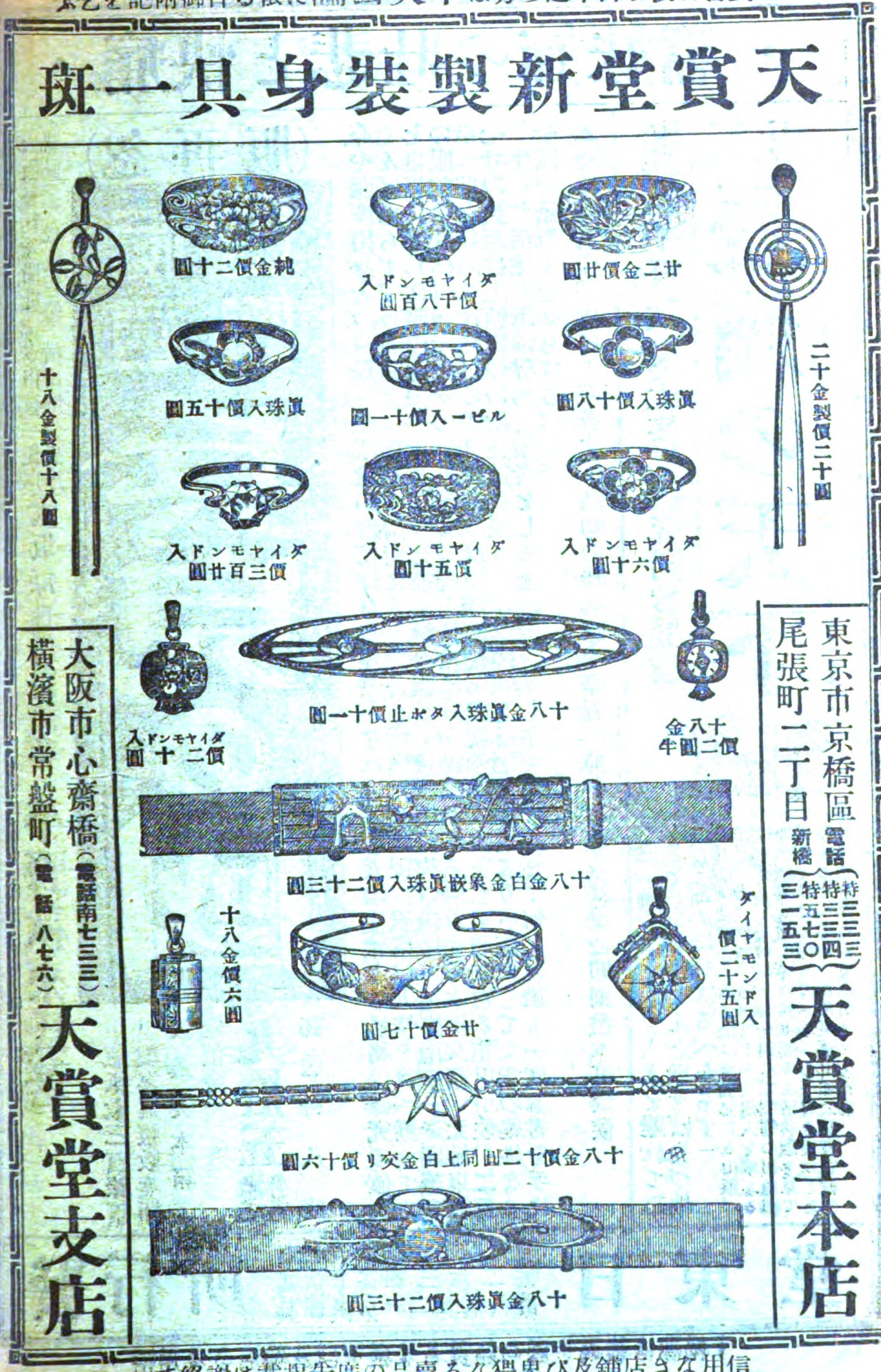
送料八錢 紙數三百廿頁 大判上製箱入最美本 寫眞版數葉挿込せり。

「地を離れて人なく、人を離れて事なし人事を論ぜんと欲せば先づ地理を審かにせざるべからず」

著者は此見地より維新後の風雲見たる山縣、井上、桂、乃木、寺內以下の長州人を傳ふるにわざ〳〵長州の土地を蹈んで彼等の出處經歷を親戚故舊に尋ね其血族の生活狀態を見て何等の私見を挿まずさながらに書き現はしたるもの之れ本書の特色也篇中桂公妹婿吉村少佐の悲壯なる哀史は出色の文字也。

(中付四の三)

發行所 東京市本郷一丁目大通 電話下谷四三六二番 振替東京一二五五八番 **日東堂**


天賞堂新製装身具一斑
廿二金價廿圓
ダイヤモンド入 價千八百圓
純金價二十圓
眞珠入價十八圓
パール入價十一圓
眞珠入價十五圓
ダイヤモンド入 價六十圓
ダイヤモンド入 價五十圓
ダイヤモンド入 價三百廿圓
二十金製價二十圓
十八金製價十八圓
十八金眞珠入タホ止價十一圓
十八金 價二圓半
ダイヤモンド入 價二十圓
十八金白金象嵌眞珠入價二十三圓
十八金價六圓
廿金價十七圓
ダイヤモンド入 價二十五圓
十八金價十二圓同上白金交り價十六圓
十八金眞珠入價二十三圓
東京市京橋區尾張町二丁目 電話新橋（特三三三 特三三四 特五七〇 三一五三）
天賞堂本店
大阪市心齋橋（電話南七三三）
橫濱市常盤町（電話八七六）
天賞堂支店

（中付四の四）

中央公論春期大附録



まぼろし

正宗白鳥

（一）

鐵瓶の湯はぐら／＼沸立つてゐる。遠野は所在なさに頻りに温かい茶を飲んだり、煙草を吸つたりしてゐたが、敷島の袋は二つとも空になつた、長火鉢に突込んだ吸殼まで拾つては吸ひ盡した。さつきお久が下りて來て、「もう歸つて行きさうなのよ」と、こつそり知らせてからでも、最早三十分の餘も過ぎてゐるのにと、彼の心はます／＼焦立つて、初の間のやうに女と打合はせたことなど緩くり考へてはゐられなかつた。「いつそこのまゝ默つて。裏口から家へ歸つてやらうか」とも思つて、座を立つて帽子を被つて、懷手で茶の間を行きつ戻りつしたが、二階の灰吹の音を聞くと、われ知らず元の座へ戻つて帽子を投棄て

て、掻巻を頭から被つて火鉢に手を翳した。

「今の音は立際らしいが‥‥」と元氣づいて、階子段の方へ耳を澄ましたが、暫く待つてゐても足音はしなかつた。

「馬鹿に寂として來た。雪は降止んだのか知らん」と、彼れは今まで念頭に置いてゐなかつた天氣模様が急に氣に掛りでもしたやうに慌ただしく臺所の戸を少し開けて薄く積つてゐる明るい雪景色を見た。が、降つてゐてもゐなくても、温くても、寒くても、さしたる感じは起らなかつた。で、また懐手して家の中をノソノソ歩いて、薄暗い神棚を見上げたり、壁に貼付けられた美人の寫眞版を見たりしてゐた。

と、間もなく裏口に人の近づいた氣色がしたので、遠野は大人しく座つて顏を和らげた。「あゝ寒い〳〵」と、主婦は聲を震はせて入つて來た。石鹸や手拭を片付けてから長火鉢の側へ寄つて、

「大變緩くりだつたてせう。道て珍らしい人に會つて立話をしてたから、折角温まつた身體を冷してしまつた」と云つて、紅く龜かんだ指の太い手を無遠慮に遠野の温かい手に當てゝ、「ほら冷たいてせう」と微笑した。

遠野は思はず手を引込めて、打切棒に「外は寒かつたてせうね。雪はまだ降つてますか。

「何だかもう晴れさうてすよ」と云つて、主婦はふと氣付いたやうに、「二階にまだゐるんてすか」と囁いて、目を顰めた。そして彼れが輕く首肯くのを見て、「久ちやんも氣が利かないねえ。‥‥だけど乾度困つてるんてすよ」

「どうだか。‥‥僕は眠くつて仕様がないから、家へ歸つて緩くり寢ようかな」

「ぢや、其處でおよつてゐらつしやいな。私が一寸様子を見て來ますから」

主婦は枕や敷蒲團を出して、火鉢の側へ假の寢床を設けた。そして、土瓶へ素湯をうつして二階へ上つた。晴々した主婦の聲のみ遠野の耳に觸れてゐた。やがて皆んなが揃つて下りて來たので、彼れは俄かに明るい氣持になつて、掻巻の間からそつと覗いたが、二階の男は便所へ行つたゞけでまた階子段を上つた。薄明りでチラと見た男の顔は淺黑くてキリツとしてゐた。

お久は、「私、まだ頭の加減が惡くつてよ。お湯にでも入つて來たいけど」などゝ、高調子で主婦と話してゐたが、何時となしに遠野の側へ寄つて、夜具に片手をのし掛けて、小さい聲で、

「私、本當に困つちまうわ。急に今夜は泊つて行くなんて云出すんだもの。天氣がこんなに惡いのに今時分歸れとは云へないでせう。それにあの話もあるんだから、機嫌を害ねたくないしね」

「だから泊めたらいゝぢやないか」遠野はつとめて穏かに云つて目を閉ぢた。

「どうせ夜明け前には歸るのよ。十時までにはお店へ出てなくちやならないんだから。……ね、いゝでせう。その代り明日のお午までに五十圓のお金は使に持たせて寄越すつてさう云つてるの」

「さうかい」遠野は目を閉ぢたまゝ、懶げに答へたが、女の息で面を撫でられてゐると、見馴れてゐるその女の滑かな肌が、彼れの胸を壓付けるやうに思はれた。

「ぢや眠て入らつしやい。夜明け前に起しに來てよ」

女は主婦に後を頼んで二階へ上つたが、直ぐにまた下りて來て、枕許へ葉卷を二三本置いて行つた。

主婦は黄縞の掛蒲團を最一枚遠野に掛かけてやつて、「お可愛相ね」と笑つて、「この頃私の甥が田舍から

來てゐますと貴下の事觸にしといたら、久ちやんもそのつもりで話をしてるんですもの。可笑しくつて吹出しさうでしたよ」

「馬鹿にしてるなあ」

遠野は薄ら笑ひをして細く目を開けた。足の爪先が冷えてゐたけれど、主婦の勸める行火をも斷はつて、足を縮めて首を夜具の中へ引込めた。枕許で話掛けられたり周圍でこそ〳〵されるのを煩さがつて眠入つた振りをした。

二三時間前までの彼れは、竊かに企てゝゐる旅行の空想に醉つてゐた。あの五十圓さへ取返したら、その日直ぐに温かい伊豆あたりの溫泉場へ出掛けて、秋の末頃からの濁つた生活に見切りをつけようと思つてゐたのだつた。何時までもこんな女に懸り合つてだらしのない日を送つて、頭を惱まし身體を疲らせてゐるのは愚ろかだから、別れるに都合のいゝこの機會を取外してはならない。女も當分の間なら吉崎の世話になつてゐてもいゝと云つてゐるのは却つて此方の幸ひだ。

伊豆の海岸や野づらは最早春景色になつてゐるだらう。度行つたことのある熱海や伊豆山も懷かしいが、それよりも湯河原とか修善寺とか、まだ知らない土地へ行つて見ようか。靜かに湯に漬つて睡りを貪つて、好きな書物を讀んで散歩して、と彼れは長閑な光の差した溫泉宿の一室を目の前へ浮出させて樂んでゐたのだつた。

そして、女が彼れに相談しいろ〳〵吉崎を呼寄せるための手紙を書いてゐるのを傍見してゐても、明日から後の女の生活方を女自身が氣輕に話出すのを聞いてゐても、さして心を動かさなかつた。むしろ

厭いた者からかうして離れて行く快さを覺えてゐたほどだつた。使が持つて歸つた吉崎の返事に、甘たるい文句が書並べられてあるのを讀んでも、冷笑して女をからかつたゞけだつた。

が、明日でなくつて今夜から、自分が寢馴れた二階の寢床を他人に奪はれて、茶の間で冷たい獨寢をさせられるのは何だか忌々ましい。「忙しいけれど一寸行く」と云ふあの男の返事だつたから、とても呑氣に泊りなんぞしようとは夢にも思はなかつたのに。「こんなに氣分が惡いのに、しつこい話を聞かされちや溜らないから、此方の用事さへ濟ませたら、さつさと歸へしてしまうさ」と、女自身も云つてゐたのに。……と、遠野の心には取留めのない不平が頻りに起つた。直ぐにぐつすり眠入つてしまへばいゝんだと、自から慰めて、枕を直してつとめて心を空しくしたが、疲れてゐる癖に、意地惡く目が冴えて來るばかりだつた。それに主婦は傍で高鼾を掻き出した。二階ではまだ起きてゐるのか、燈火が幽かに洩れてゐる。

彼れは頻りに寢返りを打つた。蒲團から乘出してマッチを索つて、葉卷に火を點けて自棄に煙を吐いた。終ひには腹這ひをしてランプを引寄せて、わざと部屋の中を明るくした。

煤ぶつた神棚は陰氣臭いし、寫眞版の女の顏も滅入つた色をしてゐる。長火鉢の火は消えかゝつて、部屋の中はます／＼寒くなつた。……彼れの心はともすると、居心地のいゝ二階の方へ惹かれた。其處には芭蕉の葉の染出された柔かい座蒲團が火鉢の傍に敷かれてある。「おれのために拵へたのだ」。都鳥の模樣のついた茶碗や土瓶は、「おれが百花園で買つて來たのだ」。菓子皿に入つてゐる明烏は、「おれが今日梅月から買つて來たのだ。まだ自分は碌に食べもしないのに」……さうだ。別れる時には座蒲團や茶碗や

自分の物は一切持つて行かなきやならん。

彼れはふと、吉崎が來る前に煙草の吹殼を丁寧に燃盡して、あの男に些しの疑念をも起させぬやうに氣をつけたことを後悔した。あゝまで氣遣うには及ばなかつた。むしろ彼奴が勘付くほどに今まで男のゐたらしい跟を殘して置けばよかつたと思つた。

強い葉卷を一本吸盡すと。舌が荒れて逆付きさうになるので、彼れは微溫湯で口を嗽いて自棄に唾を吐いた。主婦は薄目を開けて、「あなたどうなすつて？」と寢呆聲で云つて、口の內で何か呟きながらまたスヤ〳〵と寢入つた。

近所から鷄の聲がした。遠野も何時か苦しい夢に落ちた。

ふと、臺所の足音や雨戸の開く音に目が醒めたが、あたりは最早薄明るくなつてゐた。「寒いから風邪を引かんやうに氣をお付けなさい」と、お久が小聲で云つてゐる。

「おや、主婦さんによろしく」吉崎の錆びた落着いた聲を遠野は初めて耳に留めた。手紙で想像してゐたとは違つて、身體の樣子も聲の調子もいやに大人振つてゐると思ひながら、彼れは夜具を被つて眠てゐる風をしてゐると、お久は雨戸を鎖してから足早に枕許に寄つて來た。

「何てかう寢相が惡いんだらう」と、女は笑ひ〳〵搖起して、「さあ早く二階へいらつしやいな。溫かくなつてるのよ」

遠野はだるさうに息を吐いて、暫し愚圖ついた後て、突如に飛起きた。緩んだ扱帶を締直して、女に

先んじて階子段を上つた。

夕方ちやんと片付けて置いた部屋は取亂されて、茶道具も煙草盆も菓子皿も汚れてゐる。男臭い息が其處等中に漂つてゐるやうだつた。眞中に行火が置いてあつて、その上の掛蒲團は歪んで裾が跳返つてゐた。遠野は厭な氣がして自分の座り場所がないやうに突立つたまゝ動かないでゐると、後から上つて來た女は不審さうな目をして、

「何を考へてるの。行火にはどつさり火を熾してあるんだから、早くお當んなさいな。……まだよく目が醒めないんだわね。何だか眠さうな顔して」

さう云つて、女自身行火に凭れ掛つて欠伸を洩した。遠野は默つて蒲團の敷かれてゐない方の行火の口へ足を突込んで、仰向けに寢ころんだ。

「少しお話したいことがあるから、我慢して起きてらつしやいな。」

「ぢや其處で云つたらいゝぢやないか。寢てゝも聞えるよ」

「私ね。かう思つてるの。こんな家に何時までもゐるのは厭だから、いつそ思切つて姉さんの店へ行つて手傳ひかた〴〵置いて貰はうと思つてるの。あなたの都合のつくまでさうしてゐたいんだけどいけないか知ら」

「それでもいゝさ」

「あなたが來なくなつて、明日から又外の人が來るやうだと、近所の人が變に思ふでせう。私何だか厭だわ。それに毎日用事がなくつて退屈してるよりや、姉さんの家て働いてる方が身のためになると思つ

でよ」。
「だけど、お前は眞面目に働けるつもりかい」
男はふと身を起して、相手の顏に目を注いだ。不愉快だつた氣持も消えて女の話に興を覺えた。
「働けなかないさ」女は目顏に力を入れて、「さうと極れば、私今日姉さんの家へ行つて來るわ」
「さうして堅氣になればそれに越したことはないさ。お前のためにもいゝし、姉さんも喜ぶだらう」と、男も生眞目な口を利いた。そして、女のためばかりではない、吉崎の手にこの女を渡さないで濟むのが、自分のためにも快かつた。が、しかし女の決心の急に變つたのが腑に落ちないので、「吉崎さんは何とも云はないんかい」
「あの人は私をどうしようつてハッキリ云はないんだから、私の勝手にしてたつて構ひませんさ」と、女は平氣で答へて、「あの人も腹の中はどうだか知らないけど、口先では以前の馴染甲斐に私が困つてる間だけ助けてやらうと云つてるだから、私の方で體の極りをつけさへすりや、それで得心するんでせう」
「だけど、あの男も無條件で金を呉れるんか知らん」
「私の方で先の約束をして無心を云つたんぢやないしね。」と云つて、女は媚びるやうに男を見て、「お金さへ貰つたらいゝんだわね」
「さうさ。……しかし、金を取りつ放して知らん顏をしてちや、幾らお人よしだつて怒るだらうな」
かう云ひながら、遠野の耳には女のこの不人情な言葉がどんな愛着の言葉にも勝つて懷しく響いてゐたので、心から咎め立てをする氣にはなれなかつた。騙された吉崎を憐れむにつれて、自分の心には生

生した元氣が漲つた。元氣なあまりに鷹揚な氣持になつて、

「此家で吉崎に會ふのが厭なら、外へ移つてもいゝぢやないか」

「そりやさうだけど、毎日來られちや面倒臭くつてね」と云つて、女は聲を震はせて、「あゝ私もう厭だ。姉さんの家で商賣のお手傳ひか雜巾掛でもしませうよ」

戸外はさま〴〵の物音で騷がしくなつた。雨戸の隙間は最早明るくなつてゐる。女は背伸びしてランプを吹消した。

遠野は行火の温かみで快く眠付いて、正午近くなつて漸く目を醒ました。麗かな日が差して。雪解の雫がしめやかな音を立ててゐた。顏を洗ひに下りてゐる間に、お久は甲斐々々しく掃除をして、かねて調へてゐた鳥鍋などを持込んだ。

「さあ、もう今日切りだ」と、男は威勢よく云つて、今日一日を飽まで樂まうとした。旅から歸つて來ても、此家へは決して來ないと、自分の心で堅く極めてゐながら、主婦やお久には少しも知らさないで、獨り竊かに別離の情を感じてゐるのが、芝居染みて却つて面白かつた。睡りは足つてゐるし、空は晴れてゐるし、昨夕の不愉快な思煩ひは名殘りなく消えて、勝利者として自分が別れて行く樂しさが感ぜられた。殘りの葉卷を吸ひながら新聞を讀んでゐる間に鳥鍋はじい〳〵味さうな音を立てた。

「さあ、もういゝんですよ」と、女は飯を裝つて前に置いた。

男は新聞を推やつて混爐の側へ躙り寄つて、「今日は主婦も誘つて梅見にでも行かうかね。そして歸り

に饂飩でも食べて別れようか」
「えゝ……」と、女は氣乘りのしない返事をして、「だけど、私途中で別れるのは厭だわ。泣顏を人に見られるのも口惜しいしね」
「泣く必要はないぢやないか。梅見でなきや活動寫眞でもいゝ。主婦が先日から行きたがつてたから」
「今日は何だかそんな氣になれないの。それよりもお金が來たら、私一寸姉さんの家へ行つて來ようと思つてるの」
「あの話てかい」
「それもあるし……」
女は碌に箸を動かさないで、鬱陶しい顏をしてゐたが、何時か睫毛に涙をさへ宿した。男は憐憫さに心を曇らせて、暫く默つて鳥鍋を突ついてばかりゐたが、やがて、
「お前はまた顏色が惡くなつたね。もつと養生しなきやいけないよ」と、しみ〲と云つた。
「さう？」女はます〲首垂れた。
「姉さんの家でせつせと働くのも身體のためにいゝかも知れないね」
「彼處へ行つたつて居づらいに極つてるわ」女はさう云つて顏を上げて「私ね、かうも思つてるのよ。國からお母さんにでも來て貰つて、小さくつても一軒家を持つてたら氣が落着いていゝだらうと思つてよ」
「さうだね」。

「私、あなたの留守の間に、どうかして都合をつけて家を借りときますから、東京へ歸つたら、あなた來て呉れなくつて?。私いくらでも切詰めて暮して見るつもりよ」

「そりやいゝが、おれは當分金の工面はつかないね。旅から歸つて來ても、半歳ぐらゐは動きが取れないよ」

男はまたしても纏ひつかれたり、自分も足の拔けぬやうな破目に落ちたりするのを恐れて、自分の今の境遇をさも窮してゐるらしく吹聽した。助けたいのは山々だけれど、浮かりすると、自分まで浮ぶ瀨がなくなるかも知れない。時々會ふには會ふけれど、責任を持つて女一人の世話をすることは六ヶ敷さうだと、誠しやかに話して、

「だから、お前は吉崎に賴んでどうかして貰ふさ。あの人はお前を養ふぐらゐの金は自由になるらしいし、親切な柔しい人だつて云ふぢやないか」

「どうだか」

女は冷かな薄笑ひを洩らしたが、暫く口を噤んで考込んだ。「あ、こんなに煮詰つて」と、やがて浮付いた聲をして、食卓の上へ鍋を卸した。そして、「お甘さうね」と、箸を取直して、男にも勸めた。

身の振方についての話は一時止切らせて、二三日前まで十日足らず苦しい目に會つてゐた千葉の料理店の話を繰返して、「もう懲々しちやつた。浮々人の口車に乘るもんぢやないわね」と、女はつくぐ感じてゐるやうに云つた。

「久ちやん」

階子段の下でふと主婦の呼聲がした。女は「使が來たのよ」と、慌てゝ立上つて、飛ぶやうに階下へ下りた。

間もなく手紙を持つて、小躍りして上つて來て、息忙しく、「顔の四角い可笑しな小僧さんよ」と云つて、手をぶるぶるさせながら封を切つて、疊込まれた紙幣を引出して、その上へ注意深い目を落したが、强ひて數へもしないで、男の手へ渡した。

「云つたゞけあるでせう」女の聲には急に力が拔けてゐた。

男は受取つた紙幣を無器用に數へて、「相違なしだ。皆んなおれが貰つといてもいゝんかい」と、念を推して紙入れへ仕舞つて、「何だか氣の毒なやうだけど、おれも今の場合困るんだからね」

「私、これで安心しちやつた。義務が濟んで」と、女は無理强ひに笑ひを浮べて、「あなた何時旅へ出なさるの?」

「成るべくなら今夜でも出掛けたいんだけど、都合で明日の朝に延びるかも知れないよ。これから二三軒寄つて行く所があるし、買物もしなきやならんし」

男は多少氣遣つてゐた旅費を確かに手に入れた嬉しさに、急がぬ旅をも急ぐ氣になつて、何だか尻が落着かなくなつて、「お前が一緒に戸外へ出たくないのなら、おれはもう少しゐて歸ることにしよう。……主婦さんにいくらやつたらいゝだらう?」

「そんなことはどうでもいゝさ。後で私がよくしときますさ」

男も女も暫く興が醒めたやうに、互ひの言葉に自然の情がうつらないて、如何にも態とらしい口の利き方をし合つた。男が葉卷を吸ひながら旅立の仕度を考へてゐると、女は頻りに粘い唾液を吐いた後、紙幣に添へて寄越した吉崎の手紙を詰らさうに讀んでゐた。

「何が書いてある？」と、男が訊くと、

「讀んで御覽なさい」と女は手紙を突出した。

「……明日は紀元節にて候へば、午前中に御訪問致すべく候。小生も貴孃今後の方法につきさま〴〵考へ居り候。いづれゆる〳〵御相談致すべく候へども、決して無分別なる事なされまじく呉々も願置き候。お神さんにもよろしくお傳へ下されたく……」

芝四國町×番地と、住所までちやんと書添へられてゐる。男はざつと走り讀みして下へ置いた。

そこへ主婦が「大變お靜かね」と前振れをして上つて來て、「今日の鳥はどうでした？。よく氣を付けるやうに云つといたんですが」

「柔かくつてお甘かつた。喰餘しだけて主婦さんも此處て食べちやどうです」と、男は機嫌よく迎へて主婦を火鉢の側へ寄らせて、その方へのみ話をし向けた。女の兄か何かのやうな口吻て、これから吉崎の世話になつて、靜かに保養して、傍ら裁縫や三味線の稽古でもしてゐたらいゝだらうと思ふなどゝ話もして、主婦から

「お若いのに皆さんよく譯が分つて。驚いちやつた」と云はれた。

遠野や吉崎がお久に對して、親切をつくしてゐながら淡泊で厭味がないのを、主婦は不思議に思つた

のだつた、わざ〳〵千葉まで出掛けて救つて來た女を、平氣で外の男に讓らうとする遠野の心持も分らなければ、五十圓といふ大金を無造作に女に贈つて、後の處置は女の望みのまゝにさせようとする吉崎の量見も分らなかつた。

「久ちやん、さう極めたの」と訊くと、

「私何だか分らなくなつちやつた」と、女は投付けるやうに云つた。

寢たり起きたり、女と二人きりでゐたり、主婦を交へて世間噺をしたりして、遠野は日暮れまで其處で過した。明るい日に曝された女の顏には艷も香ひもなかつた。長い間の不規律な淫らな生活に、若々しい命も荒らされて、まて二十歲だと云ふのに、鼻のあたりに、ともすると老婆染みた影が萌してゐた。遠野は今更のやうにそれに目をつけながら「おれはまだこんな女の心中の相手にはならないぞ。こんな女のために大切な一生の戀を燃盡してしまうのはあまりに情な過ぎる。おれはまだ若いんだ。萎(しな)びたざいむさい戀をして朽果てゝ溜るものか」と、華やかな美しい戀の姿を空想してゐた。

「ぢや、もう歸るよ。旅から歸つたら兎に角此處へ訪ねて來るから、さうしたらお前のこの後の樣子も分るだらう。手紙は此處へ宛てゝ寄越すよ」

さう云つて、ふと暇を告げて其處を出ると、痛いやうな寒い夕風が顏に觸れた。路次の雪解路に下駄を汚して電車道まで出たが、直ぐに下宿の方に向はうとはしなかつた。近くの雜誌屋の店先で旅行案內や二三の雜誌を買つた。眩しいほどに明るい大きな洋品店へ入つて、いろ〳〵撰好みをして中折帽子を

買つた。店の姿見に映つた自分の顏は瘦せて弱々しいのみか、髯がむしや／＼生へてゐたので、其處を出ると、直ぐに床屋へ入つた。さうしてゐる間に腹も空いて來たので、一二度お久や主婦と食べに來たことのある近所の天麩羅屋へ入つて、やう／＼心を落着けた。

料理の出來る間、遠野は火鉢を抱へて旅行案內を調べてゐたが、ふと、何かお久に言忘れたやうな氣がし出した。それが何であるのか、考へてもはつきり浮んで來ないけれど、焦躁さは何時までも消えなかつた。いつそ此處へ呼んで主婦と三人で賑かに晩餐を食べたら、言忘れたことも思出されるだらうし、別れ際がキツパリしていゝと思迷つてゐたが、意外に早く料理が出來て來たので、呼びにやる暇はなかつた。

て、手早く食事を濟ませて、兎に角本鄕の下宿へ歸つた。四五日つゞけて家を明けてゐたのに、手紙一本來てゐなかつた。机も火鉢も本箱も見るから寒さうだつた。火種を持つて來た下女に向つて、「留守に誰れも訪ねて來なかつたかね」と訊くと、

「新井さんが昨日だか一昨日だか入つしやいました」、と下女は答へた。

「さうかい」遠野は火鉢にどつさり炭を繼ぎながら、行きかけた下女を呼返して、「ぢや、新井さんに今遊びに來ないかつて電話を掛けてお吳れ」と言付けた。まだ眠られさうではないし、誰れかと話でもしてゐなければ夜が送れさうでなかつた。

來るといふ返事を聞いて、菓子だの茶だのと待遇の用意をして置いて、下宿の風呂へ入つた。……明日からはこんな濁つた狹苦しい湯に入らなくても、地の底から滾々と湧出る豐かな靈泉に漬つて身體の

毒氣も垢も洗流すことが出來るのだと、自から慰めて、碌々磨きもしないでざつと流したばかりで風呂から出た。

新井は綿の喰み出た古座蒲團に胡座を掻いてゐた。

「また此間から行衞を晦ましたね。一體何處へしけ込んでるんだい。矢張あの女の所か」と、のつけから冷かされると、遠野はニヤ〳〵して、

「さうでもないがね」と、言澀して、「女も深入りすると煩い事が出來て來て厭なもんだね。」

「君の女つて、どんなのだい。一度ぐらゐ僕を連れてつて見せて吳れたつていゝだらう」

「僕はもう彼女は止した。元々長く關係するほど價値のある女ぢやないんだよ」

「何だか眞に受けられんね」

新井の皮肉な目付は「嘘を云ふな」と云つてゐるやうだつた。

「本當さ。僕だつて自分が大事だからね。末の望みのないものに、何時まで關り合つてたつて損害を蒙つても詰らんぢやないか」。遠野はつとめてお久を取るに足らぬ女と思つて、自分の賢い處置を自から是認しやうとした。そして口でゞも强いて女の顏形などを惡樣に語つた。「あの女の身體にやいろんな病氣があるらしいし、頭も病的になつてゝいけない。僕はもつと快活な無邪氣な女が好きだよ、矢鱈に泣いたり絶望したり、哀れな話ばかり聞かされちや面白くないさ」で

「さうかね。……しかし戀となると、いろんな悶着のある方が面白いんぢやないか知らん。時々君に聞いた話によつて見ると、その女はいろんな男に關り合つて苦勞して來たらしいから、屹度相手にして與

味が多さうだがね。口說も甘いだらうし、乾度男を綾す呼吸を知つてるんだらう。……だから、君も今まで手が切れなかつたんぢやないか」

「さうでもないさ」遠野は此方の心を覘込むやうな相手の言葉を輕く受流したが、その言葉に刺激されて、夢のやうに過ぎ去つた此間までの濃かな女との關係が顧みられて仕方がなかつた。口數も自から尠くなつた。新井の言葉は一つ〳〵自分に苦痛を與へるばかりて、自分の偉い決心に力を添へては吳れなかつた。話を外へ移して友達の近狀など訊いて見たけれど、そんな事は倘更興味がなかつた。て、いつそ新井の側を離れて、自分一人て勝手な考へに耽つてゐたくなつたが、新井が遲くまて座を立たなかつた。そして、ともすると、「あの女」の事を面白さうに聞きたがつた。

（二）

昨日まて着古した衣服を脫棄てゝ、仕立直しだけれど新しいのに着替へた。新しい帽子に新しい足袋。遠野は起きると直ぐに身仕度を調へて、前夜必要な物を詰込んて置いた重い鞄を提げて玄關へ下りて行かうとすると、下女が手紙を持つて來た。「田口」とお久の苗字が記されてあつたので、一度部屋へ戾つて披いて見ると、

「…あのやうにほいなくお別れする時には、どうしても思ふことが口から出ないのです。私の性分てすからどうぞ惡く思はないて下さい。いろ〳〵考へましてあなたの仰有る通りに心を極めました。辛抱してあなたにお目に掛るまて待つて居りますから、御安心なされて下さい。末永くお忘れなさらぬやう

……」

とあつた。遠野は手紙を袂へ入れた。そして、俥の上でも屢々取出して讀返した。「あなたの仰有る通り」といふ肝心な文句の意味がどうも腑に落ちなかつた。自分はいろ〳〵の事を云つた筈だが、女はどれに極めたのだらう?。……吉崎に貢がれて、あの木山の二階で暮らせと云つたことかと氣付いても、女がさう極めたと思ひたくなかつた。……

大通りには軒並み國旗が掲げられてあつた。彼れはふと、「紀元節には朝から行く」と、お久へ宛てた吉崎の手紙に書いてあつたことを思出して、思はず胸を騷がせた。……「さう極めたのに極つてゐる」と、吉崎の今日の訪問と、お久の手紙の文句とを照らし合せて、最早疑ふ餘地がないやうな氣がした。

ても、停車場へ着いて切符を買つたり、賑かな待合室をうろついたり、汽車に乘つて席をつくつたりして居る間は氣が紛れた。同室の客の中には異樣な風體をした人が五六人もゐた。胡麻鹽の髮を長く垂れ黑いガバアンを着けて胸に妙なメタルを掛けた老人もゐれば、華美な法衣を着け黄ろい頭巾を着けた僧侶もゐた。軍人の側に若夫婦がゐたが、妻君の顏はあまり美しくはなかつた。遠野は一わたり車中を見廻して後、鞄から雜誌を出して讀まうとしてゐると、品川から入つて來た旅客の一人が聲を掛けて側へ座つた。香川といふ脊の高い風采の貴公子らしい如才のない男で、遠野とはさして懇意ではないけれど、たまに會つても何時も隔てなく話を仕掛けて、相手に快い感じを與へてゐた。

「御病氣だつたさうですね。もうおよろしいんですか」と、遠野は雜誌を閉ぢて、席をずらした。

「もう略々回復しました。此間中大磯へ行つてゐましたが、今日からまた鎌倉へ行きます。さう遊んで

ばかりゐても困るんだが、東京はまだ寒いからね」と云つて、香川は相手の窶れた顔付や粗末な身裝を見下して、「君は何方へ？」

「修善寺へ行かうと思つてゐます。吉奈とか湯ヶ島とかあの界隈の溫泉場を廻つて見ようかとも思つてゐます。」

「そりや面白いでせう。しかし溫泉場も一人だと退屈しますね」

「えゝ」遠野は同意しないらしい返事をして、日の照り渡つた廣々とした窓外を顧みながら、「吉奈の溫泉は妙な所ださうですよ。昔から子供の欲しい女が子種を取りに行く所になつてゝ、今でもそんな目的を持つた女が來てるさうですよ。よさゝうな男が泊つてると、旦那と聲を掛けて酒を飮まして吳れるつて云ふから面白いぢやありませんか。……溫泉場へ行つてもさう云ふことに出くわすと面白いですがね」

と、友人が戯談半分に話したことを誠しやかに語つた。

「しかし、お互ひのやうな弱い人間ぢや駄目ですね。種取りを見くびつてしまふだらう」と香川は笑つたが、異樣な乘客に目をつけて、「あ、あの人達は宗敎家大會に來てゐたんですね」と呟いた。そして、それを話題に上して、政治と宗敎との關係などを說いてゐたが、暫くすると、車內の溫かみに眠氣差したのか、頭を窓へ當てゝ目を瞑つた。

遠野は今自分で云つた種取りの話に新に興を覺えて、今度の旅先でそんな珍しい事件がありさうに待設けたりした。……五六日前に木山の主婦に唆かされて、千葉へお久を連出しに行く途中では、好奇心と勝誇つた氣持とで身體に勢ひがあつて、汽車の片隅に默つてじつとしてゐても、少しも無聊を感じなか

つたが、今は話てもしないてゐると、妙に寂しくて氣が滅入つた。汽車の進むにつれて、旅先の珍しい事件を空想するよりも、見捨てゝ來た煩い東京をのみ顧み勝ちになつた。

大船て香川に別れて後、遠野は座を直して、讀みかけの雜誌を取上げて、ところ〴〵へ目を移してゐたが、ふと「女の墮落する徑路」といふ二號見出しの長い記事に目が留つた。女の氣質を解剖して、一々實例を擧げて詳しく說いてゐる。そして釣込まれて讀んでゐると、どれも〳〵お久に似通つてゐるやうに思はれた。一時熱しても直ぐ醒めてどうしても一人の男を守つてゐられない女、あまりに歲の若い間に放逸な男に弄ばれたゝめに節操といふ考が發育しなかつた女、涙脆くて人に欺かれ易い女、頼りになりさうな男を見立てて身を堅めようとすると、前の男に付纏はれて望みの叶はない女。……遠野は一節每にお久の面影を紙上に浮べた。するとあの女の過去の生活も昨今の心持も、複雜て底深くて容易に計り知れないやうに思はれた。

最早外の記事は讀まうとはしないて、雜誌を下へ置いて、彼方此方と見渡すと、舊敎の信徒らしいかの胡麻鹽頭の陰欝な老人は、最初見た時と同じやうに俯目て行儀正しく腰掛けてゐる。造付けたやうに最初の位置から身動きもしてゐない。若い夫に小聲て何か云つてゐる若い妻君は、如何にも心が單純て甘味も鹽氣もなささうに見なされた。……て、遠野は知らず〳〵その妻君の目や鼻や肌をもお久に比較し出した。

「千葉から歸る時には、自分達はあの夫婦のやうに呑氣てはなくつて、人目を憚つてゐた。お久は向側の女の笑つた白付を恐れて、あの人は私が指環を一つも嵌めてゐないから輕蔑してるんだわ、ルビーの

だけでも殘しとけばよかつたと囁いたが、あの時は可愛相な氣がした。」

遠野はさう思ひながら、袂の手紙を取出して、更に讀直した。……「吉崎は今時分あの二階へ行つてゐるに極まつてゐる。おれの座蒲團を敷いて、おれの湯呑で飮んで」……遠野はふと目に浮ぶ忌はしい幻影を避けやうとして慌だしく向ひの空いた席へ座を移して、頭を窓へ凭られた。と、間もなく頭を持上げて煙草に火を點けた。

「汽車、中々退屈しますね。少しの違ひで急行に乘りそこねて、豫定の計劃を大變狂はせました」

側の商人らしい男は出拔けにかう話掛けて、遠野に火を借りた。

大仁から馬車で修善寺の川のほとりの宿へ着いた時は、最早日暮れ近かつた。旅立前には空が隈なく澄んでゐたのに、宿へ着いて外を見上げると、何時の間にか懶い雲がどんより流れてゐた。

座敷が極まると、遠野は直ぐに障子を開放して眺めを貪つたが、かねて空想して憧れてゐた土地がこんな所だつたかと騙されたやうだつた。……窓の直ぐ下には川底まで透いて見える澄んだ水がサラ〳〵音を立てゝゐる。向ひの小山には一筋の小徑がうねつて、頂には掛茶屋らしい建物が見えた。寺の屋根や旅館の二階が平凡に高低をつくつて心を惹付ける物は何處にもなかつた。面に觸れる風には春の氣もなかつた。

遠野は谷底へ一人突落されたやうな佗しさを覺えて、障子を締切つて、座敷の眞中へ寢そべつた。鞄にも手をつけないで、電燈の垂れた空間を暫く見詰めてゐた。

湯に入つて、珍しく二三杯の酒を飲んで晩餐を濟ましてから鞄を開けて、机の上に二三の書物を並いた。水音に掻消されるのか、あたりの部屋に客のゐるらしい氣色はしないで、遠く世を離れた靜かさが刻々に身に染みたが、さて書物に目をつけると、一つ〳〵の文字が皆都會の雜沓を鋭く連想させる種となつた。「家」といふ字「友」といふ字、「女」でも「男」でも、只書中の用語として見過してゐられなかつた。書物に描かれた世界をそのまゝに浮べられなく、自分の記臆にある人の姿や事件の經過が頻りに現はれたり消えたりした。て、二頁三頁我慢して讀みつゞけても、新しい智識は少しも得られなくて、徒らに氣根が疲れるばかりだつた。

「おれもこんなに頭が惡くなつてゐたのか知らん」と、遠野は自分の頰を撫でたり手を出して見たりした。そして、長い間の放逸の報ひに戰くと共に、その責をお久に脊負はさなければ得心が出來なくなつた。妖怪に交つて妖氣を受けて、何時か血汐の枯れた男に彼自身を比較したりした。

彼れは書物を閉ぢて、女中を呼んで名所案內と繪葉書とを取寄せた。新井など二三の友達に宛てゝ懷つこい文句を書いた後て、餘つた繪葉書をば木山の主婦とお久とに送らうかと宛名は書いたけれど、旅先を知らさないつもりでゐた自分の決心に對して、あまりに腑甲斐なく思はれたので、そのまゝ書物の中に挾んだ。

翌日は雨だつた。

遠野は雨を冒して案內記を手賴りに町外れへ出て、田圃道を橫切つて範賴の墓を訪ふた。昔の跡へは只小石が積まれてあつた。彼れは傘の下て案內記を開いて、簡短な範賴の記事と、村民が古英雄を哀れ

んて目印をつくつて弔つた由來書きを讀みながら、人の聲も鳥の音も聞えない周圍を見廻したが、この鎌倉時代の英雄とはあまりに縁が遠くて、さして回顧の情は起らなかつた。それよりも、雨に濡れ寒い野風に震へながらうろ／＼してゐる彼自身を憐憫に感じた。

て、案内記に事々しく書並べてある外の古跡や名所をば强いて見たくはなくなつて、足早に宿に歸つた。冷えた身體を湯で溫めてから、また繪葉書に向つて所在ない思ひを洩らした。

「春を訪ねて來たけれど、此處にもまだ春の影は差して居りません。君達と一緒だつたら」と、新井へ書いてやつたが、それと一緒に、お久や主婦へも、文句なしの繪葉書を送つた。

雨は一日小止みなく降頻つた。川は濁つて水量も增した。ふと一輪紅い椿の花がゆら／＼と流れて來た。

「川上に椿の木があるんですか」と、廊下を通つてゐる女中に訊いたが、「知りません」と、女中は膠もなく答へた。

遠野は湯に入つた後では、夜具を頭から被つて寢ころんで晝を送り夜を過した。が、しかし、それは何の休息をも彼れに與へるのではなかつた。

幾年目かで世間と關はりのない無爲と沈默とに浸つてゐるのだけれど、最早昔のやうにその尊い樂みも肅かな苦しみを心に覺ゆることは出來なかつた。……薄暗い汚れた狹苦しい部屋にゐても、一卷の書物に向つてゐれば、心は辭句の底から底へくゞつて、著書の導く所へ素直に連れて行かれたのだつたが。眠れない夜の床で暗闇を見詰めてゐても、魂のやり場を考へて合掌して淨土を念じてゐたのだつたが。

人目には興のない淋しい生活と見えやうとも、自分自身は笑ひ弄れてゐる他の人々の生活に物慾しげな目を向けたことはなかつたのだつたが。退屈などゝいふ恐ろしい忌はしい感じもさして經驗したことはなかつたのに。……久振りに得た今の無爲と沈默は、彼れの心を腐らせるばかりである。頭の中へ蛆を集らせるばかりてある。

彼れは夜具を被つてゐても、不潔な空想から逃げられなかつた。知つてゐる女知らない女、あるひはこの世にありさうてもない女を次から次へと呼出しては、ローマンスて色取られない戀を空に描いた。そして、そんな空な女共よりも姿形の見劣りするお久に對しては、懷かしむよりも、むしろ、お久風情に時と金と力とをむざ〳〵費やしたのが無念だつた。

「今は未練はないんだけど」と、自分て言譯しながら、金に未練が起つた。半年の間の心盡しの跡に未練が殘つた。自分が手間を掛けて安穩な境涯へ置いてやつた女を人手に渡した痴けた仕事を淡泊に見てゐられなかつた。千葉の料理店へ拂つてやつた前借だけは吉崎に出させた譯になつてゐるが、それ位のことては埋合せのつかう筈はなかつた。汽車の中ても侮蔑を含んだ目て見られたり、木山の茶の間て一人冷たい夜を明かさゝれたのだもの。……

彼れはいつそ兩國の停車場へ着いたときに、お久に別れて直ぐに下宿へ歸つて、女の身の振方については何も知らなければよかつたのにと思つた。こんな詰らない旅行をしたさに、お久のたくらみに乘つて、吉崎から金を取らうとしたのが過ちだつたと悔いた。……知らなくつていゝ事を見たり聞いたりしたゝめに、お久と他の男との關係が、今もあり〳〵と其處に映つてゐるやうだつた。甘たれた手紙を見

られて住所を見られ、顔形をさへ知つてゐられる吉崎は、意地惡いまぼろしとなつて、遠野の枕許に立つた。遠野は最早以前のやうにお久一人を思出に浮べることは出來なかつた。お久のいろ〳〵の表情や素振を思ふ度に、吉崎が絶えず女の傍に立つてゐる、座つてゐる、歩いてゐる、淺黒いキリッとした長目な顔に厭な笑ひを含んで葉卷を吸つてゐる。夫婦が輕薄笑ひをしてチヤホヤしてゐる有樣さへ、今見る如く浮んで來た。

て、彼れは屢々夜具を跳退けては、目を見張つて部屋の中を見廻した。……何時も〳〵谷川の音と雨垂の音ばかりで無人の境のやうに周圍が靜かだ。彼れは汽車で見た端然として冥想に沈んでゐた聖者の姿を思出して、その心が尊くなつた。羨ましくなつた。そして、一度失つた平和の取返されなくて、ますます奈落へ落ちて行きさうな自分を呪ひたくなつた。

（三）

翌朝早く起きて外を見ると、雨は昨日と同じやうに降頻つてゐた。遠野は誰れもまだ起きてゐないらしい幾つもの部屋の前を通つて、只一人湯殿へ入つて、もや〳〵した湯氣に包まれながら、浴槽の縁へ頭を乘せて、目を瞑つて無念無想の行を試みてゐたが、すると、間もなく其處へバタ〳〵と下りて來た二人の男が「さあ八時の汽車に間に合ふかな」と云ひ〳〵湯殿へ飛込んだ。その聲に促されて、遠野はふと、「おれもその汽車で立つことにする」と、俄かに勢ひづいて湯から上つた。幾日も繋がれてゐる筈だつた牢屋から、俄かに出て行ける許しを得たやうな悦しさを覺えて、手早く荷物を片付けながら、女中

を呼んで、

「八時ので歸るから、大急ぎで飯を出して下さい。もし間に合はんやうなら食べなくつてもいゝ」と云つた。

「もうお立ちになるんですか」と、女中が呆れたやうに訊返すと、

「急用が出來たから」と、遠野は言譯をしたが、何となく極りが惡かつた。着いた時には十日か二十日か、都合で一月もゐるかも知れぬと云つて、そのつもりで部屋を撰び、食料をも割引させたのだつた。直ぐ東京へ歸つてしまはぬまでも、少しでも東京に近い所へ移らうと、彼れは箱根から向うのいろ〳〵の土地を思浮べては、心忙しく仕度の出來るのを待つてゐた。

やがて俥て宿の門を驅出ると、頭が輕くなつて、胸の痞が下りるやうな氣がした。俥の輪の廻るにつれて自分を苦めたこの陰鬱な谷底から拔出られるのを、子供のやうに喜んだ。

大仁へ着くと、何處までの切符を買はうかと、發車時刻の迫るまで氣迷ひした。塔の澤か小田原か大磯かと極めかねてゐる中、咄嗟に札賣場へ寄つて、「鎌倉」までと口に出した。汽車に乘つて旅行案内を披いて見ると、鎌倉から東京までは僅か一時間あまりの距離しかなかつた。

雨は次第に霽れて、箱根を越した時分には、雲の裂目から冴えた光が煙つて、外は夜の明けたやうに明るくなつた。遠野はこのまゝ鎌倉をも通越して直ぐに東京へ歸りたかつたが、切符の手前もあるし、知人や自分に對しても何だか申譯がないやうな氣がして、兎に角大船て乘換えて鎌倉へ向つた。

鞄は停車場へ一時預けにして置いて、雨上りのすが〳〵しい空氣を胸一杯に吸ひながら海岸へ出て、

濕つた砂の上に蹲んで、泡を吹いて足許まで寄來る浪を眺めた。そして、これからどうしやうかと考へた。持つて來た旅費は幾らも使つてはゐないし、當分此處に滯在して、飽まで汐風を吸つて、元氣をつけて歸らうかと思つたが、五日十日と何によつて氣を紛らせて日を送らうかと、修善寺のたつた一日の經驗に照らして躊躇された。

と、ふと一つの望みの光が心の中に燦めいた。……「お久を此處へ呼寄せよう。一日か二日でも遊びに來させよう。只遊びに來いと云つてはあるひは來ないかも知れないし、今更此方からそんな事を云つてやるのは變に思はれるかも知れないけど、病氣で惱んでゐると云つてやれば、どうしたつて來ない譯には行くまい」

かう思ひついて、彼れは暫しの安らかさを得て、嘗て泊つたことのある材木座の旅館へ行つた。そして直ぐにお久へ宛てゝ手紙を書いた。「修善寺で雨に會つて冷へたゝめか風邪を引いて氣分が惡い。海岸の方が身體にいゝやうだから押して此處へ移つて來たのだが、汽車に搖られたゝめか、ますます〳〵發熱して、何も食べないで寢てゐる。宿の女中は氣が利かないし、心細くつて仕方がない」と書いて、これだけで察しるだらうとは思ひながら、念のために、「……お前は見舞に來て臭れないだらうか」と書添へた。八時何分の横須賀行の急行へ乘れば、一時間で來られることをさへ知らせた。

手紙は鞄を取りに行く俥夫に托して停車場のポストへ入れさせた。

手紙がお久の手に渡る時刻を數へたり、お久が驚いて主婦に打合せをして家を出掛ける有様を空想し

てゐると、遠野は催眠劑でも飲んだやうにうと〳〵と睡氣差した。て、晝間から寢床へ入つて、夕餐の知らせをも斥けて、修善寺の眠不足を取返すほどに快い睡りを貪つた。目が醒めると、鹽湯に漬つたり按摩を取らしたりして狂つた神經を安めるやうにつとめた。明日の八時の汽車でお久が來るに違ひないと待設けてゐると、吉崎のまぼろしがいくら鮮かに枕許に浮んでも、最早些しも心は亂されなかつた。……あの男の目を竊んで、女が此處まで來るのだと、思ふと淺黑いキリツとした長目な吉崎の顏も、昨日のやうな意地惡い力を失つて、その手紙の文句で想像した通りに薄のろくお目出たく見え出した。

「なに、あの女なぞ永く引寄せて置きやしない。あの女なぞ戀ひしいんぢやないけれど、只おれに骨を折らせた腹癒せに、わざ〳〵此處まで足を運ばせてやるんだ」と、遠野は自分自身に言譯した。

翌朝は屢々帳場へ下りては柱時計の針を見詰めた。散歩がてら停車場へ迎へに行きたかつたが、大病らしく知らせてやつたことを思ふと、平氣な顏して此方から出掛けるのは流石に極まりが惡かつた。女の着いた時だけでも病人らしい風を裝つてゐなければならなかつた。

が、汽車と俥とで費される時間をいくら過分に見積つても、此處へ着かなければならぬ時刻が來ても、女の姿はつひに見られなかつた。次の汽車〳〵と順送りに望みをかけたが、どれも皆空頼みに終つた。待つてゐると却つて來ないらしいから、いつそ家を空けてゐてやらうと、正午過ぎの汽車の着く時分にわざと宿を出て、暫く海岸を散歩して來たが、それも何の甲斐もなかつた。

「手紙を見て知らん顏してる氣遣ひはない」と、遠野はじれ立つ心を慰めてゐたが、すると、其處へ女中が端書を二枚持つて來た。木山の主婦のとお久のとだつた。見舞ひの文句と、出掛けられない言譯と

が書いてあるが、兩方をよく照らし合せて見ると、二人が相談の上て書いて寄越したとしか思はれなかつた。「お久は至急御介抱にまゐりたいと申して居りますけれど、當人事もその後氣分がはか〴〵しくありませんから、私が無理にも引留めて居ります」と、主婦のに書いてあつて、お久の方のには、逃げ出してもまゐりたいのてすが、さうもならず……」などゝ書いてある。

遠野は折角の企ての破れたのに落膽したが、端書の文句を一圖に疑ふ氣にはなれなかつた。……千葉から歸つた時のお久は半ば頭が狂つてゐた。木山の家へ着いて主婦の顏を見ると、張詰めた氣が一時に弛んだのか、聲を上げてわつと泣出して、あらぬ事をさへ口走つた。……正氣に返つた後ても、女の顏は眞蒼に衰えて、身を支える力さへないやうに疲れ切つてゐた。

て、遠野は自分の寂しい手頼りない今の氣持から推して、女の苦勞に堪へかねた惱みがしみ〴〵と感じた。愛したり戯れたり、助けてやらうと思つたり、行末を想像したりする餘裕はなくなつて、只女に會つて、互に似通つて寂しい氣持を二人てしみ〴〵感じ合つてゐたくなつた。

夕日が差して、障子に松の影が繪のやうに映つてゐたが、遠野は眩しさうに顏を背けて、旅行案内の發車時間を調べにかゝつた。

（四）

遠野は夜汽車に乘つた。重い荷物を持つて慌たゞしく彼方此方と小迷つて來た己れの愚かさを嘲つたり歎いたりしながら、寒い埃風の吹いて路の凍てゝゐる都へ後戻りした。新橋際のカフヱーて一杯の洋

酒を傾けて寒さを凌いで下宿へ歸つた。

木山の主婦の思惑が氣になつて、まさか病氣は噓だと云つて其處へ顏出しすることは出來なかつたので、お久へ宛てゝ眞實(まこと)空言(そらごと)をまぜて歸京した譯を知らせて、明日中に何處かそちらの都合にいゝ所で會ひたいから、時刻と場合を折返し知らせて吳れと書いて、「主婦には秘密にせよ」と添書して手紙を出した。

が、一日立つても二日立つても誰れからも返事は來なかつた。遠野は不思議でならなくて、三日目の日暮れ前木山の家の方へ出掛けて行つた。成べく主婦には會ひたくないので、小さい室數の多い近所の鳥屋へ入つて、俥夫に手紙を持たせて呼びにやつた。そして、必ず來るに違ひないと極めて、料理を二人前誂らへて銚子まで付けさせて待つてゐたが、やがて「お使がこれを」と、女中が差出した手紙は、此方から持たせてやつた手紙だつた。

「この方はゐらつしやらんさうです」と、女中は使の言葉を傳へた。

遠野はつと立つて玄關へ出て、いろ〳〵と俥夫に訊糺した。「二三日前に急に他所へ移つたきり顏も見せないし、居所も分りません」と主婦が云つたさうである。

聞いてゐる中、遠野はぶる〳〵と震へた。考返す力は失せて、一圖に身に受けた侮辱を感じた。「あの女を喰物にしてゐた主婦が、その行衛を知らんなんて、そんな馬鹿な事があるものか」と、今更のやうに主婦を憎々しく思つて、二三切生煮えの鳥を呑込んで、直ぐに飛出した。

帽子は歪んで外套の釦鈕は一つ〳〵ずり下つてゐた。目を据ゑて步いたが、彼れの目は道筋にある何

物をも明かには見てゐなかつた。主婦の愴々しい顔付や、お久や吉崎の面影がチラ〳〵映つてゐるばかりだつた。

木山の閾を跨ぐと、老人客と何か話込んでゐた主婦は、ふと厭な目付をしたが、直ぐに口元に笑ひを浮べて、

「何時お歸りなすつて？」と云つた。それが不斷に比べて如何にも空々しく、遠野の耳には響いた。

「先日（こなひだ）」と答へて、彼れは挨拶もしないで、帽子を被つたまゝ土間に突立つて、口早に尖つた聲で、「お久は何處にゐます？」

「あの女（こ）は一昨日でしたか、不意に出て行つたきり、些とも寄付かないんですよ。私も用事があつて一度會ひたいんですけど、居所を知らして呉れませんから、本當に困つてゐます」と云つて、主婦は仔細らしく眉を顰めて、「あなたの方へはお知らせしさうなものですがね」

遠野は太々（ふて〴〵）しい主婦の横面（よこつら）を撲りつけたく思ひながら、「主婦（おかみ）さんに分らなけりや、僕が居所を搜出して上げようか」と皮肉に云つた。

「さうして頂ければ結構ですがね」と、主婦は飽まで白ばくれて、「まあお上んなさいましな。二階も空いてゐますから」

「いや、今日は愚圖々々しちやゐられない。僕も何時までも馬鹿げた眞似はしないつもりだ」

遠野はふいと外へ出たが、われ知らず二階の方が顧みられた。……誰れもゐないらしく、障子を開放して、夜具や座蒲團が干されてあつた。黄縞の掛蒲團は遠野自身がよく着て寢てゐたので、座蒲團にも

見覺えがあつた。……其處の障子の間から覗いて見送つてゐたお久の笑顏をも彼れはあり〳〵と思出した。するとあの女が自分に對してさまで不實であらう筈はないのだからと、主婦の惡企みとのみ思はれたので、直かに女の手元へ手紙を屆けられないのが牴牾しかつた。

「今に見ろ、主婦に鼻を明かしてやるから」と彼れは渾身の力を、お久の住所搜索の一事に凝した。道で擦違ふいろ〳〵の女の顏や後姿にも自から目が注がれた。

彼れは下宿の方へ向ひながら、ふと姉の家に氣がついたので、引返して根岸まで行つて、かねて聞いてゐる和泉屋といふ西洋菓子屋を搜出した。立寄つて幾らかの買物をして、お久の居所を訊くと、

「分りませんです」と、機嫌のいゝ時のお久の顏に似通つてゐる雀斑の多い女が少し顏を紅らめて答へて、奥へ入つた。

遠野は重ね〳〵當てが外れるにつれて心はいよ〳〵昂奮した。最早命を掛けても在家を詰留めないではゐられなくなつた。今に今と一刻が惜まれた。下宿へ歸つて安閑と食事をしたり睡りに就いたり書物を讀んだりするのは、自分に關はりのない無駄事とのみ思はれた。

日は何時の間にか暮れてゐた。街上の燈光は彼れの目にゆらめいて、さま〴〵の物音はさも凶事が起つてゐるかのやうに聞えた。誰れの顏も陰鬱な色をしてゐた。……彼れはせめてお久の過去の話でもしてゐたくなつて、その話相手を求めるために、以前屢々お久に出會つた家へ行つた。其處へは暫く行つたこともなければ、一生にまたとその界隈へ姿を見せやうとは思ひも染めなかつた。

「まあお珍らしい」と云つて、小づくりな年増の女中が二階の奥まつた部屋へ案内してから、遠野の顏

を見詰めて、親切さうに「何處かお惡いんですか。何だか元氣がなさゝうですね」
「さうかね。僕は先日中旅行してゐた」
「さうですつてね。ちやんと知つてるんですよ」
「へえ、誰れが云つてたい」。遠野の目はギロッと光つた。
「昨日久ちやんが髮結ひに來た次手に一寸寄つて行きました。」
女中は氣輕にさう云つて、「まあお火を持つてまゐりませう」と、階下へ下りた。遠野は懷手をして坐つて新たな疑ひに苛まれてゐた。そして、女中が今にも自分を惱かすやうな話をしさうなのを恐れながら、一刻も早くそれを聞きたがつた。
「此方の方は電車で通るのも厭だなんて云つてた癖に、わざ〳〵髮を結ひに來たり、この家へ寄つたりして」と、女の愚かさをも感じてゐた。
「あの女も髷に結つてちやんとしてると、商賣をしてた女らしくありませんね」間もなく上つて來た女中は、火斗から火をうつしながら、言葉靜かに「お前さんも今度こそ確かりおしよ、何時までも若くちやゐられないんだからと云ふと、姉さん見てお出でよ、私だつて今度こそ迷やしない。石に嚙りついてでも辛抱しますからと、云つて居りました。私はあの女を妹のやうに傷はつてやつてゐましたから、堅氣になつて吳れるのが何より悅しいんですよ。あなたにはこれまでも隨分お世話になつたし、今度も何だかあなたに御迷惑を掛けたさうですが、自分でも遠野さんの御恩は忘れないつて、よくさう申して居りますよ」

二人に對して好意を持つてゐるらしい女中のこんな言葉は、只遠野の疑ひを濃くするばかりだつた。不快な想像を强めるばかりだつた。が、默つてゐた。

「初めの話の様子だと、屹度またあなたに御面倒を見て頂くんぢやないか知らと思つてましたの。久ちやんのためにはそれに越したことはありませんけどね。あなたのおためになることぢやないと思つてましたら、よく聞くと、あなたとは奇麗にお別れしたんですつてね。それがいゝですよ。あの女もあなたとは先々一緒になれる望みがあるんぢやないし、矢張自分に相應した人を守つて行くんだつて云つてました。」

女中は何氣なくから云つて、「今夜はどうなさいます」と話を外へ移した。が、遠野はその話には耳を留めないで、

「今度の男とだつて何時まで續くか分りやしないさ」と云つた。

「どうですかね。だけど當人は餘程安心してるやうてしたよ。小奇麗な家を一軒持つて女中を一人使つてゐるんですつてね。東京へ來て初めて自分の家が出來たつて悅しさうてした」

「何處にゐるのか知ら」遠野はつとめて冷淡な風をして冷淡な口調て云つた。

「何ても下谷の竹町とか云つてましたつけ。一度遊びに來て呉れつて、所番地も敎へて呉れましたけど……」女中は考へても思出せなかつた。

遠野は「下谷竹町」と聞いたゞけて、最早此處にゐる必用はなくなつたが、直ぐに出て行く譯にも行か

なくて、暫く興のない時を過した。

（五）

其處を出た彼れは、その足で木山の主婦を訪ねたが、以前よりも餘程心が落着いてゐた。遠慮しないで茶の間へ通つて、外套を着けたまゝ長火鉢の前に蹲んで、「竹町にゐるさうだよ」と云つた。
「へえ、さうですかね。私はよく存じませんですよ」
「おや、これから僕が竹町へ行つて捜して連れて來ようか」
遠野が今にも座を立ちさうにすると、主婦は慌てゝ止めて、「あなたがわざ〳〵入つしやらないでも、居所さへ分つてれば、私が行つて見て來ますよ。だけれど今夜お會ひなさらなくつても宜しいぢやありませんか。二三日中には屹度遊びに來るでせうから、その時直ぐにあなたにお知らせします」
「僕だつて急に會はなきやならんてことはないさ」。遠野は打勝つた氣持になつて、相手に對する憎しみも自から柔らいて、「主婦さんがいやに隱立てをするから、僕だつて意地になるんさ」と笑つた。
「私ゃ先つきは怖う御座んしたよ。剛い目付をして大變な權幕なんですもの」
主婦も心が融けたやうに、茶を入れなどして、旅行の話を聞いたり、自分達の辯護をしたりした。遠野は此處を離れたくなくて腰を落着けてしまつた。
「僕はまだ晩餐を食べないんだから、壽司でも取つて來て貰ひたいな」と云つた。
「おや、直ぐ誂えて來ませう」と云つて、主婦はふと思出したやうに、「私、一寸寄つて來るところがあ

りますから、お留守番してゐて下さいな」

主婦が出掛けた後で、遠野はランプを持つて二階へ上つた。見馴れた汚い火鉢と座蒲團とが片隅へ置かれてあるばかりで、彼れが買つた道具も女の持物も殘りなく外へ移されてゐた。……荒れた跡をしよんぼり見てゐると、先日までの自墮落な侘い生活が、涙ぐまれるほど懷かしい思出になつた。……温かい物を突合ひながら、女の過去の小說染みた身の上を聞いたこともあつた。女が手文庫を開けて、いろいろ男の色文を得意げに出して見せて、撰拔きの一つ二つを遠野に讀ませては、女自身火鉢にしなだれ掛つてうつとり聞惚れてゐたこともあつた。主婦がうろ覺えの唄を女に訊き〳〵、調子外れの三味線を彈いては興がつてゐたこともあつた。

遠野は押入れをも開けて見たりして、茶の間へ下りた。火鉢に手を翳して獨りじつとしてゐると、先日の夜がそのまゝに繰返された。……此處で待あぐんでゐると、便所へ下りた吉崎が、簞笥の側を横切つて階子段を上つて行つたのであつたと思ふと、あの男の面影が今も其處に動いてゐるやうに前に浮んだ。……女の秘術を知らないで、疑ひも惱みもなくて、只幸福に醉つてゐるあの男の心が羨ましいよりも齒痒くなつた。事情が露はに知れたら、あの男だつて心に痛みを覺えない筈はありやしないに。と、遠野は自分を見下してゐる傲り顏の吉崎を平氣で見過してゐられない氣がした。平氣でゐるやうにも、その不快なまぼろしが目の前に迫つて來て彼れの心を脅して仕方がなかつた。

「彼奴の使になつて、おれはのこ〳〵千葉まで女を連れに行つたやうなものだ」と、彼れは自分の愚かな好奇心で浮かと出掛けたことを齒嚙みして悔いた。

誂へた壽司は來たけれど、彼れはさして食べたいとも思はなかつた。二つ三つ卒氣なく嚥下して、横になつて、主婦の歸るのを待つてゐた。と、

「御免なさい」と、聞覺えのある女の聲がして表の戸が開いた。「主婦さん、今晩は」と云つて上つて來た。「ゐないのか知ら」と呟いたが、遠野の寢姿を見て、

「おや。あなたでしたか。主婦さんはお留守？」と、火鉢の側へ坐つた。

近所にゐる妾上りの請負師の妻君で、此處へは毎日のやうに出入りしてゐるのである。遠野はお久との關係をも、この女には殘らず知られてゐて、時々は冷かされたりしてゐたので、今のやうな場合には煙つたい氣持がしたが、爲樣事なしに話相手をした。

「この頃はどうしてらしつて？。久ちやんにはお會ひなさらないの」と、おさいは相手を弄ぶやうな態度で云つた。

「もう會やしないさ」

「あれつ切り。思切りがいゝんですわね。憎らしいほど仲がよかつたぢやありませんか。……私ね、よく主婦さんにさう云つて居たんですよ。私も一度あんな風に可愛がられて見たいつて」

「それほどに僕が女にのろいやうに見えたのかね」と、遠野は苦笑した。

「誰れものろいて云やしませんよ」と、おさいは面白さうに調子づいて、「あんなに可愛がつて呉れた男のためになら、私、命の一つや二つは棄てつちまはうと思ひますわ。世間にや薄情な男が多いんですもの。あなた見たいな親切な方には生命掛けて實を盡くさなきや罰が當りますさ」

意味ありげなおさいの言葉を遠野は素直には受入れて甘へてはゐなかつた。「あなたが酷い惚れてゐる女を棄てたりして」と云はれる方がむしろ氣持がよかつた。……すると、修善寺や鎌倉から未練臭い手紙を出したり、のこ〳〵此處へ訪ねて來たりしたゝめに、男の資格が棄つたやうな氣がして無念だつた。千葉から歸つた當時の決心通りに、二度と此處の閾を跨ぐんぢやなかつたのに。さうすれば主婦に對してもお久や吉崎に對しても、このおさいなどに對しても、少しも後目たい思ひなんかしないでよかつたのに悔らないで濟んだのに。……

と、ふと彼れは、自分の女々しい見窄らしい根性の耻かしさに、思はず涙を落した。

「あら、どうなすつたの」と、おさいは呆れた顔したが、相手を慰めやうとして、「久ちやんもあなたの事を忘れてやしませんよ。誰しも忘れられるもんですか。あれほど深くなつた仲ですもの」

「そんな話はもう止して下さい。何だか厭な氣がして仕方がないから」と、遠野は腹立たしげに云放つて、氣を取直して、「僕はあんな女が戀しくつて泣いたんぢやないんだ。僕の氣持はどうせあなたにや分らないんだ」

「さうですかね。私も餘計なお喋舌をして」

おさいはかう云つて口を噤んだ。座が白けて二人とも居づらかつたが、おさいはやがて、「主婦さんの遲いこと。何處をほつき廻つてるんか知らん」と呟き〳〵、遠野に挨拶もしないで出て行つた。

遠野も家へ歸らうとしたが、留守番を頼まれてゐながら出て行く譯には行かなくて、寢たり起きたりして、主婦の歸るのを待つてゐた。

出掛けてから彼此二時間も立つて、主婦は忙しく息を吐き〳〵歸つて來た。「本當に濟みませんてした。あなたは怒つてお歸んなすつたらうと思つてましたよ」と云つて、何處で誰れとどうしたなど〻遲くなつた言譯をして、

「今夜は泊つて入らつしやましな。二階へ行火を入れて上げますから」と、打つて變つた馴々しい口を利き出した。

「さうしてはゐられないが」と、遠野は座を立たうとしては立ちかねた。そして旅行前後の自分の心持などを隔てなく生眞面目に話した。

「あの女ぁ馬鹿ですよ。いろんな所へ行つてお喋舌をしたりして」と、主婦はお久が昔の知人の所へ近付くのを非難したり、「あの位の女なら世間に幾らでもありますよ。雪ちやんだつてあの女よりや脊かすらつとして姿がいゝぢやありませんかね」と、遠野に諦めさせやうとしたりした。

「さう。雪ちやんは一寸いゝ女だ」と遠野は相槌打つて、お雪の姿を目に浮べたが、さして興も起らなかつた。

（六）

主婦に引留められるまゝに、彼れは寢苦しい一夜を其處の二階で迯つた。あくる日も主婦の待遇に甘へて午過ぎまで茶の間で愚圖々々してゐた。今にもお久が遊びに來さうな氣がして、知らず〳〵心待ちにしてゐたのだつたが、何時までゐても果てしがないので、思切つて座を立つた。そして、立際に、

「主婦さん僕はもうこれつ切り此處へ來る折がないかも知れませんよ」と云つて淋しい笑ひを浮べた。
「何時も御禮ばかり致しました」と、主婦は眞面目臭く云つて、「お身體をお大事になさいましな」
「有難う。僕もこれで大望を持つてる身體だからね。さう〳〵粗末にや出來ないさ」
遠野は其處を出てから、新井の下宿へ寄つて、日を暮した。夕餐を呼ばれて新井と一緒に散歩して、夜遲く自分の下宿へ歸つた。
机の上には一通の手紙が置かれてあつたが、字面を一目見ると、彼れの胸はドキ〳〵した。裏には只「捨小舟」と書いてあつた。
「……何とも申譯が御座いません。あなたの御親切は死んでも忘れはいたしませんけれど、餘儀ない譯にて、この後お目にかゝれないかも知れません。どうぞ堪忍して下さいませ。その代りたび〳〵の御意見通り今度こそ眞人間になつて、決して〳〵またと身を崩しはいたしませんから、惡く思はないで下さい。私も何時まで兩親や親類の人達に一方ならぬ心配をかけてゐても、そら恐ろしく思はれますれば、この後はどんな苦勞をしても、奇麗に心を持つて世を渡りたいと思ひます。あなたが御出世なされて柔しいゝ奧様をおむかへなさるやう蔭ながら祈つて居ります。まだいろ〳〵申上げたいのですけれど、筆を取るとあなたのお顏が目について涙が落ちて仕樣がありません。どうぞ堪忍して下さい。――本山の家へはお出掛けなさらぬ方がよろしいと思ひます。あのお神さんは見掛けほどいゝ人ではありません」
例のいら〳〵したしどろもどろの調子とは異つて、厭に改まつた他人行儀の書振りを見たゞけでも、女が彼れに背いたことが感ぜられた。吉崎との關係や今の住所は無論書いてはゐなかつた。

遠野は愬つかこんな手紙を女から寄越されたゝめに、稍々鎭まりかけた心が擾亂された。……何故今日不意に手紙など寄越したのだらう?。今更自分の平和らしい生活を鼻に掛けたりしてと、前に置いた手紙を見詰めてゐると、解きがたい疑ひが留め度なく文字の間から湧上つた。

「私は死ぬやうなつらい目に會つて居ります。助けて下さい〳〵」女が千葉からから訴へて來た時には、女の境涯を想像しながら、却つて安らかに睡りに就けたが、女の平和な境涯は想像するだに堪へられなかつた。

遠野はまたも寢苦しい夜を送つた。……物狂ほしい思ひを打消さうとつとめてゐると、氣根は盡き果てゝ、目が醒めてゐるのに、男女の忌はしいまぼろしが動いてゐるやうに見えた。吉崎の面長な淺黑いキリッとした顏がまざ〳〵と其處に浮んだ。……彼れは爭ふ力もなく、いつも一思ひに頭を打碎きたくなつた。

マッチを擦つて、ランプを點けたが見廻はすと、彼自身の影が大きく壁に映つてゐた。

夜が明けて、朝日の光て、も一度手紙を讀返した。そして、返事をやらうとして筆を執つたが、自分の心持は自分でも明かに分らなくて、文字によくは寫されなかつた。再び昔のやうな關係を取返したいのでもないし、このまゝ女の幸福を祝つてやる氣にもなれないし、只、「も一度會つて快く別れよう」といふ意味を管々しく書立てた。……いろんな人間から噂を聞かされたりしてゐるよりも、直かに會つて話させすれば、疑ひは手易く融けて、腐つたやうな未練氣も消えてしまひさうに思はれた。女に會つて男ら

しく鷹揚に女をあしらふ有様を想像すると、一度失つた力が再び心の中に湧上つたやうに感ぜられた。

「兎に角木山の主婦などの手を經ないで、直接に女に手紙を渡して會ふことにしなければならない」と、遠野は上書に下谷竹町と記したが、先方の宛名はどう書いていゝか分らなかつた。表札にはお久の名前を出してゐるのやら、吉崎の名前を出してゐるのやら、それとも僞名にしてるのだか見當がつかなかつた。

て、彼れは宛名を搜すといふ口實をつくつて自分の心に言譯して、下宿を出掛けた。そして、竹町を一軒毎に表札を見て歩いた。路次裏の小さい家でも、電車の騷がしい煤煙の吹付けてゐる家でも、この界隈のどの家でも床しくて住みよさゝうに見えた。訪ね倦んで交番や差配でも訊いた。どうしても分らなくても、彼れはなほ立去りかねてまごまごしてゐたが、ふと郵便配達に行會つて訊くと、

「吉崎といふ家は二軒ある」と答へて、方角を教へて呉れた。

「この頃越して來た家ですが」

「ぢや、直ぐ其處ですよ」

かう云つて指差さゝれた方へ、遠野は歩いて行つたが、その邊は一度注意して見て廻つた所だつた。目差してゐる名前は見つからないで、貸家札の貼付けられた家が目を惹いた。どうもそれらしいので、直ぐ隣の門口で八百屋と戯談口を利きながら、野菜を撰分けてゐる女に向つて、吉崎の事を訊糺すと、

「その方はほんの四五日ゐたばかりですよ。昨日の朝急に引越しました」と答へて、その女は遠野の顏をじろじろ見詰めた。

「引越先は分らないてせうね」遠野は無駄と知りながら重ねて訊いたが、ふと思付いて、「此處へは四十格好のよく肥つた脊の低い女が訪ねて來ませんてしたか」

「えゝ。そんな女の方が最初家を見に來ましたよ。丁度手ごろの家だつてその方が極めて行つたんてすよ」

「さうてすか」

遠野は禮を云つて、逃げるやうに大通りへ出た。……女の行衞を最早捜出す方法のなくなつたのを悲しむより、主婦(かみさん)やお久や皆んながぐるになつて自分を疎外して侮辱を加へてゐるのがむか〳〵と頭に浮んで、目も眩めきさうだつた。「おれは皆んなが思つてるやうな淺間しい卑しい男なんだらうか。」と、皆んなからさう取られてゐるのが無念だつたが、侮辱されたまゝて默つてはゐられなかつた。と、ふと其四國町の吉崎の住所が記憶から浮んだ。其處に突當るより外、お久に近寄る道は見付からなかつた。……彼れはそれに氣付いたゞけてもいくらかの慰めが得られた。凡ての物を攪亂して、自分も闇の底へ沈んで行く無氣味な快感が覺えられた。安全な地に立つて此處を冷笑してゐる者共の足元を掘崩して、自分と同じ淵の中へ引摺込んてやらうと思つた。

で、彼れは近所の文房具店へ寄つて、卷紙を買つて、お久と吉崎とに宛てた手紙を書いて、同じ封筒に入れて、吉崎の所へ送ることにした。「これをお久へ渡して呉れ」と、吉崎には云つてやつて、主婦の差金て女の動いてゐた事をも剔出しに知らせた。……そして、ポストへ投込んて、下宿へ歸つたが、郵便の配達される間の時刻が、毒藥の利目(きゝめ)を待つてゐるやうな氣持て待設けられた。

「主婦はおれが下谷竹町の居所を云つたのに驚いて、あの晩おれに留守居をさせて、お久の所へ知らせて行つて、急に外へ移轉させたのに違ひない。それには吉崎を甘く丸めたのだらうが、この手紙を見たらどうしたつて言譯の道はありやしない」と、遠野は一種の誇りを感じながら、今日まで吉崎が女に對して何等の疑ひを持つてゐないらしいのを不思議に思つた。……自分が半歳の長い間女を疑はなかつた愚かをも今更のやうに感ぜられた。……よく信じ合つてゐられることだ」と、世間のいろんな男女關係にさへ思及んで、誰れも彼れも愚かな面(つら)に見え出した。

(七)

「一寸お出て下されたく、至急お目にかゝりたく候」といふお久の手紙を俥夫が持つて來た時には、遠野は早寢の床に就いてゐた。ぼんやり待設けてゐながらも、出拔けに起つたことのやうに驚いて、手早く衣服を着けて下宿を出た。俥夫に隨いて行くと、お久は薪を積上げた薄暗い酒屋の軒下に佇んでゐた。顏色は一層青醒めてゐたが、丸髷に結つて服裝(なり)も立派だつた。

女は俥夫に使賃をやつて無言で歩き出した。遠野も默つて隨いて行つた。暫くして、「何處へ行くんだい」と訊いた。

「何處へでも」と、女は冷淡に低い聲で答へて、男に構はず俯目勝ちに歩いた。

「いゝ所もないね」男の方でも緩くり心置きなく話の出來る所が思當らなかつた。「もう遲いしするから矢張木山へでも行くかな。厭だけれど」

「えゝ」

二人は口を噤んでその方へ向つた。電車に乘つても、互ひに目を背けて相手の顏は見なかつた。

主婦は連立つた二人の姿を見ても、さして驚かなかつた。「どうしたんです」と、わざと何も知らないやうな口を利いて、燈火を點つけ二階へ導いた。

お久は男から離れて坐つて、暫く唇を堅く閉ぢて首垂れて、心を鎭めてゐたが、やがて尖つた聲て、

「あなた私をどうしやうと思つて？」と云つて顏を上げた。狹い額がこの時の男の目には嚴つく見えた。

「お前こそどうしやうと思つてるんだ」遠野は無意味に問返したが、何となく心に餘裕が出來てゐた。

「お前の方で居所を知らせてないから、あゝてもしなきや返事が出せないぢやないか」と、尤もらしく云つた。

「返事を貰はうと思つて手紙を出したんぢやないんだわ」

「お前が困つたつて仕方がない。自業自得のやうなものだ」

「勿論さうですとも。あなたを信用して正直に何もかも明かしたのが惡かつたんだから」と云つたが、女は何時か涙ぐんで、「私、これまでよくこんな目に會つたけど、あなたばかりは外の男とは違ふと思つたのが惡かつた。……どうせ堅氣になつて世間の女のやうに澄まして暮して行かうたつて、私にや駄目だわ。今度こそと迷はない覺悟をしたつて何時も傍から故障が起つて來るんだもの」

「ぢや、お前はもうあの人と一緒にゐられなくなつたのかい」

「どうだか」と、女は他人事のやうに空々しく云つたが、暫くして、「私、あの人にあなたの手紙を見せ

られた時には、吃驚して卒倒しさうだつたけど、洗ひ曝し云つちまうと却つて氣がせい〳〵しちやつたの。隱立して樣子振つてるよりは結局氣輕になつていゝんだわ。……だけど可愛相に落膽した顏してよいと行つちやつたんだもの。……今時分心配してるだらうと思つてよ」

女はさう云つて、遠野のやつた手紙を袂から出して突付けた。そして、男が讀みもしないで手荒く引裂くのを見ながら、「でも、あなたが強請の種にしないだけがまだしもよ。それだけが敎育のあるお蔭だと思つてよ」と冷かな笑ひを浮べた。

「そして、今日おれを呼んだのは何のためなんだい」

遠野は女の苦しみが案外に輕く過ぎて行くのに呆れた。見るから弱々しい身體の何處に、そんな根太い力が潜んでゐるのかと恐ろしかつた。

「何のためつて、あなたが會ひたいと云つて御自分で手紙を寄越したぢやありませんか」と、女は竹篦返しに責めた。

「奇麗に別れやうと思つたからさ。主婦さん初めおれを寄付けんやうにするから、意地にでも會つてやらうと思つたのさ」

「だつて、また會つたりしちや奇麗に別れられやう筈はありませんさ。私も奇麗に身を持たうと思へばこそ、あなたなんかが怖くつて逃隱れしてたけど、今となりや何ともないのよ。……今私達のゐる所を敎へて上げていゝのよ。……本當に馬鹿だつた。昨日慌てて貸間を捜して引越したりなんかして」

「おや、もう吉崎とも一緒に暮されなくなつたのか」

「當り前ぢやありませんか。そりやあの人が私の秘密を知盡した上で、それでも許して呉れて世話をしてやらうと云ふのなら、一緒にゐないこともないけれどね。私、もう今までのやうに御機嫌ばかり取とつて小さくなつちやゐないさ」。

女はさう云つて、「あなたお酒を飲まない?。私今夜は久振りに飲みたくなつた」と、階子段の側へ寄つて、主婦を呼立てて賴んだ。

「御酒なんて飲んで、お前さんどうするの」主婦は上り口から顏を出して氣遣はしさうに云つた。

「文句をお云ひでないよ」と、お久は狂人染みた聲を出して、「今夜お酒を飲まなくつて何時飲む時があつて?。吉崎さんが呼びに來たら、醉拂つて行つてやるさ」と云つて、トン〳〵階子段を下りた。

遠野は狐に抓まれてゐるやうな氣がした。氣味の惡い夢に魘されてゐるやうな氣がした。打碎いたつもりでゐた女の心はます〳〵力を増して、自分はその前に虐げられて縮こまるばかりだつた。以前この部屋で女が誠しやかに泣いたり笑つたり甘へたりしたことさへ、只氣まぐれな空言として顧みられた。眞實の影は何處にも索り當てられなかつた。

自分で銚子を提げて來たお久は、主婦が膳立てするのをも待たないで、男に猪口を差して、自分も二三杯矢繼早に飲んだ。

「お前はおれを恨んでもゐないのか。これからどうする?」

「先つき云つたぢやないの」と、女は早くも醉つたらしく目をとろりとさせて、「そんな怖い目をしないで頂戴、後生だから。……あなたを恨んでやしませんよ。安心してらつしやい、化けて出りやしないし

さ」。

「化けて出られた方が頼もしいぐらゐだよ。おれの目よりやお前の根性の方が恐ろしいよ。おれも吉崎も手頼りにならなくなつたのに、よく平氣でゐられるね」

「平氣でもないさ」と、女はふと溜息を洩らしたが、「實があるのないのと、男の心を詮議立てするのは詰らないことだと、私つく〴〵思つてよ」

「…しかし、おれは此處で別れてから、五六日の間は生れて初めての苦勞をしたんだ。壽命の半分は縮まつたやうな氣がするだが」と、遠野は最早體裁を繕らう張合もなく、旅から贋病氣の手紙を出したことなどを靜かな調子で有のまゝ語つた。

が、そんな話は女に何の感じをも與へなかつた。「さう？」とか「へえ」とか、事もなげな相槌を打つて聞終つて、

「だつて私も、今度こそ堅氣になりたかつたから、あなたに會つちやいけないと思つたんですさ」と云つて、「あゝ、もう煩い。そんな話は止しませう。もつと面白い話をしなさいな。…虚言でもいいぢやないの」

女はつと立つて、階子段の途中まで下りて、頓興な聲で、「主婦さん、虚言吐きの主婦さん入らつしやいな。また三味線でゝも彈いちやどう？。私千葉で面白い唄を覺えて來たのよ」。

グラ〳〵笑つて元の座へ戻つて、「主婦さんはブツ〳〵云つてるのよ。可笑しな人」

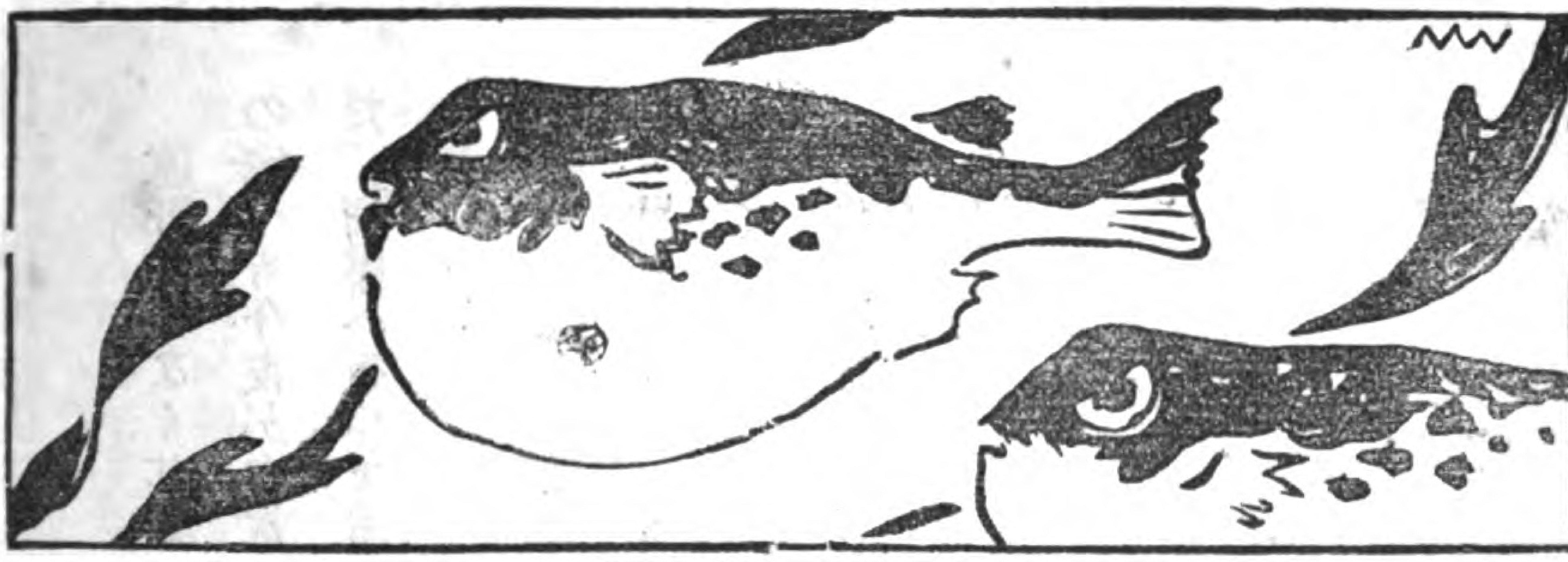
遠野は目の縁を紅く染めながら、興は醒めて默つてゐた。

「あなたも私に惚れてたんだわね。可笑しな人。私だつて惚れてたこともあつたんだけど……」

遠野は程なく其處を出たが、苦い酒を知らず〳〵飲過したので、頭が痛んで目がくら〳〵した。「木山の家へも今夜が本當の最後だつたのだ。お久を捜したり苦しめたりすることさへ今夜で終りを告げたのだ。何處へ行つても居所を知らせて上げるから、會ひに來て呉れと云つてゐたけれど、只會つたつて何にならう？」

彼れはふと吉崎の淺黑いキリッとした顔を思浮べて、相憐れむやうな氣持になつた。そして、下宿の方へ足を向けながらも、自分の部屋へ歸り着きたくなくて、池へても河へても、見つけ次第に飛込みたく思はれた。

無事に明日の朝日が見られやうと彼れは望みもないし、また望んでも甲斐がなさうだつた。



俳諧亭句樂の死

吉井勇

人物

小しん、　盲目の落語家。
焉馬、　落語家。
柳橋、　同。
おたつ、　小しんの女房。
山崎新太郎、　青年。
おぎん、　新太郎の情婦。
おとし、　句樂の妹。
蝶丸、　盲目の新内語り。
おせん、　蝶丸の女房。

場所

東京、淺草。

時代

現今。

藏前附近の大川の河岸に近きところ。中央より稍上手に寄りて盲目の落語家小しんの家。古き家なれども數寄なる造作にして四疊半と六疊との二間つゞき。上手の四疊半の座敷の正面には椽側ありて障子を閉め切る。上手に襖の出入口ありて臺所に通ず。壁に古き顔見世の番附など貼り付けあり。柱には句樂の「五月晴ややうゝ湯錢酒の錢」と書きたる短册を懸く。下手の六疊の正面は半窓。窓には障子を閉め切る。長火鉢茶簞笥など置く。下手に格子戸。

格子戸の前は狹き路次。その突き當りは直ぐに大川の河岸となる。路次の此方に船宿の一部現はる。軒に太き字にて「網德」と書きたる四角なる行燈を懸く。三月の始めの或る月夜。路次の彼方に大川の水の面の銀の如くに光れるが見ゆ。

（小しんとおたつとは長火鉢に向ひ合ひて坐りゐる。小しんは三十歳位の瘦せたる男。盲目にして啞。絶えず憂鬱なる表情を續く。たとへ快活なる言葉にて語る時ありとも。おたつは二十七八歳位の女。小しんの女房。小しんはおたつに本を讀ませて一心にそれを聽きゐる。）

おたつ。（低き聲にて本を讀む）「その時風來山人手に持し羽扇を與へて曰く。是はわが仙術の奥義をこめし團扇なり。抑この團扇を以てあをげば、暑き時は涼しき風出て、寒き時は暖かなる風を生じ、飛ばんと思へば羽ともなり、海川にては船ともなり、遠近を知り幽微を見る、身を隱さんと思へば忽ちにして見えざる、奇妙稀代の重寶なり。以て天地の間を往來し、諸國の人情を知るべし。汝が修業成就して、再びこの土に歸りし時、また對面をなすべし。さらばさらばと云ふ聲は、障子に殘る風の音、淺之進は茫然と光明院の窓の内に、眠るともなく覺むるともなく、机にかゝりてもとの如く坐し居たるに、側を見ればかの夢中に授かりし、羽扇ばかりぞ殘りける。」（つまらなさうに。）何だい。ちつとも面白くないぢやないか。

小しん。馬鹿云つてやがらあ。これからが面白くなるんだ。しかしま

あ今夜はそこまでにして置かうよ。

おたつ。さうかい。私はもつと讀んだつて厭はないよ。しかしこの前讀んだ「梅暦」の方が餘つ程面白かつたね。

小しん。(寂しげに笑ふ。)「梅暦」を讀んでゐる時分は。おれがもう好いつて云つても聽かずに讀んだな。しまひにゃ文句まで覺えつちまひやがつたじやねえか。

おれも昔は「梅暦」が好きだつたが——

おたつ。おや、おや、大變年寄染みたことを云ひ出したね。

小しん。(何事か思ひ出して。)あの時分は面白かつたなあ。おれと句樂と焉馬の三人で、ずゐぶんいろんなことをして遊んだものさ。それが今じやあおれがこんな盲目になるし。句樂は狂人になりやがるし、達者なのは焉馬ばかりだ。

おたつ。何だね。今更そんなことを云つたつて仕方がないじやないか。

小しん。うん。(間。)さう云やあ句樂はどんな樣子だらう。この四五日あんまり好くねえつて話だが、まだ死にやあしねえだらうなあ。

おたつ。何しろあんな病氣だからねえ。何時どんなことがあるか知れやしないよ。一昨日もおとしさんが來て話してゐたが、相變らず不動樣ばかり拜んでゐるのだとさ。

小しん。ふん、おとしさんが來たのかい。一昨日と云やあおれが山崎の若旦那の所へ往つて留守だな。あいつの不動樣も久しいものだ。一昨日も若旦那とあいつの不動樣の話をしたんだが——何しろまだ死なせたくねえものだな。今時あの位の落語家はありやしねえ。そりやあずゐぶん飲んだくれの怠惰者だが、あれであいつの云ふことは變つてゐて面白いよ。(悲しげに溜息を吐きて。)句樂が死んでしまつたらどんなにこの世の中が寂しくなるか知れやしねえ。

おたつ。しかしあんな狂人になつてしまつてはもう仕

方がないね。何しろ可哀さうなのはおとしさんさ。兄さんの看病で夜の目も寢ないものだから、一昨日來た時なんぞはすつかり疲れてしまつてゐるのさ。

小しん。あの女も不仕合せな女さね。女郎に賣られてさんざ苦勞をした揚句が、あの兄貴があんな有樣なんだらう。何時まで苦勞するのだか分らねえやうなものだ。（しんみりしたる調子になりて。）おとしさんばかりぢやねえ。おれはお前にも濟まねえと思つてゐるよ。こんな盲目を亭主に持つて、さぞ世話が燒けるだらうが、まあ何かの因緣だと思つて辛抱してくんねえよ。

おたつ。何を云つてゐるんだね。そんな澤市のやうなことは云つこなしさ。

小じん。（わざと涙を紛らすやうに笑ふ。）到頭澤市にされつちまつたな。

（二人は寂しげに笑ふ。）

下手より焉馬と柳橋出づ。二人とも落語家。焉馬は三十五六歳位。柳橋は四十七八歲位。二人とも稍酒に醉ひゐる。焉馬は手に竹の皮包をぶら下げゐる。）

焉馬。（格子戸を開けて。）如何したい。久しく會はなかつたな。

小しん。誰だ。焉馬か。まあ上んねえ。

焉馬。うん、柳橋さんと一所なんだよ、何だかいやに沈んでゐるぢやねえか。（座敷に上つて。）おい、おたつさん。うめえものを持つて來たぜ。（竹の皮包を渡す）

おたつ。何だい、焉馬さん。（開きて。）おや、おや、鰒だね。

柳橋。（座敷に上つて。）今そいつて一杯やつて來たところさ。

小しん。鰒か。そいつは難有てえ。早速一杯やらかさうぢやねえか。おたつ、酒の支度をしてくんねえ。（二人に向ひて。）一體今日は何處の歸りなんだね。

（おたつは上手へ入る）

柳橋。なにね、今日は句樂の病院へ二人て見舞に往つ

て來たんだよ。
小しん。今日はまた席(せき)を拔いたんだな。何しろ二人とも席を拔くのは名人だぜ。
焉馬。お前さんだつて昔はあんまり拔かない方でもなかつたぜ。
（焉馬と柳橋は上手の四疊半の方へ來る。勝手に座布團を出して敷く。）
小しん。（獨語のやうに。）もうおれは高座の湯の味も忘れてしまつたなあ。考へて見れば席へ出なくなつてから、もうかれこれ二年になるぜ。
柳橋。もうそんなことを云ひなさんな。（慰めるやうに）句樂はあんなに狂人になつても、お前のことばかり云つてゐるんだぜ。なあ、焉馬。今日も句樂は小しんのことばかり云つてゐたな。
焉馬。うん。（小しんに）何だか今日はお前と遊んだ時のことを話してゐやがつたよ。その時はあいつの目には、まるで紫君とお前との二人しか見えねえやうなのよ。あいつが死んだ紫君がまだそこにゐるつもりて、何か口說見てえなことを云つてゐやがるのを聽いてゐると、おりやあ可哀さうになつて涙がこぼれたよ。
小しん。句樂はまだあの女のことが忘れられねえんだなあ。
焉馬。それからお前に云つてゐる話と云ふのが面白れえんだ。何でもお前が盲目になつたのを、慰めてゐるやうな樣子なんだが、その文句が不思議な文句さ。
小しん。へえ、ひとつその文句を伺ひたいものだね。
焉馬。何でも人間にやあ目なんてものは入らねえ。みんな目があるから本當にものを見ることが出來ねえんだ。それだからお前は盲目になつたから仕合せな男だ――とかう云ふんだ。さうして句樂は今に法律を作つて、日本中の人間はみんな盲目にしてしまふ。何でも大きな役所を作つて、そこで大勢の役人が片つ端から、呼び出した人間の目を潰すんださう

だ。

小しん。（皮肉に笑つて。）自分の目は如何する氣なんだらう。

焉馬。お役人に目を潰されるのは氣が利かねえから、おりやあ自分で潰してしまふんだつて云つてゐたよ。

小しん。成程ね。盲目になつた方が仕合せかも知れねえなあ。

焉馬。さうして今日はずゐぶん饒舌つてゐやがつたが、聽いてゐて何のことだか分らねえことの方が多いんだ。（柳橋に。）なあ、柳橋さん、どんなことを云つてゐやがつたつけな。

柳橋。さうさ、蝮の吉兵衛さんの話が大分出てゐたやうだつたぜ。（他の二人に。）蝮の吉兵衛さんつて一體何なんだね。

小しん。おや、柳橋さんは蝮の吉兵衛さんのことを知らねえのかね。芝の仕事師で小唄の巧かつた人のことだよ。

柳橋。へえ、お前はよく知つてゐるね。

焉馬。蝮の吉兵衛さんのことなら私だつて知つてゐらあね。

小しん。うん、お前もよく句樂から聽かされたなあ。さうしてその蝮の吉兵衛さんが如何したつて云ふ話なんですね。

柳橋。それが如何したつて云ふんだかよく分らねえのさ。何でも句樂が始めてその蝮の吉兵衛さんに會つた時の話らしいのだよ。

焉馬。全く小唄は巧かつたさうだね。句樂はよく云つてゐたぜ。あいつが生れてから以來、ああ生きてゐた甲斐があつたと思つたのは、その蝮の吉兵衛さんの歌を聽いた時だけださうだ。

柳橋。その人はまだ達者でゐるのかい。

小しん。もう疾うに亡くなつたとも云ふし、まだ生きてゐるとも云ふし、何だかよく分らねえんですよ。

何しろ狂人の云ふことだから當になりやあしませんよ。(上手の方に向ひて。)おい、おたつ、早くしねえな。

(おたつは酒の支度をしたる膳を持ちて上手より出づ)

おたつ。ほんとに何にもありませんよ。

小しん。まあ好いや。お持たせの鰒て一杯やらう。

焉馬、なあに酒さへありやあ澤山だ。

(おたつは上手の座敷に膳を置き、小しんを助けてその傍に連れ來る。)

小しん。(自分を嘲けるやうに。)盲目て蹇と來てゐるんだからたまらねえ。近頃は乞食にだつてこんなのはゐやしねえぜ。

焉馬。(猪口を取り上げて。)おや、こいつは八百善の猪口ぢやねえか。

小しん。うん、そいつは句樂が古道具屋で二錢で買つて來やがつたのよ。

焉馬。さうか。それぢやあこいつで一杯飲むとしよう。

(おたつは焉馬の杯に酒を注ぐ。三人は酒を飲み始む。三人とも沈默。稍長き間)

柳橋。如何したんだい。みんないやに滅入つてゐるぢやねえか。

おたつ。焉馬さん、お前さんまで今夜は沈んでゐるんだね。いつもの通りに騒いだら好いぢやないか。

焉馬。何ね。さつきから大分飲つてゐるんだが、如何も今日は醉はなくつていけねえのよ。

小しん。酒を飲んで醉はねえなんて、そんな篦棒な話があるものかな。

焉馬。よし來た。それならこれからうんと醉ふぜ。

小しん。ああ、好いとも。うんと醉ひねえ。いくら醉つたつて驚きやあしねえから――

柳橋。おりやあ驚くね。焉馬が醉つぱらつたと來ちやあ手が附けられねえんだからな。この間も二人で一杯やると、これがまた席を抜くやうなことになつたのさ。さうしてそこにお神輿を据えてしまつて、二人てふんだんに飲んだものなんだ。

小しん。何處てよ、一體——
柳橋。傳法院横丁の例のところよ。
小しん。（面白さうに笑つて。）またお菊さんの所へ往つたんだな。
焉馬。（小しんに。）お菊さんはお前に馬鹿な惚れやうをしてゐるぜ。なあ、柳橋さん。この間も小しんさんの目は如何かして好くならないかつて云つてゐたな。
小しん。（落語に出て來る通人の如き調子にて。）如何てげす。盲目になつても小しんには女が惚れやせう。
焉馬。（同じやうに。）それでも焉馬師匠には、あの女はぞつこん惚れてゐるんでげすからな。
小しん。（調子に乗つて。）さう云やあ焉馬つて男も可哀さうなものでげす。あの女に小しんと云ふ色男がちやんと附いてゐるんですぜ。
柳橋。（呆れたるやうに。）おや、おや、何が何だか話がさつぱり分らなくなつて來たぜ。
小しん。話つて云やあさつきの話の續きを聽きてえものだな。焉馬師匠大とらの段つてやつさ。大川亭柳橋先生、如何てす、一席やつて下さいな。
柳橋。（間を置いて）それからよ。あすこの家を出たのがもうかれこれ十二時なんだ。二人とも家へ歸るのは厭だし、何處か遊びに往くのには金はなし、仕方がねえからぶらぶら茶畑を通り拔けて、二天門の方へ歩いて往つたのよ。別に何處へ往くつて當はねえんだが、ひとりでに足の向いた方へ歩いて往つたものさ。こんな時は何でもするね。若しも惚れた女が死ねつて云つたら、死んだかも知れねえよ。
焉馬。（氣が無ささうに。）笑談云つちやいけねえ。
柳橋。それから馬道へ出ると、こいつが如何てえひとつ若旦那の所へ押し懸けやうぢやねえかつて云ひ出したんだ。おりやあもう晩いから止せつて云つたんだが、如何しても聽かねえ。仕方がねえからおれも一所にあの煙草屋を敲き起して、あの二階へ押し上つたものさ。

小さん。ふん、こいつは若旦那も驚いたらうなあ。
おたつ。全く焉馬さんに會つちやあ敵(かな)はないね。
柳橋。まあ、それまでは何でもないんだがね。
焉馬。もう止しねえな。あんまり面白くもねえ話だぜ。
小しん。（焉馬に。）まあ好いやな。（柳橋に。）それから如何したのよ。
柳橋。いや、それからが騒ぎなんだ。まあ歌つたり踊つたりしたまでは好かつたが、しまひにはこいつがあのおぎんさんに戯(からか)ひ始めやがつたのさ。それが醉つて執拗(しつこ)いと來てゐるからたまらねえや。あの氣の弱いおぎんさんのことだから、到頭泣き出してしまつたのよ。おりやあんなに困つたとはなかつたぜ。やつと引つ張り出してこいつの家へ送り込んで、家へ歸るともう夜が明けてゐるぢやねえか。何しろ若旦那の所へはちよつと顔出しが出來ねえ始末になつちまつたんだ。
小しん。（笑つて。）焉馬はいつも酒と女でしくじるなあ。もつともこれより外に能(のう)のねえ男だが——
焉馬。ひでえことになつたもんだな。
小しん。何もそんなに悄氣(しよげ)なさんな。そんなことは句樂は毎日やつて來たんだなあ。（急に悲しげに）しかし句樂もまだ死なせたくねえなあ。おりやあ目が見えなくなつてから、如何云ふものだかあいつの云つた言葉ばかり思ひ出されて仕方がねえ。あいつは全く唯の落語家ぢやあねえぜ。あいつの考へてゐることはみんな眞實(ほんと)のことばかりだ。盲目(めくら)にならねえ前には氣の付かなかつたことも、かうやつて盲目になつてから考へて見ると、あいつ位眞實のことを云つてゐたやつはありやしねえ。
焉馬。（不思議さうに。）さうかなあ。おりやあいつ位嘘吐きはねえと思つてゐたんだぜ。
小しん。おれも盲目にならねえ前は、やつぱりさう思つてゐたものよ。句樂のやつまた法螺を吹き出しやがつたと思つて、別段氣にも留めずに聽いてゐた

が、今考へて見りやあそりやあみんな眞實だつたんだな。全く不思議なやうに近頃はあいつの云つた言葉を思ひ出すよ。（考へるやうな顔付をして。）句樂はよくこんなことを云つてゐたらう。人間の靈魂つてやつは、硝子の罎見てねえなものだつて――あいつはほんとだぜ。おれは盲目になつてからその硝子の罎見てえなものが、目の前にちらついて仕方がねえんだ。

柳橋。變なことを云ひ出したな。句樂見てゐなことを云つちやあいけねえぜ。

おたつ。ほんとに近頃は餘つ程云ふことが變なんですよ。

小しん。それが凡夫の淺猿しささね。おれの云ふことが變に聽えるやうぢやあ、まだまだ中々句樂の云ふことは分りやあしねえよ。

焉馬。おい、もうそんな話は止しねえな。それより飲んでうんと騒がうぢやねえか。

小しん。まあ、待ちな。もう少しおれの話を聽いてくれても好いだらう。（間。）それからまた句樂がこんなことを云つたことがあるんだ。この世の中位馬鹿々々しい所はねえ。何が嘘で何が眞實だかまるつきり分りやあしねえ。しかしその中でたつたひとつ誰でも眞實にしてゐることがある。そりやあ死ぬつて云ふことだ。

（焉馬はつまらなさうに低き聲にて歌を歌ひゐる。）

柳橋。死ぬなんて話は止さうぢやねえか。

小しん。それぢやあこの話は止めにしよう。だが如何だい、今日の句樂の様子は――

柳橋。今日大變元氣だつたぜ。おれ達があいつの部屋に入ると、丁度あいつは本を讀んでゐるところさ。何を讀んでゐるのかと思つて見ると、それは例の風流志道軒傳なのよ。

小しん。（驚きて。）おや、おれもさつきまでそいつを讀んでゐたんだぜ。

柳橋。（同じやうに驚きて。）さうかい。そいつは不思議だ

な。（間）それから三人でいろんな話をしたんだが、相變らず句樂のやつは傍に紫君がゐる氣でゐるらしいんだね。またいつもの通り蝮の吉兵衛さんの話をする時分になるともう分らねえ。小猿七之助だの、鳥追お松だの、しまひには白井左近まで出たつけ。そのうちあいつは如何云ふ氣だか運座をやらうつて云ひ出しやがつたのよ。

小しん。さうか。運座をやつたのか。

焉馬。（柳橋に代りて話し續く。）やつたことはやつたが、句樂の句が面白れえのよ。なあ、柳橋さん。何とか云つたな。句樂の句は——

柳橋。さうよ。さつきまで覺えてゐたんだが——ええと、ひとつはかう云ふんだ。グランドの植ゑし櫻は燕枝かな。如何てえ、何だかさつぱり分らねえだらう。

焉馬。それからもうひとつ面白れえ句があつたな。それ、清正公が何とか云ふやつよ。

柳橋。うん、盲目の清正公や初櫻つてやつだらう。

焉馬。この盲目つて云ふのは、やつぱりお前のことを考へてゐたからのことなんだね。

小しん。面白れえな。狂人中々味をやるぢやねえか。

焉馬。うん。まあ運座までは好かつたんだが、それから凄い一幕があつたんだぜ。

小しん。如何したのよ。

焉馬。お前も知つてゐるだらう。あいつが大事にしてゐるの嫐根付の着いた煙草入があるだらう。急に立ち上つてあいつを出して來たから、何をするのかと思つたら、句樂のやつ凄い顏をしてあの根付を睨み付けてゐやがるのよ。さうしてまた始めやがつたなんて云ふじやねえか。

小しん。ふん、それから——

焉馬。さうしてあいつはそれから悲しさうな顏付で、あの嫐の根付と話を始めやがつたのよ。よく聽いて見ると何でも句樂の目にはその根付が、あいつが子

供の時分に見たつて云ふ、夜嵐お絹の晒し首に見えるらしいんだね。それがしまひにはまるで惚れた女にでも會つてゐるやうな調子で、もう直きお前の所へ往くから待つてゐてくれの、久しく會はねえのと、いろんなことを云つてゐるのよ。その時の句樂の顏付つたらなかつたぜ。二人は氣味が惡くなつて、直ぐに歸つてしまつたのよ。（間）あいつももうあんまり長げえことはねえぜ。

小しん。さうさな。おれも如何もそんな氣がして仕方がねえんだ。しかしおれも今日やつぱり風流志道軒傳を讀んでゐたんだが――

焉馬。何もそんなことを氣にしなくつても好いぢやねえか。

小しん。何も氣にしやしねえけれど――何だか馬鹿に句樂に會いてえやうな氣がするよ。會つたつて顏を見ることも出來ねえんだけれど、せめて話でもしてえなあ。

（沈默。下手の船宿より一人の男歌を歌ひつつ下手に入る。下手より山崎新太郎出づ。二十二三歳位。直ぐ格子戸を開きて家の中へ入る。）

新太郎。やあ。みんなお揃ひだな。（座敷に上り來る。）

小しん。若旦那ですね。今丁度一杯やつてゐるところでさあ。

おたつ。（座布團を進めて。）さあ、若旦那。どうぞお敷き下さいまし。

新太郎。相變らず無頼漢が集つてゐるんだね。

焉馬。いや、どうも――若旦那、先日はどうも相濟みません。

新太郎。なあに濟むも濟まないもありやあしないよ。それよりも僕はあれから如何したかと思つて心配してゐたんだよ。

小しん。しかし若旦那はえらいよ。一昨日私が伺つた時に、そんな話はちつともしなかつたね。

焉馬。（杯を新太郎に差す。）若旦那、ひとつ如何です。

新太郎。や、難有う。如何だい、焉馬さん。何か面白いことでもないかね。
焉馬。面白いことつてまるつきりありませんね。第一世の中が惡くなりましたよ。女だつてほんとに惚れて來るやうなやつはありませんぜ。
小しん。しかし若旦那のおぎんさんはありやあ別さ。
焉馬。おぎんさんて云やあ、まだ追手は懸りませんかね。
新太郎。家でも呆れてしまつたと見えて、何とも云つて來ないやうだよ。
柳橋。(始めは歌ふやうに。)野暮な屋敷の大小棄てて、腰も身輕な町住居つてね。若旦那もこれで洒落れた人さ。
新太郎。あんまり洒落れてもゐやしないよ。しかしあの煙草屋の二階を借りた當座は、何だか二人でゐるのが寂しかつたけれど、馴れてしまふと結句氣樂さ。かうやつて世間を忘れたやうにして暮らしてゐるのも、また面白いやうな氣がするね。
小しん。全くさうですよ。一體世間なんてものを相手にしてゐたらきりがありませんや。(怒れる如き調子にて。)世間ぐらゐ始末にならねえものはありやあしねえ。まあ、盲目になつてご覽なさい。その世間つてやつがはつきり形に現はれて來ますぜ。頭もなければ尻つ尾もねえ。まるで妲妃のお百の芝居に出て來る海坊主のやうなもんでさあね。
焉馬。馬鹿なことを云つちやあいけねえぜ。
小しん。嘘ぢやあねえよ。全くさう云ふものが見えるんだから不思議さね。だから私は盲目になつても、いろいろ今まで見えなかつたものが見えるから面白いのさ。私は自分の盲目になつたことなんぞは何とも思はねえが、唯氣になつて仕方がねえのは句樂ばかりさ。
新太郎。さうさね。如何も今度はすこし覺束ないやうだね。

小しん。ええ、今日も柳橋さんと焉馬とが、病院へ見舞に往つて來たさうですが、元氣は中々あるけれど云ふことが大分變なんださうですよ。今日はあの獺の根付の着いた煙草入ね——若旦那もご存知でせう——あれと話をしてゐたさうですよ。

新太郎。あれは句樂が大事にしてゐた煙草入だぜ。

小しん。ええ。あいつは句樂が生命よりも大事にしてゐたもんですよ。きつとあの煙草入が句樂に何か話し懸けるんでせう。私はさうに違えねえと思ふんだが——

新太郎。さう、さう、何時だか枕元に置いてあつた水差が、口をきいたつて話があつたつけなあ。

小しん。やつぱりそれと同じわけさね。

焉馬。しかしそいつを傍で見てゐると、何だか涙がこぼれるやうな心持がしますぜ。あいつと一所に遊んだ時分のことを考へたりして、ああ句樂もへんになりやがつたかと思ふと、人間つてものは分らねえものだと、私はつくづく考へましたね。

新太郎。(笑つて。)焉馬さんもそんなことを考へるかな。

焉馬。そりやあ私だつて考へますあね。

小しん、(沈みたる調子にて。)こんな落語家見てえな稼業をしてゐるものは、存外哀れなことばかり考つてゐるものですよ。

(沈默。新太郎は悲しげに小しんの顔を凝視しゐる。)

柳橋。いやに話が理に落ちて來たぢやねえか。如何てえ。もう少し杯を動かさうぢやねえか。

焉馬。(急にはしやぎ出す。)よし來た。さあ。今夜は飲み明かさうぜ。

小しん。盲目ながらも柳亭小しんだ。そんなことは敢て辭しやせんな。ねえ、若旦那、あなたも私達の仲間入りをした以上は、飲み明かす位のことは怖れねえでせう。

新太郎。當り前さ。そんなことを怖がつてゐたら、こ

この閾は跨げやしないやね。

(皆盛んに酒を飲む。新太郎は座敷の隅に置きありし異様なる形の兜に目を付く。)

新太郎。おい、小しんさん。そこに置いてある兜のやうなものは何だい。

小しん。あれが例の句樂の兜さ。

新太郎。變な形の兜だなあ。如何云ふ譯て句樂はあんな兜を作つたのだらう。何しろ大變なものを作りやがつたぢやないか。(焉馬に。)おい。焉馬さん。ちよつと取つて呉れないか。

(焉馬はその兜を取りて新太郎に渡す。)

焉馬。若旦那。まあその兜の裏をご覽なさい。持主俳諧亭句樂と書いたこつちに、柳田金次郎作と本名を書いたところがをかしいぢやありませんか。

小しん。ねえ、若旦那、句樂がこの兜を作つた譯が面白いんですぜ。句樂はよく今に戰があるつて云つてましたらう。この前に氣が狂つた時から、そのことを云つちやあ騷いでゐましたよ。それ、金持と貧乏人の戰つてやつさ。句樂はその戰の時には貧乏人の大將になつて出懸けるんだつて云ふんで、一しやう懸命に作つたのがこの兜なんでさあ。この前の時にはこの兜を冠つて病院中を暴れ廻つて困つたさうですよ。

新太郎。ああ、その戰の話は僕も聽いたよ。それぢやあその戰に出懸けるつもりでこの兜を作つたんだね。(兜を凝視しゐる。)

小しん。ええ、あいつはその戰を今か今かと待ち構へてゐたんですよ。だから病院に入つてゐても氣が氣ぢやあねえやね。それで軍書を讀むつもりで梅暦や風流志道軒傳を讀んでゐるんだから面白いよ。

焉馬。その兜から思ひ付いて句樂が作つた端唄があつたつけな。もう狂人になつてからだからずゐぶんをかしな文句がありましたぜ。誰か覺えてゐねえかな。

小しん。うん。おりやあ覺えてゐるよ。

新太郎。さうかい。ちよつと歌つてお聴かせな。
焉馬。（おたつに。）おたつさん、ちよつと三味線を取つてくれないか。

（おたつは壁に懸けたる三味線を袋より出して焉馬に渡す。）

焉馬。（調子を合せて）おい、この位で好いかい。
小しん、もつと調子を低くしてくんねえな。
焉馬。よし。（調子を低くす。）
小しん。おれもうろ覺えだから文句の違つてゐるところがあるかも知れねえよ。
焉馬。どうせ狂人の作つた唄だあな。

（小しんは歌ひ出さむとするも聲出でず。何時か涙が盲ひたる目の外に溢れ來る。焉馬は驚きて三味線の手を留め小しんの顔を見る。）

焉馬。如何したんだい。
小しん。（何氣なき樣子にて。）如何かしやしねえよ。さあ、弾いて呉れ。顫え付きてえやうな好い聲を聴かしてやるから——

焉馬。（弾きつつ獨語のやうに。）久しく小しんの歌も聴かねえなあ。
小しん。（歌ひ出す。）

死ねと云ふ、死なねばならぬ今日となり、柴君の番の天神は、諏訪法性のおん兜、一夜會はねばわれもまた、兜の下のきりぎりす、ほんに哀れぢやないかいな。

（歌へる間絶えず小しんの目より涙溢れ、絃を傳ふて流る。新太郎も目を潤ませて聞きゐる。）

新太郎。おれは小しんさんの歌は始めて聴いたよ。
小しん。（寂しげに笑つて。）いや、もう大變な聲で——（焉馬に。）久しく歌はねえから、これだけのもんでも苦しいね。
焉馬。さうだらうな。しかし變な文句だな。如何しても狂人の作つた唄だね。
柳橋。こいつにも柴君つて名が入つてゐるね。
焉馬。あいつは餘つ程柴君に惚れてゐやがつたんだな。

小しん。さう云やああんなに氣が變になつたのも、柴君が死んでからのことですぜ。

焉馬。（小しんに。）しかしお前さんの聲はすつかり變つてしまつたね。

小しん。そりやあ盲目になつてからは、如何しても聲の調子が變つてしまふよ。何しろ何處から聲を出して好いんだか、盲目になり立てにはまるで見當が付きやなしねえもの――今まで見えてゐたものがまるで見えなくなつてしまふんだからなあ。毎日々々夜ばかりで、眞つ暗な中から人の聲が聽えて來るんだから情ないやね。

焉馬。さあ、もうこんな話は止めにしねえ、おれが彈くからみんな歌ふんだぜ。さあ、柳橋さん、何かひとつやんねえな。

（焉馬は三味線を彈き始む。）

柳橋。（歌ひ出す。）

〽かのひとをしんぞ思へばこの癪が、胸に差し込む窓の月、つづれさせてふ蟋蟀、年が明くれば詫住居、肩させすそさせ蟲の聲々、世帯染みたと云はれたい。

（焉馬は一人面白さうにはしやぎゐる。）

焉馬。よう、よう、面白くなつて來たぜ。如何です、若旦那、何かひとつお歌ひなさいな。

新太郎。僕は歌へないよ。

小しん。笑談云つちやあいけません。私はちやんと知つてゐるんだから――

柳橋。若旦那、隱しつこなしさ。

新太郎。僕はほんとに歌へないんだよ。

焉馬。それぢやあ私がひとつやりませう。（彈きながら歌ふ。）

〽裏の土藏のなか、姉やんとつんつらつん、片手に提灯片手に土藏の鍵、しばし待ちなはれ、髮を結ふてしまふてね、おつかあやんを寢せ置いて、お代理參りと云ふて出懸けませう、つんつらつんつらつんつらつん、四五日このかた會はなんだ、何から何まで

話しましよ、勿體ないがお代理參りは、明日の晩といたしましよ、つんつらつんつらつんつらつん。

小しん。こいつは句樂が好きな歌だぜ。よし來た。おれもうひとつやらう。

焉馬。何をやるんだい。

小しん。身ひとつをつてやつよ。今夜は句樂の好きな歌をみんなやつてしまはうぢやねえか。

焉馬。うん。さあ、好いぜ。

小しん。（歌ひ出す）

身ひとつを置所なき胸のうち、一重の心八重に解き、指切り髮きり野暮な起請を神さんへ、お世話をかけて烏羽玉の、戀の闇路ぢやないかいな。

（今度は小しんは涙を流さずに歌ふ。）

焉馬。うめえ、うめえ、今度のは昔の小しんの歌を聽いてゐるやうだつたぜ。

新太郎。今日句樂がゐたらさぞ面白かつたらうなあ。

小しん。あいつがゐねえと何だか寂しいやうな氣がしますね。

新太郎。句樂は今頃如何してゐるかなあ。

焉馬。若旦那。また醉いてゐますね。

（この時河岸の近くを聲色つかひの舟通り過ぐ。拍子木の音など聽え來る。）

焉馬。ありやあ聲色つかひの舟だな。

小しん。うん、中洲や代地であぶれたやつが歸つてゆくのよ。

焉馬。如何てえ、あいつを呼ばふぢやねえか。

小しん。うん。あいつを呼んで柳橋さんの聲色でも聽くかな。

焉馬。（障子を開けて縁側へ出づ。）おおい、聲色屋あい。

（開けたる障子の間より大川の水の面、河向ふの灯明りなど見ゆ。舟の中にて聲色つかひが「どうも難有うございます」と云ふ聲聽ゆ。焉馬は障子を閉めて元のところへ座る。）

小しん。（障子の外に向ひて。）おい、何でも好いからやつてくんねえ。

焉馬。好い景色だな。向ふ河岸はまるで芝居の書割の

やうだつたぜ。

小しん。さうか、おれにはそれが見えねえんだから情ねえ。

（聲色をつかふ聲聽ゆ。「戀娘昔八丈」の閻魔堂橋の出會のところ。座敷にては闘はずに話し續けゐる。）

新太郎。何だかここでかうやつて君達と話をしてゐると、家のことや世の中のことなんぞ忘れてしまふね

小しん。さうでせう、あなたはどつちが好いと思ひますね、お宅にゐて堅苦しい學問をしてゐるのと、かうやつて呑氣に日を送つてゐるのと――私はかうやつて日を送る方が、人間眞實(ほんと)の暮らし方ぢやないかと思ひやすがね。

新太郎。僕だつてさう思へばこそ家を飛び出して、あんな女と一所に暮らしてゐるのだ。

焉馬。しかし若旦那もずゐぶん變つた方さね。小間使と一所にあんな汚ない煙草屋の二階にゐるなんて―お宅にいらつしやりやあ若旦那て立派にやつてゆける方ぢやありませんか。

新太郎。それが嫌ひだから因果なんだよ。考へて見れば僕がこんなことを考へるやうになつたのも、みんな句樂の爲めだと思ふよ。句樂は僕に如何して生きたら好いかつてことを教へて呉れたのだ。さうして僕はあいつの云ふ通りになつたのだ。

（聲色が終ると同時に急に寂寞となる。）

小しん。柳橋さん。丁度鳴物がお銚へだね。ひとつ十八番(おはこ)の大阪町でも聽かうぢやねえか。（障子の外に向ひて。）おい。鳴物だけやつてくんねえ。柳橋さん。何をやるね。

柳橋。さうさな。例によつて野晒悟助でもやらうよ。

粋菩提悟道俠客――（聲色をつかふ。）

（柳橋の聲色の終る少し前に、おぎん下手より出て、格子戸の前に佇みゐる。十七八歳位の女。新太郎の情婦。）

柳橋。（聲色を終つて）いや、如何もいけねえ、年を取ると聲が續かねえよ。

焉馬。まだそんな年でもねえぢやねえか。

小しん。（おたつに。）おい、おたつ。

（おたつは障子を開けて椽側に出て、聲色つかひに金を遣り。また元のところへ坐る。聲色つかひの舟は拍子木を打ちながら次第に遠ざかる。）

おぎん。（格子戸の外にて。）ご免下さいまし。

小しん。おや、誰だか來たやうだぜ。

おたつ。（立ち上りて。）どなた――關はないからお入んなさいましよ。（おぎんを見て）おや、おぎんさんですね。

おぎん。（云ひにくさうに。）あの、何はこちらへ伺つてをりますでせうか。

おたつ。若旦那ですか。えゝ、いらつしやいますよ。

新太郎。（坐れるまゝ。）おい、何か用があるのかい。

小しん。おぎんさん。まあ、お上んなさい。

（格子戸を開けて家の中に入り長火鉢の傍に座る。）

おぎん。あの今句樂さんからお使が來て、こんな手紙を持つてまゐりましたよ。（手紙を出す。）

新太郎。句樂から手紙だつて――何だか變だな。どらお見せ――柳橋さん、はばかり樣、取つて呉れないか。

（柳橋はおぎんより手紙を受け取りて新太郎に渡す。）

新太郎。（手紙を開いて。）何だらう。

小しん。少しをかしうござんすね。句樂から手紙だなんて――あの狂人から手紙が來るなんてことはねえと思ふんだがね。

新太郎。さうさな。何だか不思議なやうな氣がするね（手紙を見る。）何だかまるで讀めやしない。

小しん。若旦那。讀んで聽かして下さいよ。句樂の手紙なら私も聽きたいやね。

新太郎。ちよつとお持ちよ。今讀むから――（手紙を讀む）私は今日より志道軒と一所に、旅をするつもりに御座候。何處へ往くと云ふあてもなく、例の通り飄然として――飄然の飄の字に氷つて字が書いてあるぜ。

焉馬。（笑つて。）飄然として溶けるつもりでゐやがるんだな。

新太郎。（手紙を讀み行く。）えゝと、飄然として旅を致すべく候。志道軒と二人連れに候へば、何かと面白きこともあるだらうと思ひ、それが樂しみに御座候。くはしきことは旅先より申上ぐべく候。何だか發句見たいなものが書いてあるぜ。（讀みにくさうに考へゐる。）行く春やきちがひ二人旅に出るか。

小しん。自分で狂人（きちがひ）つて云つてるところは面白いね。しかし何だかまるで謎見てえな手紙ですね。あいつは如何云ふ氣でこんな手紙をあなたの所へ寄越（よこ）したのだらうな。

新太郎。おい、おぎん、この手紙を持つて來た人つて云ふのは、一體どんな人だつたい。

おぎん。何だか氣味の惡いお爺さんでしたわ。顏に一杯痘痕（あばた）があつて、め組と書いた差つ子を着てゐましたよ。

小しん。（驚いて。）何ですつて、おぎんさん。そのお爺さんは顏に痘痕があつて、め組の差つ子を着てゐたんですか。

おぎん。えゝ。

小しん。うん、それぢやあいつに違えねえ。なあ、焉馬。

焉馬。あいつつて誰よ。

小しん。今め組の差つ子を着てゐる人なんぞありやあしねえぜ。それに顏に痘痕があると云やあ大抵見當は付くだらう。

焉馬。分らねえな。

小しん。そいつは蝮の吉兵衛さんだぜ。

（皆驚きて顏を見合はす。下手よりおとし出づ。俳諧亭句樂の妹。二十三四歳位。格子戶を開けて家の中に入る。）

おたつ。おや、おとしさんが見えましたよ。

焉馬。如何したい、おとしさん。

小しん。まあ、こつちへお上んなさい。今不思議な手

紙を讀んでゐたところさ。

(おとしは座敷に通ると同時に急に泣き始む。)

新太郎。如何したんだ。

小しん。默つて泣いてゐちやあ分らねえ。

(沈默。)

おとし。(歔欷しつゝ。)あの句樂が到頭さつき亡くなりなして――

新太郎。何だつて――句樂さんが死んだつて――ほんとかい。

おとし。えゝ、急に容體が惡くなりまして、さつき到頭呼吸を引き取つてしまひました。

新太郎。さうか。句樂も到頭死んだのか――

(手紙を握れる新太郎の中は微かに顫ふ。)

おとし。さつき焉馬さんと柳橋さんがいらつしつた時分は何ともなかつたのですが、あれからまた例の柴君と話を始めたのでございますよ。さうして一人で泣いたり笑つたりしてゐましたが、そのうち若旦那の所へ手紙を出すんだつて、何か書いては破つたりした揚句、しまひにやつと書き上げた手紙を持つて、外へ出懸けやうとするのでございます。

新太郎。(怖しさうに。)ふうん。僕の所へ手紙を書いたんだね。

おとし。えゝ、さうすると若旦那、不思議ぢやあありませんか。あの部屋の戸がすうつと開いたのでございます。さうして誰か入つて來たやうな氣勢がしましたが、それと同時に兄は誰かと話を始めました。よくよくその言葉を聽いて見ると、それがあの蝮の吉兵衛さんと話をしてゐるのぢやありませんか。

小しん。ねえ、若旦那。私の云つた通りでせう。

おとし。それから急に容體が惡くなりましてね。ものの一時間と經たないうちに呼吸を引き取つてしまつたのでございます。

(沈默。長き間。小しんと新太郎は聲を立てずに泣きゐる。)

焉馬。(おとしに。)おとしさん。今病院には誰もゐねま

んだね。

おとし。ええ。病院の方が附いてゐるだけです。

柳橋。それぢやあ焉馬さん、おとしさんも女のことだし、何かと後の用事もあるだらうから、これから病院へ往つて來ようぢやねえか。

おとし。實はそのお願に上りましたので――

焉馬。それぢやあ直ぐ出懸けやう。

小しん。おれが目が見えると一所に往くんだがなあ。

（柳橋と焉馬とおとしは一所に格子戸より出て下手に入る。）

小しん。（悲しげに。）若旦那。到頭句樂も死んでしまひましたね。

新太郎。ああ、何だかまるで夢のやうな氣がするねえ。ついこの間まで一所に飲み歩いてゐたんだが――考へて見りやあ句樂が死んだことは、僕に取つてどの位悲しいことだか知れやしない。僕はあいつがゐるんでこんなにその日その日を送るやうな暮らし方をするやうになつたのだ。あいつの口から出る警句の中から、眞實のことを聽くのを喜んで、今日までかうやつて暮らして來たのだ。もうあいつが死んでしまつたら、あんな警句は聽くことは出來ないからなあ。

小しん。若旦那。私だつて句樂が死んだことがどんなに悲しいか知れやしねえ。あいつと私とは何か因緣があるやうな氣がして仕方がねえ。あいつが狂人になると同時に、私も盲目になつてしまつたんです。しかしその時私はどんなに狂人になつた句樂が羨ましかつたか知れやしねえ。あなたは盲目になつた時の心持をご存知ないでせうが、この位世の中に悲しいものはありやあしませんぜ。

新太郎。そりやあさうだらうなあ。

小しん。しかし狂人は好うござんすよ。世の中に狂人ぐらゐ自由な人間はありやあしねえ。何を云つたつて何をしたつて、ありやあ狂人だと云ふんで通つて往くんだ。考へて見りやあ句樂なんぞも、ずゐぶん

勝手なことを云つたりしたりして來ましたぜ。(思ひ出す如き顔付をして。)さうしてしたなあ。始めて氣が狂(ちが)つた時のことてしたよ。いきなり私の所へ飛び込んで來て、これから深川の不動樣へ往くから一所に來ねえかつて云ふんてせう。まあ、その時の形(なり)が不思議さね。何處て探して來たんだか、職工の着るやうな服を着て、箒を持つてゐるんですよ。何をしに往くんだつて云つたら、何しろ今の世の中には靈魂(たましひ)の粉が一杯に散つてゐるから、そいつを掃き集めに往くんだつて云ふんてせう。如何して深川の不動樣へ往くんだつた聽くと、、親分の家から掃除を始めるんだつて云やがるのさ。不動樣を親分だと思つてゐやがるんだから面白いよ。(急に悲しげに。)しかしもうその句樂にも會へねえんだなあ。

新太郎。句樂が掃除しないと世の中はまた靈魂(たましひ)の粉だらけになるぜ。小しんさん。僕もちよつと病院へ往つて來るよ。(立ち上つて。)ああ、それから道て蝶丸に會つたから、ここに來いつて云つて置いたから來るかも知れないよ。

小しん。(寂しさうに。)若旦那、もう少しここにゐて下さいな。私一人になると寂しくつて仕方がないから——

新太郎。さうかい。それぢやあもう少しゐやう。(おぎんに。)お前はもう歸つても好いよ。

(おぎんは挨拶して出てゆく。下手に入る。殆んど入れ違ひに蝶丸とその女房おせん出づ。蝶丸は盲目の新内語り。三十四五歳おせんは二十五六歳。)

蝶丸。(格子戸の外より。)ご免下さいまし。

新太郎。(聲を聽き付けて。)誰だい、蝶丸さんかい。

蝶丸。へえ、左樣てございます。

おたつ。お上んなさいよ。

(蝶丸とおせんは家の中に入り、長火鉢の傍に坐る。)

小しん。蝶丸さん。句樂が死んだよ。

蝶丸。へえ、ほんてすかい。惜しいことをしましたな。

小しん。（何か考へつゝ。）句樂は何が好きだつたかな。

蝶丸。さうさね。尾上伊太八か――新兵衞小女郎なんども好きのやうでしたね。

新太郎。句樂も旅に往つた人だ。「比翼の初旅」でもやつてもらはうぢやないか。

小しん。若旦那。さうしてこの新内を聽きながら思ふ存分私を泣かして下さい。ね、よござんすか。笑つちやいけませんぜ。私は今夜は泣きたくつて泣きたくつてたまらねえんだから――

新太郎。小しんさん。おれも一所に泣かうよ。それぢやあ、蝶丸さん。「比翼の初旅」をやつて呉れないか。それが句遊棠君だつたらあいつも嬉しかつたらうになあ。

小しん。志道軒と一所に旅をしてゐる氣だから可哀さうですよ。

（蝶丸は歌ひ始む。おせんは三味線を彈く。）

蝶丸。（歌ふ。）

戀の港にうち寄する浪の紋日の賑はひは、都に負けぬ色どころ、三國と云へるわけさとは、北國一の遊女町、よねの情にかかり舟、碇下さぬ客もなく、中に玉屋の新兵衞、今日もつくづく入相の、鐘が敵の浮世とて、揚屋の不埒重なりし金の代りに手ばまつの、粹が嵩じて水風呂の、桶伏せになる身ぞつらや、新兵衞おろおろ涙ぐみ、ええ無念やなあ、この港て玉屋の新兵衞とて、人に知られた身なれども、色ゆゑに身代はぼうふり蟲同前に、桶の中にまいまいと、日影さへ見ぬ戀の闇、逢ひたい見たい太夫にも、同じ廓に居は居ながら、顏さへ見る目嗅ぐ鼻の、遣手母を初め主人夫婦が見るまへも、遠慮ありまの人形筆。

（小しんは烈しく泣く。新太郎歔欷す。新内の唄悲しげに續く。）

筍婆

上司小劍

一

風が吹いて、裏の切戸が時々カタン〳〵と高い音を立てるので、老婆お藤は、倦さうな顔をしながら、肥えた身體で長火鉢に寄りかゝつて、『誰れぞ閉めに行くことか』と、眼の玉を動かしてゐたが、皆な仕事にテンテコ舞をしてゐて、裏口の世話なぞを燒くものはなかつた。

大きな、燻つた藥鑵の湯を、これも大きな、湯垢のドッサリ附いた湯呑みに注いて、咽喉が詰まつてゐるやうに、呑みにくさうにして呑み終ると、老婆は重い腰を漸うに浮かして、姿には不調和な、齒の薄い華奢な利休下駄を、眞ん圓い象のやうな足に引つかけた。

長火鉢の置いてある疊三枚分ほどの板の間とは、筋向ふになつてゐる仕

事場から、息子の長十郎が、粉だらけの手をはたきつゝ、一寸老婆の動きかけたのを見たけれど、直ぐ切り方の仕事にかゝつて、知らぬ振りをしてゐた。この息子も母に似て肥つた大男で、東京から貰つた豆絞りの手拭を姉さん被りにした頭が、仕事場の鴨居に支へさうであつた。

病氣になつてから、殊に足のわるくなつた老婆は、仕事場から鍋場へと、長い土間を通つて行くのに、エチ〳〵と随分長いことかゝつた。三和土の上を引き摺る利休下駄が、キイ〳〵と、厭やな響きを立てた。

鍋場の大きな竈には、馬糞のやうな色をした何かの糟を堅めたらしい燃料が、ボツボツと能く燃えあがり、粉に澱んだ鍋の湯は重さうに玉ぎつて、煮えかへつた。

鍋場を引き受けた出戻りの娘お岸は、姉でゐて、三十四にもなつてゐながら、長十郎の妹に見えるほどの若い顔をして、茹であがつた饂飩を茶碗に盛つては、せつせと拵へた白い玉を蒸籠に並べてゐたが母のヨタ〳〵と歩き出して來たのを見ても、別に氣に留める風はなくて、それよりも『此方が大事や』といつた顔をして、艶々しい饂飩の玉の光に見入つた。

仕事場からは、後へ〳〵と、長十郎が切つたのを、細長く薄い箱に入れて、鍋の側へ運んで來るので、お岸は水を盛つた大桶と煮え立つ大鍋との間を、ボン〳〵時計の振子のやうに、往つたり復つたりして、茹でたり冷したり盛つたり並べたりした。

『おばん、何處へいたんやろ。』

稍暫く經つても、老婆が戻つて來ないので、長十郎は切つたのを運んで來た序に、姉の顔を見て、か

う言つた。

『また、筍を拵へやうとおもて、見にいてるんやろ。』と、お岸はせゝら笑つた。其の途端、五月の西日を横に受けて、厭やに赤く見える老婆の大きな顔が、裏口に現はれた。病氣になつてから水腫が來たのであらうか、顔が餘計に大きく見えた。

『お岸、太閤さんが石を埋めたちうよつて、あこを筍にするとえゝやないか。……下が堅いほど筍の好いのが生へるちうこツちや。』

裏口から大桶の側まで、一二間のところを、五分間もかゝつたと思はれるほどに歩いて、娘の傍に近づいた老婆は、鼻の上に皺を寄せつゝかう言つた。

『阿呆らしい、筍は下がやらこいほどえゝのだがな。……まだ鍛々言ふてなはるのか。えゝ加減におきなはれ。』と、お岸の取つても付かぬ返辭をしたのと、殆ど同じに、

『いゝえ、わてえ別に石なんぞ埋めやしまへんて、……裏へ。』と、仕事場から下拵への職人の秀吉が、大きな聲を出した。

『太閤さんて、お前のこつちやないんや。……あのお城を拵へた眞物や。』

長十郎は切つてゐる四角な庖丁の手を留めて、窓から見える大阪城の方を腮で示しながら言つた。

『あゝ、さよか。』

これが鍋場の方へも聞えたので、お岸は大きな聲で笑つて、笑つた序に、一寸茹前の手が空いたので竈の前に蹲踞りつゝ、長い煙管を取つて煙草にした。

久し振りて、老婆も笑つた。

二

『太閤さん、今かど(表の事)通つた車は八百屋やないかいな、筍持つてるやろ。……一寸呼んでんか。』

板の間まで來ると、長火鉢の側へ行くまでに、先づ上り口へ崩れるやうに腰を卸して、表の方に聞き耳を立てつゝ、老婆はかう言つた。

『今度は此方の太閤はんだッな。……畏まりました。』と、秀吉は舒してゐた麵棒の手を止めて、頭の手拭で一寸鼻先きの汗を拭きつゝ、駈け行かうとした。

『また筍か。……筍婆と言はれる筈や。この頃あんたのねき(側の事)へ寄ると、筍臭うおまんがな。……好物の筍なら自分に呼びにいたらえゝ。……仕事が忙しいのに、太閤さん使うて、……』

表の方を見い／＼、長十郎はかう言つて、丹念に切り方を續けてゐた。昔から『寒八杯に土用三杯』といふ、饂飩粉と鹽と水との調合法は、もう筍の出る此頃の陽氣に、五杯の水に一杯の鹽で粉を溶いて、圓く捏ねて、蓙の上から足で踏んで、それから直かに足で踏み舒したのを、麵棒に卷いて薄くし、頻りに粉を撒つて、疊半疊ほどの廣さになつたのを、堤のやうにつくねるまでが秀吉の役で、それを受け取つた仕事師の長十郎は、四角な庖丁に押し板を當てゝ、小氣味好くサク／＼と切つたのを、バラ／＼と伸ばすと、手打ちは流石に力があつて、瀧の白糸のやうに、麗はしく飜つた。

『わしは足元がわるいがな。……先刻にから裏木戸がガタン／＼いふてるのに、誰れも閉めにいけへんよつて、わしが今閉めて來たんやが、八百屋ぐらゐ呼んで呉れても、罰は當ろまい。』

忌々しさうに、さう言つた老婆の聲に反響はなかつた。

三

秀吉が呼びに行つた八百屋は來ないで、ガイチクといふ油屋が、秀吉とゝもに入つて來た。顏の長い、五十男の油屋は、頭の頂點から、足の爪先きまで、油が滲み込んだといふやうな風をしてゐた。

「へえ、今日は、……ひどい風で、……」と、小腰を屈めつゝ、鼻の穴へ入つた砂埃りを小指で穿つてゐるガイチクをば、老婆は好い話相手を得たとばかりに、嬉れしさうに迎へて、筍屋のことは聞かうともしなかつた。

四角な、色の黑い顏に、善人らしい目鼻を附けて、始終口を開いてゐる身長の低い秀吉も、別に何とも言はないで、また仕事にかゝつた。

「ガイチクさん、まあ掛けなはれ。……この風で一句浮んだやろ。」

「へえ有り難う。……いやもう不景氣な上へ、此頃のやうに電氣に得意を取られてばかりゐては、一句も二句もごわへん。四苦八苦だす。」と、油屋は尻を向けて老婆に答へつゝ、仕事に餘念のない長十郎の方ばかり見てゐた。

「大將、お宅ではまだ電氣になりまへんな。」

「催促するんなら、何時からでもしてやる。」

見向きもしないで長十郎は、五月蠅さうにかう言つた。老婆はヨタ〳〵しながら、長火鉢の側の、自

分の眞向ふへ座蒲團を出しなどしてゐた。

『竹外さん、さあお掛け。』と、老婆は有り合はした湯呑みに番茶まで注いだので、油屋も取り付く島のない長十郎を詮めて、長火鉢に近く歩み寄りながら、腰の煙草入れを探つた。煙草入れにも煙管にも、それから煙草にまで、油が染みてゐるやうに思はれ、鼻の穴から濃く吐き出す二條の煙にも、油の臭ひがするやうであつた。

『竹外さんなんて、……まともに呼ばれたのは、何年振りだすやら。……内方（あなたの家といふ事）の旦那、わるい旦那や。「あいつは人間が逆さまにでけてるさかい、名前も逆さまに呼んだろ」ちうて、竹外を外竹だなんて、……それが到頭「ガイチク」になつてしもて、何處へいても、「ガイチクさん〳〵」て通るやうになつたのは、さあ何時からのことだしたかなア、……もうよつぽど古おまつせ。』

『其のお庇蔭で、……名前が面白いちうので、得意が殖えたやろ。』

五月蠅がつてゐた長十郎も、ガイチクの話振りの可笑しいのに釣り込まれて、つひ口を出した。

『違ひない。　上町の名物は、井戸の深いのとガイチクちう油屋と、福島屋ちう饂飩のおろし問屋と……それから筍……筍お婆あさんだすもん、……油屋も福島屋も、得意が殖える一方や。』

ガイチクが、かうペラ〳〵と喋舌つて了つた時には、もう長十郎は切つた饂飩を持つて鍋の方へ行き、姉と何やら話をしてゐた。

『ガイチクさん、饂飩のおろしも値からんやうになつたて。……わしの若い時分には、さうやな丁ど長十郎の生れる時分までは、三十貫目の粉を饂飩にして、店屋や夜泣きにおろしてさへゐれば、四人や五

人の家内は樂に喰へて、三月に一遍ぐらゐは芝居へもいて、少しづゝは殘つたもんや。……時節がわるなつたなア。』

長火鉢の前へ坐り直して老婆は、苦しさうな息をしながら言つた。

『ほんまに時節がわるなりました。……値からん〱いふてるのに、同商賣がだん〱殖えるのは何ういふもんだすやろ。內方の御商賣でもさうだすな、この競爭といふことが五月蠅うて、共倒れだすな。……あゝア、昔は時節が好かつたな。……內方で三十貫目の粉を默つて饂飩にして、默つて賣つてたら好かつたやうに、家では一斗なら一斗の油を仕入れて、默つて賣つてたら好かつたんやもん。競爭もへツたくれもあれへん。……第一稅がかゝりまへんがな。……あゝア昔が戀しいな。……「昔を今になすよしもがな」か。』

かう言つてガイチクは、大きな欠伸と一所に背伸びをした。

『けどもなア、ガイチクさん、家ではなア、値段で競爭しえへんのや。……代もんで競爭する積りで、他では此頃皆あの機械をつこてるが、家ではあゝやつて手打ちや。……それもよそのやうに、一貫目の粉を一時に捏ねたり、十五貫目の粉を十二に捏ねたりして、早やいが勝やいふてるが、そんな捏ね方でおいしい饂飩がでけるもんか。……家では今でも昔通り、十五貫目の粉を二十五に捏ねるんやさかいな。……大阪中探しても、今そんな饂飩拵へてる問屋あれへんて。……まあ見とくれ、第一光澤が違うし、力があるさかいな。』

『機械にすると、もむなう（不味い事）おまつしやろけど、手間はよつぽど違ひまつかなア。』

『機械にしても、職人は使はんたらんが、腕のある職人を高い給金で雇て、機嫌取りして使はいても、機械なら、口入れ屋から田舍もんを安い給金で引っ張つて來て、直き役に立つさかい、そんだけ利益や。……家でもとうから長十やお岸が「機械にせう〳〵」いふんやが、「わしの眼の黒い中は福島屋の行燈に泥を塗るやうな饂飩は拵へん」ちうて、がん張つてるのや、わしが。……そやけど、かう商賣がひまになつて、冬分で漸う三十貫目、此頃の陽氣になると、十五貫目ぐらゐの粉を捏ねてるやうては、いきついて了うがな。』

『内方もこれで場所がわるなりましたな。兵隊屋敷や調練場が近所にでけて、家が減りましたさかいな。……「一に人、二に場所、三に金」と三井の先祖は言やはつたさうだすけど、商賣は「一に場所」だすな。……何んぼ成駒屋の「椀久」でも、木曾の山奧で打つたんては、客も來まへんやろ。……さうやおまへんか。」

『場所もわるなつたけど、やれミルクホールでござれ、氷屋でござれと、いろ〳〵なもんが流行つて來たさかい、饂飩喰べる人がそつちへ引かれたんやなア。……それに同商賣の安物賣りが殖えるし、何んやかやで稅はたてなるしなア。」

『稅もたてなる筈だす。……この近所にもドッサリ居やはりますが、軍人さんやお役人の古手やいふ人が、恩給や何んやいふて、このガイチクが朝から晩まで足を棒にして稼いで一月に頂く何十層倍を、毎日〳〵ブラ〳〵遊んでゝ、同じ一月に取らはりますよつてな。』

『けど、わしは月給取り嫌ひや、儲けも損も無うて、極り切つてるさかい。筍一本買うても、そんだけ

減るのが一目に見えるよつてなア。……喰べても身に付かん。……それよりまだ、破れ行燈でも福島屋の行燈かけて商賣してる方がえゝ。』

老婆はだいぶ話しくたびれたが、ガイチクはだん／＼勢ひづいて、調子に乘つて來た。

『このガイチクの子供の時分の、福島屋さんちうもんは、それや、えらかつたなア。先代の大將の盛りで、丁ど今お家はん（おカミさんの事）が緻にするいふて、御寮人（御新造さんの事）さんが反對してはるこの裏の空地ンとこに、今なら寄宿舍だすな、ずうッとかう長屋が建つて、賣子が入つてましたなア。……其の賣子が宵の口になると、あの高荷を擔ふて、揃への袢纒て、三十人もつながッて、銘々「ふくしまアや／＼」と美え聲で賣りに出た時は、天滿から船場、……島の内邊の人までが、ぞろ／＼見に來ましたな。……賣子の着てよる淺黃の袢纒に、「ふくしまや」と染め拔いた大けな字が、人込みの中に、白う目に立つてたのが、未だに眼の底に殘つてまッせ。……賣れるにも賣れましたなア、あの頃は。……』

腰を掛けたまゝの仕方話では、飽き足らないで、立ち上つて身振りまで始めたガイチクの滑稽な狀を老婆は莞爾りともしないで見詰めてゐたが、果ては兩の眼に涙を一杯溜めた。

夏の夕、大河に凉み舟が出て、天神祭の評判などのとり／＼に、語り合はるゝ頃にもなると、赤い行燈に福島屋の『福』に因んだお多福の面を描いた高荷が、行列を作つて、八軒屋から天滿橋を渡つて行くのを、舟からも、家々の凉み臺からも、人々の眼は多くそれに集つて、河の中から大盡客が女喜ばさうとて打ち上げる一兩の花火よりも、『この方が見ものぢや』と言ふものがあれば、

『大塩騒動のをり、同勢が浪速橋を渡りよつた時のやうな元氣やなア。』と感心するものもあつた。

そんな、こんな幻を、老婆は空しく描き出して、ほろりとした。

『わしやあの時分はなア。……』

たゞこれだけ言ふのが、老婆は漸うのやうであつた。

『あの時分は若かつたなア。……第一そないに肥えてなはれへなんだがな。あんたそれや筍肥りやなア。……このガイチクとは十歳からも違ひますよつてな、ようは知らんけど、若い時は別嬪やつたな。……何隠さう、このガイチクも丁ど色氣の附き始めに、一寸袖引ッ張つて見よとおもたことがある。』

笑ひ〳〵喋舌るガイチクの話にも、老婆はまだ笑はなかつた。

『けども、あの時分から筍が好きやつたなア。……先代の大將も筍が好きて、筍時分になると二人で毎日筍や、根節みたいな出初めから、半分竹になつたのまで喰ひ納めにしがんではつたがな。……先代の大將、筍の出る時分になると元氣が出て、商賣の智惠も餘計出て來たな。好え男やつたで。……』

亡き夫の話が出て來たので、老婆は何か藥でも注射されたやうに、また物を言ふ元氣が出て來て、

『あの人は長十などと違て、商賣が上手やつた。……今ガイチクさんの言ふた、大阪中大評判になつた高荷かて、あの人が低荷から思ひついて、大市に拵らへさしたんや。それより前に江戸から一荷見本が來たアつたさうやけど、あの人の工夫したのが一番で、あんだけ評判になつたんや。』と、大きな鼻を得意さうに蠢かした。

四

『ガイチクさん、……おめれたう。……』と、仕事場から秀吉が突然、頓狂な高聲を出したので、ガイチクも老婆も、それから二人の年寄りの話を何處吹く風と聞き流してゐた長十郎までも、皆あッけらかんとして、秀吉の方を見た。

『太閤はん、……何んだすいな。……藪から棒やな。……お芽出たうて。……このガイチクには薩張り解りまへんな。……』と、ガイチクはよどもどして言つた。

『隱してもあきまへん。……ちやんと手證が押へたるさかいな。……』

仕事の手を止めて、にた〳〵笑ひながら秀吉は、ガイチクが急に萎れた風を見せて差し俯伏いてゐる方を、どんよりとした眼で見詰めた。

『太閤、……何やいな。言ふてみい。』と、長十郎は仕事をしながら、秀吉の握つてゐるらしい、ガイチクの秘密を聞きたさうにした。

『嬰兒がでけましたんや。』と、秀吉は矢張り仕事の手を止めたまゝ、高い聲で無雜作に言ひ放つた。

『毒性（慘酷といふやうな事）やなア。太閤はん。……大將やお家はんの前で、そんなこと言はんかて、えゝやないか。……毒性やなア。……ほんまに、……毒性やなア。』

ガイチクは、雲脂の出る半禿げの頭を、忙しさうに掻き〳〵した。

『おもろい（面白い）なア〳〵。』と、秀吉は手を打つて喜んだ。さうして、

『わてえも阿呆だンなア。今朝註文取りにいて、入船の嫁はんに聞くまで知りまへなんだんや。……さう聞くと、こないだから、ガイチクさんとこの乾場におむつ（おしめ）が干してゐましたのや。……』

『それや、まア、何んしよ、芽出たいなア。……一體何時生れたんや。……どッちだす。二人とも丈夫だッか。』

妻のないガイチクが、五十幾つになつて初めて兒を生ましたといへば、腹は屹度あの下女代りの中婆であらう、と考へた長十郎は、切り方を止めつゝ、氣の毒さうな顏をして言つた。

『母子ともに健全だす。……「御安心下され度候」や。……男だすがな。……名前が洒落てまッしやろ、「惡太郎」と命けましたんや。』

もう破れかぶれ、といつたやうな顏をしながら、ガイチクは洒々として言つた。

『惡太郎？……矢ッ張り人間が逆にてけてるよつて、人並みの名は命けんのやなア。大けなると學校で名が可笑しいので、いゝいゝせぶらかされる（虐められる事）て。』と、長十郎はまた切り方にかゝつた。

『それはさうと、好えのんが一人おまッせ。……見るだけでも見てみなはらんか。』

眞顏になつて、ガイチクは、長十郎の側へ歩み寄つた。

『好えのん、て、また嫁のことか。おいとくれ。……見合ひまでして此方はようてゝ、彼方からお斷りは、好え恥晒らしやよつてなア。』

取り合はうとしない風を見せやうとしても、長十郎は仕事が上の空になるほど、ガイチクの話に身を入れてゐることが、ガイチクには能く分つてゐた。

『今度はそんなことおまへん、受け合ひます。先方が酸も甘いも嚙み分けてまッさかい。……併しお家はんが居やはりますのでなア。』と、ガイチクは老婆の方に氣を置きつゝ。低い〳〵聲て、囁くやうにし

た。

『此家へ來る家内は、わしの家内やない。おばんの家内や。……おばんに聞いとくれ。わしや知らん。』

と、長十郎の聲は、今までになく大きかつた。

先刻からの、いろ／＼な話を、聞いたのか聞かぬのか、頭を押へつゝ長火鉢の框に突ッ伏してゐた老婆は、この大きな長十郎の聲に、一寸首を擡げたが、顏を顰めて頭を抱へながら、また突ッ伏した。

其處へ、鍋場の方から、お岸が雁首の眞黑に燻つた煙管を持つたまゝ、莞爾／＼して出て來て、

『ガイチクさんか。』と始めて氣がついたやうな風をしつゝ、

『油屋が油賣つてるのやなア。儲かりまッか。』

かう言はれてガイチクは、烟つたさうに、もじ／＼して、

『今日は、……石油御用ごわへんか。』と、態とらしい商内聲を出した。

『おばん、おばん。……だいぶん、わるいやうだすな。』と、お岸は老婆に聲をかけた。

其の聲を後に、『さいなら……。』と、逃ぐるが如く歸つて行くガイチクの、黑い筒袖の袷を尻端折つた腰に、眞鍮の墨斗が、磨き上げたやうた光つてゐた。

五

ガイチクと入れ違ひに、お岸の連れ子のお春が歸つて來た。祖母や叔父に似た大柄で、まだ十四といふのに、人は大抵十七八に見た。其の上大きな面皰が二つも吹き出して來たので、小學校で・あるまいと、高等の一年で下げて、縫物屋へ稽古に通はしてある。

『お母アはん、ガイチクさん來やはりましたやろ。……そやろおもたんや。またよう喋舌つて行かはりましたやろな。……其處の西の辻で會ひましたのや。……おッさんに好え嫁はん世話する、いふてはりましたて。……口ばッかりや。』

縫ひかけた物の風呂敷包を、板の間へ投り出して、お春は夙慧た物の言ひやうをした。

『あゝ、太閤はん、關東炊き屋はんが來たて、呼んどくれ。』と、お岸は娘の言葉をよくも聞かずに、關東炊き屋の屋臺を秀吉に呼び止めさせ、蒟蒻の關東煮を十錢買つて、自分にも喰べ、皆んなにも喰べさした。

『おばん一つ何うだす。……あんたは筍やないといくまいが。……』

三角に切つてどろ／＼に煮込んである蒟蒻の一片を箸に刺して、老婆の頭の上へお岸は突き出した。

『左樣か、わしにか。』と、首を擡げた老婆は、蒟蒻を受けてもぐ／＼と食つた。

『お春。……お前またおばんを醫者へ連れていとくれ。……先刻んから見てるのに、だいぶわるさうや。』

關東煮の後口の舌なめずりをしながら、また仕事に掛からうとして、長十郎はかう言つた。

『厭やだんがな、おッさん。……人車に乘ると眼が舞ういふて、無理に歩きやはりますよつて、其の遲いこと。丸て練つて行くやうて、少し間口の廣い家の前は、なか／＼通り切れまへんよつてな。……人が立ち止まつて見ますのや。……わてえ厭やだす。』と、お春は早口に言つて退けた。

たゞ一人の孫だけは、まだ可愛いと思つてゐるらしい老婆は、お岸や長十郎を見る時の角の立つた眼

とは全く違つた、避けるやうな眼付きをして、微笑みながらお春を見てゐたが、
「わし、どッこもわるいことあれへん。お醫者はんへ行かんかてえゝ。……行けいふても行けへん。」と首を振つた。
「何處もわるうないのに、道歩いてゝ、向ふから來る一人の人が二人に見えて、何方を避けてえゝか分らんやうなことがおますかいな。」と、お春はづけ〳〵と言つた。
二年ほど前から、よく一つの物が二つに見え出した老婆は、一本の筍が二本に見えて、勘定を誤つたり、途中で溝を跨ぐ時、一筋の溝が二筋になつて、何方が眞物やら分らないで、長いこと立ちつくしたりした。
「それは頭がわるいよつてやがな。……わしの頭痛持ちは子供の時からや。今始まつたのやあれへん。……おなご(女)は皆頭痛持ちや、異人は知らんけど、日本人はなア。」と、老婆はまた首を振り〳〵した。
老婆は五六歳の時、生れた家の二階の梯子段で遊んでゐると、上で化粧をしてゐた下女が何に驚いてか、合はせ鏡の一つを梯子段に落したのが、老婆の頭の眞向に當つた。下女の合はせ鏡といつても、それは今時の硝子製のものではなくて、裏に『天下一』の銘のある、圓形に柄の附いた靑銅製ので、重味があつたから、老婆は氣絶して梯子段から轉げ落ちたか、轉げ落ちて氣絶したか。兎に角後で息を吹き返へして、今日まで生きて來たものゝ、頭痛持ちはそれが因だとも言ひ傳へられてゐる。
「何うしても中風やなア。養生せんとあかんて。」と、仕事着の引ッぱりの襟に差した古爪楊枝で白い齒

を穿りつゝ、お岸は言つた。

『中風や。……うだ〳〵言ふとくれな。頭痛がするだけやないか、頭が病めるのは持病や、頭が持病ても、わしは若い時から物覺えが良うて、今でも何年前の何時幾日に誰れそれが何をした、何を言ふたちうことを、ちやんと覺えてるよつてな。……誰れや知らんみたいに、朝のことを晩に忘れてやはるのとは違うんや。』

かう老婆の言ふ通り、彼女は少女の時から記憶力が強く、地獄耳と唱はれて、『帳面に付けるよりあの娘に言ふとけ』と皆なに重寶がられたといふ、言ひ傳へもある。

『中風やない。糖尿病やも知れんと、俺はおもてるなア。……おばんのねきへ寄ると、筍臭かつたり、これから夏になると妙に甘臭かつたりするのは、糖分が下りるんやて。』

丁ど一叺の切れ目で、長十郎は仕事場に突ッ立つて、差し俯伏きつゝかう云つた。

『病氣やないちうのに。……假しんば病氣かて、わしは病負するん嫌ひや。……「風邪の神は膳の下」ちうやないか。……喰べもんをドッサリ喰べて病神を追ひ出さないかん。』と老婆は少し聲を震はしてゐた。

『ひよッと糖尿病やとなア、米の飯から薩摩芋から、何んしよ、穀類は皆いかんのや。大根、蕪、……それから筍も食へん。……牛、鶏肉、卵、ミルクぐらゐより食ひも飲みもてけん。……丸て西洋人の居候置いたやうなもんや。』

老婆には頓着なして、長十郎はお岸に向つて笑ひながら言つた。

「人間が、鳥や獸の力を借つて、獸の乳汁まで横取りせんならんやうになつたら、上つたりや。……わしがそんなことになるかいな。」と、老婆は凄い眼で長十郎とお岸とを睨んだ。

「鳥や獸の力を借らんかて、筍の力借つてるやないか。……筍何んや、藁草同然や。」

かう言つて、お岸のせゝら笑ふ狀が憎々しかつた。

「皆て、精出してわしを病人にしたり、殺さうとしたかて、死ぬもんか、わしは。……死んでも死なん。さうおもてとくれ。」

何時になく元氣の好い聲で言つて、また何時にない勢ひて立ち上つた老婆は、何うしてあんなに歩けるやうになつたかと驚かるゝほどの早足て、さッさと奧へ行つた。

六

仕事が上つて、夕飯の時刻になると、老婆は苦虫嚙み潰したやうな顔をして、額を撫て〳〵、また板の間へ出て來た。

先代から傳つた、小判型の大きな一斗入りの飯櫃の、底の見える飯を皆なが手盛りて喰へた。飯は南京米の混つた臭ひがプンとした。

「この小判型のお櫃に、一杯飯が炊けんやうになつたら、福島屋も商賣變へぢや。」と、先代が言つたことを、老婆は先づ思ひ出してゐた。

「わしの若い時分、……」

默つてゐやうと思つてゝ、默つてはゐられぬ、といつた風て、老婆かかう言ひ始めたので、

『そら始まつた。……「鳶の巣山の初陣」やないか。』と、長十郎は飯を頬張りながら笑つた。『……このお櫃に一杯、一日に二遍炊いて、まだ足らなんだことがあつたて。……今は何うや、うつし立てから底へしやもじが當るやないか。』

言ひかけたことは、言はいで置くものかと、老婆が口に力を籠めてゐる中に、表の障子が開いて、『お蕎麥下さい。』といふ聲が聞えたので、秀吉は老婆のお相伴の筍の煮た一片を口に含んだなりて、細長い土間を店の方へ駈けて行つた。稍暫くして錢箱へ錢を投り込む音がした。

『河内か和泉の百姓の娘の癖に、士官のおなごし（下女の事）になつたとおもやがつて、江戸ッこ（東京言葉の事）使やがる。』

秀吉は蕎麥を包んだ手て鼻の穴を穿り〱、彼れは出て來て、から言ひつゝ、再び黒い箱膳の前へ坐つた。

『秀吉は江戸ッこ嫌ひやなア。……太閤はんに江戸は、昔から方角が惡いけど。』

老婆の隣りて、筍の煮たのを突ついてゐたお春が、こんなことを言つたので、皆なは考へ〱笑つた。何のことやら到頭意味が解らずに秀吉も一所に笑つた。

かうして、大食揃ひの夕飯は終つた。

七

行く春の永い日も、漸く暮れかゝると、昔の全盛を語る福島屋の、お多福の面を赤く描いた表行燈に秀吉の手で例もの通り灯が入つて、上町の場末にも、ぽつ〱人通りはあつた。

「うどんそばたまおろしこうり、か。」と、繪行燈の字に節を付けて、悠長な調子て讀んて行く人もあつた。

晝間の嵐も收まつて、河内の國から吹いて來る、春の柔かい東風には、菜の花の匂ひがあつた。

狐が女に化けて通りさうな宵てあつた。

福島屋の店の間ては、家中の人が五分ヂンの吊りラムプの下に集つてゐた。

「さあ、太閤はん、えゝか。……安珍に淸姬やて、……お半に長右衛門やて、……お七に吉三やて、……小春に治兵衛やて、……夕霧に伊左衛門やて。……解つたか。……」

キイ〳〵したお春の聲は、なほも續いて、突き拔けるやうに表まて聞えた。

「それてやなア、わしが「安珍に」といふと、お前がなア、行き止まらずに「淸姬て」と受けて、直きにまた「お半に」とか、「夕霧に」とかいふんや、さうするとわしが「長右衛門て」とか、「伊左衛門て」とか受けて、また「お七に」とか「小春に」とかいふよつて、お前がまたお七なら「吉三て」と受け、小春なら「治兵衛て」と受けるのや。……この受け渡しを早うするほど面白いのや。……さうや何もおなごの名を先きい呼ぶと決まつたらへん、「治兵衛に」といふでもよいし、「伊左衛門に」といふてもよいのや。其の時は「小春て」とか、「夕霧て」とかいふて受けるのや。……あのう、それからな、わしが若し「お半に」いふと、お前が「長右衛門て」と受けて、直ぐまた「長右衛門に」と同じ名をいふてもよいし、「お半に」といふても構やへん。……何んても相手が迷ふて、受けにくいやうにいふのが面白いのや。えゝか。」

「へえ、解りました。……いふとくなはれ。」と、秀吉は出してゐた膝ッ小僧を、細い木綿縞の袷の裾て

押し包みつゝ、ぢよこんと坐り直して、狐拳でも打つ時のやうに、眼をくり〳〵さして身構へた。

『さあ、えゝか。行くで。……言はれてから考へたり、行き止つたりすると、シッペやで。……』

『よろしおま。行つとくなはれ。』と、秀吉はます〳〵固くなつた。

『長右衛門に、……』

『お輕で、……』

間違つた秀吉のどす聲に、お春の平面の色の白い顔が赤く染まるほど、彼女は噎せ返へるやうに苦しがつて、長い袂を口に當てゝ、笑ひ崩れた。

『何いふてるのや。……お輕は平右衛門で、あれは兄妹やが。……確乎しんか。……』

續けて苦しさうな咳をしてから、お春がかう言ふと、

『あゝさよか。』と、秀吉はけろりとしてゐた。

『さア、シッペやで、手を出しい。』

細い綺麗な、透き通るやうな指で、黒い汚ない手の甲に加へられたシッペの力は、なか〳〵強かつた。

『あッ、痛ア。……あいたしこ。……げんさい(情婦といふやうな意味)が待つてよる。……』

『さア、今度はお前からや。』

『わたへだッからか。……間違へなはんな。わたへのシッペ痛おまッせ。……さア、……安珍に、……』

『清姫で。……お七に、……』

『吉三で。……伊左衛門に、……』

『夕霧て。……小春に、……』

八

ラムプの眞下では、老婆とお岸と長十郎との三人が、お春の燥やいだキイ〳〵聲をよそにして、濕ッぽい狀で帳面を繰り擴げつゝ、一日の勘定をしてゐた。秀吉の集めて來た店屋からの拂ひから、錢箱を引ッ繰り返へした小賣りの上りまで、帳面づらと有金との算用が面倒らしかつた。

古ぼけた琉球表の疊の上に擴げられた厚い横綴ぢの帳面が、一際白く見えて、長十郎の太い指で彈く黑光りのした算盤は、端の方に一桁珠がなかつた。上に鐶の附いた大きな黑い硯箱も其處に出されてあつた。

『今日で丁ど手一杯や。……太閤の給金だけが食ひ込みか。』

漸く勘定を終つて、紙幣や銀貨や銅貨を、ごちや〳〵と縞の財布に納めた老婆は、詰まらなさゝうにしてから言つた。

『わてゑにはもう他所の家やよつて、餘計な世話も燒きたうないが、身上を任しなはれ、この子も二十八やないか、この子に任かしてあんたは身體もわるいのやさかい寐てなはれ。……あんたが何時までも財布握つてたのでは、福島屋もあかん。この子に任かして、早う嫁はん貰ろて、機械買うて、手打ちも止めて、……十二貫目の粉を十二ぐらゐに取つて、何んでも安賣りをせんことにや、今日々はどんならん。』

小蔭張りと着更へた袷の、帶の間から細い煙管を拔き出して、お岸はかう言つた。

老婆は何も言はずに、どいこいしよと立ち上つて、右の手に堅く財布の口を握りつゝ、奧座敷へ入つ

て行つたが、聽て用箪笥の錠前を開ける音が、コチ〳〵と聞えた。
奥座敷の方を見やつてから、お岸は煙草を詰めた細い煙管の羅宇を一寸舐めると、低く下げた吊りラムプの火て一服點けた。
「ちよん〳〵きなく〳〵、ちよんが菜の葉て、ちよ〳〵ンのほい。」
一寸便所へ行くと言つて、「安珍に、淸姬て、……」の座を外した秀吉の歸りの遲いのに、待ち疲びれつゝ、お春は片隅て面白さうに手を打ちつゝ、美い聲をしてこんなことを唄つた。さうして、
「長雪隱やなア。太閤はんは、……」と、訴へるやうに母の方を見た。
「今頃まて手水場に、居よるもんか。裏木戸から脫けて出て、……太閤はんやよつて、淀君ンとこへ行きよつたやろ。」
煙草の烟を吹き〳〵、お岸は微笑んてゐた。
「またおやま(娼妓の事)買ひやなア、松島やろ。」
疊を見詰めつゝ、むつかしい顏て考へごとをしてゐた長十郎は、心持ち首を上げてから言つた。
「おッさん、お前も、ちッとおやま買ひ始めたら何うや。そしたら、おばんも早う嫁はん貰う氣になるや知れんて。」と、お岸が氣樂さうなことを言ふと、長十郎はたゞ苦笑した。
「ちよん〳〵きな〳〵、ちよんが菜の葉て、……」
美い聲てお春がまたやり出した。

「おッさん、見なはれや。」

お春がから言つて、綺麗な細い兩手の指の先きを突き合はして、『人』の字の形を作りつゝ、眞ん中の高々指だけは、第二の關節の間を、右と左とぴッたり喰ッ着けたまゝ、先づ親指の先きを離して、「親に離れ。……」

小指の先きを離しては、「子に離れ。……」

次に食指の先きを離して、『親類に離れ。』

から順々にやつてから『これからだッせ、おッさん。』と、小指の次ぎの紅さし指の先きを離さうとして、「夫婦……何うやつても離れまへんなア。おッさん、えらいもんやおまへんか、夫婦は。……」

「其の高々指の眞ン中のとこを、引ッ着けてるんだッせ。其處離したらいきまへん、おッさん。」と、お春は、珍らしがつてお春のした通りを太い指で無器用にやつてみてゐる長十郎に言つた。

などと、今日縫物屋で覺えて來たことを受け賣りした。

お多福の面を描いた行燈を引く頃になつても、太閤はんの秀吉はまだ歸つて來なかつた。

十

奥座敷二間の疊は、この間更へたばかりて、まだ新らしかつた。

其處へ蒲團を四つ並べて敷いて、女三人は横になつたけれど、長十郎は薄暗い種油の行燈の影に胡座をかいて、今日の新聞や昨日東京から着いた『福音新報』やらに見入つてゐた。

「長十も二十九や、早う嫁が欲しかろ。」

眠つてゐると思はれてゐた老婆が、突然大きな聲をして、隣りのお岸に言つた。

「當り前だんがな。散財（遊興の事）一つするやなし、あの子が極道（放蕩者の事）やつて見なはれ、何うしなはる。……けど、あんたが難かしいよつてなア。……世間でも「あの筍婆が竹にならん中は福島屋も嫁はんがあるまい」いふてまんがな。」と、お岸は掛け蒲團に腮を埋めて、小さな聲をした。

「竹になる、……て死ぬことか。……わしよりお前みたいな小姑が居るよつて、嫁が來えへん。」と、老婆は泣き聲をし出した。

「わたへは、嫁はんさい來たら、鍋場を渡して、お春と一所に他のとこで商賣しますがな。……嫁はんの邪魔になるのは、あんたばッかりや。……可哀さうに、おッさんは、……太閤はんもおやま買ひに行くし、ガイチクみたいな年寄りでも、兒を拵らへたやおまへんか。」

お岸の聲は、だん／＼鋭くなつて來た。

「不自由なもんだすな。……お母アはんが、おッさんの嫁はんになれると、出ず入らずて、都合がえゝんやけどな。……不自由なもんだすな、世間ちうもんは、……」

これも眠つてゐるとばかり思はれてゐたお春が、大人並みの聲て、かう言つたので、

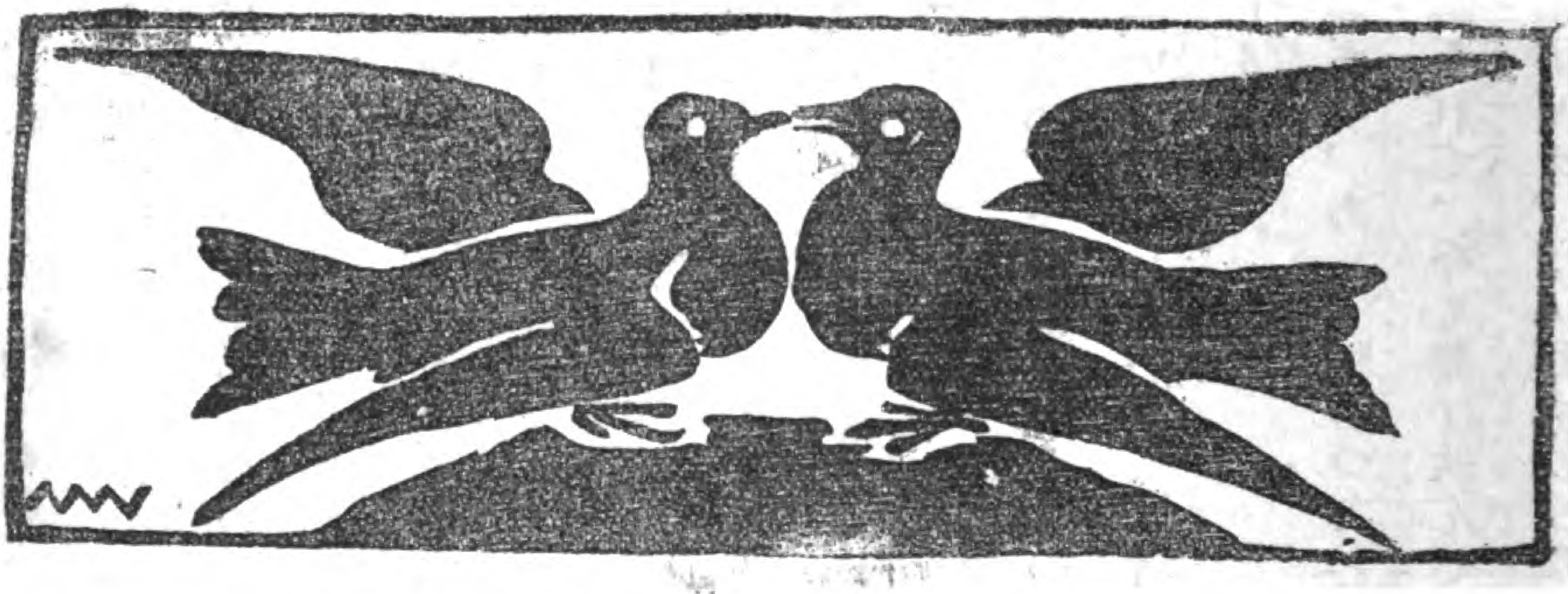
「默ッて寐なはれ、お前の出しや張るとこやない。」と、お岸は叱り付けた。

長十郎は素知らぬ顔をして、「福音新報」から眼を離さなかつた。

表を按摩の笛が、長く尾を引いて通つた。

「按摩はアン。」と、老婆は床の上に起き返へりながら呼んだ。

――（完）――



いのち

中村星湖

わが家へ歸ると、淺川一造はすぐに母親の病室へ通つた。『おつかさん兄さんが……』と小さな妹が先きに知らせに行つたので、母親は枕から頭をはなして待つてゐた。

一造は青ぶくれのしてをる病人の顔からポロ〳〵ッと涙が流れて落ちるのを見た。わが子に逢つた嬉し涙であらうと思ふと、彼は、母の病氣が一時はひどく重くて死ぬ覺悟をまでしたてあらうやうな氣がした。うす暗い部屋のなかには熱臭さと汚さと物哀れさとがみち〳〵てゐた。

『これは……』と言つて母と眼を見合はせたまゝ彼はしばらく言葉を續け得なかつた。

『お前よく來てくれたな。わしあ嬉しいよ。お前が心配性だから、またぢきに飛んで來ると氣の毒だからと思つて、おとつさんに手紙を出して貰ふ時には、はい大丈夫だから決して心配するな、歸るにも及ばない、ッて書いて貰つたけれど、斯うして來てくれると何より嬉しい：』

さう言つて母親は、よごれた襦袢の袖口を引出して涙を拭いた。

『まだ隨分わるい顏色ですよ。……一體どういふ病氣だつたてせう？やつぱりいつもの風邪てすかねえ？』

彼は母親が、初子の自分を産んだ時、田舍の習慣で疊を揚げた床板の上に藁を敷いてそこで七日の間臥てゐた爲めに、ちやうど冬の最中の雪の深い寒さの嚴しい折でもあつた爲めに、すつかり風邪を引きこんで呼吸器を痛めたとか言つて、年々寒さに向ふと版で押したやうにぜんそくを患ふ事を考へながらさう言つた。

『まあ、やつぱりいつものらしい……』

『いつものらしいッて醫者には懸かつてるてせう？』と問ひながら、彼は枕もとに藥瓶さへ無いのを怪しんだ。

『あゝ、あゝ、懸かつたとも、平醫者に。』

『それて、今も藥は飲んでますか？』

『いゝえ、はい藥あ飲まなくても好えだに！わしあお前が來てくれたてすつかり元氣になつたよ。ぢき

にも起きられさうだに。』

『そりや可かん！そんな顔色をしてゐて、一度や二度醫者に診てもらつたつて、藥を續けなくちや何にもならない…』

さう言つて、彼は急にぢれ〳〵し出した。彼は去年から今年へかけて、伯父を失ひ、祖母を失ひ、若い叔母をも一人失つてゐた。

『一體おとつさんが氣が利かないぢやないか！こんな病人を打遣つて置くなんて』と彼は、もしも父親が側にゐたならば、あの善良な、何事も母親の言ふ通りにしてをる人を頭から怒鳴りつけてやりたいやうに思つた。

彼はついと座を起つて、明るい勝手の方へ出て行つた。急に屋内が靜かになつた、と思つたのは糸撚り場の撚り車が止まつた爲めて、そこでは父親が高い脊を屈めたり起こしたりしながら切れた糸をつないでゐた。爐ばたには、一二度師範學校の入學試驗を受けてみたがいつも失敗ばかりする弟が、煙管で煙草を吸つてゐたが、一造の跫音でこちらを振向くと、大きな眼をパチリとさせて、あわてゝ煙管を下に置いた。

『繁！』と彼はその弟を呼んだ。『お前ちよつと橋場まで行つてな、藤さんにすぐ舟を仕立てゝ山本を、「平醫者」を迎へに行くやうに頼んてくれ。』

彼の聲を聞き付けて父親は撚り場から驚いたやうな顔つきて出て來た。

『お母ァが急に何うかしたかい？』

『いゝえ、急に何うッて事はないやうですが……』と彼は土間に佇んでゐる父親に言つた。『まだ〳〵打遣つては置けない容態ですから。』

『さうかな？』

彼と父親とがこんな問答をしてゐる所へ、小さな妹が母親の言葉を傳へて來た。

『氣持が大變好えし、日蓉まんじよに醫者をびつくりさせる事もないから、呼ぶなら明日、晝間ゆつくり呼んどくれとよ。』

『それが好かんべ』と父親は言つた。

一造も、自分があまり性急だつたと氣付いて、靜かに奥座敷へひつ返して、母の床の前で洋服を和服に着かへた。口を開けた旅行鞄の中には途中で買つた菓子の袋の外には土産らしい物は無くて、書物や雜誌や原稿用紙の類が押込んであつた。彼は菓子を子供等に分けてやりながら、ふと氣付いて鞄の中から紙包のまゝの葡萄酒の壜を取出した。

『急の事で何も仕度をしなかつたと言つて伯母さんから、これを』

『さうかい？』と母親は髮のもぢや〳〵した頭を枕に着けたまゝ横目でそれを見た。

『東京では變りは無いかい？』

『えゝ別に。』と言ひかけたが、彼は急にバタリと膝を打つた。『おつかさん、守ちやんが結婚したつてね

え? わしあ今日正午時分大月の停車場で見かけましたぜ。」

「さうかい、今日、大月で、逢つたのかい? もう二三日前に出懸けた筈だに!……オヽ、途中で嫁の家へつゝかゝつてゐつら。」

「逢つたと言ふわけではないです。たゞちよつと見懸けたゞけです。」と彼はその時の心持を考へながら

「ちやうどわしがこつちへ來る馬車へ乗りこんだ所へ、谷村の方からの馬車が一臺、恐ろしい勢ひで入つて行つたのです。ふいつと見ると、あの黒い脊廣を着て赤ネクタイをした守ちやんが、何だか知れない馬鹿に綺麗な身なりの女と並んで乗つてゐました。人違ひではないかと思つて腰を浮かして見てゐると、着いた馬車から降りる二人連の後姿が、一人はたしかに守ちやんでせう。女の方が餘つ程脊が高かつた。聲を懸けてやらうと思つてゐるうちに、こつちの馬車はもうずん／＼動き出したもんだから、彼等が馬車會社の建物を廻つて停車場の方へ行くのを見送つたゞけです。」

「オヤ、さうかい? 何だかお前に逢つて頼みたい事があるッて、先頃中は、一日置きのやうに來ては、わしがへ、(どうか一造さんの許へよろしく言つておくんなすつて、手紙を一本出しておくんなすつて)と頼むだよ。どんな事を頼むだい? と訊いても、ちつとも譯は解りやあしない。わしも煩さいから………」と言つて、母親はすこし咳をした。

「ア、餘り話をし過ぎたね。まあ、色々あとで聞きませう。靜かにしておいて。」と一造は遠慮して言つた。

手拭を腹の所で帯に挟んでさげた父親が、古い燒物の火鉢へ火を入れて持つて來た。そのあとから弟がくすぶつた吊し洋燈を持つて來た。

『こつちはほんとに寒いですね、まだ十月もなかばだのに』と一造は白毛の見えはじめた父親の髭を見詰めながら言つた。

『さうづらな、東京に比べたら』と父親は懷へ入れて來た煙草入を出した。

『お袋が臥てゐるから勝手の方が困るてせう?』

『煮炊きの事か?……うむ、それは男にだつて出來るさ、それにお母アがひどくわるいうちは上手からお仙が降つてゐてくれたから、何も差支はなかつたさ。』

父親は咳をする病人の枕もとで煙草を吸ひながら、しばらく一造から東京の樣子などを聞いてゐたが、やがて勝手へ戻つて行つた。遊びに出てゐた他の子供等も寄りついて、夕飯にしたのは餘程遲かつた。

その夜も、あくる日も、一造は病人にあまり口を利かせては惡いとは思ひながらも、ついむかうから話し出されたりこちらから話し出したりして、さまざまの物語に時間の經つを知らなかつた。朝早く妹のお仙が嫁入さきから子供を連れて來た、そして話し仲間に入つた。

話の中心はお仙の夫の弟であるアメリカ歸りの守治の結婚談であつた。母親もお仙も守治の名を呼ばずに『お氣違ひが……』『お氣違ひが……』と言つて話した。

守治がアメリカから歸つて來たのはもう三四年前の事で、彼は横濱へ着くと直ぐに上京して、一造の伯父の家を訪ねて、當時まだ學生であつた一造に逢つた。その時から一造は守治の様子がすこし變だとは思つてゐたが、歸郷してからの彼は、稼いで送つた金で買つて置いてくれと頼んだ田地をも買つて置かない、自分が學問の無い爲めにアメリカ三界まで行つて人知れぬ恐ろしい苦勞をしたから妹や弟には十分學問を仕込んでくれそれには自分の送つた金をいくら使つても構はないと言つてよこしたのに、やはり弟共をば小學校をも碌々卒らせずに野良仕事に追ひ使つてをる、村でも一二の身代で、すべての事に乞食のやうな生活をして金さへ溜めれば好いと思つてゐるのは何事だ！といふやうな理由で、親兄弟と烈しい爭ひを始めた。さう解つた事を言つてゐるかと思ふと、畑のまはりに桃の木が幾本もあつてその桃の實を盜むために近所の子供が畑を踏み荒らして仕方がない、うちの兄貴は物の經濟を知らないと言つて鉈を持つて行つて有る限りの桃の木を打切つて薪にしてしまつたり、氣が向くとぼろ〱の山着を着て自分の持物ときまつてをる林の下刈りに出懸けたり、村うちで新築の家を一軒買ひ取つて兄の家から持ち運べるだけの諸道具を持ち運んで、そこに住むかと思ふとさうではなくて、一々の戸棚や戸口へちやんと錠をおろして、鍵の束だけ大事さうに持つて歸つて來てやはり兄の家の物を食べ兄の家に寢起きしてゐた。體がわるい、頭がわるい、といふ事は自分でも口に出して、時々は滋養品を買ひに隣町

まで行つたり、藥劑を求めに横濱の居留地まで出懸けたりした。買つて來た鑵詰などは誰にも箸を當てさせずにひとりで食べた。或時は豚の脚を一本擔いで來て、肉は肉で燒き、骨は骨で脚の形のまゝ大鍋へ入れて二日も三日もかゝつて煮てその汁を飲んだ。親達や兄弟が醫者にかゝる事を勸めても『日本の醫者はダメだ、毛唐でなくちや』と言つて彼は固く拒んだ。激する時には鉈や鎌を振上げて兄を追ひ廻したり、お仙の生んだ子を捕へて河の流に押浸(おつぴた)したりした。土藏の前で菰卷きにされて地上をころげ廻りながら親兄弟や親戚の者を罵つてゐた事もあつた。

ある年の夏の休みに郷里へ歸つて、お仙や母親から斯ういふ話を聞いた時、一造はむしろ守治に同情せずにはゐられなかつた。彼の行爲が常軌を逸してゐるにしても、その言ふ所はすべて正しいと思つた。學問思想を尊ぶと同時に人間の本然の性を愛し、舊來の習俗の夢を破つて新生活の曙の鐘を突鳴らすのは、當時の日本の青年の、明治四十年代の青年の責任であるやうに思想界の先覺者から敎へ込まれた一造には、彼が咀嚼しかけた西洋の思想と、アメリカ歸りの守治の生活とがぴつたり呼吸を合せてゐるやうに感ぜられた。それに守治は彼の竹馬の友でもあつた。

そこで彼は、妹の嫁入さきではあるが、これまでもその生活方針に不滿を感じてゐた守治の家に對して、守治を助けて戰ひを開かうと決心した。理想の青空を望んで生活の峯から峯へと駈け上がらうと意氣込んでゐた彼に取つては、そんな事はたやすい事に思はれた。彼の理想は一人、一家、一郷の改造ではなく、一國、一洲、否、世界人類のすべての生活革命であつたからである。

彼が守治に歩み寄つた時には、彼の心には博愛、任俠、勇氣、聰明等のあらゆる人間の美德が滿ち〳〵てをると自ら信じてゐた。親兄弟や世間から狂人扱ひにされてゐた守治は、理解もあり親切もある味方を得た嬉しさであらう、每日のやうに一造の許を訪ねて來た。

一造はまづお仙の亭主に向つて守治をもつと保護する態度に出る事を要求した。お仙の亭主はそれに異議がないばかりでなく親達も守治の病氣を何とかして治してやりたいと願つてをる事を話した。守治はさう言ふ穩當な話をかたへ聞きしながらも『世間體の好え事ばか言つてる！一體お前が何時わしの心配をしてくれた？』と眼色を變へては兄に喰つて懸かるのであつた。

『過ぎ去つた事で何時までも苦情を並べてゐたところで、それは何の役にも立たぬ。この後、君は親達なり兄貴なりに對して要求する箇條をハッキリ言つたが好い。また君自身はたしかに心が疲れてをるから、自分の心をも體をも靜養する方法を取つて、新らしいほんとの生活に入らなければならない』など一造が說く時には『へえ、へえ』と守治は承け答へはするが、さて彼自身の意見を述べる場合には一つも纏まつた事を言はなかつた。

靜かに話をしようが爲めに、一造は守治を連れて、よく村の東の丘に登つた。そして草を藉いて相對して、暮れて行く村や湖水を見下ろしたり、星のキラ〳〵と光りはじめる天を仰いだりしながら、我と我が言葉に引入れられるやうな調子で諄々と思ふ所を述べた事も幾度かあつた。けれども彼はしまひには守治を憐れんで、自分の心のうちへ自分の生活のうちへ抱き入れてはゐるが、もう自分と對當の者、自

分の生活の相棒(パートナア)とは思つてゐない事に自ら氣が付いた。それ程守治は彼を慕ひ、それ程守治は彼に取つて便りない男になつてゐた。

夏休みが終つて、一造が東京へ發つ日には守治は『是非東京へ一緒に連れて行つておくんなすつて』と馬車會社の在る町まで跟いて行つた。東京へ連れて行つたところで何うもならないので、彼は『解らない事を言つては可けない！』と聲を荒らげて守治を村へ追ひ返した。

母親とお仙との話をつゞり合はせて考へると、守治の結婚は極めて幸福な事であつたと一造には考へられた。

守治はこの一二年急に女好きになつて、あれ程金錢にはケチ〳〵してゐた者が、煙草をも吸ひ出す、髭をも立てる、髮をもちやんと分けるして、近郷近在の心安い家で、若い美くしい娘を持つてをる所へは、何所へても遊びに行つた。彼に娘を見込まれた家では氣味わるがつて、娘を隱したり逃がしたりした。守治は一人の娘に成功しなければ次ぎの娘へ移り、次の娘にも成功しなければまたその次ぎへと移つて行つた。彼はある時ある娘の寫眞を得て喜んでゐたが、それを娘の親達に取上げられてしまふと、その寫眞がたしかに甲府で撮つた物である事を覺えてゐて、その寫眞の種板を持つてをる寫眞師を探す爲めに七八里距たつた甲府の町まで出懸けて行つた。またその寫眞の娘に逢ふ爲めに、娘のをる筈の女

學校の寄宿舍を毎日のやうに廻り歩いて新聞にまで出され、娘の家からは守治の家へ苦情を持ち込んだ事もあつた。これは一造が二た月ばかり前に祖母の葬式で歸つた時お仙の亭主から詳しく聞いて知つてゐた。

そこで人々の注意もあるし、親達もその氣になつて守治の爲めに嫁を探した。三里ばかり離れた機織場の可なりの家の二番娘に話がきまつて、二週間程前に形ばかりの式を擧げたが、嫁が來たその日から守治は側に付き切つて、嫁が湯へ入れば後から行き、化粧をすれば横から覗いてゐ、白晝でも夫婦して手を取合つて村の往還をのぼつたりくだつたりした。この話は、同じ家に住つてゐて、女の好奇心で彼等の生活に目を付けてゐたゞけに、お仙の言ふ所が一番詳しく、一番實感的であつた。

『ねえ、兄さん。なんぼ氣違ひだからつて、あんな男つてありがすらか？あの女が斯うぐつと』とお仙は手眞似で肩から胸へかけて着物を脱ぐ樣子をして言つた、『肌を見せて顏や襟首へ白粉をまつ白く塗る側て、何か好え匂ひでも嗅ぐやうに鼻をヒク〳〵させながら、斯うと首を突ン出して覗いてる守ちやんのニコ〳〵顏つたら、それこそ繪にも描けないで御座んすよ。女も女て、わし等なら何處か陰へ廻つてこつそりするし、亭主にだつてそんな所を見られりや恥かしいから（あつちへ行つて〳〵）位ゐは言ふにあの女つたら、平氣て御座んさあ！……もつとも、あのソレ、寫眞屋の初さんね、あの人の妾になつた事がある女だつてから。』

『どんな女だつて好いさ。守ちやんの氣に入りさへしりや。夫婦て晝間手を取合つて歩るくなんかあ、

アメリカ式だあね。お前が嫉妬を燒く事は無い』と一造は笑ひながら言つたが、やがて眞面目になつて、『おれはそれより守ちやんは人並に結婚なんかする資格の無い人かも知れないと、それを心配してゐたんだ。結構な事だ。目出度い事だ。』

一造が學校を卒業して郷里へ歸つた去年の秋には、彼はとう〳〵守治に泣き付かれて、守治を東京へ連れ出した。守治は一造が學生時代から居續ける親戚の家の近所に下宿して、ほとんど毎日のやうに一造を訪ねた。守治は東京か横濱かで職業に就いて都會生活をしてみたいと言つた。けれどもちよつと混み入つた事を話しても直ぐにこんぐらかつてしまふらしい守治の頭を、一造はすこしも信用しなかつた。『苦勞はアメリカで仕過ぎる程して來たのだから、田舍で靜かな生活を送り給へ。東京へ遊びに來るのは好いけれどこんな生存競爭の烈しい所で、今更職を求めようなどゝ言ふは不心得だ。まあ來たついでに好い醫者に懸かつて健康をすつかり恢復してから、田舍で氣儘に暮らさなくちや損だ』と言つて、主として彼が勸めたのは醫者へ懸れと言ふ事であつた。

一造が寄寓してをる家は醫者であつた。一造は自分の專門ではなかつたが、手近に材料も書物もまた質問すべき醫師もあるので、彼は閑な折々に醫學を調べた。兩性間に起こる病氣や、それに關聯した精神病學は殊に若い彼の興味を惹いてゐた。彼が守治を以てアメリカニズムの洗禮を受けた一種の理想家と見た時は早く過ぎてしまつて、殊に守治が上京してしげ〳〵彼の許を訪ふやうになつてからは、守治の精神狀態をヂヒリスの結果かオナニズムの餘弊かと思ふやうになつた。少年時代から殆んど遺傳的に

吝嗇であつたのを考へても、歸朝後親兄弟に對して執つた一種剛直な言動から察しても、守治がアメリカで賣女などに接した者とは何うしても思はれなかつた。彼は青年で獨身生活を續けてをる自らの經驗に照して守治の病症に一種の結論を下した。

しばらくすると守治は下宿屋生活は寂しくて堪へられない事と費用が嵩む事とを一造に訴へて、彼に同居を許してくれと願つた。それは郷里にゐるうちから守治に付きまとうてゐた『アメリカの政府から探偵が來ておれを跟け廻す』と言ふやうな脅迫觀念が一層嵩じた時の事らしかつた。彼は職を求めてある外國公使館へ入つて行つたが、擧動が怪しいと言ふかどで巡査に捕へられて警察署に二三日拘留された。『警察でわしの事を調べに來ても、どうか宜しく言つて置いて下さい。……そして、何うてせう伯母さんにわしを一緒に置いてくれるやうに頼んで下すつたてせうか?』など丶言ふ守治のオドオドした、淋しい心持を十分察せぬてはなかつたが、一造は離れてゐてさへ斯うだのに、一緒になどなつたら煩さくて自分の仕事も何も出來た詮議てないと思つて、同居はきつぱり斷つた。そして『郷里へ歸つて氣に入つた細君でも貰つて、安樂な生活を送るが一番だ』と勸めるより外はなかつた。

その頃、一造が守治の下宿を訪ねると、下宿の内儀は彼を蔭へ呼んで『あの方は何う言ふ方てせう?あなたのお親戚だつてますから安心はしてゐますけれど、下宿料はどなたかゞ十五日拂ひにお願ひしてあると言つても渡して下さらないし、何だか恐ろしく疑ひ深い方て……』とさも氣味わるさうに言つた。

守治の部屋は便所に近い、一番狹くて一番暗さうな部屋であつた。机の上には『ルーズベルト言行錄』

と『婦人世界』と『女學世界』とが置いてあつた。一造は「女」とか「結婚」とか言ふ事に就いて自分が與へた暗示が、いくらか守治の心に芽を吹いた事を知つた。

しかし守治は、とう〳〵寂しさに堪へ切れなくて、一造の父親や自分の兄に手紙を出して、一造と同居が出來るやうに賴んで吳れと言つてやつた事が、手紙を追駈けるやうに打つた電報に驚かされて出て來た兄の話で一造に解つた。

守治は折角兄を呼び寄せながら、逢ふが早いか兄弟喧嘩をして、その尻を一造の許へ持ち込んだ。守治の兄は彼を無理强ひに大學病院へ連れて行つたが『神經衰弱』とか書いてあつた診斷書を守治は怒つて引裂いたといふ、彼の兄の話であつた。

一緒に鄉里に連れ歸らうとする兄の言葉には從はなかつたが、兄が歸つて一週程すると彼はしばらく寄り付かなかつた一造の許へ突然に來て、『わしは鄉里に歸らうと思ひます』としほ〳〵として言つた。一造は守治をその時ほど氣の毒に思つた事はなかつた。けれどもたゞ淋しいと言ふ事に同情して自分の側に置いてやつたところで、それは守治の爲めの永久の計(はかりごと)ではないのは明かであるから、鄉里で女房を持つて平和な生活を送るが好い事を繰返して勸めた上、兄貴の家で十分保護するであらう、もしむかうの處置が不滿足であつたなら何時でもこちらから懸合つてやる、また心配な警察の事もこちらでよッく承け合つた、安心するが好い、その他の事でも、君の一身に關係した事は皆こちらで引受ける、萬一の場合にはこちらから出懸けて行つてもやると、一造は心から守治を慰めた。

斯うして郷里へ歸つて行つた守治が、生れ變つたやうになつて、盛んに女漁りを始めたと聞いた時には、一造は守治の爲めに祝杯を上げてやりたいやうな氣持になつたが、同時に一種の不安と物凄さとを覺えた。女漁りの末が目出度結婚と落ち着けば好い。けれども口髭を立てたのも、煙草を吸ひ出したのも、皆守治が自分の眞似をしてをるのである。盲目的に女の後を追ひまはすのも、彼の混沌とした意識へ投じた自分の暗示が、芽のやうに伸び、火のやうに廣がつたのである。いや、むしろ、自分が打算的な意氣地の無い常識で押えて來たパッションが、彼の空ろな魂を假りて働き出したのである。パッションは赤く明るいが、それを負うてをる彼自身は盲目である。角に炬火を着けられた牛のやうに、傾斜を下へ向けられた彼は、何處まで狂つて行く事やら解らない。そこには樣々の事件と共に數々の負傷者もあるであらう。それは守治と守治を放つてをる親兄弟の責任だとは言つてをられない。過去の守治は自分に取つては單なる友達であり、親戚の片端であるに過ぎなかつたが、現在の守治は、殆んど全部こちらの生活圏内へ入つて來てこちらの意志のまゝに動いてをる守治は、即ち自分である。女と言ふ者の後を追うて狂つてをる守治は、守治ではなくて自分である。さう考へると、一造はそれを會心な事であると感じながらも、自分の責任を思はずにはゐられなかつた。いつも去精されたやうな青い顏をして、要領を得ない事ばかり持ちかけて來る守治は、一造に取つては實際うるさかつた。うるさいから突き放した。突き放しは放しても始終彼の事が氣になつてゐた。

「へえ！そんなに夫婦仲が好いかねえ。それは何よりだ。」と一造は繰返して言つた。彼はそれて自分の

重荷が降りたやうに感じたのである。

『それでも、何かお前に頼みがあるッて言ふのは何づら？今度東京へ行つたのもたしかにそれでだよ』と母親が言つた。

『まだ警察の事でも考へてゐるのぢやないかね？その外にはもうわしに用のあるわけは無い。東京へ行つたのは、新婚旅行としやれたのでせう。』

『先頃もな、二人で宿を通りかゝつて、たつた道から我家の方を覗き込むやうにして、守ちやんが指さしをしながら何か女に話して、暫く立つてゐたつて、子供が見て來て話したつけよ。』

その日の午後、一造の意見で迎へた醫者が來た。醫者は非常に氣さくな人で、一造を見ると直ぐに早口で言つた。

『ご、ご、御心配なすつてお歸りなすつたかね？わしあもうすこしてあなたに電報を打つところでした。おつかさんの御病氣は、あの、なんです、熱がひどかつた爲めに、そ、そ、早産なすつたです。もも、もうすこし降りるのが遲けりや危なかつた。しかし、もう大丈夫です。』

早産？一造はそれを始めて知つた。誰もそれを今まで彼に話さなかつた。彼は何となく瞞されてゐたやうな不快を感じた。けれども、もう四十五六の婆さんになりかけたやうな身で產をしたと言ふ事を、

母が恥ぢて彼に知らせなかつたであらうと察すると、却つて親達を氣の毒に思つた。
彼は自分を初めにして、十人に近い子供を産んだ母親が、産む度、産む度に衰へて、とう〳〵生命まで危くして、あんな靑膨の顔になつた事を考へた。
醫者は母親を診察し終ると、もつと藥をも飮み、滋養品をも取らなければならない事を言つて歸つて行つた。
『相變らず叱るが、相變らず元氣な醫者だねえ』と彼は母親に笑顏を見せたが、醫者が來てから急に熱苦しくなつたやうな部屋から障子を開けて緣側へ出た。
戶外はパッと明るくて涼しい風が通つてゐた。もみじしかけた方々の山が青く晴れた空の下に鮮やかに見えた。湖水は波があるか、白くギラ〳〵光つてゐた。
一造は考へまいとしながらも、夫婦とか親子とかの關係を考へずにはゐられなかつた。うつかり淸げな物に思つても、それは盲目的なパッションに始まつてをる事を、彼は可なり遠い以前から科學者のやうな態度で考へて來た。それだけに彼はさういふ事に對しては割合に冷淡であつた。ところが今日は、それが爲めに、戶外に出ずにはゐられないやうなイラ〳〵した心持を感じた。
心を變へようとする努力は、彼の眼ををちこちのさはやかな自然の景色に移させた。眼さきがふと奧まつた一段低い所にある我家から往還へ出るたつた道のはづれの、往還向きの家と家との間に止まると、彼は急にそこに派手な服裝をした守治夫婦の立姿を描いた。

『あれが、ソレ、お前によく話す淺川つて、嫂さんの生家でわしの親友の一造さんの家だ。一造さんは今では東京に行つてる。大學を卒業したんだよ。』

『まあ、さうですか？』

『わしのたつた一人の親友だよ。何んな事でも引受けてくれると言つた。』

『まあ。』

女の顏にも賴もしさうな色が浮ぶ。（大學を卒業した若い人、親切な人、賢い人、そんな人に私も逢つてみたい）と女は考へる。いよ〳〵逢つてみると、人間並でない亭主が厭になる……そこまで空想して行つて、一造はハッと我に返つた。（ヘッ！何といふ親友だ！）と彼は自分で自分の心に呆れた。

『己は今迄一度もこんな心持を經驗した事はない。たとへ空想であつても。……それは色々な女を戀した事もある。今も現に手紙のやり取りをしてをる女はある。けれどもそれ等はすべてピューアな處女であつた。處女であつた筈である。しかるに人妻、しかもあの憐れな男がやう〳〵に得た女と……何といふ馬鹿な！』

彼は自分を憤るやうに兩手を胸で組んで、全身に力を入れて、しかし無意識に高い緣側から一段低い緣側へ步いて行つた。

低い緣側の下で何物かゞゴソゴソ、ゴソゴソと動いてゐた。彼は組んだ手を解いて身を屈めて覗いて

見た。そこには大きな鳥籠を土で塗り籠めて、中に白と黒とのまだらな毛の南京兎が飼つてあつた。子供の頃から灰色の毛の野兎ばかりに見慣れてゐた彼は、ちよつと猫の親子が巫山戯てゐるのかと思つた。親兎は餘程肥つてゐた。三匹ある仔兎が、誰かゞ入れて呉れたらしい靑い菜ッ葉を爭つて食ふ程にそだつてゐた。

彼は眼鏡を光らせながら、淺黑い、頰の痩けた顏を傾けて、ぢつと兎共の生活に見入つてゐた。――與へられた狹い住居にぬく／＼と生きてをる可憐な者よ！……と言つたやうな詩人風な感慨が一造の胸に起こりかけたが、それは直ぐに他の思ひ付きで消されてしまつた。

彼はキッとした、しかし笑ましげな顏付て座敷へ引返して行つた。

『好い物を飼つて置きましたね。あの兎の親を一匹殺めてやらう。そして早速おつかさんが食べたらい』と彼は大きな聲で言つた。

『およしよ。あれは子供等が樂しみに飼つて置くのだから』と母親は顏を上げて答へた。

『だつてあゝいふ者をたゞ飼つとくだけぢや滿らないぢやありませんか？こんな時に食べなくちや食べる時はないですよ。子供等の弄具には仔兎だけで澤山でさあ。……だが、あれは雌ですか？雄の親は何うしました？』

『雄はこの夏湖水が增えて此所までついた時、水に浸つて死んでしまつたのさ。』

『ふうむ……兎に角、僕が殺めてやる！』

さう言つて彼は、母の止めるをも拘はず、土間へ降りて薪を一本取つて戸外へ出た。病氣の母に食はせようとする殊勝な心よりはむしろ殺生の快感に、血を見ようとする欲望に渇し切つて兎の栖家の戸を開けた。兎の親が驚いて逃げようとしたのを、長い耳をぐつと摑んで曳きずり出した。

可なりの犬程ある大兎は、四肢に懸命の力を籠めて彼の手から離れようとした。そして齒を剝き出し、眼を怒らし、爪で土を搔いた。彼もちよッと恐ろしくなつたが『糞ッ！』と叫びながら片手でうんと兎の鼻面を地面へこすり着けて置いて別の手に持つた薪ざッぽで腦天を一つ打つた。兎の重い體は耳を摑んでゐた手のまはりを筋斗返りに一返り返つた。そのはづみに彼は手をはなしてしまつた。しかしあれ程跳いた動物も、もう、大きな腹を見せて橫はつたまゝヒク〳〵手足を動かしてゐるだけであつた。彼はも一度狙ひを付けて兎の眉間のあたりを打つた。まつ赤な血がドク〳〵と兎の口から流れ出した。

この殺生は彼にとつては案外に不愉快な仕事であつた。彼は人間に飼はれた獸は殆んど人間に近い感じを與へる事を思つた。

彼は南京兎の料理を弟に任せた。弟はうす笑ひをしながら出刄を持つて來て、のろ〳〵した手付でその獸の皮を剝いだり腸を去つたりした。

一造が付き切つて養生をやかましくさせた爲めか、または母親が言ふ通りたゞ彼が歸つて來たといふ事だけの効力でか、母親は日一日と元氣を增して、一週間と經たないうちに、もう起き返つて、糸くだの崩れなどを直す程になつた。

「さう言ふ無茶をするから體をこわすんだよ」と彼が聲を尖らせて言つても、「どうよお前氣持が惡けりやこんな事ても仕ようと思ふ氣さへ起こらないよ。はいそんなに心配してくれなくても好えに」と母親はやはらかに笑つてゐた。

もう母の看護をする必要もなくなつたので、ある日彼は、彼が歸郷ごとにそこに登る習慣になつてをる東の山の頂に登つた。つい四五日前黄ばみかけたと思つた落葉樹は二た朝ばかり續けて降りた深い霜の爲めにすつかりもみぢして、殊に楓や漆の木は午後の暖かい日ざしに燃ゆるやうに見えた。少年の頃よく味つたあけびやよすゞの實も熟してゐた。美くしい日に透きながらほろ〳〵と散る木の葉を見ても、切株に群がり生えた菌の匂ひを嗅いでも、生ひ立つた村の自然はいつも懐かしかつた。『……然し人間は厭はしい……』と言つたロシアあたりの感情家の言葉を繰返して悵然としたのは、彼がまだ學生時代の事であつた。

「人間最も愛すべし！……」

彼は山の頂の石地藏の前の枯芝生に腰を卸して、いつもの通り村落や湖水を眺めながら、最近の彼自身の思想の經路を追つて最後の結論に達してみたが、その自分自身の思想と思つてゐる物が、やはり昔のやうに、附燒刄に過ぎないとも感じられた。極めて漠然としてはゐながらも、感情は別の言葉を發しようとしてゐた。

學校を卒業してから最早一年餘りになる。その間の自分の生活を顧ると、彼にはあの當時の天駈ける

やうな理想は何時となく力を失つたやうに感じられた。たゞ祖父から遺傳した癌腫の爲めに伯父が死んだ事や、自分が長い間伯父の娘に對して戀を感じてゐた事や、祖母が老病の爲めに朽木の倒れるやうに斃れた事や、祖母の葬式に歸鄕した自分がある小學校の女教師と無理な機會を造つて逢つた事や、若い叔母が戀を失つた爲めに自殺した事や、最近自分が母の病氣を見舞ふ爲めに歸つて來た事やが、自然なもしくは餘儀ない生活の相として儼として心に浮んで來るだけであつた。普通の、ありふれの人間の生活に曳ずられて歩いてをると言ふに過ぎない。

「だから、やつぱりさうさ。人間最も愛すべしさ！」と彼は自分で自分に念を押すやうに繰返した。それても何となく不滿足が殘つた。

可なり長く彼の生活にからまり付いてゐた守治の事も浮んで來た。

「しかしあれは、あれて完結した。」

それには自分の力が大いに與つてをると思ふと、彼はさすがに快かつた。

それから二日ばかり經つたうそ寒い雨の日に、思ひがけない電報が彼の名宛て來た。

「ナンカカヘル〇ヘンマツ」

その電報には返信料が仕拂濟になつてゐた。出所は九段局てあつたが、差出人の名は無かつた。伯父の亡い後の伯母や子供等が、何か困難な事件に出逢つて急に自分を呼び寄せようとしたものと、最初彼は取つた。しかし、何かまた賴みがあると頻りに言つてゐたと聞く守治から打つた電報かとも思つた。

守治とすれば宿所が解らないゆゑ返事のしやうがなかつた。

『アスカヘル』

彼は兎に角さう伯母に宛てゝ返電した。

雨はあがつたがまだ雨雲の暗く空をおほつてゐる夕方に、彼は東京の伯母の家に着いた。伯母は何事も無いやうな笑顔で彼を迎へた。

『私の方へ電報をお打ちなすつたのは伯母さんぢやありませんでしたか？』と彼はすぐ訊いた。

『いゝえ。それは守治さんでせう。きつと。あの人毎日のやうに來て（一造さんはもう歸つたか、もう歸つたか？）つて訊くんですよ。しまひには私に電報を打てつて言ふんです。親の病氣で郷里へ行つてゐる人にそんな事は出來ないッて私は斷りましたの。……ぢやああの人自分で打つたんですよ。えゝあなたからのは昨夜着きました。あの人今朝も見えたから今日歸るといふ電報ですよと言ふと喜んでゐましたが、でもよつぽど變てすわねえ！自分が打つてやつた事はすこしも言はないんですよ。……あゝ最初の日奥さんを連れて來ましたよ。立派に着飾らせてなか〳〵別嬪さんですよ。』と伯母は殆んど一造には口を開かせずにひとりで話し續けた。

守治が何てそのやうに自分を待つてゐたかと怪しみながらも、一造は守治夫婦の泊つてをるといふ宿

屋へ電話を懸けて、食事を濟ませばこちらからすぐ出懸けて行くと通じて置いた。

守治の宿は飯田町の停車場に近く、堀割に臨んでゐた。一造が門を入つて、守治の名を言ふと帳場にゐた女中がこちらの名を訊いて起つて行つた。間もなく守治がニコ〳〵しながら現れた。思ひなしか下宿で淋しがつてゐた頃の彼とは別人のやうに見えた。守治に案内されて一造は梯子をのぼつた。

二階の、堀割に舟がゝりしてをる舟々の燈火を見下ろせる一室が彼等夫婦の占めてをるところであつた。障子を開けて戸外を眺めてゐたらしい女は、一造が座に就くと、そつと障子を引寄せてこちらを向いた。そして電燈の光を避けるやうな風に坐つて、默つて鄭寧なお辭儀をした。體を起こしたところを見ると、高島田に結つてゐる加減か脊が餘程高く、年も二十歳を越してゐるらしかつた。色は淺黑く見えたが、細面で目鼻立も整つて、物腰に鄙びたところとて感ぜられなかつた。しかし初對面の人と話をする時、殊に女と話す時に、對手の顏を見詰めることを敢てしない一造は、そこに一人の女がゐると思つたゞけてある。彼は絶えず守治の方へ顏を向けて、守治にばかり話しかけて、電報まで打つて自分を呼び寄せた守治の事情を早く知りたいと思つてゐた。

しかるに彼が『どんな用事でした?』『何か急に困る事でも出來たのかね!』と幾度か問ひ懸けても、守治はたゞニヤ〳〵と笑つてゐるだけであつた。

『思つてゐる事はどんな事でもズン〳〵言つたが好い』と一造はすこしおれ氣味で言つた。『斯うして目出度奥さんをも迎へた以上は、もう他の心配をする必要はないと僕は思ふね。それとも兄貴や親達に對

して何か要求してくれと言ふのかね?……或ひは、何うも僕には解らんが……例へば、體がまだ十分でないなら早速醫者に懸かるさ、百姓は厭なら何か商賣をやるさ。……或ひは君は、以前のやうに東京で職業に就きたいとでも考へて來たのかね?」

「えゝ、そんな事も考へましたが……さうでもありません……」

「ぢや何だらう?兎に角もうすこしハッキリしなくちや……」

「さうで御座いますよ、まつたく」と今まで殆んど默り續けた女か突然口を入れた、『ひとりでよく考へてゐたつて何事も成功するわけはありません。……思つてゐる事を言はなくちや何方だッて……

……」

一造はちよつと驚いた。『成功』などいふ漢語が厭に生意氣に聞えた上に、女の聲が烏か何かの啼くやうな味の無い響を持つてゐたからである。

「一體、君は横濱あたりへ行つて毛唐の醫者には懸かるが、日本人の醫者を嫌うつて言ふのは何ういふわけだらう?それを今夜はゆつくり話して貰ひたいものだね。」

結婚でもさせたならば、或は氣分が變るかも知れないと思つた守治が、こゝまで來てもまだ昔の通り頭が好くないらしい事を考へて、一造はさう言ひ出した。

「アメリカで何ん事をして來たか、それをも、ね。雇主と月給の事で喧嘩をして窓玻璃を打割つて拘留されたとか、言葉が不自由な爲めに苦しんだとか、アラスカの鑛山まで渡つて行つて、恐ろしく淋しい

思ひをしたとか言ふ以外に、君にはまだ何かあるのぢやないかね？今夜は斯うして奥さんと僕よりほか誰もゐないんだから、ゆつくり正直に話してくれ給へ。』

一造にやさしくさう言はれると、今までたゞニヤ〳〵してゐた守治も、急に眞顏にかへつた。

『私は何うも子供の時から狙はれてゐます』と彼は額のあたりに暗い影を浮べながら話しはじめた。『まだ八歳か九歳の時分の事です、ある日、村を二三人の異人が通りました。その頃は異人と言へば珍らしかつたから、子供等は皆かどへ立つて彼等を見送るのでした。たゞ見るばかりでなく（ヤーイ毛唐人！ヤーイ毛唐人！）と皆て惡態を吐き出した。するとその異人達の中の、今考へると斯うガウンのやうな長い黑い服を着た男が、ギロリと子供等を睨み返したのです。その時私は他の子供等と一緒に立つてゐましたが、泥惡戲をして着物を汚したものだからそれを日向に脫いだ儘、すつ裸になつてゐました。惡態を吐いたのは他の子供だのに、その眼の恐い異人は私一人を睨んで行つたのです。その後も同じ異人が村を通りましたが、私はちやうど戶外で行水を使つてゐた時で、その男に見られると、あわてゝ盥から飛び出して土藏のかげへ行つて顫へてゐました。私がアメリカへ行くようになつたのも、その男が始終私を跟け廻して、あつちへ行かなけりやならぬやうにしてしまつたのです。』

何だか變な話だとは思ひながらも、子供の頃よく村へ異人が來て、蝶々を捕り歩いて標本などを拵へた事をはつきり記憶してをるので、一造は守治のその話を全然狂人のたわ言だとは取らなかつた。

それだけ話すと、守治は默つて考へ込んだ。

「それから何うしました？君がアメリカへ行かれてからは？」と一造は守治を促した。

「アメリカへ行つてからもその男が始終何處かで私を睨んでゐました。そして何でも私を苦しめよう〳〵と仕向けるです。私が日本へ歸る時、體がわるかつたから、むかうの醫者に診てもらつて藥を拵へさせて持つて來ましたが、船中でなくなつてしまひました。あれもその男の仕業のやうです。私が東京で職業の口を探しても、皆その男が先廻りをしては邪魔をしてゐます。」

そんな話になると、もう一造は好い加減に聞きながすより外はなつた。

その意味をなさない言葉を聞き流し、聞き流しゝながらも、晝間長く汽車に乘つた爲めに非常にくたびれてゐる一造は、憂鬱の權化のやうな、人間の仲間ではないやうな、守治から來る一種の壓迫を強く〳〵感ぜずにはゐられなかつた、何といふ悲慘な事だ！新婚の妻がこんな夫のこんな話を側へ聞きしなければならないといふのは！と思ふと、一造は急にそこから逃げ出したくなつた。

一造が相槌を打たなくなると、守治も默つてしまつた。茶が出たり菓子が出たりした後で、守治は階下へ降りて行つた。そして暫くの間歸つて來なかつた。

「東京へは始めてゞすか？」

「いゝえ、父に連れられて一二度參りました事が御座います。」

そんな話を女と始めたが、寒冒聲でゞもあるかと思はれるガサ〳〵した女の聲に興を醒されて、一造はまた直ぐに默つてしまつた。

やがて守治が戻ると、一造は草疲れてをるから歸ると言つた。しかし今蕎麥を誂へたからそれが來るまで待つてくれと守治が止めるのでやむを得ず腰を据ゑて、また色々と要領を得ない守治の話を聞いてゐた。蕎麥が來てそれを食べ切ると、一造は起ちあがつた。守治は『まだ好いてせう』と言つてまた止めた。

『くたびれておいてるッてますから、お止めしない方が好いてせう』と女が言つた。

一造は狐に魅（つま）まれたやうな氣持て伯母の家へ歸つて行つた。

その翌日、一造は久しぶりて勤め先きへ出懸け、それから歸ると、夕方からまた九段の側まで佛蘭西語の稽古に出懸けた。六時過ぎに戻つて晩飯を食べてをると、そこへ守治が洋服など着て訪ねて來た。

『散歩に出ませんか?』と彼はニヤ／＼笑ひながら言つた。

あれ程の騒ぎをして自分を呼び寄せたのだから、何かきつと言ひたい事があるてあらう。昨夜は女房が側にゐた爲めに言ひ兼ねたのかも知れない。さう思つて一造は誘はれるまゝにぶらりと出た。

二人は何時か守治の宿の方へ淋しい横町を歩いてゐた。十月も末だが、東京の宵はまださう寒くはなかつた。

『實はワイフの機嫌が惡るくて困るのてす』と守治はだしぬけに、しかし長い間言はう言はうとして言

ひ得なかつた事を一時に押出すやうな調子で言つた。

『何うして？』

『……實は、その、私には子供が無いやうです。……それで、ワイフがおれて〳〵仕方がないのです。東京まではやつと連れて來ましたが……お願ひですが。慰めてやつてくれませんか？』

『何を君は言ふかね？細君を慰めるのは亭主の役目ぢやないか？』と一造は或豫想が當つたのにぎよつとしながらも、つとめて靜かに言ひ聞かせた。

彼等は守治の宿の前へ出たが、それを通り越して停車場前の廣場へ行つた。そして其所に暫らくイんでゐた。

――何と言ふ憐れな男だらう！いかに人を信用してをると言つても、そのやうな事を東京まで賴みに來る……

考へれば考へる程、一造はひた呆れに呆れるのであつた。

子供が無いとなれば女の身に他に樂しみは無い、と妻が言つたと言ふ。その心持は好く解る。こんな事なら生家へ歸して吳れと妻が言つた、あれに歸られゝば自分は淋しくて堪らないと言ふ。その守治の心持にも無理はない。

『そんな馬鹿な事が出來るものか！ぢや君の言ふ通りにした後は何うなるんだね？』

一造は守治と人間には滅多に有りさうもない或問答をした後で、試みにさう言つた。

『さうすればあれを離縁する口實が出來ます』と守治は躊躇なく答へた。

『へえ？……君等の離縁の道具に僕を使ふと言ふのか、あまり人を馬鹿にしては可けない！』

一造は前後のちぐはぐな守治の言葉にとうとう腹を立てゝしまつた。

一造が歩き出すと守治も後を跟いて來た。二人は默つたまゝ鐵橋下から小石川橋を渡つて砲兵工廠の前まで出た。暗い夜で、橋の袖に一本の枯柳が淋しく立つてゐる外は、ゆき來の人の影も無かつた。

『ワイフともすかつかり相談して、あれもよく承知してをります。』

『けふわざわざ二階から階下へ部屋を移しました。裏の木戸を開くやうにして置きます。』

さういふ守治のきれぎれの言葉と、昨夜女が『何事も自分獨りで考へゐたゞけでは成功するわけはありません』と言つた言葉とを繼なぎ合はせて考へると、別に意味もないやうな一言々々に、嘲弄とも、嫉妬とも、焦燥とも、自暴自棄とも、または共謀とも復讐とも和合とも取れるやうなこんぐらかつた意味が添つて來るのであつた。

――守治に結婚を勸めたのは己である。守治の一身上の出來事は何事でも引承けてやると言つたのも己である。己は己の意志で守治が動いて居ると思つてゐた。守治の生活は己の生活だと思つた事さへもある。今は實際その合同の、一致の生活をあの女までが求めてをるのだ。しかし己は……

一造は自分で自分が解らなくなつた。自分で自分を嘲りたくなつた。大聲揚げて笑ひたくもなつた。

それから二三日目の夕方、彼が夜學へ行かうと急いで歩いてゐると、むかうから赤いネクタイをした

洋服姿の守治が何か、花物の枝を提げたその妻と一緒に、何處からか戻つて來るのに出逢つた。

「や！」と言つて一造は立止まつた。女は鄭寧に腰を屈めた。

「どちらへおいでになります？」と守治が訊いた。

「夜學に」

「幾時頃お歸りです。」

「一時間だけだから、六時すこし過ぎれば歸つてます。」

「今夜何處へか遊びに參りませんか？」

「さうだね。何處へか行かうかね。」

「それぢや、その積りてお訪ねします。」

「あゝ、ぢや失敬。」

一造が歸つて來ると間もなく、守治がやはり洋服姿で訪ねて來た。二人は一緒に街へ出た。

「マダムは？」と一造はすこし變な氣持を感じながらも、お世辭のつもりで言つた。

「今、髮を結つてます。ちよつと呼んで來ます」と守治は主人の吩咐て動く僕でもあるやうに宿の方へ駈けて行つた。

やがて髮を新らしく廂髮に結ひ、夜目にも見える程白粉を塗つて、派手な羽織にショオルを纒つた女と、洋服の守治と、和服の一造とは、明るい街を擇り〳〵東京座の側からお茶の水橋を渡り、本郷臺へ

のぼつて本郷座へ入つた。男同士はしきりに話をしたが、女はポッツとも口を利かなかつた。
何か得知れぬ力に誘はれるやうにして、守治夫婦と一緒に出は出たが、一造は何を話して好いのか、また何處へ行つて好いのか解らなかつた。矢鱈にポカ〳〵と歩き廻つて、思はず本郷座の前へ出て、芝居が開いてゐるのを知つて、そこの立見場へ入つたまでゞあつた。
舞臺では新派の俳優たちが、所謂本郷座式のコケ嚇かしの大道具を使つて『金色夜叉』を演じてゐた。三人は立見場の上段の手摺の側に立つて舞臺を眺めてゐたが、しばらくすると眞中にゐた守治がするりと脱けて一造を彼と妻との中に挾んだ。ふつとそれに氣付くと、一造は守治の心を考へずにはゐられなかつた。そして、體ぢうがむづ痒くなるやうな氣がした。
一幕だけ見て三人はそこから出た。一造がもう夜も深けた故歸らうと言つて、伯母の家の近くまで來た時、守治は『蕎麥屋へ寄りませんか？』と言つた。一造はそれを拒まなかつた。
蕎麥屋で一緒に物を食べる時も、殆んど口を利かなかつた女が、靴を穿くのに手間取つて居る守治より先きに出た一造を追ひ駈けるやうにして來た。
『私は困つちまひます。離れた所だからあゝ言ふ人とは知らずに行きましたが……私の家では私が帳場をやつたゐたものですから、急に行かれて帳面の具合が解らないから一寸歸つて來てくれッて言つて來てゐるのです。一週間程で好いから歸して下さい、と何んなに賴んでもあの人が放してくれないんです。』

『もうすこし僕等の言ふ事を聞いて醫者に懸るなり何なりハキ〳〵すると好んですがねえ……一體、僕の言ふ事はよく聞く方ですけど』と一造が挨拶に窮して、挨拶にも何にもならないそんな事を言ひかけた時、守治が急に寄つて來た。忍び寄るやうに。

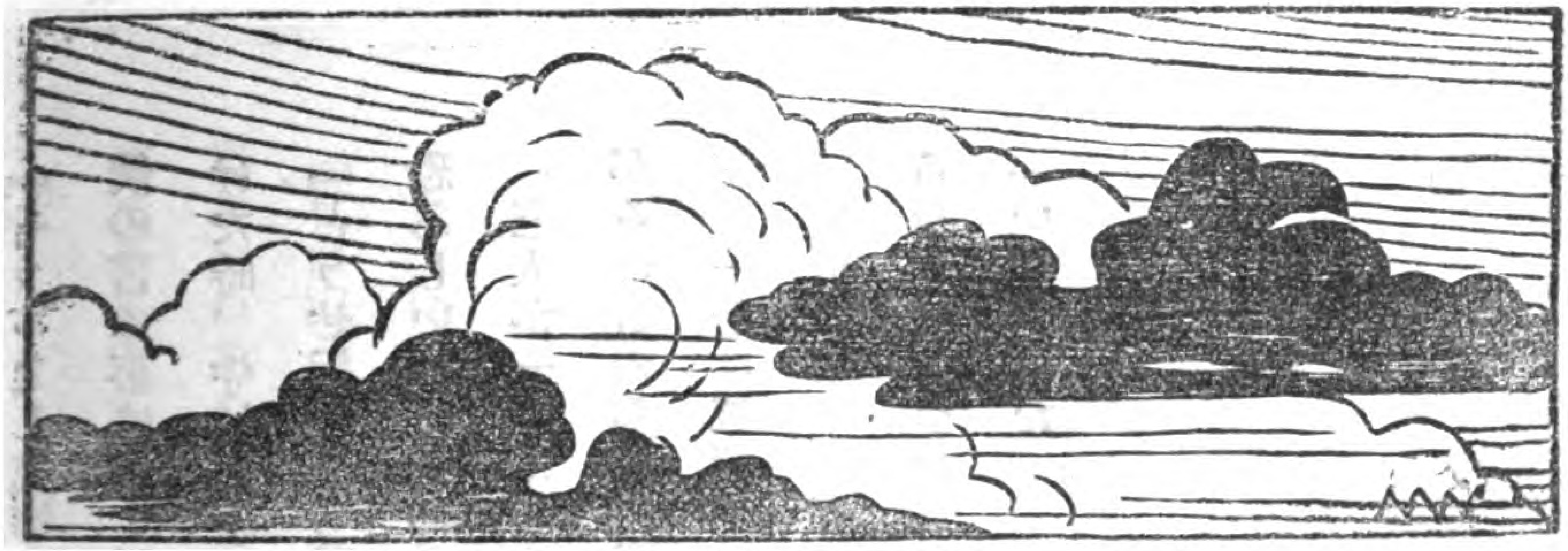
『どうせ近いうち國へは歸ります筈です。もし困つた時には手紙を差上げますから』と女はそれだけを恐ろしい早口で呟くやうに一造に言つた。

三人が一緒になると、皆默つて、のろ〳〵と歩き出した。ちやうど、ところどころに灯は點いてゐるがその灯の爲めに闇が際立つ「夜」その物のやうな影が、あらゆる人の生命に根強くからみ付いてゐる事を一造は感ぜずにはゐられなかつた。

伯母の家の前で一造が別れを告げると守治はその袖を控へて『どうでせう今晩私共の許へ』と哀願するやうに言つた。

『いや、また……』と一造は言葉を濁してツッと耳門を入つて、バタリと鐵の戸を閉めた。

（をはり）



喜劇

春の海邊　三幕

谷崎潤一郎

人物

三枝（さへぐさ）春雄　工學士

同　梅子　春雄の妻

同　靜子　春雄の長女

原田千代子　春雄の妹、或る銀行家の妻

河村雪子　某省某局長の夫人、梅子の實母

吉川清　文學士、某雜誌記者

まつ　下女

時　三月の末の或る一日、午後一時頃より夜の十一時頃までの出來事

所　相州鎌倉長谷の海岸

第一幕

河村家別莊の一室、――舞臺下手は壁、上手と正面の奥は障子。兩方の障子を開けると外の椽側に硝子

障子が嵌まつて、其の向うに庭が見える。ところ〲に背の低い小松が植わつて居る。庭の後ろは砂山に續き、折々穩かな波の音が聞える。

此の座敷は目下當地に逗留する三枝夫婦の居間に充てられて居るのだが、一年程前に新築したもので、非常に日あたりのいゝ、陽氣な間取りになつて居る。室内下手の壁に添うて、書棚の附いた、大型のライチング、デスク、其の前に椅子。デスクの上に華美な置時計、花瓶などを設く。部屋の中央に桐の胴丸の火鉢、其の左右にメリンス友禪のふツくらした坐蒲團、上手前方の障子際に桑の鏡臺、其處にも同じやうな坐蒲團。正面奥の緣側に籐の緣椅子(ソファー)。――凡べて、いかにも若い夫婦の生活を偲ばせるやうな、花やかな調度が裝飾的に配置してある。

第一節

三枝春雄、色の白い、濃い髯を生やした、三十歳前後の神經質らしい男。獨り椅子に腰掛けて、デスクに凭れながら、何事か考へに沈める樣子。

上手の障子は締まつて居るが、正面の方は左右に開け放たれて、暖かい春の日光が、庭の方から硝子越しに室内へ射し込む。背景の砂山の向うには、午後一時頃の空が、靑々とのどかに霞んで見える。

やがて、春雄は立ち上つて、上手の鏡臺の傍へ据わり、其處に映つて居る自分の顏をつく〲と眺め始める。暫くすると、下手の方から雪子と靜子とが緣側へ現はれる。雪子は四十七八歳の、でつぷりと太つた、人の好ささうな、快活な夫人。靜子は六七歳の可愛らしい娘で、祖母に手を引かれて居る。

靜子 雪子と共に春雄の後ろへ歩み寄る。お祖母樣(ばあさま)、お父さんはお化粧をして居らつしやるのよ。

雪子 ほんとにをかしなお父樣だこと。――お前のお父樣は、暇さへあれば毎日鏡を見て居るんだよ。

靜子 父の襟頸に抱き付いて、自分も一緒に鏡を覗き込む お父さん、あたしがお白粉を着けて上げませうか。

春雄 いやお白粉は眞つ平だ。あとでお母さんに着けてやるがいゝ。

雪子 春雄さん、そんなに鏡ばかり視詰めて居てどうするのさ。此の頃は誰だつてあなたを病人だと思ふ者はありやしませんよ。第一顏に赤味がさして來たからね。

春雄 しかし矢つ張り日に一度づゝ鏡を見ないと、どうも安心しませんよ。それに何てすな、かう肉が附いて、血色が好くなると、鏡に向つても我ながら非常に愉快です。お蔭樣で、今度こそはすつかり丈夫になつたらしい。

雪子　丈夫になつてくれなければ困りますよ。――全體あなたは神經病みだから、それて尙更病氣に取り憑かれるんだね。每日々々鏡を視詰めて、自分の血色を氣にする人があるもんですか。

春雄　なあに、別に氣にして居る譯ぢやありません。一體僕は昔から鏡を見るのが好きなんです。退屈すると、鏡を見て居るのが一番面白うござんす。

雪子　妙なお父樣だねえ靜ちやん。

靜子　お父さんのお洒落やあい。

春雄　何だと、お父さんの事をお洒落だと云つたな。こいつめ、こいつめ。と云ひながら、靜子を兩手に抱き上げて立つ。靜子からからと樂しげに笑ふ。

雪子　椽側の籐臺に腰かけて戶外を眺める。ほんとに今日は好いお天氣だ。春雄さん、ちつと子供を連れて散步でもしたらいゝぢやないか。その內に梅子も歸つて來るだらう。

春雄　デスクの前の椅子に腰掛け、膝の上に靜子を載せて搖す振つて居る。さあ、まだちよいと歸りますまい。今日は少し面倒な用事があるんですから。

雪子　どんな用事?

春雄　いえ、實は赤坂邊へ借家を搜しに行つたんです。

雪子　まあ、氣が早いつたらないね。まだ半月は此處に居たつていゝぢやないか。

春雄　僕はどつちでもいゝんですが、梅子が馬鹿に東京へ歸りたがつて居るんです。もう鎌倉なんか飽き飽きして、嫌だ嫌だつて云ふんです。それにいつまで別莊を拜借して居るのも、心苦しいやうですから、……

雪子　そんな事があるもんですか、どうせ別莊は明いて居るんだし、あなたにしたつて、一日も長く海岸に居た方が、體の爲めにいくらいゝか判りやしない。彼の娘が歸つて來たら、私からよくさう云つてやりませう。

春雄　しかしおつ母さん、僕も長々御心配を掛けま

したが、もう今度こそ大丈夫です。此れから一番奮發して、今迄の取り返へしをしなくつちや、仕樣がありません。何しろ足掛け三年と云ふもの、まるで棒に振つちやつたんですからなあ。――お父さんに對してもいろ〳〵御厄介になるばかりて、全く申譯がありませんよ。

雪子　けれどもあなたが此の頃のやうに達者になつて下されば、それが何よりの話さ。どんなにえらい人だつて、病氣には勝てないんだから、過ぎ去つた事は仕方がない。親父さんも、來月中には必ず役所の方へお世話をするとか云つて居ましたから、いづれ近々に何とか沙汰があるでせうよ。

春雄　何卒何分お願ひ申します。

雪子　其の方の心配は要らないから、此の上共に體を大事にして下さい。病氣といふものは直り際が肝腎ですよ。――ほんとにつまらない遠慮をせずと、口がきまるまて、此處に居たらよささうなものだね。

春雄　それぢやおつ母さんから、梅子にお話しなすつて下さい。僕は何方ても彼れの意見通りになるんです。尤も先生はなか〳〵剛情てすからな。

雪子　いくら强情だつて、御亭主の體の爲めなら爲方がないやね。

春雄　御亭主の體は愚か、自分の體が危くなつても云ひ出した事はめつたに後へ引きませんからな。それに鎌倉が嫌て〳〵溜らなくなつた所てすから、恐らくお母さんが何と仰つても、承知しますまい。どうでも好きなやうにさせて置くのが一番です。

雪子　あれは子供の時から我が儘な娘てしたけれど、あなたもあんまり叱言を云はな過ぎるんだよ。たまにはウンと云つてやる方がいゝんです。

春雄　けれどもおつ母さんの前てすが、僕は彼れの我が儘に就いて一度も腹の立つた事がありませんよ。

雪子　あなたがそれぢや困つて了うね。――もとはと云へば私達の育て方が惡いんだけれど….

春雄　頗る眞面目な調子 なに惡い事があるもんですか。女は我が儘に限ります。大人しい女は氣の拔けたビールみたいなもんです。若しも梅子があゝ云ふ性質でなかつたら、僕は結婚なんかしやしません。

雪子　おほゝゝゝ、嬉しさうに笑ふ あなたも餘つ程變り者だね。

春雄　いゝえ、本當の話です。梅子をあゝ云ふ風に育てゝ下すつた事に就いて、僕はおつ母さんにお禮を申します。

雪子　まあ冗談は兎に角として、それ程に思つて居て下されば、あの娘もほんたうに仕合せです。

春雄　さうして僕も仕合せです。唯不仕合せだつたのは、僕が長い間大病ひをした事です。結婚してから一年と立たぬ間に病み付いて、寢たり起きたりして居たんですから、僕は殆んど結婚の樂しみ、家庭の樂しみと云ふ者を味ふ暇がなかつたんです。丁度この子が生れた時分には、四十度近くの熱に浮かされて、床の中で呻つて居た最中でしたからなあ。靜子を撫でゝやりながら 僕は到底助からないとあきらめて居たんです。かうして此の子を膝の上に載せて、可愛がる事が出來ようとは、夢にも思つて居ませんでした。

靜子昻奮したる父の顔を不審さうに見上げて居る。

春雄　ですから僕はこんな大きな子供がありながら、今迄全く、父としての愛情も、夫としての幸福も、經驗する事が出來なかつたんです。僕一人が病身なばつかりに、罪のない妻子に迄氣の毒な思ひをさせて了ひました。

雪子　けれどもあなたはまだ若いんだから、いくらでも取り返へしが附きますよ。一體大學を卒業したのが、あんまり早過ぎましたからね。なあにあなた、三十と云へば、仕事をするのは此れからさ。

春雄　仕事ばかりぢやない、此れから凡べて新規蒔き直しにやるんです。此の子の爲めにも、梅子の爲めにも、立派な父親となり夫となつて見せるんです。——

—何だか僕は結婚當時の心持ちと、昨今の心持ちと、全く同じやうな氣がしますよ。病氣が直つて、漸う人間並の體になつて見ると、凡べての事が珍しくて愉快ですな。早く職業に有り附いて、目覺ましい活動をして見たい。早く親子三人で新世帶を持つて見たい……此の頃はそんな妄想にばかり耽つて居ます。

第二節

原田千代子、松林の奥より庭上へ歩み來る。二十三四歳の、小柄に太りたる夫人。庇髪に結つた、愛らしくて而も怜巧さうな圓顔の容貌。海岸の散歩から歸りたる所らしく、羽織も纏はず、足袋も穿かず、縞銘仙の綿入を着て麻裏草履を穿いて居る。

千代子　椽側の硝子障子を開けて、室内へ上りながら、　あゝ今日は海が靜かでございますこと、——まだ嫂さんはお歸りなりませんの？

雪子　えゝ、まだ歸つて來ないんですよ。今春雄さんから聞いたんですが、赤坂へ家を搜しに行つたんですと。

千代子　おや、それぢや兄さん、もう東京へお引越しなさるの？

春雄　うん、さうしやうかと思つてるんだ。

雪子　何にしても引越すにはまだ早過ぎると思ふんですがねえ。もうあと一と月なりと、此處で養生をするやうに、千代子さんからも兄さんにすゝめて下さいましよ。

千代子　ほんとに左樣でございますね。兄さん、折角お母さんがあゝ仰つしやるんだから、もう少し御厄介におなんなさいな。

春雄　僕はそれでもいゝんだが……　急に言葉を濁らせる　しかし、今のうちから搜して置かないと、なか〳〵急にいゝ家が見付からんものだ。どうだいお前の近所に好ささうな借家はないかい。

千代子　あたしの近所なんか場末ばかりで仕樣がないわ。赤坂邊なら此方樣の御本宅も近いし、都合がいゝぢやありませんか。

春雄　けれども場末の方は空氣がいゝからな。

千代　空氣ばかり好くつても、喰べ物がまづくつて、買ひ物が不便でほんとに仕方がない所よ。第一隣り近處が淋しいから、夜なんぞ女は獨り歩きが出來やしないわ。あたしは此の通りお轉婆だから、一向平氣ですけれど、それでもお宅の歸りが遲い時なんか、妙に心細くなるんですもの。兄さんにはよくつても嫂さんがとても辛抱なさらないわ。

雪子　ほんとに千代子さんは苦勞なすつただけあつて感心だねえ。梅子と來たら、幾歳になつても娘のやうな氣で居るんだから、困つて了ふ。

千代子　（雪子の言葉を聞かぬ振りして、春雄の膝に抱かれた靜子の手を取る。）まあ靜子さん、さつきからよく大人しくして居らつしやるのね。又叔母さんと一緒に遊ばなくつて？

靜子　えゝ、遊びませう。

千代子　今日はお母さんに置いてきぼりにされちまつたのね。

靜子　あたしお母樣よりお叔母樣の方が好き。

千代子　あら、そんな事を仰つしやると、もうお母樣がお土産も何にも買て來て上げませんと！

春雄　それぢやお前が内中で一番好きな人は誰だい？

千代子　さあ、誰でせう？　お祖母樣か知ら、それともお父樣か知ら、

靜子　あのね、あたしの一番好きなのはお祖母樣！

春雄　それから？

靜子　それから乳母！

千代子　それから？

靜子　それから、お父樣と叔母樣と同じぐらゐ好きなの。

千代子　それから誰方？

靜子　それからお母樣。

春雄　お前はお父樣よりか母樣の方が恐いんだらう。

靜子 だつてお母様は直きにあたしを叱るんですもの。

春雄 何と云つて叱るんだい。

靜子 「うるさいから、彼方へお出て」ッて仰つしやるの。

春雄 よし、よし、今にお母様が歸つて來たら、云附けてやるぞ。

千代子 嘘よ、靜子さん。お父様は嘘つきよ。春雄の膝より靜子を抱き取る。――あなたそんなに叔母様がお好きなら、此れからちよいちよい叔母さんの所へ遊びに來て頂戴な。

靜子 叔母さんのお内は何處なの?

千代子 澁谷と云ふ所なの。叔母さんは二三日の中に東京へ歸りますから、さうしたら今度泊りがけで遊びに來て頂戴ね。内にも靜子さんの妹のやうな、小ひさな、子供が居りますのよ。

雪子 暫くお目にかゝりませんが、嘸大きくおなりてせうねえ。

千代子 はあ、漸く手足が自由になつたものですから、此の頃は危くつて目が放されません。

雪子 たしか三歳におなんなすつたんですね。今度入らつしやる時には、是非連れてお出てなさいましよ。

千代子 はあ、有難うございます。

雪子 どれ、あんまり退屈だから、少し運動して來ませうか知ら。立ち上る。靜子や、お祖母様と一緒に行かないかい。

千代子 さあ行つて入らッしやいまし。靜子を縁側へ下ろす。

雪子 さう云へばこんなに好いお天氣だのに、今日はいつもの彼の方がお見えにならないね。ほら、何とか云つたけね春雄さん。

春雄 誰の事です。

雪子 あなたのお友達で、つい此近所に居らッしやる方さ。

春雄　吉川ですか。

雪子　あッ、さうさう、吉川さんさ。彼の方が來ると、話が面白いので、ついつい時間を潰して了ふんだけれど‥‥

雪子、靜子の手を曳きながら、椽側傳へに下手へ退場

第三節

千代子　雪子と靜子の立ち去るのを待つて、徐ろに火鉢の右側の坐蒲團に据る。兄さん、あたしは明日あたり東京へ歸らうと思ひますの。

春雄　さうか。一向構はないが、差支へがなかつたらもつと遊んで行くがいゝ。千代子と二人になると、急にうかぬらしい眼付きをして、椅子に凭れながら頻りにモヂモヂする。

千代子　えゝ有りがと。‥‥宅はあの通り呑氣ですから別に何とも云ひませんけれど、まさか子供を打つ放つて、あんまり長く遊んで居る譯にも行かないから‥‥

春雄　されもさうだな。原田君にも何れ東京て會ふだらうが、お前から宜しく云つといてくれ。モヂモヂする擧動がだんだん顯著になつて、遂に居溜らぬやうに椅子を立ち上る。どれ、僕も少し散歩に行つて來ようかな。

千代子　まあ兄さん、屹と兄を視詰める。話があるんてすから、暫く此處に居て下さい。

春雄　何だい。頬の色變る。不承不精に再び椅子に腰を下ろす。

千代子　あたしは兄さんに云ひたい事が山のやうにあるんてす。‥‥ねえ兄さん、あたしが此の河村様の別莊へ來てから、もう一週間になるけれど、兄さんは一度だつてあたしとゆつくり話をした事はないぢやありませんか。

春雄　そりやおかしい。僕は隨分お前と話をした筈だぜ。

千代子　嘘を仰つしやい。兄さんが機嫌よく話をなさる時には、いつでも傍に嫂さんが居らつしやるわ。あなたは嫂さんと放れて、私に話をなすつた事はないぢやありませんか。

春雄　さう云ふ譯ぢやないんだが……

千代子　いゝえ、さうよ。兄さん獨りの時を狙つて行くと、あなたはきッと今のやうに逃げて了ふか、さもなければ嫂さんの方から樣子を見に入らッしやるのよ。

春雄　そんな事はない。全く邪推だ。

千代子　いくら辯解しても其れは駄目よ。一度二人きりて、親身な、眞面目な話をしやうと思つても、兄さんはいつもそつけない素振ばかり見せるんですもの、兄さんは妹に對して、昔よりか餘程薄情におなんなすつたねえ。

春雄　……

千代子　そりや先と違つて、今は嫂さんと云ふ者もあれば、靜子さんもあるんですから、昔の通りになれないのは當然ですわ。けれども兄妹の親しみだけは持つて居て下すつても、好かなくつて？　ねえ兄さん、此れても私はあなたのお蔭で原田の家へ嫁いてから、一度だつて兄さんの御恩を忘れた事はない積りよ、かうして態々鎌倉まてやつて來たのも、兄さんの御身の上に就いていろ〳〵心配な事があればこそ、實を云ふと内の方だつてなか〳〵手が放されないんですけれど、漸くの事で都合をして出て來たんですの。

春雄　お前の親切はよく解つて居る。僕にしたつて、何も冷淡になつた譯ぢやないんだが、若しも氣に觸つた事があるなら、いくらても詫るよ。しかしお前も知つて居る通り、僕は病氣になつてから散々河村家の世話になつた上、此の別莊まて借りて居るんだから、たまにお前が尋ねて來てくれても、つい〳〵内の者に氣兼ねをするやうになつちまふんだ。それに梅子があの通りの我が儘者だからね。

千代子　わたしはそんな事を何とも思つて居やしませんわ。河村樣のお母樣なんぞ、兄さんは勿論わたしに對してすら、親身も及ばぬくらゐ親切にして下さるんですもの。有り難いとこそ思へ、怨んだりしたら罰が

中るわ。たゞあたしは、兄さんが昔のやうに胸の中の心配を打ち明けて下さらないのが、不滿足なんですの、

春雄　心配と云つたところて、僕は今のところ、全く仕合せな境遇に向つて居るんだ。病氣は直つたし、河村さんの周旋て來月中には比較的いゝ地位に有り附く事も確かだし、此れから先は自分の腕次第て、いくらてもえらくなれるんだ。何も心配なんかありやしないよ。

千代子　さうてすか知ら？　暫く無言の儘、兄の顔を凝視るやうに眺める。　あたしには本當の兄さんの心持が判らないわ。

春雄　本當にも何にも、今話した通りぢやないか。

千代子　兄さん、くどいやうてすが、若しか心配な事があるなら、たとへどんなに云ひ難い、どんなに耻かしい事柄ても、私にだけは隱さないて下さい。私はどんな場合てもきつと兄さんの味方になつて上げます。私獨りて足りなければ、原田も居ます。原田だつて、私の兄さんの爲めならばどんな事てもしてくれますから。

春雄　顔色いよいよ蒼ざめて力なき語勢となる　冗談ぢやない、それ程の心配があつたら、第一僕は梅子に打ち明けるよ。

千代子　嫂さんに打ち明けられない場合がありはしなくつて？

春雄　妹に打ち明けていゝ事なら、尚更女房に打ち明けられる筈ぢやないか。あれても梅子は我が儘な割りに、シッカリした所のある女だよ。別段聞き糺す必要はないけれど、お前は何か誤解をして居るやうだ。

千代子　他聞を憚るやうな低き調子、本當に誤解だと思つて居らッしやるの。

春雄　何だか知らんが無論誤解さ。僕は此の通り心配も何もないぢやないか。

千代子　兄さんには、私の意味が判つて居らつしやるんてせうね。

春雄　よくは判らないけれど、僕は自分の幸福を信じて居るよ。僕の考へて居る範圍て、自分を不仕合せだと思ふ事は、一つも見中らないんだからな。――お前と云ひ、原田君と云ひ、河村の兩親と云ひ、僕を取り卷く人達は、みんな僕の爲めに盡してくれる、親切な人ばかりだ。さうして梅子は、僕の最愛の妻だ。僕が命拾ひをした事も、立身の緖が見付かつた事も、此の世の中に梅子と云ふ者が居なかつたら、僕には全く無意味になるんだ。僕は殆んど梅子の爲めに生れて來たやうなものだ。

千代子　それぢや兄さんは、あなたの氣が付かない所て、御自分の幸福を破壞して居る人間があつたら、どうなさるお積りなの。

春雄　そんな人間があらう筈はない。

千代子　しかし、あたしにはどうもあるやうに思はれますわ。實は先月の月末頃に、或る人からそんな噂をちよいと耳にしたんてすの。それて此處のところ一週間ばかり暇を作つて、病氣見舞と云ふよりは、噂の實否をたしかめる爲めにかうやつてお邪魔に參りましたの。その噂に就いても、兄さんがまるきり御存知ないとは思はれないわ。

春雄　世間の噂なんぞを信じて居たら、際限のない話ぢやないか。僕は噂よりも自分の判斷を信じて居るんだ。

千代子　あたしだつて噂を信じたくはありませんけれど、實際此方(こちら)へ來て樣子を見ると、どうも其れが本當らしく思はれるんですもの。

春雄　おい、僕はお前に注意をするが、女と云ふ者は兎角前後の分別なしに、輕率(かるはづみ)な言を云つてはいけない。かりにお前が世間の噂を信じるとしたところて、若しも其れが發表された場合にどんな結果を來すか考へて見たら、確實な證據を握らない以上は、決して口外出來るものぢやないぜ。

千代子　だけど兄さん、若しもあたしが確實な證據を

握つて、あなたの前へ突き付けたら、兄さんはどんな氣持がすると思つて、あたしは裁判官でもなければ世間へ發表する氣でもないですよ。證據を握らうと思へば、毎日機會はあるんですけれど、兄さんの名譽のためにわざと控へて居るんですわ。唯それとなく兄さんに忠告すればいゝんですから。

春雄　僕はお前の好意に對しては充分に感謝するよ。けれどもそれと同時に、此の兄の言葉を信じて貰ひたい。

千代子　いゝえ、何卒反對に兄さんの方で私の判斷を信じて下さい。信じない迄も、彼の人達の行ひに嫌疑を掛けて、御自分からよく探索して御覽なさい。少し氣を附けて調べて見れば、すぐに判る事なんですから、

春雄　僕は探索なんかする必要を認めないんだ。

千代子　兄さん、あなたがどうしても私を信用しないと仰つしやるなら、もう少し詳しい事をお話しするわ。

春雄　ふゝん、そんなつまらん話は、もう好い加減にしようぢやないか。

千代子　兄さんは男らしくもない、卑怯な方ね。あたしには兄さんの氣持がすつかり判りましたわ。あなたはあたしの口から本當の事を發かれるのを、恐れて居らつしやるんですね。

春雄　馬鹿を云へ。

千代子　いゝえ、さうに違いないわ。世間に知れないで濟む事なら、たとへ自分が踏み付けにされようと、男の體面を汚されようと、成るべく見ない振りをして、一時逃れの幸福を樂しまうとなさるんですね。――兄さん、そりや成る程、あたしだつてあなたの胸の中をお察ししないんぢやありませんわ。兄さんは今迄に散散苦勞をなすつた。生きるか死ぬかと云ふやうな大病に罹つて、すべての計劃を滅茶々々にされてお了ひになつた。折角樂しみにして居た結婚も、今迄は充分に嫂さんを可愛がる暇がおあんなさらなかつた。それだのに漸く病氣が恢復して、此れから世の中を樂しまう

とする矢先へ、又新らしい心配を持込まれたら、誰だつて大概嫌になりますからね。

春雄　それだけの理屈が判つて居たら、好い加減に話を止めてくれないか。――況んや新しい心配と云ふものが、實際心配する價値のない事柄なんだから……

千代子　萬一價値があつたらばどうでせう。……此れが若しも、見ない振りをして居て永久に濟んで行くならば、私も別段お話しようとは思ひませんわ。けれどもいつか一度は、否でも應でも、恐ろしい結果に出會すに違ひないわ。時期が遲れゝば遲れる程、餘計恐ろしい結果になるわ。

春雄　……

千代子　兄さん、あなたは嫂さんを信用するよ仰つしやつたわね。

春雄　うん。

千代子　それでもよもや彼の吉川と云ふ人――あの人を信用しては居らつしやらないでせう？

春雄　あの男だつて、世間で云ふ程惡い人間とは思はれないよ。兎に角僕と吉川とは、小學校時代からの友達だから、彼奴の氣心はよく解つて居る。

千代子　そんならあの人の不品行に就いて、今迄度々新聞に素ッぱ拔かれた事は、みんな嘘だと思つて居らつしやるの。

春雄　そりや本當かも知れないさ。本當にした所で、世間で噂するやうな、血も涙もない、薄情な男だとは信じられないと云ふのさ。よしんば彼奴がどんな惡人でも、子供の時から附き合つて居る友達には、やつぱり暖い感情を持つて居る筈だ。

千代子　兄さんはあの人の暗黑面を見せられた事がないから、さう思つて居らつしやるのよ。

春雄　なに僕だつて、彼奴に欺された女の一人や二人は知つて居るよ。彼奴はそれを得々として、僕にのろけるくらゐなんだから、割合に無邪氣なんだ。其れを一々不都合だとか不德だとか怒つて居た日にや、男

同士の交際は出來なくなるぜ。それに人間と云ふものは、お互ひに理解があると、どんな惡い事をされても、ちよいと腹を立てる譯に行かなくなるんだ。誰しも腹を立てるよりは笑つて交際する方が愉快だからな。

千代子　そんならあの人が、兄さん自身に對して罪を犯した場合にも、笑つて交際なさるんですか。

春雄　まあ大概の事ならば、大目に見て置くさ。僕も此れまで吉川には二三度金を借り倒されたが、面と向へば、笑つて濟んで了ふからな。

千代子　そんな時には笑つても濟むでせう。

春雄　理解し合つて居る友達に對しては、或る程度までの惡事を犯しても、其れ以上の不義理は絶對に出來ないよ。

千代子　其の考へが間違つて居るんですよ。今だから白狀しますが、彼の人は私のやうな者にまで、以前は隨分嫌らしい眞似をしたんですもの。

春雄　彼奴の事だから、友達の妹にふざけるぐらゐはしかねないだらう。

千代子　もつと非道い事だつて、しかねないんです。兄さん、よく考へて御覽なさい。あの人は何の爲めに此の鎌倉へ來て居るんです。而も此の近所の宿屋へ泊つて、毎日此處へ遊びに來て、大切な時間を殆んどあなた方と一緒に過して居るぢやありませんか。

春雄　吉川だつて別段忙しい商賣ぢやないんだから、遊んで居るのに不思議はないさ。

千代子　しかし、かりにも雜誌の記者をして居て、態態不便な田舍へ來ずともいゝと思ふわ。それに道樂をしたり、芝居を見たり、なか〱忙しいんですから、東京に居なければ用が足りない筈なんですもの。

春雄　それだけの事で、吉川を疑ふのは酷ぢやないか。

千代子　そればかりぢやないわ。あの人が嫂さんに對する素振を見れば、どうしても疑はずには居られないわ。二人で二階へ上つたきり、一時間も二時間も降り

て來なかつたり、日の暮れる迄一緒に海岸を散歩したり、嫂さんの方からあの人の宿屋へ遊びに行つたり……

春雄　お前だつて、原田君の友達と芝居見物に出かけるぢやないか。

千代子　けれども場合が違ひますわ。あの人達の口のきゝやうや、眼の配り方を氣を附けて御覽なさい。それにおかしいのは、昨夜嫂さんが東京へお立ちになつてから、吉川さんは姿を見せないぢやありませんか。

春雄　お前は偶然の出來事に理窟を附けて居るんだ。

千代子　しかし兄さん、一應疑つて見て、あの人が昨夜から宿屋に居るかどうか、詮索しても宜くはなくつて？

春雄　宿屋に居なければ、どうしたと云ふんだい。二人て東京へ行つたと斷定するのかい。

千代子　宿屋に居ないばかりか、一緒に汽車へ乘つたところを見た人があつたらば、どうでせう。

春雄　見た人があると云ふのかい。

千代子　えゝ、あるんです。昨夜あたしは嫂さんがお出掛けになると、直ぐにあとから停車場まで附いて參りました。すると吉川さんがちやんと待つて居るんてす。

春雄　それで二人はどんな樣子だつたい。何か話をして居たかい。

千代子　顏を見られちやまづいから、遠くの方から見屆けて歸つて來たわ。

春雄　そんなら話にならないぢやないか。吉川だつて東京に用のある男だもの、偶然に停車場へ落ち合つたのかも知れやしない。

千代子　偶然に落ち合つたのか、約束をして置いたのか、一目見れば直ぐに解つてよ。

春雄　どう云ふ風に解るんだね。色眼鏡を懸けて見れば、何だつて怪しく思はれるからな。

千代子　いゝえ、たしかにさうらしいの。私の云ふ事が嘘だか本當だか、今に嫂さんがお歸りになればキッと解るわ。――若しも嫂さんに疚しい所がなかつたら、昨夜の事をお隱しになる筈はないけれど、あたしやきッとお歸りになつても默つて居らッしやるだらうと思ふわ。

春雄　……

千代子　萬一隱し立てをなさるやうなら、兄さんだつて疑はずに居られないでせうね。

春雄　……

千代子　ねえ兄さん　さうぢやなくつて？　それでもやつぱり證據がなければ駄目だと仰つしやるの？

春雄　……

千代子　いよ〳〵さうなつた場合に、あたしは兄さんの決心を聞かして頂きたいんですの。

春雄　まあ待つてくれ。決心などゝさう譯もなく云ひ出されちや、僕も迷惑だ。成る程先（さつき）からのお前の意見は解つて居るが、此方の事情も少しは考へて貰ひたい。兎に角、誰が何と云はうとも、僕は梅子を信じて居るんだ。彼奴を信じる事が出來なくなれば、僕の幸福は破壞されて了ふんだ。けれどもそれ程お前が疑ふのなら、過ぎ去つた事は仕方がないとして、此の後吉川を寄せつけないやうにしやうぢやないか。其れが一番安全な方法だと思ふ。

千代子　安全過ぎて、何の效能もなささうだわね。

春雄　少し癇癪を起す。では一體どうしろと云ふんだ。

千代子　過ぎ去つた事は仕方がないとして、あなたは嫂さんをお許しになるお積りなの。

春雄　ハッキリした落度もないのに、どうする事も出來ないぢやないか。

千代子　出來ないと仰つしやれば其れ迄だけれど、それて御自分の氣持ちが濟むでせうか。――成る程、河村さんの御兩親は、兄さんの爲めに大恩人には違ひない。靜子さんと云ふ可愛いゝ子供も御有んなさる。し

かし兄さん、たとへ恩人の娘でも、夫として許す事と許されない事と有りますからね。

千代子　こゝて兄さんが、男らしい處置を取らなければ、自分の立身出世の爲めに、嫂さんの御機嫌を取つて居ると云はれても、辯解の途がないぢやありませんか。

春雄　………。

春雄　世間の奴が何と云はうと勝手にするさ。

千代子　世間ばかりか、あたしだつてさう思ふわ。——河村さんと縁が切れゝば、出世する事が出來ないやうな、そんな意氣地のない兄さんぢやないでせう。工學士と云ふ肩書があるんですもの、今度のやうないゝ地位は見中らないとしても、立派に大手を振つて、何處へでも這入れるぢやありませんか。

春雄　千代子、お前は僕がどのくらゐ梅子を可愛がつて居るか想像が着かないだらう。成る程僕は男としての野心もある。相當に慾望も持つて居る。しかし、單純な利慾の爲めに名譽を抛つ程の卑屈な人間ぢやない積りだ。僕は唯だ梅子が可愛いゝばかりなんだ。梅子を喜ばせる爲めには、どんな惡辣な、どんな陰險な手段を取つても、必ず金を儲けて見せる。

千代子　兄んにそんな度胸があつて？

春雄　氣の小ひさい人間程、愛情の爲めには大膽になれるものだ。僕は金儲けの爲めに梅子を可愛がるんぢやない。梅子を可愛がる爲めに金儲けをしうと云ふんだ。

千代子　稍嘲弄的に、さうすると、嫂さんを授けて下すつたのも河村樣だし、立派な地位に引き立てゝ下すつたのも河村さんだし、あの御兩親はあなたの爲めに救世主のやうなものですね。

春雄　——まあ、さうだ。僕は一生、彼の人達と手を切る事は出來ないんだ。たとへお前に意氣地なしと云はれても、何と云はれても差支へない。

千代子　呆れたやうに眼を見張つたが、やがて感情を押し鎭めて、兄さん、あなたはあんまり情けない事を仰つしやる。

あたしが此れ程心配して居るのに、妹なんぞはどうなつてもいゝお積りなの。

春雄　さう云ふ譯ぢやないけれど、僕に取つてはお前よりも梅子の方が大切だからな。

千代子　しかし嫂さんは、あたしが思つて居る半分も、兄さんを思つて居やしないわ。一層あなたを邪魔者にして居る位だわ。

春雄　そんな事がお前に判つて溜るものか。

千代子　いゝえ、判つて居ますとも――なんぼ嫂さんが可愛くつても、外の男に愛情を注ぐやうなら、思ひ切つて了ふのが當然ぢやなくつて？　それでも兄さんは、やつぱり思ひ切れないですか。

春雄　それでもとは何だ。（とうたう癇癪を破裂させる。）何ぼ何でもあまり口が過ぎるぢやないか。そんな事を云ふなら、レッキとした證據を持つて來るがいゝ。

千代子　えゝ持つて來ますとも。明日歸るまでに、キット證據を摑んで見せるわ。さうなつたら兄さんだつて、ほんとに決心なさるでせうね。

春雄　お前は平地に波瀾を起して、それを面白いと思ふのかい。

千代子　おほゝゝゝ、（涙ぐみつゝ、わざと甲高く笑ふ、）今日は久し振りで兄さんと喧嘩をしちやつたね。どうせ後になれば解る事なんだから、いくら喧嘩をしたつて構はないわ。あたしは此れでも、兄さんの遠い行く末を考へて居るんですから……

千代子、上手の障子を開けて去る。春雄は頭を抱へて、懊惱に堪へざる如くデスクに突俯す。

第四節

梅子、千代子と行ひ違ひに下手の緣側から這入つて來る。面長の、背恰好の優れた、千代子よりは一二段勝りたる容貌。二十三四歳なれど、年齡の割りに派手な好みの衣類を着て、襟頸にエルーを卷きつけ、右手に小ひさい袋（オペラバッグ）を下げて居る。

梅子　唯今。（夫の傍に立つ。）大變遲かつたでしよ。

春雄　（少しく元氣を恢復する。）うん、そんなでもなかつた。どうだい、いゝ家があつたかい。

梅子　息を切らせながら、忙しさうに、早口に語る。溜池の近所に一軒いゝ家が見附かつたの。二階が八疊に四疊半て、下は玄關が三疊、六疊二た間に四疊半の女中部屋が附いて居て、風呂場もあるし、便所も綺麗だし、あれなら申分がないと思ふわ。

春雄　家賃はいくらだ。

梅子　二十五圓。それに敷金が三つ。建具もしつかりして居るし、押入は澤山あるし、何より有難いのは、間取りの具合が明るくつて馬鹿にいゝんですの。あたしや薄暗い家が大嫌いだから。

春雄　借りる事にきめて來たのかい。

梅子　二三日中に挨拶するつて、さう云つて來たわ。

春雄　なぜ？極め　來たらばよかつたぢやないか。

梅子　だけど一遍あなたに見せてからと思つたの。

春雄　己はどうでもいゝんだから、お前さへ好ければ極めて來た方が宜かつたのになあ。そんないゝ家は、グヅグヅして居るとすぐに塞つて了ふぜ、

梅子　だからあなた、明日お天氣が好かつたら、ちよいと行つて見て來て下さいな。

春雄　うむ、……何か他の事を考へ出したやうに、生返事する。

梅子　ね、明日の朝早く起きれば、明るいうちに行つて來られるわ。

春雄　さうだ、明日千代子が東京へ歸ると云ふから、其の時一緒に行くとしよう。なあに、遲くなつたら都合で赤阪へ泊めて貰ふさ。

梅子　それぢや、さうして下さいな。上手へ來て鏡臺の前に据わり、袋を臺の上に置く。抽出しから櫛を取り出して、庇髪を直し始める。――へーえ、千代子さんは明日歸るんですつて？

春雄　うん、明日はどうしても歸らなければならないさうだ。

梅子　さうですか、嫌ひな人は早く居なくなつた方

がさつぱりするわ。

春雄　もう歸るんだから、あんまりあて付けない方がいゝさ。

梅子　あゝそれからね、ゆうべ赤阪へ泊つたら、父がいろ〳〵あなたの事を心配してね、來月の半ば頃には是非任命が下るやうにして置いたから、安心なさいつて、

春雄　それは有り難う。

梅子　さう云へば昨夜停車場で吉川樣に遇ひましたつけ。

春雄　ふん。

梅子　「何方（どちら）へお出掛けです」ツて聞いたら、頭を搔き搔き「ちよいと東京の隱れ家（かくれが）まで」つて、變ににやにやや笑つて居るのよ。

春雄　彼奴の隱れ家は方々にあるからな。

梅子　ところがおかしいぢやありませんか。だんだん問ひ糺して見ると、其の隱れ家と云ふのが、赤坂の内の近所なのよ。

春雄　あはゝゝゝ、何となく不自然な笑ひ方をする。奴さん飛んだ所を見附かつたもんだ。

梅子　丁度いゝから、一緒に汽車へ乘つて、新橋から内の前まで送らせてやつたわ。

春雄　まだ先生は歸つて來ないのかい。

梅子　さあ、どうですか、事に依つたら歸つて居るかも知れなくつてよ。明日は是非午前中に歸りますつて、あたしに惡い事でもしたやうに頻りと辯解して居ましたもの。

春雄　歸つて來たら遊びに來さうなもんだがな。

梅子　こんなお天氣に、ひとりで内に引込んで居ると隨分退屈するてせう。——お母樣や靜子は何處へ行つたの。

春雄　もう少し先（さつき）海岸へ出掛けたやうだ。——から陽氣が暖かくなつちや、東京もそろ〳〵櫻が咲くだらうな。

梅子　あゝ田舍なんか嫌だ、嫌だ。早く東京へ歸りたいわ。ねえあなた、千代子さんを送りがてら、明日忘れずに東京へ行つて來て下さいよ。

春雄　うん行つて來よう。

女中まつ登場、緣側鴨居際に兩手をつく。

まつ　あの吉川樣がお出でゞございます。

梅子　あ、ちよいとお待ち。あたし隱れて居てやらう。袋とゴールを一摑みにしてあはてゝ上手の障子の外へ逃げ出す。

女中まつ退場、

第五節

上手より直ぐに吉川が這入つて來る。春雄と同じ年配、色の淺黑い、頭を角刈にした、苦み走つた好男子、瀟洒たる背廣の間服(あひふく)を着て、胸間に金鎖を光らせて居る。いかにも才氣の迸るやうな口のきゝ方をする。

吉川　や、失敬、いきなり火鉢の右の坐蒲團にあぐらを搔く。烏打帽を脱いて、ハンケチで額の汗を拭く。梅子さんはまだ歸らないかい。

春雄　まだだ。

吉川　そいつは締めた。

春雄　どうしたんだい、ひどく汗を搔いてるぢやないか。

吉川　實は君、昨夜こつそり東京へ泊りに行かうと思つたら、運惡く停車場で君の妻君に見附かつちまつてね。とうたう一緒の汽車へ乘せれらて、新橋へ着いてもまだ放免にならないのさ。

春雄　全體君は何處へ泊りに行つたんだ。

吉川　それがさ、やつぱり赤坂なんだから方面が惡いぢやないか。「赤坂なら御一緒に參りませう」ッて、散々冷かされて、とうたう君、河村さんの邸の前まで引張つて行かれたんだ。君の妻君もなかなか隅へ置けないよ。

春雄　あはゝゝ、そいつは大笑ひだ。

吉川　あんまり冷かされるから意地になつて、「明日の朝は早く鎌倉へ歸ります」ッて云つてちやつたのさ。何ぼ何でもだらしがないと思はれるからね。

春雄　柄にない心配をしたもんだな。君の道樂は今に始まつた事ぢやなからう。

吉川　それもさうだが、兎に角君の妻君より先に歸つて來る積りて、大急ぎに戻つたんだ。今に梅子さんが見えたら、僕は今朝歸つた事にしてくれ給へ。

春雄　よろしい、承知した。

吉川　きッとだぜ、君。妻君ばかり可愛がらないて、たまには友達の味方になつてもいいだらう。

（梅子障子の蔭より現れる。）

梅子　吉川さん、昨晩はお樂しみ。（火鉢の左側に坐す。）大變お歸りがお早いのね。

吉川　はゝあ、さうか。やつぱり一杯喰はされたのか。

春雄梅子　あはゝゝゝゝ。

吉川　夫婦共謀の計略に陷つたな。

春雄　梅子の方が君より一と汽車早かつたよ。

梅子　あたしはあなたのやうにだらしがないんぢやありませんからね。

吉川　いや、恐縮々々。

梅子　それてもあなたは案外正直ね。何て云ふかと思つたら、昨夜の事をすつかり白状なすつたわね。

吉川　どうせあなたの口から洩れるくらゐなら、白狀する方が正直だと思はれるだけ德てすよ。正直ぢやないんてす、つまり悧巧なんてす。

春雄　君は大そう惡黨がる男だね。正直だと云ふのに、辯解しなくッてもよささうなものだ。

吉川　しかし、全く正直な人間ぢやないんだよ。――――君、正直な人間よりも悧巧な人間の方が、却つて餘計正直な事があるんだぜ。何か間違ひを仕出かす奴はみんな正直な人間さ。正直な人間程、安心の出來ない者はないよ。

春雄　悧巧な人間は何をしても、馬脚を露はさないからな。

吉川　うん、さうだ。

春雄　ところが君は、早速馬脚を露はしたぢやないか。

吉川　今日の事は例外だ。露はしてもいゝ事は、いくらでも露はすが、いざとなつたら世間に知れるやうなへマはしないさ。

梅子　それぢや吉川さんなら信用しても大丈夫なの。

吉川　えゝ大丈夫ですとも。——さう云へば梅子さん、いゝ家が見附かつたんですか。

梅子　えゝ、見附かつたわ。大概それにきめようと思ひますの。

吉川　すると、もう鎌倉にも長くは居られないんてすね。どうだい三枝君、明日お天氣だつたら、お名殘に二人て江の島へても行かうぢやないか。

春雄　一度何處かへ行つてもいゝな。暫く一緒に出掛けた事がなかつたね。

梅子　それてもあなた、明日は東京へお出てになるのよ。

吉川　へーえ、何用て？

梅子　いゝえね、一遍宅に其の家を見て貰つて、若しも好かつたら早速きめて了ひますの。

吉川　あゝ、さうですか。塞がつちまふといけないから、極めるなら早い方が宜ござんすな。

梅子　さうよ、ほんとに。

第六節

雪子、靜子、庭より椽側に上る。

靜子　母の前に畏まる。お母さん、お歸りなさい。

梅子　はい、只今。

雪子　吉川さん、入らつしやいまし。今日はどちらへお出掛け。

吉川　いえ、僕も東京へ行つて、梅子さんと一と汽車遲れて歸つて參つたところです。

雪子　椽椅子に腰を下ろす。さうでしたか。實はあんまり退屈なもんてすから、先刻もあなたのをお噂をして

居りましたの。今夜は御馳走しますから、ゆつくり遊んで居らつしやいな。

吉川　それぢや御馳走になりますかな。

雪子　梅子に、お前家を捜しに行つたんだつてね。

梅子　えゝ、誰に聞いて？

雪子　春雄さんから聞いたけれど、口がきまるまで此處に居た方がいゝぢやないか。

梅子　もう鎌倉なんか飽き飽きしたわ。それに役所の方も近々任命が下るやうにゆふべお父様が受け合つて下すつたから大丈夫ない。——まあ、お母さん、ほんとにいゝ家が見附つたのよ。

雪子　どの邊に？

梅子　溜池の停留場から五六丁の處なの。それはもう何から何までお誂へ向きで、あたしすつかり惚れ込んで了つたわ。彼の家が見附かつたら、何だか急に東京へ歸りたくつて溜らなくなつちやつたわ。

吉川　地位が見附かつたし、家は極まつたし、今夜は一つ三枝君の爲めに祝杯を擧げるかな。

雪子　たんと二人に奢らせておやんなさいよ。

梅子　よござんすとも。いくらでも御馳走しますよ。

春雄　長い間心配をかけたんだから、今日は僕獨でみんなに御馳走するとしよう。椅子から立つて椽側に行き、沙山の方を望む。あゝもう日が暮れる時分だな。何かうまい物を注文して、そろ〳〵夕飯の支度にかゝつて貰はうかな。

春雄は後ろ向きに佇ずんだまゝ伸をする。一同無言にて戸外の空を眺める。（幕）

第二幕

海岸の夜、——舞臺上手より下手の方へ、勾配の緩やかな沙山が、だら〳〵と裳裾を擴げて居る。上手の沙山の頂上より前方中腹へかけて一と叢の松林。其の後ろに別莊の二階の屋根が見える。下手の奥は洋々たる一面の海。地平線が丁度舞臺の中央で沙山の蔭に隠れて行

く。

第一幕と全じ日の午後七時頃。晴れたる空に滿月が朧々と霞んで居る。（幕が開いてから程なく、月は次第に舞臺の外へ運行して了ふ。）

極めて穩やかな波の音。

第一節

吉川、梅子、千代子、下手より步いて來る。梅子は不斷着のお召に着換へて居る。他の二人は前の幕と同じ服裝で、吉川はステツキを持つ。

梅子　あゝもう內の前へ來て了つた。千代子さん、もう少し散步なさらなくつて？

三人中央に立ち止まる。

千代子　だつて、あたし足疲れて了ひましたわ。

梅子　吉川さんはどうなさるの。

吉川　あなた方がいやなら、獨りでに步きますよ。三枝君の御馳走て、僕は未だに腹がくちい。

梅子　あたしも實はさうなのよ。

吉川　さうでせう。あなた方だつてあんなに喰べて置きながら運動しないぢや毒ですぜ。

千代子　そんならあたしだけ歸りますから、嫂さんもツと散步なさいな。

梅子　だけど千代子さんが居なくつちや……

千代子　おかしいわね。お二人ぢや都合が惡いの？

梅子　惡かないけれど、千代子さんは明日東京へお歸りになるんでせう。

千代子　えゝ歸るわ。

梅子　何時頃に？

千代子　成るたけ朝早く歸りたいと思ひますの。

梅子　それぢや今夜がお名殘りだから、もう少し一緒に步きませうよ。

千代子　一緒に步いたつて別に話す事はないぢやありませんか。それに全く足疲れて了つたの。

梅子　あなたとあたしとは、此の一週間とうたう喧嘩のしつゞけね。それぢや此のまゝ仲直りをしないで別れませうか。

千代子　お互ひに其の方がよかなくつて？

梅子　ほんとにさうね、珍らしく意見が一致したてとね。

千代子　吉川さん、左樣なら。

吉川　いつの間にか沙山に足を投げ出して居る。ちよいとお待ちなさい。僕が仲裁するから、まあ仲直りをして行き給へ。

千代子　よくつてよ。どうせ嫂さんとは性が合はないんですから。

吉川　性が合はなくつても、喧嘩するにはあたらないでせう。僕を見給へ、生れてから未だ嘗て一度も喧嘩をした事がないぜ。

千代子　だからあなたは惡黨よ。

吉川　あなた方も僕の弟子になつて、もう少し惡黨の修業を積むさ。

千代子　眞平だわ。嫂さんお先へ御免なさい。

梅子　お嫌てせうけれど、明日の朝もう一遍お眼にかゝつてよ。

千代子　えゝ何度ても。

吉川　僕も明日は停車場までお見送りします。

千代子　あら、そんな御心配には及びませんわ。

吉川　なあにどうせ遊んで居ますから。

千代子、沙山を上つて向らへ消える。

第二節

吉川　どうです、もう少し其の邊をぶらつきますか。

梅子　えゝ、どつちてもいゝわ。と云ひながら、吉川の傍へ蹲踞る。實は私も足疲れて居るんてすの。

吉川　そんならお宅へ歸りませうよ。まだ時刻が早いんだから、僕ももう一遍送つて行きます。

梅子　いや、いや、首を振る。あたし千代子さんの顏を見るのも嫌だから、わざとあゝ云つて別れて了つたの。

吉川　その位なら、初めから誘はない方がいゝぢやありませんか。

梅子　だつて彼の人を誘はないと、妙な嫌味を云ふんですもの。ほんとに好かない人だわ。

吉川　可愛さうに。それ程嫌はなくつても好ござんすよ。千代子さんはあれでなか／＼情愛の籠つた、親切な所が見えますよ。

梅子　情愛なんぞあるもんですか。あたしが何か賴んだつて、一つとして聞いてくれた事なんかありやしないわ、假にも義理の姉を馬鹿にするなんて、何處に親切があるんでせう。

吉川　あなたに對してはさうかも知れないが、一般に云つたらいゝ人です。それから立派な夫人ですよ。

梅子　あなたは大さうお褒めになるのね。

吉川　褒めちや惡いんですか。

梅子　たとへ自分の事だつて、あんまり褒められゝば腹が立つわ。此の間もあなたは、三枝の事を大層褒めて下すつたわね。

吉川　そりや褒めますとも。三枝君はいゝ人です。兎に角僕に對してはいゝんです。あのくらゐ僕の性質を理解して居る友達はありませんよ。

二人の會話は眞面目だか冗談だか判らない調子になる。

梅子　三枝の方でもさう云つて居ますわ。

吉川　何だつて？

梅子　あなたは世間で云ふやうな惡人ぢやないんですつて。惡人かも知れないけれど、割合に暖かい所のある、始終笑つて話しの出來る惡人ですつて。

吉川　全くそれに違ひないんです。よしんば僕と三枝君と、どんなに利益が反對するやうな地位に立つても、僕は決してあの人を憎む譯には行きませんよ。一體あなたは三枝君をどう云ふ人間だと思つて居るんです。

空が少し曇つて、地上は稍薄暗くなる。沙山の上に三枝の姿が現はれる。兩人の影を認めて、心持ち足音を忍ばせつつ一間程ばかり後ろに近附き、成るべく發見されても差支へないやうな姿勢を取つて、密かに耳を澄ます。兩人心附かず。

梅子　そりや、ほんとにいゝ人だと思つて居るわ。

全くあたしを可愛がつてくれるんですもの。
吉川　どうも男の性質と云ふものは、妻君よりも友達の方が却つてよく解るやうですね。僕は子供の時から三枝君と同じ學校に育つたんで、あの人の氣持ちは實によく解りますよ。
梅子　しかしあんまり優し過ぎて、男らしくないと思ふ事が時々あるわ。
吉川　それがいゝんです。あなたなんぞの御亭主が、大人しくなかつたら一日も勤まりませんぜ。あの人はよくあなたの氣象を呑み込んで居ますよ。夫として、あのくらゐ親切な、あのくらゐ寛大な人はめつたにありません。何處まで行つたら腹を立てるのだか、あの人ばかりは解りませんな。
梅子　あたしもその點は感謝してゐる積りなの。どんな事があらうと、あたしを信じ切つて居るんですからね。
吉川　さう云へばあなたはいつ東京へお引越しになります？
梅子　二三日うちに引き揚げようかと思ひますの。あなたは？
吉川　僕も早い方がいゝんです。大分此方で遊んだので、用事が山のやうに溜つて居るんです。
梅子　やつぱり赤坂か、麹町邊になさいましな。
吉川　えゝ、さうしませう。――ところで明日三枝君は東京へ行くんですか。
梅子　お天氣さへ好ければ乾度行くわ。是非行くやうにさう云つたんですもの。
吉川　日歸りですか、それとも一と晩泊るんですか。
梅子　まだハッキリ極まつて居ないんですの。久し振で赤坂へ行くんですから、泊らないとしても、歸りはどうせ遲くなるわ。
春雄は立ち聽きしながら、俄に昂奮して、恐怖に充ちた眼を光らせる。

吉川　立つのは何時の汽車てせう。

梅子　千代子さんと一緒だから、大概午前中よ。

吉川　そんなら僕は、明日の朝早く伺ひますよ。さうして停車場まで送つて行かう。

梅子　あたしは内に待つて居ますから……

春雄、二三歩後へ退いて、今度はわざと足音高く二人の方へ歩いて來る。

春雄　いかにも快活らしい調子にて、おい、おい、二人共此處に居るのかい。

梅子吃驚して後ろを振り向く。吉川は俯向いて、何氣ない體でステッキをいぢくつて居る。

春雄　惜しい事に月が曇つて了つたな。二人の傍へ蹲る。

吉川　先から此處に居たのに、君は何處を歩いて居たんだい。

春雄　今出て來たんだ。

梅子　あなた、羽織を召さないと風邪を引いてよ。ちよいと内へ行つて、引掛けて入らッしやいよ。

吉川　あなたが持つて來る役だね。

梅子　いやだわあたし、持つて來て上げてもいゝけれど、又千代子さんに顏を合せるのが不愉快だから。

春雄　いゝよ、いゝよ。今夜は大分暖かなやうだ。それに久し振りて飲んだせゐか、僕はまだ醉つて居る。

吉川　どうだい、たまには醉つて見るのも好い氣持だらう。

春雄　うん、いゝな。

吉川　明日東京へ行くんなら、明後日あたり江の島へ出掛けようぢやないか。さうして又大いに飲むさ。

春雄　君と一緒ぢや危いなあ。

吉川　大丈夫だよ。梅子さんどうです、少しくらゐ酒を飲ましたつて差支へないでせう。

梅子　えゝいゝわ、あたしは宅を信用して居りますから。

春雄　あはゝゝゝ。力なく笑ふ。

吉川　どうしたんだか君は今日元氣がないね。

春雄　元氣は大いにあるさ。大いにあるが唯面(おもて)へ現はさないだけさ。今に見給へ、此の元氣を貯へて、盛んに活動して、大金儲けをして見せるから。—— さうなつたら、少しは君にも恵んでやるよ。

吉川　湯水をお金のやうに使ふんだらう。

梅子　此の頃宅はお金持ちになつた夢ばかり見て居るんですと。あたしに指輪を買つて與れたり、二人で洋行に出掛けたり、夢の話と來たら大變よ。

春雄　今に本當にして見せるから。

吉川　どれ、吾輩も宿屋へ歸つて、金儲けの夢でも見るか。

春雄　まだいゝだらう。漸く八時だぜ。

吉川　いや、明日の朝早くお訪ねするよ。それぢや失敬。

春雄　さうか、そんなら失敬。

梅子　左樣なら、お休みなさい。

吉川下手へ去る

第三節

梅子　あたしたちも歸りませうか。立たうとする。

春雄　まあもう少し此處に居ておくれ。實はお前に話があるんだ。

梅子　……氣遣はしげに再び据わる。

春雄　話と云ふと大袈裟だが、ほんたうに下らない事なんだ。全く取るに足らない事なんだからお前氣持ちを惡くしちやいけないぜ。此れだけは前以て頼んで置く。

梅子　一體何の話なの。

春雄　外でもないんだが、此の頃己は或る人からおかしな忠告を受けたんだ。一言一句戰々兢々として、成る可く妻を怒らせまいとする。

梅子　はあ。

春雄　お前、此の話を誰にも云つちやいけないぜ。お母樣にも、千代子にも、吉川にも——いゝかい。大

丈夫だらうね。

梅子　云つて惡ければ誰にも云やしないわ。だけど氣懸りだから、早く聞かして頂戴よ。

春雄　その、つまり何だ、或る人がお前を誤解して居るんだ、己は決して そんな事を微塵も信じて居やしないが、お前が己以外の或る人間と不道德な眞似をして居るやうに、邪推して居る人があるんだ。

梅子　誰がそんな事を云ふんです。

春雄　まあ誰でもいゝさ。

梅子　それだけの話をなさる以上は、誰だか名前を仰つしやいよ。あたしに隱す必要はなくつてよ。

春雄　此ればつかりは困るんだから。名前を云ふ事だけは赦しておくれ。

梅子　だつてあんまり馬鹿にしてるわ。あなたに忠告するくらゐなら、定めし證據があるんでせうから、あたし其の人の前へ出て、孰方が正しいか立派に明りを立てゝ貰ふわ。

春雄　まあさ、お聞きよ。初めからさう怒つて了つちや、まるで話が出來ないぢやないか。——己だつて、そんな馬鹿げた事を信じる譯に行かないから、何か證據を見せろと云つたのさ。所が生憎證據なんぞ何もありやしないんだ。

梅子　隨分無責任な人もあるものね。證據がなくつて、どうしてそんな事が云へるんでせう。

春雄　ほんとに下らない話なんだよ。「僕は梅子を信じて居るから、さう云ふ忠告は止めて貰ひたい。若しも飽く迄主張するなら、レツキとした證據を出せ。」ツて、嚴しく跳ね付けて了つたんだ。さうすると先方ぢや負けない氣になつて、「二三日中に必ず證據を摑んで見せる」ツて云ひ出したのさ。

梅子　それからあなた何と仰つしやつたの？

春雄　相手にしたつて仕樣がないから、「どうとも勝手にしろ」ツて、其のまゝ別れて了つたあね。

梅子　是非共證據を持つて來てくれろツて、お賴み

になれば面白かつたのに。――あたし、誰が云つたんだか大概判つたわ。

春雄　判つたら判つたでいゝさ。しかし其の人だつて、何も惡氣で云つた譯ぢやないんだよ。やつぱゝ己の事を心配して、兎に角親切に敎へてくれたんだから、云はゞ有難迷惑なんだ。

梅子　それで全體あたしが誰とおかしいんでせう。

春雄　かうなつたら云つて了ふが、相手は吉川だと云ふのさ。

梅子　多分さうなんだらうと思つたわ。あの人より外に、此の頃内へ來る人はありませんからね。

春雄　吉川こそつまらない嫌疑を受けて、飛んだ災難だよ。

梅子　お互ひに損ですから、譯を話して、あんまり内へ來て貰はないやうにしませうか。

春雄　さうさなあ、そいつもまづいからなあ。

空が再び晴れて、月光地上に滿つ。

梅子　ねえ、さうして貰ひませうよ。

春雄　けれどもそんな事で友達の緣を切るのは、あんまり馬鹿げて居るからなあ。己は吉川に對して濟まないやうな氣がするよ。

梅子　だつて、さうでもして下さらなけりや、あたしが困るわ。

春雄　彼奴とは二十年來の附き合ひなんだから、此處でお互ひに嫌な顏をして、別れ別れになつて了ふのも、一生不愉快だからなあ。――こんな話はもとゝゝ己獨の胸へ收めて、お前が聞かなかつた事にすれば、差支へないんだ。

梅子　どうとても、あなたの氣の濟むやうにして下さいな。そりやあたしだつて、全く別の意味で、吉川さんが嫌ひぢやないわ。現にかうやつて、仲好して居るくらゐですもの。あの人が遊びに來なくなれば、隨分淋しいだらうと思ふわ。しかし、此ればかつかりは外の事と違ふんだから……

春雄　だからいゝぢやないか。吉川は勿論お前もこの話は聞かなかつた積りで、今迄通り交際するさ。己は自分の爲めにお前の行動を束縛したり、干渉したりする氣はないんだよ。己はお前を心の底から信用して愛して居るよ。お前に不滿足を與へたり、不自由を與へたりすれば、己だつてやつぱり好い氣持はしないんだ。お前がしたいと思ふ事は何でもするがいゝ。好きな人ならいくらでも交際するがいゝ。だんだんセンチメタルになる。唯己がどのくらゐお前を愛して居るか、それさへ解つてくれゝば、別に何も云ふ事はない。

梅子　それはよく解つて居るわ。何ぼあたしが我儘だつて、心の中では有り難いと思つて居るわ。

春雄　己を幸福にするのも、不仕合はせにするのも、みんなお前の心一つにあるんだ。お前は己を殺す事も生かす事も出來るんだ。

梅子　もう、よウく解つて居るんですから、そんな話は止して頂戴よ。

春雄　己は病氣で死にさうになつた最中でも、自分の命を惜しいとは思はなかつた。お前と靜子を幸福にさせたい一心で、も一度全快するやうに、神樣に祈つたんだ。其の一心がなかつたら、己は疾つくに死んで居たかも知れないんだ。

梅子　あなた。又あんまり昂奮なさると體に毒よ。

春雄　あゝ歸らう。だがほんたうに己の心は解つてくれたらうな。

梅子　解つて居ますとも。

春雄　解つてくれたら、己はもう一つお願ひがあるんだ。

梅子　どんなこと？

春雄　先も云つた通り、己は其の人の忠告を少しも信じて居やしない。けれども先方では意地になつて、二三日中に是非共證據を捕まへると云つて居るのだから、こゝ暫くの間お前も用心して、つまらない誤解を

受けないやうにしておくれ。

梅子　あなたもおかしな事を仰つしやるわね。身に覺えのない事なら。用心する必要なんかありやしないわ。

春雄　そりや勿論の話だが、疚しい所がないだけに、却つて遠慮が無さ過ぎて、飛んだ誤解を受ける事があるよ。その上先方は苦しまぎれにどんな難癖を附けないとも限らないからね。

梅子　それ御覽なさいな。だからやつぱり。吉川さんを寄せ附けない方がいゝんでせう。

春雄　いや／＼さう云ふ譯ぢやないんだよ。唯二三日の間、先方が手を引いて了ふまで、少し控目にしてくれゝばいゝんだ。なあに其の人さへ遠退いたら、もう何をしたつて安心さ。立ち上る。

梅子　あの人はあたしを目の敵にして居るんだわね。

春雄　お前もあんまり取り合はない方がいゝよ。……さあ、歸らう。

兩人沙山を上り行く。

上手松林の中より忍び足に千代子が現れる。沙山の彼方に隱れ行く兩人の姿を見送りながら、默然として舞臺の中央に立つ。幕

第三幕

第一節

第一幕と仝じ室内。時間は第二幕より直ちに連なる。

春雄と梅子が入つて來る。

梅子　みんな何處へ行つたんでせう。

春雄　きつと二階だよ。靜子の聲が聞えるぜ。

梅子　あの子はまだ寐ないのか知ら。もう九時になるのに。

春雄　それにしても、千代子が居ないやうだ。又何處かへ行つたのかな。

梅子　今時分獨りで夜歩きをするなんて、千代子さ

んの方が餘程怪しいわ。……

此の時廊下に足音が聞える。

梅子　……あ、千代子さんだ。あたし二階へ行つて來るわ。

梅子上手の障子を開けて去る

第二節

下手より千代子登場、

千代子　兄さん、嫂さんはどちら？

春雄　今二階へ行つた。椅子に就く。お前は今迄何處に居たんだ。

千代子　春雄の前に彳立したまゝ話し續ける。あれから又散歩に出掛けましたの。——兄さん、あたし少ウし都合がありますから、今夜東京へ歸りますわ。

春雄　なぜ？

千代子　でも考へた事がありますから。

春雄　だつてもう遲いぢやないか。

千代子　まだ九時ですから、大丈夫よ。——それてね兄さん、晝間あなたと喧嘩をしましたけれど、此のまま別れるのは氣持ちが惡いから、仲直りをして下さいな。

春雄　僕の方ぢや何とも思つて居ないんだから、お前がさう云つてくれゝば結構だよ。

千代子　何卒兄さん先の事は勘忍して下さい。ほんとにあたしが惡かつたわ。あれはすつかり取り消しにして戴くわ。

春雄　どうして？

千代子　あたしは本當に馬鹿な人間だつたわ。今時あたし程馬鹿な人間は、世界中にないと思つたわ。

春雄　何だかおかしいな。僕にはさつぱり判らんよ。

千代子　實は白狀しますけれど、あたしは今、松林の中であなたと嫂さんのお話をすつかり聽いて了ひましたの。

春雄　お前あれを聽いて居たのか。

千代子　そんなに驚かなくつてもよござんすよ。あたしはあれを聽いて、ほんとに感心しましたわ。かりにも兄さんを不仕合せだの、卑怯だのと云つた事を、つくづく後悔しましたわ。

春雄　聽かれたら仕方がないが、あれは全く僕の眞情なのだ。どうか惡く思はないてくれ。

千代子　惡く思ふ理由がないぢやありませんか。妹の癖に今迄兄さんの眞情をお察しする事が出來なかつたのが、惡いのよ。兄さんはほんとに仕合せな方だわ。兄さん程幸福な方はめつたにないわ。

春雄　さうさ、お前の云ふ通りだよ。

千代子　あたしの無分別な了見から、餘計なお喋舌りをして、たとへ半日でも兄さんに御心配を掛けたのが、申譯がないと思ひますわ。あたしはもう何も疑がつて居やしなくつてよ。あなた方のお話を聽いて見ると、いくら證據を掴まうとしたつて、掴める筈がないんですもの。ねえ兄さん、ほんとに勘忍して下さいまし。

お互ひに笑つて別れませうよ。

春雄　笑つて別れるのはいゝが、明日歸つたらどうだらう。折角和睦したんだから、今夜はもう一と晩泊つて行くさ。

千代子　和睦したから今夜歸るんですよ。もう疑が晴れた以上は、忙しい體て鎌倉に居る用はないんですもの。一刻も早く内へ歸つて、原田に安心させた方がいいわ。

春雄　まあ、それもさうだけれど……

梅子上手より這入つて來る。

千代子　あ、嫂さん、先程は失禮致しました。あたし都合があつて、今夜歸る事になりましたの。

梅子　大さう急なお話てすね。いくら喧嘩をしたつて、もう一と晩ぐらゐ泊つて居らつしやいよ。それに明日は宅も東京まて行きますから、丁度いゝぢやありませんか。

千代子　てすけれど、又今度伺ひますわ。

梅子　お忙しいでせうから、そんなに入らつしやらなくつてもよござんすよ。

千代子　あたし嫂さんと仲直りをしない約束でしたけれど、すつかり後悔しましたわ。だから嫂さん、何卒機嫌を直して、勘忍して下さいな。

梅子　しかしあなたとは、どうしても和睦出來ない譯があるの。

千代子　それもあたしが詫りますわ。嫂さんにつまらない疑を掛けたのは、全くあたしが惡かつたんです。今兄さんにお詫をして、殘らず取り消して了ひましたわ。

梅子　さう仰つしやればあたしだつて、何とも思やしませんよ。

千代子　今迄の事は、さつぱりと水に流して下さいまし。

梅子　えゝ、よござんすとも。

千代子　それぢや、歸りの支度をして參りますから。

千代子上手より退場。

第三節

梅子　千代子さんはほんとに後悔したのか知ら。

春雄　さういつ迄も人を疑ふもんぢやない。惡いと悟つて詫つたのだから、嘘ぢやなからう。

梅子　あゝ云ふ風に優しくされると、あたしも腹を立てないんだけれど……

春雄　あゝ、此れで己れもせい〳〵した。

雪子上手より入る、

雪子　千代子さんが今夜歸るんだつてねえ。もう四五日遊んで行けばいゝのにねえ。あんまり出し拔けぢやないか。

春雄　なあに、昨日から歸る歸るつて、さう云つて居たんです。

雪子　せめて明日にしたらどうだらう。今夜はもう九時過ぎだよ。春雄さんから勸めて御覽な。

春雄　僕も勸めたんですが、承知しないんです。そ

れに忙しい體ですから、歸した方がい丶てせう。

雪子　又何か、梅子と喧嘩でもしたんぢやないのかい。

梅子　い丶え、喧嘩どころか、すつかり仲直りをしちやつたのよ。

雪子　仲直りをするのが當り前だよ。同じ年でもお前さんの方が、嫂さんぢやないか。

千代子、歸りの身支度を整へて、靜子を抱きながら上手より登場。

千代子　それぢや皆さん長々御厄介になりました。　靜子を下ろして、三人に會釋する。

雪子　さうですか。一向お構ひ申しませんで、失禮ばかり致しました。何卒お宅へ宜しく仰つしやつて下さいましよ。

千代子　はい、有り難うございます。兄さんも嫂さんも御機嫌よろしう。

梅子　どうぞ原田さんに宜しく。二人共仲直りをしましたからつて、よくさう云つて頂戴よ。

千代子　え丶云ふわ。――靜ちやん、東京へ、お歸りになつたらきッとお遊びに入らつしやいな。

靜子　伯母さん、もつと鎌倉に居らッしやいよう。

千代子　グッと靜子を抱きしめる。でも伯母さんは御用があるんですもの。――ね、靜ちやんはい丶お子さんね。

女中まつ下手より登場。

まつ　奥樣、お俥が參りました。

千代子　あ丶さうですか。それでは御免下さいまし。

一同立ち上つて廊下に出る。

雪子　遲くなると澁谷の方は物騷ですから、よく氣を附けて入らつしやいよ。

千代子　はあ、今夜は月がありますから、大丈夫でございます。

雪子　硝子より戸外を見る。ほんとに穩やかな、い丶月夜だこと、まるで晝間のやうだ。

千代子を送りながら、皆々下手へ退場。　幕

炮烙の刑

田村俊子

一

室内の戸はまだすつかり閉ざされたまゝてゐたが、外はもう晝に近いやうな光線が、戸の隙間から障子の紙に漏れてゐた。家のものたちは疾うに起きて働いてゐた。然し何室にも物音も話し聲もおこらなかつた。血を見るやうな一と晩ぢうの主人の爭ひに氣も心も消えてゐる女たちは、唾を吞んで、その昏惑しつゝある無智なこゝろの中に唯己れを埋めて沈默してゐるやうにひつそりとしてゐた。今日一日の間に、何か恐しい凶事がこの家に起ると云ふ豫表のやうに、家のなかは暗澹とした隈を作つて、どこも陰氣に閉鎖されてゐた。外には悲しい風が吹き暴れてゐた。

混沌と眠りに落ちてゐた龍子は、時々びくりとして目を覺ました。その度に動悸が高まつて、心臟から頭腦へ突き上る血の音が、枕に押附けた耳の鼓膜を破る

やうに響いた。

突然、頭の上に押しかぶさつてくる眞つ暗な陰翳を見て、おどろいて覺めた時もあつた。目をつぶると陰翳は消え、目を開くとその陰翳は又かぶさつてきた。さうして、はつきりと目を見開いた時に、陰翳は一層濃くぱつと彼の女の顔にかぶさつた。それは自分を覗かうとして近寄せた男の顔であつた。龍子は聲を立てゝ起き返つたが誰れもそこにはゐなかつた。薄暗い部屋の中は陰鬱に靜て、四方の障子や襖がぴたりと閉てゝあつた。

今も龍子は何か打ち付けられたやうに思つて、おどろいて覺めた。やつぱり部屋の中は陰鬱に靜て何もなかつた。然しその時、隣りの室から起るある微な音を彼女は聞きつけた。それは紙に物を書いてるペンの音であつた。ペンの音は龍子の耳に、殺人を犯してからの男の呼吸のやうに、絶望と慘虐と悔恨との響きが打ち縺れ／＼して、荒々しく狂的に絶え間なくつゞいてるやうに思はれた。

「慶次が何か書いてゐる。何を書いてゐるのだらう。」

龍子は顔を上げてあたりを見た。ペンの音が猶近く聞こえた。あれは慶次が書いてゐるペンの音だ――――龍子はもう一度强く意識して、さうして襖一とつ隔てた彼方で物を書いてゐる慶次の姿をふと考へた時、さつきまでの男の恐しい激怒の形相が直ぐ彼女の頭に映つて、龍子の胸はどき／＼と波を打つた。その鼓動が半身を延ばした彼女の股の肉から冷めたい膝頭をふるはした。

龍子は書いてるものを想像することができた。慶次自身が云つたやうに、女を殺してからあとに殘しておかなければならないものを、彼男は書いてるに違ひない。

斯うしてはゐられないのだと龍子は思つた。自分を殺さうとする彼の男の手から逃れなければならない。逃げなくてはならない。私は逃げる。逃げてやる。逃げおほせられないことはない。逃げてやる。――彼男は決して女を許さないと云つた。女の罪惡を許さないと云つた。自分はあの男から、自分の爲ためにある一とつの行爲のために、恐しい慘虐な報いを受けなければならないのだ。自分の爲たことのために、――自分の生の破滅！　それは自分の爲たことのために――

龍子の半分眠りにおほはれた頭のなかに、ついさつきまでの激しい二人の爭ひが夢のやうに擴がつてきた。昨夜一と晩ぢうの女のあの暴露の恥ぢ、懲罰的な侮辱――男は女を獸だと罵つた。獸のやうに女を足蹴にした。さうして散々に女を打つた。

「私は何をした？　どんな事をした？」

あの靑年を愛すのも、慶次を愛すのも、それは私の意志ではないか。私は決して惡るいことをしてはゐない。私は深く慶次を愛してゐた。私の爲たことが慶次の思ふやうに憎むべき罪惡だとしても、その罪惡の中にたつた一とつの眞實があるではないか。自分がどんな事をしてゐる時でも、誰れよりも慶次を愛してゐたと云ふことは、たゞ一とつの私の眞實であつた。

「あなたを愛してゐる。」

この言葉は自分の心にいつも眞實に生きてゐた。けれども慶次はそれも淫婦の戯言だと云つて罵つた。

「汝はそれを罪惡だと思はないのか。汝のしたことは何んなことだと思つてゐるのだ。關係したもおんなじだぞ。それを罪惡だと思はないのか。おれの前によく汝はその脣をさらしてゐられるな。なんと云

ふ太太しい女だ。」

龍子はその言葉を繰り返して、呟くやうにかつとした。血が逆つたやうに、空を見詰めた龍子の目の周圍が眞つ赤になつた。憎んでも憎んでも憎み足りない男に對する憎惡の念がつのつた。

「罪惡ぢやない。決して私はあやまらない。私はあなたに殺される。殺して下さい。殺して下さい。」

斯う罵つて男の怒りの前に身體を抛り付けたあの反抗が、總身の震ふやうな憤激を帶びて龍子の心に兆してきた。

なんと云ふ憎い男だらう。彼男は私を殺すのだ。どうしても殺すと云つてゐるのだ。私は何をしたらう。どんな事をしたらう。何故私は男の怒りを受けて殺されなければならないのだらう。誰れも誰れも味ひ知らないやうな恐しい慘虐の手の中に、何故私一人が突つ込まれなければならないのか。どうしてあの男が、慶次が、長い間共棲にゐたあの慶次が、私を殺すと云ふやうな恐しい事をするのであらう。あの男の激怒を私には何うすることもできない。

脊筋に嫉妬と激怒の錨を打ち込まれたやうに、私には其れを何うすることもできない。私は恐しい。私にはそれがどんなに恐しいことだか知れない。私はあれを愛してゐるのではないか。私は僞をつかない。私はほんとうに彼男を愛してゐる。だのに、何故彼男はそんな慘いことを私にしやうとするのであらう。あの爲に、私が他の男を愛した爲に。その爲に？

然し、私は彼男の怒りが和らぐやうに、自分の爲たことを彼男に詫びるやうな事は決してしない。それは厭だ。私の爲たことは、私の爲たことだ。私は決して其れを罪惡だとは思はない。私は最後まで、

私の爲たことは罪惡ではないと云ひ張つて殺されるまでだ。人に殺されて死ぬと云ふ私の宿命なら仕方がない。私は死ぬまで彼男を毒突いてやる。惡態を吐く。然うして殺されやう。

私は彼男を愛してゐた。殺されると云ふことはどんなに恐しい事であらう。彼男が私に摑みかゝる時でさへ私はあんなに恐しさに戰える。何故彼男が私を殺すのだらう。何故？ 私はこんなに恐しいのに、何故私を殺さうとするのであらう。私は恐い、殺されるのはいやだ。何うして慶次が、あの男が、私を殺さうとするのだらう。私は何をした？ どんな事をした？ 私は殺されるのはいやだ。私は彼男を愛してゐた。

慶次が何か云つてゐる。私を見て笑つてゐる。あれはいつもの彼男の笑ひ顏だ。何を云つてゐるのだらう。あれは怒つた時の顏でない。いつもの顏だ。おゝ。いつもの顏だ。あなたは怒つた顏をしてはいけない。決して怒つた顏をしてはいけない。其れはどんなに恐しい恐しい顏だか知れない。恐しい恐しい顏だか知れない――

龍子は、又物に脅かされて目が覺めた。覺めた瞬間の意識が、直ぐ鋭く室內の周圍の物音に向けられたけれども、何の音もなかつた。ペンの音を聞きながら自分は何か考へてゐたのだがと龍子は思つた。ペンの音は？ と聞き耳を立てたが、ペンの音もやんでゐた。龍子は仰に寢たまゝ息を凝らして、何か不意におそつてこやうとする不安な影をぢつと見詰めてゐたが、何の音もおこらなかつた。動悸の音が頭腦から足の爪先まで響いてゐた。その儘で二分ほど經つた時、室の入り口の踏み板が突然にぎしりと鳴つた。

慶次が立つてゐる――龍子は思はず夜着の上に起き直つたが、その足音は續いて階子段をしづかに下りていつた。彼女は片手で夜着の襟につかまりながら、身を伸ばして、階下へおりて行つてからの慶次の樣子を聞き取らうとした。階下からはそれぎりで何も聞こえてこなかつた。龍子の唇は、冷めたくいつまでも戰えてゐた。

彼女はもう寢てゐてはならないと思つて、手を廻して着物に捲きつけた紐などを解かうとしたが、夜着を刎ねた肩先から、肉の痛みにしみこんでくる惡寒の心地わるさに我慢ができなくてその手をとめながら、床の上に坐つた儘で少時のあいだ凝つとしてゐた。頭が打ち碎かれてゞもあるやうに、血がもや〳〵として、無感覺にづしりと腦が重かつた。肉が一と層づゝ層を盛つて腫れあがつてゐるやうに、痛みと痲痺が全身にひろがつてゐた。彼女は突然自分の生活の上に非常な激動の起つたことを思ひながら夜着の赤い色を見つめてゐた。

外にはげしい風の吹いてるのが龍子の耳にはいつた。龍子は今日は幾日だらうと考へた。しばらく考へてゐたが幾日だかはつきり分らなかつた。

龍子は立上つて、その儘で寢てゐた着物の寢くづれたのを、紐をといて着直した。さうして女を呼んで、そこいらの戸を開けさせた。女は戸を開けてしまつてから龍子の傍に來て、心配さうな顏をして立つてゐた。

「慶次は？」

龍子は小さい聲で女に聞いて見た。

「どつかへお出かけになりました。」

龍子は思ひがけなかつたので、羽織を引つかけやうとしてゐたその手を外して、女の顏を見た。然し直ぐにその行く先きが推量された。彼男は兇器を求めて歩いてゐるのではないか――龍子の腦裡に、慶次の殺氣走つた形相があり／＼と映つた。

「さうだ。彼男が歸つてこないうちに、今の間に此家を出て行かう。」

吹き荒れてる風に、一寸耳を傾けてるやうに見えた龍子の目は、力が漲つて強く光つてゐた。然う決心した刹那に、いきなり眞つ暗な闇の底によろめき入つたやうに、氣が一時に上りながら、ふと意識が暗くなつて考への辨別がつかなくなつたけれども、直ぐにすべてが明瞭になつて、精神がはつきりした。心が明らかになつたと同時に、閃くやうに宏三の面影が浮んだ。彼女の考へが、やゝ長い間宏三の方に向いてゐた。

「どこかお痛いのですか。」

龍子が何かぐづ／＼してゐるやうに見えて、女が早や足袋などを取り上げながら、斯う云つて聞いた。龍子は湯を沸かしておくやうに云ひ付けて、女を階下へやつてから、急いで室の隅の机の前に行つて手紙を書いた。

私は急にあなたにお別れをしなくてはならないのです。

何も彼も知れました。私があなたを愛したことを慶次はどんなに怒つたでせう。私は恐しい目に逢ひました。その上に彼の人は私に復讐をすると云つてゐます。さうしてあなたにも。

私は今直ぐ此家を出るのです。私は此家を出てから、眞つ直ぐに朝鮮の父のところへ行くつもりです。あなたに一度お目にかゝつて、すつかりお話してから遠くへ行かうかと思つたのですが、私はお目にかゝらずに參ります。いまお別れすれば、もう當分はお目にかゝれまいと思ひます。朝鮮まで行つてからの私は何うなるか分りません。

突然にお別れするやうになつたことを、どうぞ悲しまないでゐらしつて下さい。お目にかゝらずに行つてしまふことを恨まないで下さい。私はいま、あなたに就いて考へることが非常に厭はしいのです。あなたにお目にかゝるのがいやなのです。落着いてから私はあなたにもう一度手紙を書くつもりでをりますが、これぎりで何も彼もお別れにしてしまひ度いと思つてゐます。あなたに差上げる手紙もこれが最後かもしれません、どうぞ何事も悲しまないで下さいまし。さうして、捨てゝ下さいまし。

龍子はそれを封筒に入れて名宛を書いた。華奢な優しい宏三の指先が、ふと龍子の目に見えた。姿(なり)の小柄(こがら)な、光りを欝陶しさうに見る癖を持つた若い人の美しい眼、彼女に別れてゆく人を振返るやうに、その男の眼を心に描いた。まぼろしの男の眼は龍子の心にさまざまな事を強いやうとしたけれども、龍子は、其れを避けて、その他には何も考へまいとした。

二

龍子は急いで支度(したく)をした。いつ、突然に慶次が眼の前に現はれても、それに對抗のできるやうな不貞腐れた強い意地を張りつめながら、僅なものを撰り出して入れた小鞄の蓋をぴたりと閉ぢた。鏡臺の上

の櫻草の花に、過ぎてしまつた平和な日の恨みが殘つてゐた。さうして、彼女の捨てゝ行かうとするその持ち物のいろ〳〵な影に、底つめたい破滅の色が動いてゐた。

龍子は出る時に、さつき髮を結ぶ時に見えなかつた飾りピンがそこいらに落ちてはゐないかと思つて、隣りの室を開けて見た。大きいペンは床の間の柱の前に落ちてゐた。それといつしよに、机の上に封書が一通載せてあるのが目に入つた。龍子はピンを拾つて、髮のくづれないやうに其のピンで結髮の中心をとめながら、封書の上書きを眺めた。その宛名は自分であつた。「野代慶子殿」と書いたその字は慶次の手蹟だつた。龍子は不思議に思ひながらその手紙の封を切つた。

何故。お前はあんな事をしたか。何故あんな事をしてくれたか。私は斯う云つて繰り返すより仕方がない。

私にはもう怒る力もない。一時の怒りて私はお前を打擲し罵つたことを後悔する。お前のやうな弱いものに亂暴をしたことを私は自身に恥ぢる。私はそれを許してもらひたいのだ。

お前は自分の爲たことを罪惡てないと云つた。お前自身にとつてはその考へが正當なのかもしれない。然し私はどこまでもあの事を大きな罪惡だと信じてやまない。お前は憎いことをした、お前は私のこの愛にそむいて、天地に憚かるやうな大罪を犯した、それに違いないと私は思ふ。

曉方になつて、私はお前の眠つたことを知つてゐる。私は襖の外に立つて長い間お前の呼吸を聞いてゐた。さうして私はお前を殺しても足りない憎い女だと思つた。お前は他の男の唇に觸れたその唇を私の前に持つて來て、さうして平氣てゐた。凡そこれほどの大きい罪惡があらうか。お前はそ

れを罪惡ではないと云つた。

然し私は何うすることも出來ぬ。戀愛と云ふ獨立の尊いものに對して、それを破壞した私はやはり罪人であるかもしれない。私はたゞ默してゐるより仕方がない。私はお前に恐しい制裁を加へると云つて誓つたが、私にはお前に對して何も出來ないのである。私はお前を打つたことさへ後悔してゐるのである。私にはお前を何うすることも出來ないのである。私は卑劣な男だ。私は愚な男だ。けれども仕方がない。私にはお前を何うすることも出來ない。

お前は疲れて眠つたが、私は眠らなかつた。さうして私はいろ〱に考へた。お前を許さうとも思つた。心から許さうとも思つた。さうして、若しお前が喜んでくれるなら、私はお前と再び新らしい生活を立て直さうかとも思つた。過去は忘れやう。あの事件を忘れやう。さうしてお前にも彼男を忘れてもらはう。私は斯う考へて見た。

自分の行爲を罪惡でないと否定してゐるお前が、その罪を許されると云ふ事はお前にとつて却つて侮辱かもしれない。必らずお前は然う云ふに違ひない。然し私はお前を許さうと思つた。

お前に對する未練の爲に、私は斯う云ふ事を考へたのだ。けれども其れも私には出來ないのである。

私のこの嫉妬をどうしたらいゝか。

私はやつぱりお前が憎い。私は到底この嫉妬を忘れることはできない。現在二人の間にお前の眼を見、お前の唇を見ながら、過去を忘れて舊の生活に返ると云ふことは私には苦痛だ。お前の一切はもう私のものではない。

私は恥ぢる。お前が私に向つて自分の行爲を罪惡でないと云ひ張るその大膽さに對しても、私は自分のこの卑劣さを氣恥かしく思ふ。

然し、私にはお前を何うすることもできないのである。

お前は私を愛してゐると云つた。然しお前の愛は二重になつて現はれてゐるではないか。私の愛は曾てまだ、お前に對して二重の不義の影を見せたことはない筈である。

私はつひに徹底した手段をとることができない。私は何うすればいゝのか。私自身の上に斯う云ふ恐しい事實の起つたことを、私は何かの懲罰として、私自身に天から與へられた慘刑だと觀念して默すより仕方がないのか。

私はたゞ怒りに戰えながらお前の肉體を見つめてゐなければならない。なんと云ふ苦痛だ。その肉を苛み破ることもできずに、私はたゞ見つめてゐなければならない。私には堪へられない。

私はお前に別れやうと思ふ。お前が私に要求したやうに、私はお前に別れやうと思ふ。私は東京を去らう。私は旅に出る。今からあてもない旅に出る。さうしてお前を忘れやうと思ふ。

龍子は靜に手紙を机の上においた。さつきのペンの音はこれを書いてゐたのだと龍子は思つた。身の縮むやうに狂暴にいとはしく聞こえたあのペンの音が、しゆ、しゆ、と襦子を柔らかにこくやうな優しい懷しみを帶びた音になつて彼女の耳に返つてきた。さつきこれを書いてゐたのだ、この手紙を書いてゐたのだと龍子は再び思つた。直ぐ、ぎしりと踏み板の鳴つた音が、其音につゞいて彼女の耳を打つやうに強く響き現はれた。彼の足音が、此家を出てゆく——私に別れてゆく最後の慶次の足音だつたの

だと龍子は思つた。

龍子は少し唇を開いて、眼を見張つてゐた。机においた片手から肱へかけて、ふわりとして、力がなかつた。顔の中に廣漠とした白いものがひろがつていつた。空のまぼろしでもなかつた。野のまぼろしでもなかつた。たゞ際限のない廣漠とした白いものがひた〳〵とひろがつていつた。龍子は其れを見つめた。行つてしまつた人の後を追ひながら、あてもなく呼び叫んでゐるいら〳〵として自分の聲がそれに反響してゐた。けれども、頭の中の白いまぼろしは悶として沈んでゐた。

龍子の心に、一時に悲しみが突つかけてきた。絶叫したいやうな悲しみが突つかけてきたけれ共、革のやうなもので心臓を引き絞られてるやうな苦しさが殘つて胸が乾いてゐた。唇も眼も乾いてゐた。口尻から耳朶へかけての筋肉が引き吊るやうに思ひながら彼女は泣くことができなかつた。頬から瞼へかけての肉の纖維がふるえてゐながら涙がのぼつてこなかつた。龍子は夢中に袂を顔にあてゝ机の上に突つ伏した。自分の身を揉んで、揉んで、揉みぬきたいやうな焦せつた心持に壓しつけられながら、龍子は袂をしつかりと顔にあてゝ突つ伏した。

けれども、龍子は又直ぐに顔を上げた。そうしてあわてゝ立上つた。慶次を戀ひしく思ふこゝろが犇と迫つてきて、彼女はたゞ一と向きに何か思ひつめてゐた。顔が眞つ赤になつて、血に乾ききつた眼のうちが險しい光りを含んで瞳子が濁つてゐた。

龍子は手紙をふところに入れて、慶次の跡を追ひかけるつもりで階下へおりて行つた。そこで出逢つた女に、慶次の出て行つた時間を聞いて見た。女は丁度その時から一時間ばかり經つと云つた。

「どんな風をして。」

「ふだんの儘て、外套を着て。」

「慶次が何所へ行つたのだか分らないんだよ。」

龍子は然う云つて女の顏を見た。龍子は偶然にこんな言葉が出たあとて、慶次は何所へ行つたのだか分らないと云ふ當惑が、初めてはつきりと彼女の意識に上つて來た。

「何うしやう。何方へ行つたのだらう。もう一時間も經つのではそこいらには居やしないだらうね。」

龍子は轉倒してるやうな震へた眼て、女に相談するやうに聞いた。

「直きに歸つていらつしやるやうな御樣子てした。」

「いゝえもう歸つてこない。あの人は歸らないと云つて出て行つたんだから。」

龍子は然う云つて立つた儘考へてゐた。女には解らなかつた。女は落着かない主人の樣子を默つて打守つてゐた。

「停車場へ行つて見やう。彼所て聞けば何方へ行つたか分るかもしれない。」

龍子は又女に相談するやうに斯う云つた。慶次が出てからの經過の時間が、まだ一時間ぐらゐだと云ふことが彼女には、また心賴みにもなつてきた。外へ出れば、きつと慶次に出逢へるやうな氣がした。もう一度逢つて、どうしても慶次に云はなければならないことがあると彼女は思ひあせつた。

彼女はさつき自分が捨てゝ行かうとしたこの家の留守を女にしつかりと賴んて、自分がこの儘て當分歸らないやうな事があつても心配をしてはならないと云ひ付けた。さうして少しの金を托けて龍子は家

を出た。

龍子の家からEの停車場まで十四五町ほどあつた。丘の上は虚空を渦巻くやうに風が吹き立つて、龍子の着物はそつくり下から引き剝がれるやうに向ひ風に煽られた。ぽつりと立つてゐる郊外の家並びは、寒風に曝されて灰色にから〳〵としてゐた。空の果てから暗く襲ひかゝるやうな不安な天候の中を通して、薄い冷めたい日光が丘の上から下へ叉の影を投げてゐた。

彼女の聽神經は、ぎいぎいと鳴つた踏み板の音に鋭く刻まれてゐた。龍子は丘をめぐる黑い柵に添ひながら、時々息を切つて駈けた。

三

小さい停車場へはいつて、龍子が少時立つてゐると、奧から改札の男が出てきた。それは龍子の馴染の顏であつた。龍子は微笑しながらその男の傍に寄つて行つた。

この停車場は、單に郊外から東京へ通じる電車の乘り場であつた。改札の男は附近に住むこの人等の顏には馴れてゐても、名前を知らなかつた。龍子が自分の家の名を云つて、一時間ばかり前にその人が此所へ來たか何うかを聞いて見たけれども、改札の男は分らないと云つた。龍子はその樣子などを話て、この改札の男が馴染んだ乘客の顏と符合させやうとしたが、この男には中々思ひ付かなかつた。やつと、半時間ほど前にそれに似た人が上野へ行く切符を切つたと云つたけれども、それも覺束ない返事であつた。

龍子はそれを賴りにして、自分も上野の切符を切つて電車の乘り場へおりた。切符を手袋をはめた片

手に握つて、龍子は柱の蔭に立つてゐた。

寒い風が龍子の顏を吹いた。丘の上の立木が根こぎにされるやうに烈しく左右に吹き廻されてゐた。龍子は、その風に動亂する雜木林の死のやうな黑い影を見上げてゐると、厭世的な陰潤しい氣持になつて、悲しみが物の底からだん〳〵に解れていつた。泪が瞼をついてあふれた。

龍子は足を動かしながらこの泪を妨らさうとした。後の腰かけに腰をおろしたり、立つたり、歩いたりした。それから又柱の蔭に立つて、自分のいまの狀態を、よく明瞭と考へやうとしたりした。けれども、一切が直ぐ渦になつてその考へを昏くしてしまつた。なんにも分らなかつた。たゞ暗い悲しみがあとから〳〵と彼女をおそつた。彼女は泪の流れるまゝに任せて、顏を仰向けて、雜木林を見上げながら立つてゐた。

十分程て電車が來た。それに乘つたとき、龍子はふとこの電車の中に宏三がゐるやうな氣がした。宏三の住む方面とは恰て違つた場所だつたにも拘はらず龍子は斯う云ふ事を直覺的に感じて、どきりとした。龍子にはそれがひどく恐しかつた。彼女の入り口に立つた足がわく〳〵した。さうして、その中には入り得なかつたほど恐怖に閉ざされたけれども、入り口の際にゐた車内の人の注意が自分に向いたやうな氣がして、彼女はなかに入つた。一番端に腰をかけて、ショールて半面を埋めながら彼女は車内をそつと見渡した。

なかは隙いてゐた。宏三に似たやうな男も見えなかつた。彼女はそれて安心して、走り出した電車の

響きに、あらゆる感覺を搖られながら、感情の外廓だけが何事もない平常に復つたやうな心持て、彼女は恍然とした。戶に遮られて、外の風が聞こえないのは彼女にはよかつた。走り過ぎてゆく窓から見える森や林が、斯うしてゐると風をも受けてゐないやうに見えた。車內の人々の沈默してゐる姿も、靜に彼女の目にはいつた。

然しそれも僅の間てあつた。上野まて出てから、何うして慶次の行先を見定めやうと云ふ不安て、そのおちついた氣分は直ぐに破られた。的(あて)もなく探し步くことはてきなかつた。慶次の行つた先きを知る爲に、慶次の懇意な人たちに電報ても打つて見やうかとも思つた。然し、そんな人騷(ひとさわ)がせもてきなかつた。なんの爲に慶次が家を出た？――然う云ふ事を人々に聞き探られるのが辛かつた。罪惡だと罵られた自分の行爲が、思ひがけなく自身において世間を狹くしつゝある事を彼女は氣付いて、いやに思つた。

何もかも、二人の間は破れてしまつたのてはないか。それは自分が打破つたのてはないか。最初思ひ決したやうに、自分は慶次から離れて、いつたん自分のやつた行爲のまゝに、明らかに自分の境涯を導いて行くのがほんとうてはないか。何故私はそれを又裏返(うらがへ)さうとするのだらう。慶次にはあの爲に、これから却つていゝ生活が表はれるのかもしれない。私はそれを妨げることはない。慶次の行くまゝに私は行かせておけばいゝのてはないか。さうして、私は私だけの生活にはいつてゆく。それて二人の間が終つてしまへばそれていゝのだ。

「私は何をしてゐるのだらう。」

龍子が斯う思つて自分の心を彈いた刹那に、慶次に對する戀ひしさが、火のやうに燃えた。その戀ひしさがすべてを打消してしまつた。唯、慶次に逢へさへすればいゝと云ふ小供のやうな願ひて、彼女の胸はいつぱいになつた。

さうして、うろ〳〵と慶次を探し歩いてゐる自分の姿を心に描いて、彼女は自然と涙ぐんだ。もしこれぎりで慶次に逢へない運命だつたら何うしやうと思つた。然う思ふと彼女は猶更悲しくなつて、自殺と云ふことを思ひ耽つた。

龍子はほんとうに死ぬやうな氣がした。このまゝで慶次に逢へないなら、自分はきつと生きてゐるに堪へられないに違ひないと思つた。龍子は寂しくて悲くしてたまらなかつた。耳についてゐて離れないぎい、ぎいしりとなつた踏み板の音を、彼女はまざ〳〵と繰り返しながら、悲しい思ひを我慢して齒を嚙んでゐた。

上野に着くと、彼女は直ぐ思ひ付いて、大きい停車場へ入つて行つた。どの汽車かゞ發車する時であつた。人々がざわ〳〵と待合室から改札の方へ出て行つた。驛夫が「日光行」の出ることを知らせて呼んでゐた。

龍子は唐突に柱の傍に立つて四邊の騷がしさに心を奪はれながら、彼方を向いて押してゆく群集の後を見てゐた。荷物を抱へた赤帽が龍子の腕に突つかゝつて、その横を通つて行つた。

龍子はあの群集の中に慶次がゐるやうな氣がした。傍へ行つて探して見やうと思ひながら、つと前へ出やうとした時に、ふいと、龍子の立つた側面の待合室から出た男があつた。その男は黒木綿に模樣を

革で張りつけた手提袋を、外套の下から出してゐた。その袋に見覺えがあつた。龍子は思はずはつとして、柱の蔭に身を隱すやうに後へ足を退いた。それは慶次であつた。

龍子の胸がどき〳〵と戰えた。血が一時に上つて彼女の顏は赤くなつた。瞬間に目の前の何も彼もが、粉碎になつて散らばつたやうな氣がした。彼女はしばらく、がらんとした中に一人突つ立つてゐるやうな曝れた氣持でぢつとしてゐたが、思ひきつて半身を出して、もう一度今の場所を覗いて見た。慶次はそこにゐなかつた。目で探してゆくと、改札の近くに立つてゐるその後姿が見えた。

彼女は追ひかけるやうに五六歩前へ出たけれども、立止つて慶次の後姿を眺めてゐた。慶次の姿はやがて群集の中にまぎれて見えなくなつた。プラットフォームの上を多くの人がばら〳〵と驅けてゆくのが、光景を追つてゆく龍子の眼にはいつた。

龍子は後悔した。どうして傍まで近寄つてゆくことができなかつたのか、どうして氣後れがしたのか、自分にも分らなかつたけれども、突嗟に思ひ返して、心を急がしながら日光までの切符を買つて、直ぐその後を追つた。何の車室に慶次がゐるのかそれを知らうとして、龍子は車體の前に躊躇してゐたが、發車を促されて龍子は少しあわてながら、そこから隔つた二等室にはいつた。

四

汽車は直きに動き出した。

龍子の乘つた室は中央にクッションの仕切りのついた狹い室であつた。彼方に平常の服裝をした僧侶らしい人が一人乘つてゐた。龍子の前に、お召地の袴をはいた大きな男が外套を着たまゝて仰に寐てゐ

た。龍子は一尺とはなれない自分の膝の前に寐てゐる男が、唯、むやみと汚くてたまらなかつた。龍子は顔を外らして、成る丈、その仰に寐てゐる唇のあづい男の顔が眼にはいらないやうにしながら、隅の方に自分の身體を壓しつけるやうにして腰をかけてゐた。

慶次はどこまで乘るつもりなのか、龍子には考へがつかなかつた。停車する毎に、慶次の姿に注意しなければならないと龍子は思案して櫛をだして亂れた髮をかいたりした。

汽車は都會を遠くはなれるほど、停車から停車までの時間が長くなつていつた。窓から黄色く荒れた畑が見えた。森の梢が見えた。藪際の窪地に、こぼれるやうにみつしりと花の咲いてゐた白梅の老木があつた。娘が三人ふところ手をしながら眞つ直ぐに田甫道を驅けだして行つたりした。その突き當りに赤い鳥居があつた。

慶次も同じ汽車の窓から、それ等を眺めて行くのだらうと思つた。思ひがけなく慶次が停車場にゐた事が、彼女は今思ふと不思議なよろこびであつた。もう五分おくれたなら彼所では逢へなかつたのだつた。微妙なところに二人の運命の糸がつながれてゐた。二人の約束は永いのかもしれないのだと龍子は考へた。

汽車が震動する度に、慶次の身體もこれと同じ震動を受けてゐるのだと思つたりした。やがて、慶次の前に自分が立つ時の事を思つて、彼女は、初めて嬉しいと云ふ感情を味はつた。もう何日にも、斯う云ふ優しく微動する感情を味はつたことがないやうな氣がした。顔を合はせて一度手を取り合へば、そ

れて慶次の苦痛も消滅して行くやうな氣がした。すべてはこの刹那の嬉しいと云ふ感情の中に二人の間は溶けていつて了ふやうに思はれた。最初の愛が又形ちづくられる――龍子は其れを夢みた。

龍子は停車する度に、窓をあけて下車する人々を眺めた。時がやゝ長く經つていつた。僧侶らしい男は、もう餘程手前で下りてしまつて、寐てゐる男ばかりが殘つてゐた。龍子は下駄を脱いて、クッションの仕切りを此方から彼方へ飛び越して、彼方側の腰かけへ行つた。そうしてそこに一人してゐた。昨夜から食をとらずにゐるのだけれども、龍子は何も欲しくなかつた。今日の日も、もう午後の三時を過ぎてゐた。

汽車が走れば走るほど、龍子の心は平淡になつていつた。大きな河が眠るやうに流れてゐた。影をかさねて、疊つた西の空の果てに淡く見えてゐた山の姿が、だん／＼に濃くなつていつた。山は北の空にも現はれてゐた。龍子はある限りのなつかしさで、その山の姿を眺めた。放膽な山の姿は、龍子の感覺を大きく新らしく伸んびりとさせた。龍子は初めて自由な氣がした。さま／＼の心勞がその心の底から消えていつた。山のこゝろが自分の魂に響きを打つてくるやうであつた。彼女の精神が自然と深く大きく明いていつた。

「なんて親しい色をしてるのだらう。」

龍子は然う思つて、空想的な代赭色の山の襞を眺めた。

氣がせい／＼とした。龍子は當分山を見て暮らしたいと思つた。誰れの顏をも見ずに、たゞ山を見て日を送つて見たいと思つた。さうして其所で靜に考へたい。一日でもほんとうの心の生活がして見たい

と思つた。

龍子は神經的に、停車すると直ぐ顏を出して、下りてゆく人々を注意した。乘車してからもう三時間ぐらゐは立つやうな氣がしたが、下りてゆく慶次の姿は見えなかつた。日光まで行くつもりなのかと龍子は考へて見た。それとも何所かの停車場でその姿を見紛つてしまつたのかもしれない。若し然うだつたら自分はこの儘一人で日光へ行かう。さうして、一人でゐて一人で考へやう。

誰れの顏も見ずに、誰れの感情にも煩はされずに、私は私の事をそこで考へる。――私は一人でよく考へなければならなかつた。私は私の行爲についてよく考へなければならなかつた――。

昨夜から彼女の上に起つた一切が、恥ぢを含んで靜に彼女の腦裡に上つてきた。屈辱が點々として自分の周圍に落ちてゐた

Kと云ふ大きい町の停車場で汽車がとまつた時、龍子は、自分の車室より後方から下りた慶次が、自分の車室の前を通つてゆくのを見た。その姿を認めた時に、この儘で慶次に逢はずに別れて了はうかと云ふ考へがふと浮んできたが、龍子は機械的な動作で扉を押して下へおりてしまつた。さうして、慶次のあとにそつと隨いて階段を上つていつた。四五人の人の足音に交ぢつて、二人の足音が板の上に呼應するやうに響いたけれど、慶次は振り返らなかつた。龍子はわざと後れて隨いていつた。改札口へおりるまでも、龍子はこの傍へ近寄らないやうにして歩いた。切符を渡す時に、慶次は偶然後を振り返つて龍子の姿を見つけた。慶次は驚いた眼をして、龍子の顏を見た。

龍子はつゞいて改札口を出てから、慶次の傍に立つて、だまつてその顔を見つめてゐた。慶次の顔は眞つ蒼だつた。その頬が一日でやつれてゐた。

「何所へいらつしやるのです。」

龍子が徐な口のきき方で斯う聞いた。

「どうして來た。」

「あとから……」

慶次も自分の傍に立つた龍子の顔を見つめてゐたが、だまつて町の方を向いて歩きだした。龍子もそれに並んで行つた。大通りの彼方側に大きな宿屋の建て物が幾棟かつゞいてゐた。その軒に灯がついてゐた。皮膚を切るやうな山の風が龍子の顔と足を襲つた。龍子は寒さに身震ひしながら田舍の町の灯をめづらしく眺めたりした。日はまだすつかり暮れてゐなかつた。薄光がいつまでも漂つてるやうに、家根や地上が黄昏の色を彈ね返さうとして夕暮れの明るさを浮かせてゐた。

慶次はその大通りを右に折れた。慶次はその歩調を非常にゆるくして、ぶら／＼と歩いてゐた。何か考へてゐるやうな考へてゐないやうな眞つ直ぐな顏の向けかたをして、時々、小さく溜息をつきながらこつ／＼と云ふ足音を立てゝ歩いてゐた。道路の幅が狹くなつて、兩側に軒の低い小さな料理屋がずつと並んでゐた。假名で家號を書いた看板の行燈が、薄赤い灯のいろを包んでその影が往來の地面を匐つてゐた。龍子はその灯の色を追ひながら、默つて歩いてゐた。疲勞が、ぐん／＼とその身體の上に現はれてきた。

料理屋の並んだ一廓がつきると、小さな川が横に流れて、橋がかゝつてゐた。龍子はその橋を渡りながら空を見た。曇つた空に思ひがけなく半月がぽつとにぢんでゐた。

あたりが暗くなつた。灯などの見えない暗い塀つゞきの町などを長く／＼通つた。慶次はいつまでも默つて歩いてゐた。龍子に一と言も聲をかけなかつた。龍子は幾度も立止らうとしながら、無暗と引きずられてその後に隨いていつた。暗い町が彼女にはたまらなく厭てあつた。そこを何町か曲り／＼して歩いてきた時に、緣日のやうに賑かに灯の輝いた露店が、行手の四つ角の一角に見えてきた。闇の空間が明るく灯にぼかされてゐた。

やがて二人はその賑やかな市の立つてゐる横の通りを突つ切つて、又暗い町にはいつた。慶次は直ぐ足をとめて龍子の方を見た。さうして、嗄枯れた聲で、

「僕は用があつて妹のところへ來たんだ。」

と云つた。

龍子はそれて初めて思ひ出した。此町に慶次の妹が人に嫁付いてゐた――

「然しお前といつしよに今夜は其家へとまる譯にはいかない。お前もいやだらう。」

慶次は然う云つて少し考へてゐた。龍子は暗い地上に目を落してだまつてゐた。慶次の聲が遠くからひゞいてくるやうに思はれた。

「何所かそこいらの宿屋へでも行かう。」

慶次は斯う云ひきつて、又、あとへ引つ返した。龍子は其れに伴いて行つた。

五

停車場の附近まで引つ返して、二人はある旅宿にはいつた。通された室は二階の右の廊下を出つた突き當りであつた。六疊の仕切りの襖に、墨で描いた四君子の唐紙の繪が一枚づゝ貼つてあつた。龍子はコートもぬがずに、女中の運んできた火鉢の前に坐つて手を翳した。道の途中で紛れた二人がお互に見付け合つたやうな輕い氣持が浮いてゐたが、二人は長い間默つて坐つてゐた。慶次は龍子の顏を見ないやうにして、俯向いて煙草を吸つたりした。電燈の灯が見知らない二人の人を咎めるやうに高い天井の下で空〻しく輝いてゐた。

「もう歸らないつもりだつたんですか。」

「うむ。」

こんな簡單な言葉が取り交はされてから、又二人は默つてゐた。龍子はづき〳〵と頭が痛みだしてきた。女が入浴をすゝめに來た時、慶次は出て行つた。

室の周圍がひつそりとしてゐた。一とつ二たつ先きの室から、帳面の紙でも次ぎ〳〵と返してゆくやうな音が、時々靜に考へ深かさうに聞こえてきた。遠くて樂隊のはやしの音がしてゐた。ぢつと耳を澄ましてゐると、何とも云へぬノロマな樂隊の調子の中から出てくるドウンと響く奴隷の返事のやうな低い音と、ガヤガヤしてゐる雜音の中から特にある一とつの聲の響きだけがいつしよになつて甯高く流れてるやうな群集の訛りの音とが縺れ合つて、田舍の町の散漫な空氣を搖つてゐた。龍子は今歩いてきた町の樣子を眼に浮べてゐた。暗い灯りが所々にあつた。小さな橋があつた。水の流れが黑かつた。黑い

板塀が長く〳〵つゞいてゐた。――その中を歩き廻つてゐた自分の姿と慶次の姿とを見つけ出して、龍子は物淋しい氣分にふさがれた。

龍子は慶次のことを考へた。自分を見ておどろいた時の慶次の顏の表情――思ひの外に慶次の顏がやつれてゐた、と龍子はそれを哀れに思つた。慶次に逢つて、一と言物を云ひ交はしたその時から、もう慶次に對する一種の反抗的な感情が極くかすかに兆し初めてゐたのだけれども、かうしてゐれば矢つ張り、猶一層に男を戀ひしく思つた。離れたくはないと云ふ肉に甘へた感情がひし〳〵と迫つていつた。それに、久し振りで慶次と旅の宿に身を休めたと云ふ事で、彼女にある追憶が起つてきた。龍子はその昔の旅のこゝろを繰り返した。

それからもう八年になると龍子は思つた。二人は東京を逃げて、京都の祇園の宿にかくれてゐた事があつた。丁度五月の初めであつた。丸山の公園に葉の出た遲櫻が咲いてゐた。毎日毎日雨が降つた。龍子は袷を着てゐた。――部屋の二方の白い壁に、洋館に見るやうな窓が二つづゝ切つてあつた。龍子はその窓に肱を突いて、石燈籠に降る靜な雨を眺めてゐると、その肩に慶次の手がかゝつて、いつまでも其の身體を押へつけてゐたりした。その座敷に添つた長四疊の室へ入つて、女中に京都風の髮を結つてもらつたりした。慶次の師匠が金を持つてたづねて來た時、龍子はその四疊の室にはいつて半日もかくれてゐた。龍子が女中といつしよに雨の中を淸水へ參詣などしてきても、慶次はどこへも出ずに寐てばかりゐた。二人は其所で、どんな事があつても、きつと一所になると云ふ約束をした。どんな事があつても離れないと云ふ約束をした。

それは二人の過去のおもてに貼りつけられた美しい繪の中の一とつてあつた。この繪ばかりは、時の力に蝕まれもされずに、いつも鮮やかな、緋桃の花のやうな可愛らしい色彩をかゞやかしてゐた。繪の中に描かれた人物は自分と慶次の外にはなかつた。

けれども、繪は繪であつた。繪になつてしまつたのだ。その時の二人の呼吸も、その時の笑つた唇もそれは再び繪の中から生きて脱け出てくる事はできなかつた。

龍子はそれからそれへと繪を追つた、さうしてぢつと見詰めた。見詰めても、見詰めても、繪は繪のまゝで卷き返されていつた。

「はいつてきたら何うだ。」

湯から上つて來た慶次が、龍子の顏を見ると斯う云つた。龍子は俯向いたまゝて頭を振つた。

直ぐに食事の繕を女が持つて來た。龍子は今日一日何も口にしなかつた事を思ひ返しながら、箸を取つたけれども口のなかがぱさ〳〵してゐて味がなかつた。それて自分は好い加減にして、慶次が食を重ねてゆくのを小憎い氣持て眺めてゐた。

「食べないのか。」

慶次が中途で龍子に聞いた。

食事が濟むと、二人は小さい火鉢に寄り合つて手をかざした。龍子はやつぱり、づき〳〵と頭が痛んでゐた。それを堪へながら、妹のゐる家は何邊なのか其れを慶次に聞いたりした。慶次は妹の家の樣子などを話したり、田舍の町のわびしい光景などを語つたりした。その間々に、ぽつりと糸の切れるやう

に話が續かなくなつて、お互に默つて考へ込む時があつた。

それは考へるのではなかつた。二人共昨夜からの激しい心勞と肉體の疲勞とで、まるで病的な睡眠が朦朧とおそつてくるやうな氣がするからであつた。然し龍子はそれが眠りがくるのだとは思へなかつた。時々意識が昏くなつてゆくのを自身に針を刺すやうにして、精神をはつきりさせやうとした。さうしては慶次のやつれた顏を見た。慶次の默つてゐるのが龍子には苦しくつてたまらなかつた。けれども自分から口を開くことはいやなのであつた。それは、一と言でも物を云へば、あの問題に觸れなければならないと云ふ事が煩はしいからであつた。

慶次は幸福のやうな氣がした。龍子が自分の後を追つてきたと云ふ事が慶次には嬉しかつた。これだけは紛ふべくもない女の眞實のやうな氣がした。もうこれで一切が濟んでしまつたやうにも思はれた。龍子の罪惡も、自分の嫉妬もあの激怒も、一切が過ぎ去つて了つたやうにも思はれた。過去が消えて、新たな愛の結び目が二人の間につながれるやうにも思はれた。

けれども、慶次は何か解決しなければならない事があるやうな氣がした。何か極めておかなければならないものが、あるやうな氣がした。二人の間がこの儘で舊に戻つてはならないやうな氣がした。それさへ極りがつけば其れですべては溶け去つてしまふのだと思つた。

其れは、たゞ一と言の女の謝罪の言葉であつた。それさへ聞くことが出來れば、自分は全くよみかへつたやうな新らしい悅びの中で、女を抱くことができるのだと慶次は思つた。けれども龍子はいつまでも何とも云はなかつた。

「來る時に轢死者の千人塚があつたね。」
慶次がふいと思ひ出した。
「氣が付かなかつたわ。どこいらに。」
「餘つ程、此方へ來てからだ。」
しばらく、恐しい幻想がお互ひの胸の中で映り合つた。龍子は慶次の顏を見詰めてゐた。
「僕はあれを見た時ぞつとした。」
「どうして。」
慶次はあとを云はずにゐた。さうして、今朝家を出てから、幾度も死なうと思つたほど自分の感情が女々しくなつてゐた事を考へてゐた。
憎むべき女！　慶次は心の中で繰り返した。昨夜のやうな狂暴な感情がふつと動いて、血が沸えた。
「どうして僕のあとを隨いてきたんだ。どうして同じ汽車に乘つてゐたんだ。」慶次は龍子に聞いた。
「あなたを探しに上野の停車場へ行つたんです。然うしたら丁度あなたが彼所にゐたんです。けれども――」
龍子は斯う云ひかけて、あの時、何うしても慶次を呼ぶことの出來なかつた氣後れを、自身に考へて見やうとして、言葉をとめた。慶次はその時、初めて龍子の顏をしみ〴〵と見た。龍子の眼は充血して皮膚の荒れたその頰が赤味を帶びてゐた。眉毛がざら〳〵と立つてゐた。丁度酒を飲み過ごした後の血の荒れが、その薄い皮膚を透して醜く現はれてゐるやうに見えた。そこへ男が宿帳を持つてはいつてき

た。慶次が何か書いて男の前へ抛り出してやるまで、龍子は彼方を向いて、床の間の梅の幅を見つめてゐた。男が行つてしまふと、龍子は又膝を慶次の方に向けて、その顏をぢつと見た。「あれぎりであなたに逢へなければ私は死なうと思つた。」

龍子は俯向いて呟くやうに然う云つた。その聲がふるえてゐた。

「何故だ。」

「あんまり戀ひしくつて――何うしていゝか分らなかつた。」

龍子の俯向いてゐた眼から不意に涙が落ちてきた。龍子は半巾を出してそれを拭いた。拭いても、拭いても、涙があふれた。

「あなたは何うしても別れやうと思つたんですか。家を出てしまつて私を忘れやうと思つたんですか。」

慶次は返事をしなかつた。

「あなたには其れが出來るかもしれないが、私は別れるのはいやです。私は何所までもあなたの後を隨いてゆきます。別れるのはいやです。」

「けれども、お前が僕に要求したことぢやないか。お前は別れやうと云つたぢやないか。お前はどんな事をしたんだ。考へて見ろ。」

「いゝえ私は何うしても別れるのはいやです。駄目なんです。あなたに別れられないんですから。あなたとは別れることが出來ないのです。」

その聲が涙にふるえて、口惜しさうな息の彈みが絡んでゐた。あとを續けて何か云ひかけやうとした

が、聲が嗚咽でふさがつてしまつて出なかつた。その胸が破れさうに波を打つてゐた。

女の興奮したこの言葉を聞きながら、慶次は腕組みをしてぢつと默つてゐた。

女は惡るい事をしてゐる。自分を捨てゝ他の男を愛した。自分の想像もつかないやうな愛着の甘い言葉て、他の男のこゝろを惹きつけてそして女はよろこんでゐた。それを自分が知つても女は平氣でゐた。自分の爲た事は自分の爲た事だと云つた。其れが面白くないなら別れやうと云つた。――

龍子の行爲に對する極端な怒りと憎惡が、いきなり胸を打碎くやうに起つて、その唇がふるえた。

「お前は考へて云つてゐるのか。考へなしに云つてゐるのか。」

「私は考へて云つてるのです。今日私がどんな思ひをしたかあなたには想像もできやしないでせう。私がどんな思ひをしてあなたの後を追つかけて來たか――」

龍子の涙は漸くきれて、その聲がはつきりしてきた。龍子は斯う云つてから、自分の聲が聞き馴れない――他人の聲のやうな氣がして、ふとその聲を呑んだ。さうして慶次の顏を見た。突然、はげしい力て彼女の肉の上にある感覺がおそつてきた。龍子はそれを何うすることも出來なかつた。四肢が釣つれて呼吸が燃えた。龍子は唇を嚙みながらいつまでも慶次の顏を見据へてゐた。

「僕は何うしても別れやうと思つたのだ。これぎりで逢ふまいと思つてゐたのだ――」

「私を殺さうと云つたぢやありませんか。何故然うしないんです。そんな事を思ふなら殺して下さい。殺しちまつて下さい。私はまだその方がいゝ。あなたに殺されるか、もつとそれよりも酷い目に逢はしてもらつた方がいゝ。もうこの上もない慘虐な目に――」

龍子は自分の手を握りしめながら、身體を慶次に突きつけて斯う云ひつゞけた。自分の身體がぢりぢりした。自分の肉全體を燃え上る火の中に抛り込んでもらひ度いやうに肉が苛れた。

「燒き殺して下さい。」

龍子は底强い聲で斯う云つてその身體を慶次に摺りつけた。慶次の身體がその動搖を受けて彼方此方に搖れたけれども慶次は手を出さなかつた。

「僕には分らない。」

「何が分らないのです。分つてゐるぢやありませんか。私にもよく分つてゐる。」

「僕には分らない——僕は歸らないとは云つたが然うぢやなかつた。僕は明日にも、今朝にも引つ返さうかと思つてゐたのだ。何うしてもお前をその儘にしてはおけないやうな氣がした。」

慶次は險しい眼で龍子を見た。然しその口許に蒼い微笑が浮んでゐた。その微笑を受けた龍子の眼が瞬間的に侮蔑の光りを含んでぢろりと動いた。龍子の心がすつと冷めたく明らかになつた。龍子はしばらく口を閉ぢてゐた。

「どんな思ひをしてお前が僕のあとを追つてきたか——家を出てから僕がどれほどの思ひをしたか——お前には比べて考へることが出來るか。」

龍子はその言葉を、男の顏から嚙み味はうとするやうに、嘲笑を帶びた目で見つめてゐた。

「お前はこんな苦痛を僕に與へたのだ。僕はもう何うすることも出來ない。僕は幸福にはなれない。」

憎むべき女だ——慶次は再びそれを心に繰り返した。

「お前は僕の前に來て自分の行爲を悔いてるのか。」
「いゝえ後悔なんかしてません。決して。」龍子は冷めたくから云ひ放つた。身體が斜になつて、少し慶次から退させた左の肩が上がつて見えた。
「後悔してゐないのか。然うか。それで凡てがお終ひだ。」
慶次は潰れたやうな聲で云つた。慶次は女の心の底に陰を卷いてゐるその敵意の情を見ることが出來たやうに思つた。この女を何うすればいゝだらう――慶次は女の髮を摑んだまゝ、ずん〳〵と深い底へ落ちて行くやうな重い陰翳に捉はれながら、指も動かさずにぢつとしてゐた。
「私は今朝父のところへ行つてしまふつもりだつたのです。」
龍子の聲が低く寂びしく響いた。慶次はふとその眼を動かした。
「あなたに殺されるのがこわかつたのです。こわくつて堪らなかつたのです。それで逃げて行かうと思つたのです。その儘で私がもしあなたの跡を追つてこなければあなたは何うするんです。」
「僕は東京へ引つ返してゐたかもしれない。いや引つ返したにきまつてゐる。さうしてお前を探すだらう。」
「さつきKの停車場であなたを見かけた時も、私はあなたに逢ひたくなくなつたのです。その儘歸らうかと思つたのです。けれども矢つ張り尾いて來たんです。」
龍子は言葉を切つて、考へた。
「この事は後悔さへすればいゝんですか。あなたの前であやまりさへすればいゝ事なんですか。」

「さうしてくれなければ僕はお前は許すことは出來ない。お前の眞實を認めることができない。」

「然うですか。私は許してもらはなくつてもよござんす。私は惡るいことをした女のまんまであなたに復讐してもらひます。」

龍子は笑はうとしたが笑へなかつた。胸が迫つて涙がぢりぢりと湧いてきた。

「あなたにどんな目にでも逢ひせうよ。あなたの好きにして下さい。私の爲た事があなたにそんな苦痛を與へたと云ふことなら、あなたからどんな復讐でも受けませう。好きにして下さい。私は決して後悔してはゐないんです自分の爲た事を。」

龍子は決心したと云ふやうな緊い顏付きをして、その口を結んだ。

心を責める？　あの事が？

龍子は自身の心に聞いて見た。然うだ。確かにあの行爲が私自身の心を責めたに違ひなかつた。自身に責めたと云ふよりは自身に恥ぢたのである。それは、自分が愛の言葉を一方に送つてゐながら、自分の行爲を二人の男のどちらへも明らかにする事の出來なかつたのを卑怯たと思つて恥ぢたのである。一人に心を惹かれながら一人にも心を殘してゐたと云ふ事は、一人を欺き、一人を弄んだ事になつた。それが私の心を責め通してゐた。私は何方へ對しても惡るいことをしたと思つた。さうして私は自分のいたづらを悩んだ。私は同時に兩方へ嘘を吐いた。私は同時に二人の魂に執着して、然うして同時にその魂を踏みにぢつた。私が一方にこの肉を許さなかつたと云ふ事は何の條件にもならない事であつた。

けれども、その行爲を、私が慶次の前に懺悔をしなくてはならないと云ふ事はない。私は決してそん

な事はしない。それは厭てある。あの行爲も、私の男へ對する愛も、みんな私のものてある。何の爲に私が慶次へ悔いの心を見せる必要があるのだらう。私はそれほどにしても慶次の心を求めやうとは思はない。私はこの人も愛してゐる――と自身に思つてゐればそれでいゝのてある。私は默つてゐればいいのだ。後悔せよと云ふやうな事をこの人から强いられるのは侮蔑だと思ふ。私はいやだ。慶次から何も許してもらはうと思はない。

龍子の考へがだん〳〵重たくその心の底に沈んて行つた。家を出る時、あんなにも慶次を戀ひしく思つた事を繰り返して悲しさが迫つた。涙がとめどなく流れた。復讐の爲得るまで、自分は慶次の傍にぢつとして見てゐてやる。どんな復讐でも受けやう。今朝のやうにそれを恐れて男の手から逃げやうと思ふやうな卑怯な事は決してしまい。復讐かくるまで私はぢつとしてゐる。さうして默つて受ける。さうされた方が自分の立ち場が徹底して心持がいゝ。その方がいゝ。――龍子は然う思つた。

さうして、あしたの朝早く、一人して東京へ歸らうと龍子は決めた。

二人は長い間默つてゐた。風が廊下の雨戸をガタ〳〵ふるはせた。痩せた女が用を聞きに來て直ぐ出て行つた。

「何故あんな事をしたのだ。」

慶次がふつと迸るやうな聲て云つた。龍子は振向かなかつた。この男にもう口を交く用はないと思つたからてある。

「可哀想だと思つてくれ。僕を。」

慶次の眼から涙が落ちてゐた。慶次は腕組みをしたまゝて嗚咽した。

慶次はまだぐつすり寝てゐた。

六

龍子は起きて廊下に立つて外を眺めた。向ふに停車場の家根が見えた。その家根の後に山が見えた。空を切つてうねつた山の輪廓が龍子の眼のさきを遮つてゐた。空が鉛のやうに曇つてゐた。龍子は山を見た。それから、山と家根の間から一と筋濃い烟りが少し右にからんで立ち騰つてゐるのをぢつと見た。彼女の心は陰欝であつた。あたりの風物と同じやうに、たゞ暗いものばかりが其の心を取り卷いてゐた。龍子は、また室内にはいつて障子を閉めた。

汽笛と、車の響音が遠く空を貫いて消えていつた。――男か女か分らないやうな小供の聲で、訛りの交ぢつた音で唱歌をうたつてゐるのが、直ぐ階下から聞こえてきた。周圍の室は昨夜のやうにひつそりしてゐた。

龍子は慶次の方を見ないやうにして、夜着の裾のところに懷手をしたまゝて坐つてゐた。さうして、男の涙を見たあの瞬間からその情が夢のやうにくづれてしまつた事を考へてゐた。龍子は唯胸が閉ぢた。色も彩も消え〳〵になつたやうな寂しさが、打破られた戀のこゝろの上を果敢なく綴つてゐるのを彼女は自身に感じて、其れを靜にながめた。

龍子はそこに然うしてはゐられなくつて、又立つた。立つて後の窓をあけて外を見た。この旅宿の一劃を廻つて流れる小さな**ながれ**が直ぐ目の下にあつた。きれいな水であつた。水がちろ〳〵と震えて流

れてゐた。

この水は何故あんなに震えて流れるのかと龍子は思つた。龍子は又空を見た。空はやつぱり鉛のやうに曇つてゐた。それで身體をずつと延ばして、塀の外の町並みを眺めた。家號を假名で書いた小料理屋の紙行燈が一とつ見えた。こゝの通りは、昨夜慶次と歩いたあの狹い横の通りなのだと龍子は思つた。こゝを眞つ直ぐに行けば小さい橋がある。あの橋の上で、雲ににぢんだ半月を見付けたのだ――寒い風が肌を刺すやうに吹いた。龍子は窓をしめて、又、暗い室内のなかに坐つた。黄色い夜着の縞と、脱ぎ捨てた辨慶のどてらの鼠いろが龍子の眼に、すぐ欝陶しく映つた。

龍子は直ぐ汽車に乘つて東京へ歸りたくなつた。慶次の傍に一時間でもかうして坐つてゐる事が彼女には堪らなくいやな氣がした。それで慶次を起さうとして、そつちへ眼をやつたが、慶次のよく眠つてゐるのを見ると、この儘にしておいて、自分だけ此家を出やうかと云ふ考へがおこつた。龍子は階下におりて行つて、湯殿で髮を結んだり顏を洗つたりした。

「雪が降つてきた。」

「雪だな。」

然う云ふ聲が帳場の方でしてゐた。

二階に上つて來た時に、龍子は廊下に立つて雪を見た。つひ今まで何も見えなかつた透徹した空間が灰のやうにこまかい雪で埋まつてゐた。雪は風に飛びながら降つてゐた。

次ぎの汽車が出るまで、まだ二時間も間のある事を階下で聞いたので、龍子はその時間を何うしてま

ぎらさうかと考へながら、室内にはいつて衣服を着直したりした。慶次が起き返つて龍子の方を見た。
龍子はそれに氣が付いたけれども默つてゐた。慶次は床をはなれて、其れなり廊下の外に出て行つた。自分の何かしやうとする事を、妨げる憎い影のやうな氣がして、龍子はその後を見送つた。
「何うしても歸る。」龍子は然う決めて羽織の紐をむすんだ。

龍子が今から直ぐ東京に歸ると云ふのを聞いて、
「然うした方がいゝ。」と云つた儘慶次は逆らはなかつた。
「あなたは？」
「僕は二三日妹のところにゐやうと思ふ。」慶次は沈んだ聲で低く云つた。
慶次はさつき目が覺めてから、四五日龍子といつしよに旅て日を送りたいと云ふ事を考へてゐた。龍子もきつと其の企てをよろこぶだらうと思つた。旅にゐて心を紛らしたなら、自然自分の嫉妬も薄らぐだらう。龍子も自分の執念に煩はされることがなくつて、お互に暫してゞも物忘れをした何事もない日に蘇ることができるに違ひない――慶次は然う思つて、新らしいよろこびに滿ちた眼を開けた。さうして床をはなれた――
それが思ひがけなく、龍子から東京へ歸ると云ふ事を聞いて、覆るやうに忽ち不快な聯想が起つた。疑惑の黑い雲がその胸にひろがつて、神經が脅かされるやうに戰えた。慶次の腋の下から冷めたい汗が流れた。

慶次は窪んだ眼を伏せて、何か心に編んでゐた。

「ぢや然うなさい。私は家へ歸つて待つてます。」

龍子の聲が、平生のやうに明快に聞こえたのにも慶次は反感が起つた。慶次は返事をしなかつた。

二人は又、繕を並べておそい朝の食事を濟ませた。時刻はもう午を過ぎてゐた。女が障子を開け閉てする度に、外の雪が見えた。雪は見る間に降りつのつてゆく樣な氣色を見せた。

「いつたん、他人を戀した女だ。」

慶次は絶えず斯う思ひを繰つた。——

龍子は無言でゐる自分の頭のうちに、ある煩惱が暗い陰を曳きながらそつと匍ひ擴がつてゆくのを感じてゐた。其の暗い陰のうちに、龍子の情緒をそゝる男の聲がひそんでゐた。光りを鬱陶しさうに見るきれいな男の眼がひそんでゐた。龍子はそれを自身の眼で追ひ除けやうとするやうに、時々空を見て目叩きをした。龍子の胸は、だん／＼捨てがたい惱みに埋もれていつた。

「この雪に歸るんだね。」

突然、慶次の聲がした。龍子はぼんやりとして「えゝ」と云つた。

「もう一日此處へ宿つて行かないか。」

急いて、女の心に縋らうとするやうに、その聲がおのゝいて聞こえたけれ共、龍子は自分の心で其れを強くはね返してゐた。さうして、

「いゝえ歸ります。あなたは後からいらつしやい、二三日宿るなら宿つて——」

と慶次の顏を見ないで云つた。

慶次は何も彼も思ひ切つたと云ふやうに立上つて、窓の方へ歩いて行つた。そこを開けて、降りしきる雪を眺めてゐた。

先刻、龍子がそこを眺めて昨夜の情景を追想したやうに、慶次も軒の低い茶屋の並んだ町を見て、昨夜の事を繰り返した。自分はあの時、女を振り捨てゝ眞つ直ぐに行つてしまふやうなつもりでゐた。自分の後を追つてきた女の顏を見て、意外には思つたけれども、その女には再び物を云はないつもりで、此の町を歩いてゐた。自分は女の顏を見ると直ぐ女を捨てる覺悟をした。

慶次はその時からの自分の心の徑路をもう一度引つ繰り返して辿つて見た。そこには、女の手でぐんぐん引つ張られて行つた未練な自分の姿が殘つてゐた。自分に對しては、肉のほかは何も持たないやうな女の姿が殘つてゐた――

「僕は直ぐ妹のところへ行かう。」

慶次は窓を閉めながら斯う云つた。窓から吹き入つてくる寒い風に、身震ひしてゐた龍子が蒼い顏を上げて慶次を見た。

何となく、これぎりで別れてしまふやうな氣がして、龍子はついと悲しさが迫つたが、それを抑へて微笑した目で慶次が自分の前にくるのを迎へてゐた。笑つた目の影に、微な僞りの皺がたゝまれてゐた。

「お前は直ぐ行くのか。」

「まだ一時間ぐらゐ間があるでせう。」

慶次は女を呼んて、妹の住むA町まて車を頼んだ。慶次はそれぎりて物を云はずにゐた。

「二三日したら、ほんとに踊つていらつしやい。少し遠のいてゐた方がいゝてせうよ二人は‥‥あなたもその間に考へて下さい。私も考へるから。」龍子がこんな事を云つた。

龍子は慶次からはなれて、しばらく一人てゐたいと云ふ望みがいつぱいなので、却つて其れを都合よく考へた。今慶次とはなれて、一人になつてからの自分の前に、初めてはつきりと處決の姿が横はるやうに思はれた。自分は其れを前にして誰にも煩はされずによく考へることが出來ると思つた。その處決の姿がどつちへ現はれるかは分らなかつた。慶次への別離？　新らしい戀への別れ？　龍子は早く一人になりたいと思つた。この紛亂した感情を打鎮めなくてはならないと思ひつめた。彼女は沈み込んだ姿をして、慶次の前に坐つてゐた。

車が直ぐに來た。慶次は外套を引つかけながら「ぢや。」と龍子に挨拶した。龍子は會釋をしたけれども、無暗に悲しくなつて言葉が出なかつた。自分の面に注がれた慶次の眼がちらりと光つて見えた。慶次は室を出て行つた。

七

列車は雪を衝いて走つてゐた。吹雪が見える限りの萬象をどこかへ引つ攫つて行くやうに見えた。森も、山も、原も、木も、吹雪に捲き上げられてはその姿を消していつた。時々河の流れが其の吹雪を破つて、鑛物のやうな結晶した黒い色を點出してゐた。龍子は窓に顔を近寄せて、さかんな雪の姿を順々に見送つていつた。窓の外にこまかい雫が垂れてゐた。

どの停車場でも、人々が雪のかゝつた外套にくるまつて、彼方此方してゐた。吹雪を蹴つてきたと云ふやうな驕つた雄大な様子振りて、列車が一々停車場にはいつていつた。さうして又雪を衝いて出てゆく列車の意氣横溢した姿を、停車場の人々は目を上げて一様に見送つてゐた。誰れの眼も生き〳〵した力に滿ちた光りを漲らしてゐるやうに龍子に見えた。

何かをぢつと見詰めてるやうな眼をして、考へに耽つてゐる龍子は、時々窓に顔を寄せては其れ等の景色に心を奪られてゐた。暖いスチームが彼女の足の爪先から肌に馴れまつはつて、クッションに身を落してゐる彼女の全身の血がぽつとりとしてゐた。この室には龍子の他には誰れもゐなかつた。

龍子は大膽に、ある思ひの中に其の心をすつかりと沈めてゐた。その思ひは、彼女の安らかな心を柔らかに、こわ〳〵に、片端から食んでいつた。輕い微笑が淡く彼女の血潮に動揺を與へてゐた。

「私を捨てないで下さい。どんな事があつても。きつとです。」

斯く云ふ男の聲が若やかに響いた。其れは誰れの聲であつたらう? 龍子の血が、また柔らかに揺いだ。

「捨てやしません。あなたを捨てる時があつたら、私は自分を捨てゝゐるでせう。」

龍子の耳に、又女の聲が若やかに響いた。其れは誰れの聲であつたらう?

女は鳩を袂て抱いてゐた。二人の周圍に集つてきた澤山な鳩の中の一羽が、不意に女の胸に飛びつい

て絡んだのであつた。女はその唐突な鳩の愛におどろきながら、しつかりと抱き縮めて鳩の嘴に接吻をした。

「早く、そのお米を出して頂戴。」

女が鳩をいたはりながら、その小さな頭を撫でながら、男に云つた。

男は硝子の蓋をとつて、其の中から米と豆を盛つた小さい土器の皿を取り出して、女の抱いてる鳩の傍に持つていつた。女はそれを受取つて、鳩に食べさせてやつた。男も嬉しさうに覗いてゐた。

「可愛いゝ鳩ですね。」

「然うですね。」

澤山な鳩の群れが、泳ぐやうに二人を取り卷いて、くく、くく、とないてゐた。二人は鳩といつしよに遊んでゐた。その歸り途に男が云つた言葉があれてあつた。女が返事をした言葉があれてあつた。

龍子の思ひ出が、次ぎから次ぎと美しい色を含んだ靄の中に纏れては浮んでいつた。悩み深い男の心が、龍子の心に執拗くまつはつてきた。この頃になつて一層女から離れまいとして、しつかりと纏ひついてきた男の情念が、龍子の胸にいたいたしい哀れさを帶びてはつきりと映つてきた。——欝愛な眼をもつた男の大きな眼が、ふと彼女を覗くやうな氣がして、龍子ははつとした。誰れの眼であつたか、そのまぼろしい眼に覺えがなかつた。龍子の胸がかすかに動悸を打つた。自分はいま、眠つてゐたのではないかと思つた。然う思つて、龍子はいま迄の意識を探るやうに振り向いて見た。血を搔がしたある思

ひが、夢でなく、彼女の腦裡に色を濃くして殘つてゐた。彼女はそれと心付いた刹那にたまらなく煩はしい氣がした。然う云ふ思ひに捉はれた自分が鬱陶しくいやな氣がした。けれども、然う思ふ傍から男の情念が、しみ／＼と哀れ深く彼女の心を襲つてきてはなれなかつた。龍子は窓の外を見た。雪が彼女の眼許を掠めて横に吹き過ぎて行つた。

中途から、この室に乘客が增してきた。煙草の煙が匂ひ強く室に流れた。新聞を返す音がひゞいた。太い男の話聲も龍子の耳に賑やかにはいつた。灯りが親しみ深い色を落して室内を照らしてゐた。外はだん／＼に雪の光りを殘して暮れて行つた。

ふと、龍子の心がぱつと開いて、急にその周圍が華やかになつていつた。自分の身體がいまそつくり自分のものだ。自分の精神がいまそつくり自分のものだ。と云ふ意識が彈くやうに強く起つた。彼女はまるで、この瞬間を何うしていゝか分らないほど、その自由な氣分が嬉しくてたまらなかつた。何を思つてもよかつた。何を爲てもよかつた。誰れを捨てゝもよかつた。誰れにそむいてもよかつた。誰れもの情念に自分の心を煩はされなくてもよかつた。自分を思ふものは、自分を思ふ人の心であつた。欺かれたと思ふものは、欺かれたと思ふ人の心であつた。弄ばれたと思ふものは、弄ばれたと思ふ人の心であつた。――龍子はこれからの自分の生が自分の心のまゝに動いてゆくやうな氣がして、大きく、ひろくその心が昂つた。

東京もひどい雪であつた。汽車から下りた人たちは、停車場の一角に群集して、てん／＼に車を求めてゐた。雪の中に屯ろしてゐる車臺は、どれも前幌を通して蹴込みのなかまで雪がいつぱい降り積つて

ゐた。車夫はそれを拂ひ〳〵して人を乘せてゐた。「白金三光町――」「神田の錦町――」然う云つて苛い帽子を冠つた世話人が車夫を呼んでゐた。吹つ込む雪を避けながら乘客たちは難義な姿をうろつかせてゐた。

龍子はつい其所の郊外へ行く電車の停車場まで車を求める譯にもいかなかつた。龍子は雪の中をそこまで驅けて行つた。僅の間に、髮も、きものも、足袋も、雪に濡れた。

電車が彼方へ着いてからも、龍子は自家へ行くまでの道を、雪を浴びながら歩いて行つた。郊外の道は布のやうに白かつた。歩を運ぶ度に駒下駄が着物の裾を咬へてざく〳〵と雪の中に埋まりつゝ行つた。全身に雪がかゝりながら、顏だけに冷めたいものがちら〳〵と降りかゝるのだけが感じられた。彼女の身體は温かであつた。時々、彼女は空を仰いだり丘から彼方を見渡したりした。雪の光りが何所までも展がつてゐた。こまかに際限なく降りしきつてる雪がその光りを通してぼんやりと見分けることができた。雪の降る下に、雪の積つた家根が薄つすりと浮んでゐた。

龍子はいつまでも、斯うして、ほつつき歩いてゐたいやうな氣になつた。駒下駄に力を入れては雪をづかりと踏んで蹴つて歩いた。わざと深い呼吸をしては吹きつける雪に反抗した。然し、家へ着く頃には、その自暴な氣分が凝結してしまつて、息が切れて、その儘氣が遠くなつてゆくやうな、何とも云はれないいやな心持になつてゐた。閉まつた門の戶をあけさせて、その入り口の笹の雪がばらりと顏にかかつたのを知りながら、玄關に腰を下した時は、半分氣を失つたやうな脉搏がだん〳〵消え〳〵になつてゆくやうな氣持の中に、ぼつとしてゐた。

濡れたものを一切身體から脫つて、髮をといて龍子は自分の室へはいつた。室には明りがあか〳〵と點いてゐた。昨日の朝彼女がすべてを捨てゝ出やうとした時と同じ位置に、さま〴〵なものがちやんとして動かずにゐた。鏡臺の上の油の壜も、細い肩をすぼめてその隅に明りを受けてゐた。彼女は泣きたいやうにこの室のなかのすべてが可愛いかつた。

「お前たちはなんにも知らないだらうが、私は昨日から今日へかけて、生血を絞り盡すやうないろ〳〵な思ひをしてきた。でも私は又此室へ歸つてきた。」

龍子はこんな事を思ひながら室の中を見廻した。さうして女の拵へてくれた炬燵の中にはいつて寢た。久し振りて自分の友禪の蒲團のなかに包まつたやうな氣がした。自分の肌に馴染んだ夜着の柔らかさが、慰めるやうに彼女の身體にしつくりと纏繞つた。龍子は何も思はずに、明るい電氣の下で安々と眠りに就いた。

餘つ程更けた頃に、龍子は枕頭で何か音がしたので目が開いた。それは女が手紙を持つて來たのであつた手紙は宏三からよこしたものだつた。

僕は一時から五時過ぎまでお待ちしました。どうしておいでがないのかと思ひ思ひ、よもやに惹かされて、一時間一時間と待ちくらして、とう〳〵五時過ぎまでお待ちしましたがおいでがありませんでした。何うなすつたのかと思つて氣になつてをります。御病氣ではないでせうか。直ぐに御返事をお聞かせ下さい。さもなければ明日、もう一度彼の停車場でお待ちします。いらつしやれるなら、いらしつて下さい。僕は待つてゐます。

然う書いてあつた。

今日はその日であつた。今日よく晴れてゐたら郊外を散歩する約束をしたのであつたと、龍子は思ひ出したが、手紙はそこに投げ出しておいたまゝて、又直ぐ眠つてしまつた。

八

翌朝龍子は割合に早く目が覺めた。外は晴れて、日光が雪の上に輝いてゐた。雨垂れが騷々しく家の周圍に音を起してゐた。

龍子は身體に熱があつたけれ共床を出て窓から青い空を見た。青い空はすつかり自身の口から吐き蒜してしまつた白いものを、遙に見下して笑つてゐた。その面にいつぱいに光りがあふれてゐた。龍子はその光りを眩ゆく思ひながら、鏡の前に行つて自分の顏を映して見た。昨日も一昨日も、鏡に顏を映した時はあつたけれども、しみ〴〵と自身の顏をよくは見ないやうな氣がした。その顏は慶次のやうにやつれてはゐなかつた。眼に暗い影はあつたが、頰の肉も腮の肉も豐つくりと附いてゐた。血の色もきれいてあつた。龍子は自分の手てその頰から腮の肉を撫てゝ見た。

しばらく龍子は明るい光線の射してゐる坐敷の中を、寢衣のまゝて彼方此方と歩き廻つてゐた。ふと昨夜の宏三の手紙が目に入ると、それを取り上げて又讀んて見た。昨夜は何とも思はなかつた事が、今朝はひどく氣の毒に思ひ返された。雪の降る寒い停車場に、四時間も五時間も待ちつくしてゐた宏三の姿が、彼女の眼にあり〳〵と映つた。

龍子は打つ捨つてはおけないやうな氣がした。今日も、きつと又自分を待つてゐるのかもしれない。

自分はそれを何うにかしなければならないと龍子は思つた。けれども然う思ふ傍から龍子の心にある殘忍な意地の惡るい捨鉢な微笑が、忍びやかに浮んできた。

打つ捨つておけと彼女は思つたのであつた。彼女はこの手紙の一句一句から人の思ひを辿るのも面倒くさく、煩さく、自烈度かつた。

「何うでもいゝ。何うでもいゝ。」

と龍子は胸の底で叫びつゞけた。これに就いて考へることは、丁度、露出した肉の上に物がひつたりと附着してくるやうな感じをさせた。

龍子は官覺的にその手紙を揉み苦茶にして端からぎり〳〵と噛んでいつた。さうして、自分の仕出來したことが、仕出來されたまゝて橫はつてゐるのを、自分で嘲笑しながら冷めたく眺めた。龍子はそこいらを開け放しておいて、再び床のなかに入つた。明るい光線が、粉を振りかけるやうに彼女の眼の周圍に注ぎ入つてきた。

龍子はうつとりと直ぐ眠つた。さうしてまざ〳〵とした夢に入つていつた。それは全く夢とは思はれないほど明るく幻の姿が動いてゐた。

龍子は脊の高い檜葉垣に添つてある路次をはいつて行つた。自分は入新井の宏三の家へ行くつもりで歩いてゐるのであつた。新築の家が五六軒、東に向き北に向きして一と纒めに建つてゐるその一廓の、突き當りの格子戸の宏三の家も、事實の通りにその夢の上に現はれていつた。龍子は格子の前から裏に廻つて井戸端の方を見た。その井戸端に明るい日が射してゐた。そこて宏三の母親が洗濯をしてゐた。

龍子が聲をかけると母親は自分の前に來てどうしたのかさめ〴〵と泣いた。

龍子も悲しくなつてしばらく泣いてゐたが、自分は何時の間にか宏三の部屋に入つて、宏三と向ひ合つてゐた。宏三が頻りに立つたり坐つたりしてゐた。その素足があり〳〵と龍子の眼に映つた。

龍子はひどく又泣いた。聲を上げて泣いた。

「あのお母あさんを見ると私はいつても斯う悲しいんです。ほんとに何時見てもいゝお母あさんね。」

龍子は斯う云つたやうな心持て、いつまでも泣いた。さうして少しも泣いてゐない宏三が龍子には憎かつた。二人はその母親の事て何か云ひ爭ひをした。それは慶次の母親だと宏三が云つた。

けれども、龍子には宏三の母親としきや思はれなかつた。その顏も宏三の母親とおんなじ顏てあつた。たいへんに暗い隅の隅の方に、その母親の坐つてゐる影が見えた。龍子は其所へ行かうとして立つたが、ちつとも歩けなかつた。龍子は「お母あさん。お母あさん。」と呼んだけれども、その母親はだまつてゐた。宏三は其の母親の傍に行つて何か話してゐた。

龍子は宏三がその母親と二人だけて話しゐるのが口惜しい氣がした。それて自分が何か云はうとすると宏三がいつの間にか自分の傍にゐて、自分の手を取らうとしてゐた。龍子はそれを頻りに拒まうとしてゐると、母親の顏と姿が直ぐ目の前に大きく出てゐたので、龍子は嬉しさに我れ知らず聲を立てながらその母親に縋らうとした、龍子の夢はそこて破れた。

何うしてあの母親を夢に見たのか龍子には分らなかつた。龍子は明るい坐敷の中を目を上げて見た。そこに夢て見た母親の姿がはつきりと坐つてゐるやうに思はれて、なつかしいやうな氣味の惡るいやう

な思ひをした。

その時から龍子の身體に一層熱が加はつて、龍子は直ぐにうと〱したが、午を過ぎた頃に龍子は客が來たと云つて起された。來た人は宏三であつた。龍子は床を出て宏三に逢つた。

階下の坐敷に待つてゐた宏三の顏は蒼白かつた。宏三は何か急いてゐるやうな表情をして落着かない眼の配りかたをしてゐた。龍子の顏を見ると淋しく笑つて會釋した。宏三はマントを着たまゝで坐つてゐた。

「私は昨夜一と晩も寢なかつたのです。」

宏三は震えを帶びた聲で然う云つた。龍子は着物を曳き摺つたまゝて、其の前にしばらく立つてゐた。

「どうしました。」

龍子は別な事を云つてゐるやうな心持て宏三の顏を見た。急に悲しさが漲つてきたと云ふやうな顏をして、宏三は下をむいて見詰めて物を云はずにゐた。

その表情が龍子の眼に映つた。この人は何をそんなに悲がつてゐるのだらうと思つた。夢て見た宏三の顏が彼女の頭に浮んできた。龍子はやつぱり、ぼんやりと立つた儘て宏三の顏を見てゐた。

「上がつては惡るいと思つたんてすが、我慢ができなかつたんてす。――何うして昨日おいてにならなかつたんてす。今日も。」

宏三は言葉を切つて龍子を見上げた。病氣らしいやうなその容態を見ると、又急にそれが氣になつ

た。

「どこかお惡るいんですか。」

「え丶、少し。」

龍子は宏三の前に坐ることがてきなかつた。その前に坐つてしまへば、自然と定まるものがあるやうな氣がした。それて何時までも立つてゐたが、今度は座敷の中を着物を曳き摺つたまゝて歩き動いてゐた。

「手紙ても下さればこんなに心配はしないのに。」

宏三はその姿を見守りながら呟いてゐた。さうして、直ぐに立つて歸らうとした。

「歸るんてすか。」

「え丶。これて安心しましたから。どんなに心配したか知れないんてす。ほんとに御病氣なら大切になすつて下さい。」

宏三は龍子が自分の前に來るのを立つた儘て待つてゐたが、龍子は遠くにゐて何も云はずに宏三の顔を眺めてゐた。

「急に上がつたりして勘忍して下さい。ね。」

宏三は、自分の突然の訪問を龍子が氣に障へてゐるのだと思つた。それを許して貰はうとして甘えるやうに斯う云つた。

「惡るかつたてせう。」

「いゝえ。」

龍子は頭を振つたまゝ遠くに立つてゐて動かなかつた。

「ぢや歸ります。」

宏三はひどく殘り惜しさうな顏をして室を出やうとした。と、急に、

「お待ちなさい。そこまで送つて行くから。」

と龍子が大きな聲で云つた。龍子はその儘二階に上つて行つた。

龍子はぢきに支度をしておりて來た。考へ〳〵歩いてゐるやうに、一段々々階子をおりてくるその足取りが鈍かつた。

「加減がわるいのでせう。外へ出てはわるかありませんか。」

宏三が、さも心配だと云ふ思ひをその言葉の調子にこもらしてゐるやうな云ひ方をした。さうして龍子の顏を覗くやうにした。龍子は返事をしないで先きに立つて外に出た。

雪溶けの泥濘道を氣を使つて歩いてゆくので二人は、やゝ長い間默つたまゝて過ぎて行つた。龍子はこの儘何も云はずにゐて停車場まで送つて行かうと考へた。何事も手紙に書いて送つてやればいゝ。然う思ひながら龍子はふと足をとめて、宏三の方を見た。宏三は直ぐにその方へ顏を向けて、龍子の何か云ひ出すのを待つやうな氣色を見せた、その唇が赤く美い色をしてゐた。帽子を脫つてゐたので、長い濃い髮に日光がきら〳〵と射した。龍子は思はず宏三に向いて笑みを漏らした。宏三は其れに微かな笑ひを返した。

が、その笑ひを見た瞬間に、龍子の胸に忽ち暗欝なかげがさつと閉かつた。

「私たちはもうお別れしなくちやならないかもしれない。」

龍子は斯う云つてしまつた。宏三はある豫示を得たやうな閃きを含んだ眼をして龍子を見返つたが、龍子はその先きを續けなかつた。

二人は、戸をおろした掛茶屋のところを廻つて、丘の上に出た。その柵のところに立つて龍子は西の空を眺めた。空が見える限り晴れ渡つてゐた。雪　反射が目に痛かつた。小料理屋の紙行燈の出てゐた町の空も、晴れてゐるやうに見えた。龍子は一昨日の烈しい風の中をこゝを驅けて行つた自分の姿を振り返つて見て、苦いやうな痛いやうな思ひに刺された。

「何かあつたのぢやないんですか。」

宏三が斯う云ひながら龍子の傍に身をよせた。

「これぎりお別れするやうな事があつたら、あなたはいやですか。」

龍子は遠い西の空を見ながら聞き返した。

「えゝいやです。」

宏三がはつきり云つた。

龍子は何も彼も云つてしまはうか何うしやうかと惑つた。けれども云ふことができなかつた。一昨日からの事を、すつかり話すことはできるにしても、自分が慶次を追つて行つたと云ふ事を宏三に聞かせるのがいやてあつた。そこに思ひがけない戀の虚勢のあることを彼女は心恥かしく思つたけれども、何

うすることもできなかつた。龍子はやつぱり西の空を眺めながら考へてゐた。

「あなたにお目にかゝることがいやになつたんです。この頃、むやみと。」

龍子はわざと皮肉に云つた。殘忍な、捨鉢(すてばち)な感情がだん／＼に兆(きざ)して來た。龍子は嘲弄的な笑ひを胸の底に忍ばせながら、顔を宏三の方に振り向けなかつた。

「何故そんなことを仰有るの。」

宏三は、其れをほんとうにしない様な調子で、静に云つた。いつものやうに、女の手の内に毬のやうに媚びやうとする男のおとなしい感情がそこに現はれてゐた。それが龍子の神經的になつてる氣分にさわつて、逆上するやうにかつとした。龍子は歩きだした。

「停車場まで送つて行きませう。」

「それよりも、今の事を聞かして下さい。何故然う云ふことを仰有るのだか。」

「譯も何もないのです。」

と云つたが、思ひ返して、

「あの人はすつかり知つてるんです。」

と亂暴な調子で拋り付けるやうに云つた。

「然うですか。」

突嗟に云つた宏三のその聲に、不安と絶望が交ぢつて響いた。行く道に、日光が柔らかくほんのりと照りつけてゐた。時々、思ひがけないところから雪の雫がばらりと落ちたりした。宏三はその話をすつ

かり聞かうとしたが、龍子は昨日のことも一昨日のことも口に出さなかつた。

二人の間が破れた――然う云ふ悲しみが、あとから／＼と宏三の胸を突いた。宏三はそれを龍子にも悲しんでもらひたかつた。それをせがむやうに、宏三は龍子の方を強く見た。さうして、その顔の上に少しでも感情の動いた色を認めたいと思つたが、龍子は冷めたい――寧ろ憎々しいやうな硬い感じのする顔付きでいつまでも口を開かなかつた。

「何かおつしやらずにはゐなかつたでせう。野代さんは。」

「えゝ云ひました。私は酷い目に逢ひました。殺すと云つたのです。」

その言葉から、宏三には二人の爭ひが聯想された。何事にもまだ練磨されてゐない宏三の初心な若い心が、恐しい一撃に逢つたやうに一時に戰えた。「殺す」と云ふ一とつの言葉を、宏三はよく味はうことさへ恐しかつた。然う云ふ恐しい惡魔の手が、自分の爲にこの龍子の上に覆ひかゝらうとは宏三には思ひもよらなかつた。

二人は默したまゝで歩いて行つた。さうして停車場にはいつた。龍子は別れやうとした。

「私はいやです、この儘でお別れしては。」

宏三はその手に取り付くやうにして、龍子をはなすまいとした。

「何うすればいゝのでせう。あなたは何うなさるのです。――今日はお留守なのですか。」

龍子はだまつてゐた。

「ねえ龍子さん。私は覺悟をしてゐるのです。私はもう親も家も思ひはしません。私はあなたの思ふ通

りになります。あなたにはなれるのはいやです。」

宏三は彼方を向いて、白い半巾を出して涙を拭いた。其れを袂に入れてまた龍子の方を向き返つた。眼許が赤くなつてゐた。龍子はその眼を見入つてゐたが、龍子の顔には何の感動の色も出てゐなかつた。

「到底二たつの道を同時にいらつしやる譯には行かない。どつちかを取らなければ——。」

宏三は云ひながら下を見て立つてゐた。龍子は停車場を出て行つて柵のところから方々を眺めてゐた。宏三に對する嫌惡の念が募つて來て、彼女はたまらなくなつたからであつた。何故そんなに宏三が煩さく厭はしくなつたのか彼女自身にもわからなかつた。

龍子は遠い空に眼も心も放つてゐた。此處からこの儘に何處かへ行つてしまひたかつた。自分の仕出來した事のなかからすつと逃れて行きたかつた。それは卑怯でもなんでも、逃れてゆくより他に道のないやうな氣がした。男の執念深いあの思情も、誰れが燃やさせたのでもなかつた。それをひきだしたものは龍子であつた。龍子が男の心に絡んでいたづらにひきだした其の戀は、今は何うすることも叶はないやうに燃え立つてきた。龍子はそれをはつきりと、男の心から抉りだしてきたやうに現在の目の前で見た。

然し、「私は惡るいことをした。」斯う自から省みることさへも、もう彼女には煩さくてたまらなかつた。

「煩い。煩い。」

彼女は自分の髮を掻きむしりたいやうに思ひながら柵にしつかりと捉まつてゐた。
「何うすればいゝのでせう。」
宏三の聲が耳近く聞こえた。
宏三は唯斯う云つて龍子に急いた。二人の間の破れ――それは宏三には堪へられない悲しみであつた。龍子が自分の手に逃れて來てくれるより他には、宏三にはもう待つこともなかつた。それが唯一とつの願ひであつた。さうしてそれに由つて、この戀は一層濃く強く實際的に結ばれるのだと思つた。宏三は、龍子が其れを決心しかねてゐるのではないかと思つた。
「何を考へていらつしやるのです。」
龍子はだまつてゐた。時々、後ろを停車場へ行く人が通つた。その足音が、二人の心を外へ向けさせて氣を散らさせた。二人は何氣ない顔で空を見たり、前面を見たりした。
「ねえ。何を考へていらつしやるのです。あなたを殺すと云ふなら私も一所に殺されます。私はどうしてもあなたとはなれるのはいやです。そんな事はできません。もう私には。」
龍子の胸の底から突然に涙が催してきた。けれども龍子はそれを唇を嚙んで抑へてゐた。
「私はこの儘歸ることは出來ません。」
宏三は然う云つた。
電車が行き違つて通つて行つた。龍子はその儘默つて歸らうかと思ひながら、初めて振り返つて宏三の顔を見た。宏三の顔には龍子の心を惹きつけずにはおかないやうな哀れな悲しみが漂つてゐた。龍子

はまた首を垂れて目を外らした。

日光がよく輝いてゐた。その光りが幸福であつた。

「いつまで斯うしてゐても仕方がないでせう。今日はこれでお別れにしませう。」

龍子が優しく云つた。

「あなたは何うなさるのです。私はそれが心配ですから。」

「なにも心配をなさることはありませんわ。手紙でよく申し上げますから。」

龍子はそれだけ云つた。父のところへ行かうと決心したことが、最もいゝ順路な手段のやうに龍子の心に思ひかへされてゐた。明日にも、今日にも、自分はやつぱりすべてを捨てゝ遠い父のところへ行かうと考へてゐた。龍子の心に情趣を含んだ淡い悲しみが流れていつた。

「ぢや御機嫌よく。」

龍子が然う云つた時に、宏三が、ふと物に驚いた聲を立てた。

「野代さんでせう。」

宏三が息をつめるやうにして云つた。龍子は振返つて見た。慶次が昨日の姿のまゝで、駒下駄で泥の道を突つかけながら一二間先きを歩いて行つた。慶次は此方を向きもしなかつた。

「氣が付かなかつたんですか。」

龍子は宏三に聞いた。

「いゝえ。あなたを見て行きました。私の顔も見ました。」

宏三の顔が蒼味を帯びて、その眼が異様に輝いてゐた。宏三は慶次の後姿から目を放さなかつた。
「ぢやあなたはお歸りなすつた方がよござんす。」
龍子は強いて押付けるやうに宏三に向つて促した。
「野代さんはまた何か仰有るでせうね。」
「かまやしません。」
「私は野代さんにお目にかゝります。」
宏三が決心したやうに力を入れて斯ういつた。
「何のために。」
龍子は冷めたい眼で靜に宏三の顔を見た。
「あなたはお歸りになつた方がいゝんです。」
龍子は、宏三が次に逢ふと云つたその言葉から、ある潜越の意味の侮辱を感じて、心が不快に曇つた。
「お歸りなさい。心配をすることはありませんから。」
龍子は口だけでなだめるやうに云つた。
「ほんとうに手紙を下さいますか。私は心配ですから。」
龍子は默つてうなづいた。宏三は龍子の手を取つて、何か訴へるやうに龍子の眼に見入つてゐたが、言葉には出さずに龍子の傍をはなれた。龍子は宏三をその儘にして舊の道へ引つ返して行つた。

思ひがけなく、慶次が道の角に立つてゐた。龍子はその顔を見た。殺氣を含んだその眼に打つ衝かつた時、龍子は其れをぢつと見返しながら、默つて行き過ぎやうとした。

「何をしてゐたんだ。」

慶次が後から聲をかけたが龍子は返事をしなかつた。

「どこへ行くんだ。」

慶次が追ひすがつて龍子の腕を押へた。

「家へ歸るんです。」

龍子は顔を近々とよせて、その慶次の顔をぢつと見た。胸がずん／＼と彈んで、血が荒く潮のやうに身内を動搖するほどその顔を見てゐることが恐しかつた。それをぢつと我慢して、龍子は慶次の顔を睨みつめた。

「お放しなさい。何をするんです。」

龍子はその手から腕を拔かうとしてもがいたが、慶次ははなさなかつた。二人はその儘ずん／＼歩いて行つた。

「汝が云つた通りに燒き殺してやる。」

慶次はうめくやうに低く云つた。その息が大きく彈んでゐた。龍子は默つて引きずられて行つた、恐怖が全身を襲つたけれども、龍子は非常な力でそれを押へつけた。

「どんな目にても逢ひます。逢はしてごらんなさい。」

自分の人生に然う云ふ奇蹟がおこるのだ――龍子は冷嘲的に然う思ひながら空を見た。靑い空は幸福に輝いてゐた。

（をはり）

…京堂
上田屋
仝　京橋區尾張町　東海堂
仝　京橋區元數寄屋町　北隆館
仝　京橋區西紺屋町　良明堂
仝　日本橋區本石町　至誠堂
大阪市北區梅田町　盛文館
仝　東區京町堀　太華堂
京都市下京區佛光寺　東枝書肆

◎定價　金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢　但淸國を除く）

冊數／國別	內國	外國	
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢	以上郵稅共
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢	

▲但し新年號（本年度に限り三倍）春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ヶ年通計十五册（本年度十六册）分の割合なれば一ヶ年分御註文の方は內國は金參圓七拾五錢（本年度は金四圓）外國は金五圓貳拾五錢（本年度は金五圓六十錢）拂込まるべし

○本號特價金五拾錢　郵稅金四錢

送金注意

一誌代郵稅　は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替　にて御送金の場合は**本鄕西片町十番地中央公論社**と指定し拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取の虞なし
一振替貯金　口座は**東京三十四番**なり
一郵券代用　必ず**一割增**の事
一集金郵券　の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし幣社は直ちに其取扱をなすべし
　一金一圓迄　金五錢
　一金三圓迄　金六錢
　一金五圓迄　金七錢　（集金委託料及送達料共）
一受領證請求　は必ず返信料を要す

大正三年三月廿五日印刷納本
大正三年四月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　高木西三

發行所　東京市本鄕區駒込西片町十番地　中央公論社
電話長下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す